

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

3月号



3-MARCH • 1967

奇譚クラブ

昭和四十二年三月号

定価 三五〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



3月号 ¥ 350

緊縛美態代表作品一二〇葉

アルバム△美しき縛しめ▽第十一集完成！

一部一〇〇〇円（千共） 略号〔美11〕

△出演モデル▽伊吹真佐子。田中孝代。若原明子。春丘リル。益田房
 子。山路ミチ子。熱海容子。前本妙子。桜井葉子。東浦ひ
 かる。梨花悠紀子。須川令子。田原美佐子。加茂良子。川辺砂登子。花本京子。
 花坂道子。村田那美子。萩千恵子。四方清美。木村洋子。愛川悦子。
 竹野ひろ子。関谷富佐子。新井マリ子。五月亜紀子。水本茂美。川端
 多奈子。美木乃々子。館典子。津川路子。大井小夜子。柳初子。杉美美
 清子。厚狹春江。雲井久子。

○美しき縛しめ第十一集「縛られた美女」一二〇態内容

212019181716151413121110987654321

上神高首縛布筆全引麗脱拷猿後手展黒威初々立
半々々校めれ団箇裸身間問狼手示大々々樹
身なとめゆのの猪回縛柱ぐ縛了ななしし宙
なる背ゆに無環宙痛り縛をわで素乳髪目星
五縛負理過に両るるを見上囉身調縛美縛縛
つめた程路に足て女入浴げ身調人いる縛男
にくの後身をさ首首股間奴ら形的美ゆる晒
びる拠手を描せり吊ゆイ縛隷わし双のど燃
身縛するくゆイ縛隷わし双のど燃
木長水山竹須伊川前花川伊四関愛津松桜加梨
村野本路野川吹端坂端吹方谷川川杉井茂花

424140393837363534333231302928272625242322

哀愁の女囚前手縛の美
汚濁を愛縛て観念する
豊満な肌をくび切る依縛り
柔肌を美肌にかゝる縛り
柔かき美肌に強烈縛り
柔木の間に陽の緊縛肌
荒縄が美肌を強烈縛り
亀甲縛りの緊縛縛り
両手吊りに足挙げ縛り
双丘に喰ひ入る股間縛り
両手吊りの裸身もどく
全裸の刺青女交間縛り
背後で両手首交縛り
遊園地にて緊縛される
黒縄に身をゆだねる女
投げしき肌に縛られた
美げな肌に映えたる美脚
猿ぐつわにとまどう眼
高々と挙げた後手縛り
水に濡れた後手縛縄
可憐な目つきで見る女

花本 梨本 田中 津 野原 加茂 須川 梨川 桜井 絹川 益田 東浦 桜井 柳

818079787776757473727170696867666564636261605958575655545352515049484746454443

ガングジガラメの全女性
雨の中庭で両手裸り
豊かに着る猿の手すり
縄目に羞めぬ緊縛体
ローソク責めの縋り
マダラの紐は美肌の上
荒縄の立姿身の上
黒皮猿のうめく縄目
麗わしの全裸股間縛情
菱縄造り石抱きで喘ぐ
首全身荷造り巻きてす
前手縛りに美体を晒す
美肌に菱縄がかかやく
縄目の痛にもがく足指
後手柱縛りにもがく
剥かれた全裸着て後手縛
美貌は全裸下で縄目厳し
全裸股間縛りで正坐す
誇れる乳房強く調
破らかな口もむせかえる
猿轡のたむセックス
淫らな縛りに泣く蒲団
泥女の裸身に差ける縄
機責めに悶絶する女
椅子開股縛りにもがく
黒麗な股間に縄目厳し
エビに股間縛りと白絹
樹間に晒す緊縛裸身
ホレッしに縛る全裸身
真白なシヌをぐる巻縛り
全裸を肌をくる巻縛る女
縛りマニアの差らい

(川端 厚太郎) 山田路村(水本) 細川秋(大塚 熱海館) 須野(木村) 玉海(田原) 梨川(山本) 新井(花坂) 須長(東浦) 竹野(愛田) 川刃

120119118117116115114113112111110109108107106105104103102101100999897969594939291908988878685848382

腎部ももち上げて 美しき脚線を投 破りうたシユミ 樹間に全裸身を 逆エビ責めでい 逆エビに痛まし 細身の肌をしい 片足吊りに反る 拷問に責めぬか 拷問に責めぬか 恋人ととの緊縛 緊縛折りの縛の 緊縛折りの縛の 木馬責めにおの カニ縛りににう 豊かな縛り屋を 後手器の痛さ 流腸器の痛さ 美しき顔の似合 赤の腰巻の似合 Sマニアは男を Mがし目は男を セーリアは男を マゾニアは男を 全裸雨に股間縛 泥裸中に股間縛 両手縛り外縛り 猿ぐつわをさる 白越中にて裸身 女学生生白裸身 股間縛り全裸身 初々しき緊縛女 強烈縛りに裸身 アキ縛りに苦悶 始は乙女を美し 絶妙の悲愁を漂	鼻責 春丘 花本 原野 関谷 美木 方花 梨坂 花塚 大塚 五月 大塚 愛川 川端 須川 梨花 津川 春丘 玉田 文井 若原 雲井 山原 新井 新井 美木 桜井 雲井 東浦 村田 桜川 梨花 館
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

アルバム「美しき縛しめ」第十集完成

一部 一〇〇〇円 (T共) 略号△美10▽

特アート紙 グラビア印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

「出演モテル」・○一宮百合子○東浦ひかる○美木乃々子
○増田みゆき○木村洋子○大塚啓子○絹川文代○山原清子
○長野良子○玉田美佐子の十名の美女。

ビチビチとした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に徹しく掛った細目。これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかりです。百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊に十名の美女モデルの緊縛姿態一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届くのです。特製アート紙に対する極鮮明なグラビア印刷の女体緊縛のフオトを、心よりお楽しみ下さい。

◎美しき縛しめ「第十集」賣められる美女百態内容◎

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
立木の枝から逆さ吊り(木村)	松樹に晒された奴隷(木村)	脚線美も露わな女体(木村)	瘦身に縄にくびれる(木村)	M女往の陶酔の表情(木村)	インナーベルト縛り(増田)	逆さ吊りの緊縛女体(増田)	Pタイルに転がされる(美木)	豊臀を無理に晒される(美木)	剥がされたパンティ(一宮)	少女羞らいの緊縛裸像(東浦)	ムチ打ちに悶えぬく(東浦)	足首で引回される女(東浦)	縄でくびる豊麗な女身(東浦)	全身緊縛首攻めの場面(東浦)
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16

色づいた乳首を晒す（大塚）
全裸後手縛り豊満女体（玉田）
二の腕に喰い込む紐（木村）
鏡に写す縛り込めた裸身（大塚）
縄目に猿轡にあえぐ（東浦）
全裸後手足首連繋縛り（玉田）
長髪をアップにして（長野）
華麗な刺青裸身強縛り（山原）
後手縛りに空ろな表情（木村）
柔肌に喰い込む縄目（山原）
後手縄縛りの美女裸体（絹川）
諦観の若々しい裸身（一宮）
片足吊りにあう女体（大塚）
後手吊りに喘ぐ全裸身（東浦）
緑の柱に晒された女（玉田）

65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

女ドレイの品定め（大塚）強烈股間縛りに泣く女（東浦）初めての縛りに恥じる（一宮）襦袢に見た驚異の縛り（大塚）乳房の巨大になる縛り（山原）吊りを嫌がるモデル嬢（玉田）真紅の腰巻でポーズ（山原）驚づかみにされた黒髪（東浦）麻縄縛りにのびた女体（大塚）開孔器による鼻責め（大塚）エビ責めに耐えぬく女（東浦）豊胸を黒帯に托して（長野）雪白の柔肌を晒す縄目（大塚）人身御供の緊縛全裸像（大塚）股間縛りに投げ出す脚（一宮）エビ縛りに苦悶の表情（大塚）伸びやかな二本の脚線（一宮）滑車後手吊りの準備（大塚）みゆきの素顔と緊縛像（増田）竹に拘束された洋子嬢（木村）離家の縁に縛られる（大塚）輝く白肌を晒す全裸身（絹川）身動きできぬ後手縛り（大塚）腰巻を剥きとられる（木村）大の字逆さ吊り女体（増田）美しい裸身にからむ縄（美木）若肌のすべてを晒して（一宮）後手股間足首縛り（東浦）浴室の荒縄縛りにあう（山原）緑蔭の庭を背景にして（大塚）立木で両手吊りにあう（大塚）縄の反応とその表情（一宮）強烈縛りでなる弓反り（大塚）麻縄は豊かな肌を扶る（東浦）

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

恍惚境のMの表情(山原) 胡坐縛りでもだえる(稻川) 股間縛り正面で立つ(大塚) ムチ打ちを願うポーズ(木村) 伸びやかな女体の細目(一宮) 貴めぬかれた股間縛り(一宮) 後手滑車吊りにあう女(大塚) 縛られて歩かされる(大塚) 亀甲縛りと股間縛り(美木) 正坐で放置する縛体(木村) 夫から鼻責めを受ける(増田) 可愛い小悪魔の表情(一宮) 徐々に吊られる片足(大塚) 強烈縛りで受ける鼻責(美木) 均斉のとれた美麗縛体(大塚) 室の隅に逃げた女奴隷(美木) 首縄股間縛猿轡の表情(美木) 可愛い裸身の鑑賞(木村) セーラー服の後手縛り(大塚) 後手股間縛りで引回し(一宮) 海老責めで耐え忍ぶ(木村) 縄でくびった柔肌地獄(一宮) エビ縛りの苦悶と戦う(大塚) 台上に晒す緊縛裸身(山原) 火あぶりにあう女囚(大塚) アグラ縛りで頑張る女(大塚) がっちりした後手縛りで(東浦) 柱縛りでもがく清子(山原) 石橋の上に放置される(玉田) ムチ打ちに悶える女体(大塚) 猿轡を三面鏡に映す(大塚) 庭園を引き回される(山原) 首縄にあえぐ哀婉表情(大塚) 太細が柔肌をくびる(大塚) 大の字荒縄ハリツケ(山原)

サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊

花

と

蛇

小説・絵画

特集号

直接お申込みをう

定価五〇〇円

略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」

テーマ画集 十六葉

1、折り曲げられて弄ばれる女体
2、逆エビ縛り引き回される女体
3、水を顔面に浴びせかける男
4、汚水と薬品の洗禮を受ける女
5、いちじく浣腸を施される女
6、浣腸とオシメカバの羞恥器
7、ガラス製一〇〇Cの浣腸器
8、強烈なイルリガートの浣腸

9、尻打ちの痛さに泣き喚く女体
10、片足吊りに狂いまわる女体
11、女体滑車吊りの準備万端完了
12、お灸責めに汗を流す女体
13、トイレで排泄の強要をされる女
14、後手縛りで宙ぶらりんの女体
15、美女の背の汗を吸う黒い管
16、グリセリン浣腸液を注ぐ女体

団鬼六作 長篇小説 花と蛇 内容見出し一覧

第一章 密室の秘密ショー

狼の批評会

第二章 脱走の失敗

洗面器

望み破れて

絶望の涙

第三章 悪魔と鬼女の饗宴

悪魔の二次会

狂女の計画

鬼女の計画

第四章 地獄屋敷へ新顔

新たな獲物

テープレコード

美津子のいいわけ

第五章 少年と美少女

折檻部屋

乙女の涙

毒牙は迫る

恐怖のニラメッコ

第六章 正気ついた小夜子

眼の保養

嵐のあと

第七章 身代金奪取の失敗

小夜子の受難

女体の悲しさ
美しいニューフェイス

第八章 涙の宣誓文

美女と木馬

毒婦の恋

嵐に立つ小夜子

第九章 恐怖の逆転劇

悪魔の相談

恐ろしい計画

千代夫人と悪徳弁護士

第十章 奇妙な三々九度

静子夫人の慟哭

鬼女の嬌声

地獄の花嫁

第十一章 飼育される白い動物

美しき敗北者

プレイ開始

白い指

第十二章 悪魔と悪女の悪業

恐ろしい仕事

全身美容

悪魔の寝室

第十三章 屈辱の地獄図絵

猫とねずみ

強入者

侵入者

第十四章 逃走の恐怖と失敗

風前の灯

再教育

京子の号泣

勝利に酔う悪魔

第十五章 悪魔の残忍な所業

朝の酒

白い酒樽

ガラスの尻尾

第十六章 落花無残の修羅場

白いコンビ

バラの肥料

開幕準備

第十七章 淫らな美女の調教

嵐のあと

二人の花形

美女合戦

第十八章 すさまじいショー

変身

舌と唇

密談

第十九章 汚水にまみれた宝石

流血

猿の檻

舞台衣裳

スターの心得

バラ夫人

第二十章 華々しき美女の屈伏

一難去って

酔態

身体検査

第二十一章 対峙する

美女と美女

嵐に立つ令嬢

美女対峙

悲しき説得

調教開始

第二十二章 あくどい陥穽

修羅図

失心する小夜子

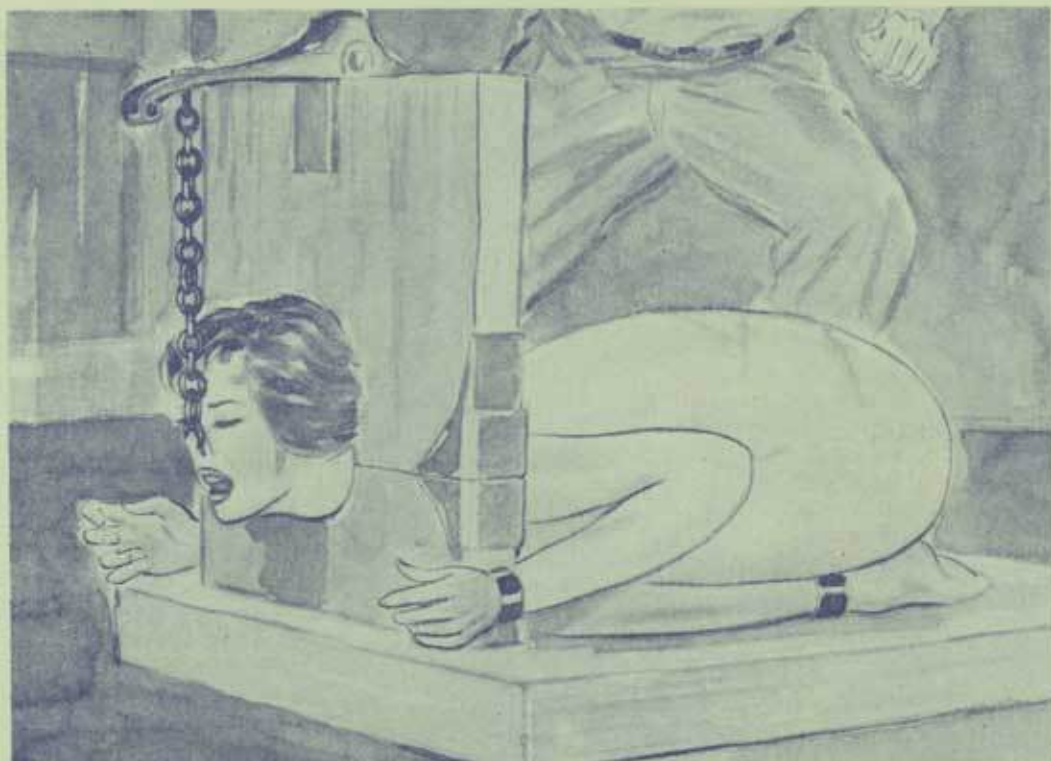
悪魔の部屋

復讐の生贄

第二十三章 羞恥図絵の展開

汚辱に泣く令嬢

小夜子の屈服



昭和四十二年三月号

＜第21巻第3号・通刊第225号＞

奇譚クラブ 3月号 目次

◇奇クサロン

編集部構成

○SM世相断片……編集子(9)○サロン楽我記(第三十三回)……辻村隆(10)
○僕のイメージ画集……少女と悪魔……室井亜砂路(10)○「縛りフット」に附
して……阿乗丸夫(11)○落書(たわごと)……友井永夫(13)○「秋山夫妻のサディ
ズム・ショー」見聞記……佐瀬桂生(14)○僕のイメージ画集「切腹」……室井亜
砂路(15)○私の妊婦腹紹介……愛知葉子(16)○「売り出せ、この品物を」……高
と流腸と切腹と女装と……栗瀬長(16)○我がアブノーマル論……高村初子
○器具を使用した女体拘束法……千葉青鬼(19)○「短歌」酒の肴……高村初子
○「病室夢」……思いつくままに……宇都宮武(23)○鑑賞用妊婦みゆき夫人……高
部(20)○病室夢……思いつくままに……宇都宮武(23)○鑑賞用妊婦みゆき夫人……高
野原美(24)○オムツ・マニア……宇都宮武(23)○鑑賞用妊婦みゆき夫人……高

△本文▽

- 縄のある蜜月「門出」……………千草 忠夫…(26)
「美沙子」縄のメルヘン……………井上 陽一…(32)
カメラ・ルポ(大島照代の巻)
「この女(ひと)と」……………山本 一章…(34)
書下し小説 宴の館……………山波 圭介…(50)
連載サディズム小説 △第二十七章 女囚ミシュリーヌ(七)▽
心傷たむ遍歴……………西条 操…(60)
奇譚クラブの創刊号第二号について……………斎藤 夜居…(78)
妖霊域(最終回)……………黒淵賀集子…(82)
△告白▽孤独の緊縛……………牧 洋子…(92)
酷連処刑大会「女斗篇」……………黒田 寿…(94)

SMカメラ・ハント△桐山英子の巻▽

「第三の小悪魔」……………辻村 隆…(106)

水中花(五)……………芳野 眉美…(122)

珍?ナルマソ小説

「男はみんな家畜だよ」……………夜乃 探郎…(129)

痴人の糧△女の国▽……………山本 一章…(132)

マゾヒスチック・ストーリー「足拭き」……………三原 寛…(141)

続・濃緑の谷……………福田 久文…(146)

連載小説花の蛇(続第二十七回)……………団 鬼六…(160)

サーカス・曲芸・よもやまばなし……………曲馬 団好…(180)

浣腸秘話「山の湯にて」……………川崎 進一…(188)

「花の蛇」私論「増刊号に対して」……………九鬼 二郎…(194)

娘相撲物語 朱美と文子の願い……………海野三津男…(198)

告白「春の花園に遊ぶ」……………中河 恵子…(207)

小説「花と蛇」に魅せられた私

国際秘密結社「ISSSL」……………河津 安春…(212)

鬼六談義 夜の寒鳥……………団 鬼六…(234)

読者通信……………編集部選…(249)

☆天然色写真カラー・プリント最近作

双胎臨月蛙腹写真

増田みゆき 大手札六枚一組 略号一〇〇〇円
文字通りもうこれ以上大きくはならないという出産寸前の双児腹を鮮明なるカラーフォトで各角度から狙った縛りなしの決定版。

双胎臨月腹強烈縛

増田みゆき 大手札六枚一組 略号一〇〇〇円
出産直前の威容を誇る蛙腹に対して最後の機会である強烈な縛りを蛙腹を中心にして敢行。カラーで妊婦の秘密を揶揄しました。

臨月腹裸身の媚態

増田みゆき 大手札六枚一組 略号一〇〇〇円
増田みゆき 大手札六枚一組 略号一〇〇〇円
妊娠線、便々たる双生児腹初産婦の出産寸前の威容は、このカラーフォトにて完全に把握されます。

股間縛り開股姿態

中河恵子 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
新しいモデル恵子嬢の魅力を十分鑑賞して頂くため、大型カメラのカラーの鮮明なプリントで提供いたします。

羞らしいの股間縛り

中河恵子 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
羞らしいの股間縛り

股間縛られて間もないというのに、顔を赤らめて羞恥責めに会って白いカラーで把握されたかどうかが。

黒縄縦縛りの媚態

中河恵子 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
赤いパンツに黒い縄、それに白い肌、映えて新人恵子嬢の緊縛姿は、カラーフォトで目もあざむくばかりに美しく迫ってくる。

立縛りにあう裸女

木村洋子 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
無防備な女体の前をさらけだして両手は後手に、或は頭上に高く縛りあげられて今は只僅かに自由になつて脚をもがき続ける。

開股された股間縛

木村洋子 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
始めてのカラー撮影に開股縛りの羞恥責めにあって、全身にマゾの欲求を湛えながら縄目は強ければ強い程良いという言葉をいう。

豆絞りの猿ぐつわ

木村洋子 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
豆絞りの猿ぐつわが厳しく口を噛み、瘦せ型の裸身を汚れたロープでくびるように肌を割ってむごたらしさがカラーであたりには漂う。

【今月の新版分譲品案内】

黒髪をいたぶる手

大島照代 大手札四枚一組 略号五〇〇円
全裸の豊かな肢体に肌も喰い込むばかりの厳しい縄をかけた上、むぼの黒髪をゴム手袋の手でワシづかみにされて、ふりまわされるので足を挙げて悶えぬく女。

菱縄縛りにあえぐ

大島照代 大手札四枚一組 略号五〇〇円
胸から腹へと後手から回って苦痛の表情を締めあげられた女は、縄の表情をありありと顔面にあらわして我が黒髪を噛みしめる。

縄目にもだえる女

大島照代 大手札四枚一組 略号五〇〇円
全裸の柔肌をくびるように縄を埋め、仰臥した女体は、両手首を二の腕に喰い込む痛さに両脚をばたばたさせてもがき回る。

強烈後手縛の狂態

大島照代 大手札四枚一組 略号五〇〇円
胸から腕へ掛けて締め上げ、縄の後手首を高々と首筋近く吊つたので女は魅力的な豊満な尻を左右にうごめかして泣く。

牝犬と奴隷の醜態

大島照代 大手札四枚一組 略号五〇〇円
大島照代 大手札四枚一組 略号五〇〇円

全裸の緊縛で開股させられたその前に「牝犬」と「奴隷」の札をぶらさげて晒し物にされた哀れた女の姿態がマニアのS心を操る。

全裸一つ折り縛り

中河恵子 大手札四枚一組 略号五〇〇円
二つ折りやかな若々しい肢体を二つ折りにして縄を掛ければ、無防備の女体をあからさまにさらけ出し、可憐な乙女の羞恥をあらわす。

菱縄しばりの表情

中河恵子 大手札四枚一組 略号五〇〇円
乳房、臍を中心にして規則正しい菱型の縄が柔肌をくびって、美しい恵子嬢の美しい表情をたまたる魅力的にキヤッチしている。

八の字開股羞恥責

中河恵子 大手札四枚一組 略号五〇〇円
柱を背でしてスッパルの上に座した女の両脚は八の字に大きく開かせられて縄で固定され、開股羞恥責めの極に処せられている。

菱縄の全裸を晒す

中河恵子 大手札四枚一組 略号五〇〇円
満天下のSファンの眼の前に自分の羞恥責めにあう全裸身を晒したいと願う恵子嬢が僅かに自由な脚を屈伸させて悶える美しい姿態をごろんにいれます。

奇クサロソ

○先日仕事が終わって何の気なしにテレビのスイッチをひねったところ、11PMに今東光和尚が出ていて、「今さんが女の足を見てハッスル……」と宮城千賀子が冷やかしているのを見て、これは面白いなと思って眺めていたが、終りらしく直ぐコマースシャルになってしまった。今和尚の毒舌もさることながら、公開の場面で自分の性傾向をザックバランにさらけ出す傍若無人さは、まことに微笑ましく感じた。しかし、これは毒舌和尚にして言えることであって、他の人だったらサマにならなかったであらう。

○近頃は月刊誌や週刊紙にもSMやフェチやプレイ、緊縛といった言葉がふんだんに出てきて、中には我こそはそのベテランなりと、武勇談を書いている人もある。しかし、時にはSとMとを逆に使っている人があって、一夜漬けを暴露して馬脚を忽ちにしてあらわしているのも御愛嬌である。さしあ

たり本誌なんかは一夜漬けのよきテキストだろうか。

○お隣りの中共では紅衛兵が盛んに活躍している。元来二十才ぐらいまでの若者はまことに潔癖なくらい純真である。修正主義とかいってダラ幹ぶりを発揮していると忽ち吊し上げられることになる。

日本でも黒い霧ばかり発散させていると、スモッグ除けの台風を期待するようになるかも知れない。

○陣頭指揮をしなければならぬ筈の高級将校が後方で酒池肉林に耽りながら、進めや進めと掛声ばかりでは兵隊は動かない。しかし嘗ての日本軍では天皇の名を虎の威にかりて万骨を枯らした將軍が多かったそう。紅衛兵ばりの純真無垢な青少年が、特攻隊に駆り出されてはたまらない。

○正月で若い女性が晴衣を着る機会が多くなると、又もや晴衣魔が出没しはじめた。次々と犯人が逮捕されてから一時姿を消していたのだが、再び姿を現してきた。今までの犯人は或る程度社会的地位を持つ紳士だったが、犯行の動機となると、もう一つ納得のゆかないものだった。もっとも犯行の自己分析の出来るくらいの人だったら、こんなつまらぬことはやらな

いだろうと思う。

○M男性モデル募集に応じた人達と逢ってみて、同じMといつてもその内容の多種多様なのに驚かされた。大別して対象を異性とするもの同性とするものに分けられるが、同じ異性を対象とするMでも、一人一人の顔が違うように好みが違うのである。殊にMを自称する人の心情はまことにデリケートで好みにも許容の幅が少いように思える。

○縄で縛られて只痛めつけられるだけでよいというのであれば至極単純で、こういう人も少くはないが、馬とか犬に畜化して非人間的に扱ってほしいというのや、殊更

異性から凌辱されたいと願うのは、相手に対する好みや道具立に關する好みはむづかしくて、話を聞いていてその複雑怪奇なのに感心させられてしまう。

○Mに限らずSに於ても、忌憚なく自分の心の憂さを発散させられる相手がいるということは、いいことである。さし当り、私なんかは最も適当な相手として、切腹ござれ、ホモござれ、女装に痺、腰巻と、好き嫌いを言わず清濁併せ呑んでいるが、いささか辟易しないこともないことはない。

○二、三の週刊紙に夫婦交換プレのことが散見した。何かアメリカあたりで流行しているとのことだが、昔流の良風美俗の精神から見ると以ての外の悪風ということになるが、姦通罪のなくなった現在では合意の上だったら、大したことでもないかも知れない。只頭の中で考えるだけだったら、空想のクリエイションとして、いいかもしれない。その中、恋人の交換プレイといったものも考え出す連中もあるだろう。もっとも夫婦の交換を現実に行っているのは大先輩もあることだから、一概に目に角を立てて珍らしがることもないかも知れない。

S M 世 相 断 片

編 集 子

サロソ楽我記

辻村 隆

(第三十三回)

京都の徳永氏（京都のT氏として過去数回登場しました）に誘われて、先斗町の舞妓のフオトを撮ることになった。徳永氏始め彼の二人の画家友達と同行。画心のないのは私一人である。お茶屋の使用料も含めてだが、モデル料一万円は余りお安くはない値段である。

モデルの舞妓さんは、自称十七才。可愛い絵から抜け出した様な妓で、実に初々しい。私も勿論カラーフィルム装填で、この日許りはハーフ判を止めて、愛用の一眼レフと、六×六判の二眼レフを持参。（今日はノーマルで行きましたよう。仲間もいるし、それに舞妓は案外世間知らずでネ）と耳打ちされて、神妙に色々のアングルより撮る。約一時間半、座がくだけて、その折彼女に冗談に紛らわせて（どう、今度はヌード撮ってあげようか）と囁やくと、彼女動ずる色もなく、おチヨボ口を綻らばせて（カンニンしとくれやす。舞妓はべべ着てるさかい、ええんどっせ。べべぬいだら、なんの取柄もないショウムナイ女どす。あか

んえ）

そうかも知れん。婉曲に断わられて私は感心していた。自前の長い髪はいいとして、裸で白粉をおとせば、極く平凡な一少女に過ぎないかも知れない。所詮舞妓はきらびやかな服飾と京言葉、それと芸事が身上なのだ。物言わぬカメラなら、すべては縁なき衆生か。

× × ×

十二月一日から十日まで、例のSショウの秋山夫妻が、京都の大宮で公演中だった。徳永氏からその知らせを受けたのが九日で、今回も結局見損なってしまった。劇場の経営主の話だと、かなり刺激が強いので、大分警察の方も眼を光らせていて、いつ何時公演中止になるか分らないと言う。言うか言わないかで、世の中には随分とSM好みの人も多く、経営者の力ンでは、見にくる客の八割ぐらいまでは、秋山ショウお目当てとは、奇ク党にとって嬉しき限りである。とはいふものの、いわば類は友を呼ぶのたぐいで、それからそれへと伝えきいた同好の士が、

何を措いてもとの意気込みの成果が、この様になって現われたのだと言えなくもない。徳永氏の凄く感激しての話によると、秋山夫妻のプレイの圧倒する迫力に比べる、青山順子などは到底足許へもよりつけないということである。御覧になられた諸賢、如何なものであろうか。

× × ×

最近のベストセラー、クロンハウゼン夫妻の『完全なる女性』を読んでいると、こんな個所があっ

僕イメージ画集「少女と悪魔」

室井亜砂路

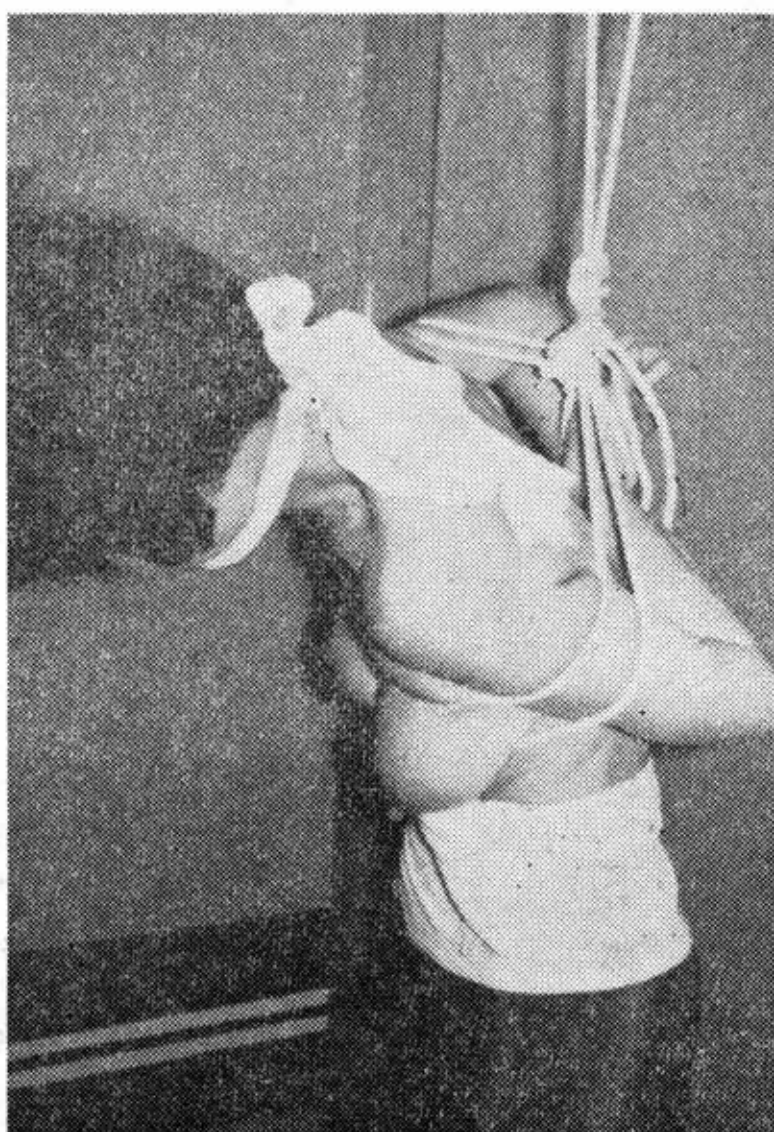


た。（原文）（われわれはまた、女性のマスターベーションのさいの空想についてのわれわれ自身の印象を「女流精神分析家」のそれについての印象と比較したいと思、この点についての彼女の臨床経験はどうかと質問した。この質問について、彼女はこう答えた。△私は、私の女の患者で、あらゆる種類のマスターベーションのさいの空想を発見した。異性愛的な空想をもっているものも、同性愛的な空想をもっているものも、あ

「縛りフォト」

に附して

阿乗丸夫



あらゆる種類の性交体位についての空想をもっているものも、動物との性関係の空想をもっているものもいた。私はその種類は無限だと思ふ。……しかし、一人の女性についてだけいうと、マスターベーションのさいの空想は、あまり種類がない。普通それはかなり安定し、融通性がない。もちろん同一

テーマについて、わずかに違っているが。たとえば、もしある女性に打たれることを空想するのが好きだとすると、いろいろな方法ですなわち手で、鞭で、あるいはいろいろな人によって打たれると空想する。しかしもとになる打つという空想は、かなり一定不変である。別の患者は、浣腸をされてい

ると考えて、マスターベーションをするのが好きかも知れない。子供のときだれかにおさえつけられて、無理やり浣腸されたように、あるときは男性によって、またあるときは女性によって、浣腸されていると空想する。あるいは、ある患者は、異性に鞭で打たれるという、空想をいだくかもしれない

が、これは同性によって鞭で打たれるという空想に変わり、また異性によって打たれているという空想にもどって行く」

「第八章、女性と自己性愛」の一節であるが、この分析が、そっくり、奇クのSMマニアの精神分析にあてはまるかどうか――。

兎も角興味をもって読了した。

く、従って御便り等今迄した事はございませんが、一度、箕田、辻村両氏をはじめ同好の皆様は御会いして歓談したいものとかねがね念願しております。

小生は最近奇クを賑わしているような夫婦プレイは絶対にせず、夫婦はあくまで正常の主旨で、代りに各方面に興味に合い、協力してくれるような女性を求めてきました。類は友を呼ぶのとたとえの通り、今迄幾人かの同好の女性を得てプレイや写真撮影を実施しております。

ここに同封しました六葉の写真は、最近の作で、この女性は強度のマゾヒストですが、一応本人の希望もあり、正面の写真はマスクをかけた。いずれにせよ、近き将来、来年になりましたら、一

度彼女同伴にて辻村先生にお会い致したく、その節は改めて御連絡申し上げます故、よろしくお願い致します。尚、この写真は適当に△奇ク・サロン▽に掲載されても差支えありません。

小生の如きSM愛好の趣味を持つ男性にとって、同好の女性と近かきを得るという事は、何物にも替え難いよろこびでもあり更にプレイの実行へと進展する事が出来たなら最高といつてよいでしょう。

過去十数年にわたって小生がプレイを経験した女性との楽しい思い出を順次綴ってみたいと考えています。なにしろ禿筆のところへ遅筆ときていますので、果していつのことになりますやら、その節はよろしく。

小生、貴誌が大型の時代からの読者で、同時にSMの趣味を持つものであります。現職は或る貿易会社の部長をしていますので、誠に残念乍ら当分匿名にして頂き度

落書(たわごと)

早木夢二



落書、というと、ある程度の年令の方は、戦前の、なにかにつけて表現が不自由であった時代に、公衆便所のうす暗い壁の上に発見して、そっと胸をときめかした経験がおありのことと思う。

最近の公衆便所の落書は、いやもう凄まじいものである。戦後は公衆衛生の見地から公衆便所の数は、戦前と比べものにならない位増えているし、表現も大巾に許されてきているから、公衆便所の落

書も一段と解放されてきているのであろう。

男女の交合に関するものが多いのは当然であるが、文章にしても絵にしても、格段の進歩をとげているようだ。あの薄暗い中で、どうして書くのかと思われる位、丹念に綿々と列ねている。而かも段々と手がこんできて、絵などでも、男のその部分だけ着色してあって、それに女の唇が迫っているというようなものである。

最近、カラー判と称して、ほんの一部分だけを着色してある本が、ちよいちよい出版されているが、この公衆便所の着色版などは、さしずめ、その先駆ともいうべきであらうか。例えば、東京では新橋の元の土橋の傍の地下にある公衆便所や、井の頭公園の中の公衆便所で見ることがある。

眼を凝らして、せっせと書いている人の姿を想像すると、可笑しいというより、色々とセックスの面が解放されてきているのに、営々として、昔ながらの労作に耽っている、その心情が、何とも物悲しく、又考えようになると遅しさの限りでもあるような気がする。

私は落書を見るのが楽しみで、よく公衆便所に入る。もう生々しい人肌の臭さを失って、饅えたような匂いの中で、壁やドアの内側に、これは又甚だ人間臭い息吹きを発見するのが、堪らなく楽しいのである。

からっと晴れた空の下で、親子夫婦が喜々と太陽を楽しんでいる公園の一隅の、公衆便所の中では、夢想の中の男と女が、陰湿な喜悦を交わしていると思うと、私は、これは又これで、人の世の楽しさを感じるのである。

代理部だより

○臨時増刊「花と蛇」特集号のお申込みは、一時の殺到的な勢はおさまりましたが、順調に続いておりますので、この調子ですと売切れになるも案多早いのではないかと思います。

○前篇の「花と蛇」を収録した臨時増刊号を欲しいという御希望が最近になって増えてまいりましたが発売して間もなく売切れとなり又連載を収容した本誌の旧号も総べて売れ切った実情です。只今のところ再発行の予定は樹てておりません故御諒承下さい。

○従前から地方都市に於いて本誌新刊の入手難が訴えられておりましたが、最近益々出回らなくなつたようです。本誌は新聞紙上に広告もしませんので休刊になったのではないかとこの御問合せもしきりです。皮肉なことですが発禁になつたりして新聞紙上を賑わすと、やはり出していたのかと、どつと申込みがくるのですが、近頃はそういうこともありません。

○入手難の方はどうか三月分以上まとめて御予約下さい。送料当方

それにしても、落書に、緊縛の絵がないのが物足りない。用を足そうとして、しゃがみ込んで、ふと眼をあげると、一条纏わない全裸の女が、菱縄で股間縛りという

スタイルで、正面の壁の上で、私に向って微笑みかけているなんて構図は、想像しただけでもゾクゾクしてくる。

或は、これは奇クなどで、欲望

を発散させているせいかも知れないし、又案外、お互い恋人同志や夫婦間で実行している人が多いので欲求不満が解消されるのではないかと、私は思っている。

緊縛の美女を讃える

友井 永夫

彼女の瞳はつぶらに見ひらいて
いる。長いまつ毛が愁いを含んで
かすかにふるえているのを見ると
私の胸は、妖しく高鳴るのだ。

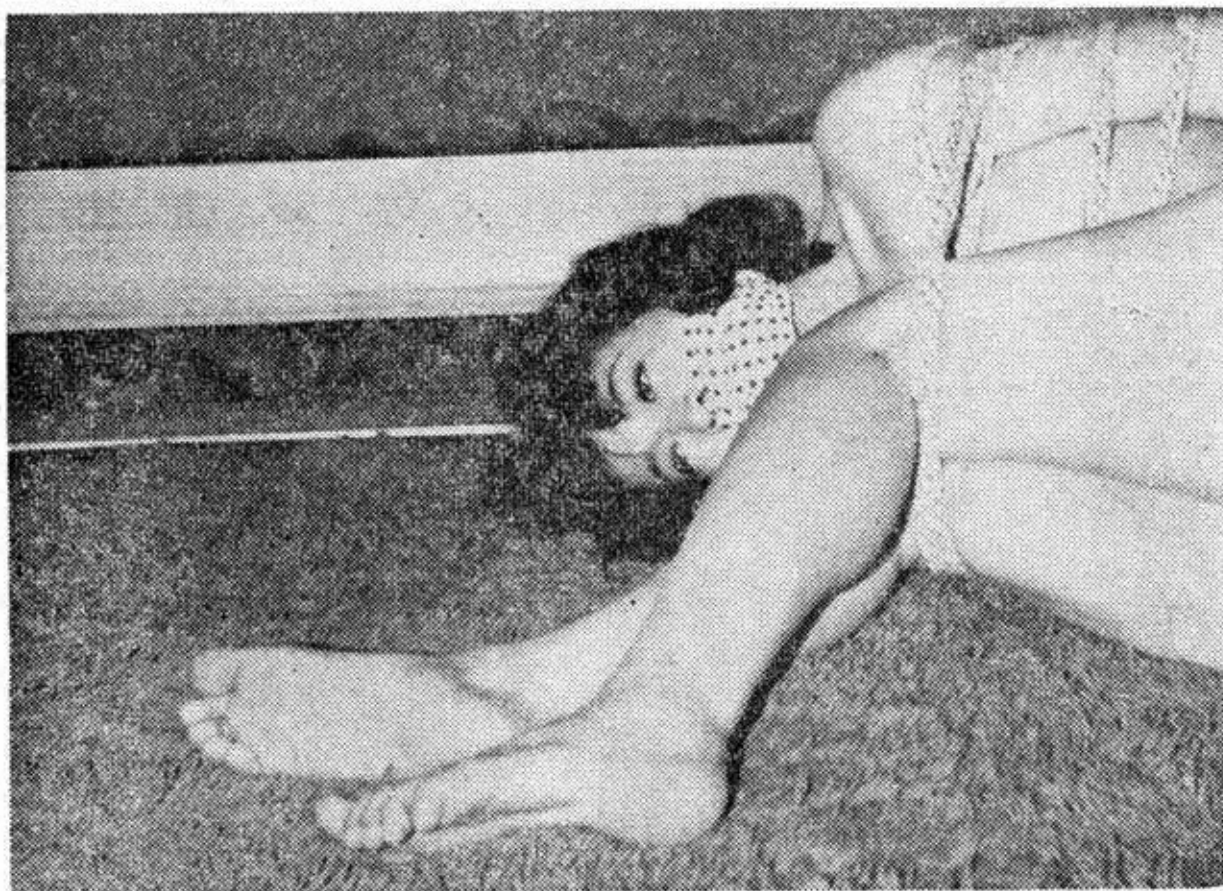
真白い肌にドス黒い縄が縦横に
彩ると彼女の美しさは一層洗練さ
れた輝きを放つ。

女なべて縄に縛られることによ
って、その美しさを肢体の隅々ま
で漲らせるばかりでなく、呻めき
悶え喘ぐ、その表情の中に、限り
ない哀愁と可憐が漂ってくるので
ある。豆しぼりの猿ぐつわをかま
された眼ざなは、私の心を強く
掴んで放さない。

何故このようにまで、私は縛ら
れた女に魅せられるのだろうか。
女が縛られている——そう思った
だけで、私の胸はかきむしられる
ようにふるえるのだ。

私にとっては
縛られた女こそ
この世の最高の
憧れの的だ。

あのなよなよ
とした若い女の
肢体が一本の縄
によって、蛇に
まといつかれる
ように縛り上げ
られたとき、私
は最大の感激と
憧憬を以て、彼
女の美しさを心
から讃えよう。
縛られた女の香
に酔って——
(写真は縛られ
た中河恵子嬢の
美しいポーズ)



負担にて毎月確実にお届けいたし
ます。過去の実績が示すように、
遅れることなく月刊を続けており
ますから、御安心の上お申込み下
さい。直接購読者が増えれば増え
る程、本誌の基礎が固まるのです
から御協力をお願いします。

○代理部分譲品は毎月新しいもの
をどしどし発表、最新号に広告し
ております故、誌上の案内によっ
てお申込み願います。目録は只今
作成しておりませんが、実物写真
入りの総目録を企画しております
から、いずれ完成次第、誌上に広
告いたします。

○度々お願いしていることですが
御注文品のお届先は必ず楷書では
っきりお書き願います。中には住
所や氏名も書いてないものがあつ
て処理に困っております。局留の
御指定は封筒にも書いておいて下
されば間違いが起りません。

○雑誌御注文の剰余金は計算書を
挿入しておきますから、次回お申
込みの節はその紙片同封の上、金
額を差し引いて下されば、当方で
は直ちに処置させて頂きます。

○広告に△略号▽の書いてありま
すものの御注文は必ず略号にてお
申込み下さい。雑誌は何年何月号
とお書き願います。



秋山夫妻の
サディズム・ショー見聞記

佐瀬佳生

丙午と騒がれた此の年も後十数日と迫った街には暗黒の空から降りだす氷雨の中にジングルベルの耳ざわりの音が交り合う或る夜だった。ふと目についた新聞の芸能広告の一隅にサディズムショーとあるのに気がついた。

名古屋の新宿といえはカッコよいというものの、この夜空でいささか佗しい町に、酔いどれが二人三人、或は女を交えて肩を組み折りたたみ傘の小さい巾にちこまって時折り大声でわめいたりする

のであった。

日劇の丸尾氏が名古屋にもヌードをとかの掛声で生れたという名古屋ミュージックホールに足を踏み入れた。まだ六時前という時間のせい、雨模様のおかげ、小型ながらもさっぱりした劇場の中にはエプロンステージを取り巻く十数名の客席の寒々とした中に、何かほっとした様な気持で後の方の空席に腰を下すと、舞台ではけだるい様な踊り子といっても、もう三十の声を聞いた様な女が妙にきら

きらした着物、何となく舞台の上を行ったり来たりして、上半身のろのろした動きに比べ、薄汚れた白い素足と、日本髪のかつらの襟元のゆるみがうら淋しかった。

モギリの爺さんに聞くとサディズムショーは六時半と九時とか。もて余した一時間をアルコールでいささか麻痺した頭を休めて、見るともなく、くり広げられるステージの赤や紫の光の中での踊り子の所作を眺めていた。

プログラムもなければ場内アナウンスもなし、名も知らぬ女が変りばえもせず日舞らしい舞台姿、その中に胸まですっぽり入る救命袋みたいな腰巻姿に唖然としていると舞台中央に出来たせりの上に白いシートで覆われた一組の夜具がある。寝室ショーでもするのかと見るうちに、舞台は暗転したかと思うその一瞬、栗毛色の山猫とといった感じの美女一人がトレアドルパンツで飛び出してきた。

いきなり短い上衣をはぎとり、長い髪をなびかせ乍らステイジいっぱい踊りまくる。後で聞いてわかったのだが、これがローザ・秋山。セクシーな体の動き、鋭い目つき、それらが醸し出すムードが客席いっぱい拡ってゆく。

やがてストラックスを引きちぎるように投げ捨て、微妙な腰の動きと妖しい胸のふるえの中に、ブラジャーも腰の飾りも、かなぐり捨てて。今は可愛いらしい水玉模様の三角パンティ一枚の姿で、セックスを表現した身のもだえ、狂いうごめき、身をよじらせての乱舞は、客の視線をひき込むのに十分であった。踊り疲れて失神した如く倒れ伏した女は、僅かに足の爪先に軽い痙攣を残し乍ら、暗い世界に引きずり込まれてゆく。

そこに現われたアラジンランプを持った逞ましい男、ランプを置くや否やマントをかなぐり捨てて彼女の寝息をかぐ。片手に持ったロープをしごいて倒れた女の右の手首をひしと縛ると、これに氣づいた女は、はっとして身をひるがえして逃れんとするが、巻きついた縄はもがき暴れる女の両の腕を背後に高手小手に縛りつける。胸に一巻き二巻き、美しい乳房を残酷に圧しつぶす縄は尚も容赦なく股間に通されて、ぐいぐいと力まかせに締め上げられる。更に胸もちぎれるばかり締めつけた上押し倒される。すらりと伸びきった太股から胫、そり反った足指。さすがに胸には加減したか縄の跡



はないが、火傷の跡が打撲の跡が点々と陰影を残しているのも痛々しい。うつ向けに倒れた姿のまま、で暴れる女の右足を持って縄の端でしっかりとゆわえりと、僅かに自由な左足をばたばたさせて遂に布団から外へころげ落ちる。

羽毛で全身を擦られてもだえる女を引き据えて、金色の鞭で空を切る音を立てる。女は恐怖の瞳をみひらきヒイヒイ声を出してもがきまわるが、縛られた不自由な手足に逃れる術もなく、ビシッビシッとの鞭の洗礼を受ける。そり反る胴体、乱れる黒髪――

「いたッ、アアッ、ゆるして！」

少しでも答から遠ざかろうと身

をころがす。床を打つ鞭の激しい音。時々外れてかわざとか胸の辺りに当る度に「ヒィ」とショッと、は思えぬ悲鳴が挙る。遂に乳首に触れた途端、ぐっと言ったまま、身動きもしなくなつた。どこまでがショッか、どこから本気か、わからぬ位の迫力。

二人とも汗の滴が舞台の上にしただり落ちる熱演。片足を女の体にかけて自由な方の足をつかんで腹のあたりを鞭の柄でぐいぐいとこじる。女は只「ヒッヒッ」と声にならぬ声を出すだけで、もう床の上にぐったりのびきっている。

男はランプを取り上げ裸ローソクに火をつける。ぐったりとして

いる女は、やがてその灯が自分を責めることに気づいてか、一息で吹き消すが、これが男の激情をかり立てることになるとも、つゆ知らず、再び火をつけた男の手で髪をつかまれて引き据えられる。男はローソクを傾けて、胸といわず腹といわず、内股のあたりにまで熱輾をしたたらず。女は身体をエビのように曲げ、「ツィ、ツィ」と呻めく。最後に火のついたローソクを臀部に押しつけると、「アーツ」と一声挙げて失神する。

暫く見下していた男は、片足の縄を解き、肌間縄、胴縄と外すが女は陶酔の中で身動きもしない。やがて、女をやさしく抱きしめるところでショーは終わった。

ショーが終つてから秋山夫妻と語りあう機会を待ったが、元アダジオの舞踊家であったのが、四カ月前から、このショーを始められたとか。舞台での苦心、練習中は朝起きて立ち上ることも出来ず台所へ這っていったという。ローザ夫人の苦心談。今でも一日に牛乳一升、牛肉、鮮魚を豊富にとっても尚舞台上でフラフラになる位苦しいという。

舞台で床からの漏電が体を貫き苦んでも演技だと思つて放置され

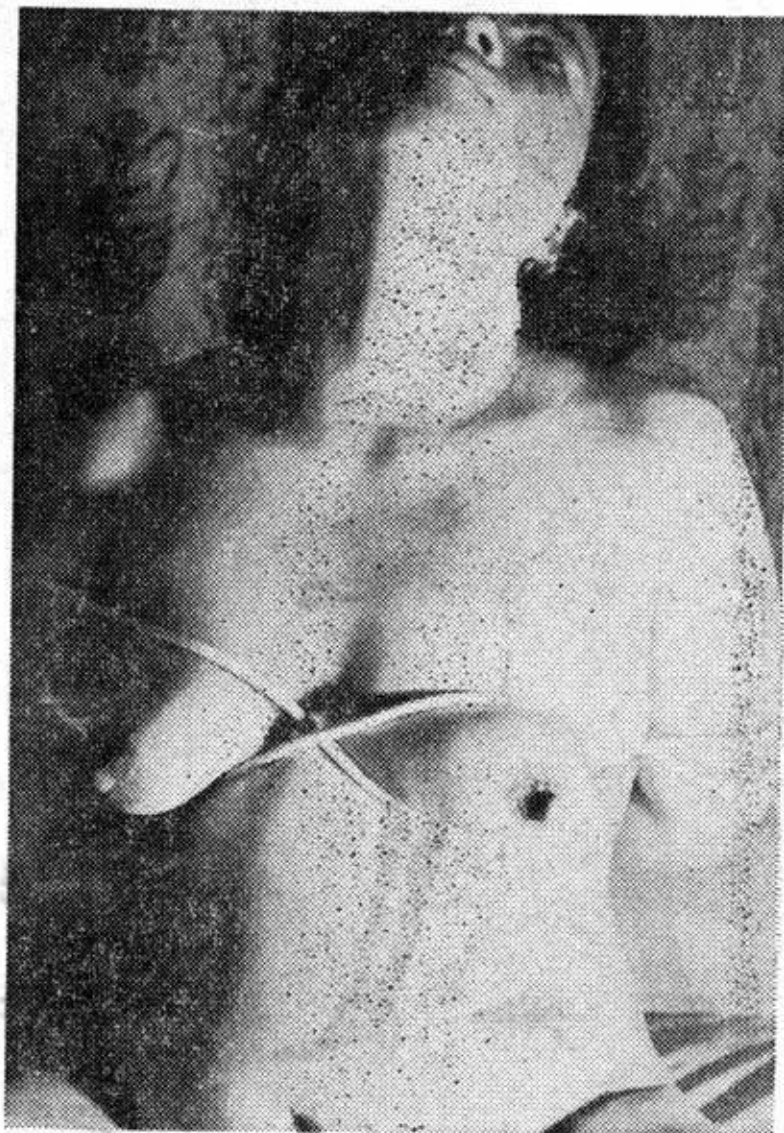
たこと、汗で床に身体の型がくつきり残ったこと、時折り鞭が烈しく急所に喰い込んで失神したこともあるとか。ローソクの跡が点々と火傷となつて肌に残り、明らかに化膿した跡も見られ、その苦心談と共に、この世界のきびしさを思い知らされた。

これから、京都、四国、九州の別府あたりから東京まで巡業とか言っていたから、或は読者の方々の所へも行くことと思う。

会ってみると秋山氏は、中々の好男子で舞台上での荒々しさとは打って変つたもの静かな人で、夫人のローザ秋山も、物静かなむしろ弱々しい感じの、どこか団地の新婚夫婦といった二人の様子であつた。舞台での情熱とひきかえ、控え目な二人に好感が持てた。

彼等二人が、零時を過ぎた暗黒な街を肩を組み乍ら消えてゆくのを見送っていたが、明日への健斗を祈つてやまない。どなたか、彼等の姿を劇場かキャバレーで見掛けられた方があったら、誌上に御一報下さると共に、一言激励の言葉を掛けやうと思ふ。

当地には二月頃に来演の由なので再会を約している。



私の妊婦腹紹介

愛知葉子

孕んだヌードのヴィナス群像を読み、今迄に数人の妊婦が紹介されたことや誌上に発表になった方々のことをファンとして大変うれしく思いました。

増田みゆき様の妊婦シリーズも二月号で、九カ月が発表されました。又臨月を期待しておりましたが、誌上の様子では見ることが出来ないのではないかといささか心配しております。

編集部の方へ、ベテラン各位様のこと

ですから、この後も何とか拝見することが出来るだろうと大いに期待していますが、それでも四月号以降になると、みゆき様のシリーズは期待する方が無理ではないかと思っています。

この後の妊婦シリーズには誰か適当な方を、編集部でも手を回して探していただけることと思います。ファンとして丁度私がみゆき様より約四カ月遅れながら妊娠しておりますので、その後を

「売り出せ、この品物を」

禪と浣腸と切腹と女装と

栗瀬 長



越中ふんどしと、いうやつがある。近頃あまり使っている人を見かけない。だがあれほど便利な下着はない。前だれの取りはずしが極めて簡単だからである。

なぜあれを越中というのか。理由は簡単だ。越は古く「こし」とよむ。こしの国のことである。その「こし」を腰にひっかけただけだ。腰の真中にあるから越中なのである。

こんな語源のことを以前どこかで随筆にかいたら読者から手紙がきた。どういう意図なのかしらないが、ふんどし論がびっしりだ。ふんどしの美しさ魅力をめめんと書きつづっている。そして、自分が初めてふんどしをした時の感激。一応楽しくよんできたばくも最後のくだりとなってぎくんと

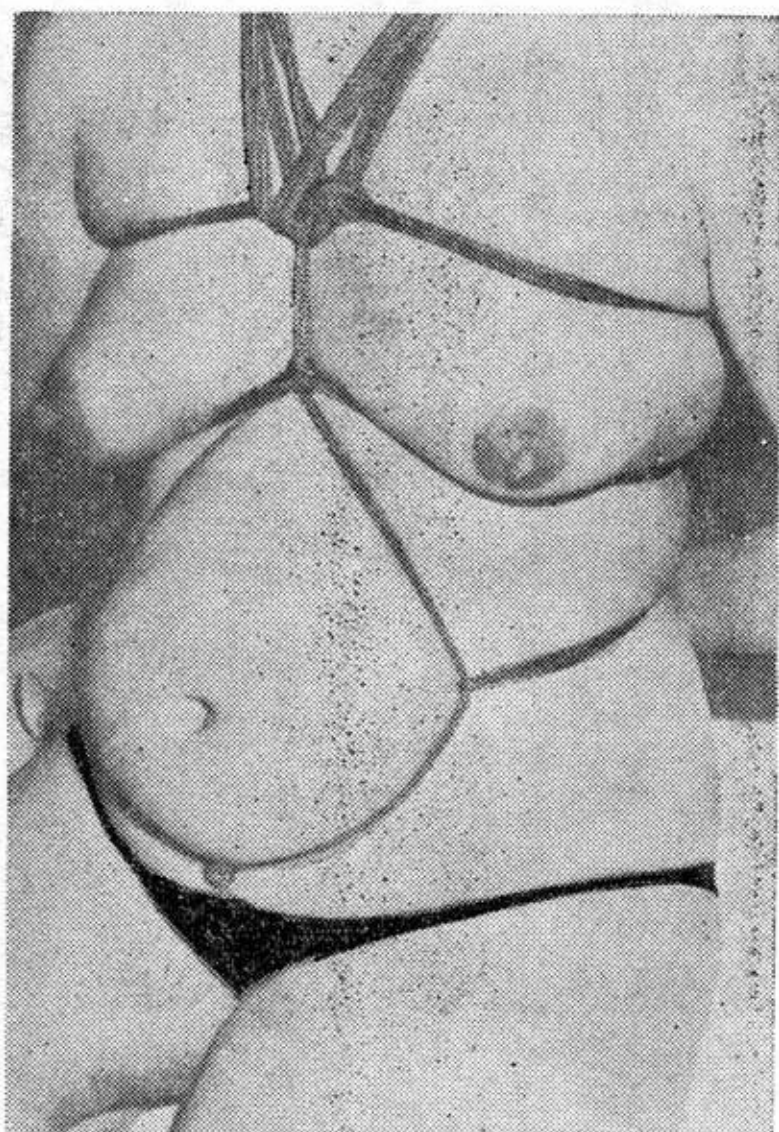
寺内大吉の「縦横無人」より
った。ふんどし交換の申し入れであつた。

ぼくははじめて気がついた。彼は、ふんどしマニアだったのである。

「マニアはいろいろあるんだよ」この話を通人氏にしたら、こと細かに教えてくれた。現在代表的マニアは「切腹」と「浣腸」だそうである。

「この間もね、浣腸グループの会合に出席したんだよ。十四、五人も集っていたかな、女が四人まじっていた」

リーダーがいて、選ばれた二人の女の尻に浣腸器を入れる。やがて二人は苦悶の表情になる。浣腸でふくれ上った腹をかかえてじつとこらえているのだ。油汗がたらたら出る。これを見つめる同好者



埋めたいと存じまして、こうして筆をとったわけです。しかし、私は双生児ではない様なので、みゆき様のような立派なお腹にはなりません。それでも穴うめぐらいにはなることと思いますので、御利用下さいませ。

このように小さいお腹の妊婦でも、妊婦には違いありません。地腹が大きいだけや強制流注では出せない味もあることでしよう。編集部のカメラマンに写して頂くともっと立派な写真が出来るかとも思います、私共のSMは、今の

ところまだ他人が介在してもいいという程には進んでおりませんので、夫が馴れぬ手つきでカメラを持ち、やっと写しました。それだけ、物足りない写真とは思いますが、妊婦ファンに見て頂きたくお送りしました。

この写真は七カ月少し前のときのもので、みゆき様も一度に二人のママさんになられて大変なことと思いますが、又次の機会にみゆき様の立派な妊婦のお写真が見られる日を、心待ちにしております。

「マゾヒズムの変形だね。オカマ趣味とはちよっとちがうんじゃないかな」

通人氏はこう評した。

切腹とはもちろんまねごとである。刃物を腹につき立て、あわやという所のスリルを楽しむ。もちろんこれにも同好会がある。中には本当につきさしてしまい、命を落したマニアもいるそうである。

ぼくはひそかに思った。ふんどし同好会の総会でもやったらどんなに壮観であろうと。数百人の男どもが裸体でいならび、腰には色とりどりのふんどしを巻きつけている。何だかこの愛好者の気持も分ってくるような気がする。

ふんどしや切腹、浣腸などと、ずいぶん荒っぽい趣味だが、通人氏に聞いた「女装」というグループも盛んだそう。男が全部女装をして、女の言葉を使い、女の仕ぐさをして楽しむ。何だか、故・谷崎潤一郎みたいな趣味だが、これは金もかかり、かなり富裕な男性たちの間で、流行していると聞

く。

……話しは大脱線。越中ふんどしに戻すが、あんな怪奇趣味ではない実用品として越中ふんどしの復活を願いたいものだ。純日本の男性パンティとしてあれにまさるものはない。

もちろん従来の白一色はよくない。七色の越中というじゃないか。七色はワンセットにして売出したら需要もあるはずだと思う。秋のニューモード、デパートでは、ざん新な越中ふんどしをデザインし、鮮やかな色彩をほどこしてショーウィンドに飾り立てるのである。必ずや奥様がとびついてくるだろう。これほど便利な品物はないのだ。なせって、夜になれば、奥様はちよっと引っぱるだけでよいからである。

○

以上某紙にのった「寺内大吉氏」の「縦横無人」の全文である。我々マニアとしては、異論批判も少くないが寺内氏がこれだけの愛情をもって我々の立場になみならぬ理解を示されたことを多としなければならぬと思う。氏の一文をさかになにして、サロンあたりで見を交換するのも面白いと思う。



+ 亜砂路 +

我がアブノーマル論

究 哲 人

小生は県立高校教員で年令二十九才の独身男子です。しばしば奇譚クラブを拝読させていただきました。奇クがエロ雑誌であるか否かについては、賛否両論相伯仲しているようです。

小生はどちらとも断言しませんが、世間の疑惑を解くために（世間的用語における）＼健康的＼な総合雑誌に脱皮された方が無難だと思ひます。情操論と文化史を中心に編集されることをお勧めしま

す。エロチシズムの要素を、どの程度まで許容するかが最も重要な問題で、「平凡パンチ」程度のエロチシズムを基準にするならば、奇クはむしろ控え目であるといえます。ただしアブノーマルを扱っている点が危険視されるのではないのでしょうか。

それならいっそのこと、ノーマル本位に方向転換されてはいかがですか？ たえば奇クがかつてアブノーマルの一つとして紹介さ

れた「女斗美」の概念も、今日では決して異常視されてはおりません。ここ十年間の世相の移り変りは実に急激でした。女性が柔道を習うことは、今では少しも珍しくないのです。真夏の海岸へ行けば若い男女が砂浜で相撲を取っている風景が見られます。

ほんの五、六年前には、雪崎京人先生が、それを「実現不可能な空想」としてお書きになりましたね。現代の青年は、何のこだわりもなく、実に天真爛漫でピチピチとしています。昔——戦前・戦中のみならず戦後数年間を含む——の日本の社会は、あまりにも閉鎖的で窮屈でした。特に性的な面では、儒教朱子学派の禁欲主義倫理が、人間の本能を不当に抑圧していたものです。男女が腕を組んで歩くことさえ罪悪視されていたではありませんか。情欲そのものが「異常」視されていた感があります。しかし戦後二十年の今日、もはや悪しき伝統に縛られる必要はありません。

人間は「進化しつつある高等動物」です。動物性の美しい面を成長させ醜い面を除去しましょう。人格的な愛情を基盤にすれば、正常と異常の程度は、おのずから明

らかになります。サドもマゾも、心身を傷つけない程度にとどめるべきです。適度のエロチシズムは生命感の充実を意味するが故に、善であります。

この頃は、まじめでしとやかな清纯娘でも平気でビキニスタイルになるようになりました。世間がそれを許容するようになったからです。太陽の下でビキニ嬢と相撲を取る楽しみは、戦前派の人々には理解できないかもしれませんが現代の青年は健康的な遊戯として無邪気に楽しんでいきます。若さにアブノーマルは無用です。もっとも私自身も、つい最近まで、正常なことを異常と思い込んで悩んでおりました。奇クが私の一時期にトランキライザーの役割を果たしたことは認めざるを得ません。

小生の「病氣」が「しとやかな女性をビキニスタイルにして砂浜で相撲を取ることであった」とは今から思えば、まったく他愛のないことでした。時代が変れば、病気が病氣でなくなるのです。最後に一言、伝統の人間性阻害の面は排撃しても、伝統のものは否定しません。二月十一日を建国記念日とすることは、国家的ロマンチズムの発露ですから大賛成です。



器具を使用した女体拘束法

千葉青鬼

パイプを組立てて作成した拘束台に全裸の美女を手錠と足錠してみた。同じ器具を用いても、この様に種々の状態をとることが出来たところが極めて面白いと思う。このパイプ器具を利用して、もっと変ったポーズもとらせるのだが、ここに掲げた三図では、全裸の美女の開股責めと鼻責めに狙いをつけてみた。

こういったポーズは、S好みの男性にとっては堪らない刺激を与えるだろうが、反面M女性にとっても好ましいポーズといってよいだろう。この女性の無防備な姿態は、S男性の如何なる暴虐の触手に対しても、思いのままにならざるを得ないだろう。

〈短歌〉

酒の肴

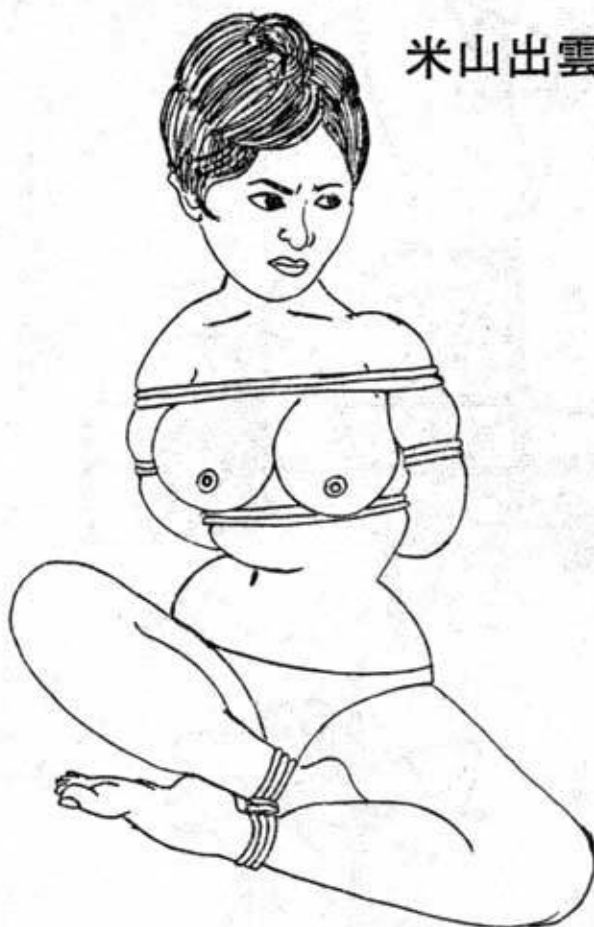
高村初子

みだらなる酒宴の中にすえられて
おびえつつ待つ後手のまま
酒に酔いみだらな眼光きぬも
だえおびえる全裸の乙女
うなだれし裸身にむごき荒縄で
酒席におびえ股合せいぬ
順番をきめるだみ声耳に入る手
足縛られ閨にころがる
悲しきは女の生理すえられし便
器の前にただすすり泣く
たしなみの為の鏡は今ではやわ
れをさいなむ開股縛りに
あきらめし体なれども縄のまま
酒席に侍るわが身かなしも
無理矢理にふくませられし酒の
味涙まじえてひとり悲しむ
飲まされしビールにいたく腹は
りぬ耐え難きかり女の生理
真向いの鏡にうかぶ裸身のま
う縄目に目をそらしいる
浣腸のあとの便器を目の前につ
きつけられて顔赤らめつ
縄尻を引かれて転ぶ髪の毛にこ
ぼれし酒がひたひたとつく
たわむれに男のパンツかぶせら
れ臭気にむせてむかつきており

病床夢記

「思いつくまま」

米山出雲文画



最近になって読者の中からも勇敢なM女性が多く現われて誌面を賑わしているが、まだまだM女性の絶対数は少いので本のみで気をまぎらせている。こんなS男性の多い事も事実であろう。そんな男性に一言申し上げる。

「天秤座」生まれ（九月二十四日から十月二十三日まで）の人は、全身を刺戟される事を喜ぶマゾヒストです。前戯や後戯も、ありきたりでは満足せず、とくに女性相手の男性の、好きな様にさせま

す。

「魚座」生まれ（二月二十日から三月二十日まで）の女性は、最初から積極的に男性を受け入れ、興奮が高まるにつれて相手からいじめられたいというマゾヒズム的欲望が強まります。△光文社刊「西洋占星術」より▽

この占星術の確率は、かなり高度であるらしいから、M女性を得たい人は、相手の姓名より先に、生年月日を聞くことをおすすめする。案外かくれたM女性が見つかるかもしれない。（編集部の方で

本誌のモデルさんを使って確率をたしかめられては？）尚、前記の生まれ月日の十日前ぐらいまではかなり二つの星座の運命を背負っているものと見られる様である。

十二月号に「水筆責め」という面白い責め方が書かれていたが、人の考える事は似た様なものであると思った。私の場合は筆の代りにモーターを使う。これだけ言えば諸賢にはもうおわかりと思うがやはり女は生まれたままの美しい姿がよい。手は大の字に縛り、更に足首をあぐら縛りに重ねて（寝返りを打たせない為）括る。

さて縄の一部に前記のモーター（子供のプラモデル用）をセロテープにてまきつけ、これをタテ縄用に使う。あとは乾電池をつなげばよいのであるが、これだけでは刺戟の少い向きにはモーターを二つにするか、又は模型屋へ行って小型の歯車を買ってきて縄とスレスレの位置にとりつければ刺戟も強く伝わると思う。直接手を出さなくともよく、ものぐさ専用の責めともいふべきか。

この世の中に男性として生まれしかも、S的傾向を好むとは、何と恵まれた星の下に生まれたので

編集部だより

○「妊婦フォト」について、長らく一方ならぬ協力を頂いた増田みゆき二人は、十二月下旬、予定日より若干早く、二人の女児を無事出産された由知らせを受けた。初産の双生児というので心配されていたが、母子共極めて健全とのことなので先ず先ず安心である。心より御祝い申し上げます。

○妊娠五カ月から始めて臨月に至る妊婦腹の撮影記録は、それ自体貴重な記録であるが、はからずも双胎という予期せぬ場面に逢着して一層文献的価値を増したことを思う。増田夫妻に感謝したい。

○秋山夫妻のサディズム・ショーについて各地の読者の方々から数多くの通信を受けた。緊縛映画の上映と共に本誌読者の関心がこの種の実演に対して如何に強いかという如実に示している。重複をいとわず、つとめて誌上に紹介したいと思うので、秋山ショーは勿論のこと、この種演劇の消息をお知らせ頂きたいと思う。

○今月号に是非掲載したいと思っていた斎藤夜居氏の「稿談性風俗

短 信 往 来

あろうか。原始時代の動物的な愛の表現を、現在に至るまで、ずっと保ち続けてきた人間。ただそれは、種族保存の為の本能の様な気がする。本能のみに生きるのは動物であるが、考える人間として生きていく以上、楽しみを求めねば生きていく価値がない。

女性の身につける物に、たまた

ない欲望を感じる人もいるし、切腹場面に血をたぎらせる人もいるだろう。その他にも色々あるだろうが、その人が、その事に関して自己嫌悪に陥る事がなく、じめじめとしなければ、それで良いのである。変態性欲者は新しいセックスへの先駆者である。最近になって同性愛が広く言われるように

福原堯児氏へ

麒麟児久より

夜乃探郎氏へ

麒麟児久より

兄よ、助けてくれ。いまぼくはあせってばかりいる。いっこうに仕事がかどらない。ロマンチズムをSMと結びつける特権は兄だけのものか。兄に過大に褒められてぼくはこわい。こわくて、書きたくてたまらなかった返信がついて遅れてしまった。

型にはまった無味乾燥な世界がどんなにつまらないものか。ぼくは昔のフランス映画のように、しぶくって、哀愁があって、そしてぼくにはSMが書けないから、エロっぽいものを書きたい。だが鈍才のぼくには、思うようにはなら

ない欲望を感じる人もいるし、切腹場面に血をたぎらせる人もいるだろう。その他にも色々あるだろうが、その人が、その事に関して自己嫌悪に陥る事がなく、じめじめとしなければ、それで良いのである。変態性欲者は新しいセックスへの先駆者である。最近になって同性愛が広く言われるように

八月号はいまごろ古本屋で売っているのでしょうか。あれから半年後のいま、あなたに褒められてぼくは昔の恋人にでも逢ったようにうれしい。御支援厚くお礼申し上げます。

河津安春様へ

福田久文より

河津様、新年おめでとうございます。旧年は幾多の優れたマゾヒズム小説をご発表くださり、有難うございました。どうか本年も素晴らしい作品を続々とお創りくださることを念じてやみません。わたしはひどい人事異動にうっかり巻き込まれまして、昨秋以来何も書いておりませんが、願ひ通りに

河津安春様へ

福田久文より

貴女のお便りを拝見し、その勇気と並々ならぬ造詣の深さに敬服すると共に、私の理想とする素晴らしい女性の出現に、チャンス到来とばかり気も転倒せんばかりの嬉しさで気もそぞろといったところです。知人の病院で浣腸されている若い女性を見てしまった時のショック以来、私のエネマへの執心は募る一方で、今ではエネマへの偏向日をますますと自覚し、エネマに理解ある伴侶なくしては我が人生は存在せずと思ひ詰めるまでになりました。何卒御交際下さるようお願いします。

高木伸雄より

中原久美子様へ

事情が好転しましたら、マゾヒズムが「洗練に耐え得るもの」であることをさらに作品のうえで追求したいと存じます。

高木伸雄より

中原久美子様へ

津市の中河恵子様、差し上げた旧刊誌有り、御一報下さい。

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

高木伸雄より

資料入門」ハ特殊雑誌、書誌、書目おぼえ書☆文芸市場と梅原北明☆変態資料の人々Vが、誌面のやりくりがつかず、残念ながら来月号回しになってしまった。その他送稿を頂いたものの中で、掲載したいと思いつつ保留したままのものが相当数になった。殊に原稿用紙に書いていないため書き直しの必要なものや、手を加えねばならないものは、急に間に合わないのでお倉入りになっている。

○最近の傾向として投稿原稿も長枚数のものや連載形式のものが増えてきたので、読みごたえがあり内容充実にはうってつけなのだが何にしろ誌面が限られているので枚数物を掲載すると、三篇も四篇もはみ出してしまおうので、痛し痒しである。来月号は一つ精選された力作と小粒でもピリリと辛い告白場誌面を埋めてみよう。

○本誌は本来雑誌の発行を主体としているので、催物とか行事とかは雑誌の発行に支障をきたさない範囲内で極めて控え目に行ってきた。本年は事情の許す限り、同好者の会合や撮影会といったものを活発にやってみたいと考えているので、よきプランのある方は編集部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。

部宛で一報頂きたい。



思 い つ く ま ま に

春風春太郎

暫く筆をとっていなかっただけに、やはり奇クに載せて戴くと感無量です。

奇クの読者の方も、新人の方が多勢書いておられるし、読者通信にも、女性の方がどんどん進出されて大変嬉しい事です。

それから昭和二十七、八年頃より常連として執筆されている方が

何時もながら依然として書いておられるのは、奇クならではの、根強い根性と、如何にそれらの方々が奇クを愛していられるか、その一端がうかがえて嬉しいものの一つです。

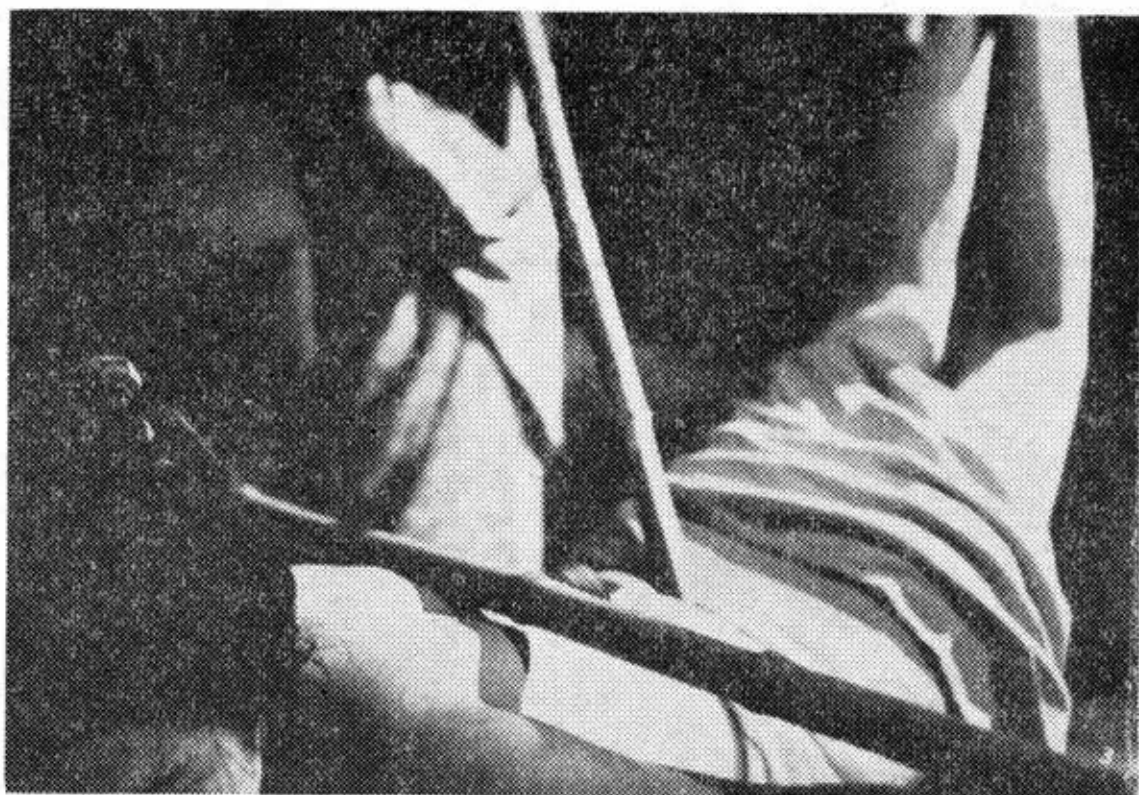
最近めきめき売出し?できた短歌の高村初子嬢の名文には恐れ入っています。うまいですね。巧み

な表現力は――。
短い文章で、カキムシラレテル私です。

私は映画の方の担当なので、映画の方に眼を向けましょう。

新年号に緊縛映画の事を皆さんよく書いておられるので、サアーテと私は駄文を弄するより、そのものずばりで「縛られた女優たち」のスティールを提供してゆきましよう。

南方純氏(古い方です。奇クには何年も書いておられた人)が日本拷問刑罰史を書いておられたので、今月は「日本拷問刑罰史」の特集のつもりで、スティールをまとめて提供してみました。見逃された方もいられると思いますし、又見られた方には、名場面を想い出して頂くためにも、御参考までにお送りします。



△スティール▽

小森白プロダクション作品
「日本拷問刑罰史」より
制作・監督 小森 白
出演者、森美沙・八車新子

オムツ……マニア……

宇都宮 武

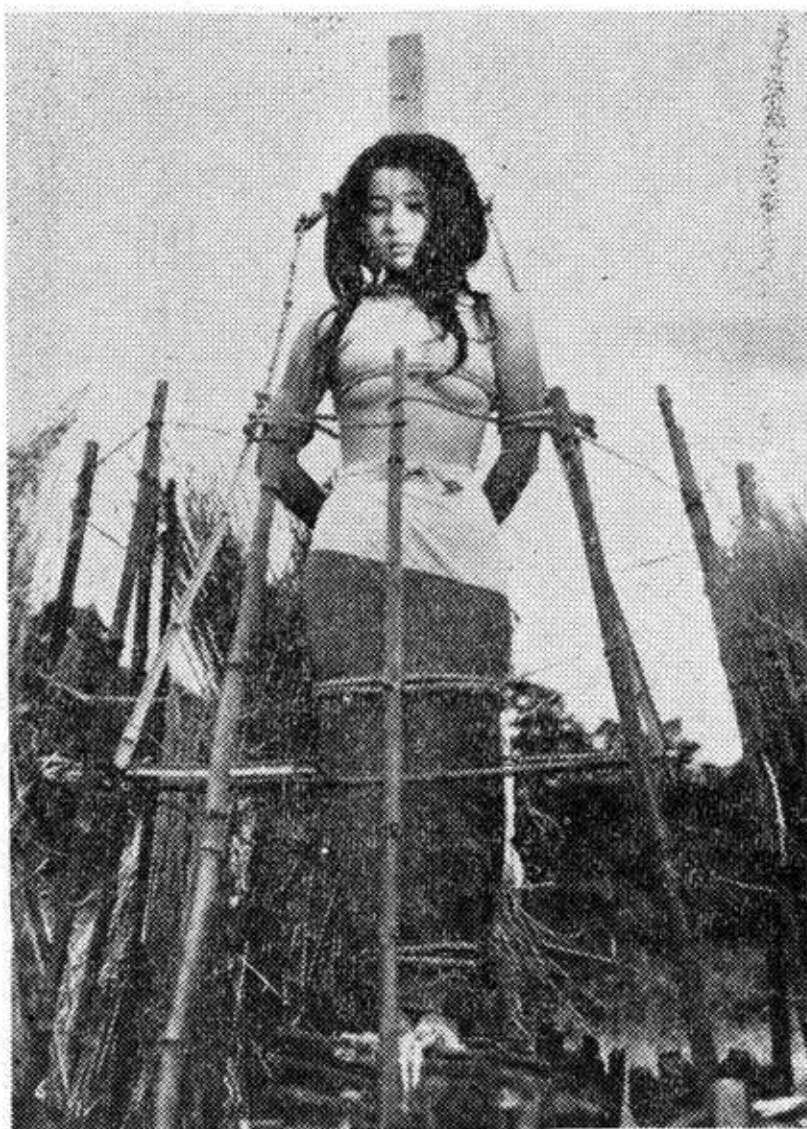
その女店員に「これを下さい」と小声で言ったところ「何カ月ですか」と聞かれ、「いえ、この病人用のおむつカバー」と言った時の恥しさ。耳すじから頬にかけて次第に赤くなっていくのが、じーんと感じられました。

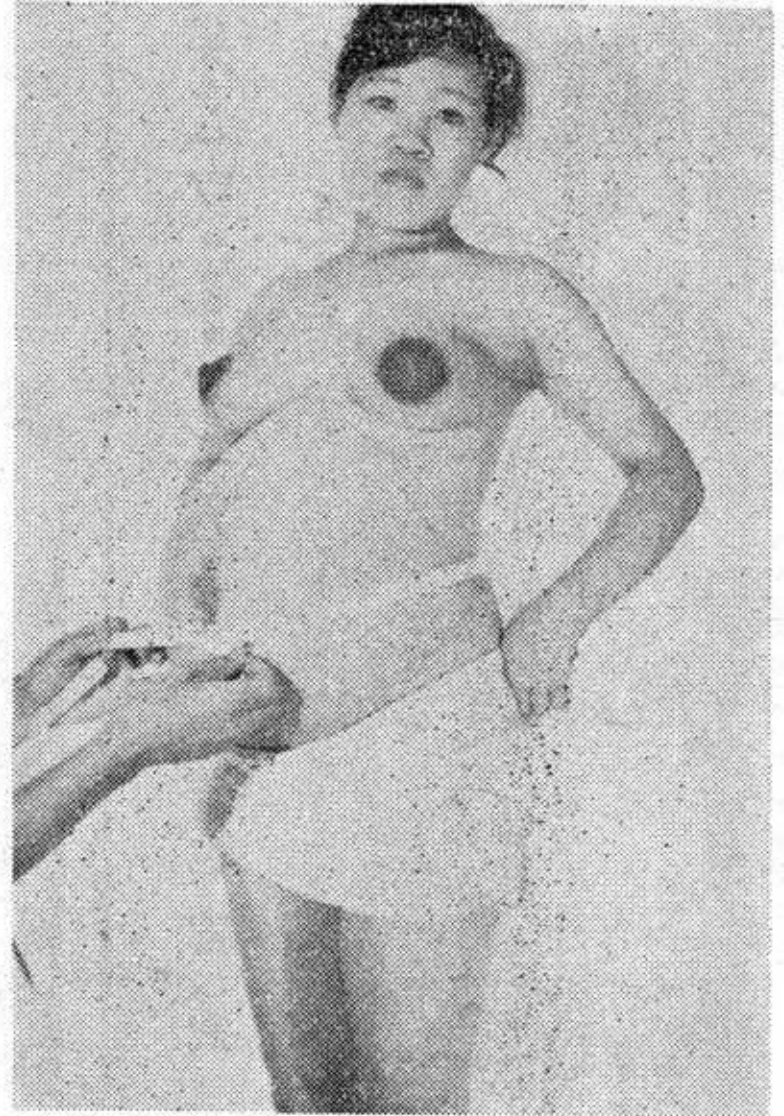
女店員に慣れているらしく「腰まわりは何センチですか」と優しく聞いてくれたので、私

もやっと落着きを取り戻し「九十センチ」と答え、彼女が九十センチのおむつカバーを探す手を見つめていました。六百元は少し高いと思いました。長年夢にまで見たものです。それほど惜しいとは思いませんでした。

家へ帰って早速身につけ、おむつカバーのピッタリ腰を包む感じを味わいました。その夜はとうとうはまず気になれず、おむつカバーをしたまま寝てしまいました。翌日はすぐおむつ地を買い、二時間ほどかけて、自分にぴったりするおむつ、輪型のおむつを作り上げ一週間ほどは有頂天で楽しい日々を送りました。ただおむつの中への排泄は洗濯ができないので残念ながらあきらめました。

それから主婦の友売店で別の種類のおむつカバーも買い、女店員の手からおむつを買う恥しさの中にスリルを伴う一種の快楽を味わうのでした。奇クを買ったのは、おむつカバーを手にしてから一年ほど後でした。そしてこれを読むほどに、私の性癖がかえって正常と思えるほど、おむつカバーに対する言い知れぬ罪悪感のようなものが消え去ってしまったのは、奇クには同好の志が数多く見受けられたからでしょう。





鑑賞用妊婦みゆき夫人

高野原美

待ちに待ったみゆきさんの妊娠は増田夫妻の喜び以上に、我々奇ク妊婦マニアにとって、万歳！と叫びたくなる程の喜びだった。

先に誌上に発表された五カ月の妊娠腹は二人の愛の結晶を孕んで大きく膨らみ、これから始まる妊婦ショーの開幕を告げるかのよう華々しいものを感じさせた。

私が前に発表した「妊娠腹観賞会」とまでは行かないまでも、増田夫妻のご協力により妊娠腹愛好家を歓喜させるような奇ク誌最高の記念すべき妊娠腹ヌードフォトが続々と発表されることを期待したのは私だけではなかったろう。

五カ月の妊娠腹は、お臍のあたりで尖りを見せて膨らみ、その愛

らしいお腹の膨らみは、以前に小柄な美しいみゆきさんの縄目に緊縛された裸身を拝見していただけに実に親しみが感じられた。そのやや下から撮られた妊娠腹の臍の下に 41.7.15 cm とかかれたマジックの字は、さすがに増田氏らしく妊娠腹マニアに対するサービスピ精神に徹しておられ嬉しく感じられた。

もともと鼻責めに興味を持っておられた増田夫妻が、ここまで奇ク誌の愛読者のために意を決して妊婦ヌードを発表された好意は感激ものである。みゆきさんの七カ月の妊娠ヌード二葉が発表されていたが、型のよい半球の乳房が豊かさを増して、大きく広がって黒ずんで盛り上った乳暈、丸味を帯びて七カ月とも思えぬ位、立派に膨れ上ったお腹は、誰しもが臨月のお腹の膨らみを想像して胸を躍らせたことであろうと思われる。

七カ月では緊縛だけであつたのが、八カ月では切腹と浣腸が演じられていたのは嬉しかった。女体切腹は豊満なお腹に加えられる冷酷な刃の惨美であるから、妊娠腹の切腹が最高のものといえる。

今日まで大塚啓子をはじめ、豊かな腹部を切り裂く女体切腹フォ

トが数々分譲されてきたが、是非とも臨月腹での悲愴な切腹をお願いしたいものである。また折角の妊婦フォトでもあり増田氏の手で各月のお腹の記録を発表してもらえばと思う。たとえば臨月腹の最大腹囲、臍から恥骨結合までの長さ等その記録とともに、ばんばんに張り切った見事な妊娠腹を鑑賞すれば、より実感が伴いみゆきさんの威大な丸く膨れた腹がより身近に感じられるのですが……。

私はみゆきさんの妊娠腹を見ながら空想をはらせている。なんといっても、この丸い膨らみに氷の刃を突き立てることである。妊婦腹切り。続いて豊臣秀次、武田信虎等々の行った妊婦生体解剖である。妊婦腹を空に向けて男のサジスチックな心を満足させるための犠牲となるみゆきさんは、静かに庭上に仰向けに縛られている。間もなく白刃が小山の麓に、ずぶりと突き立てられて……。

同じく土台の上に横臥えられて腹を真二つに切り裂かれる生胴。私は妊娠腹愛好家のために、夫の意志に従って動物的な裸身を発表されたみゆき夫人のフォトを、私の好みのままに生にえとして楽しんでい

奇譚クラブ

昭和42年3月号

(1967年・3月号<第21巻第3号・通刊第225号>)



本誌の信条

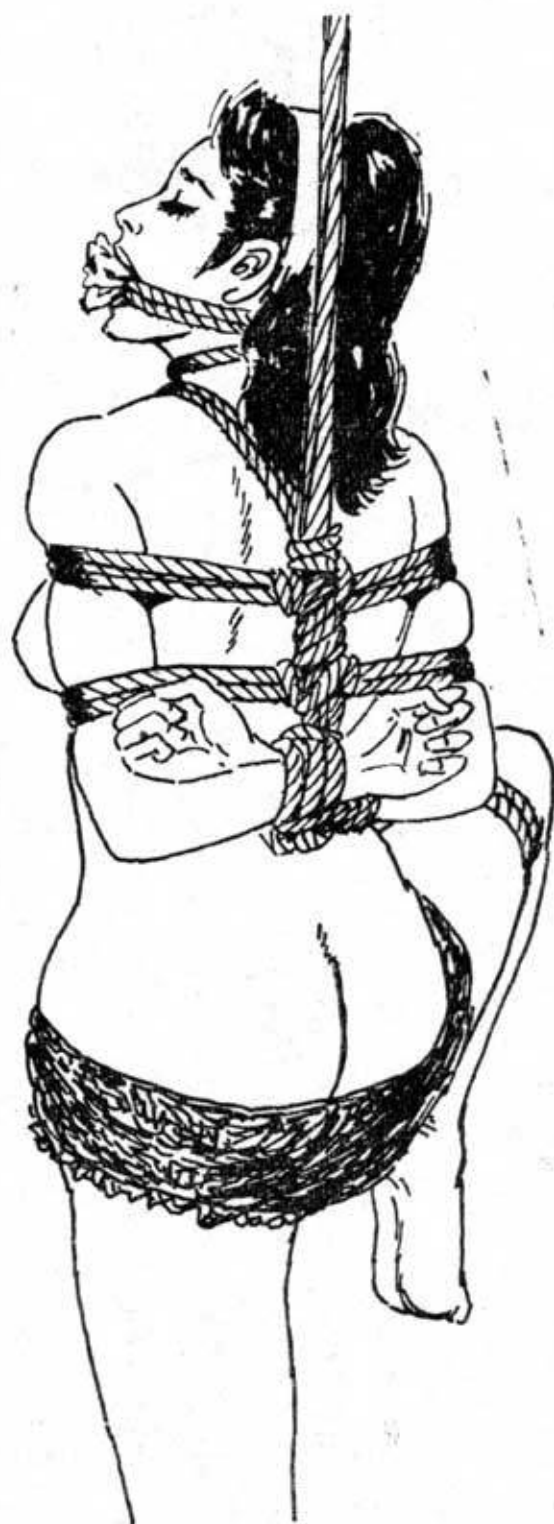
- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビア写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。

縄なわの蜜月みつげつ

△
門かど

出で
▽

千草忠夫



「葉山たけしくん並びに淑子よしさんの新らしい門出を祝して、ばんざーい」

披露宴の幹事をやった同僚の山田が、仕事おさめとばかり祝い酒に真っ赤になった顔で大声を張りあげた。見送りに来ていた人たちも周囲にきまりわるそうな顔をしながら、山

田につられて両手をあげる。
猛たけしと淑子よしの新郎新婦は、開けられない列車の窓越しに、見送りの一同に最後の挨拶をした。

音もなく列車は動き始め、窓外の人たちが左に移ってゆく——父、叔母、妹、同僚、見ちがえるほど美しく着飾った会社の女の子——彼女たちは今日から淑子の同僚ではなくな

った——口口に何か叫び手を振る。淑子の母が見送り人の後ろで、そっとハンケチを眼に当てるのが視野をかすめる。

すべてのものが流れるように後に去って、猛がやれやれと思った時、皆から一人だけ離れて立っている女の姿が飛び込んできた。
訪問着に白い毛のストウールを手にとって——その手を振る様子もなく、猛の視線をと

らえた一瞬、奇妙な笑いを白く美しい頬のあたりに浮かべただけ——

「あら……」

不意をつかれたように、淑子が小さな声をあげた。

「上林くん。あい変わらず変っているね」

言っている間に列車の外でホームがふっ切れ、夕闇の迫った東京の街が流れはじめる。

もてあましている仰山な花束を網棚にあげてやり、猛は淑子を窓際にして席に腰を降ろした。

「やっとなんだ」

猛は、席の中で大きく伸びをしながら言った。淑子はまだ体を固くしたまま猛の方にはにかんだ笑いを投げた。

「疲れたろう」

「ええ……でも……」

そっと頬に指先を当てて微笑んだその風情には、いま幸福な門出についた新妻の満ち足りた思いが、はじらいにくるまれてあふれるようだった。

「今日のきみは、すごく美しいよ」

猛は思ったことをズバリと言う。

「できることなら高島田姿のまま、さらって来たいくらいだった。洋服もいいが、和服の

きみは、もつとすばらしい」

右手を取られて、淑子は真っ赤になった頬を伏せた。男に取りられた掌に羞恥の汗がにじみ出た。

猛は椅子の背にもたれてそり返っているのに、淑子の方はほてった顔を見られまいと、体を前に傾けるので、猛に取りられた右手は後ろにねじられた恰好になった。その姿勢が猛を興奮させた。今夜宿で実行する計画のかすかな写しを、その恰好の中に見たからだ。（どんな顔をして、どんな姿で身を悶えさせるか……）

婚約の期間中も接吻さえせずに今日の日を満を持して待っていた猛の心は、はや妖しくさわぐのだった。

「さっきの上林くんあの顔、だいぶきみにやきもちを、やいていたようだったね」

もてあそぶにまかされていた淑子の指に、ピリと一瞬、力が加わった。

「倫代さん……あなたを愛してらしたのだと思います……」

「だったら、きみは恋の勝利者、さすが誇り高い倫代女史も、片想いのうらみに泣く——というわけだ」

淑子はしきりに掴まれた手を抜き止ろうと

優しくあらがっている。それが不可能とわかると、体全体をモジモジさせ始めた。

「おはなしになって……」

顔を伏せたまま、淑子は耐えきれなくなつたように、蚊の鳴く声で哀願した。

「ばく、指に接吻してくれたら、離してあげる」

「そんな……」

この時刻の一等車は比較的乗客が少なく、高い椅子の背にさえぎられて、他の乗客はほとんど視野に入らない。

淑子は怨むような視線をチラと傍若無人な夫に投げかけて、夫の手の中にある自分の指に力をこめた。

猛は手の力を抜いて待っている。

淑子の指にじょじょに力が加わり、それと同時に、上体を更にかがめてゆき、猛の太い指に、そっと赤い唇を寄せた。その瞬間、猛は、淑子の伏せられた長い睫毛の先が痙攣するようにふるえ、優しい唇がやや突き出されて、自分の指に触れるのを見た。いや、体全体で感じた。といった方がよい。

淑子はしばらく夫の手を捧げ持つようにして、熱い頬を、その甲に押しつけていた。

（おれの眼に、やはり狂いはなかった——）

猛は恍惚に近い満足にひたりながら、今日から始まる新しい生活のことを思った。手を離すとすぐ、淑子が燃えるような頬をかくすようにして、小走りにトイレに立ったことも、猛の夢を刺戟した。

(あれは——そうだ。あれは倫代が自分から体を投げ出して来た時だ。眼をキラキラ光らせて、ホテルに行くまでに二度もトイレに立ったっけ——)

二

猛は三十二歳の独身青年として、当然女を知っていた。童貞率が増加したという昨今にあつては、ドンファンと言われてもおかしくない数の女を知っている。が、会社の女子職員に手を出した事は一度もなかった。それで会社の女の子の間では、麻薬に似た、魅力を持つ男として、よく噂にのぼった。仕事の方も、なかなかのやり手だったのだ。

上林倫代はその女の子の中で自他ともにナンバーワンをゆるしている女だった。専務と親戚の娘というだけでも未婚社員には充分な魅力となりうるのに、才気と美貌もすぐれているとなれば、並居る女の子は尻尾を巻いて引込まざるを得ない。

その上林倫代が、猛に興味を持つようになったのである。原因はおそらく競争心だったろう。会社の中でも一番目立たない女の一人だった淑子に、上林がどうやら目をつけてデートを重ねているという噂が、ひそかにささやかにはじめた矢先の事だった。

その当時の淑子は、新入であつたせいもあつたかもしれないが、やぼったい服装、小麦粉をまぶしたような化粧、おとなしい性格などで、男の社員の間では、ほとんど黙殺された存在だった。現代の男性は、まず女性に自分と同等ないしそれ以上の地位と洗練を求めるのだ。淑子はその第一次審査に失格していた。

淑子が猛とデートを重ねている。という噂も、実は失格者の淑子が、女性注目の猛と一回だけデートした事が誇大に言いふらされた結果に外ならなかった。しかも、そのデートたるや、ちょっとした淑子のミスを上役が邪慳に騒ぎ立て、淑子の立ち場をなくしてしまつた事件に腹を立てた猛が、本人から事の真相を聞くために、呼び出したものに過ぎなかつたのだ。

その事件は猛のややスタンドプレイとも見える活躍によって、淑子の顔を汚す結果をま

ねかずに終つたのだが、それがかえって雀たちの好奇心をあおつたのだつた。

男子社員にチャホヤされていた倫代には、それが氣にくわなかつたのかもしれない。自分に声さえかけてくれなかつた猛が、選りに選んで淑子のような女の肩を持って、ひと肌脱いだという事が、彼女の自尊心を傷つけたのだらう。倫代の猛への接近ぶりは、強引だった。

猛とて、女とあれば嫌いな方ではない。会社の女に手を出さなかつたのは、好みの女が見当らなかつただけで、自分の意志で近づいて来るとなれば問題は別だ。

最初のデートの時、猛は何の遠慮もなしに喫茶店、レストラン、ダンス、バー、ホテルと女の子を誘惑する最短コースを直行した。断われればよし、断らなければ物にする、ということを遊びなれた倫代に、わざととらせうように仕組んだのだ。倫代はこのことについて来た。

「あんたって、案外ドンファンなのね」

ホテルのベッドに腰を降ろして言う倫代は猛の強引なやり方に、なかば酔つたようになつていた。

「だまってついてくるきみもきみさ」

「似た者同士ってわけね」

倫代は、おそろくこの瞬間から猛を恋しはじめたのに違いない。

「どうかな」と猛はネクタイを解きながら冷静に言った。

「男と女が寝ることぐらい別に似ていなかったってできるからね」

この言葉に、さすがの倫代も一瞬蒼ざめた顔になったが、すでにおそかった。上半身裸体になった猛は、そんな倫代の体から、むしろように服を剥ぎ取り始めたのだ。

「いやよ」

「ここまで来てさわぐなんて、きみらしくもないぞ」

「見そこなったわ」

「甘い言葉でも、ささやいてもらいたかったのかい？」

すでにスリッパ一枚に剥かれていた。

猛はズボンの尻ポケットから愛用の絹紐を取り出した。それは細く強く長く、それでいてひと握りくらいのかさになってしまふ。縛るには最も適した武器だ。これで幾人バアの女たちを泣かせた事か。

「縛ろうというの？」

猛が手にした深紅の絹紐を見て、倫代は更

におびえた。

「そうだよ。こわいか」

「変態！」

「悪かったな」

後は二人とも無言だった。ただ噛みしめた唇からもれる倫代の呻きと、甘ずっぱい体臭が、もだえまわる肉体と一緒にあって華麗な無残絵を繰り広げる。

倫代は完全な高手小手に縛り上げられて、ベッドに突っ伏したまま、荒々しく喘いでいる。そのあらわな肩を掴んで、猛は仰向けにした。上下を赤い紐で締めあげられた乳房がブラジャーの下でゆがんでいるのが、薄い藤色のスリッパの下にすけて見える。パンティは意外におとなしい白だ。

「どうだ、縛られた味は？ 悪くなくろう」

「エッチ！」

うつぶせになろうとするのを押さえておいて、わざと手荒にスリッパの肩をはずし、裾をめくりあげる。

「バカ」

「おまえさんは、そのバカの言いなりさ。ホラ」

スリッパの裾を両手に掴んで力まかせに引き裂く。

「ヒッ」

倫代は肌身を裂かれるような声をあげる。

裂いたスリッパを縛目をくぐらして破り取り、ブラジャーをむしり取ってしまうと、締めあげられた乳房の頂点で、赤く熟した木の実が、固くなってふるえている。

「そうやって、カッカしているきみは、おすまししている時より、ずっと綺麗だぜ」

「いやらしい」

「ここを、こんなにしていくきみの方が、よっぽどいやらしいよ」

猛はニヤニヤしながら、木の実を親指と人差し指の腹で心ゆくまで味わった。

倫代の悲鳴が次第に喘ぎに変わり、緊張して悶えていた肢態が、けだるげな動作に変わってゆく。

猛は、次第にあらわになってゆく倫代の肌で眼を楽しませながら、最後のものを、抵抗力を失った下肢から抜き取った。

倫代はグッタリとなって眼をつむり、睫毛の先をふるわしている。

見事な裸身だった。肌はさほど美しくはないが、小麦色に焼けた所と、目の眼を見なかった所とが際だっていて、カチッと引き締まっているのが魅力だった。

「エッチも悪くないだろう？」

指はつやつやと豊かな手ざわりを楽しみながら、猛は倫代の顔をのぞきこんだ。

倫代は紅潮した頬をそむけた。愛らしい唇が半ば開いて濡れている。締めあげられた柔らかい乳房が喘いでいる。

倫代は処女ではなかった。

それをたしかめると、猛は体を離れた。

「いや……どうしたのよう……」

雌獣に化した倫代を面白げに見降ろしながら、猛は備えつけの寝衣の紐に、結び目を三つ、狭い間隔で作り、それを開いた体に縦に割り込ませた。

「ヒュー」

倫代は、おおげさな悲鳴をあげて、体を弓なりに反らした。

「変態は、どっちなね」

そんな声など聞くゆとりもない倫代の白い蛇身を楽しみながら、猛は自在に縦の紐をあやつり続けた。

数分後、倫代は全身を汗にまみれさして、異常な興奮の余波の中に身をゆだねていた。倫代の頭と爪先がシートにめりこみ、弓なりにそり返った背中が宙に浮くのを確認して、はじめて、猛は責めを止めたのだ。紐は濡れ

て、結び目はなかなか解けなかった。

「悪いひと……」

ややあって、倫代はまだ夢を見るような瞳を猛に向けた。いましめを解かれた手をさしのべて、猛の背にそっぴといとしげになぜた。

「『あなたも変態になれる』目下ベストセラーのトップを独走中！」

そう言って、猛はゲラゲラ笑った。

それから今日の結婚まで、猛は幾度か倫代と寝ている。もちろん、その際には必ず縛りのプレイが行なわれた。小麦色に引き締まった肌は赤い絹紐に絞めあげられて、よくしなった。もう猛の事を「変態」とのしるようなことはなくなっていた。自分自身が変態的な愛撫の刺激の強さに抵抗することができなくなったからだ。

まだ男の愛撫に十分解きはぐされない未熟さをたたえた乳房の上下に絹紐を巻きつけ、その紐の間隔を次第に絞るようにして縮めてゆくと、乳房が上下から押しひしゃがれて、奇妙な恰好にゆがみ、プックリと風船のようにふくれあがる。充血した頂点がはち切れそうにふくらみ、それを……で……してやると倫代は背をのけぞらして、快楽の呻きをあげる。彼女が一番好きな責めだった。責めが終

って紐を解いた後に残った跡が、まるで乳首を眼玉にした眼鏡のようで、猛はよく笑ったものだった。

こんなふうに自分の快楽のためには、少しの苦痛など何とも思わない倫代だったが、みずから男性に奉仕することは好まなかった。

いくら責めたてられても、彼女は結局フルートを吹くことを、がえんじようとしなかったことでも、それがうかがえよう。

倫代との関係は猛の巧みなカモフラージュで、会社では全然噂にもされないですんだ。むしろ好奇心の的になったのは、それまで男性社員の関心を魅く事のほとんどなかった淑子と猛とが、どうやら結婚するらしいという噂だった。

「本当なの？」

会社の廊下の隅で、倫代はなにげないようにたずねた。

「ああ、本当だよ」

「じゃ、これでおしまいね」

「そういうことらしいな」

これが倫代とかわしたほとんど最後の言葉だった。その時の表情が、さっき窓外に一人だけ皆と離れて立って猛たちを見送っていた倫代の表情と、今考えてみるとピッタリ一致

するのだった。

三

新婚旅行の車中で、ういういしい花嫁を傍に置いていながら、頭の中でかつての女との事を思い浮かべている新郎——というのは、現代ではおそらく、あまり珍しい事ではないだろう。

猛は何の後めたさも感じずに倫代との事を反芻している。反芻しているといっても、それは高校時代に、はじめて好きな女の子の手を握った時の印象よりも淡い印象しか残さなかった出来事としてであった。すでに過去の事であり、将来もああいっただ関係を再び復活させる気は毛頭ないのだった。

「腹はへらないかい」

「ちっとも」

暗い窓の外を眺めていた眼を、ちょっと猛の方にかえして淑子はつましく答えた。

「披露宴の時だって、ほとんど料理に手をつけなかったじゃないか。遠慮しない方がいいよ」

「胸がいっぱいで、ちっともいただきたくないんです……」

「式の時の感激が、まださめきらないという

のかい？ それとも、これから後のことが心配で……？」

淑子の頬にパツと血がのぼった。

「考えてみれば女性にとって初夜というのは人生における重大事だからね。もっとも、もう処女でない女は問題じゃないが——なにしろ自分自身が男の体によって作り変えられるといっても言いすぎじゃないだろう。そうであってみれば、男みたいに初夜のことを、ただの楽しみだけで迎えるなんてことは不可能だろうからね。それに、相手の男であるほうが御覧の通りの無骨者ときている……」

猛がなおも何か耳づらいことを際限もなく言い続けそうな気配に耐えきれなくなったのか、淑子は意外にキツパリとした声で猛をさえぎった。

「ちがいますわ、あたし……あの……猛さんのことを、おっしゃるようになんかただとは信じておりませんわ。それどころか、純粹で優しいひとだと信じています。そして、あたしはいま、しあわせで胸がいっぱいなのですわ……」

猛を何と呼んだらいいのか戸惑ったあたりから、淑子は見るのも気の毒なくらい真っ赤になっていた。しかし、まぶしげに猛を見る

瞳と言葉だけは、しっかりとてさわやかだった。

「そう言われると返す言葉もなくて困ってしまいが、最初からそんな神がかりのようなことを考えていちゃ、後からくる幻滅がおそろしいよ」

猛は我にもなくうろたえていた。

「いいえ、幻滅など、感じる筈がありませんわ。なぜって……」

しばらく或る言葉が淑子の繊細なもののあたりで何かと争っているようだったが、結局それは外に出てこなかった。

「ぼくは、ほんとうにすばらしい女性を手に入れたと思っているよ」

新婚旅行中は凡百の男たちのようにデレデレすることは決してしまいと誓っていたことも忘れて、猛は感慨をこめて淑子の耳にささやいた。

「きみは亡くなったぼくの母に似ている」

（だからぼくの妻に選んだのだ）とまでは言わなかったが、こう口に出してみても、猛にははじめて、なぜ淑子に他の女とは違った魅力をおれ程感じていたのか、その理由がわかったような気がした。

「お母さまに？これまで、そんなことおっし

やったこと一度もありませんでしたわ」
「いや、顔は全くといっていいほど似てないんだが……どこか母を思い出させるのだ。それも、今フツと気がついたのだ」

「変ですわね。でも、うれしいですわ……」
「母はぼくが五歳の時、胸の病いで死んだんだ。薄暗い納戸の床の中に、そぎ取ったような蒼白い頬が横たわっていたのを、今でも思い浮かべることができるよ」

「……」
「悲しくはなかった。しかし……なんという



「美沙子」

縄のメルヘン――

井 上 陽 一

私は偶然、美沙子と再会した。
別れてから、丁度二年になる、初夏のすがすがしい一日であった。
その夜の美沙子は、二年間の苦悶と喜びの空間を、涙で流し去ろうとも思ふのか

のかな、とても冷たい感じ……情熱をこめて抱いた女の唇が驚くほど冷えびえとしていた時のような……自分だけが見捨てられ、拒否されたような……実をいうと、ぼくの母に対する記憶は、たったそれだけなんだ。それがはじめて終りなんだ」

「……」
返す言葉もなく生真面目な表情でいる淑子を、猛はあらためて見やった。

おだやかな眉、切れ長の眼、尋常な口元、どれといつて眼立つものはない十人なみの平

凡な顔立ちだ。ただ、肌だけが陶器の肌を思わせるほどキメが細くなめらかなのだ。それは内にひそむ体温を思わせない程、冷たく輝いている。

（肌の冷たいほどの美しさが、母の死んだ肌の冷たさを連想させたのかもしれない……）
死んだ肌なら温めてやろう。冷たい肌が桜色によみがえって生の輝きに満ちた時、母のおもかげは、あるいは消えるかもしれない。だが、淑子はそこにいるのだ。

急行列車は闇の中を突進する。（未完）

それが彼女流の羞恥の表現であったのかも知れないが、私は、そんな美沙子の表情が大好きであった。

「井上さん」

私は続けて小さく、「あなた」とつぶやく美沙子の声を夢うつつに聞いた。
「起きてちょうだい。もう十時よ」

初夏の日ざしは、すでにまぶしいほどに注いでいた。

「ハイ、半熟のはずよ」
美沙子はむいた茹卵を、小さな手のひらにのせて差しだした。
「美沙子式だね」

「ええ、そうよ」

笑くぼを浮かべた途端、さっと頬を赤らめたかと思うと、

「いやッ」

と、一言口走って、うつむいてしまう。

私が言った意味がわかったらしい。

「半熟、大いに結構、だんだんと全熟にしてあげるよ」

「ほんとう？」

と、言って、また顔を赤らめる。

「うむ」

「だって、信じられません」

と、少し怒ったように、

「どうして、あの時、あんなこと、おっしやったの？」と、目をうるませる。

二年前、私は美沙子を捨てた。

いや、捨てられたと思ってるのは、美沙子であって、私は決して捨てたのではなかった。一言に言えば、それは男のわびしい自嘲のなすわざだった。

その頃の美沙子は、△半熟▽にもなっていないかった。それを思うと、二年を経た現在の美沙子の肉体は、目をみはる程の成長

を遂げていた。私は男でもあるのでは、と思った程であったが、それを言うと、美沙子は泣いてくやしがつた。

私は奇クの熱心な愛読者である。中でも、団鬼六氏の熱烈なファンである。そしてS愛好者の例に洩れず、私も一面では、純粋なロマンティストでもあった。

純白の新雪を白銀のまま、そっと愛でるのも男の情熱であるならば、真白のそれを泥ぐつで踏みにしてやりたい衝動にかられるのも一つの情熱である。両者が同居するの稀なことではない。二年前の私は多分にロマンティストであった。だが、今の私は、その頃とは、きつと変わっていることだろう。

ある夜、

私は美沙子に一つのアルバムを見せた。いや、見ることを強制したといった方が適当であろう。その夜の彼女は、それとはっきり気づくほど、高ぶり昂奮していた。しかし、私は応じなかった。

美沙子が、自分から「縛って！」と口に出して言ったのは、それから一週間ほど経って

からであった。

その間、美沙子はきつと、自分を抑えていたのだろう。一週間目に我慢しきれなくなったのか、或は徐々に好奇心が出てきたのか、私にはわからなかったが、その夜は私にとって、記念すべき夜となった。

美沙子を思いのままに調教する新しい日々が始まったのだから……。

私の秘蔵の一冊のアルバムが、美沙子をこのように変化させようとは、私にとっても一つの驚異であった。

それ以来、いろんなモデルの、いろんな姿態で埋って数を増していった私のアルバムを美沙子は見ただがった。控え目に、頬赤らめながら、ページをめくる美沙子の白い指が、かすかにわなないてるのを、私の目は見逃がさなかった。

「私もこんなにして、縛ってほしい」
何の気なしに、そうつぶやいて、はっと頬染める美沙子の横顔を眺めて、私は思わず抱きしめてやりたいほどの、いとしさを感じた。

私のアルバムは三冊目になった。

「カメラ・ルポ」

山 本 一 章

「この女と」

(大島照代の巻)

寒い日が二、三日続いたので、彼女が来るかどうかを危ぶみながら私は車を尼崎に向けて走らせていた。

十一月初旬、私の目当ては大島照代さんである。彼女とは、今日で三度目の撮影行なので、最初の時のようないらだたしさはないばかりではなく、それどころか、私の心は期待にうずいていた。

編集長に送った写真の一部が既に誌上に掲載されたので、読者の方でお気づきの人もあろうかと思う。昭和四十二年一月号奇クサロン(「逆さ吊り」にされたモデル)が大島照代さんである。その写真は第二回の時のもので、私としては快心の出来ではないのだが、

稀少価値から、掲載されたのではないかと思う。

従って彼女のルポを書くためには、彼女との最初の出合いから書くのが本筋であろうと考えるので、暫らく時日を遡ることを許していただきたい。

○

「今日の午後、十三で新しいモデルを撮影することになっているのですが、十三方面には知った場所がないので、三人となるとホテルの方で厭がるかもしれませんね」

箕田氏は私の同行をためらっているようであった。もっとも、それまで箕田氏とは文通や電話で話をすることはあったものの、顔

を合わせたことがなかったのだから無理もなかった。もし駄目なら撮影は諦めるからということで私は強引に十三の待合せ場所を聞き出した。私としては一度編集長と逢っておいた方がいいという考えもあったからだった。

電話を切った私は、ちょっと箕田氏にすまないことをしたような気持になった。彼は一対一でじっくり撮影するつもりであったのかもしれないという考えが浮んだからだった。まあ、なるようになるだろうと高をくくった私は、真昼の十三大橋を北に向った。十月上旬のことである。

指定の公園に着いた私は、一旦車を道端に駐車させて公園の中を散歩してみた。約束の

時間には三十分程余裕があった。

都会の中に、こんな公園があるとは想像で
きない程の広さで、グラウンドでは若い人達が
野球に興じていた。樹蔭のベンチには子供を
遊ばせている老人の姿もあった。のどかな情
景に私はふと、今から起ろうとしていること
が錯覚の中にあるような気がしていた。

車の所へ戻った私は、あたりを見廻わした
が、箕田氏やモデル嬢の来ている気はいはな



写真 < A >

かった。もっとも私は、そのどちらの顔も知
らないのだから、いい気なものである。箕田
氏の車の型かナンバーでも聞いて置けば良か
ったと後悔してみても詮ないことだった。

私は車を動かして公園を一周してみた。も
との位置へ戻った時、ベージュのタウナスが
私の車の前方に停っていて、中年の男が羽簾
で車体を掃いているのを見つけた。私はその
人が箕田氏だと直感して車を降りた。彼の方

でも私に気づいたのか羽簾を持ったまま私の
方へ近づいて来た。

「あのう、あんた、さっき電話をくれた……
……」

箕田氏の言葉は、ちよっとぎこちなかった
が私は全部を云わせずに名乗った。少し肥っ
たラフな服装をした紳士——それが第一印象
だった。実は私は電話の声から彼を瘦身の青
白いインテリと想像していたのだが……。

箕田氏との出合いをそれ以上書いてみたところ
で読者の方には興味がないと思うので先
を進めよう。大島照代さんが現われたのは、
それから間もなくだった。小型の商業車から
降りた一組の男女が箕田氏に挨拶をした。

彼等は箕田氏の車に乗り私は、その後を金
魚の糞のように随いて走った。ホテル街を二
台の車が連らなってノロノロ走るのは恐らく
奇妙だったろうと思う。箕田氏が二、三軒ホ
テルを当り、二台の車は、地下の駐車場に収
まった。

箕田氏は車のトランクから今まで見たこと
もないような大きな黒のボストンバッグを引
摺り出し、それに三脚を担ぐ。全く御苦労さ
んなことである。私はカメラバッグとストロ
ボの入った小型のケースだけという比較的軽

装なので箕田氏のボストンを持ってあげる。彼は遠慮するが私の方が若いのだから（？）それに強引に割り込んだ手前もある。

大島さんと中年の小柄な男は余り喋らずに私達に随いてきた。総勢四人が部屋に落着くと女中が茶を運んできた。箕田氏が最初に写真撮るんだからと断っていたが、その若い女中がどんな想像をしたか、ちよつと興味があった。無表情を装ってはいたが。

「山本さんは、きつい縛りをやるんですね」最初に箕田氏が口を切った。前に送った木村洋子さんの写真のことを言ってるらしかった。それからしばらく男三人で雑談をした。大島さんに随いて来た男の人はK誌の愛読者らしく、K誌の内容や女の下着のことなどを話した。彼が大島さんの紹介者であることは話が進むに従ってわかってきた。

「さあ、お風呂へ入ってきたらどうです」時期を見て、箕田氏が大島さんに声を掛けた。部屋の隅で、じつと男同志の話を聞いていた彼女は、それじゃお先にいただきますとつつましく一礼して、紹介者と浴室へ行ったが、紹介者は直ぐに戻ってきた。

箕田氏と私は早速カメラを出して撮影の準備にかかった。箕田氏の準備はなかなか大

かりで、電気のコードを何本も引き数個のライトを配置する。蒲団の敷かれている部屋を整理して、そこで撮ることにする。私は三ミリカメラにストロボを装着するだけだが、箕田氏は大型カメラを三脚に据え本格的である。

入浴を済ませた大島さんは、備えつけの浴衣を着て私達の準備を見ていた。

「山本さんに、やって貰おうかな」

私はちよつと戸惑った。今まで一対一でやった経験はあるのだが、皆のしている前でやるとなると頭へ血が上って冷静さを失ってしまった。しかも、大島さんとは初対面なのだから尚更である。しかし、こうなったら止むを得ない。私はバッグの中から私専用の白いロープを引摺り出す。紹介者が大島さんに何か耳うちをする。彼女は浴衣の下でスルスルとパンティを取ると、急造のスタジオへ歩いていった。

「脱ぎましょうか？」

私は肯ずく。彼女は浴衣をさっと取る。

「縛られた経験はあるの？」

「いいえ、初めてなんです」

ああ、こいつは難しい。立ったままの彼女を後手にして、縄をかける。縛り終ってみる

と、所々縄が弛んで、どうも不細工だが仕方がない。そのまま坐らすと、足首を交叉させて、しっかりと縄を巻く。肌はムッチリと滑らかだが胸が少し淋しい。私は彼女が昭和も一桁だなと思った。

大島さんの髪は長くて量が多い。これをうまくねえばと思うがなかなかいいポーズが考えつかない。湯上りのせいか、彼女の体はじっとり汗ばんで髪が肌にまといつく。それを搔き上げていると、彼女の体臭が快く鼻をくすぐって私の官能を刺激した。

ライトが彼女をまぶしく照し出し、箕田氏の操作するカメラのシャッター音が、いやに大きく聞える。私もストロボを止めてランプライトに便乗してシャッターを切るが、自分でも良い写真ができそうにないのを意識する。縛り方が悪いのだ。私は汗だくになっていた。箕田氏は心得たもので既にステテコとシャツだけの軽装である。

一度休憩して今度は箕田氏が彼専用のダンダラの縄で縛る。さすがベテランらしく後手にきっちり掛けた縄には隙がなく、それにその縄は柔らかかそうに見えるながらも肌にしっかりと食い入っていた。中腰のままいるポーズをつけて箕田氏のカメラが狙う。

一しきり撮ってから腰を降ろさせ、両膝を胸に引き寄せた海老縛りである。

私は持参の白い縄を口に咬まして後頭部で結び目を作り縄尻を背中中の縄の下をくぐらして後手に巻きつける。長い髪は少し横顔を出すために左肩に垂れさせた。この人はバックがなかなか発達していい。箕田氏が、そのまま大島さんをゆっくりと横に倒した。

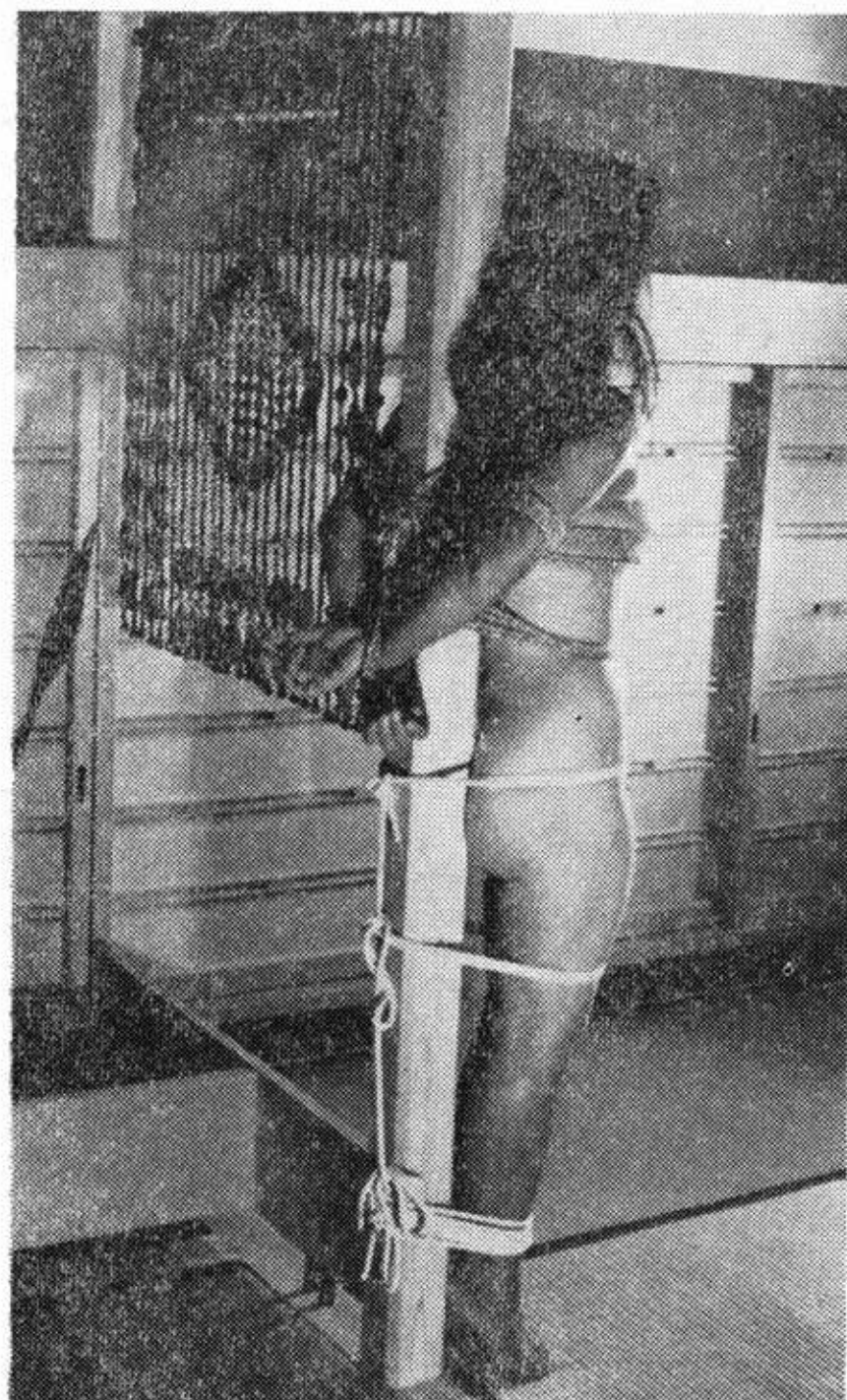
「ウウウウッ」
「痛い？」

箕田氏の問いに彼女は肯ずくが、その目は微笑を浮かべているようだった。

「しばらく辛抱できる？」

大島さんは肯ずく。隙のない縛りだけに、倒されると縄が肌に物凄く食い込んでいるのがわかる。二の腕なんかは見ていても痛そうだった。乱れた黒髪と白い肌の対照が美しくかった。(A)

それから箕田氏は何回か縛り直し、紹介者に縄尻を持たせたりしてシャッターを切って



写真

いたが、その詳しいことは省略しよう。勿論私のカメラも大島さんの姿態をフィルムに刻んだのだが、顔のはっきりしたのだけは誌上に載せないで欲しいとのたつての要求なので残念である。顔面のはっきり出たのは、いずれ分譲になることだろうと思う。最後に私は大島さんを立たせて柱に縛りつけた。(B) この写真はわからないが、実は彼女の前面には箕田氏の心づかいでタオルの褌がつけられている。

前面から後方からと箕田氏は大型カメラで大童だったが、相当疲れたらしく、やがて腰を降ろしてカメラを片づけ始めた。大島さんは柱に立ったままである。私はその彼女をそのまま解くのが惜しい気がして私流の縄を加えることにした。口に縄を咬ませてから額、目の上、鼻の下と縄をかけて、腰のタオルを外した。(C) 大島さんは私のなすが俚にまかせている。

「よく頑張ったね」

縄を解きながらそっと囁くと、彼女はにんまりと笑った。縛られるの、初めてという大島さんにとってその日の縄の掛け方は容赦のないものだったし、休憩も申し訳のものだったので辛いに違いなかった。しかし海老縛り

で倒された以外一言も苦痛を訴えず、終始顔に微笑を浮べていた大島さんである。

「顔を縛られていた方が気が楽ですわ。わたしの顔、特徴があるので……」

「縛られて、どんな気持がした？」

「初めてだから、よくわからないですけど、でも、でも少々のことなら辛抱できそうですわ。実はわたし、写真のモデルになるっていうんで変な写真じゃないかと思って、こわこわ来ましたの。縛られるってことは知りませんでしたわ」

大島さんは縄の跡のついた手首をさすりながらケロリとしていた。その言葉を箕田氏が聞いていたかどうか知らない。私は彼女の体内にマゾの血が流れているらしいのを認めないわけにはゆかなかった。再びエレベーターで地下の駐車場へ降りた四人は、そこで解散することにし、箕田氏は一人タウナスを運転して去って行った。私は二人を最初の場所へ送った。

「もう今日で懲りたかな？」

「そんなことはありませんわ」

大島さんはこともなげに答えて紹介者と車から降り、丁寧にお辞儀をした。四時を過ぎていた。これが大島照代さんとの最初の出会

いである。

○

第二回目は、それから間もなくのことである。箕田氏のすすめもあって、前回別れる時に次の日を決めて置いたのであった。待合せ場所は彼女の便利を考えて阪急の新伊丹駅にしてあった。定刻に遅れること約十五分、慌てて車を駅前に乗入ると大島さんと紹介者の二人がベンチに腰を降ろして待っていた。

「あなたも一緒に来られるのですか？」

「ええ、参考までに見せて貰おうと思っていますが」

私は大島さんと一対一でやりたい気持なので、ちょっとがっかりである。別に野心があるわけではないが、箕田氏や辻村氏とならとも角、余りよく知らない同性の立会いは監視されているようで歓迎できない。

「車を向うへ移動して待っていますから二人で相談して下さい。大島さんと二人でやりたいのですから。まあ僕を信用して下さい」

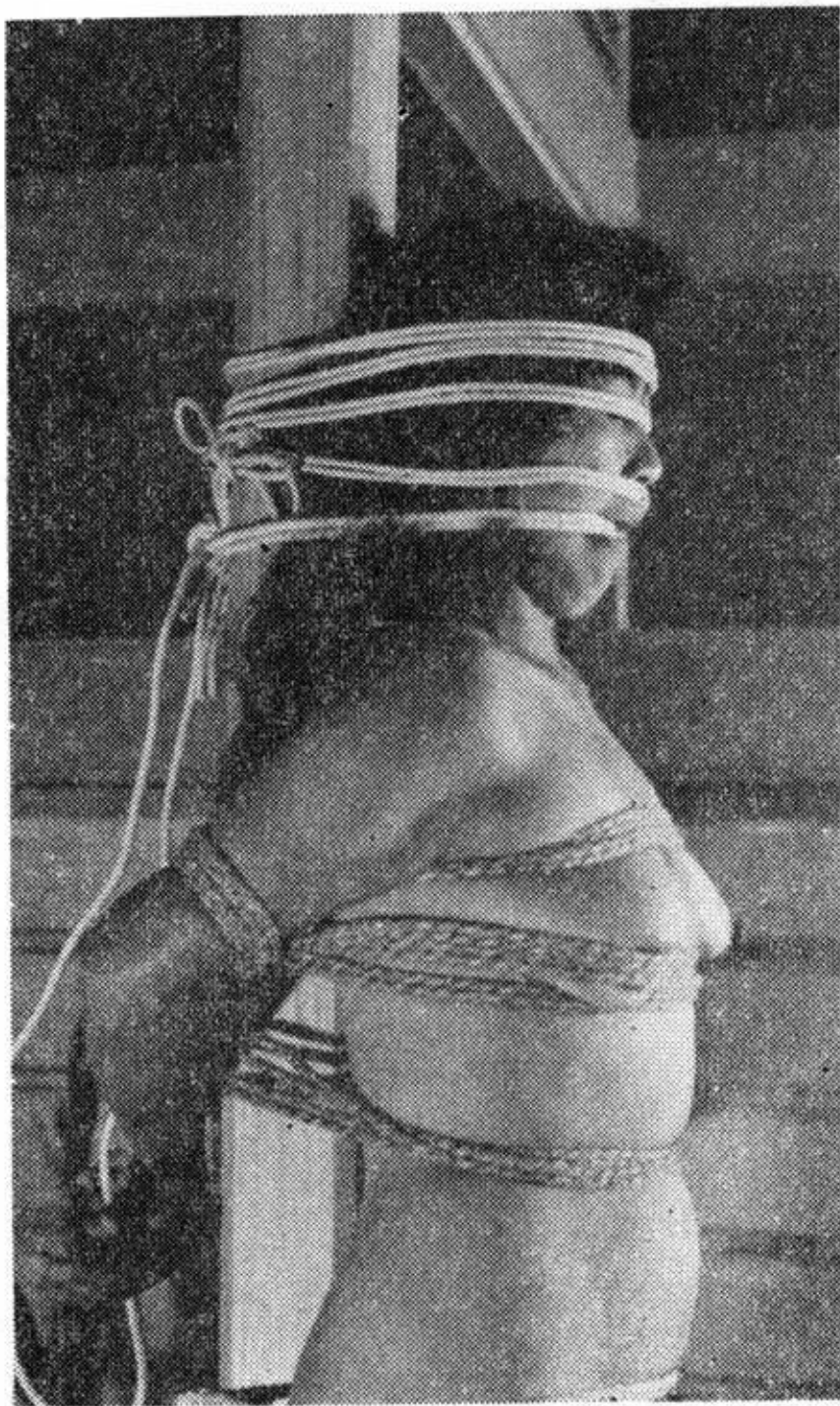
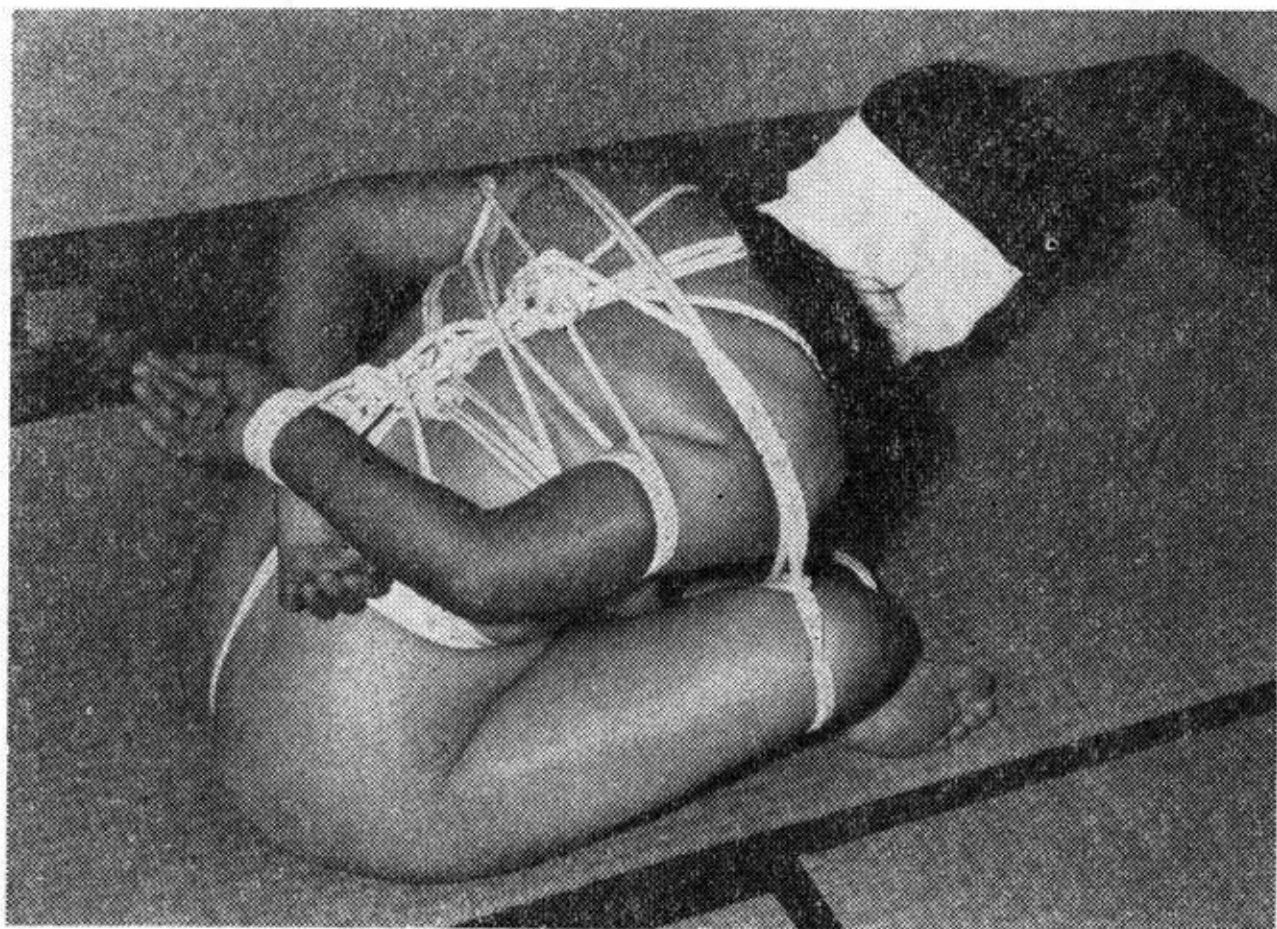


写真 <C>

写真〈D〉



私は車を二人から少し離れた所へ移動させて停めた。紹介者があくまで同行するというのなら中止する腹である。彼と大島さんとの関係は知らないし、今朝、箕田氏に電話をして聞いてみたが、彼も詳しいことは知らないということであった。

五分ばかり二人は話し合っていたが、話がついたのか、大島さんが私の車の方に歩いてきた。

「お伴しますわ」

私は内心やれやれと思った。四時にこの場所で紹介者が待っているからというのを承知して大島さんを車に乗せた。

その日は初回と異なり、私に心のゆとりがあったので、念入りに縛ることができた。詳しい経過は煩雑なので写真を見て貰おう。(D)は縦縄の海老縛り、顔は鼻だけを残して縋帯でぐるぐる巻きにした。

その他、四、五態の縛り方をしたが、それらはまた御覧いただく機会もあるかと思う。大島さんも二回目というだけに最初のようなぎこち

さはなく、縛られながらよく喋った。以前に油絵をやったことがあるということから、話題は絵画のことになる。京都に来ているミロのことや、ダリの絵の中に見られる変態のことなど。私は縛りながら、時々きつくはないかと尋ねるのだが、相変らず彼女は苦痛を訴えない。ただ顔だけは撮らないでと繰返すのは前と同じである。

「わたし、絵でモデルを使ったことがありませんので、縛られていても、自分の体がどんな恰好になっているかわかりますわ。どこを撮られているかもね」

その言葉は私をどきっとさせた。何枚か撮っている中には公開をはばかるものもないことはなかったからである。

話しを進めよう。その日の圧巻はなんといっても逆さ吊りである。

「吊ってもいい？」

「ちょっと怖いようね。痛くないかしら」

「大丈夫だよ。いいだろう？」

「辛抱できるかどうか、わからないけど」

ためらってはいけない。いやと云わないのだから、気の変らない内にやってしまうことだ。次の室との間の襖を外して低いテーブルを、その跡に移動する。少し低過ぎるのだが

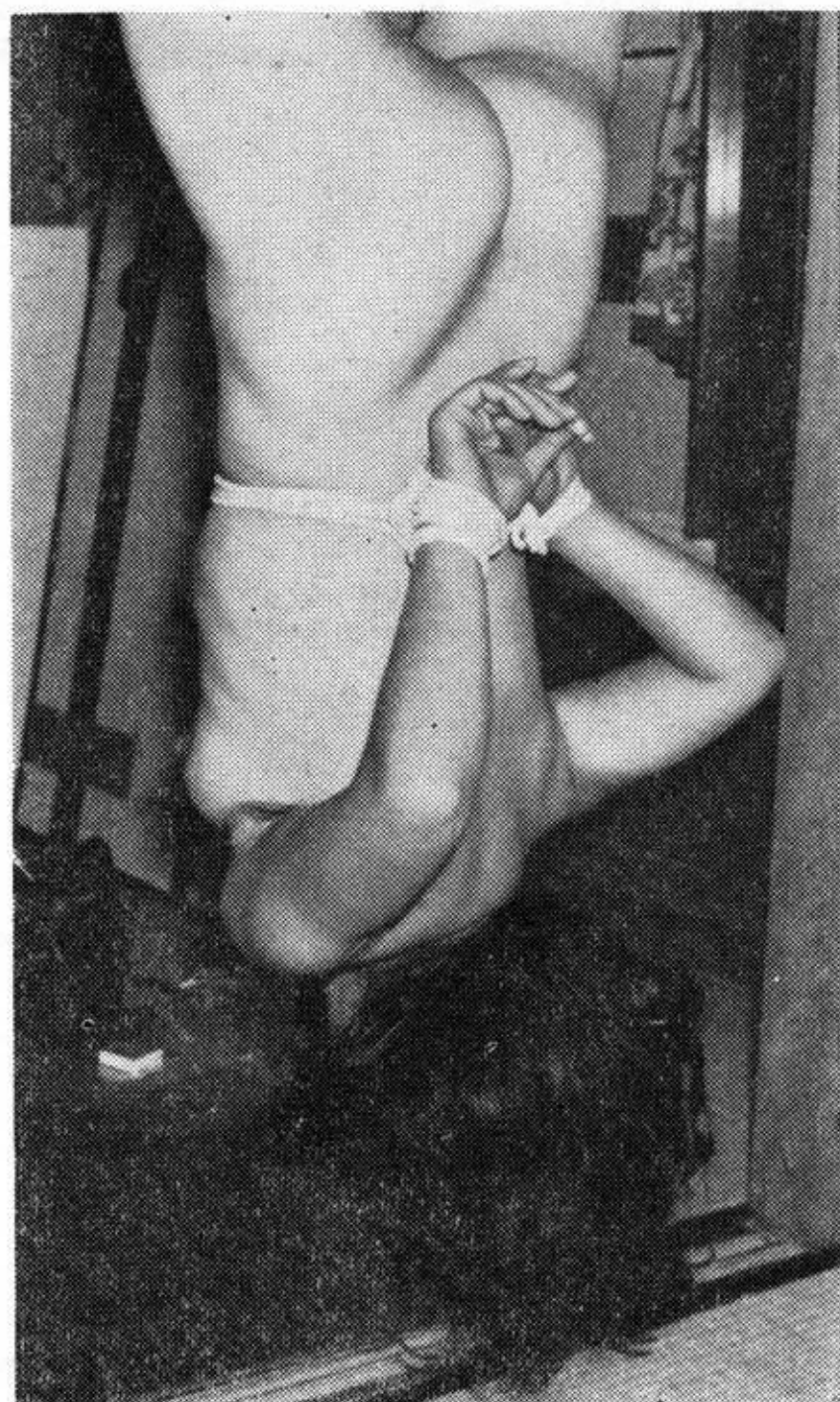
他に代るべきものがないので仕方ない。

後手に手首を縛って、その縄尻を胴に強く巻きつけてから、座布団を載せたテーブルに坐らせる。呼吸と発言を妨げてはいけけないので猿轡は止めて目かくしだけにする。

足首を揃えてタオルで巻きその上から縄をかける。そしてテーブルの上に上って彼女の両足を抱えて引き上げる。腰の浮き上がったところで足の縄を素早く棧に掛けて結ぶ。しかしまだそのままでは高さが不足である。

両膝のあたりを左腕で抱え上げながら棧の縄を引張る。肩と後頭部だけで逆立ちになったところで縄を固定して、苦しくないか聞いてみる。大丈夫だけど足が少し痛いと言う。その姿を四、五枚撮した私は強引に頭を持ち上げてテーブルを外してしまう。彼女の体は完全に空間にぶら下った。

急いでカメラを手にした私が閃光を走らそうとした時、レバーの重くなるのを指に感じた。シマッタノ。フィルム切れである。カメラを覗くとメーターは、三十七を指しているではないか。私は絶好期を逃してしまった。フィルムを詰め替えている暇はない。大島さんが逆吊りのまま苦しいわと云い出したからである。私は大慌てでテーブルを彼女の背中



に差し入れた。降ろした時、私の顔は汗びっしょりでぐったりだった。

「今、吊ったの？」

「ああ完全に吊ったけど、フィルムが切れていたので写せなかった。残念！」

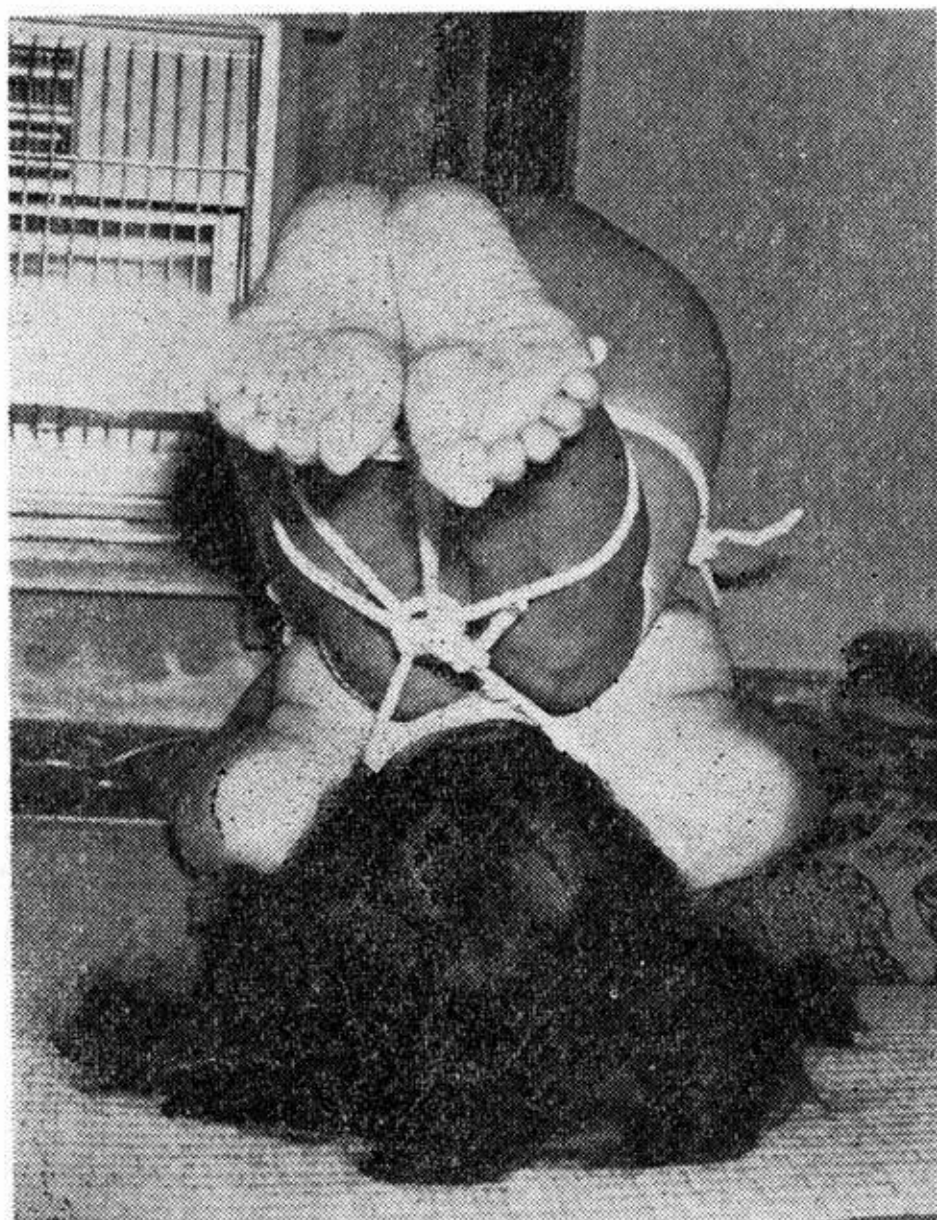
「頭がふらふらして、吊られたのかどうか、良くわからなかったわ。それに目かくしがあるでしょう」

大島さんは厭な顔もせず足首をさすっている。そしてちょっと横になるよと云って倒れ

ているのを見て微笑した。責められているのが、私なのか彼女なのかわからないではないか。実際一人で一人の人間を逆吊りにすることは、容易ではないことである。力には自信のある私ではあるが、一回の失敗で精根を使い果たしたような気持だった。しかし、しばらく休憩すると元氣は回復した。このまま終る手はない。

「もう一度やってもいいかい？」

「また吊るの？」



「いや？」

「構わないけど、早くしてね」

ああなんという理解か——。今度は足を左右に開いた吊りを先程と同じやり方で実現した。成功だった。フィルムは最も残酷なその姿態を刻み込んだ。その全身をお見せできないのが残念である。（現今の情勢では誌上掲

写真 $\wedge F \vee$

載の不可能なことが明らかであるから）

前に述べた昭和四十二年一月号「奇クサロン」に載った写真がその時のものです。折角なので、その背面のクローズアップを（E）として提供することにしました。

少々の縛り方では参らない大島さんも、二回の逆吊りには、さすが参ったらしく、降ろしてから、なんだかふらふらするようだと洩して頭を振っていた。しかし、怒っている

ような気配がないので、ほっとする反面、無性にいらしい、気持がした。

私は縄の跡を軽く撫でてから冷くなったその手を両手で握った。どんな理由からモデルをかって出たのか知らないが、それにしても、その忍耐力は驚くべきものではないか。マゾの血がどれ程の

濃度で彼女の体内を流れているのか知らないが、縛りの極限を耐え抜いた力は常人離れのしたものであることは確かだ。時計はもう四時を廻りかけていた。大急ぎで帰り仕度をす

る。

○

これが第二回目の撮影行である。前回に逆吊りをやったことでもあり、寒い日が続いた関係もあって三度目の今日、果して彼女が来るかどうか半信半疑であった。しかも、私からの一方的な連絡で彼女の都合を聞いてはいないのである。

車を尼崎から右折させて陸橋を渡り伊丹へ向ってひた走りに走らせる。駅前に着いた時は定刻より二十分程早かった。人影はない。車を停めた私は駅の売店で煙草を買い、ついでにチョコレートも買う。大島さんが来れば一緒に食べるつもりでカメラバッグの中へほうり込む。時計が十二時半を少し過ぎる。この前でこりた彼女は、もう来ないのかもしれない——

私が半ば諦めて車にキーを差し込んだ時、駅とは反対の方角から大島さんが一人で足早に歩いて来るのが見えた。彼女は私の車に気がつかないのか通り過ぎて行く。私が声をか

けると、彼女はそれまでの厳しい顔つきをほころばせて微笑する。

「この間は、ごめんね」

「あのう、実は今日は余りゆっくりできないんです。子供が熱を出しているの——」

「へえー、それは大変ですね。じゃあ今日は止しましょう」

「いいんです。やって下さって。無理を言いますけど、少し早く終って欲しいんです」

彼女は車の後部座席に坐る。私はなんだか氣勢をそがれたような気持で余り気乗りがしない。

私はちょっと、みじめな気持になる。

「隣りの人にも頼んできましたから、いいんです」

「どんなに悪いの？」

「扁桃腺が腫れているらしくて、昨日から四十度程熱を出しているんですけど、お医者さんに見て貰ったから、もう大丈夫だと思えますわ」

私の姿を見るまでの彼女の険しい顔つきの理由が、そこにあったのだ。私は彼女が可哀想になった。好きでモデルになっているのではないことが、はっきりしたように思えたからだった。私は自分の甘い考え方を恥じた。人

間生活というものは決して単純なものではないのだ。私はモデル料だけ払って帰って貰おうかと考えたが、恐らくそんな施しを彼女は受けないだろうし、なまじな感傷は反って彼女を傷つけるのではないかと考えた。

「この間、吊られたでしょう。帰ってからもふらふらして、気分が悪かったですわ。やはり、こたえますわね」

大島さんは、もう子供のことを言おうとしない。もうこのまま別れることはできない。

一室に落ちついた私達は、女中が引下ると直ぐに準備にかかる。大島さんは浴室へ、私はカメラを。何も云わないのに当然のことのように、緊縛に入れるのは三回目の有難さである。私は場所を決めるため隣の部屋を開けてみる。ああ悪い。その部屋の三面に肥った私の体が写っているのだ。

鏡張りの寝室は通常の目的のために使用するアベックなら刺戟があつていいのかもしれないが、私達には全く無用であるばかりか、ストロボを使うのには全く不向きである。それに鏡というものは油断がならないことは先刻御承知のとおりである。マジックミラーのことである。

私は寝室を使うのを諦め、枕許に置かれて

あるラジオのスイッチをひねった。ともすれば心に引かかる大島さんの子供のことを忘れていたし、彼女にも一時忘れていて貰いたいためのバックミュージックにするためである。襖を元通りに閉めて煙草を吸っていると大島さんが湯から上ってきた。

「髪は解きましようか？」

私は肯ずく。長い髪はうまく束ねてあるのだが、そのままでは、どうも世帯じみているように思えるからである。彼女はぱっと髪を垂らした。

「今日は吊るのを止しとこうね」

心にもないことを私は云う。吊りたい気持はあるのだが、今日は彼女の立場を考えると可哀想に思えたからだった。

「そうして貰えると助かりますわ。また元気な時にね」

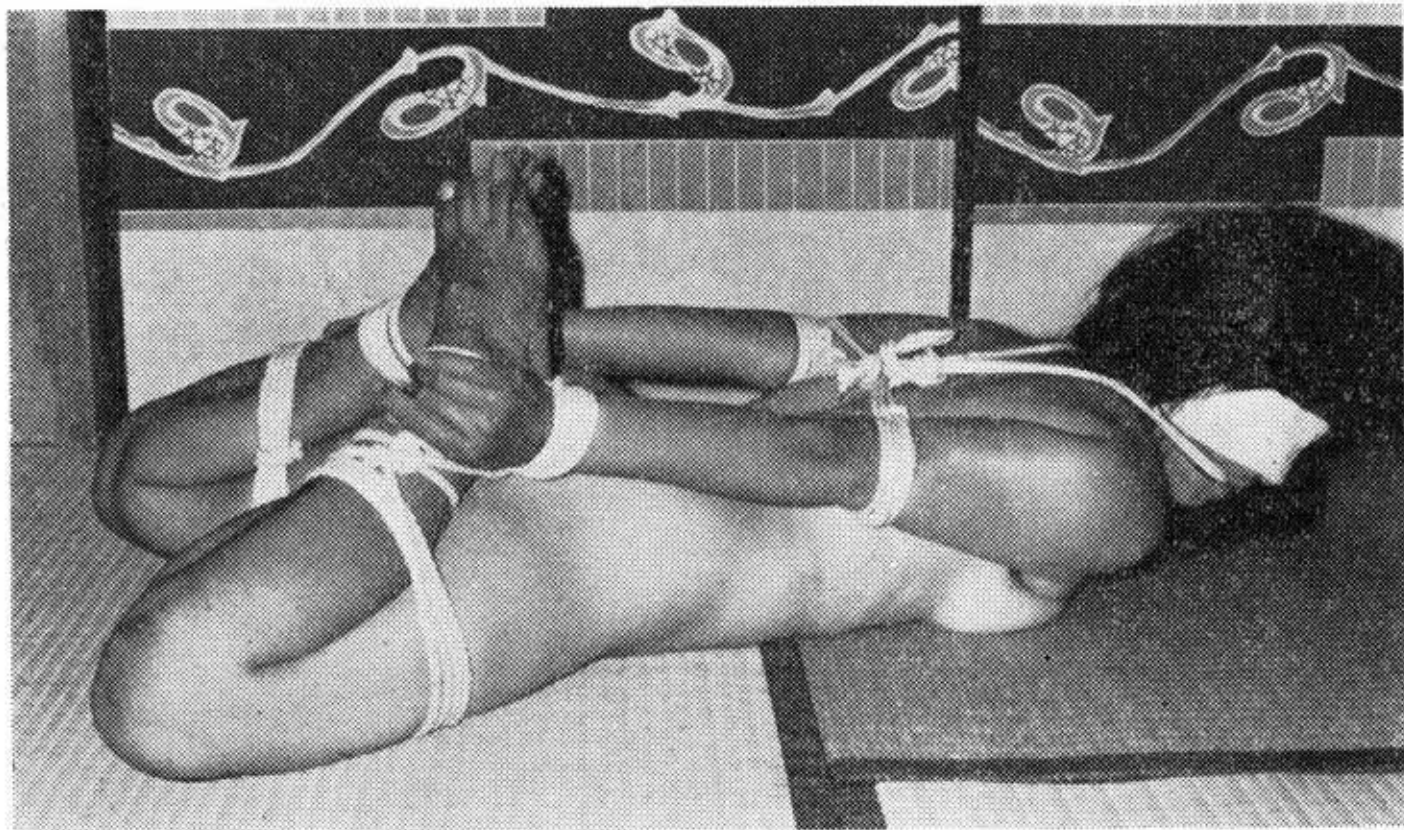
彼女は鏡に向って口紅を掃こうとした。

「化粧はいいよ。顔は写さないから」

浴衣を羽織っている大島さんを後から見ている内に、私は何故かサジスチックな気分になっていた。何もかも剥ぎ取った赤裸々な彼女を苦悶の中に引ずり込んでしまいたい気持だった。

平静を装っている彼女だが、その心の中に

写 真 〈G〉



は残してきた子供のことが一ぱい渦巻いているのに違いないのだ。彼女の心の中から母親を奪い去るためには、その女体に強烈な刺戟を与えて心の余裕を奪い去るしかない。一時的な母の意識の強奪は許されるだろう。

「隣に誰か、お客がありますの？」

ラジオの音で錯覚したらしかった。私が説明するとはっとした表情で尋ねた。

「裏から見える鏡って、本当にありますの？」

「さあ始めようか」

大島さんは当然ことのように裸になり私の前に立つ。後手に縛った縄尻で禪をさせてから腹部に巻きつける。そうして床の間の柱の前に引張って行き、頭を柱の下に寄せて仰向けに寝かせ、浴衣の帯で目かくしをする。片足首に縄を巻きつけ、縄尻を残して置いてから、両足を抱えて頭の上の柱へ寄せようすると大島さんは少し抵抗した。

「いや？」

「うふふ、でも、あそこは、撮らないでね」

私は両足首で柱を挟むようにさせて柱

と共に縄をぐるぐる巻きつけ、更に二つ折れになった腰と腿を一つに縛る。一本の白い縄が彼女の肌に食い込んで少し露骨さを救っている。

「女の人是一本の縄でかくせるからね」

大島さんは折れ曲った体の下で、うふふと笑った。

左右から二、三枚撮って一旦後手を解き体の向きを変える。後手で柱を挟ませ腰を柱に添って持ち上げた二つ折れである。畳に着いているのは肩と頭だけで、揃えて縛った両膝頭が口のあたりに接触している。縦縄が外しであるので開放的過ぎるようだ。茶菓子に敷いてあった小さな紙を二つに折って最上部になっている双丘の間に置く。

この姿勢でなら人間燭台も可能なのだが、今は蠟燭の持ち合せもないし、果して彼女がそこまで承知するかどうか疑問である。腿で胸を圧迫しているので苦しいらしく、顔が白い目かくしの下で紅潮していた。この二つの縛りで彼女の羞恥心はむしり取られてしまったと思う。この時の写真は公開の限りでないものが多く残念だが、足の方から撮ったものが(F)である。汚れていない両足裏が写っているの、或いはそれをかわれる方もあ

ろうかと思う。

それから、二、三の縛りの後で実施したのが、(G)である。両手首と両足首を直接縛り合わせたので、脚は開かざるを得なくなっている。両腕を絞った縄尻を口に咬ました。

寝室が使えないため場所を変えることができない。もう時計は四時近くなっている。私がしきりに時計を見るのに気づいた大島さんが、手首をさすりながら云った。

「もう少し位なら構いませんわ」

私は最後に、強烈な縛りを実行したいのだが、吊りをやらないと約束した手前、ちょっとした方法が考えつかない。やぐら炬燵があったので、それに縛りつけることにする。掛け布団を取り、その上に座布団を載せる。仰向けに四肢を拡げた恰好で胸と腹部には力いっぱい縄を締めつけた。

臀部は台の外にしたので、縛り終ると、彼女の体は弓なりに、そり反っていい姿になった。目かくしと猿轡は、私の好みから外せない。緊縛感といい表情といい、傑作ではないかと自惚れているが御覧いただけなのが残念である。

大島さんは後で、この縛り方が一番苦しかったと告白した。

炬燵の上から解いた私は、もう一度後手に縛った。その裸身は冷たかった。急いだため殆んど休憩なしで縛り続けていたのだが、暖房のない十一月の室内は寒かったのだ。

私の方は次々と体を動かしているため、寒さを感じなかったらしい。苦痛と寒さに耐え忍んでいる彼女がいじらしかった。

「わたし、キスは家でもしませんのよ」

突然の言葉に私は面くらった。

「少し胸を患ったことがありますので、うつす悪いから。解放性じゃないんですけど。でも、あの方は、この病氣の人は強いって云いますわね」

私はそっと、その冷えた肌を撫でてみた。その時、彼女が急に、はっとして小さな声で云った。

「もう帰して！」

彼女の母性が目を覚ましたのに違いなかった。そのことは反面、今まで忘れていたことを意味している。モデルから女を意識し始めた途端、それと表裏一体となった母親が彼女を現実に戻したのだ。私は何か気の毒になって慌てて縄を解いた。

「ごめんなさいね。男の方って途中で止められると気分が悪いんでしょう？」

それは私の中の心を見破った言葉だった。

しかし、私は実のところ最近男女関係そのものに興味を失っているの、そうこたえるほどのことはない。妻との交渉も一カ月に数える程もないのだ。私がそのことを話すと、彼女は服を着ながら笑って云った。

「そんなこと嘘でしょう」

カメラをバッグに入れようとしたら、先刻駅の売店で買ったチョココレートの包みが出て来た。一緒に食べようと思って買ったのを忘れていたのだった。お土産にしては貧弱だが彼女に渡す。

「子供にお土産を買ってきてあげると云ってありますので、助かりますわ。でも貰っていいかしら」

昭和一桁の人間って、どうしてこんなに気が弱いんだろう。私だってそうなのだが。

彼女が遠慮するのを押し切って彼女の家に最も近い駅まで送ることにする。もう時計は四時半になるうとしているから私の責任だ。

夕暮れの近づいた家で、母親を待っている幼児のことを考えると、私は人ごとながら胸の詰る思いがした。もっと早く解放してあげたら良かったと、強い後悔が私を苦しめた。市場に寄って買物をして帰りますわと云って

(この項おわり)

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 各号は〇〇/円

切腹研究夜話

切腹を見届けた女

中 康 弘 通

一

当代の才人三島由紀夫氏は、短篇映画「憂国」を自作自演して、国際映画祭で好評を得ている。原作は、二・二六事件に材をとり、皇軍相撃つの悲劇の渦中、新婚の青年将校が愛国の割腹を遂げ、夫人また自刃して殉ずるという物語。筆者の常づね説述する悲愴美の世界を克明に描いたもので、殊に映画では、愛する夫の凄烈な割腹を冷静に見守る夫人の表情が、劇的であったと云われる。

こうして、遠くは戦国の武将から、近代では神風連の志士、また乃木將軍、あるいは終

戦当時の青年将校など、夫君の切腹を見届けみずからも自決した烈女たちの挿話は少くない。しかし今日となつては、云わば目撃者として「証言」できる女性は稀であろう。

切腹は日本古来の、また日本人特有の自殺形式として、文芸、演劇などに描かれているけれども、実際は、血肉とび散る戦場ならともかく、普通の状態では凄烈を極わめ、とても女性の容易に正視し得る如きものではないからである。

それを敢えて見届けたい、見送ってあげたい、という哀惜の念を起さしめるものは、一に、切腹という手段が儀式的形態をとり、切

腹人の心情の高さが、殉義という意識下に深い感動を以て、その女性に迫るからではなからうか。

かつて故長田幹彦が「面白倶楽部」に連載し戦後の読書界に波瀾をまき起した、大連作の「天皇」において、昭和維新を目ざす純真な青年将校や兵士の一群を描いた中に、一人の高貴の血統を引くと云われる、美女が登場する。

たまたま彼女が懇意な青年将校を訪ねると一人の兵士が端然と、しかし悄然と面談している。

将校は来合わせた彼女に、その兵士が重臣

襲撃に失敗したことを告げる。

「で、是から腹を切るといいますよ」

兵士は後事を慮んばかりで、満洲事変で戦死した兄の墓前で切腹し、累を他に及ばせまいとするのである。思わず彼女は、

「どうにもならないの、助けられないの？」

と訊ねる。兵士の悲壮な覚悟の固さを聞く、思わず息を弾ませて、

「私、見届けたいわ、見送ってあげたいわ」と彼女は眼をうるませる。

やがて別れの盃を酌み、彼女は将校と共にその兵士の最期の場に随いて行く。

無人の墓地に端座した兵士は、見ごとに腹真一文字にかき切り、頸動脈を断って果てて行く。彼の絶命をたしかめ、二人が月光の中に肅然と佇つところは、凄絶ながらも哀切、壮士還らずの古詩を思い出さしめるシーンである。「重いものを引っばるように」という切腹の描写が今も思い出される。

是がどの程度のフィクションか、長田先生にお質ねする折もなく、先生は故人となられた。泉鏡花を年少にして愛読された先生は、同じく鏡花宗の信者である筆者になら、お会い下されたかも知れないと、当時上京もかねわぬ病床にあった筆者に、ずいぶん残念な思

いをさせたものであった。若し本誌の読者ので、このご婦人をご存知の方があれば、是非教えて頂きたいものと思う。

二

ところで、何年かして今ひとり、憂国の志士の切腹を見届けた女性のあることを、筆者は「歴史読本」の前身「特集・人物往来」で知った。東京神田の席貸松本亭の女将で、三代の女傑と云われる松本フミさんである。

のち松本さんは「人物往来」にも自伝を発表しておられるが、どうして女性の身で切腹を見届けねばならなかったか。それについては、一場の暗殺事件を記さねばならない。

大正二年九月五日、外務省政務局長阿部守太郎氏は、夕刻伊集院彦吉駐支公使の帰朝を新橋駅に出迎えたのち、馬車で帰宅する松井外務次官と赤坂靈南坂下で別れた。坂を上ると自宅の門である。ちょうど八時ごろ暗闇の門内から二人の青年が現われた。袴を着け無帽、一人は麦わら帽子を冠っていた。

あつと局長が思う間もなく、一人が羽がいじめに彼を抱き、無帽の丈け低い青年がとびかかった。青年の手に白刃が光り、その光りが局長のシャツを透して腹に没した。

犯人を誰と知る由もなく、体を折って局長は、「アイタタ……」呻きつつも立ち去る刺客を追おうとしたが、痛手に耐えかねて地上に倒れた。

医師の手当ても空しく、局長は十五時間ほどで、翌六日午前十一時、四十二才を一期として死去した。現場の遺留品は、東京の市内地図一枚、神田小川町の良古堂で売られたものであった。その良古堂の近くには、政客の出入りする松本亭がある。阿部局長暗殺の理由は中国問題と推定され、警視庁は三日目に松本亭を監視しはじめた。

是より先、明治四十四年革命の戦火に包まれた中国大陆では、なお清朝の宣統皇帝が袁世凱を將軍に任じ、革命軍の北上を迎え討たせた。革命軍の孫文や黃興らは初め日本に遊び漢族の反満(清)運動と見えたが、彼らは本部を広東に、支部を欧米におき、社会主義的傾向が見えた。

事実、三民主義の下、孫文の国民党は南京に新政府を樹立し、臨時大總統として、憲法に等しい臨時約法を制定した。そこで日本政府は軍閥袁世凱を支援し、袁自身も革命軍と妥協して、宣統皇帝を退位せしめ、孫文に代って臨時大總統の位についた。

しかし袁は、日本の意向が共和政体反対にあることを知ると、革命派を抑え帝位をうかがう野心を持った。

中華民国国会で進歩党を組織、国民党の切崩しを袁は策し、日本を含む五カ国銀行団から借款を得た。従って、大正二年七月第二革命となり、軍資豊富で軍備充実した袁軍は、たちまち国民党軍を討って南京を占領した。

革命軍首脳は海外に亡命、袁世凱大總統が実現したのである。

折しも八月十一日、わが派遣将校の一人が漢口で、勝に乗じた袁軍の兵士に凌辱され、南京でも九月一日、日本人居留民が掠奪虐殺に遭ったので、日本国民の憤激は甚だしいものがあつた。殺害された者は九名に上る。

しかし外務省としては、国旗毀損の問題にしても、公館の国旗でなく個人が携行していたにすぎないから、公式に国際問題として国旗侮辱と見るか否か研究の余地がある、というような慎重な態度で臨んだ。そこで九月七日、日比谷公園で対支問題国民大会が開かれることになった。

当時、福岡県鞍手郡勝野村(現小竹町勝野)出身の岡田満(十八才)は、七月ごろから同郷企救郡出身の陸軍中央幼年学校中退宮本千

代吉(二十一才)と知り、互いに憂国の志を述べ合っていたが、南京事件で悲憤、その極に達し、阿部政務局長に面会を求めた。しかし当局の態度を質問され局長は、みずから日露講和時の小村寿太郎を以て自認し、愚かな世論よりも外務省の方針、すなわち支那通の自分の方針を以て貫く旨を回答した。

少年とも云うべき岡田に対し、いささか態度ごうまんであつたかも知れない。ともあれこの日から岡田は、阿部局長を除くべしの決心を固めたと云える。

三

さて岡田らは阿部局長を刺した夜、深更寄宿先の松本亭に戻った。フミさんは、カスリの浴衣に血を浴びた彼らに事情を聞き、やむなく奥まった天井うらに隠まうことにした。

一方、フミさんは電話で頭山満翁や内田良平氏に相談した。中国へ亡命したいという彼らの希望をかなえてやりたかった。

しかし松本亭は警察の監視下にある。その目をかすめて、宮本と岩田愛之助氏(二十一才)は西下の途をとった。ところが岡田は母と妹が下谷にいたので、対支連合会の人々からの餞別を母に渡そうとして逃げおくれた。

警視庁の追及はきびしい。もはや一刻の猶予もならなかった。対支連合会を推進する領袖、頭山満、内田らの断はフミさんに伝えられた。即日自決せよということであつた。

日本男児として潔よく切腹させたいが、その場所は、とフミさんは考えた。山岡鉄舟の孫で、フミさんが牛込築土町に世帯を持たせた弁護士角岡知良は、松本亭を事務所とし、岡田も憂国の先輩と仰ぐ人物である。

「角岡さん、岡田さんの切腹に家を貸してあげて！」

悲痛なフミさんの声を、角岡氏もまた断腸の思いで聞いたであろう。行動はともかく、純粋な青年を哀惜する思いはフミさんばかりではなかった。

九月九日夜、角岡邸では知良氏の自室八畳の間に、白布で切腹の場がしつらえられていた。白布の四隅に櫛がおかれ、白布の上に中国大陸の地図を敷いて、岡田は逆さ屏風を背に端座した。

立会う者、内田良平、角岡知良、松本フミら数名、いずれも紋服に威儀を正して居並んだ。岡田は一礼して三宝の短刀を執った。

白紙で巻き残した切先が光る。左手で襦袢を開き、腹を寛ろげた。人人が思わず顔をそ

むけたとき、フミさんは震える手もとを見つめていた。岡田は大きく息を吸い、刃先を左の脇腹にグッと突き立てようとした。フミさんは思わず息を呑んだ。しかし刃は思うように刺さらない。

ああ、誰か介錯せねば……フミさんが焦慮を覚えたとき、岡田の背後から一人の壮士が手を添えた。呻きと共に、鮮血が白布にとび散った。苦痛に顔を歪め、岡田は自分でも必死に力を込めた。白刃はキリキリと右へ、真一文字に彼自身の腹を脛下でかき切った。

臨時増刊号

小説・絵画「花と蛇」特集

絶賛！注文殺到！

売切れぬ中にお早く

目下発売中！ 乞お申込み

定価一部 五〇〇円

(送料三〇円但し当分の間当社負担)

団鬼六作の力作、長篇小説「花と蛇」千数百枚一挙登載、三三〇頁。四馬孝拙く「花と蛇」テーマ画集『十六葉』口絵収録。今すぐ天星社へお申込み下さい。

フミさんはホッとした。立派に腹を切った十八才の少年が……三十三才、女ざかりのフミさんは、傷ましい中にも岡田を賞めてやりたかった。その間も岡田は、左手を前につき右手を頸に運ぼうとした。壮士が再度近づいた。岡田の頸が深く抉れた。

鮮血は、黄いろい大陸地図を染め、興安嶺以東は赤く塗られたようであった。

「アジャ解放の犠牲だ」

内田良平氏の声が耳朶を搏ったとき、フミさんは瞑目合掌した。彰義隊士として上野の山に敗れた旧幕臣の長女に生れ、貸席に三代の志士を集めて反権義侠の生涯を生き抜いた女傑にして、はじめて見届け得た少年刺客の割腹であったと云えよう。

四

なお岡田満の遺書に曰く

「斬奸後、潔く其場に於て処決せんと欲せしも、効果の如何を見届くる迄、しばし残軀を生き長らへたり」云々と書き出し、自首を欲しても全国にわたる警戒網に、処決するはかなしと決心したことを記している。犯行も、「実行者は不肖一人にして、左脇より之を擁き、右手に握れる匕首を以て、阿部局長の背

附近を突き刺せり」と訊き、「一本の匕首、上服、袴等は、川に捨てたり。其後、夜は歩き、昼は寝ず。田舎の神社寺等にひそみ、今より出京せんとす」と、他に累を及ぼさぬ配慮を示している。

末尾には、

「当家には誠に申訳なきも、遠く先生（角岡氏を指す）の俠骨をしたひ来りたるもの故、お許し下され度く」、

更に、

「私人としての阿部氏には、何等憤怨あるなし。いはんや其遺族をや。茲に金二円香花料として、私人としての阿部氏の尊霊に奉る。

大正二年九月九日 岡田満

とあり、この九日の日付けは恐らく末尾の数行のみで、他は先に記されていたものと思われる。

岡田満の墓は東京下谷区（現台東区）谷中初音町の全生庵に建てられた。法名「勇猛院義満居士」、また宮本千代吉も、大阪から嘉義丸で大連に赴く途中、宇品で捕われた。のち獄死して墓を岡田満と並べた。

（本稿は、高田義一郎、川合貞吉、小林昭彦の諸氏の論考に拠った）

書下し小説

宴うたげの館やかた

山やま波なみ圭けい介すけ



〈序〉

古代の陸奥は「胆沢いさわの賊」とか「蝦夷えぞ」あるいは「俘囚ふしゅう」とかいわれて、野蛮人が住む未開の地とされていた。

そこに土着する者共は、中央政府の意に仲々従わなかったが、延暦二十一年（西暦八〇二年）に坂上田村麻呂が平泉より北方約四里の地に胆沢城いさわじょうを築き、奥羽征伐の軍を進めた為、反乱は一時跡絶えた。

然し、やがて中央政府のゆるみと同時に、豪族安倍一族あべの勢力が強大となり、胆沢いさわ、和

賀えさし、江刺ひえぬき、稗貫しわ、紫波、岩手の奥六郡といわれる衣川ころもがわ以北の富を支配し、朝廷の命に服さなくなった。ことに陸奥の俘囚の長、安倍頼時は衣川に居館を造り、柵を設けて隠然たる一王国を築いた。北上川の対岸、東稲山たはしねの麓五里にわたって桜の並木を植え、これを館の内から一望のうちに眺めて、その居館を「桜の御所」と称し、近く流れる川を桜川と呼ばせる程の勢威をふるった。

そこで朝廷では、陸奥守源頼義を鎮守府將軍に任じ、安倍頼時の征討を命じた。いわゆる歴史にいう「前九年の役えき」である。

この物語は、官軍たる源頼義の部下の一人で、安倍軍の捕虜ほりよとなった野々田四郎経宗ののだしろうつねむねという武士の数奇な経験の記録である。

〈一〉

永承六年（西暦一〇五一年）の雪におおわれた山脈やまなみに、ぼんやり視線を投げていると、見張りの安倍の軍兵ぐんびようが出入口から顔を覗かせて、俺を呼んだ。

「野々田四郎経宗、阿久里あぐり様の部屋まで直ぐ来い！」と云う。

何時かは呼びつけられるであろうと予想はしていたものの、いよいよとなると、軀中の筋肉が一度に硬張った。仲間達の眼が、何ともいえない憐れみの色をたたえて、俺に注がれている。だが、ためらっている訳には行かない。もう一度雪の山肌に眼をやってから、俺は出入口の方へゆっくりと歩を運んだ。

槍にせきたてられながら、冷たい風が吹きつける中庭を横切って、本館の入口の石段を俺は上って行った。阿久里の部屋は二階にある。がっしりとした山小屋風の、なかなか趣きのある建物なのだが、俺にはどうしても、この世の地獄としか思えない。

阿久里の部屋まで来ると、安倍の兵はやけにしかつめらしい口調で云った。

「阿久里様、野々田四郎経宗を連れて参りまして御座居ます」

「野々田、おはいり……」

阿久里の低い唸れ声^{かす}が直ぐに答えた。

——さあ、どんな目に会わされるのであるうか？

二月だというのに、掌がぐっしり濡れているのが、見ないでもよく判った。安倍兵が出入口を開け、俺の背中をぐいと押す。俺の軀が室内によろけ込むと同時に、頑丈な扉は

外に残った安倍兵の手で閉ざされた。どっちみち、俺にはどうする事も出来ないのだ。

俺は視線を上げた。阿久里は、窓際の寝台に、純白の着物に包んだ軀をだらしなく横たえている。この建物の部屋は、全て土足で歩くようになっており、坐るのは椅子、寝るのは寝台なのだ。

阿久里という女は、どんな場合にも白か黒の着物以外、決して身にはつけない。

「なんだって、そんな処に突っ立っているのよ？」

阿久里が云った。

「あたしに近付くのが、恐ろしいとでもいうの？」

「御用事は何で御座居ましょう、阿久里様」

俺だって、出来得る事ならばこんな女は呼び捨てにしたい。だが、ここへ放り込まれた当初、呼び捨てにした為に厭という程の足蹴にされた激痛は、今でも骨身に沁みている。卑屈なようではあるが、これも仕方がないのだ。とにかく俺は、哀れな捕虜なのだから。

阿久里は、にやりと白い歯を見せた。

「えらい事。さまを忘れなかったわね。ふふふ、とにかく、もう少し、こちらへいらっしやい」

彼女の言葉は絶対命令なのだ。逆らえば、飛んでもない目をみるに決っている。『いいえ』という言葉すら、彼女は俺達捕虜には許さない。二歩三歩、俺は阿久里に近付いた。

豊かな黒髪を、例によって腰のあたりまで波打たせ、ぴったりと軀に密着した着物が、軀の線をくっきりと見せている。美事な曲線である。足首の締め具合が小気味よい。あの足が、何度この俺を蹴飛ばしたことだろう。

「怖^{こわ}がっているのね」

黒い瞳が、俺をじっと見詰めている。優しい口調だが、その奥に隠されているものを俺は知っていた。

阿久里は机の上の分厚な書物を指して、

「野々田、あんたのし^しお^しらしい態度に免じ、今日はやさしい仕事をさせてあげるわ。さ、その本を読むのよ」

「……」

黙って書物を取上げたものの、相手の心中を計りかねて、俺は暫くためらった。

「あんたは字が読めるといったわね？ どのくらい読めるのか、調べてあげるわ。さあ、読みなさい」

題名はひどく難解であったが、要するに古代の拷問や処刑を、猛烈に好色な筆致で描い

たものであった。いかにも阿久里の愛読しそうな代物だ。時折、眼をあげて相手の様子をつかがいながら、俺はゆっくりと、凄まじい文章を読んで行った。

阿久里の眼が、喰い入るように俺を見ていた。それに、先程まではすんなりと伸していた脚を、何時の間にか折り曲げて、白い太股が覗いている。

——そうか、解^{わか}った！ 長い間、女気なしに暮して来た捕虜を、少し困らせてやれという算段に相違ない。

出来得るかぎり機械的に読もう、と俺は努めた。が、無気味な拷問台に白い裸身をくねらせている若い裸女の姿が、ともすると俺の心にまざまざと浮きあがる。

と、阿久里が半身を起した。黒い瞳が光っている。帯を解く音がした。着物が肩から腰にすべり落ちると、白い、輝くばかりに美しい女体が現れた。彼女が二三度足で宙を蹴ると、白い着物は軽い音をたてて床に落ちた。

阿久里は全裸だ！

「こちらを見てもいいけれど、読み間違えると怒るわよ」

阿久里は声を出して笑った。笑いながら、彼女は裸身をくねらせる。くねらせながら、

額に冷汗を浮かべている俺を、光る瞳でじっと見詰めていた。

一節読むごとに、俺は舌で唇をしめした。

寝台へ駆け寄りいたいと思い、この部屋から直ぐに逃げ出したい気持ちとが頭の中で渦巻いている。だが、そのどちらも現在の俺には許されないのだ。もしも俺が阿久里の軀に手を触れたら、俺をなぶり殺しにする絶好の口実を与える事になるし、部屋から逃げ出せば、安倍軍兵士の槍が待っているのである。

拷問台にかけられた裸の娘が、不意に阿久里になったり、今度は逆に、着衣をすっかり脱がされた俺が拷問台に縛りつけられて、傍に残虐な笑いを泛^{うか}べて立っているのが阿久里になったり、奇妙な幻想が俺の神経をくたくたにして行った。

△二△

“宴^{うたげ}の館^{やかた}”……俘囚の長、安倍頼時も妙なものを考え出したものだ。

武士の大部分が読み書き出来ない。出来るのは僧侶、公卿が主で、武士は少ない。その中であって、俺は読み書きが出来る関係で、ほんの僅かな期間ではあったが、兵馬司^{つかさ}の仕事をした事があり、この“宴の館”の事も少

しは存知っていた。

若い男が次から次へと戦場へかり出される為、当然国内には男が払底し、生れる子供の数も少なくならざるを得ない。それを打開するというのが表向きの口実だが、同時に、戦場での働きを認められた兵士に、ある期間だけ美しい女を与えて戦意を盛上げようという一石二鳥の効果を狙ったものののだ。

『優秀な子供の生めない女は、安倍女としての価値はない！』

という唄い文句のもとに、農漁民の娘が主としてかき集められ、各地に“宴の館”なるものが作られた。武士の娘は、無論、ちゃんと正式に結婚する為、連れては来ぬ。

「若い娘っこをまっぴらだかにして、ずらりと整列させ、一人々々厳密な身体検査をするのも、ちよいとした面白さじゃ」

と俺がまだ捕虜になる以前に、捕えた安倍の武士から聞いた事がある。

選ばれた女から更に優秀な女を選び出し、風景の素晴らしい千々岩山^{ちぢいわ}に、高級武士専用の“宴の館”が作られていた。その雑役夫として、三十人ばかりの捕虜が連れて来られ、その筆頭が武士の身分である俺、という訳だ。

捕虜になる以前に聞いて知っていた「宴の館」とは、ここはまるで違っていた。俺の知っている限りでは、前線で手柄を立てた兵士が、何日かの休暇を貰ってやって来ると、一人の女が与えられ、その女と兵士とは一定期間、丁度新婚生活のような日々を送るのだ。もし子供が出来ると、女は別の施設へ送られて赤ん坊を生み、その子は戦士の子供として育てられ女は再び「宴の館」に戻って来る。官軍でも、この話を聞いた者達は、冗談半分にうらやましがったものである。

処が、俺達が送り込まれたこの千々岩山ときたら、まるで高級武士の為の慰安所で、おぞましい快樂の場所であった。館長は新堂則高という名の、安倍の武士にしては厭に元氣のない男であったが、実権は全て、阿久里という二十四五歳の女が握っている。こんな女が、どういう訳でここへやって来たのか、また何故に館長以上の権力を持っているのか、捕虜の俺にはまるで見当もつかぬ。が、俺達を見張っている兵士から僅かに聞き出した話では、何でも桜の御所のお偉方の御氣に入りだという事である。

ここへやって来る高級武士達の誰もが、阿久里に一目を置き、彼女の機嫌を取った。勿

論それは、阿久里の美貌も理由の一つには違いない。だがそれ以上に、桜の御所のお偉方の氣に入りという事が、高級武士さえ彼女に頭のあがらぬ原因なのであろう。それともう一つ、この女が武士達に絶対の人氣を持っているのは、宴のたびに彼女が考え出す、凄まじい余興の数々が、並の女色を漁りつくした連中に大受けに受けるからであった。

宴は、十日に三日、時には七八度も開かれた。そのたびに、俺達捕虜は大広間の床をみがき、食器を洗い、料理人の仕事を手伝われる。そして夕方になると、騎馬をつらねて武士達が乗り込んで来るのだ。

宴の主人公は常に阿久里だ。にぎりぎけ濁酒が惜しげもなく出され、戦前でさえ俺なんぞめったに喰った事もないような美事な料理が、後から後から、俺達捕虜の手で運ばれる。だが、客達のお目当ては女だ。客の数より多い、女達が、精一杯に着飾って現れる。安倍女の、俘囚女の名誉という言葉に誘われて、選ばれて来た女達である。

彼女達は、阿久里の指図の許に、名誉などという言葉とはまるで裏腹な行為を次から次へ強いられた。着飾った着物も、全裸になる為のきらびやかな前奏に過ぎない。前奏がき

らびやかなほど、脱ぐのに手間が掛ければ掛かるほど、客達のただれた神経は刺戟され、酔いしれた爆笑の渦が広間をゆるがした。

「今夜の宴によって、立派な勇士の立派な子供が、安倍の為に、俘囚の為に一人でも多く生れるように。安倍頼時様、ばんざい！」

阿久里の音頭で最初の乾杯が終った瞬間から、宴は乱痴気騒ぎと名を変える。女達の着物脱ぎ競走を皮切りに、阿久里の考え出す破廉恥な遊びが繰り広げられ、客達も彼女の機嫌を取る為に、争って余興を考案するのだ。

俺達捕虜を馬にして、裸に近い女達がまたがり、広間を廻る競馬など、余興の中でも最もしばしば行われるものであった。競走に負けると、女達は更に次の余興を強いられるので、必死になって俺達の尻を鞭うち、腹を蹴る。そして最下位の者は、女のしょうすい小水を飲まされ、女は柱に縛られて鞭うたれるのだ。

時には、着物脱ぎ競走に負けた女達が馬をやらされる事もあった。

勿論、このような事はほんの序の口にすぎず、酒が廻るにつれて、阿久里と客達とは、よりいっそうの刺戟を求める。そして、俺達を残酷に扱う事で、阿久里は自分自身も興奮し、客達の女に対する気持をよけい動物的に

駆けつけた。

俺達は、ほんの些細な事によって、宴の最中に様々な刑罰を受けねばならなかった。宴のたびに受刑者が必要とされた。阿久里はその残酷な性質を全て發揮して、俺達に反逆行為なるものを押しつけるのだ。食器の汁をひっくり返した為に、酔った武士や女達の爆笑を浴びながら、床にこぼれた汁をなめさせられた事が、俺にもある。

女達も、この千々岩山に連れて来られた当初こそ、着物を脱ぐにも女らしい恥じらいを見せて、それがまた客達を喜ばせもするのだが、馴れるにつれて恥じらいなど何処へやらとなり、却って阿久里の氣に入られようと、積極的に俺達をいじめるようになるのだ。

俺達にだって、勿論、自尊心はある。恥も知ってはいる。が、頑張ったところで、槍で突き殺されるか、なぶり殺しに会うのが落ちだと判ってみれば、宴での処刑ぐらいは我慢するより仕方がない。やりもしない反逆行為の為に、俺達は床をなめ、女達に殴られ、蹴られ、馬にされ、その他口にも出せないみじめな事を強いられるのだ。

△三△

阿久里の部屋に呼びつけられて、冷汗を流しながら朗読をやらされた日より、十日ばかり前の事だ。

俺達は、そう、同じ捕虜で雑兵の弥兵衛と二人で、広間の隣室の床をみがいていた。かなり広い部屋で、二人用の寝台が三つ置かれてある。宴の後に、客と女達が使用するのだが、普段は女達の居間に使われていた。

阿久里と、ここにいる多数の女の中でも比較的阿久里に氣に入られている女が数人、それぞれ、寝台に腰かけたり、寝そべったりして、四つ這いになって床をみがいている俺達を眺めながら、喋り合っている。阿久里一人が黒い着物を着ているだけで、後の女達の恰好はひどいものであった。寝間着のまま、盛上がった乳房を平氣でのぞかせている者、全裸の上に着物を掛けただけの者、全くひどいものだ。外は冬の風が吹きまくっているのに部屋は薪がどんどん焚かれているので、初夏のように暖かい。

「野々田」

女達の卑わいな言葉に黙って耳を傾けていた阿久里が、ふと俺を呼んだ。手を止めて顔を上げると、阿久里は氣味の悪い微笑を泛べながら、

「ねえ、野々田、あんた、一度でもいいからこの宴の客になってみたいとは思わないこと？ 料理を運んだり、女達の馬になったりするよりも、客になって、選ばれた安倍の花嫁達を自由にしたいとは思わない？」

「はい、思います」

と答えた俺の声は囁れていた。

阿久里の問いに対する答えは、何時も「はい」なのだ。どんな場合でも「いいえ」と答えた途端、ぶん殴られるか蹴飛ばされるか、悪くするともっと酷い事にもなりかねない。それに、一度でも客の側に廻って見たいという氣持も、正直云って俺にはあった。

阿久里は笑い、次いで弥兵衛に同じ質問をした。

「はい、思います。阿久里様」

おずおずと弥兵衛は答えた。が、若い弥兵衛の口調の底には、あんな氣狂いどもの真似は厭だといった。ふてくされた調子が覗いていた。

「ふふん、あんた達は、女に餓えているんだものね」

俺と弥兵衛とを見くらべながら、阿久里はまだ笑っていた。

「いいものを見せてあげようか？」

と女の一人に顔を向けて、

「新入の検査をするわ。医者に命じて、連れて来なさい。直ぐにだよ」

言葉通り、中年の医者が、若い武士に率いられた娘を三人連れて入って来た。医者といふ武士は、俺が馬鹿莫迦しくなるくらい丁寧な挨拶を阿久里にすると、直ぐに三人の娘に着物を脱ぐよう命じた。

二人は直ぐに着物を脱ぎはじめた。数人の女達の視線の中で、流石に頬を染め、動作もぎこちなかったが、既に何度か身体検査を受けて来たとも見え、たいしてためらいもなく帯を解いた。が三番目の娘だけが、露骨に不満の表情を泛べて、じっと立っている。

「医者殿は、裸になれと仰有ったのだぞ。早く致さぬか！」

若い武士は悪戯^{いたずら}そうな眼つきで云った。

「私、身体検査は岩手でもう受けました」

三番目の娘はややきびしい口調で答えた。

「あんた、名前は？」

阿久里が訊く。

俺達は思わず眼をそらして、またのうのと床をみがき始めた。

「床みがきはおやめ！」

阿久里の声に、慌てて中止した。

「名前を訊かれているのが解らぬのか？」

若い武士が云った。

「利根、と申します」

「利根、岩手は岩手、ここはここよ。ここへ来た女は、必ずあたしの前で検査を受けるのよ！ お前の役目を決める為にね」

「解りました。それでは、そこにいる薄汚れた男を部屋から出して下さい」

薄汚れた男、それは俺達の事だ。阿久里は一瞬、声を挙げて笑ったが、その声はすぐに消え、

「あたしに指図するなんて気持を、まずなくする事だわ」

つかつかと利根に近付いたと見ると、猛然な平手打ちが二発三発、利根の両頬に高く鳴った。

「その薄汚れた男達に、お前の身体検査を見せてやるんだよ！」

阿久里は、床にしゃがみこんだままの俺達の方へ振向いた。

「遠慮せずに、もっとそばへ寄ったらどうなの。さ、じっと見るんだよ。眼を外したら承知しないからね。お前達に見せてやろうと思つて、わざわざこの部屋でやるんだから」

命じられた通り、俺は見た。だが若い弥兵

衛は三度眼を外らし、阿久里に三度向う脛を蹴られた。薄汚れた俺達の前に立たされている若い利根の頬を、泪が流れた。泪に濡れた瞳が、蹴飛ばされる弥兵衛を、そのたびに憐れみを込めてじっと見た。俺達と利根とに、女達は次々と冷やかしの言葉を浴びせかけては、笑い転げた。

弥兵衛と利根との間に、ある感情の通じ合った事は俺にも解った。が然し、それが僅かな時間に、絶望的な恋愛にまで発展しようとは思わなかった。気がついていけば、何とか注意のしようもあったのだが、仲間の捕虜達の誰もが気付かない内に、二人の恋情は急速に燃えあがって、丁度旬日後、二人は館の裏の物蔭で抱き合っている処を、見張りの兵士に発見されてしまった。

思えば、このような破目になったのも、恐らく阿久里の計画であつたに相違あるまい。二人の恋にいちはやく気付くと、新入りの利根達の部屋の掃除人に弥兵衛を指名したり、日が暮れてから館の裏手あたりを一人で片付けさせたりして、利根に会う機会を与えていたらしい。

ともあれ、弥兵衛は、捕虜の身分で、宴の

館の女に手を触れたという、充分死に値する重罪を犯した訳だ。

翌日の夜、宴があった。

常日頃以上に乱痴氣の限りを尽した宴であった。余興が最高潮に達すると、阿久里が立上がつて、

「重罪を犯した捕虜を、面白い方法で処刑致します」

と発表した。拍手が起り、喚声が広間をゆるがせた。

広間の中央に、弥兵衛が衣服を残らず剥ぎとられて投げ出される。手足を押える役は、客の中の四人が直ぐに買って出た。

「野々田」

阿久里が呼んだ。

「お前達が安倍の女に手を出したら、どんな事になるか？ よく見ておくがいいよ。仲間の捕虜達にそうお云い。今ここにいる捕虜どもは、全部そのまま残るんだよ。残って、仲間が可愛がられるのを、指をくわえて眺めといで！」

ひと息ついて、今度は床の上の弥兵衛に視線を向けて、

「今夜は、たっぷりと女に触れさせてあげるからね」

冷たい声が、やや甲高い調子で告げた。

阿久里の合図で、三十人ばかりの女達が一列に並ぶと、広間の中央めざして小走りに駆け出した。そして、一人ずつ弥兵衛を踏みつけて行く。そのたびに弥兵衛の顔が苦痛に歪んだ。客達の間から野次と喚声が乱れ飛ぶ。

「利根を連れておいで！」

阿久里は全裸の利根と弥兵衛を背中合わせに縛らせると、自分で皮鞭を持ち、無茶苦茶に殴りつけ、

「誰でも鞭打ちたい者はお打ち」

と命じた。

「わあーっ！」

客と女達は先を争って鞭をふりおろした。

びしっ！ びしっ！ 弥兵衛と利根は、顔

と云わず、胸と云わず、腹部を、脚を鞭で打たれる。

はては、酔った女の一人に汚物まで浴びせられ、正視出来ない有様であった。

一刻（二時間）後、弥兵衛と利根は虫の息であったが、阿久里は二人を中庭へ連れ出す事を命じ、

「そのまま、明日の朝まで、そこに置いておき。もし生きていたら、許してやるわ」

冷然と云った。

翌朝、二人は死んでいた。霜でいてついた地面を掘り、俺達は二人の無残な死体を埋めた。

阿久里の部屋に呼びつけられ、悩ましくくねる阿久里の裸身を前に、みだらな文章の朗読をやらされても、俺が最後まで彼女の軀に手を伸ばさなかったのは、それ故、当然の事なのであった。

△四△

三月に入って、山脈から吹きおろして来る風も、多少はその厳しさをゆるめたようであったが、戸外は、そして俺達の宿舍も、まだまだ寒さが尾を引いていた。

弥兵衛の処刑以来、俺達は以前にもまして臆病になっていた。女達は面白がつて、あらゆる方法で俺達を酷使した。

俺達の耳には戦況などというものは殆ど入って来ないが、宴のたびに二人や三人は混っていた隊長格の者が姿を見せなくなったことや、武士達の騒ぎぶりが日増しにやけっぱちなものになって行く事から、安倍軍の不利に傾きつつある事だけは読みとれた。

そんな情勢と、連日のけもののような振舞いが、女達の性質をいよいよ凶暴なものにする

るのであろう。宴で、客達からおよそ人間らしい扱いを受けない反動が、俺達捕虜にふりかかって来るのかも知れぬ。館長の新堂則高はじめ、監視の兵士達も、女達にする事には全く口出しが出来なかった。女達は好き勝手に捕虜をこき使い、三人四人と集っては一人の捕虜をなぶりものにし、うさを晴らした。

みじめな日々を送っている捕虜の中でも、俺だけは少し様子が違った。どうやら俺は、弥兵衛と二人で床みがきをやった日から、阿久里に眼をつけられたらしい。はじめて朗読をやらされた後、三日に一度は決って阿久里に呼びつけられた。他の女達と違って、阿久里が相手では、どうにも具合が悪い。

俺の場合、他の女達にこき使われるのは、まだしも我慢が出来た。

——どうせ宴のたびに酔った男のおもちゃになっている女どもなのだ。おもちゃにされる腹いせを、こうして俺に振向けている。と。そう思えば、苦しみながらも気がすんだ。

処が、阿久里の前では、俺の気持はまるで相違したものになってしまう。俺を呼びつけると、彼女はいかにも肉感的な裸身を、これみよがしにくねらせて見せるのだ。全身で俺

の欲望を誘うのである。

阿久里に呼ばれるのは怖かった。然し、心のどこかに、恐ろしい阿久里の呼び出しをひそかに待ち焦れる気持もある事に気がついていた。

「あんだ、こうしてあたしの軀を見ていて、何とも感じないの？」

寝台の上であぐらをかいて、俺の朗読を聞くともなく聞きいていた阿久里が、ふとそう云う。

声を止めて、上眼づかいに顔をあげると、阿久里の燃えるような視線が真直ぐ俺に突き刺さる。俺はしばらくためらった。阿久里に何か訊かれるたびに、俺は必ずためらう。うかつな答えは出来ない。何も感じない、と云えば嘘になる。第一、「いいえ」という言葉は許されないのだし、みすみす嘘と判っている事を口に出せば、この気短かな女は、どんなに怒り出すか知れぬ。だからといって、感じますと、答えたら最後、阿久里は面白がつて、次から次へと、質問を浴びせ続けるに相違ない。

あぐらに組んでいた阿久里の膝が、ゆっくり崩れた。右脚を寝台からおろすと、彼女はやにわに、俺のあぐらを蹴った。

「むっ！」

だが、俺は動かなかった。

「質問に答えるのよ、野々田！」

阿久里の視線は俺の顔を捕えて放さない。「このあたしの軀に何も感じないというつもりなの？ 何かしたいとは思わないの？……どうなの？ これだけ云われて、殴りたいとも、蹴飛ばしたいとも、殺したいとも思わないの？」

あぐらの痛みをこらえながら、俺は懸命に答えを探した。

——殴りたいと云えば、明日か明後日の宴で、俺は殴り殺されるであろう。蹴りたいと答えても、同様だ。この女に、反抗の意志ありと認められたら、それで俺達はしまいなのだ。然し、ひよっとすると、俺だけは殺されないかも知れぬ……。

そんな考えも、俺の頭を掠めたが、俺は直ぐに打ち消した。弥兵衛の死体が、眼の前に浮き上がって来たからだ。弥兵衛だけではない。些細な理由で殺害された捕虜が、以前には相当数いたと聞いている。

「答えないつもりなの？」

「答えます！ 阿久里様。某、宴のたびに何度も女達の馬になって参りました。あなた

様の裸身を見て、某は、一度でもいい、あなた様の馬になつてみたいと……」

こんな答えが、どうして俺の口から出たのか。阿久里への答えとしては、素晴らしいものに相違ない。だが、あまりにも破廉恥だ。それとも、連日虐げられて暮している内に、虐げられるのに馴れてしまい、そうした行為を自分から求める習性がついてしまったのかも知れぬ。

阿久里は笑った。自信に満ちた笑いであつた。

「望みを叶えてあげるわよ、野々田。さあ、四つん這いにおなり」

阿久里の豊かな肉体を乗せて、俺は部屋中を這いまわった。

「馬は裸よ！」

俺は着衣を全て脱ぎ、馬になった。

「もっと速く、もっと！」

と阿久里は俺の軀をとろきらず殴り、蹴りつけ、俺がへたばると、俺の軀を床に転がし、めっちゃめっちゃに踏みつけた。眼を輝かせ、頬を燃え上がらせて踏みつづける。

挙句の果てには、
「野々田、仰向けになつて、眼をつぶりなさい」

と命じ、口を開けさせると、小水を流し込み、次いで汚物までも喰わせた。

その日から、阿久里は殆ど連日のように俺を呼びつけ、馬にした。犬にもした。便器の代用にもした。そして縛って鞭打った。

殴ったり蹴ったりは、ほんの序の口の行為になつた。残酷な遊びを考える事にかけて、阿久里のその才能は天才的なひらめきを見せる。捕虜生活に、たださえ瘦せおとろえていた俺の軀は、日増しに衰弱して行つた。

俺は阿久里を憎んだ。切り裂いても、まだ飽き足らない程の憎悪を抱いていた。

だが同時に、俺の心の中に、もう一人の俺が住みついた。その俺は、阿久里の残酷な振舞いを喜々として甘受した。不思議な事に、このもう一人の俺は、いじめられれば、いじめられるだけ、俺の心の中に大きく育って行つた。

△五△

戦争なんか、もうどうでもよかった。安倍の兵士達の会話の端々から、官軍が破竹の進撃を続けているらしいのは判ったし、実際にこの兵士達はすっかり元気を失って、捕虜に対する態度にも、何となくおどおどとした

処が感じられるようになった。

だが、奴等以上に俺は生気を失っていた。

官軍が勝ちそうだといっても、何時の事か判明しない。その日まで、俺の軀は恐らくもたないに相違ない。それでもよかった。死の恐怖を考える気力すら、俺にはもう存在しない。ただ阿久里が俺に与える苦痛の数々だけが、俺の生命の焰を僅かにかきたてていた。とにかく、俺の衰弱に反比例して、阿久里の嗜虐は度を加え、俺は、それに大きな喜びを感じるようになっていた。

が、破局の日は、俺の予想を裏切つて、恐ろしく足早にやつて来た。

四月十八日、山の雪も殆ど溶けかけ、麓の丘々は緑に包まれていた。

その日、午前中の仕事がすみ、俺達捕虜が宿舎の壁にもたれてぼんやりしていると、柵の処にいた兵士が大声に喚いた。

「官軍だ！ 官軍がやつて来るぞ！」

成程、麓からのぼつて来る騎馬軍団は官軍に相違ない。

館から、新堂館長を先頭に、兵士や女達が飛出して来た。女達の大半は満足に着物を着ておらず、手に着物や帯を持った様は、まるで落人だ。官軍の進撃が、これ程に早いとは

思わなかったであろう。

少し遅れて白い着物の阿久里も出て来た。

「裏山から逃げるんだ！ 急げっ！」

館長の新堂則高は真っ先に駆け出した。女達も甲高い悲鳴を挙げて、不様な恰好で逃げて行く。兵士達とて同様だ。

「お待ち！ 捕虜を殺すのよ！」

阿久里の声だ。顔を真っ赤にして叫んでいる。

柵ごしに友軍の進撃を見詰めていた捕虜達は、ぞっと立ち竦んだ。

しかし安倍の軍兵は浮き足立っていた。彼等の上官、新堂則高が逃げて行くのだ。兵士達が止まる訳がない。

逃げ遅れた兵士が一人、喚いている阿久里

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏
男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人してM男性を、こてんこてんに虐め羞しめ尽す有様を、縄、ローソク、浣腸器などを用いて順を追って刻明に写真化しました。〕

のそばを駆け抜けようとした。

「お待ち！」

阿久里は槍を取りあげた。兵士はぎりくとして立ち止まったが、すぐにきびすを返して逃げ出した。が阿久里の槍は、背後から彼の生命を制していた。

「誰が一番に死にたいの？」

発作的に、俺は阿久里めざして駆けた。何故か、俺には解らない。一二度、けつまずきながら、俺は阿久里に駆け寄った。後方で、捕虜の誰かが何か叫んだ。騎馬の脚音がもう聞える。

「おどき、邪魔しないで、経宗！」

俺は愕然となった。阿久里が俺を名前で呼んだのだ。が、その間にも、俺は残った体力の全てを両足にこめて阿久里に飛びついた。

「莫迦っ！ 経宗の莫迦！」

阿久里の鋭い爪が、猛烈な勢いで俺の顔をひっかいた。阿久里が俺を痛めつけたのは、これが最後であった。

阿久里の手から槍が離れたのを見ると、捕虜の中の何人かが駆けて来た。騎馬の音が直ぐ近くで聞えた。全速力で駆けて来る兵士達の足音も聞える。

二、三人の捕虜が、荒れ狂う阿久里をがっ

しり押えつけるまで、数呼吸とはかからなかった。

だが俺は、そのまま、その場にじっと立ちつくしていた。味方の兵士が柵を越え、入って来て、その中の一人が俺の肩を力強く手で叩くまで、ひきずっていかれる阿久里の背を呆然と見送っていたのだ。陽春の光に照らされた阿久里の白い着物が、土に汚れ、何個所か大きく破れている。

肩を叩かれると、俺の全身から力が抜け、がっくりと膝を折った。横を、何騎かの官軍の武士が、逃げ出した安倍の軍兵を追って、裏山の方へ駆け登って行った。

〈附〉

それから約半年後の、康平五年(西暦一〇六二年)九月、鎮守府將軍陸奥守源頼義は安倍軍を滅亡させ、奥州を平定した。

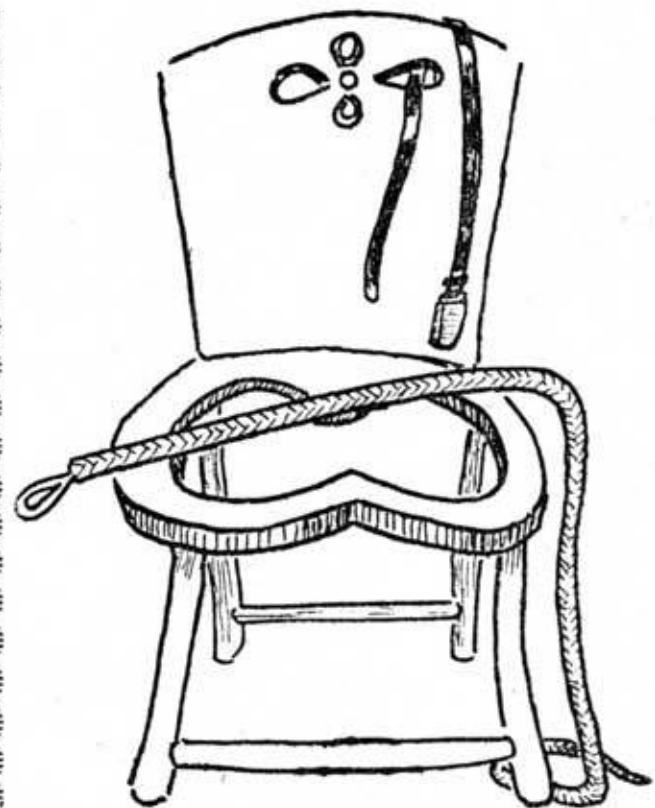
それに先立つ四カ月前、小雨のそば降る日の午後、千々岩山の「宴の館」の館長新堂則高と阿久里は処刑された。

そして、その翌々日、その噂が官軍の間に流れて数刻後、陣所の一室で野々田四郎経宗なる武士が、原因不明の割腹で自害した。その死顔は、何故か恍惚たる微笑みを泛べており、官軍の将士は不思議がったと云う。

心^{こころ}傷^いたむ遍^{へん}歴^{れき}

第二十七章 女囚ミシユリーヌ（七）

西 条 操



ミシユリーヌが法廷に入ると、人々の眼が一斉に集まった。

いや、廊下を曳かれて行った間でも、人々は袖引き合って囁やき合い、カメラマン達が素早くシャッターを切ったのだった。マジョーリはそのたびに眼を光らせ、身を挺して庇ってくれもしたが、マスコミ連中としては、警視庁大黒星のヒロインを眼前に見て、できることならインタヴューとやらをやりたいところだろう。それに聞きしに勝る美人だ。思いも寄らなかったほどに注視の的となつて、ミシユリーヌは消えて仕舞いたかった。

傍聴席に背を向けて縛しめを解かれ、導かれて証人席へ歩む横顔に、被告席のロジェの視線が焼きつくように喰い入っていた。宣誓をしながら、ミシユリーヌは初めて男の顔を見た。

（あんなに寝れて——。私のためにお気の毒だわ。私を信じて、あんなに嬉しげにしていたあなた——それなのに逃げたりして、ごめんないね。でも、仕方なかったのよ——）ミシユリーヌは、ありのままを証言した。弁護士の狙いは分っている。拘置所を訪ねた彼の気をひいて、男心に油をそそぐ振舞いが

あったということにしたいのだ。

「——はい。たしかに甘えましたわ。だって淋しくて心細かったんですもの。たしかに、好きだと申しあげました。ほんとにそのときには——待っていてくれたら、一緒になってもいいと——。嬉しうございましたわ」

語尾が消え、蒼白い頬が仄赤く染まる。ロジェが髪を掻きむしって呻き、人々の私語が潮騒のように湧いた。しかし、そのざわめきには、嘲けりの笑いなどは殆んどなかった。最初は好奇の眼を光らせていた人々もミシユリーヌの態度や言葉に感じ取るものがあつた

のだった。その美しさと挙措を讃える声さへもあり、聞きつけたマジョーリが微笑する。

「ところで、いまの心持はどうなのですか？」

ミシュリーヌ・ダリュウ

「わかりません」

ミシュリーヌは弁護士に答えたのだった。

「証人の職業と現住所をお訊きたい」

検事が反対詰問に立ち、ミシュリーヌは両手を握り締めた。

「あの——御存知じゃありませんの？」

「答えて下さい」

「女囚です。刑務所に入れられています」

ミシュリーヌは呻くように答えた。屈辱と怒りに胸が燃え、保安課で受けた残酷な仕打ちの数々を、洗いざらいぶちまけてやりたいと思った。しかし、そんなことをここで訴えたとして何になる。巨大な権力は悠然と受けて立ち、そんなかほそい叫びを跡方もなく消し去るにちがいない。

ミシュリーヌの胸をかきむしっておいて、検事は被告への憎悪を引き出そうとした。しかし、ミシュリーヌの胸には、ロジェに対する憎しみなどがある筈もなかった。彼女の柔らかなハートを締めつけるのは、むしろ、彼女に対する済まなさ、勇気がなくて怯んだこ

とに対する自責の念であった。

証人台を降りた彼女をマジョーリが迎え、傍聴席に背を向けさせて腰バンドを締めた。

「担当さま、あの——傍聴させては頂けませんかしら？」

「気になるのね。でも、駄目、すぐ戻るの」

「だってマジョーリさま。あのひと、私のために、こんな——」

「黙って。静かにしなさい」

婦人法務事務官マジョーリは女囚の前に回って、右手に手錠をやさしくかけた。

「裁判官さま」

女囚ミシュリーヌは、卒然と頭をあげて叫んだ。被告席の男の視線を全身に感じ取った彼女は、こみあげる女心に胸が溢れたのだ。

「お願いです。あのひと——ロジェと、話させて下さいまし、ほんの少しの間でいいんです」

マジョーリは縛しめる手を止めて裁判長を仰ぎ、傍聴席には憫れみと同情が漂い、ロジェが身を揉んで押えられた。

「許可できない。退廷するように」

裁判長の声は冷たかった。人々の眸に非難の色が浮ぶ。しかし、裁判長の立場としては人情に溺れることは出来ないのだ。法廷の秩

序は維持しなければならぬし、それに、この公判のスケデュールは遅れている。法廷はメロドラマの舞台ではない。

ミシュリーヌは肩を落とし、首を垂れ、左手をそろえて鋼鉄環を求めた。

「おとなしく縛って貰ってること」

傍聴席で、ぜいたくなドレスが眩き、さも満足げに眺め入った。

「でも、可哀想ですのね。だって、刑務所へ帰って行くんですもの」

と、隣の娘が眼をそむけた。

「あら、当り前じゃない？ ペアトリーヌ。

あの女は懲役人なのよ。さあ、あの女囚が出て行ったら、私たちもボツボツと——」

「あらま。おしまいまで御覧になったら？」

今日中に終るんでしょ。奥さま」

令夫人風は苦笑いした。巷間で人気を呼んだ公判だが、彼女にとっては、その元刑事がどうなるかと興味はない。令夫人風のお目当てはミシュリーヌだったのだ。それもその筈で、この女性にはリュシエンヌ夫人だった。

「あら、まッ！」

隣の娘が驚き、人々も眼を見張った。曳かれて去る証人、手錠腰バンドの美しい女囚が、突然身をひるがえして被告席へ駆け寄っ

たのだ。

泡を喰ったマジョーリ婦人看守が腰ロープに引き摺られ、よろめきながら引き絞った。

「ロジェ。聞いて」

女囚は双腕を悶え、被告席から数歩の距離で身を揉んだ。自分のために身を誤った男ロジェ・サンシール——。ミシュリーヌは情感の嵐の吹き荒れるままに、前後を忘れて衝動に駆られたのだった。

「すみません、私のために——。悪く思わないで下さいね。私、卑怯でしたわ」

「お黙リッ。静かにしなさいッ。さ——」

マジョーリが腕を扼する。さすがに語気も荒かった。ロジェも押えられている。

「おねがい、一言だけ云わせて。ね、ロジェ——。こんどお逢いしたら、そのときには——ね。お体に気をつけて。御縁があったらきつと——」

手錠が音を立て、腰の革具がきしみ、スーツがたくれあがって腰バンドに乱れかぶさった。男はうなずいて呻き、女の頬に涙が流れて、女囚ミシュリーヌは引き摺られた。

「すみません。もう騒ぎませんから。あッ、いい、いたい。痛うございます。放して、マジョーリさま。も、もう決して——」

「そう。じゃ——」

マジョーリは身繕いをしやり、涙を拭いてやり、溜息ついて背を押した。女囚は噁りあげ、振り向いて笑顔を浮べ、ハイヒールを素足に穿き直し、もう一度振り返って、法廷を曳かれ去った。

「なんだか胸が一杯ですわ、奥さま」

とペアトリーヌが涙ぐむ。彼女の嘗ての許婚者フェラールはシュザンヌ婦警に捕えられて、彼女はノルマンディの田舎に帰って行ったのだったが、そのフェラールは去年の暮れに、パリ拘置所で肺炎のため死亡した。伝え聞くところによれば、彼は逃走を計って捕まり、重い懲罰を加えられたという。そして、彼を捕まえたのは、今度も女性だということだ。ついに手紙一本すら出さずじまいだったペアトリーヌは、いまにして、フェラールを可哀想に思うのだった。二人の見知らぬ婦人看守とやらを微かに恨めしい彼女だった。苛酷な懲罰と肺炎死とを結びつけるのは世間の常識だが、当局は決して関連づけない。ま、そんなことは今さらどう云ったって仕方もないことだ。ペアトリーヌはクリスマススを済ませて故郷を飛び出し、パリに来て、そしてラグランジュ邸の女中になった。

ペアトリーヌは胸を押え、涙を溜めて、法廷を去る女囚ミシュリーヌを見送った。

「相当なものね、あの女。飛んだお涙頂戴のシーン。感じ入っちゃってるのね、ペアトリーヌ。ホホホ」

リュシェンヌ夫人は笑った。

「でも——。せめて話しぐらいは……」

「そうね。あの女には、あの男ぐらいがふさわしいかも知れないわね」

「あら。御存知ですの？ あ的女囚」

「え？ ええ、まあね。さあ、パーティにおくれるわ、早く帰らなくちゃ」

傍聴席では、さらに、もう一人の男が凝然と眼をつぶっていた。その男はロシュフォー・ラフォーレ——。彼の愛人リリアンヌは、とうとうクリスマスには間に合わなかったが、先月末、仮釈放されて彼の腕に還ったのだった。彼女の件での事務処理を兼ねてやって来た彼だったが、ミシュリーヌ哀切の一幕を身じろぎもせず見入り終えたいま、うたた感慨を禁じ得ない。

被告席の男を振り返り振り返り、健気に曳かれて去った姿と面影が、閉じた瞼に焼きついていていた。

——別れを告げたそのあとで、いくたびか振

り返るのが、真の愛の姿勢なのだ——。

ロシュフォアの胸にそんな言葉が湧いて消え、彼は頭を振って、そこはかたない嫉妬を断ち切るのだった。

書記室に戻って手続きを待ち、さらに、護送車の手配を待たされる。

「このお仕事振りは悠々たるものよ。さ、掛けて待ちましょう」

しかし、ミシュリーヌは悄然と立ち、眸を伏せてマジョーリに云った。

「ほんとに申しわけございません。すみませんでした。お撲りになる？ 撲って下さいませんか？」

「馬鹿ね」

マジョーリは笑った。

「じゃ、こうしてあげるわ」

ミシュリーヌの額が指先で軽く弾かれた。

「罰よ。これで気が済んだでしょ？」

「はい。でも、私——あのひとがお気の毒で——。なんとか慰さめてあげたかったものですから、つい——悪うございました」

「いいのよ、もう。陪審員の中でも、女のひとはハンカチ出してたわ。お前の気持は掬んで頂けることよ。でも、ほんとにいいひとねえ、ミシュリーヌは」

マジョーリは女囚の名を声ひそめて呼び、その金髪を掻き撫でてやったのだった。

黒塗りのセダンの前で婦人看守は云った。

「さっきみたいに坐り込まないでね。こっちがきまり悪くなっちゃうわ」

駅から来るときには、車の床に脚折ろうとする女囚を制して、シートに坐らせてやったマジョーリだった。護送乗用車のシートには腰おろさせるな、とのコリンヌ課長の指示だったが、その眼から遠く離れていれば、そんなむごい仕打ちには忍びない彼女だった。

しかし、ミシュリーヌは頑くなに拒み、窮屈な床に素足を折った。せめてものお詫びのつもりであった。

ミシュリーヌは夕方近いプラットホームの柱に向かい、深々とうなだれて立った。手錠は冷たく、素足も冷え冷えと、スーツを透して風が肌を刺した。またしても、あの鉄格子の中へ戻って行かねばならないのだ。こみあげる悲哀に、ミシュリーヌは涙を滲ませた。

「イヤねえ、お互いに——」

マジョーリが溜息まじりに呟き、人々の眼から精一杯に庇ってくれる。

「なにも、わざわざ呼び出すことないじゃないの。寒い？ でしょうね。汽車、おそいこ

と。私、護送業務が一番キライ」

「すみません。でも、あのひとの刑が少しでも軽くなるのなら——。私の証言、少しはお役に立ちましたかしら」

「そうね。あなたには敵わないわ」

マジョーリは、そっと手袋を脱いだ。

「あら、何故お脱ぎになりますの？ 冷たいでしょうに——。私は身分がちがいますわ」

見咎めてミシュリーヌはその心使いを恨めしげに責め、手錠の硬さをそっとずらせた。

「私に御遠慮なすっちゃいけませんことよ。寒いのは馴れてます。おなじことですわ」

真冬のコンクリートの床に長時間の正座、それに耐えて来た身には、吹き曝す寒風よりも眼襖の方が辛い。

「あら、そんなじゃないの。女囚がひがんだって平気だよ。手袋してると捕縄が滑っちゃうものね、いざってときに」

マジョーリは笑って、黒いコートに手袋を納め、わざと腰縄を持ち直した。

「でも、お天気がよくて助かったわ。これでショボショボ降られでもしたら、ほんと気が滅入っちゃうもの。あら、こんなに汚れて。いうこと聞かずに坐り込むからよ。バカね」

そういつてハンカチを取り出し、しゃがみ

込んで、素足の土ぼこりを払ってやるマジョーリだった。

初老の女性と十二、三の少女とが、ミシュリーヌの背後へ歩いて来た。睦まじく寄り添って手を取り合い、つつましく質素なその二人連れは、愛情あふれる母娘と見受けた。

「いいお天気でよかったねえ、少し寒かったけど——」

母親がいい、娘が答える。

「ウ、ウン。平気よ、ママ。でも、お花が少なくてパパに悪かったわ。早く春になるといいのに」

「パパはお花が好きだったからねえ、男のくせに。とってもやさしいひとだったのよ。お前はおぼえてないだろうねえ」

亡き夫を偲び、父の思い出を持たぬ娘のいとおしさに、初老の婦人は涙声だった。

「とうとう冬も過ぎたねえ。今年の冬には、きっとお前のオーバーを買ってやるからね」
「いいのよ。私はまだこれで我慢できるわ。母さんこそ新しいショール買わなきゃ」

いたわり合う声が近付き、ミシュリーヌはホロリとした。背を向けていても、その愛情の交流はひしひしと感じ取れる。

母娘は通り過ぎようとし、母の手が娘の肩

を撫でた。

「母さんはいいさ。ホラ、こんなに傷たんじやって。いくら母さんだって、これ以上は繕えないよ。ほんとに、よく辛抱しておくれだね、ジュヌビエーブ」

ミシュリーヌの体がおののき、頭に血が昇った。おお、ジュヌビエーブ——。そして、あのつつまじげな声はレイモンド未亡人だったのか。産みの母は、姿は見ずとも我が子を心眼に見た。こんなところで、こんな風に、心に何の準備もなく出逢うなんて——。

ミシュリーヌの胸が締めつけられ、溢れる涙に双眸がかすんだ。母娘は、いま背後を去ろうとしている——。ああジュヌビエーブ。

しかし、ミシュリーヌの全身は石のように硬直し、ふり向くことすら出来なかった。垂れた頭をあげることもすら出来なかった。

ミシュリーヌは、我が子の声を背後に聞いて、両こぶし握り締めて立ちすくんだ。

おお、ジュヌビエーブ。夢にも忘れじの愛しい我が子。どんな姿をしてるの？ どんなに可愛らしい顔なの？ 一目見せて。

ミシュリーヌは低く呻き、凝然と動かなかった。いや、動けなかった。

「だって、私寒くないもの。繕ろってある方

が暖かいのよ、ママ。ホラ、あのひと見て。

コート着てないわ。あら、靴下だって——」

ミシュリーヌの耳が鳴り、ふり返って指さす少女の気配に膝が萎え、掌に爪が喰い込んだ。

「あら——あのひとはね——。こっちへおいで、ジュヌビエーブ。見るんじゃないよ」

気付いた母が娘の手を引張り、マジョーリが間を遮ぎった。

「あの女はね、ジュヌビエーブ。悪いことして牢屋に連れて行かれるのよ。ホラ、縄をつけられて、女のお巡りさんがそれを握ってるだろ」

「そうお。可哀想。だからコートを着せて貰えないのね」

数瞬の後、ミシュリーヌは突如として身をひるがえした。声にならぬ叫びを呻き、去り行く母娘を二、三步追う。

母娘は既に遙かかなた、互いの背に腕を回し、見下ろす母を娘が見上げる。その横顔が眼に焼きつき、女囚はよろめいて膝を落とした。警察官の妻だったマジョーリに油断はなく、腰縄握って引き止められたのだ。

「どうしたっていうのッ。立ちなさい」

ミシュリーヌは答えず、両膝を落したまま

のブラットホームに、半ば茫然と見送っていた。万感こめて見詰める眸が涙に掻き暮れ、もどかしく悶える両手に手錠が音を立て、かすむ眼をその指先に背を丸め、そして、腰の革バンドが分厚くきしむ。

——おお、ジュヌビエーブ。あんなに大きくなって——。逢いたかったわ。逢いたいの。お前の声をもっと聞かせて。可愛らしい顔をよおく見せて頂戴。ああ、その金髪に触らせて。額に髪に、そのバラ色の頬っぺたにキスさせておくれ。体を撫でさせておくれ——。でも——でも——いまは駄目なのね。

いつのまにそんな娘になったの？そう、そのレイモンドさんに大きくしてもらったのね。病氣したことはないの？アンドリューさんは亡くなったのね、お気の毒に——。レイモンドさんを困らせるんじゃないことよ。そんなジュヌビエーブじゃないわね——。

マジョーリ婦人看守が腕を扼し、女囚ミシユリーヌは抜け殻のように立ちあがった。

「どうしたんだろ？」

「逃げようとしたらしいわ。私、見てたの」

「へーえ。太い女だ。綺麗な顔してるのに」

「そうとも。だから、女は器量だけじゃないのよ。分った？」

人々が眺めて頭を振り、心ない言葉を口々に吐く。そんな男女をマジョーリが睨み、またしてもハンカチで払ってやった。

「ね、こんなことがあるから、ああやって縛っとかなくちゃねえ」

「女だって油断ならないなあ」

マジョーリは舌打ちし、新たに立ち止まる人々に眉をひそめた。

「ま、手錠かけられてる。スゴイ手錠」

「可哀想みたい。だけど仕方ないわよねえ。

あら、手があがらないようにされてんだわ」

「きびしいのねえ、ずいぶんと」

掃除係の婆さんがクリーナー押してやって

来て、人々の足許を押し回す。

「さ、どいとくれ。そんなに見てやるもんじやないよ。その女の身にもなっておやり」

「あら、わざわざ割り込んで来ちゃって。でもサ、あの女、手だけね。脚に鎖つけられて

連れてかれるのもあるのよ。私、見たわ」

「ふん。いっぺん、自分もああされて見るがいいよ。どんな心地だか——」

掃除の婆さんは娘を睨み、ミシユリーヌとマジョーリに片眼をつぶった。どうやら、この婆さんは前科があるらしい。

ミシユリーヌは再び柱に向かい、

「すみません。私、どうかしてたんですわ。もうしわけございません」

と、マジョーリに詫びた。激情の嵐は過ぎ去り、深い哀しみの裡にも、何故か安らぎを覚える。

よかったわ、あの二人が気付かなくて。ほんとによかった——。

ミシユリーヌは喜びさえも感じ、ほっと溜息を吐いた。

まだ見てるひとがいるのね。いくらでも見るがいいわ。ジュヌビエーブにさえ見られなきゃいいの。こんな母さんを見たくないでしよ？ジュヌビエーブ。いつか、きっと逢えるわね。それまでさようなら。元気だね。体に気をつけるのよ——。

ミシユリーヌは眸をあげて、母娘の去った方を盗み見た。もちろん、行き交う人の群に遮ぎられて、その姿は消えていた。

ミシユリーヌは眼を閉じて、焼きついた姿を横顔を、ありありと睨に描くのだった。

——この母さんはね、罰を受けてるのよ。お前を産んだだけのお母さん、悪いママだったこと。その報いを受けてるのね。きっとそうよ。でも、赦して頂けたら、お前もこのママを許してくれる？許してね、ジュヌビエー

ブ。ああ、一緒に暮らしたい。いままでの償いをさせてよね。オーバーも服も靴も、なんでも買ってあげる。どんなことをしてでも買ってあげるわ。でも——でも——いいたい、ジュヌビエーブはどこに住んでるの？ それさえ教えてくれたら、どんなに刑務所が辛らくても辛抱するんだけど——。

女囚ミシュリーヌは再び身を揉み、腰バンドの後ろ腰で錠が鳴った。

「少しきつくするわ。ゆる過ぎたもの」

ミシュリーヌは身を硬張らせて、衆人環視の中で腰枷を締め直されたのだった。マジョーリにしては破天荒のくびり方だったが、この婦人看守を恨む気など、露ほどもないミシュリーヌだった。それどころか、我が身の振舞いを思うと、跪まずいて詫びたい気持であつた。マジョーリは、強い言葉も浴びせないし、手をあげもしない。それだけに、彼女の困惑と怒りが胸にこたえて分かるのだった。

法廷でも迷惑をかけたし、またぞろ、いまもこの騒ぎだ。腰の革バンドをきつくされるぐらいは当然のことであつた。

それきり二人は黙然と佇み、やがて列車が到着し、護送官は静かに女囚の腰縄を曳いて促がした。三等車は空席がチラホラの程度だ

つた。マジョーリがニコリと会釈し、中年の夫婦が見上げてタマげ、囁やき合つて立ちあがり、席を移した。ミシュリーヌは窓側に縮こまり、暖かさに全身をゆるめる。向い席は空だし、少しは人目を避け得るし、彼女はホッと吐息を洩らした。

「なんだか悪いような按配なこと。あの夫婦を追っ払っちゃつて」

隣りに掛けたマジョーリが呟やく。

「でも、別に、退いてくれて云つたわけじゃないし。ま、いいわね、ホホホ」

女囚はまつげをしばいた。こんなボックスは他にはない。その空席を見た人々が急いでやつて来るが、気付いてそのまま立ち去つて行く。ミシュリーヌはそのたびに身を固くしておののき、そしてホッと体をゆるめるのだった。よかったと安堵する反面、得も云われぬみじめさがこみあげる。爪弾きされ毛嫌いされ、見るもおぞましいと突き放されて、仲間はずれの仕打ちを受ける心地だった。

（でも、当り前ね、これだもの——）

ミシュリーヌは深々とうなだれ、両手首に光る鋼鉄の冷厳さと断絶感を見詰めた。

マジョーリもマジョーリで不愉快な思ひだつた。腰縄を隠せるいま、せめて手錠だけは

見えないようにしてやりたい彼女だったし、往路の車中ではハンカチをかぶせてやったマジョーリであつた。しかし、女囚の振舞いに心乱れた彼女は、その心使いを示しそびれたのだった。彼女は自分の囚人を見やった。

車窓にパリの冬空が流れ、それを背景に黙念と伏せる女囚の横顔が蒼白く、頬には涙の跡があつた。マジョーリは溜息を洩らし、わずかながらも腹立ちを示した自分を反省し、そして、我が職務を呪わしくも思った。

「いいたいどうしたつていうの？ なにかあつたのね。わけを聞かせてくれないこと？」しかし、ミシュリーヌは凝然と黙りこんでいた。垣間見た後ろ姿と横顔——彼女はそれを睨に描き、刻みこみ、ひしと取りすがってまさぐるのだった。

ほんとにいけないママなこと。でも、きつと、きつと、いままでの償いすることよ。ほんとの母さんが誰だか、いまは知らない方がいいの。ジュヌビエーブがもっと大きくなつたら、そのときには——。

ミシュリーヌの指先が腹のところやさしく動いた。愛する者を撫でいとおしむかのようだった。

おお、ジュヌビエーブ。よくよく勉強する

のよ。継ぎの当ったオーバーを着てたわね。でも、まっすぐに成人しておくれ——。

ミシュリーヌは熱い涙を溢れさせ、そして一瞬、母としての嫉妬をおぼえた。

ほんとに幸わせそうだったわ、あの二人。お互いに信頼し切っちゃって、これからずっとあんな風にして、あの子と暮して行くのね、レイモンドさんは——。

マジョーリが意を決し、ハンカチを取り出して両手を掩ってくれた。女囚はそれを指先でハネのけ、まるめてたたむ。

「いいんです、マジョーリさま。どうせもう私は——生き恥をさらして暮す女囚」

ミシュリーヌはハンカチを握り締め、鎖と錠金具の音を立てて絞りあげ、肩ふるわせて嗚咽をこらえた。マジョーリはその肩に手をかけ、ハンカチを取りあげ、やさしく覗き込んで涙を拭いてやる。

「ほんとにどうしたの？　びっくりしたわ。聞かせてくれたっていいじゃないの」

「すみません。お手数かけて」

「ね、きつと、仲睦まじかった母子連れのことなんでしょ？　だれなの？」

ミシュリーヌは息を詰め、再び頑くなに黙り込んだ。マジョーリも人の子の母、そ

った勘は鋭い。

いつの日か、晴れて相逢うこともあるう。

その日まで——。ミシュリーヌは、そのときの歓喜を想いやり、微かに眸をあげて胸を弾ませた。

でも——あの子を傷つけないで名乗り合えるかしら？　ああ神さま、おねがいです——ジュヌビエーブを我が子と呼べる日までに、これからの幾星霜があることか。

そのときまで、ジュヌビエーブをおねがいよ、レイモンドさん——。

両手が力なく腿に落ち、手錠が音を立て、女囚は再びまっつげを伏せる。

あの子をあなたに育てて下すったのね。ありがとう、ほんとに。私には、ジュヌビエーブのママなんて資格はないのよ。ほんとの母さんはやっぱりあなただわ、レイモンド。あの子をあなたの手から取り戻す権利なんて、私にはもう、これっぽっちだってないのよ。でも、おねがいだから、いつの日か、一目でいいから逢わせて頂戴。跪まずくわ——。

列車がガタンと揺れ、ミシュリーヌの金髪が額にまつわった。

ああジュヌビエーブ。どうしてお前を手離したりしたんだろうねえ。ほんとにバカな母

さん。どんなこととしてでも、お前を育てなきゃいけなかったのね。おおジェラル。そしてたらあのジェラルだって——。親子三人で暮らせたかも知れないのに。でも、育てて下すった伯父さま伯母さまに頼まれたの、クードリユーエ伯爵に嫁いでおくれって。そのときのママはまだほんの娘だったのよ——。

女囚ミシュリーヌは金髪をハネあげ、ちらと窓外を眺めて想いを断ち切った。

ひとことだけ云わせてね。いいこと？　ジュヌビエーブ。お前の父さんはもういないのよ。可哀想なジュヌビエーブ。ほんとなら、二人のパパがいるはずなのにね。でも、おぼえといてよね、お前の父さんはもうどこにもいないの。ジェラルというひとは関係ないのよ。お前のパパはアンドリユー・メルシェさん、いいえ、ちがうわ、そう——シャルルよ、シャルル・クードリユーエ。伯爵だったのよ。もう天国にいらっしゃるわ——。

列車が停まり、人々が乗り込み、席を探し初めた。女囚は我に帰って身を固くし、マジョーリはマジョーリで、前の席においたショルダーバッグをどうしようかと思案する。

「ちようど空いてら、あすこ」

「ホント」

若いアベックが突進し、マジョーリは渋々とバッグを膝へ戻した。男が口笛を吹いて肩すくめ、見下ろしてためらう。

「あらま、フーン。あんた、坐らないの？」

「なあおい。ここはいけねえや」

「どうして？ アナポリスさんが怖い？」

「バカ云え。な、二等車へ行こうや」

「ふん。カッコいいこといわないでよ。そんなお金がありやダンスに行った方がいいわ」

娘は無遠慮に割って入り、ミシュリーヌの前に腰をおろし、男の手を引き寄せた。

アベックはどう見ても二十才そこそこ、ペチャクチャとガムを噛み、くだらぬことをしやべり合い、前の二人をジロジロと眺めた。

マジョーリは舌打ちして黙殺し、アベックは盛に笑い合う。ミシュリーヌは唇を噛みしめて、じっと膝を見詰めた。娘がひときわ高く笑い、男にしがみついて、なおもキヤアキヤア騒ぐ。

「ほんと愉快ね。あら、ちょっと、ちょっと。あたし、あんたのこと笑ってるんじゃないのよ、ことわっとくけどさア。しめっぽく涙ぐんだりして見せないで。あたしたちはあなたのことなんか、なんとも思ってたやしないんだから。手錠付きの人間なんか——」

マジョーリが眸を光らせ、ミシュリーヌはこぶしを握り締めた。

「どこ見てんの？ あんたってば」

娘が男をつねる。

「女の素足が、そんなに珍らしい？ バカ」

若い男は娘の手を払いのけ、帽子を前にずらせ、腕を組んでヤニ下った。

「我慢するのよ」

と、マジョーリが囁やく。

「猿二匹だと思ってるやいいわ。ね」

女囚ミシュリーヌの想いは再び母娘の上に馳せた。どこへ帰って行ったことやら——。

いまごろはもうパリの片隅に帰り着いて、語らいながら夕餉の支度をしているだろうか。それとも、とあるレストランのテーブルに向き合って、つましいせいたくに顔輝やかせているだろうか。いや、まだ夕食には早い。

おそらくは母娘二人きりの住まい、母は内職をひろげ、娘は傍らで教科書を開く——。

ミシュリーヌの睨みには、母娘の姿が、ありありと浮ぶのだった。

苦労なすったのね、レイモンド。でも、これからおねがいよ。いつか、きっと御恩返えいたします。私のことはもう御存知でしょ？ おねがいだからジュヌビエーブには知

らせないで——。

ミシュリーヌの胸には、かりそめの嫉妬は既に消え、育ての母レイモンドへの感謝が溢れていた。彼女の体内に暖かいものが満ち、母娘の仕合わせと神の御加護をミシュリーヌはひたすらに祈り続け、そして、列車はパリ市最北端の駅にすべり込んだ。

老婦人が乗って来て、席を求めて通路を歩く。ミシュリーヌは微かに盗み見た。貧しいみなの老婦人は生活に疲れ果てた風情、すり切れたコート裾に木綿靴下の脚を引き摺る。古ぼけたショールが眼に焼きつき、ミシュリーヌは卒然と立ちあがった。そのショールの柄は、色は、あのレイモンド未亡人がまとっていた物と同じだった。ジュヌビエーブが気にかけていたレイモンドの肩掛け——。

ミシュリーヌはその瞬間、席を譲らねばと我れを忘れたのだった。

マジョーリがあわてて押え、腰を浮かせて捕縄を取り直す。通路の向うの席で男が立って、老婦人を誘った。

老婦人はミシュリーヌの姿を見やり、激しくまばたき、ふり向いて男に礼を云い、再び女囚を深々と眺めた。人生の重荷に耐えて来た温顔に感激の色が浮び、幾星霜の風雪を観

て来た双眸には光るものがあつた。

「あなた、席を譲って下さるのね。ありがとうございます。かけさせて頂きますよ」

老婦人はキッパリと云い、ニッコリと笑いかけて、マジョーリがさつと立った。そして、ミシュリーヌを引き寄せて我があとへ押しつけ、老人の背を静かに押す。

古ぼけた肩掛けが女囚の眼前を通り、つと手が延びて女囚の腕をやさしく叩き、老婦人は窓際に腰をおろした。通路に立ったマジョーリは空咳きしながら背板につかまり、捕縄を隠すに忙しい。

ミシュリーヌはおそろおそろ顔あげて、マジョーリに眼で詫びた。マジョーリがやさしく肩を叩き、老婦人が肩掛けを掻き寄せ合わせて呟く。

「ほんとにありがとよ。雲の上に坐つたみたい。これで、イヤなことも吹き飛んだね」

向いでガム噛むアベックが、フンといったツラをして見せた。そういった態度を取りたがる年頃だ。

「悲しいだろうけど、我慢するんだよ」

老婦人が横顔を覗きこみ、手錠の女を深い声でいたわる。

「じつと辛抱おし。人間てものは、そのとき

そのときを一生懸命に生きることさ」

ミシュリーヌは涙ぐんでコックリした。

「まだ若いんだもの、あなたは。浮世にや、いろんなことがあるさ。どんなことにブチ当るか分ったもんじゃないよ。元気お出し。私だって、この年でさ、いろいろと苦労してるんだよ。生きて行くためにね。神さまがお招び下さるまでは、一生懸命に生きなきゃ」

老婦人は、ミシュリーヌが何をやったのかも、刑は何年なのかとも、そんな下らぬことは一切訊ねない。老婦人は深く吐息した。「私は独りぼちなよ。息子も娘も、二人ともどこへ行ったのやら。けどね、私は誰も恨んでなんかいないよ。みんな土に帰って行くんだもの」

娘が聞えよがしに鼻で笑い、男は帽子の下からミシュリーヌの姿を眺め回す。そんなアベックを老婦人はきびしく睨んだ。

「世の中って不公平で冷たいもんだと思うこともあるよ、私だって。あなたも、いろいろと事情があつたらうし、いいたいことだってあるだろうね。でも神さまはお見通しだよ」

老婦人は窓外を眺めやった。半ばは自らに云い聞かせるような声音だった。彼女は、人の情けの薄さを思い知らされて来たばかりな

のだ。

彼女は老いの身の生計に独り疲れ果て、昔世話してやった知人のところへ無心に行ったのだが、体良く断わられたのだった。手内職に疲れた身を、暫し静養したい彼女だった。これから訪ねて行く甥夫婦だって、手紙に書いて来る言葉は外交辞令であろう。おそらくは一フランすら貸してはくれないだろう。

「仕方ないよね。あの夫婦だって楽な暮らしじゃないもの。ま、行くだけは行って、頼んで見ましようよ。まさか、夜道を追い返えしたりはしないだろ。あ、そうだ。お隣さんにひとこと云って来りやよかったねえ。レイモンド、今日は娘と一緒に墓参りだと云ってたけど、もう帰ったかしら。ガス栓は閉めて来たと思うんだけどー」。

「ね、あなた」

老婦人は再び覗き込む。

「私のところのお隣りのひとだって、ほんとに苦労なすってるわ。女手一つで娘さんを育て来たのよ。あなた、お子さんあるの?」

ミシュリーヌは鳴咽をこらえた。老婦人が隣人の名を口にしていたなら、ミシュリーヌは飛び上って縋りついたことだろう。この老婦人はアントワーヌ未亡人なのだった。そし

て、そのショールが同じなのも道理で、数年前にレイモンドと、おそろいで散財した物なのだった。

「ね、泣かないで。出して頂いたら訪ねておいでよ。なんてえらそうなこと云っても、なんにもしてはあげられないけど。でも、いくら薄く切ったってねえ、ハムの一枚は一枚だよ。なあに、あたしや五年や六年はまだ大丈夫。あなた、そんなに長くはないんだろ？え？ほんとに綺麗なひと。きっと心も美しいに決まってるよね。悪いことするとは見えやしない、ほんとに」

アントワーヌ未亡人は、しげしげと眺めて嘆息した。

（誰かに似てると思ったわ。そう、ジュヌビエーブちゃんに似てるのよ。あの子も大きくなったら、このひとみたいに綺麗な娘になるだろうねえ——）

「ね、きつと訪ねて来るんだよ。いいかえ？私のところはね、南区のむさくらしいところさ。カルーゼルって廃駅があるのよ。その前のリセット通りを運河沿いに下ったところ。真珠荘ってアパートの三階。薄汚れた真珠だよ」マジョーリはじつと見下ろし、ミシュリーヌは終始、沈黙していた。

きつと何かあったんだわ——
と、マジョーリの眸は物想う。

心を掻きむしられたのね、可哀想に。言い度くないらしいけど、聞かせてくれたら力になってやれるかも知れないのに——。

「運命は誰かの犠牲を要求するのよ。すべて約束ごとき。あなたも犠牲者なんだねえ」

アントワーヌ未亡人が呟くように云う。

「あなただって、どうしようもなかったのよね、分かることよ。考えれば胸一杯だろうねえ。でも、黙って、じつと耐えるのよ。世の中って、そういう仕組みになってるのさ」

「ああら、おバアちゃんたら宗教的。シンミリしちゃう」

娘が運つ葉にまぜかえした。

「おバアちゃんはマホメット教？ 仏教？」

アントワーヌは娘を鋭く見た。

「——でも、犠牲は尊いよ。人生の宝石さ。

だけどねえ、犠牲ってものは、人知れず捧げられてこそ神さまに届くのよ。もてはやされる犠牲なんて、犠牲の名に値しないね。カスだよ、そんなのは」

「ンまあ、スゴイ。えらい哲学者なのね」

娘が鼻で笑い、ガムを吐き捨てた。ミシュリーヌは微かにうなずく。人生の重荷に耐え

て、何十年もの歳月を生き抜いて来た老婦人の言葉は、いまのミシュリーヌの胸に沁みとおった。傍らに立つマジョーリも深くうなずく。女囚を扱って十数年の彼女の胸には非運の女たちを通しての人生の数々が刻まれてもいたし、さっきのミシュリーヌの行為には深く感銘していた。手錠の護送女囚が席を譲るなんて、ベテランのマジョーリにも初めての経験だった。おそろく、こんなことは今後もないだろう。

「きつと訪ねて来るんだよ」

考婦人が覗き込んで念を押す。

「なにもして上げればしないけど、慰さめてあげるくらいは出来るさ。そのときには、ちよっぴりぐらい愚痴をこぼして、神さまに恨み言の一つも云おうじやないか。そのくらいは神さまだって許して下さるさ。私のところ、憶えた？ なぜ黙りこくつてるの？」

「駄目よ、おバアちゃん。無駄よ」

と、娘がまたも鼻先で嘲ける。

「囚人はね、あたしたちと勝手にお話してきかないのよ。口を利くにはお許しが要るんだわよ。ねえ、そうでしょ？ 怖い小母さん」

マジョーリはきびしく娘を見下ろした。

「でもサ、わりかし感心じやない？ その女

囚。お役人がそばにいるんだからネコかぶるのも当り前かしら。ほっといてやったらどう？ お説教好きのおバアちゃん。構うことないじゃん。ひとはひと、自分は自分よ。ドジふむのがいけないの。ねええ、あんたア」

若い男は照れ隠しに足を組み直し、女囚は素足をさらに引込めた。

「お黙り」

と、老婦人が堪えかねる。

「な、なんという言い草だろ。お前さん、ガムの始末をちゃんとしなさい」

「あら。おバアちゃんこそ威張っちゃってナニさ。なんの権利があつてあたしにそんなこと——。おバアちゃんは女看守してたの？

あたしは女囚じゃないんだからね」

「なんだって！ これはケジメというものだよ。権利もへちまもあるものかね」

娘はふくれて横を向き、アントワーヌはなおも睨みつけ、男の手が娘の膝を撫でた。

「ね、辛抱するんだよ。私は今日のこと、一生忘れない。嬉しかったよ。なあに、あなたはね、ホンのちょっとした過まちをしただけさ。もっとひどい目に逢ってるひとだって沢山いるよ。元気出して。私、いまはあなたのこと何も訊かないし、名前も知らなくていい

の。手紙も出さないよ。だけど、きっと訪ねとくれ。そうそう、私、ベアトリス・アントワーヌよ」

「ふん」と、まだぞろ娘が巻き返す。

「ちょっとした過まちが聞いてアキれるわ。

手錠入れられてサ、痒いところも搔けない境涯よりみじめなのってある？ 人間として一番哀れな姿じゃないの？ 獣みたいに縄なんか腰につけられちゃってサ。番号は何番？」

アントワーヌは怒にふるえ、女囚は唇を噛んだ。このアプレ娘としては、老婦人にやりこめられた腹立ちもさることながら、ミシュリーヌの美しさが気に喰わないのだ。なにしろ、彼女の彼氏は女囚の方ばかり盗み見ている。娘は男の手が我が膝の上で握った。

ミシュリーヌは背を屈め、両手を精一杯にあげて、こらえにこらえた涙を押えようとした。腰の革バンドはきつく締められ、指先は僅かに届かない。溢れた涙が喉からこぼれ落ち、女囚は両手をもがいた。鋼鉄環を一杯にずらせ、辛ろうじて眼頭を指先に押え、丸めた背で嗚咽する。その姿の憫れさに、老婦人は眸をうるませ、唇をわななかせてマジョーリを見上げた。

「ね、看守さん。解いてやって下さらないか

しら？ 不心得なことするようなひとじゃありませんわ。それは御存知でしょ？ お願いしますよ。ね——」

女囚の両手が腿に落ち、こじる痛さに切なくまさぐり、まさぐられる手錠が冷たく鳴って、腰の革具が哀しくきしむ。

婦人法務事務官マジョリーは、見おろして溜息を吐き、老婦人の眸から視線をそらせ、悲しげに頭を振った。彼女は、女囚たちには人の情けが最も必要だということを知っている。だからこそ、老婦人があれこれと話しかけて慰さめるのを、その暖かさと善意の故に黙過していたのだ。しかし、縛しめだけは解けない。

アントワーヌも悲しげに眸を落とした。

「そうでしょうね。いえ、決して、あなたをひどいとは思いませんよ。立場というものがありますもの。でも、あなた、おやさしそうな方ね。よろしく頼みますよ、ね」

アントワーヌは再び女囚の横顔を覗いた。「やっぱり解いては頂けないのよ。でもさ、そんなもの、気にすることないんだ。いいかえ？ 王妃さまなら冠をかぶってるだろ。それと同じことさ」

聞いて、アプレ娘がけたたましく笑った。

「物は言い様だわねえ。そうともサ、人間、それらしくってことが大切なよ。看守さんてば。解いてやっちゃ駄目よ。ホホホ。もがいてガチャガチャさせてる」

老婦人は憤怒を燃やし、マジョリーもついに堪えかねた。

「黙ってて頂戴ッ。話しかけないで」

「あら、あたし、女囚になんか話しかけたりしてませんわ。それはおバアちゃんの方。叱るんならお間違ひよ」

マジョリーは唇を噛み、アプレ娘はまたもガムをクチャクチャと勝ち誇る。しかし、近くの人々が一斉に非難を示し、アプレ娘も鼻白んで黙った。

「だけど、そうは云ったって王冠とはわけがちがうよね。おお、おお、冷たかろう、可哀想に。あかぎれ、こさえちゃって。さ——」

老婦人は矢庭にショールを脱いで、ミシュリーヌの腿にふわりとかけた。その手触りの暖かさに、女囚の胸は忽ち一杯になる。熱いものがこみ上げて来て、ホロリと散った。「いいんだよ、いくらでも濡らしておくれ。でもさ、もう泣くのはおよし」

老婦人は古ぼけた手提袋をゴソゴソさせ、摘まみ出したものを女囚の口に押しつけた。

有無をいわせぬ勢いに、女囚は頬張ってから支配者を仰いだ。マジョリーは微笑んで横を向き、老婦人はさらに一個を押し込む。

ミシュリーヌは二個の飴玉を舌に転がしつつ、その甘さと暖かさに胸が痺れた。

車掌が検札にやって来て、マジョリーは二枚を差し出した。眺めて娘が肩をすくめる。

「やっぱし切符が要るのねえ、一人前に」

「おや、おかしいのかえ？」

とアントワーヌが聞き咎め、キッと容を改めた。

「私はね、お前さんの切符が一人前だってことの方が不思議だよ」

二人は睨み合い、毅然たる老いの眼に氣押されたか、アプレ娘はつけまつげを伏せた。

冬の日の短かさに車窓は仄暮れて、アントワーヌ未亡人は溜息とともに身繕いを始めた。察した女囚がショールをまさぐり、ままならぬ手でたたもうとした。

「私、次で降りるのよ。ずっと御一緒にあげたいんだけど——。あら、そんなこと。それも貸しといてあげたいけど、それ一枚しかないんだよ。悪いけど、返しておくれよね」

ミシュリーヌは、溢れる感謝を双眸にこめて、アントワーヌに頭を下げた。

「なんとまあ綺麗な眸。とうとう、声を聞かせてくれなかったのね。聞きたかったこと。でも、仕方ないわね。いつか、聞かせておくれ。タツプリとね。きっとだよ」

アントワーヌはじっとミシュリーヌを見詰め、老いの眼を押し拭い、ためらい勝ちにショールを取りあげた。

「ほんとに、今日は嬉しい日だったよ。ありがと。お蔭で、なんだか世の中が明るくなっただみたい。これ、お礼よ。取っときなさい。大丈夫だってば。叱られやしないって——」

アントワーヌは飴玉の袋をミシュリーヌの手に押しつけ、固く手を握った。その飴袋は乏しい財布をはたいて、甥夫婦の子供への土産にと買い求めたものだった。

ミシュリーヌはその飴袋を持て余し、マジョリーは素知らぬ顔で窓外を眺め、そしてアントワーヌは、もう一度手を握りしめ、金髪を撫で、やさしく肩を叩いて、名残り惜しげに降りて行ったのだった。

ミシュリーヌは再び窓際へ寄り、アントワーヌが窓を叩き、それへ女囚が笑いかけ、老婦人は手を振って車窓を見送った。

「すみません。余計なことしちゃって」

ミシュリーヌは体を動かし、マジョリーに

上体を向け、飴袋を差し出す。取り上げてくれというのだ。アプレ娘が眼を光らせ、マジヨリーは溜息とともに取りあげて、バッグに納めた。アプレ娘が真赤な唇で満悦する。

女囚は再び眼を閉じ、面影を睨に描き、想いを遠く馳せた。またも涙が溢れ、やつの仕草で眼を押える。眺めてマジヨリーはハンカチを取り出した。

護送用の手錠は一きわいかめしく、堅牢そのもので、並大抵のことではビクともしない重々しさだ。マジヨリーは、この手錠を女囚にかけるときには、ちょっと窮屈よ、下手すると痛いわよ、と注意してやるのが常であった。あばずれ女囚の両手にあれば信頼感のある拘束具だが、この四五三号の両手首に重々しく光れば痛々しく、哀れで胸が詰まる。

マジヨリーは、老婦人の頼みを拒んだことを悔い、つと鍵を取り出し、肩に手をかけて向き直らせた。鋼鉄が両手から除かれ、女囚は夢かと胸を抱く。その手にハンカチが握られ、アプレ娘がオーバーに眼を丸くした。

「ちょっと、ちょっと、あんた」

と、男を突つつく。

「荷物に気をつけた方がいいよ。財布も」

マジヨリーは怒を押えて黙殺し、女囚は頬

を拭う。その後ろ腰がまさぐられ、上体を窓へ向けさせられた。腰バンドをゆるめてやるうというのだ。ミシュリーヌは腰を浮かせ、腹にぶら下がる物が触れ合って鳴った。

アプレ娘の尖った靴先が女囚の素足に触れる。しかし、娘は、組んだ脚を引込めようとせず、眺めて笑った。

「よかったこと。それが鞆だったら、バスの車掌みたい。あんた、なかなか要領いいのねえ。靴下を直したらどう？ ホホホ」

ミシュリーヌはハンカチ握り締めて、屈辱の思いに耐えた。揺れる手錠を片手で押え、腰をおろしてホッと、女囚は手首を揉む。

「ありがとうございます。すみません。でもこんな——いいんですの？」

「お前は黙ってりゃいいの。指図は受けないことよ」

マジヨリーはわざときびしい、頬ほころばせてミシュリーヌの背を撫でた。

女囚は金髪を掻き撫で、襟元を繕う、スートの裾を直しつつ、またも涙ぐむ。そんなミシュリーヌの気配に、アプレ組は論外として、まわりの人々はホッと好意を示すのだった。さっき席から追い立て喰った中年夫婦もうなずき合い、妻の方がやってきて、マジヨ

リーに何か差し出した。婦人看守は丁寧に断わり、人の好さそうな中年婦人はおろおろと涙ぐみ、声詰らせて残念がった。

雲行きに、アプレ娘は男とイチャツキはじめ、ミシュリーヌは身心ともに暖かく、両手を膝にうなだれて、じっと睫毛を伏せるのだった。

コンピエーヌ駅が近付き、アプレ娘は男をつついて車窓を指さし、女囚を顎で示した。それと知って眺めれば、コンピエーヌ婦人刑務所は列車から見える。案外、このアプレ娘も、あのあたりの建物の塀の中で少女期の一、二年を過ごしたのかも知れない。

ミシュリーヌは護送者に向き直り、眉をあげて、両手をキツパリとそろえた。マジヨリーは溜息さえ洩らし、アプレ娘が横眼で見物し、女囚はなおも

「おねがいします。すみません」

と、低く促がすのだった。

見送る車内の眼は暖かく、ミシュリーヌは人の情けに心嬉しかった。しかし、冬の夕暮れの駅は風も冷たい。屋根もないホームを歩む二人の女性の影が、西空の残照に長々と淡かった。

ミシュリーヌは護送自動車の床に脚を折っ

て、さすがに悲しかった。思い定めて観念していても、あの鉄格子の中へ戻るのだと思うと、両手の手錠もひとしお冷たい。この哀しさを噛みしめるのも、これで二度目だ。女囚は肩をふるわせて啜りあげ、そんな姿をマジョーリは黙念と見下ろした。

記録にはないけど、きっと深いわけがあるんだわ。縫りついて来てくれたらいいのに。いつか、きっと聞き出してやるから——。

「ね、その気になったら、いつでも相談して頂戴ね。いいこと？ でも、感心したわ」

マジョーリはポツリといい、ミシュリーヌはコックリとうなずいた。このマジョーリに褒められると、ほんとに嬉しいのだった。

——イヴェットは口実を設けて、全員入房直後の第三監舎を抜け出した。喫茶室で様子を窺がい、頃合いよしと、準備室を襲う。案の定、マジョーリがミシュリーヌの戒具を解いていた。

「来ると思ったわ。デスクがモレシエンヌだものね」

マジョーリは声立てて笑い、ミシュリーヌも嬉しげだ。こんな時刻だから、準備室には誰もいない。

「あとは働き者のイヴェットに頼むわ。私、

一服して来る。疲れたもの。そりゃもう、いろんなことがあったのよ」

マジョーリは笑って去り、イヴェットはミシュリーヌに取り縋った。

「お疲れでしたでしょ？ イヤな思いをなすったんだし——」

「でも、それだけの甲斐は、ございましたのよ、ほんとに。イヴェットさま」

ミシュリーヌは深々と云った。

「また!! 誰もいないんですったら」

イヴェットは恨めしげに言葉使いを嘆じ、ポケットから紙包みを取り出した。喫茶室から持ち出したケーキだ。

「おねがい。召上って下さいましな」

「あら。今日はスゴイのね。さっき、汽車の中でもねえ、御親切なお方から飴玉もらったのよ、二つも。マジョーリさまったら横向いちゃって——」

「それはようございましたこと。さ——」

ミシュリーヌは素直に頬張り、イヴェットの胸はこみあげて来る。

「ご馳走さま。さあ、よく調べてね。飴玉隠してるんだから」

ミシュリーヌはドレスを脱ぎ始め、例によつてイヴェットはおろおろした。制服姿を屈

み込み、一枚々々を心こめてたたみ始める。

「まあ、駄目ですわ、イヴェットさま。バツジが泣きましてよ。おやめになって」

ミシュリーヌの裸か身とイヴェットの制服とがもつれ合い、イヴェットはしゃがんだまま顔を掩った。

「ここはもう、コモ湖のほとりじゃありませんことよ」

ミシュリーヌは自らの言葉に涙ぐみ、二人は同時に啜りあげた。立ち返る思いは同じであつた。

ミシュリーヌは最後の一枚をも脱ぎ捨て、袋に入れて口を閉じ、そっと押しやって立ちあがった。

「身検をお願いします。あら、どうなすったの？」

イヴェットは顔を掩ったまま涙声でいう。

「奥さまったら、どうしてそう 意地悪。

それは省略しますッ」

「はい」

ミシュリーヌは両腕をおろし、両脚を合わせ、手をそろえた。

「早く連れて帰ってよ。寒いですわ」

イヴェットはためらい、全裸を眺めて寒さを思い、おずおずと腰に手をやった。ミシ

リーヌ奥さまを縛るときには、何度やっても手がふるえるイヴェットだった。これで今夜もまた、イヴェットは母親から折檻されることだろう。母親のマリアにいわせると、奥さまを縛るなんて飛んでもない罰当りで、その気になって立ち回れば、そんなことなんかしないで済む筈だという。イヴェット独りで取り仕切っているわけじゃなし、マリアも無理なことをいうものだ。

扉が開いて保安課スカートが覗き込んだ。イヴェットは我に返り、ミシュリーヌはわななく。スカートはマーゴットだった。

イヴェットは心を鬼にして、わざと音高く叩き込み、柔らかな腕を掴み促がす。

「おや？ マジョーリじゃなかったのかい」「はい。あのひと、気分が悪いとおっしゃって。化粧室ですわ。ちょうど私が通りかかったもんですから」

イヴェットは、クソ丁寧に敬礼して誤魔化し、ミシュリーヌはうなだれたまま笑いをこらえ、マーゴットはウサン臭さげに去った。ジャンヌ事件以来、保安課の姿勢はとみに高く、コリンヌ新課長とマルタ女史とが意気投合したもんだから、えらく張り切って眼を光らせる。ことに、この四五三号は不正連れ出

しの経歴があるのだ。

イヴェットは肩すくめてホッとした。入って来てつぶさに監督されたら、ケーキのかけらもあるし、女囚の口あたりにはクリームが残っているし、一大事だった。

地下への鉄格子扉のあたりで、またもマーゴットとかち合った。四五三号の唇やなんかはよく始末してあるから、意地悪く調べられなくても、もう大丈夫だ。

「どうだった？ 四五三号。え？ 今日はその殿御をよおくつかまえ直したかい？」

マーゴットはミシュリーヌの全身を眺め、眼を細めてからかう。

「なにしろ別居させられちゃうんだものね。今日の一幕はどうだったえ？ 焼けボックイに火がついた？ それとも痴話喧嘩して物別れの巻かい？ マジョーリに聞いてみなくちゃ。旅費なしでも一緒に行きゃよかったよ」

マジョーリは笑って受け流すことだろう。ミシュリーヌは立ちすくんだ。口惜しいことも口惜しいが、このマーゴットの鋭い視線で素肌をなでられると、保安課での責苦を思い出して裸か身がわななくのだ。イヴェットは受け流して去りたいのだが、鉄格子扉のデスクに頑張る婦人看守がマーゴットに同調し、

錠を開いてくれない。

「そうよ、マーゴット。見たかったわよね。シエクスピヤの悲劇だったかしら？ ともかく、この男タラシ、さぞかし嬉しかったことだろさ。でも、生ま木裂かれて涙の別れ——」

「ふん。なあに、モリエールの三文喜劇さ。おんやまあ、もうそんなに生えそろって」

ミシュリーヌは両腿を固く合わせて腰を引き、恥じらって手を当てる。

「こら、よく見せな。手をどけて。三年たちやあ三つになるよねえ。ところで、すりむき傷は治ったかい。私、気になってねえ。うしろ向きな」

「——かんにんして。も、もう、すっかりよくなりました。はい——」

ミシュリーヌは泣き声をあげ、両手を合わせた。こんな廊下で「身検」をやられては泣けて来る。イヴェットはおろおろした。

「いつぞやは御手数かけました。お蔭様で、はい——」

「そうかい。ま、そんなに有難がっていくれるんなら結構さ。身検なんて、私たち金筋二本がやる仕事じゃないからね。行きな」

ミシュリーヌとイヴェットは鉄格子の中へ飛び込み、地下の広間でホッとした。

「よかった。ようございましたこと」

イヴェットは我がことのように喜び、そして、ふと口惜しく思う。あの二本筋のマーゴットが強行したならば、一本筋のイヴェットには、ミシュリーヌの身検を妨げる術はなかったのだ。規則によることならば諦めもしようが、勝手気ままな他人の眼に、ミシュリーヌ奥さまの隅々までを曝すなんて、イヴェットには耐えられない。それも自分の眼の前で——。婦人法務事務官イヴェットは悲しかった。ミシュリーヌ奥さまの前に立ちあがって、誰が何というおうとも庇ってさしあげられないのが哀しかった。鉄の支配に泣くのは女囚たちだけではない。女囚たちが畏怖の眼を伏せる制服女性たちにしたところで、上官の、服務規程の、そして、規則と制度と階層の支配を脱することはできないのだ。

イヴェットは深く溜息を吐き、薄暗い灯に灰白い背を見詰め、冷え冷えとした地下通路に靴音を忍ばせるのだった。

真の支配者とは、結局のところ何なのか。コリンヌ刑務課長でもなく、マルタ保安課長でもない。所長？ 法務大臣？ 大統領？ いや、ちがう。

そうだわ、それは人生なのよ。人間が生き

て行くってことそれ自体なんだわ。人生の重荷、それが支配者なのよ——。

思いに沈むイヴェットの前で、女囚の素足はノロノロと重い。背に、まだ消えぬ鞭痕が二条、交差して残っていた。

「奥さま。お寒いでしょ？ もすこし早くおゆきになったら？ いえ、そりゃ、私は構いませんけど」

イヴェットは涙がさしぐむ。

「すみません。イヴェットさま」

しかし、ミシュリーヌの脚はますます鈍くなり、つと停まった。長い地下通路の半ばあたりだった。女囚の肩が白くふるえる。

「どうなさいまして？」

イヴェットはやさしく肩を押さえ、ミシュリーヌがいきなり振り向いた。奥さまを信じ切っているイヴェットだったが、さすがの彼女もハッとしたほどに激しい動作だった。

「イヴェット」

と、眸で縋りつき、手錠を激しく引張り、腰を悶え、足摺りして喘ぐ。

「お、おねがい——イヴェット」

女囚ミシュリーヌの両膝が落ち、必死の想いを全身に湛え、その両手がスカートに縋った。金髪が乱れて乳房が揺れ、イヴェットは

仰天してよろめいた。

「おねがい、ここから出して——。これ、はずして——おねがい」

イヴェットはよろよろと後退りし、壁に背をもたれ、思わず顔を掩った。

「ね、鉄格子の中へ戻さないで。もうイヤ。一カ月でいいの。いえ、一週間——三日でいいわ、ここから出して——出して」

今日、垣間見たジュヌビエールの姿——それを睨にまさぐりつつ鉄格子の中へ追われ戻る道すがら、ミシュリーヌの全身に想いが吹きこぼれてしまったのだ。

もう一目、もう一目だけ逢いたい。その姿をもう一度だけこの眼で見たい。そしたら、これからの三年が五年でも辛抱するわ——。

女囚は嗚咽して身を揉み、婦人看守は固く顔を掩った。嗚咽が次第に消え、女囚は床にしがみつく。女囚の上半がゆっくりと起き、婦人看守の両手が顔からノロノロと離れた。

ミシュリーヌは床から見上げ、イヴェットは凝然と見下ろす。二人の眸がひしと合ひ、涙にかすみ、裸か身は静かに立ち上った。

「すみません、イヴェットさま。ほんとに、どうしたんでしょうね、私——」

ミシュリーヌは深々と頭を下げ、決然と歩

き出した。ふり返って恥かしそうに笑い、イヴェットはなおも動かない。

「早く連れて帰ってね、イヴェット。寒いもの。あら、私って、ずい分とわがままねえ」
婦人看守イヴェットは漸く壁から離れ、万感を胸に押え、十歩おくられて女囚のあとを追

美木乃々子嬢の熱演

日本女性拷問刑罰集

キヤビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

○女囚三角木馬責め

三枚一組 略号(もと)

○石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

○凄惨女囚海老責め

三枚一組 略号(もに)

○女囚竹棒羞恥責め

三枚一組 略号(もち)

○白洲笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

○非情の開股責め

三枚一組 略号(もぬ)

○土壇で胴斬りの仕置

三枚一組 略号(もり)

○白洲調べに悶える

三枚一組 略号(もは)

った。

ミシュリーヌ奥さまと抱き合って、お互いの運命を嘆き合いたい心地だった。

彼女がミシュリーヌの胸中の委細を知っていたならば、前後を忘れて破獄を謀ったことであろう。

しかし、ミシュリーヌのことで日夜胸痛めるイヴェットとても、ミシュリーヌ奥さまの秘めごとは知る由もなかった。そして、ミシュリーヌも、ジュヌビエールのことは神かけて秘し通すつもりだった。

「もう三十分、早く着く汽車ないの?」

と、モレシエンヌが笑ってこぼし、

「二人とも眼が赤いようよ。寝不足ね」

と、片眼つぶって鉄格子扉を閉め、当直デスクに鍵を投げた。

シャワーを浴び終えたミシュリーヌは、体の変調を感じてうろたえた。今日一日の感情の激しさに、予定が三、四日繰り上ったらしい。ミシュリーヌは全身を染めて、イヴェットに訴えた。

「あの——どうやら、始まったらしいんですの。おねがいします」

語尾が消え、イヴェットは詰所に飛び込んだ。封切りの脱脂綿を差しあげねば——。

「あら、誰? ああ、四五三号ね」

イヴェットのあわてぶりを見て、フォンテイーヌがやさしく笑った。

「あの子、いつでもあなたに云うのね」

「そうですかしら。あの、赤札は廃止じゃありませんの? 新しい課長さん、なにかおっしゃってたようですけど——」

「検討中よ。ま、見込薄ね」

フォンテイーヌ補佐は肩をすくめ、ミシュリーヌの伝票を手にも、執務デスクへ去った。

ミシュリーヌは恥ずかしげに受取り、恥らいつつ装着し、房内衣をまとい、そして、首をさしのべる。規則の赤札をつけて貰うためだ。

ゴム紐を手にもイヴェットの胸は波立ち、彼女はしばしためらったのだった。

残されていた夕食を前にミシュリーヌは食前の祈りを捧げ、イヴェットを仰いで許可を待った。

すべての雑念は胸から消え去り、諦めと決意とが静かに深く、その全身に満ち溢れて来るのだった。

あの子のことは独りでやるのよ。誰にも云わないわ、誰にも——。

(未完)

『奇譚クラブ』の創刊号、第二号について

斎 藤 夜 居

『奇譚クラブ』は昭和四十二年一月号第二十一巻第一号で二二三号に達した。海外のことは知らないけれど、我国では特殊風俗文献誌としてこれだけ持続している雑誌は稀有である。まったく、ご同慶にたえない。私は以前にこの雑誌とも縁の深かった伊藤晴雨氏の伝の中で、「人間心理の迷路と密林の中には何が住んでいるか、どんな怪物がいるかわからないものだ」と書いた。サディズム、マソヒズムその他の変態性欲の心理と行動の世界については、いわゆる精神分析の学者間の論議だけではまだまだ解明しきれない面が有り余るし、今でもとかく陰惨な性的犯罪と結びつけられ勝ちで、このことは毎日の新聞紙上で

は必ずどれかの片隅に載っている。例えばかたいことでは定評ある衆知の朝日新聞でも、求人広告で女性を釣る、と題して石神井署に強制わいせつで捕った練馬区大泉町の不動産業者（五五）は、新聞広告に「お手伝いと自家用運転手をつのる」と出して、応募の女性に、「わしは以前、産婦人科医をしていた。採用後、子供ができては困るから」と医者ふりをしていたずらし、口どめ料として千円を出していた。A子さん（三二）の訴えがあるまで五、六人に同様のわいせつ行為があった（昭和40・11・30）。という記事があった。若し、である。この猥せつ爺さんの事務所を家宅捜査の際に『奇譚クラブ』その他風俗雑

誌数冊が発見されたとしたらどうであろう、警察や教育者は鬼の首でも取ったようにいうだろう——だから、ああいう雑誌を無くさなければいけないんだ——と。今更いうのも古臭い言葉だが変態性欲者と犯罪がすぐに結びつくものだとばかり思われる。さいわいにこの親爺がその種の雑誌は持っていなかったから良いが、私など社会的にも最も善良なる珍書ファンは新聞の性犯罪記事くらい冷やりとさせられるものはない。身边には常に何事も起らないことを祈っている、ましてセックス問題で衆目に自己をさらけ出すことなど真平御免だ。△性▽と△原罪▽に就いては私だっ

てたまには考えることがある、人間に神を思



創刊号の表紙



第二号の表紙

わぬ日があっても性を思わぬ日はない、という言葉もある位だが、すぐに異常性欲を犯罪に接着することは不都合だし、せっかち過ぎる、現代ではそういう解釈こそ危険なのである。『奇譚クラブ』が若し世相人心に危害を及ぼすだけの△思想▽が盛られた雑誌だったとしたら、まさか二百号以上発行を続けることができなかったであろう。娯楽読物雑誌の場合、その発行はあくまでも営利事業であり商業主義に違いはないが、発行・編集者の根強い企画に対する情熱と、この種の雑誌を支

持する多数の読者層の心理的親近感がなくては長く継続できるものではない。

◇ ◇ ◇

カストリ雑誌といってしまうと語弊があるけれども、いま試みに『奇譚クラブ』の創刊された昭和二十二年前後に発行されていた読物雑誌を手許のノートから、その誌名を抄写しただけでも左の如くである。

昭和二十年

探偵よみもの

昭和二十一年

猟奇

読物クラブ

オール軟派

りべらる

新聞記者

希望

ピンアップ

赤と黒

妖奇

昭和二十二年

太陽

東京

S文化グラフ

スリラー

人間復興

光

オーケー

テラス

変態集団

フーダニット

人情

犯罪読物

近代読物

ナンバーワン

性文化

リーベ	共楽	スバル
狂艶	座談	
昭和二十三年		
アベック	綺談	探訪読物
月刊実話	怪奇倶楽部	第一読物
幸福の友	ホープ	話
人性美	不夜城	号外
猟奇実話	探偵通信	仮面
ローズ	新しき街	ピンク
特ダネ通信	キャバレー	犯罪雑誌
オアシス	ハート	エンゲージ
新実話	ルビー	ラブファン
地獄	シルエット	猟奇読物
近代ロマン	風流艶色譚	マダム
新世相	パン	性苑
エロス	大衆娯楽	実話ロマンス
禁断の実	オール・ロマンス	世界の女
桃源	一流	ハッピー
オール猟奇	うきよ	怪奇雑誌
だんらん	千夜一夜	
昭和二十四年		
青春生活	VAN	オール小説
モダン日本	ラッキー	サロン

小説世界	小説文庫	読物世界
読物界	青春サロン	ルックエンド
浮世小説	読切小説世界	ヒヤール
奥の奥	性知識	チャンス
サンルーム	ナイトクラブ	トップ
好色文庫	快楽	ピエロ
唇	赤裸々	ブラック
裸女苑	怪奇実話	寢室
ベージェ	青春タイムス	小説の華
にっぽん	大衆読物	小説ファン

これだけではない。とにかくべら棒な誌数ではあった。一口に雨後のタケノコと称したが無理も無い話である。所で、以上に列記した雑誌群は一誌として現存していないのである。『奇譚クラブ』だけ残った——多数の誌名をここで記録したことは、これらの中から何故残り得たかを強調して見たかったから、お互いに考えてみたい問題がありそうではないか。

◆ ◆ ◆

『奇譚クラブ』創刊号 昭和二十二年十月
編集兼発行者 吉田稔 二十三頁 定価十八円 発行所 曙書房
目次

土俗玩具の研究(一)	左海 山人
諸国艶咄集成	内海 勇造
観客を蕩酔させるフラダンス	中原 春美
ゴム製雨外套の弁	浅川 暁
産婦人科医の見た世相ABC	杉田きよし
接吻と口腔の科学	八木 久一
春宮図と禁厭	鮎川 和夫
上海の魔窟	浮田 次雄
夜の大阪	弓削 忍
好色落語 臍の次	夢幻亭痴庵
街の裏道	木村 一三
註。この他にコント・埋草の短章が多い。そしてここに記載したものも長くて二頁きりの読物で、表題だおれで内容のある読物は一つもない。只、奇とすべきはカストリ雑誌の表紙は裸体画オンリーの時代に、どいう訳だか竜の画になっている。	
『奇譚クラブ』第二号 昭和二十二年十一月	
編集兼発行人 吉田稔 二十七頁 定価十八円 発行所 曙書房	
目次	
変態奇人変り種探訪	弓削 忍
エロ亡者漁色行状記	信田 春男

一糸まとわぬモデル打明話

水原 淳子

原始人の変態生活を探る

矢部 文吉

闇の女の生態

忍頂寺 穰

異国変態風呂めぐり

青木 富児

僕の男妾の告白

中原 春美

肉蒲団の翻訳過程

豊艶文庫主人

註。二号は創刊号より内容は幾分よくなっている。が今日の奇譚クラブとくらべたら驚く程稚拙な内容で書誌として歴史的懐古的な意味以外には、強いて再読の必要はない。表紙は刺青女のヌードで感じはよい。

◆ ◆ ◆

戦後の性風俗雑誌は何といっても『人間探究』（創刊 昭和25・5 休刊 昭和27・12?）と『あまとりあ』（創刊 昭和26・3 終刊昭和30・8）に、この種の特殊雑誌の積年のウツを晴すことができた。この両誌の評価は今日でも高い——これは事実。

特に『人間探究』の編集陣には旧改造社系の本格派も居り、誌面上に性革命の一種の殺気をはらんだ気味合いも濃く、我国の性文化面に果した役割は偉大なものがあつた。が、後半に至るとまるきり読物雑誌化して竜頭蛇尾のまま消えてしまった。『あまとりあ』は今日でも記憶している人々も多く、御存知の

高橋鉄氏の主幹誌ではないかと思われる位、同氏が全エネルギーを傾注した雑誌で、性科学面より性風俗誌として特色があつた。

所で、この出色の両誌が華々しく活躍している時代にも『奇譚クラブ』は独自の立場で着実に発行されていたのだが、どういう訳か特別に注目される存在ではなかった。……間もなく『風俗科学』（創刊 昭和28・9 休刊 昭和・2911?）が発行された。これは性資料価値をいうより、サディズム、マソヒズム、男色の風俗読物誌で、現在の奇譚クラブと殆ど同色系統のもので十一、二冊発行されたと思うが何時の間にか書店から消えた。この頃、正確には昭和三十年四月二十八日に、東京都では俗悪雑誌の大検挙が断行され、つまり猥褻文書販売頒布の容疑ということで、カストリ雑誌、ゾッキ雑誌、性的風俗雑誌は完全に潰滅してしまった。惜しむらくは、私はこの時代の『奇譚クラブ』の内容を知らない。とにかくこの荒波をたくみに避けたばかりか、継続刊行の実績がいつの間にか特殊誌現存雑誌としての稀少価値を生じ、更に重要なことは、読者の年齢層が甚だひくくなって来たことであつた。オールドファンは後退し始めた——新規な若い読者が増え始めた。私

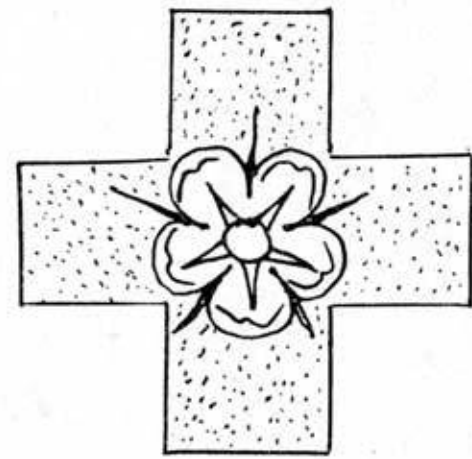
など書店で目次を見て、伊藤晴雨氏の稿の掲載号だけを買う、という古い匂いを好む読者は少なくなっていた。

附記

私の手許にのこっている『奇譚クラブ』の創刊号と二号は駅の売店で買ったものだと思ひしている。この雑誌の創刊された年は片山哲氏の内閣で、社会党がたった一度だけ政権を握った記念すべき時代であつた。寿産院事件があり、帝銀事件が起つたりした翌昭和二十三年の三月には芦田内閣が成立して、社会党は九カ月間の短い夢を見ただけであつた。『奇譚クラブ』の生れたのはそういう時代である。

いまこの雑誌を手にとると、紙がひどく変色して、まるで薄ぺらな古雑巾みたくである……左様、もう二十一年経っている。私の頭も禿げ上ってしまった、好奇心はちっとも昔と変わらないのだけれども。





ローゼン・クロイツの紋章

妖^{よう}靈^{れい}城^{じょう}

(第三回)

黒淵賀集子^{くろぶち かつしゅ こ}

九、昭和四十年四月三十日

金曜日、早朝の事

「賀集子。昨晚はよくねむれた？」

「ええ。このお薬飲んだの」

「ブドウ酒か。飲み助だな」

「あなたは寝られたの？」

「それがね、どうも気になる事があって」

「なあに」

「かすかにうめき声が聞こえたんだ。女の人。それが仁視^{ひとみ}さんのらしい」

「まさか」

今日の予定は浩月山のお城見学としてありますすが何が出る事やら。

「仁視^{ひとみ}さんが出て来たよ」

「なんともないじゃないの」

仁視さんの出勤と途中まで道が同じなので

いっしょに出かける約束でした。

天籟寺から赤萩町へ出るには、自動車で行こうとすれば、一度天霧峠へもどってから下りなければなりません、歩いて通れるだけの山道なら天籟寺から浩月山の脇へ近道がついています。

朝のあいさつをしたとたん、嬰一と私は同

時に気がつきました。仁視さんの両手首に赤

い縞がついています。縛られたあとみたいで

す。私達が見ている、と気づいた仁視^{ひとみ}さんは

あわてたように手首をかくしました。

「写真をこわした事で、おじい様に叱られま

したの」

すっかり顔を赤くして、ずいぶん言いにく

そうに見えました。

それから、三人そろって山門を出たのに、

別れ道につくまで会話が途切れてしまいました。

錦繡山から下りた道が浩月山に向って上る

うとする底に猪峠という立札が立っていて、T字形に交った第三の道が左へ下り、赤萩町へ続いています。道の両側は松林続き。昼でも暗いようなところ。夜はどんなにさびしいでしょう。仁視さんは毎日この道を通るのです。昼の短い季節など恐くはないのでしょうか。雨の降る夜もあるでしょう。風の日もあるでしょう。

それなのに、

「二人の女性がテントを張ったという場所はどこへんですか」

嬰一はいつもの通り無遠慮に聞きました。

「お城の方へ少し上ったところに井戸のようなものがあります。その近くは林がきれて広くなっています。あそこだそうですね」

「なるほど。痴漢よりは幽霊に向いている」

「一人はテントの中。もう一人は立ったまま西側の木に縛られていたそうです。針金やら藤づるやら荒縄やらで、編んだみたいに何重にも縛ってあったと聞きました」

「よろいを着た幽霊を見るのも、やはりここですか」

「そうです。帰りのおそい夜など。お城の方から現れて天籟寺の方へゆっくりと」

「こわくないのですか」

「ええ。亡びた赤萩氏の魂を祭るのが天籟寺に住む者のつとめですから。いつもお経をとねえたら、すぐ見えなくなります」

十、午前十時までの事

弦月城の大手は西に当り、靈曜山の出丸、浩月山の三の丸、二の丸を経て山頂の本丸に続いています。私達は裏門に当る東の猪峠から登ったので、まっすぐ本丸の後につましました。けわしい道でした。嬰一は曲り角ごとに腕時計型の磁石で方角を調べ、地図で地型を確かめました。

「天籟寺を出てから、ずいぶん歩いたようなのに、あんな近くに見えるわよ」

本丸跡の石垣は天籟寺より少し高いので、双眼鏡を使うと境内がよく見えます。

「天籟寺は錦繡山の西斜面にある。三方は松林に囲まれ、開いているのは東の正面だけのようだ。もし天籟寺をこっそり観察しようとする者があれば」

浩月山は南から見ると大きな山ですが、山頂はとてもせまく、帯のような石垣が東西にわたっていました。横幅はありません。

「ここから見下すのが一番いいわけね」

私は石垣の上を見廻しましたが、こんな朝

早くに上ってくるような物好きはいるわけありません。

「小さい石垣なこと」

「戦国時代の山城はみんなこうだよ。実用本位だ。手近の材料で急造するからね」

大阪城や名古屋城で見たような大きな石はありません。東の端にある天守台跡と立札の立った部分でさえ高さ三メートルもないくらいでした。石垣全体が自然石の一枚岩の上に乗っている感じです。壕もなく建物はもちろん屋根瓦一枚落ちていませんが地形だけはすばらしく堅固である事はよくわかりました。

「弦月城と天籟寺の関係がよくわかるね。浩月山は西以外の方角からは攻められないが、水と食糧が入用だ。天籟寺は猪峠経由の補給拠点であり、婦女子等の避難所、傷者病者の潜伏場所、予備品の貯蔵所にもなる。もしも城が陥ちたら城主は天籟寺に逃れてから腹を切る」

「お城とお寺を上手に組み合わせたのね」

「日本中の城はみんな寺や神社を利用していろよ。加賀金沢城は峰続きの山に天徳院という寺を置いてあるが、この組み合わせとよく似て更に大規模だ。仙台青葉城は城の両翼のような峰々に寺や神社を並べてある。肥後

熊本城は街道の出口、橋の内側などに必ず寺を置くようにしてある。もったいい例は江戸城で、東禅寺、普福寺、自証院、牛天神、伝通院、寛永寺、浅草寺、木母寺、法恩寺を結ぶと防衛線が出来る」

私達は本丸から二の丸、三の丸へ下って大手門へ出ました。ここで、記念撮影。

嬰一は手頃な樹木を指すだけ。

私はその木を背中で抱く。

嬰一が私の手首を重ねて軽く縛る。

どうも日常生活の一部みたいです。これだけのことが無言で進行するのですから。

「このお城、あまり広くないみたいだけど、何人ぐらいいたのかしら」

私は縛られたままで石垣を見上げました。

「昔の本に三千余騎と書いてあるが、そんなに多くはないだろう。広さから見て二コ中隊三百人ぐらいかな」

嬰一もプレイとは無関係に答えながらカメラを構えています。

「その人達、みんな死んだの？」

「国内戦で最後の一人まで戦って死んだ城なんて、ほとんどないよ。戦国時代に男は大切な資源だから無意味に殺したりはしないだろう。猪峠で死んだのは多分赤萩氏の一族だけ

だと思うよ」

十一、午前十時から正午までの事

弦月城の大手門跡に立って西を見ると、浩月山から赤萩町に下る道が見えます。赤萩町は四百メートルの下に霞んでいます。鉄道も通っていない小さな町で、工場らしい建物や高い煙突はどこにも見当りません。道路はせまく折れ曲っています。大きな屋根は、ほとんどお寺のようです。小さな町なのに、なんとお寺の多いこと。併し小さいながら古風な美しさのある城下町だと思いました。

「町へ下りてみよう」

「このままで歩かすの？」

御想像通りです。

私は木から解かれるとすぐ、同じ紐で後ろ手に縛られてしまいました。

他人が見ていなくて

私の手があいている

二つ条件がそろうと、いつもこうです。私の両手は背中で休むことになります。でもいいんです。彼が満足していますから。

「猪峠に幽霊が出るって、本当かしら」

私は縛られたまま、ゆっくり山道を歩き始めました。

「今度、夜おそくに行ってみようか」

「それで、出たらどうするの？」

「賀集子をおいて逃げる」

「私はどうなるの？」

「朝まで縛られているよ。助けに行くから」
両手を後ろに縛られて坂道を下るのは、とても危険です。もしも転んだら曲り角までは止らないでしょう。

でも嬰一は口ほど人が悪くないので、荷物を全部持って、私の斜め前を歩いています。私が転びかけたら支えるつもりです。

それでもサディストなのでしょう。

縛るのは、そんなに面白いのかしら。

わざと転んでみようと思ったけれど止めました。嬰一は何か考えこんでいるようです。

「幽霊って、実際にあるのかしら」

「昔からあると言われているから、あるんだろう」

「昔にはあると言われていて、今は出なくなったもの、たくさんあるじゃないの。テングやオニ。カッパ……」

「東洋と西洋が全然交流していなかった頃から幽霊は東西別々に記録されている。アメリカ・インディアンの社会にも、南洋のポリネシア人の間にも、アフリカ土人の中にも、エ

スキモーにも独自の幽霊がある」

「そんなら竜や人魚はどうなの。中国にも、

ギリシア神話にも出てくるわよ」

「幽霊や化物は現代でも現れる」

山道は浩月山から霊曜山にわたり、山腹を一とめぐりしながら次第に赤萩町へと下りて行きます。途中で山に木を切りに来たらしいお爺さんと一度だけ出会いました。私はびっくりしましたが、すぐ嬰一が私の肩を抱くようにして後ろの手首をかくしました。きっと仲良く肩を組んだ姿に見えたでしょう。

「幽霊と化物は同じじゃないの？」

「幽霊は特定の人に不特定の場所で現れる。つまり殺した相手や好きな人を、どこまでも追いかける」

「化物は？」

「特定の場所で不特定の人に対して現れる。人間以外のものが化ける事もある。化物屋敷などがそうで、殺された場所で周期的に現れそこに来るすべての人にたたる」

「すると、このお城に出るのは化物の方ね。

なぜ誰にでもたたるのかしら。殺した相手にだけ、とりつけばよさそうなものなのね。

「いったい幽霊や化物の正体は何なの？」

「一種の放射能だよ」

「放射能だって？ お化けと原子力が関係あるの？」

「そう。人間の思考力は電波みたいなもので脳から輻射している。怒ったり興奮したりすると強い脳波が出る。多分ホルモンか乳酸の作用だろう」

「わかりかけて来たわ。人の脳をはなれて電波だけになったのが幽霊なのね」

「その通り。だから生霊いきりようのこともある」

「人が殺される時の執念は特に強い電波を出すから、いつまでも怨霊になって残るのでしよう」

「死の直前に輻射された脳波は、その建物や岩石に吸収されて副次放射を起す。放射能の持続期間は最初に浴びた脳波の強さと、それを受けた材質の種類による」

「六百年も保つかしら」

「自然界に存在する物質には放射能の半減周期何千年というのがあるよ」

「思い出したわ。ポオの小説にそんなのがあった。化物屋敷の壁をこわして直したら、出なくなつて、とても住み心地のよい家になつたって」

「こわくなくなっただろう」

「ええ。でも幽霊が放射能だとしたら、影が

眼に見えるだけで、実体は何もないんでしょ。縄を使ったり、人を縛ったりするのは幽霊じゃないわね」

「そうとばかりは言えないよ。脳波が自然界の波動と同調したら無限大に増幅される。テレキネシス（念力）がそれだ。縄を動かす事ぐらい出来るかもしれないね」

話している間に町が近くなりました。

「誰かに見られそうよ。この紐について下さらない」

「自分の手だろう。自分でとけよ」

「そう言うと思つてた」

「なに」

「もう、とけちゃったの」

「こいつ」

「逃げるわよ」

「待て」

あとはマラソンです。

私の持物は紐が一本だけ。

彼の方はカメラと双眼鏡と鞆と地図。それに私のハンドバッグまで持つて。

これだけハンディをつけても嬰一の足にはかないません。なにしろ「アリアドネを追いかけて、つかまえてみせる」と自慢している早さですから。

でも私に追いつこうとしません。ゆかいそうに、ゆっくり私の早さにそろえて、すぐ後を追って来ます。

十二、午後之事

赤萩の町は霊曜山のふもとから始まります。その端の方に飲食店が何軒か並んでいます。私は、うどん屋の一つが『赤萩新聞発行所』の看板を並べているのに気づきました。嬰一と黙って顔を見合わせ、同時にうなづく。意見一致。

そこでうどんを食べに入りました。

嬰一のセールスマンの話術は一流です。忽ち店のオヤジさんを横の席に坐らせて、ボロ新聞をほめたりオダテたり、すっかりいい氣持になった赤萩新聞編集長兼小使氏は猪峠の一件を全部話してくれました。そして終りにこう言いました。

「年に二回か三回幽霊が出てくれると有難いですな。新聞がよく売れますから。でも被害者の娘達は二人共幽霊だと信じ切っていたようですよ。手が冷たかった。あんな冷たい手は人間のものじゃない、って言ってました。それ以来、二人共この町に寄りつこうとしません」

十三、夕方之事

私はうどん屋で嬰一と別れ、中学校に向いました。仁視さん^{ひとみ}といっしょに帰るつもりでした。

嬰一は大阪に電話すると言って、この店に残りました。嬰一が仕事のことを言いだしたら、どんな場合でも引き止められません。

中学校の校庭で何人かの生徒に仁視さん^{ひとみ}の事を尋ねてみました。とても評判の良い先生だという事がわかりました。あんな美人で、二十五才の独身なのに噂が一つもないなんて信じられません。

それで急に気が変わりました。

あとをつけてみようと思ったのです。

でも、ミリタリー룩のジャケットにグレイのスラックスという私の服装は、四月末の赤萩町では目立ち過ぎたかもしれません。

私は（頭はあまり良くありませんが眼は遠くまで見えるので）霊曜山のふもとまで気づかれずに仁視さん^{ひとみ}を尾行できました。けれど何かある事を期待していたのに変わった事は起りませんでした。仁視さんは食べ物や日用品を買いに何軒かのお店に寄っただけでした。ただ最後に或る町角で、まるで待ち合わせて

でもいたように、背の高い女の人と出会いました。赤いセーターにプリーツスカート。高校生ぐらいの年頃と思います。二人は並んで町はずれまで歩きました。お話ししているみたいですが、語っているのは相手の方ばかりで、仁視さん^{ひとみ}は頭をさげて時々うなずいたり首を振ったりするだけでした。気のせいかな、仁視さん^{ひとみ}がいじめられているように見えませんでした。

仁視さんが女の子と別れて天籟寺へ上る山道に向ったので、私は足を早めて追いかけてました。そして驚きました。仁視さんは静かに歩いているのに、どうしても追いつけないのです。いつも山を歩いているので、こんなに早いのか。それとも特別な歩き方なのか。

遠くから仁視さん^{ひとみ}を呼び止めて、やっといっしょになれました。

「さっき町の中で並んで歩いていた女の子、きれいね。どなたなの」

私は何の気なしに聞いたのですが、とたんに仁視さんの顔色が変わりました。

「中学生の時教えたのです。私の受持で」返事を聞くまでに少し間がありました。

十四、夜之事

「嬰一と二人だけになると、私は仁視さんの行動を順を追って説明しました。」

「ひとつだけ、おかしい事があるね」

「並んで話した女の子でしょ」

「いや。買物だ。先ず薬屋」

「次が化粧品店。そしてお肉屋さん。あっ」

「私はどうもにぶくていきません。嬰一に言われて、始めて気がつきました。」

「今夜も精進料理だったね」

「たしかに買っていったわ。すると……」

「この寺にもう一人いる。それは肉食する俗人だ。そして我々の前には現れない」

「なぜ出てこないのかしら」

「明日わかるかもしれない」

「大阪へ電話したわね」

「新聞社の同期生に調査をたのんだんだ」

「何の調査？」

「わかるまで書えない」

十五、昭和四十年五月一日

土曜日、早朝の事

「賀集子。ちょっと来てごらん」

「嬰一が私を起こしました。」

「まだ明けきらない、うすあかりが障子の外に見えます。」

「嬰一は西側の障子に小さな穴をあけ、双眼鏡を外を見ていました。」

「そんなことをしないで開けて見なさいよ」

「私は障子に手をかけました。」

「開けてはいけません。弦月城の上から、この寺を観察しているものがある」

「嬰一は私に双眼鏡をゆずりました。」

「ほんとだわ」

「レンズを障子から少しはなすのだよ。くっつけたら向うから光って見える。いるだろ。」

「本丸の石垣。右側に寄った松の上」

「動きました。明かるくなるのを嫌うように

かくれました。だが見えなくなる前に正体を認めました。」

「長い髪。女のように。向うも双眼鏡を持ってるわ。黒い上着にタイツ。あんなかつこう

で昼間は歩けないでしょうに」

「天霧峠で助けた女じゃないか」

「服装は似てるけれど違う人みたい」

「それじゃ、仲間だろう。同じスタイルの女の一団が、この寺をねらっているわけだ」

「もう一度だけ、石垣の上に顔が現れ、すぐ

見えなくなりました。でも私は、はっきりと見ました。まだ子供です。きのうの夕方、中学校からの帰りに仁視さんといっしょだった

「高校生のような女の子です。」

「私が説明すると嬰一も考えこみました。」

「何者だろう。この寺に何があるのか」

「仁視さんが、おどかされていたみたいよ」

「帰るか。もう少しいるのがよいか」

「和尚さんに知らせましょう」

「その必要はない。たぶん知っているよ。我々でさえ見つけたような相手だ。この寺を、

そっと観察しているのではなくて、いやがらせをしているのだらう。それに和尚さんの部屋で見たんだが、いい軍用双眼鏡があった」

「このお寺には正体の知れない和尚さんと、どこか普通の人とは違う仁視さん」

「猪峠の谷をはさんで向うの城には黒づくめの女怪人がいる。その一人は、どうもこの寺

に捕えられた事がありそうだ」

「人の来ない所で魔法の競争でもするのかしら」

「その通りかもしれないよ」

「まさか」

「仁視さんのペンダント見たかい」

「おぼえてる。珍しいもの。バラと十字架を組み合わせたような模様。あれ手製でしょ」

「魔法師の結社にバラ十字会というのがあるが、そのマークにそっくりだ。バラ十字会が

現代でも存在するかどうか知らないが、十九世紀末まではたしかに記録がある。或は……」

十六、昼の事

今日は赤萩町の名所見物としてあります。

和尚さんが『名所』の数々を教えて下さいました。人口七千ぐらいの小さな町なのに、お寺や神社やその他の『名所』がなんと二十幾つもありました。

仁視さんといっしょに赤萩町へ下り、浩月山のふもとで別れ、私達は高等学校の方へ向いました。高等学校は天霧峠から下りてくる道が赤萩町に入るところにあります。運動場の反対側に丁度いい高さの山があり、適度に雑木が茂っています。私達は双眼鏡を持って山林にもぐりこみました。

千人以上の生徒から目的の一人を見つけるのは大変でした。でも私はとうとう見つけました。浩月山の上から天籟寺を見ていた娘は高校生の制服を着て、髪形も子供らしく直し生徒の中にまじっています。しかし美しい顔と背の高さを見間違えるはずはありません。夜がまだ明けない間に浩月山へ上り、天籟寺を観察し、いそいで服を着替え、知らぬ顔で学校へ登校したという事になります。

「きれいな顔だね。日本人ばなれしている」

「髪は黒いけれど混血じゃないかしら」

「嬰一と私は交替に双眼鏡で観察しました。」

「ここまで来たら、あとに引けません。」

「賀集子。あの娘を調べてごらん」

「何を調べたらいいの？」

「姓名、住所、家族その他何でも。特に、蛇が自分の口で自分のシッポをくわえているマークをつけた何かを持っていなかったかどうか」

「あったら」

「古代魔法を代表するグノシス派という事になる。バラ十字会とは仲が悪い」

「魔法にも流派があるの。甲賀流と伊賀流みたい」

「あるよ。ユダヤ系、アラビヤ系、エジプト系、ヨーロッパ系、その中が更に幾つにも別れる」

「グノシス派というのは？」

「エジプトで発生し、ユダヤとギリシャで発達した知性^{ソフィア}を重んじる魔法の流派だ」

「もし、そのグノシス派だったら、魔法使いの争いになるわけね。で、あなたは何かをするつもり？」

「天籟寺について調べる。ここで別れよう」
土曜日の昼を待って私はあとをつけ、自宅

をたしかめました。農家を改造したような大きな一軒屋で赤萩町から北に少しはずれた所にあり、表札は『青垣麗子』と女名でかかっていました。

赤萩町は小さな町です。このあとは『赤萩新聞編集長』の所でうどんを食べながら、みんなわかりました。

「赤萩町のような山の中にも美しい娘さんがいますのね。この北の青垣とかいう家の前で見ましたけれど」

私の言ったのはこれだけ。あとは全部『編集長』ひとりでしゃべりました。

青垣麗子というのが高校生の娘だそうで、母親と二人暮らし。二年前から住んでいます。

母親はマリア青垣。三十五才ぐらいに見えるけれど、娘の年からみて四十でしょう。ポルトガル系ブラジル人で、ヨーロッパ的な顔だそうです。

父親は日本人で、先代の時に赤萩町からブラジルに渡り、向うで成功したが、近く財産をまとめて帰国するとか。その前に母親と娘が先ず家を買って皆を迎える準備をしているとの事です。

家は古い農家を買って洋間や車庫を増築したらしいが、学校の友達も奥まで入った者は

ないようです。

母親は自動車を運転して外出するが、日本語がまだおぼえられないのか誰とも話しをしない。との事。天霧峠で助けた婦人はこの母親かもしれません。すると私がどうしても理解出来なかった外国語はポルトガル語という事になるけれど、どうも違うようです。私はスペイン語なら少しわかります。スペイン語とポルトガル語は似ていなければならぬのに、そうではなかったように思います。

娘の方は日本語も上手で、頭もよく、学校の人気者だそうです。でも赤萩町の中学校にはいなかったようで、^{ひとみ}仁視さんが教えたというのは、うそです。

家には強そうな犬が三匹。猫がたくさん。乗用の馬もいるようです。

もう一つ。十日ほど前から母親の弟と義妹という夫婦らしい外人が泊っているとか。

「ふしぎな一家です。二年住んで、赤萩町の者とは商賈人以外つきあいがいいんですから。生活費はブラジルから送金して来ます。たった一人だけ、あの家に入入している者が山奥の天籟寺住職の孫娘です。娘の方と仲がいいんですが、なぜなのか誰も知りません」

十七、夜の事

三度目の夜が来ました。

本堂裏の客間に私は一人で坐っています。仁視さんが、お夜食を置いて出て行ったら、もう一時間以上たっています。

飲み残したお茶は、すっかりひえました。私はネグリジェに着替え、あとは寝るばかりです。

そろそろ十時でしょう。

それなのに嬰一は帰って来ません。

道に迷ったのでしょうか。

いいえ。嬰一は道を間違えるような男ではありません。それに嬰一の眼は余り良くないけれど、夜になるとよく見えるのです。

何かあったのではないかしら。

猪峠で。

そこは赤萩の町から天籟寺へ向う時に必ず通らなければならない所です。

障子が音を立てています。

どうやら風が出てきたようです。

どこから風がはいるのか、

石油ランプに照らされた私の大きな影が壁で揺れています。

時々、足音のような気配に、ぞっとさせら

れました。

木の枝がすれ合う音かもしれません。

私は立ち上って窓を少しあけました。お寺によくある華頭窓です。

中庭で木が揺れていました。その向うに灯が見えます。仁視さんの部屋のようにです。

あの部屋に行つて、嬰一が帰るまでお話しさせてもらおうかしら。

と思ったけれど止めました。仁視さんの部屋も気持のよい所とは言えません。

もしかしたら、今頃は恐い姿で魔法の薬でも煮ているんじゃないでしょうか。

明日は嬰一を引っぱって帰ろう。

私はそう決心しました。

でも問題は今です。

何かしたい。どんなつまらない事でも、何もしないよりはいい。

突然、下の石倉で生物の動くような音がしました。そのように思いました。私は立ちすくみましたが、すぐ思いなおして石油ランプを持ち上げました。

階段から下へ淡い光がさしこみました。石油ランプの光は下を照らすのには向いていませんが、動くものは何もない事が見分けられました。

闇の中に、よろいもかぶとも太刀も、しんと鎮まりかえっています。

そして、あの恐い箱も。

私は石油ランプを下げて石倉へ下りる階段へそっと足をふみ入れました。

弓もナギナタも元の位置にじっとしていました。影だけが石油ランプの高さと逆にすつと姿勢を高めました。

私の足音と呼吸の他には何の音も聞こえません。石倉の壁が厚く、半分が地下にあるからでしょう。

私は石油ランプを床の中央に置いて、あの箱の前に立ちました。

なぜ箱に興味を持ったのか、自分でも説明できません。

私のうしろにはよろいがありました。

左は階段。右は太刀、弓、馬具など。

正面の箱にかぶさるようにして私の影がありました。

急に、私の影が動きました。私はじっとしているのに影だけが動いたのです。そう見えただけで錯覚でした。実際はもう一つの大きな影が現れたのです。

驚いて振り返ると、私の目の前によろいが立っていました。石油ランプのこちら側に、

光を背負って黒々と突っ立ち、箆手を大きくひろげています。

私は叫ぼうとしましたが、声がのどに詰まって出ません。

余り驚いたので、はっきりおぼえている事は、ほとんどありませんが和尚さんでない事はたしかです。ずっと背が高く、幅もあったように思います。

それと、もう一つ。

真赤な眼。

これだけは間違いなく、おぼえています。かぶとの下、面頬めんぼうの中で。

顔を見分ける事もできないほどの暗さなのに、眼だけは真赤に燃えていました。

なぜ眼だけ、はっきり見えたのでしょうか。

よろいが近寄りました。

冷たい手が私の肩につかみかかりました。

氷のような手です。ネグリジェを通して、骨まで凍らせるような冷たさでした。

真赤な眼が大きく大きくひろがり、私を包みこんだように感じました。あたり全体が真っ赤に、次に真っ暗になりました。

十八、夜の事（続き）

ひどい痛さで眼がさめました。

どうやら正坐の姿勢で、更に上半身を前に伏せたような形で気絶していたみたいです。

下になっていた足は、すっかりしびれて感覚を失っています。動かそうとしたとたん、電気にふれたような痛さが頭のとっぺんまで突き抜けました。

痛い、

と叫んだつもりでしたが、声が出ません。

口は弾力のあるものでふさがれています。口の中いっぱい何かつめこまれています。

手も動きません。両手首は背中がかさねられ、固く縛られています。

上半身を起こそうとしたら背中が何かにぶつかりました。

両腕と肩は左右から、しっかり支えられています。上下四方を固いものに囲まれているようです。

脂汗が流れ落ちるのが、はっきりわかりました。

石油ランプがついていました。眼かくしはされていません。

階段が前の方に見えます。さっきと同じ石倉の中です。階段の上は真っ暗です。昼なら上の方から光がさすはずだから今は夜半でしょう。

現在の状態は明らかです。両手はうしろに縛られ、棒を組んだ箱に詰められているのです。その上にサルグツワです。

この箱は中に入る人の体格に従って幅と高さを変えられるようです。ネジみたいなものが見えます。私は三つに折られた形で、背中も両脇も頭も丁度いっぱい箱に詰められて動けません。よろいを着た『幽霊』のしわざに違いありません。

余りの痛さと苦しさに頭の働きはにぶくなっていました。でも私はあわてたりはしませんでした。生来鈍感なのかもしれませんが。

さっきは、びっくりしたけれど。

こうなってしまったら、あわてても仕方ありません。

私は眠っている間に縛られた事が幾度もあります。ビールを飲んだあとは朝まで絶対にさめないで、嬰一は時々計画的に私に飲ませます。眼がさめると、みの虫にされているという次第です。（嬰一はアルコールとニコチンが大嫌いですから飲むのは私だけです）

丁度このような感じでした。朝になって縛られている事に気がついてもう別に腹は立ちません。またか、という程度の気持です。ただし手が体の下に入っていると、しびれてしま

って自分ではとけなくなります。

今の場合、私は正坐で上半身をひざにかさねるぐらい折り曲げられていましたから、両手首は背中の上にありました。足はとがった木の上にあり、全身が上下四方から押しすくめられて苦しい事はこの上ありませんが、手の指はどうか自分の意志で動かせます。うしろ手の縄がとけたら、箱から出る方法があるかもしれない。

私は指先で結び目をさがしました。これが見つければ、たいていは自由になれます。

だが驚いた事に結び目は、いくらさがしてもありません。

手首を縛ってある材料を引こうとしましたが爪が掛かりません。すべっこく、固い冷たい、弾力の全くない材料でした。私はやっと気がつきました。

これは針金だ。自分ではとけない。

針金は幾重にもより合わせて、端を両手首の間に埋めてあるようです。天霧峠で見た女の人が縛られていたのも、この方法でした。私はただ一本の針金の拘束をどうする事もできません。

天籟寺の妖怪。それは人を縛って喜ぶ化物です。もし人の形をしていたとしても、私は

化物と呼びます。私をこんな目にあわせて。人間じゃありません。

嬰一のサディズムにはもっと違うものが、愛とやさしさがあります。よろいを着た『幽霊』は残酷のかたまりです。

でも、その正体は何でしょう。

どこへ行ったのでしょうか。

私を箱に押しこんだきりで、近くにいます。配はありません。

或は、どこかから、私が苦しんでいるのを眺めているのかしら。

縛られてから余り時間がたっていないようです。サルグツワがまだ乾いています。

首がわずかに動かせます。石油ランプの向うを見ると、よろいが置いてありました。

はっと驚いたけれど、よく見ると少しも動きません。かぶとも籠手も面頬もじっとしています。

足の方を注意して見ました。

幽霊に足があるものか。

よろい下のひたたれ（という着物）

すねあてに革靴。全部そろっています。

しかし中に人がいるようには見えません。

左にねじ曲げている首が、くたびれて支えられなくなりました。それでも無理にもう一

度だけ振ってかぶとの下を見ました。

面頬の中を。

でも、あの恐ろしい真赤な眼は見当りません。よろいの中は空のようです。

石倉の中はしんとして聞えるものは、私自身のうめき声だけです。

口の中に詰められた布がぬれてきました。

サルグツワを噛まされっていると自分のツバを飲む事ができません。次第に口からあふれ出て来ます。無理にからだを動かしたせいでしょう。



孤独の緊縛

牧 洋 子

『孤独の緊縛』と申しましたが、皆様には何

のことか、おわかりにならないことと存じます。何故なら、私だけが味っている淋しくもまた楽しい、そして、ひそかな緊縛のことだ

ようか。肩も腕も砕けそうに痛みます。もう

がまんができません。でも、箱は私のからだをぴったりとおさえ、身動きもさせないので、何度も意識が遠退きかけては又もどりました。朝までなんとかがんばらなければ。

突然、眼の前に光がさしました。石油ランプではない別の灯です。

顔をあげると光の中に仁視さんが立っていました。こわばった顔で、感情のない眼で、私の方をじっと見ています。

右手には真赤な灯。

左手には**い**い銀色の鎖。

背に黒いマントを着ていました。

私は思わずサルグツワの下で叫びました。いや、うめきました。

これが私に残された力の全部だったようです。眼の前で無数の赤い星が飛び交い、それが一つの六角なソロモンの星形になり、私はそのまん中に吸いこまれるような感じで急にすべてが失われて行きました。

びと苦しみの世界に遊ぶ、信じられないようなことだからなのです。まあ、私の話をお聞きになって下さい。だんだん、おわかりになってくると思います。

では、始めての時のことを、お話ししましょう。あれは一年前の六月の末のことでした。長い入梅も明けて、何となく気分が開放されるような気候の夕暮、私は何となく落付けない気持でじりじりしながら、時計ばかりを眺めていました。

「あの人、本当に来るのからし？」

と、いいますのは、この前の日曜日のお昼前、アパートの一人暮らしの気易さから、ごろごろと寝そべって奇クを読んでいたとき、一

人の化粧品のセールスマンが訪れたのです。バッグから化粧品のサンプルを取り出して説明しながら、ふと、私が部屋の隅に読みさしのまま、置いてあった雑誌に目をやると

「おや貴女も読んでいらっしゃるんですか」

「ええ」と答えたものの、私は自分の胸の中を見すかされたようで、思わず耳たぶが真赤になる思いでした。

「貴女は、自分の縛られた姿を、ごらんになったことがありますか。それは、きっと貴女の最も美しい姿で、新しい自分の肉体の美を発見されることになるでしょう」

彼は並べてある化粧品のかずかずを押しやると、膝をすすめてきました。

「でも、恥しくって、とても私なんか……。それに人に見られるなんて……」

私は口ごもりました。

「いえ、誰にも見られる訳じゃないんです。

貴女だけが、一人で、鍵をかけたこの部屋で縛られた自分の肉体を、ゆっくり楽しむことが出来るのです。全く信じられないとお思いになるでしょうが、しかし事実なのです。では、今度の水曜の夕方七時半に参ります」

化粧品をバッグに納めると、丁寧に一礼して彼は扉の外へ出ました。そして、今日は約

束の水曜日の夕方なのです。不安と期待で私は落付きませんでした。

「本当に来るのかしら？」

もう七時半になるうとしているのです。その時、コトリ、コトリと靴音がして扉の前で止まりました。「来た！」私の胸は急に高鳴りました。「どうしよう？」「今更なによ」二つの心が私の心の中で争っています。でも、それは一瞬のことで、私はドアの鍵を開け彼を中へ入れてしまったのです。

「ドアに鍵をかけて下さい。鍵は差したままで結構です。御心配はいりません。貴女の希望以上のことを私がしたら、大声を出して下さい。私は色魔になりたくありませんから」すきのない言葉に、私は鍵をかけて、ほっとしました。

「貴女に少しでも長く楽しんで頂くために、すぐ始めましょう。ブラジャーは、しておられますね」

私は声も出ずに、ただこっくりするのが、精一杯でした。

「上衣は全部脱いで下さい。シュミーズの紐は肩からはずして下さい。スカートは、そのままで結構です」

もう私は催眠術にかかったように、いつし

か上半身はブラジャー一つの半裸体になっておりました。左手がぐっと後にねじ上げられ右手を重ねて縄が巻きついた時、本能的に身体を左右にゆすりましたが、巻きついた縄は締るばかりでした。二本の縄がブラジャーの上と下を締めつけ、更に後手の手首にからんでしまったのです。肌に吸いつくような縄の締め具合、もう私には自由はありません。

「さあ終わりました。私は帰ります。御参考までにお教えますが、この縄は日本紙で撚つてある丈夫な縄です。人の力ではとても切れません。では、ドアの鍵を忘れずに、そして鍵は抜かないように、穴から覗かれるといけませんからね」

彼の言葉を背に聞きながら、恥しさの余りふりむくことも出来ませんでした。

「あの、この縄、どうして解くんです。鍵はどうして？……」

「まあ、工夫してゆっくりお楽しみなさい」
ドアの閉まる音と同時に、靴の音は次第に遠のいて行ってしまいました。もう私一人、しかも自由を失って。早く鍵を閉めなければいけない、後手でさぐりながら、やっこの思いで閉め終り、ほっといたしました。

酷連処刑大会

△女斗篇▽

△挿絵・前川成雄▽

黒田 寿

ある年、酷連が発足した。

これは、文明の発達によって増加する犯罪に伴い、激増する女死刑囚のうち、特にえらばれた若く且つ美しいものを、一年に一度当番国に於て処刑する機関であった。

これらの処刑は公開されることは勿論、時には映画にもなり、或は宇宙衛星によって、全世界にテレビ中継されることもあった。

第一回のA国では、すべてギロチンで処刑したのだが、斬り落した首級は、血の滴る生々しいままセリにかけられ、最低百ポルでとぶように売れた。

キムの中から処刑前にセリ台に立たせられ

たが、二百五十ポルという高値に満足し、ブ

ロンドの頭髮と豊かな乳房を、誇らしげにさしめしつゝ首を刎ねられた。また一方では最低値しかかからず、口惜し泣きしながら死んでいく某嬢の如き、思わぬ悲劇も起った。

随一の美女と認められた十九才の乙女ナタリーは、絞首刑にして身体を傷つけずに残すなら、千ポルまで出すという希望者があらわれたが、これは認められず、その代り生きながら心臓をえぐり取ることになり、胸腔を切りひらいて、ヒクヒクとうごめくのをぬきとったが、彼女は第一位の誇りにはほえみを浮べつつ、殆ど悲鳴をもあげずに、この世から

去っていった。

B国では、第一国道に沿って絞首台をズラリと並べ、全員一斉にその踏台をはずした。女囚には番号がつけられ、誰が最も早く、何番が最後に絶命するかが賭の対象になった。結局アンが十分五十秒で第一位、十九分三十秒もかかったフランソアーズが最後となり、適中者にはかなりの配当と、副賞としてお好みの女囚の死体とをもたらした。

彼女らの死体は、その後も三日間、一列に並んで吊されたまま、ブランブランとゆれながら放置され、国道をバスで往復する見物人は毎日引きもきらなかった。

NO1になったのは芳紀二十一才の玲子だったが、彼女はただひとり特別室で絞首刑になった。その処刑の様子は各種のカメラを用いて、鼻孔のあえぎから爪先のもがきまで、くわしくおさめられた。心音も拡大されて、マイクに入り、十二分三十五秒をもって終わった。これはカラー映画として上映されたが、目をむき舌をダランとなれ、よだれや鼻汁まで流した苦悶にゆがむ死顔は、玲子としては他人にみせたくなかったであろうに。

C国では、与えられた女死刑囚を大平原につれだし、新型爆弾の実験台に使った。即ち彼女たちをいくつかの同心円上に並べ、その中点で爆破させたのだ。その結果あるものは煙となって消え去り、或は散弾でボロ切れのようになった。一番遠くにおかれたミッチイは、僅か五発の散弾をうけただけだが、腹部に傷をうけたため、却って苦しみ死にをせねばならなかった。そのほか僅かに息のあったものも、ブルトーザーの下となって散った。

二十六才の年長にもかかわらず、NO1となった寿子は、特に念を入れて検死され、心臓、肝臓、肺臓などあらゆる臓器に、合計百二十四発の散弾が食いこんでいた。心臓には七カ所の傷があり、二個の散弾が腔内におさまっているのが、特に興味をひいた。

D国では、全員にスキと鍬を与え、北方の荒野に送りこみ、僅かな食糧と貧弱な設備のもと、すべてが死に絶えるまで強制労働を命じた。ここでは第一位の美女といえどもすべて同一の待遇で、死体と変るや無造作に畑に埋めこまれた。

E国の首都は毎年夏になると水不足で悩むので、女囚の半数は雨乞いのイケニエとするため、生きながら火あぶりになった。NO1のミレーヌは、カラになった大貯水池に首だけだして埋められ、水を求めつつ七日目に絶命したが、その祈りのためか大雨が降った。ところが今度は洪水となり、残る半数は堤防建設の人柱として生埋めになった。

F国では、与えられた女死刑囚を食べてしまった。或るものは煮て、或は焼いて。NO1の佑三子は気の毒にも、生のまま大皿にのせ、喉から脚のつけねまで切り裂き、高級官吏の会食に出された。このためソースの値が大巾に値上りしたという。

☆

酷歴十三年秋、十三日の金曜日をえらび、いよいよK国の首都天星市に於て、第十三回処刑大会が開始された。

二百人の女死刑囚を東西二組に分け、それぞれに大刀、短刀、槍などの武器を与え、死闘を命じたのだ。一方が全滅すれば勝ち残った組で個人戦を続け、最後の一人には特別の名譽をあたえるという。

若く美しい女たちが、生命を賭けて、大競技場をも狭しと戦い狂う有様は、集った大観衆を熱狂させるに十分であった。周囲には、細長い板がズラリと並んでいる。相手を討ちとったものは、即座にはせ帰ってその生首をのせるのだ。

試合開始の号砲と共に、二百個の女体がぶつかり合う。とみるまに、早くも最初の勝名のりがあがった。戦いを好まなかったのか、デボラが一太刀も合わせず斬って落され、美しい首をさずけたのだ。続いてまたひとり、あえなくも討ちとられたシルビヤの生首を高々とかけながら、晒し台めざしてかけていく。血汐の香りが次第に場内をみたくしていった。

相手がすこしでも、自分より美しいと認めた時は、特に憎くしみがますのか、手足をバラバラに斬り放し、腹をたちわり、乳房をえぐるなど、なぶり殺しののちに首をとるものもいた。それでも故意に顔を傷つけることは

固く禁じられていたので、若さと美貌に自信のある女たちは、獄門にかけられても誇りは保てると、死をおそれることなく全力をつくして戦うのである。

首を失った死体はみるみるその数をます。

刑吏たちは戦いのすきをみては、その足首をつかんでズルズルと、競技場の隅まで引きずってくるのだが、次から次と新しい死体がふえるのできりがなかった。

どちらが優勢かは、晒された生首の数をみれば明らかで、前半戦は西軍がややリードしている。ちょうど五十個目の生首がおかれたとき、東軍の得たそれは四十五個にすぎなかった。

六十対五十三、七十対六十……差が次第にひらいたと感じられた時、東軍の一人が大刀を高く振りあげながら何か叫んだ。

次の瞬間、十数人が一団となって互いに協力しながら敵に当るのがみられた。これこそ腐敗しきった時の政府に反抗、その結果死刑の運命におちた、お富士を頭とするJ国人同志であった。いずれも漆黒の髪、黒い瞳とをもち、雪白の肢体、とび散る鮮血と美しい対照を画いていた。

敵方の三人をグルリととりかこむ。相手は

すくんでしまつて手も足もでない。幸代がすばやくデビーにとびかかり、ムンズとねじ伏せるや、手にした短刀を激しい勢でたたきつけ、一気に頸の根をぶち斬った。声もたて得ず横たわった死体……デビーはあわてて自らの首をおさえるような動作をしたが、もうおそかった。幸代がその生首をポンとほうろのを、ミエがうけとめ晒し台へ走る。

ピアはこれを見て、一角を斬り破つて逃げようとしたが、その意志を果したのは胴体だけであった。お富士が追いついて、難なく細首を打ち落したのだ。首のあったところから、噴血と共に「ヒュー」と笛の断ち切れた様な声を引きながら、尚も十数歩も走ってバツタリと仆れる。

三人目はまだうら若いジャクリーヌ。もはやこれまで、と覚悟をきめたか、みちよめがけて一足ふみこみ、上段から真向うに斬りかかってくる。

みちよの身体がさつと斜めにとび、横薙ぎの一閃がその胸をはらう。哀れ十七才の美少女は鮮かにふたつに両断され、その双方からおびただしい鮮血がほとばしった。

「お見事！」

克子が手をたたきながら、ジャクリーヌの

首を掻き斬った。

この集団は生首を求めて右へ左へ動きまわる。西軍はたちまち浮足だった。一人、また一人と波にのまれるように、その姿が消え、空しく首をとられてしまう。

形勢はたちまち逆転した。この一団は僅か二人を失っただけで、実に三十人を討ちとつたのだ。周囲をみわたせば残る敵はただひとり、これまたひとりとなった味方と斬り結んでいるだけ。あとはことごとくもの言わぬ死体となっている。

☆

最後の一人はさすがに強敵であった。全身紅血にまみれ、目も見えず耳も聞えなくなっているだろうに、尚も斬りこもうとする相手に対し、本能の働きがこれにあわせ、匂い輝くばかりの美しい四肢をおどらせていた。

遂に味方が斬り仆された。おそらく十人はこの敵に討たれているだろう。十分に警戒しつつ、お富士たち十三人でとりかこんだ。

人間の力には限りがある。さすがの強敵も首を掻こうとかがんだ時、よろよろとよろめいて、そのままペタンと円陣の中央にくずれこんでしまった。

正面に立った美智子が、これを真向うから



唐竹割にしてやろうと、大上段にふりかぶった刃を、鋭い気合と共にふりおろした。

だが、その一瞬前、敵方の美女は残る氣力をふりしぼり、一刀をぐいと突きだす。

“ギャッ!”

乳房の中央を十分に貫かれた美智子は、大きくのけぞったが、相手も刀身をぬきとる力もなく、再びガクンと膝をついた。

“わたしにまかせて”

お富士が皆をかきわけてその前に立つ。

“見事だったわ。わたしはお富士、あなたの名を聞かせてくれない”

礼をつくした言葉に、相手はほほえみを浮かべながら、

“エレオノラ・ロペス。もう二十八のおばあちゃんよ”

こう言いながら、仆れた美智子の胸から血刀をぬきとって、三たび立ちあがるや、ピタリと正眼にかまえた。

お富士は、ゆっくり刀を斜め上方にふりかぶった。

“御免!”

敬意をこめて、大きく一步ふみだしつつ、横流れの白刃を走らせた。

エレオノラの白く柔かい頸すじに、真赤な線がサッと走った。とみるまに、その線は次第に太く、鮮血となってあふれでる。

“ポロリ”と、美しい首が音もなくころがりおちた。恐ろしいまでの斬れ味、腕

のさえである。しかも、エレオノラは尚も数秒間、大地に両脚をひらいてしっかりふんばったまま立っていた。

どおっ! と、その血まみれの身体が、朽木を仆すが如く仆れた時、見るものすべてがほっと深い溜息をもらした。

こうして東軍の勝利にはなったが、生き残るものは僅か十二人。次回は仲間同志で戦うわけである。百八十八個の生首はカマスにつめて場外に運びだし、新設された獄門台に梟けるのだ。心臓も希望者が多いので、ひとりひとりえぐりとり、これは石油カンにおさめられたが、どちらも競売されることになっている。これ以外の肢体は、ブルトナーで碎かれ、火焰放射器で焼きつくされ、最後に残った灰は、びっくりするほどわずかなものであった。

☆

いよいよ個人戦の開始となった。

競技場には一人用の獄門台が十一基並んでいる。誰が首を梟けられずにすむだろうか。

案外、しおらしいところのあるみちよは、同じ十九才の相手ミエより大柄だし、腕もすぐれていたが、ついちょっと前まで共に戦った同国人とあって、思うように闘志がわかぬ

のも無理はない。それに対し、ドライなミエは遠慮なく斬りこんでくる。

「いけない、こんなことでは……あとのない生命をかけた戦いというのに」

自分で自分をもどかしく思ったが、どうも手足がうごいてくれない。

「ええっ！」

氣をとりなおし、大刀をふりあげて反撃にでたが、ミエの刃とガッキとふれあったとたん、ピーンという鋭い響と共に、中央からポツキリと折れた。

「しまった！」

あわててとびすさったが、この機会をのがさず、おどりこんだミエの一刀は、みちよの右肩をおそった。

ピューと血しぶきがとぶ。ジーンとひびく激痛に、思わずクラクラとよろめいたところに、更に一步とびこんだミエは、情け容赦なく第二刀を脇腹に加える。

美しい顔を苦痛にゆがめつつ、みちよは夢中で折れ残った大刀をうちふったが、すでに目もくらんだか、空しくうごくのみ、これに對しますます勢を得たミエの突きだす刃は、プツリとその頸すじを刺し貫いた。

「ア——ッ、ざんねん！」

深い後悔と共に身体をこわばらせたが、次の瞬間、目の前がまっくらになり、すべての意識が消え去って、血しぶきと共に彼女の首は胴体から斬り放されていた。ドオーとふきだす血汐の中に、みちよはガックリと上半身をひたして、そのまま動かなくなった。

ミエは討ちとった生首を大刀の先にグサリと刺し貫き、高々とかけながら勝名のりをあげた。血汐は刀身から柄、更に白い腕を伝って流れおちる。

情におぼれたみちよは、こうして十分に力を出しきれぬうちに、氣の毒にも首をとられての最期をとげたが、獄門台に梟けられた生首は、目をひらき口をポカンとあけたまま、自分自身にあきれかえっているような死顔であった。

☆

英子が槍を与えられたのに対し、マツエは短刀一本だから極めて分がわるかった。しかし、けなげにも何の苦情も言わず、たちむかった。

一方槍をもっている、手元にとびこまれたら、どうにもならぬので、英子は穂先をマツエの下腹に向けたまま、その動きから目をはなさない。このためマツエが二度にわたっ

てこころみた、必死の突っかけも、余裕をもってかわすことができた。

英子から反撃にでる。マツエはじりじりとあとにさがるほかはない。折はよしと英子の必殺の突き！ マツエは辛うじて短刀でこれを払う。鉄と鉄のかみ合うはげしい響き。英子の手がしびれて、槍をはなさんばかりの衝撃であった。

この受けがもう少し柄の方を打っていたのなら、或は見事に穂先を切って落し、返す刀で英子の首級をあげていたかもしれぬ。しかし、槍の千段巻を打ってしまい、却って短刀の方がポツキリと砕けとんだ。

英子は相手が最後の力をだききったのをみて、槍を握り直し一呼吸入れてから二度目の突き、哀れよけもかわしもならぬマツエの下腹を、無惨にもふかぶかと貫いた。

ブルブルと身をふるわせるマツエ、その苦悶は槍を伝わって英子の手にひびいてくる。それをたのしむように、尚も槍を突き刺したままだった。

マツエの二十三年の生涯が終ったのである。うか、それと共にものがくのも終り、とたんに槍をもつ手にズッシリと重量感が加わってきた。ここでぐいと一気に引きぬくと、マツエ

の身体は力なく前のめりにたおれる。

勝敗は最後まで予断をゆるさない。英子は槍をつかってあおむけに引っくりかえすと、大の字になってこと切れている死体の胸を狙って、ズブリと止めを刺し、絶命しているのを確実にたしかめてから、上にまたがり、鮮やかな手口で、クイクイと細頸をかききっていく。

最後に残った一枚の皮をぐいとえぐると、バサッというにぶい音と共に、苦悶の表情をいっばいにうかべたマツエの首が地上をころがった。

☆

続いてお富士が小百合と対戦した。小百合はまだ十七才の美少女である。さきの戦にも殆ど加わらず、かよわい腕は血汐に汚れていない。それにもかかわらず、小太刀をしかりと握りしめ、何のおそれもなく身がまえる姿は勇ましかった。

“お姉さま、お手やわらかに”

“カワイコちゃん、さあおいで”

一方のお富士は二十八才、腕には格段の相違がある。楽勝を確信しつつ、むしろ如何にしたら苦しみを少く片附けてやれるかを考えながら、静かに太刀を引きぬいて相対したと

たん、思わず驚きの声をあげた。小百合の構えたるや、全く隙だらけなのに、あまりにも落ちつきはらった態度なのだ。

“うーん。もしかしたら、これが八方破れの構えかも知れない。油断はできないわ”

お富士は自分が出来るだけに慎重だった。しばらく様子をうかがっていたが、小百合の方から斬りかかることはなさそうだ。そうかといって、不用意につっかけてゆけば、あの小太刀は反転して脇腹を刺すだろう。これはあまり有難い話ではない。

時はうつる。ぐずぐずすると引分の宣告がくだり、二人共首を刎ねられてしまう。

“ええい、ままよ。あの子になら首をあげてもいいわ。思い切ってゆけ!”

お富士は鋭くふみこむや、太刀を横なぐりにうちふった。得意の横流れの一刀である。“カッ”という頸骨を絶つところよい響き。

“ア……ッ”

声にならぬ悲鳴があがる。およそ軽い手ごたえと共に、見事に切断された愛らしい処女の首はポンと宙をとび、胴体は小太刀を握ったままあおむけにひっくりかえる。まるい、まっかな傷口からは、ドドーンとはげしい勢で血汐が噴きだした。

“アッ、ナーンダ”

あまりのあっけなさに、お富士は苦笑しながら、地上にチョコナンと斬口を下にして舞いおりた小百合の生首をみつめた。目をパツチリとみひらいたまま、自分の首が胴体をはなれて、短かったこの世の生涯が終ったことが、まだ理解していないような、あどけない死顔……。

“あんた、腕はカラッペタだけど、度胸はすわっていたのね”

お富士は冷汗でビッシヨリになった身体をぬぐい、血の滴る生首を抱きあげて頬ずりしながら話しかけた。

“こんなに若いのに……ゆるしてね。ですけどすこしも痛くなかったでしょう”

美少女の首は獄門台の上で、コックリとうなずいたようであった。

☆

クローと克子が第四試合を行った。クローは個人戦出場者中ただ一人のF国人、運よくお富士たちと行動を共にしたため生き残ったが、実は三人殺しの本物の死刑囚で、誰がみても彼女が有利と思われていたが、若冠十九才の克子の意外の奮闘は、満場を沸かせるに充分であった。

克子が斬りつけるのを、クローは僅かにかわしそこねて、額を浅く斬られ、血汐がぱつとびちった。左手で傷口をおさえたが、タラタラと流れる赤い液体が、ともすれば目に入ろうとする。

「それでは無理ね。私は尋常の勝負をしたいの、手当をしないさ」

克子是这样言って太刀を引いた。ほっとしたクローは、額の血と汗をぬぐい、しっかりと鉢巻をしめ直してから再び刃を交える。

一進一退の戦が続く、クローの斬りこみを克子がかわそうとした時、足もとの小石にまずいて、ドッとあおむけに仆れた。

「あっ！ 待って！」

卑怯にもクローは容赦なく斬りつける。第一撃は横ざまに転がって辛くもかわしたが、続く第二撃は急いで起きあがろうとする克子の、肩口から深々と食いこんだ。

「ぎえ——ッ」

悲鳴と共にのたうつ克子、その姿を冷たく見やりながらクローが言うのには、

「今度は私の番ね。いつまでかかってもいいから、ごゆっくりお手当を」

乳房をたち割り、おへそに達せんばかりに割られたのだ。これでは手当の方法もない。

ただヒクヒクと断末魔のものがきに、四肢をふるわせるだけ。

「もう参ったの。ダラシがないわね。でもあまり長く苦しめるのも気の毒だから、止めを刺してあげる。有難く思いなさい」

太刀逆手に握りしめ突きおろす一刀、克子の雪白の咽喉元をグサッと刺し貫いた。

「ア——ッ、ア——ッ、おのれ……ひ、卑怯もの！」

克子が、この世に残す最後の言葉があがったが、その声の消えぬうちに、早くもかえす刀で、もちろんも掻き落された首が鮮血をまきちらした。

クローは高らかに笑うと、生首をつかみあげて宙高くほうり投げ、落ちてくるところを大刀でグサリと刺しとめ、みんなによく見えるように、そのまま高くかかげながら、獄門台へはこんでいった。

さすがの群衆も、この行為に対しては非難の声をあげせ、無視でなくなったので、刑吏は彼女に対し、あらためて惨殺に処すことを宣告、やっと皆の怒りを静めた。

クローの四肢をせいっぱいにひらき、太い釘で打ちとめ、槍の穂先をお臍にあてて、柄を槌で軽くトントンと、もがくのもかまわ

ず、ゆっくり打ちこんでいった。

こうして十分に刺しこんだところで放置され、クローはいつまでも恐ろしい苦痛にのたうちまわっていた。惨刑の場合、確実に絶命するまで首を斬り放してはもらえないのだ。

三日目に、ようやく彼女の生首が晒しものになっていたが、鼻と耳をそぎ、目には釘を刺し、歯を全部砕き、頬を大きく裂き、更に口腔にはドロをつめこむという、女性にとって最高の恥をあたえられていた。

☆

ミエはみちよを仆し自信満々、おちつきはらった態度で太刀の鞘をはらったが、前に立った幸代の構えをみて、ヒヤリとするものを感じた。

幸代はすでに構えているではないか。刃の方を相手に向けた太刀を、大地にグサリと突き立てた姿は、一見盲人が杖をついている様に見えたが、おそろしい殺気がみちあふれていたのだ。

だが猶予はならない。それにまだミエは幸代の腕を軽くみていた。得た生首の数だっ自分の方が多いのだ。下から刃を刎ねあげるつもりだろうが、その前に横に払って首をぶち斬ってやればよい。でも股から斬り裂かれ



たらいやだな……と思いながらミエは、幸代の白い頸根を狙って大刀を走らせた。

突然、地上に突き立っていた幸代の刃が、白い火花の様に光り、弧を画いて垂直にはねあがったとみるや、ミエは悲鳴をあげてのけぞまに仆れた。その下腹から乳房の間に至るまで、パツクリと真赤な傷口が見えているではないか。かわいいおへソも見事まんなから両断されている。下から上へ、深さ三センチ、長さ五十センチほど鮮やかに切り裂かれ

たのだ。

幸代はゆっくりと戦鬪力を失ったミエの傍に坐り、左手を白くなめらかな顎にかけてぐいとおしあげた。ミエの唇がむずむずと動いたが殆ど声にならない。おそらくは「早く首を掻いて」とでも言ったのだろうが。

くびれの深い咽喉の奥に切尖をあて、柔かい美女の右頸部に鋭い刃先をグサッと切り入る。さすがにミエの身体がピクンとふるえたが、幸代はその上にのしかかるようにして押さえつけ、全力をこめて、右に切っ払う。

「エイッ」

細首はズバリと斬り落され、あたりいちめん唐くれない……哀れ敗れ去ったミエは、ほんの一瞬前まで、若さと美貌を誇り、優勝の栄誉を期待していたであろうに、いまや一個の物体と変り果て、首を異にしたまま、

地上に横たわっている。

一方勝利者の幸代は、血ぬられた刃を右手に、斬りたての敵の生首を、血の滴るのもかまわず左手に高々とかけ、首のない死体をふんまえたまま、声高らかに勝名のりをあげている。

獄門台にはすでに敗れ去った美女たちの生首が並んでいる。そのひとつ小百合は、幸代が妹の様に愛した乙女であった。今やもの言わぬ姿を悲しげにみつめた幸代は、その頬に数滴の血汐がとんでいるのを認め、抱きおろすと自らの舌と唇でもってキレイにぬぐってやった。胴体の方は一段高く逆吊りにされているので、むきだしの肢体が痛々しいが、どうにもならない。

次いでミエの生首をバケツにほうりこんで血汐を洗い落とし、髪をなでつけて、これまたキレイにしてから、静かに獄門台にのせた。

幸代のこの行為は、女性の情を知るものとして、満場の絶讃をあびた。

☆

さきにマツエを討ちとった英子は、再び槍をもって大刀の晴子と相対した。晴子は何を考えたのか、低く這う様な構えをしている。脚を払おうともいうのか。これに対し英子

は、一気に突き伏せてしまおうと、槍を斜め下に向けている。とたん……

「ワアッ！」

英子は肩先から鮮血を散らして、よろめきながら悲鳴をあげた。敵の刃が両脚にくると予想していたのに、晴子は膝をバネの様に跳躍させて、英子の肩にザックリと一刀を見舞ったのだ。

よろめきながら英子が、必殺の槍をくりだすと、最初の成功にやや油断のみられた晴子は、下腹をふかぶかと刺されてドタリと尻もちをつく。だが傷手にも屈せず、地上を這うようにして払った刃は、英子の右脚を膝のところから薙ぎ落した。

英子はそのまま前のめりに仆れたが、彼女の手をはなれて宙をとんだ槍は、偶然にも晴子の胸のふたつの隆起の中央を、背中にぬけるほど深く貫いた。

しかし、おそろべき執念をみせた晴子は、小柄をひきぬくや、自分の上におおいかぶさる様に仆れた英子にしがみつき、雪白の咽頭ぶえにグサリと突き刺した。

こうして双方、地上をころがりながら、お互いの身体を突き合い、斬り合い、はては頸を締めあったのち、二人ながら力つきて、も

つれあったまま息絶えた。

刑事は二人を「グサッ」と芋刺しにしてから一刀をふりおろす。同時にふたつの首が胴体からはずれてくる。それを両手にかかげつつ、引分けの宣告を下した。

英子は時に二十二才、晴子はまだ十八才の若さであった。

☆

エミとユミは仲のよい姉妹というのに、非情にも二人で戦わねばならぬ運命となった。

お互いに自分の首をとってくれと言いつつ、互いが、遂に刃を合わせることになり、刑吏も見物人もどんな結果になるかと、惨忍な興味をもってながめていた。

「え——い！」

「お——う！」

二人の口から同時に絹を裂く様な掛声が出た。お互いに相手の心臓をめがけて、短刀を力いっぱい突きだしたのだ。よけもかわしもせずに……

ふたつの身体がハッシとぶつかり、四つに組む姿勢のまま、相手の肩に首をのせる姿勢で、二人とも動かなくなった。

驚いた刑事が走りより、背後から二人の身体をつかんで引きはなそうとしたが、二

人はかたく組みあったまま即死していた。ユミの心臓にはエミの短刀が、エミの心臓にはユミの短刀が、それぞれ柄までも深く突き刺さっていた。まさに見事なる刺し違いであった。

刑事の手によってユミの美しい頸すじがスパリと切断され、首はさっと真紅の血しぶきをひきながら、二メートルほど水平にとぶ。とびながらもその顔はほほえんでいた。続いて再びおこる頸骨のひびきと共に、エミの首がポロツともげて、地上に落ちてきたが、同様の笑いは鮮血にまみれつつ残っていた。一方の体の方は尚も四本の脚で、しっかりと立っている。

並んで獄門に梃けられたふたつの首は、あやしいばかりの勝利のほほえみが浮んでいた……もって瞑すべし。

☆

こうして決勝に残ったのは、お富士と幸代の二人であるが、何といってもお富士の方が年も上だし、腕もはるかにすぐれている。しかも、幸代には短刀を与えられただけ、ミエを仆した逆流れの剣はつかえない。捨身で突っこんでも、お富士は軽くこれをかわす。

幸代がミエや小百合の生首を洗ったのは、

いつか自分もこの様になるものと覚悟したからである。今や獄門台の空席はあとひとつとなったが、幸代の首がそこを埋める光景が、まぼろしとなってちらついた。

“ええっ!”

ややあせり気味になった幸代は、無理と知りつつも、しなやかな肢体をおどらせて猛然ととびこんだ。

惜しむらくは、気ばかり先立って出足が伴わなかった。軽くとびすさったお富士は、前にのめった幸代の頸を狙って、例の横流れの反撃を加えた。

これが決ったら幸代の細首など、スポンとばかり、どこまでふっとんでいったかわからぬ位だが、幸代は地上に身体を投げだすようにころがって、辛くもかわしたが、すかさずおどりがかったお富士に、しっかりとおさえつけられ、その上、短刀まで奪いとられてしまった。

お富士は左手で幸代の咽喉をグイグイと締めつけながら、右手の短刀で首をとろうとする。だが幸代が必死で、その腕をおさえるので、なかなか首を掻くことはできない。しかし勝敗はもう明かである。

“往生際のわるい子ね”

静かにさす様な言葉に、幸代はつい力をぬいた。とたんに冷たい刃が、白く柔かい頸すじにふれかかる。

ヒヤリとする感觸と、再び映ずる獄門台の己が生首のまぼろしに、おののいた幸代は無意識に斬られまいと顎をひいたが、非情の刃の皮膚へザクリと斬りこまれていた。

“ア——ッ、やっぱり!”

してやったりと、お富士はほえみながら引導をわたす。

“幸代、あなたのお首級は、このお富士がいただきますよ”

お富士は、力をこめて刃を右へ、グイグイと動かしていく。一方、まだ無傷であった幸代は、生きながら首を掻かれる痛味に耐えかね、下肢をバタバタふるわせるが、はねかえすまでには至らない。

“お願いよ。首をとる前に止めを刺して”

“もうすこしで楽になるわ。おとなしくするのよ、いい子だから”

鋭い刃先はそれにもかまわず、柔かい皮膚と肉を斬り裂き、一度は骨にあたってとまったが、グイッとこじると、ゴトツという不気味な音と共に頸骨の継ぎ目はずれ、同時に幸代は“ウウム”という断末魔のうめきと

共に、四肢をピンとのばし、二十才を一期として散っていった。

更に刃は右へ右へと引きまわされ、幸代の美しい首は、ドド——と、ほとばしる血汐と共に、胸からはずされてしまった。はずみで前のめりに仆れたお富士の上半身は、幸代の胴体から噴出する血汐のため真赤に染まっている。

こうしてお富士は勝った。幸代の生首を両手でかかえ、尚も滴りおちる生温い血汐をゴクゴクと飲んで渴をいやしながら、まるい固い乳房をむきだしに、あられもない大の字になっている幸代の首のない姿をみつめていたお富士の胸中に、ムラムラと若さへの嫉妬がわいてきた。

大刀を逆手に、美しい処女のおへそにグサリと突っただて、その柄に生首を結びつけてから、勝利のしるしとして心臓をえぐろうというのだ。

胸骨に浴って短刀で一線を入れ、胸部の皮膚を乳房をそっくりつけたまま削いでゆく。肋骨を断ち斬ってなかをさぐると、その奥に愛らしい心臓がうごめいていた。

昔、中国では強敵を討ちとった時、その武勇にあやかる意味で、心臓を食うことがあっ

たという。お富士はそんなことを考えつつ、生温い心臓に唇をおしつけた。

ふと、われにかえったお富士は、幸代の生首を大刀に、心臓を短刀に刺しつらぬき、高々とかかげつつ勝名のりをあげた。

☆

優勝したお富士には、約束通り最高の名誉が与えられた。

しかし、それは、ひそかに期待した助命、そして側室への道ではなく、切腹を許し国王自ら介錯にあたるというものであった。宮中にとめおかれるのは、アルコール漬にした生首だけという。

最終日、最高の観衆を集めた競技場の中央に白布が敷かれ、その上に覚悟をきめたお富士が収容と坐っている。いま、満場の拍手をあげながら国王が入場した。

介錯には三つの時期がある。第一は三宝を引き寄せた時、次に短刀をいただいた時、ごく稀に短刀を下腹に突き刺す瞬間まで待つことがある。

お富士は、このことは知っていた。いつ首を落すのだろうか、出来ることなら第一の場合がのぞましい。しかし、三宝を引き寄せ、短刀をいただいても、まだ国王の刃先は斜め

下に向けられたままであった。

お富士の顔が固く引きつった。これだけの見物人だ、さんざん苦しめるつもりなのだろう。よし、それなら立派に切ってやろう。

刃を握った手に力がこもる。呼吸をととのえ、胸乳をそらせると、左下腹に思いきり強く突っこんだ。輝いていた切先が肉の中にめりこんでいく。右の手に左の拳を加え更に一押し。刃のなかばまで深く食いこみ、みるみる血汐があふれだした。

さすがに唇からうめく声がもれ、美しい顔から血の気がうせて、紙の様に白くなった。ジリッ、ジリッと下腹を切り裂いてゆく。

傷口は次第にひろがり、苦悶のため腹圧も高くなるので、大きく口をあけはらわたがはみでそうになり、そのため深く刺した刃までが浮きあがらんばかり。

左手で傷口をおさえ、右手は尚も右へ右へと動いている。見るものすべて目をおおわんばかりであったが、国王は平然とながめていた。遂に横一文字見事に掻き切り、最後にぐいと上にこじあげて、後をふりかえるのも知らぬげに、始めの姿勢を変えようとしなない。

お富士は刃を下腹から引きぬくと、血に染んだ切先を左乳房にむけた。自ら止めを刺そ

うというのだ。

「ぐっ！」

最後の力をふりしぼったのであろうが、刃は僅かしが入らず、心臓を突き破るには至らなかった。

上半身が大きくのけぞり、このため腹部の傷口がパツクリと大きく口をあけ、おさえられていたはらわたが、どっとはみでてきた。

もういいだろうと、国王は刃をふりおろしたが、当然コロリと落ちるはずのお富士の首は、まだ胴の上にのったままである。さすがのお富士も、苦痛に耐えかねてのたうちまわり、今となっては介錯は困難であった。

国王は前にまわり、お富士の白く柔かい咽喉の真中を狙って、ググッと柄まで刺し貫ぬき、ゴリゴリと左右にこじると、お富士はかすかなうめきをこの世に残し、こと切れた。

国王は死体にまたがり、下腹に刺さったままの短刀を奪いと取り、いざ掻首にかかる。

よほどなれているのか、みるみるうちに骨も肉も切り離され、最後の一片がグイと掻き斬られて、首はポロリとこころがった。

満場の拍手喝采をあげながら退場していく国王の手には、血の滴るお富士の生首がさげられていた。

四馬孝異色画集

女体浣腸責め図絵

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号二〇〇〇円

一、セーラー服の少女に浣腸責め
二、美しい油による強制浣腸
三、捕われの乙女に空気ポンプ
四、逆さ吊りの女体に注射液
五、大の字吊りの菊花に浣腸液
六、イルリガートルで強制浣腸
七、片足吊りで施すスリン浣腸

女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号八かん1

一、保健室で女学生に行う浣腸
二、便後カバ着用のお嬢さん
三、便秘の新妻に浣腸される乙女
四、セーラー服で浣腸される乙女

女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号八かん2

一、お友達にされるB.G.の浣腸
二、エネマの嘴管を踊子に挿入
三、看護婦にされる五〇C.C.浣腸
四、エネマシリンジの若妻の浣腸

美処女羞恥責悦虐絵巻

八、美しき嗜虐の生贄

大中判印画紙極鮮明焼付
五枚一組 略号二〇〇〇円

一、豊麗な花を欺く深窓の令嬢
二、絶世の美女に雪の塩水を飲ま
三、拷問椅子に開股縛りになる
四、犬となつて仕えることを誓う
五、雪絵は箱の中へ排尿させられ
六、秘箱の中へ成した雪の中央
七、股を左右に開いて受ける浣腸液

妊婦の媚態

大中判印画紙極鮮明焼付
三枚一組 略号八〇〇円

一、医師の診察を受ける妊婦
二、シヤワーを浴びる妊婦
三、浴後の裸身を大鏡に写す

女学生の浣腸一態

大中判印画紙極鮮明焼付
二枚一組 略号六〇〇円

一、花恥しきセーラー服の乙女
二、高々と挙げて浣腸される光景
三、学校帰りの女高生がスカートを
四、浣腸される羞恥にためぬ風情

凄絶、妊婦の切腹

大中判印画紙極鮮明焼付
四枚一組 略号一〇〇〇円

一、横なぐりの雨の降りしきる祠

膨らんだ腹に脇差を突き刺す

一、短刀で切った側腹に切りさばく
二、腹部を迫る刀で切りさばく
三、肉を夜の邸内、東屋の前で豊満
四、地面に支えて膺下へ突きさす

女体浣腸嗜虐場面

大中判印画紙極鮮明焼付
六枚一組 略号一五〇〇円

一、女体に二つ折りにえられた全裸
二、高圧空気の悪魔のような跳梁
三、高圧ポンプの先から出された電
四、高圧ポンプの先から出された電
五、高圧ポンプの先から出された電
六、高圧ポンプの先から出された電
七、高圧ポンプの先から出された電
八、高圧ポンプの先から出された電
九、高圧ポンプの先から出された電
十、高圧ポンプの先から出された電

ざ笑って、使用を待っている

サド侯爵悦虐絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付
九枚一組 略号二〇〇〇円

一、女体食卓（大テーブルの中央
二、逆さ吊り女体（膝で逆さに吊
三、針のトイレ（針の植った奇妙
四、排泄を強要されているのを覗く
五、女体燭台（アグラ縛りの女体
六、額に立てられたローソクに火を
七、拷問室のペット（お前はボク
八、肌をくねらせて踊り狂うのだ
九、浴室の女神（むっちりとした肉
十、吸った女体に巻きつけた太縄が水
十一、ムチうたれて悶えていた美女
十二、ゴボ注が水に、女の腹部
十三、妊婦のように膨らむのだ
十四、お前にボクは、こんな奇妙な好
十五、強要する。闇に浮く女体の美
十六、排泄の図（さあ、鏡にうつつ
十七、お前の姿をよく見てごらん。赤
十八、ちゃんはこのように抱っこさ
十九、シメカバコをするのだよ。さあ、オ

「第三の小悪魔」

辻 村 隆

「モシモシ、おじさん？　うちや……」
「えッ、もしもし、どなた？」
聞き覚えのある声だが、咄嗟には誰だか憶い出せない。

「いややわあ、マースミー」
「ああ君か、いきなり掛けて来たので、すぐには憶い出さなかった。久し振りだね、今何処から掛けてるの？」

「うちの家の近くからや」
「東京じゃなかったのかい？」
「一週間ほど前に帰って来ましてん。うちにかて、いろいろなことがアラーナ」
「東京のS氏と別れてかい？」

「まあ、そんなとこやわ。やっぱりウチ、東京の水は性に合わんと見えるわ。それよりおじさん、一大事やネン。えらいことが起りましてん」

「何だい、一体どうしたの？」
「おじさんの書いたカメラ・ハントの、うちのシャシンをチンが知りよって、変な言いばかりつけてくるんやし」

「チン……？」
「忘れやね、おじさん。最初に道頓堀で出会った時、ユリコともう一人、一緒にいた子いましたやろ、あの子やがな」
「あーあ、あのチン」

「そう、あの子やねん。あの子ウチやユリコのこと皆知ってるねんし。それでこの間、近鉄の八尾の駅前通でバツタリ出逢った時、妙なこと言いやんねん」

「どんなこと」
「どんなことって、何や嫌味みたいなこと言うて、ウチやユリコはえらいええ目しているけど、自分一人だけ仲間外れされた見たいやて、そんなこと——」

「でも、あの子はマスマミやユリコとは、あんまり親しくない言ってたじゃないか」
「それはホンマですネン。今迄よう遊びに行った時、あの子ウチらに勝手についてくるね

んもん。それで自分はお金使わんとウチらにいつもたかるさかい、ケチや思てましてん。それにおじさん等の大人のプレイに向く子やないと思てたさかい、わざわざあの子に言う必要もないし、それで黙ってたんやけど」

「それが、どうして知ったんだろ」

「それは、おじさんの罪や」

「おじさん、この秋にユリコを撮った時、あの子に内緒で、ユリコのカメラに例のシャシンかくし撮りましたやろ。ほんまに悪いこととするおじさんや」

「実は、そのことが気掛りだったんだよ。ユリコさぞかし怒ってただろうネ」(カメラ・ハント十二月号『蠟涙のしたたり』参照)

「えらい恥かいた言うてカンカンやったわ。もう二度と辻村さんに会いたくない言うて」
「そうだろうネ。チト悪戯が過ぎて、済まなかったと思っているよ」

「でも、あやまることなんかあらへんわ。ユリコったら、そのカメラ屋のおっさんと、近頃度々ドライブしているんやもの。何しろドライブの好きな子やさかい。ドライブに行つて、どうせよろしくやってるんと違う? あのおっさんかて助平やもん」

「ふーん、へんなことになったな」

「そのカメラ屋のおっさんが、言わんかてええのに、チンにユリコのシャシンのこと喋ったらしいのんや。チンがユリコの仲間と知ってるから、チンも誘い込む気やったかも知れへん」

「なるほど、それでバレて来たか、マスミのこと——」

「そうやねん。チンがユリコをひやかしたら何もウチだけと違う、マスミかてと言うことになったらしいわ」

「いっそ、チンも口説いて見ようか——」

「エッチ——。チンを口説くんやったら、もういっぺん、ウチの方を口説いてほしいわ。ウチ、この頃ちよっと淋しいねん。でも、お

じさん、チン見たいな子でも興味ある?」
興味ある?と訊ねられても、私にとって、チンの顔は咄嗟に思い出せない。始めてのあの夜、チンは完全に脇役に廻っていたから。

「そういわれると困るが、正直いって、どんな子だったか、忘れてしまった。チンっていうから、ワンワンのチンにでも似ているのかい?」

「ウチも最初は、そう思てたんやけど、ウチらチンという犬余り見たことないから、似て

いるのかどうか知らへんわ。本当はあの子の苗字『珍』ていいますねん。桐山英子というのは日本の名で、珍英秀という中国名があるんやて——」

「へえー、とすると生れは中国?」

「あの子が生れたのは日本やけど、お父さんが中国人という話やわ。せやけど、あの子のお母さん、その中国人と別れはって、連れ子して再婚しはったんやて」

「大分複雑だネ。それで今のお父さん、彼女がアイノコだってことを知ってるの」

「そら知ってる筈や。せやかて、ウチら、あのこのことをチン、チンてあだ名で呼んでいるもの」

「チン君、今何処かへ勤めているの?」

「八尾のブラシ工場や言うてたわ。あの子、ワリカシ親孝行で、もろたお給料を、全部家へ渡しているんやて。それで、金廻り悪いから、ケチになるより、しょうないのかも知れへんわ」

私はマスミの饒舌をきいているうち、段々とチンに興味を惹かれてきた。可哀想な薄倖の一少女が、案外くじけず明るく生き抜いているのではなからうか。マスミやユリコと同一行動しようとして、あるいは偽悪をよそお

い、懸命に仲間らしく、ついてゆこうとしているのだ。それが自分一人、圏外に立たされた、その心の淋しさが、やるせないジェラシーとなって、マスミに言いがかりめいたことを言ったのかも知れない。チンは自分も仲間に入れて欲しいのだ。自分ひとり置き去りにされるのが、若い娘にとっては、たまらなく淋しかったに違いないのだ。

「一度チンを連れてこないか。私からうまく言っておあげるよ。メシでも一緒にくおう」

「何て言うて連れて来るの？」

「別段何も言わなくてもいいじゃないか。仲間外れしたお詫びに、ミナミへでも遊びに行こうと誘えばいい。私は偶然バッタリと出会ったことにするよ」

「そのあと、ウチはどないなるの？」

「マスミとは今からでも会って見たいよ。東京で磨かれて随分綺麗になったんだろ。いろいろと話も聞きたいしプレイは二の次でネ」

「まあ、嬉しいこと言うてくれはる。でも今すぐはあかんわ。そのうちチンを連れてゆくけど、それまでに又電話するさかい、きつと逢うてネ。クリスマスなんかどう？」

「クリスマス以外ならネ。何も好き好んで、とてつもない人混みの夜に会わなくてもいい

さ。でも爾前に連絡してくれたら尚更いいけど——」

「そうするわ。ほんならおじさんもう電話きりますわ。駅前の赤電話からやけど、うしろに五人も並んで待ってますネン」ガチャリ。

× × ×

マスミの一件が気になって、東京のS氏に速達を出したら、折返しこれ又速達で返事が届いた。以下S氏原文の儘。

『……(マスミに関係なき箇所は省略)』

何かと御心遣い賜わり恐縮です。例の真澄君の件ですが、彼女より御電話あった由、どうも些か稚拙な彼女の事ゆえ、どの様な事申したかは存じませんが、有体に申し上げますと、銀座辺りにたむろするいかれた輩と交渉をもち、アパートなどにも出入させて居りまして、幸か不幸か小生その現場に行き合せ、何かと気拙いこと惹起した次第です。この年配になりまして所詮は男ですから、かなり強く叱責しました処、突然行方をくらまし、或いは非行青年の群に投じたかと案じて居りました。帰阪の由貴兄より御連絡を受け一応安堵致しました。素より真澄君には未だ未練もあります、所詮は年令的相違は、考えも又自から違ってくるかと存じます。尚先般御知

らせ申上げました、例のホステス、その後順調に口説き落し、前後三回プレイ致しましたが、孰れ来年度来阪の節は同行致し、貴兄のカメラ・ハントの一助とも致したく存じております。真澄君帰阪の事判然と致した今、例のアパートをホステスの〇〇子に貸与したい所存ですが、出来ますれば彼女に上京断念の引導お渡し下さいます様、毎々御迷惑許りかけ乍ら、更に好意に甘えお願い申上げる次第です(後略)』

S氏の文面からすれば、マスミの浮気らしい。彼女ならその安易な性質からして、ガール・ハントの対象になり易い気もする。S氏が毎日でも顔を見せればその暇もないが、何しろ多忙な彼のこと、一週間か十日に一度ぐらい、チラリとアパートを覗く程度では、若さを持て余すマスミとしても、ビート族でも相手にしたくもなろうというものである。非はマスミにあっても、何か一概に彼女だけを責める気にもなれなかった。私のカメラ・ハントにも、あっさり引っ掛けて来たマスミなら、銀座辺りで、若い男から声をかけられると、前後の見境もなくフラフラとついていったのではなからうか。泥沼にはまらず、程よく切上げて帰阪したのはマスミの将来にとつ

でも賢明であった。

そのマスマと私は、電話があった日から数えて十日目にミナミで会った。カメラを持ってゆこうかゆくまいか、大分思案したが、カメラ・ハントとしての、ニューのネタでもなし、撮るとすれば、唯、私自身のフォトへの慾望をみたすだけだから、少々は煩わしい気にもなつて、手ぶらで出掛けることにした。みずみずしいマスマには、充分心を惹かれたが、偶にはカメラを離れて、新鮮な若い娘とのびのびとひとときを過して見たい、とそんな気持の方が強かった。

事実、喫茶店へ現われた彼女は、僅か許りの間に凄く変貌していた。コマチヘアを使つてのアップの結い上げと、シックなグレー調の毛皮つきの外套は、やや濃いめの、ライオンを強調したカラー化粧とよくマッチして、成熟したオンナをまざまざと如実に示していた。変らぬ河内弁のぞんざいな口調だけがマスマの存在を以前の俤に残してはいたが。

「S氏からの便りで、東京での出来事を知つたよ」

「怒つてはった？」

「いや、そうでもない。マスマは、そんな子だからネ。で、東京のプレイ・ボーイ、どう

だった」

「中味は薄いわ。ええしのボンチやけど、頼りないことおびただしいわ。わざとあんなええ恰好して歩いてるけど、中味はカラッポ、二、三度つき合つたらイヤになつてしもた」

「もう東京には帰らないんだろうネ」

「社長さんから見離されたら、うち東京へ出てもヒトリポッチやもん。心細いし、もう行く気あらへんわ」

「S氏、君の住んでたアパート整理したよ。文句もいえないだろうネ」

「仕方ないわ。ウチが社長さん、裏切つたんやもの」

マスマは一寸悲しい顔付になつたが、案外屈託がなかった。

「大阪で、もう一ぺん出直しや。今更しようむないところへ勤められへんし、おじさん、ええとこあつたら世話して。ウチも考えるけど……」

「うん、考えておくよ」

とはいつたものの、俄かな虚栄に着飾つてゐる姿は、マスマ自身口に出した、中味の薄いプレイ・ボーイ云々の言葉は、マスマにも幾分当てはまる、彼女自身の中味の薄さだった。バーやアルサロなら、すぐにでも勤まる

だろうが、それは彼女の肉体の転落に拍車をかける様なものである。出来得れば真面目な職業と思うが、今更辛抱出来る彼女でもなからう。小悪魔めいたそんな妖精のマスマに、すぐく魅力を感じるくせ、私自身、柄にもなく、マスマを真面目な方向にすすむことを希んでいるのだ。私のハイドの行動と、良心の要求は、かくの如く、常にアンバランスで矛盾している。その癖、私自身さして不自然に感じないのだ。

謂わば、赤線の女に通いつめる男が、たえず女に真面目になれと口説きつつ、事実、真面目になる事を懼れ、セックスにうつつをぬかしているようなものだった。

マスマが転落せず、真面目な職業について将来よき結婚をと希う良心の要求のすぐそばから、中年のこの男は、マスマとのホテルでのただれたプレイのひとときを只管にこい願っているのだから、ええ加減も甚だしい。

若い女に意見をするくせ、己れ自身の行動は何ら反省せず身勝手なのが、ノーマルなセックスに飽いた中年男の共通の通弊ではなからうか。

とあれ、私はその夜のひととき、中年男の人並みの厚顔さに洩れず、マスマとのしびれ



るような時間を過して、年甲斐もない甘い感傷に心を疼かせ乍ら別れたのであった。所詮は綺麗ごとでないことを白状しておこう。

マスマミの大阪での職業を探してやる羽目に立到ったことは勿論である。近頃の若い娘はチャンと計画を立て、勘定をして、おじさま族を利用している。と分っており乍ら、ズルズルとひきこまれる私自身の弱さを、私は充分に噛みしめていた。

× × ×

史上最高のボーナスの出た年の瀬は慌ただ

しい。国会は黒い霧につつまれ、大阪の空はどんよりと灰色の靄に蔽われている。車道を流れる車の洪水は右往左往しているそのさなかに、私の車ももみくちゃにされて挟まってヨタヨタと一寸刻みに歩いていた（決して走っているといえたものではない）

イライラした顔、怒鳴りたいような顔、あきらめた顔、ベソをかけた顔、さまざまな表情が車の運転台で地だんだん踏んでいる。

（まあまあ、何をそんなにお急ぎ召さる——私はこれから若いピチピチした娘とデートですよ。日々是好日じゃないですか）

そんな気持で、私はのんびりと紫煙をくゆらし乍ら、チンを如何に口説くかという秘策を胸の中で練っていた。時計は零時半を一寸廻ったところ、約束の時間には未だ未だタツブリだ。

落合う場所は、彼女達の便宜を計って、近

鉄上六駅の近くを選んだ。上六トルコ風呂横の新しく舗装された三十米幅はあろうかという新道は駐車禁止ではなかった。

マスマミと恍惚のひとつきを過した生国魂神社近くの春夢の殿堂が、冬の弱い日射しを浴びて、灰色に醗くく残骸の如くそそり立っているのが屋根ごしに、車窓の右にのぞけた。この辺り一帯を舞台にして書きまくった、織田作之助が、現在ホテルの乱立するこの界限の風物詩を見たら、どんな小説が生れることであろうか。

夜ともなれば猥雑な五彩のネオンと化すこの一劃で、私は五日前、仄暗く狭い一室で、裸と裸をぶつけ合って、のたうち廻り乍ら、熱いときめきにうめいていたのであった。

極限のマスマミは、とぎれとぎれに訴えるように私の耳に口を寄せ、

「おじさーん、ねえ、括って、くくって——なんでウチをくくりはれへんの？」

と熱い吐息を吹き掛けてきた。マスマミの女粧はMに色づき、自身気付かぬうちにMを求めて喚いていたのだ。私は反射的に腰紐をとり、マスマミの両手を、そして両足首を力任せに強く括っていたのだが——。

車を止めて、舗道に面したコーヒショップ

「サンライズ」の扉を開いた。と意外や、私の姿を逸早く見付けた若い娘二人が、バネ仕掛け人形のようにさっと立上った。

いうまでもなく、一人はマシミ。その連れの娘は、あの夜のチンであった。華やかに装おうマシミにひきくらべ、どうひいきめに見てもチンのみなりはみすばらしかった。

「こんにちは、おじさん。待たせたら悪いと思って早くから来てたんよ。こちら、あの時のチンちゃん」

私は路上で軽く会釈する。はにかんでチンはペコリと頭を下げ、マシミのうしろに隠れるようにした。

「まあ、車にのってチョーダイッ」

私はつい又冗談口をいってしまふ。家で子供が財津一郎の「……してチョッダイッ」と口真似するものだから、いつしか移って私も時々それをやる。最初の話では、チンと偶然会うことにする気でいたが、歳末の巷で若しうまく会えなかったら困るとマシミがいうので、下手な芝居をせずに、真向からチンを連れ出すことになったのである。

歳末の今日は水曜日。チンの勤める会社でも多忙だと思ふが、チンは一日休んで時間を割いたに違いない。

マシミはさっさと私の傍らの助手席にのり込み、仕方なくチンはうしろの座席にポツンと一人座った。バックミラーから覗くと、緊張し、或る種のアバンチュールを期待しているのか、チンの顔は硬くこわばっていた。

お世辞にもさして美人とはいえない。殆んど化粧らしい化粧もせず、地肌の俣の表情だった。年頃らしいニキビが仄赤いほつぺたの両方をところ狭しと占めている。ニキビの壮観さに私はしばしバックミラーを凝視していた。このニキビでは、おしろいものらないだろう。傍らのカラーケーキで粧われたスベスベした頬のマシミとは、これ又何という相違だろう。同じ年頃というのに、どう見ても四つや五つの年令の開きが感じられた。チンならずとも羨望の嫉みは起ろうというものだ。しかし、今日の脇役はマシミである。私は車を止めたままで、ポケットから紙片を出し、マシミに手渡してやった。

「例のおつとめの件、ここを一度当って見るがいいよ。社長が同好の士だからO・Kだけど、外の社員の手前、しっかり働らいてくれなくちゃ……」

いけないよといったかったが口を塞いだ。この社長K氏だって、マシミの仕事の方より

或いは、マシミ自体のプレイを希望しているかも知れない口吻だったからである。唯、関東人と関西人の違いで、遊ばせておいて金をやるという式ではなくて、趣味と実益をかねたチャッカリ屋のK氏のこと、そのところはうまくやるだろう。

「おじさん、ありがとう。ここどんなお店」「プラスチック製品を扱っている会社だ。まあ当たって見給え。あるいは、いいことがあるかも知れない。東京のS氏のようにゆくかゆかぬかは別だけど」

「恩に着るわ、おじさん」

臆面もなく、マシミは私の肩に手を掛け、背伸びして頬にキスする真似をした。チンがじっと見ているのにも全然意に介さない。悪くいえば娼婦めいたテクニクだが、マシミがやると天真ランマンに感じられる。惚れた女にやアバタもエクボか——。私の方が反って照れた。チンのアバタもいつかはエクボに見える日があるだろうか。

「さあ、メシでもくに行こう。腹がへっただろう。マシミ何がいい？ ああそれからチン君、あんたも何？」

あわててつけ足すと、エンジンキーを廻した。娘達の注文をきいても、きかなくても、

私の行先は、駐車場のあるAレストランと腹をきめているのだが――。

× × ×

大阪―奈良を通じる阪奈有料道路を、私はチンと二人生駒方面に向って走っていた。奈良から下ってくる車は多かったが、生駒山脈のヘアピンカーブをくねくねと昇って行く車は少なかった。春や秋の行楽シーズンともなれば、阪奈のこのカーブも珠数つなぎになるのだが、冬枯れの年の暮、のんきに若い娘と二人で走る車は少ない。

マスマは食事をすますと、わがこと成れりといさぎよく帰っていった。チンは俄かに心細い旅になって、腰を浮かせかけたが、思い直してモジモジと椅子に坐り直す。近くで見るチンは全然男ずれがしていなかった。謂わば爛漫の開花にはほど遠い、堅い蕾といった少女の匂いが、そのカラダからはほのと感じられた。私はおずおずするチンをいたわるようにドライブに誘った。季節からいってもドライブの時季ではないが、その時間帯に、私なりの説法で、プレイへの誘導を試みようと思ったのである。

チンは無口であった。友達や同年輩の娘同志となら姦しく囁ずりそんなチンが、不安と

危惧の冒険を胸に秘めての、私との出会いとあっては、いつしか貝殻のように口を閉じてしまうのもあながち無理ではなかった。マスマという華やかな主人公がいては、すべてにコンプレックスを感じ、私という人間にしても、未知の底知れぬ怪物かのように思えたのではなからうか。

先決問題は、この凍りついたチンの心をやわらげることだ。冗談のひとつも言えるような雰囲気をつくってやることだった。

チンに歩調を合せて、親しみ易いおじさんだという印象を植付けねばならない。何かの拍子に殻が破れ、隔てがなくなれば占めたものだが――。プレイの話は、それから先のことだ。私は内心少々うんざりし乍らハンドルを握っていた。ドライブを味うより、畏怖が先に立つのか、チンは顔を伏せた俛、膝の上の黒いビニールのハンドバッグの紐をいじくっていた。(やれやれ、どうも筆さえも進まない。まるでチンのペースに歩調を合したかの様に。乞諒恕)

カーブをのぼりきって展望が開ける。車はここでエンジンをひやしたり、運転の疲れを癒やすため、一服しているのが多い。御多分にもれず私も車を徐行させて、道路わきによ

てゐる。

「一休みしようか」

チンはうなずくとドアを開いた。

展望する山巒に向って私は立小便。孤を描いて液体は、かすかな虹を浮べて落下してゆく。おなじ立小便でも、何とも壮大な気宇にうたれる快感がともなう。二度三度、大きく背伸びして、腰を落す。うしろに佇むチンを呼んで、

「ここへ来ない？」

と手招きすると、素直に私と腰を並べてしゃがんだ。山肌を伝う風に吹かれて、チンの髪はゆれた。

「チン君――、どうも変だね。マスマからは君をチンとだけしか紹介されなかったが、どう呼べばいいの」

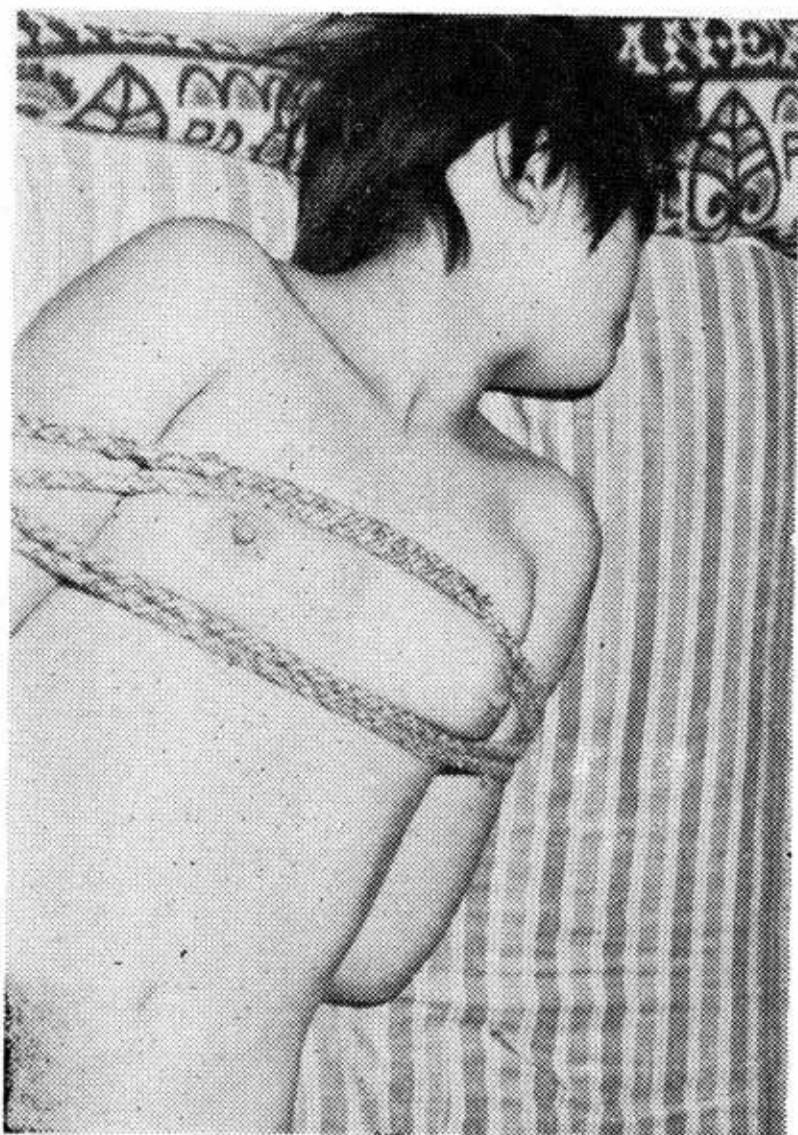
「お友達はみなチンって呼ぶんです。わたしも、それで結構です」

「どうもいけないね。もっとくだけて話そうよ。マスマなんか随分乱暴な言葉遣いだよ。」

その方が反って親しみ易くていいんだよ。よそよそしい言葉じゃなく、普段の言葉でね」

「ほんなら、そうさせてもらいますわ。本当は、その方がラクなんです」

「それ見給え。ところで私のこと、何かマス



ミからきいた？」

チンは首を振った。

「でもチンはマスマミに何か言ったんだろ。私のとったシャシンのことで」

「いいえ、ウチが近くの写真屋の前を通ったら、そのオッサンがウチを呼び止めて、何気なくなかへ入ったら、ユリコのえらい（ひどい）シャシンをそっと思わせてくれはったんです。もうビックリしてしもて、足がふるえてよう動かんかったら、そのオッサンがマスマミもこんなスゴいシャシン撮ってもらえる

ねんぞと言いましてん。それでほんまかと思

てマスマミが東京から帰って来て、夜、商店街でおうた時、きいて見ただけなんです。ほんならマスマミがえらい怒り出しまして、うちの秘密何で知ってんやて聞かさかい、こうこうやと話しただけ。それだけのことです」

「そのことでユリコと会った？」

「ええ、ユリコは何やしら、えろう、おじさんのこというて怒ってはりました。今度何かあったら、いっぺん仇を討ったんねんて、言うてました」

私は悔恨を噛みしめ

ていた。今になってつくづく思うのだが、あの時、何故衝動的にユリコのカメラで、あんなポーズをとったのだろうか。仮に撮ったにしろ、別れ際にその事実を告げてやるべきではなかったか。

ユリコの怒るのも無理はない。どう考えても、私のあの時のやり方は、紳士的ではなか

った。ドライブをしつこく迫るユリコを婉曲に断わる手段は、もっと外にもあったはずである。でもチンの手前、又しても私は嘘をひとつ重ねていた。

「実はね。私のカメラと間違って、ユリコの手持ってきたカメラで、あのシャシンをうっかり撮ってしまったのだよ。それを知らずにユリコはシャシン屋へネガのD・P・Eを頼んだので、自分のあんなフォトがオッサンの手に入ってしまったわけなんだ。勿論私の不注意には違いないが、大いに反省しているんだよ」

「ユリコ、今、あのオッサンと仲がええわ。

ようドライブに連れていってもろてます。でもあのオッサン大分Hやからいや」

「禍転じて福となすか——」

「えッ？」

「いや、何でもないさ。でも、私だって大Hだよ。シャシン屋のオッサン以上かも知れないよ」

チンは頬を歪めて軽く笑ったようだった。

「ユリコやマスマミのあんなシャシンのこときいたらすごいHや思うけど、おじさん、そんなことあらへんわ」

「どうして？」

「そやかて、写真屋のオッサンは、すぐウチ

のおしりさわりに来たもん。工場の男の人かて、すぐテゴ（冗談）して、手を握ったり、おチチさわりに来たりすんのヨ。あんな奴がほんまのエッチよ。おじさん、そんなことせえへんだけ紳士やわ」

ニキビだらけの頬を染めて、チンは大分馴れた口調になってきた（しめしめ）。どうもその口調が誰かに似ている。フト真剣な顔になって考え込んでいたらしい。

「どうしたんやの？」

それぞれ、その口調——と思って私は思い出した。TVの『王さん東遊記』に出てくる春川マスマミ扮する、少し足りないマッサージの女房にそっくりの口調である。山川さんを探す主役のフランキー堺の王さんより、私はこの春川マスマミの登場する、舌足らずの奇妙な関西弁の、あどけない稚拙さのシーンが好きで、それでかかさずこの番組を見ていたのだが、チンのお喋りは、その口調にそっくりだったのだ。私は急速にチンに親しみを感じた。

「いや、どうってこともない。あんたのそのお喋りをきいていたら、フトTV番組のあの女優のことを思い出したのさ」

「春川マスマミっていう、グラマー女優」

「ああマスマミ」

成程マスマミだ。あの娘は小原マスマミで、こちらは春川マスマミか。

「いやに心易いいうね」

「うちの会社の、庶務係長さんがそう云いはったんや。そのマスマミって女優の喋り方によく似てるって」

「フーン、私一人じゃないんだネ。思いは同じだ」

「それでウチ、見たんヨ、あのテレビ。せやけどあの人、一寸アホ見たいヨ。いややわ」

「それぞれ、その言葉がよく似てる。さあ、そろそろ行こうか」

この休憩は大成功だった。私とチンはかなり隔たりがとれた。その隔たりがすっかりとれる瞬間が、その直後に来た。

私は重い腰をウンとこさと持ち上げたが、かなり長くしゃがんでいて、思わず力が腹に入っただのか、呀っと思っただがもう遅い。若い娘の前で、いとも不粋な音響を一発、高らかに発したのであった。かたわらの人が思わず振返って私の顔を見て笑いをこらえた。チンにおいておやである。顔を押えて転がり込むように車へ飛込んでいった。両手で顔を懸命

に押えている。笑いをこらえているのか。

私は照れ臭く、ニヤニヤし乍ら車に戻る。

デモノ、ハレモノとこころ嫌わずというものの、どうも処置なしだ。家庭内なら、妻や子供の面前でブウブウと遠慮なく発し、それに馴れて、年頃の娘すら笑わぬ私の放屁だが、一寸今は場所とタイミングがわるい。

「ああ、すっとした」

照れて言っただけ発車すると、忍び笑いが一度に爆発して、チンは声を立てて笑い出した。

「おじさんいややわ。ウチはほんまに恥かしかったんヨ」

「チンでなくて、よかったじゃないか」

「いやーん、ウチはあんな大きな音……。まあ、いやーん、ヘンなこと言わして」

× × ×

「もう少し走れば信貴生駒スカイラインの入口だが、どうする？」

「こんな寒い時やし、ウチはどっちでもええんヨ」

「でも折角会社まで休んで出てきたのに、どこへも行かないんじゃ気の毒だネ」

「そんなこと構わへんのヨ。ウチはユリコほどドライブきちがいやないし、おじさんのゆくとこなら何処でも構へん」

「二人きりだよ、怖くない？」

チンはキラリと光る眼で私を見た。私は思い切って口をきることにした。はねつけられればもとどだという軽い気持で。

「チンさえ構わなかったら、マスマやユリコのようなフオト撮りたいんだけど。イヤならいいんだ。無理にとはいわないから。チンの心しだいだよ」

ハッとしたようにチンは眼を伏せる。体が心なしか小さきみにふるえている。ユルユル走り乍らでも、車はいつしか信貴生駒スカイラインへの分岐点に到達していた。三叉路の正面のレストランの前の道路に車を近附けて一応止める。

チンは黙っていた。私も暫らく口を開かなかった。そんなアバンチュールを内心幾分は期待していたものの、いざ私の口からそれをきかされると、彼女は堅い蕾心で、恐怖と羞恥が先に立ってしまったのであろうか。

「どうする？」

決心をうながすように、更に声をかけるとチンは呟くような口調で、

「でもウチ、ユリコやマスマみたいに綺麗なことからへんし、そんな心臓あれへんのヨ。おじさん、ウチみたいなもの撮っても仕様な

いんと違う？」

と、その言葉はチン自身のコンプレックスからきた諦観的な響きがあった。

「どうしてチンは自分を卑下するの。君だってユリコやマスマ同様に若くハツラツとしているよ。チンはあの子達の着ているものに惑わされ、幾分洗練された都会的なセンスの前で萎縮しているだけだ。もっと堂々と胸を張って、私だってあの子等に負けないぞという自尊心を持てばいいのさ。おじさんはチンのような素直な娘が好きだよ」

「でもおじさん、ウチを撮ったシャシン、又おじさんの書いてる本にのせるんでしょ」

「いやかい」

「そら、いややわ。誰か知ってる人が読むか分らへんのヨ。そうになったらウチ……」

「そうだね。将来チンの結婚に差支えてもいいじゃないしネ。じゃあ、よそう」

私はあっさり要求を撤回した。無理に小娘を誘って、いやがるのを撮ったところで、どうなるというのだ。

「じゃあ、奈良へでもゆくか——」

もうこのまま引返したい気持だったが、それでは余りにも現金すぎる気がした。折角会社まで休んで出てきたのだから、せめて奈良

公園なり一周して帰るとしよう。そう腹をきめると、内心傍らのこの少女を少々重荷に感じつつも、潔ぎよくギヤをセコンドに入れ直した。チンは黙っていた。

走り出した時、チンは思いつめた声を出した。

「おじさん、本当は撮りたかったんと違う」正面をにらみ乍ら、

「ああ、とりたかったネ」

「ウチをくくりはるの？」

「出来れば、そうしたいと思ったよ」

「本当に、カメラ撮りはるだけ？」

「そうだよ」

「ウチ見たいなもんでも構へんの？」

「勿論、その気だったんだ」

「おじさんのいうこと聞いたら、これからもときどき呼んでくれはる？」

私はあわてて、ニュートラルに入れて、スーッと車をガードレールに引寄せた。

「どうなったんだい、一体——」

げに女心は妙……。無理に押せば凹む一方だし、あっさり引下れば、肩透しをくわされたような気持になって引っ掛ってくる。この引っ掛けてきたチャンスは絶対逃がすべきではない。内心こうなればと、諦めの反面チ

ンの出方を待っていた私の言葉のワナに、チンはいくついてきたのだ。

私はマジマジとチンを見つめた。ニキビが赤く染まってはにかんでいる。

「じゃあ、撮らせてくれる？」

もじもじしてチンは又渋り出した。

「せやけど、はっきり顔出ても困るし、あんまりヘンな恰好するのも恥かしいし、ユリコやマスミ知ったらどない言うやろ思て……」

私はジリジリし、且つイライラしてきた。

ええい、思い切って車をモーターにでも飛び込ませてやれ。その気になりつつも、この娘はいざとなると生れて始めての経験だけに、遅疑逡巡しているのだ。

「顔は出来るだけとらないようにするよ。チンは始めてだから、ごく簡単なポーズでいいよ。さあ行こう、善は急げだ」

生駒の料金徴収所に近く、恰好のモーターがある。箕田氏がこのモーターを数度利用して一度行っで見給えと奨められていたことを、その時思い出し、気をつけ乍ら走ってゆくとガソリンスタンドの右端に、うっかりすれば見逃がしてしまいそうな細い入口があった。名づけてドリームハイツ。丁度進行方向にある。車を左折して、入口を潜る。受付のような建物があるが誰もいないカラッポ。赤塗りの橋を渡って、小径を辿ると、事務所の前がゲートのようにになっている。車を止めると



中からおじさんが出てきて、ポットを一個渡ししてくれて、ベルギーへどうぞと言った。

指さす彼方のあちこちに瀟洒な一戸建ちが小径に面して点在している。山肌をバックにして静寂な落付いた雰囲気だ。のろろ走り出すと、成程、それぞれの入口に万国の主要都市の名を冠せて、旗印のマークをつけてある。チンは物珍らしげにキョロキョロしていた。奥まったスマートな建物の入口に、ベルギーの掛札を見付けて、私はその横手のガレージに格納した。一戸建ての部屋の傍らに、それぞれガレージが附属している。年末のこの時間というのに、ガレージの半分くらいは車が入っている。のんきな人間は私一人ではないらしい。扉は内側のノブを廻せば錠がかかる自動式だ。

「さあ、上り給え」

チンをいざなってスリッパにはきかえる。部屋の構造は応接めいた広くとった洋風の間と、境いの襖を開けば和式の六帖の間にダブルの寝具が人待ち顔に敷いてある。バス・トイレ・テレビ・冷蔵庫付の至れりつくせりの流行りの構造。深海魚の游泳するような、陰湿なドス暗いアベックホテルと違って広く、窓を大きくとってあるので室内は恥かしいく

らしいに明るい。しかし闇の間は窓もなく、襖をしめれば真暗闇になる。備えつけの茶壺と湯呑みをケース棚よりとり出し、持参したポットで茶を淹れる。形ばかりの小さな茶菓子が入った二つポツンと置かれてある。

「お風呂に入ってきて来ない？」

「ウチ入らへんかていいんヨ」

「入っても入らなくてもモーター代に変わりないんだよ。ジャンジャン湯を出して、ゆっくりとつかっておいで。その方がいい、さあここに湯上りの浴衣がある」

私は浴槽に出掛けて、湯のカラーをヒネって戻った。

「ウチ、やっぱしかなんわ」

「何が……？」

「シャシン撮られるの」

「心配する程のものじゃないよ。さあさあ」

「おじさん、わるさ（悪戯）せんといてネ」

チンにとっては、そのことが余程気掛りらしい。私は、一寸悪戯し、からかいたくなった。チンはどんな返事するだろう？

「わるさするって、どんなこと」

「おじさん、知ってはるくせに……」

「知らないネ、例えば？」

「そろそろいろいろあるけど、さっき言った見た

いに、ウチのおしりなでたり、おチチさわったりするわるさヨ」

「フーン、それがわるさかネ。すると、チンをおくるとき、おチチやおしりに触らないでどうして縛ればいいというのかね」

「そら、どうしても仕方ないときは触らんとしゃあないけど、わざとさわらんといてネ」

「おしりをさわるかわりに、ズボンのバンドでも引抜いて、パチリと叩いてやるよ」

「あかん、そんなことしたら」

「冗談、冗談、チンがあんまり真剣だから、一寸からかって見ただけさ。大丈夫、そんなことしやしない」

私は破顔一笑して、チンの肩を叩いてやった。

「お風呂へ入っておいで」

素直にうなずいて、チンは浴衣を抱えて立上った。

チンが浴槽に去ったあと、私は扉を開いて車のトランクからバッグをとり出して来た。

成否相半ばしていたので支度は簡単。縄をとり出して見たら、なつかしや、一番古い、初期によく使った、ダンダラの柔かい縄が出てきた。この縄で縛った人は、どれほどあるだろうか。梨花悠起子、伊吹真砂子、愛川悦

子、etc. すぐには憶い出せぬくらい、この縄は数多の女の脂肪を吸って来た。縄尻はときほぐれ、あちこちすり切れて、ますます柔軟になっている。

浴室から軽いハミングがきこえてきた。加山雄三の「お嫁においで」のメロデー。チンの心は、温かい湯舟の中ですっかり解きほぐれてきたのだ。もう大丈夫、私はカメラをとり出して、ストロボの装填を始めた。

× × ×

羞恥に身をちぢめるチンの白い肉体は、みずみずしく、素肌はピチピチと張り切っていた。寝室に通ずる襖をしめると、二十ワットの蛍光灯に照らし出されて、チンは身をくねらせた。洋間はカーテンはしてあっても、どんなことで、外部から覗かれるかも知れないとチンが拒むので、夜具の敷いてある和室でとることにしたのである。

シュミーズをずり下げて、腰のまわりでため、かなり豊かな乳房を挟んで、後手を縛った縄の残りで胸をしめつける。僅か一本の縄は寸足らずで、彼女の左の二の腕で挟んでとめるより仕方がなかった。海千の私にとって、この縛りなど、お義理にも緊縛とは言えない。難しい初歩の又初歩の縛り方第一歩に過ぎな

ったが、チンにとっては一世一代、清水の舞台からでも飛び降りたような気持であったに違いない。カメラを構えると、まるでそれが合図かの様に、チンは顔を伏せた。伏せた顔を下からカメラで覗き上げれば、顔を反対側にそむけた。内心舌打ちしたい気持だが悟られてはならない。チンの胸は大きく息づき、肩の辺りは心なしか慄えていた。それは狼と羊のようでもあり、驚にねらわれた小雀のようにも思えた。暖房のきいた室内では、その慄えは決して寒さからではなかった。

「顔をとらんといてネ、ねえおじさん」

「ああ、とらないようにするよ。その代り、顔から下はうんと撮るよ」

私はチンに近寄ると仰向けに寝転がした。体の上に跨がるようにして、クローズアップをとる。チンは精一杯顔を反けていた。

シュミーズを腰から足許へ下してぬがしてゆく。チンは黙ってなすが俛になっていた。

桃色のショートパンツがピッチリとチンの肌を守っていた。私はそれに手を掛けた。

「おじさん、やめてーえ。恥かしいわ」

応えず、無言で足許へずり下げてゆく。

白い肌にポトリと薄墨を刷いたような黒いかげりが、逸早く私の眼を射抜いた。

チンは太腿に力をこめて、私の視線をはね返すように、体をのけぞらせて身をねじる。ねじったからだを、カメラは執拗に追いかける。チンは観念のまなこを閉じて、心持ち下唇を突き出していた。頬一面の若さのシンボルが、徐々に私にはえくぼに見えてきた。

私はやおらカメラを置いて、チンに近附きその凹凸の多い頬っぱたに唇をつけた。

ピクリと頬がけいれんして、チンは眼を開き、まじまじと私を直視した。

はだかのチンを抱きすくめると、チンの体に抵抗はなかった。

「いやよ、いやよ。それだけはいや」

チンの抗らう声は弱かった。私はますます腕に力をこめていった。苦しげな表情がチンの眉間に走り、徐々にチンの眼はうるんできた。オナナの体はいつしか、しっとりと濡れていた。

理性が辛うじて私の心猿の思いを抑制させた。私は静かに手を放すと、サラサラとチンの縄をといてやった。放心したようにチンはうずくまっている。

若い娘と二人、密室で過していると、緊縛のプレイが追々と煩わしくなってくる。出来得ればこの辺りでカメラを捨てて、心のおも

むく俛に耽溺したかった。しかしそれでは、中年男と若い娘の単なる情事にしか過ぎなくなる。

私は氣をとり直して縄をとった。一本の縄を使って、思い切り極端な縛りを試みて見たかった。

「少しきつくても構わないかい？」

私はうずくまる彼女に、のぞき込むようにして声をかけた。どうなることかと思って、怖れわなないていた娘は、案に相違した私の言葉に不意をつかれたように、

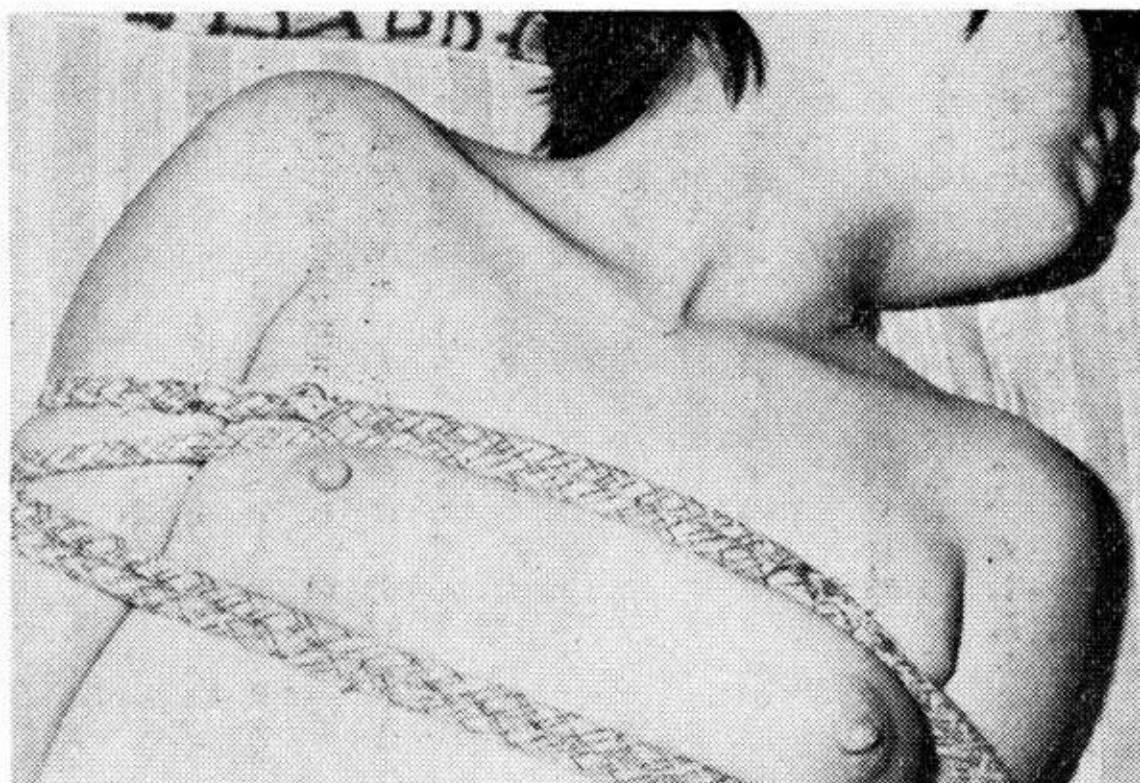
「ええ？」

ときき返した。

「少しきつく縛ってもいいかと、きいたんだよ」

「……」

チンはコクリとうなずく。せいぜい一本の縄だ。どう縛ったところで変りばえもしないが、兎も角、私はチンに近づき、両腕を逆にとって、肩胛骨の方へ振じ上げた。ウツとうめいて彼女は膝をくずす。思い切り上に振じ上げると十字に縛った手首の縄を、首を挟んで肩から前に廻し、直線に股まで降して、くぐらせた縄を逆手の手首の縄につなぐ。縄尻ぎりぎりに結ぶと、私はチンの背を軽く押し



た。ドサリと横倒れして、チンは体をかがめる。腕をさげようとすれば股縄がくい込み、彼女は身のおきどころのないポーズで静止した。このポーズを前後左右から撮り、更に反転させてとる。部屋に備えつけの浴衣の腰紐

二本を集めて来て、左の足首を縛って床の柱にゆわえ、右足首をもう一本の紐でしばらくぐいと引っ張って開いた。

「あっ、いた、いた、いた。おじさん無茶やわ。あしが千切れるう……」

チンは大仰な悲鳴をあげた。股に喰い込んだ縄はすっかり没していた。右足首を引っ張ったが結びつけないところがない。私はあきらめて手を離す。片足吊りの恰好で数枚。

「おじさん、手がしびれてしもて……はよ解いて」

よしよしと、私は急いで縄をとく。

「ほんまに、えらいことしはるわ。ねえ、教えて。マスマにもこんなことをした？」

「ああ、やったよ。もっと凄いのを」

「ユリコには？」

「マスマ以上だね」

「どの子も我慢してた？」

「ああ、辛抱するよ」

「ほんと——、すごいんやね。もっといろいろなこと言うて」

「何を言うの」

「マスマやユリコにしたこと」

私は苦笑した。チンはひとかどに扱われ

た気持ちになって、いつしか敵愾心というか、競争心というか、同性のプレイに激しい興味をもち始めている様だった。

「ああ、いろいろやったよ。この部屋じゃダメだけど、逆さに吊したり、体を思い切り曲げて、海老責めというのをやったり、うしろ手にして雁字搦目に縛って、部屋から連れ出して、おしっこをさせにもいったよ」

「ふーん、いよいよ、頭がおかしくなってきたわ。おじさん、なんでそんなに皆んないじめるの？ いじめるのがそんなに面白いの？」

「世の中にはね、虐めて喜ぶ人もあれば、虐められて飲む人もいるんだよ。おじさんは女の人が虐められて苦しんでいるのをカメラにとるのが生甲斐なんだ。チンには分らないだろうネ」

「全然——」

「そうだろうね。分る年頃じゃないものネ。チンが分っていたら困るよ。君は純真だよ。少なくともマスマやユリコよりはね」

「ウチ、本当に何も知らんねんヨ。男の人、こわい思て、遊んだことあらへんのヨ。それにウチのお給料は、みな家に入れるさかい、遊ぶお金もあんまりあれへんのヨ」

「そうだってね。マスマもそんなこといって

いた。でもそれでいいんだよ。おじさんはそんな親孝行の子の方が好きだ」

事実私の見た眼では、チンは男を知らぬ体であった。蕾は開花していなかった。恐らく厚い膜が、私の行手をさえぎるに違いない。

男を渡り歩くようになったマスマも、ドライブにうつつをぬかすユリコも、孰れも男を知った体であった。それだけに私の行為もどこか許されていいように思えた。

チンは手つかずであった。それだけに貴重だった。私の過去のカメラ・ハントの女性の中でも、処女性ある娘は五指にも充たぬのではなかっただろうか。男に対するテクニックを知った女より、世間しらずのおぼこさが珍しかった。

この場の仕儀では、或いは私は残酷な男になるかも知れぬ可能性をはらんでいた。

一時のかりそめの出会いで、若し私がチンを女にした時、彼女は将来いついつ迄も私を恨むことになるかも知れない。それを思うと私はおそろしかった。何か隙だらけのチンの今の心が……。

そのチンは、ハダカの俤、べったりと私の傍らで横坐りに体をかたむけている。

チンの体はしっとりとうるんでいた。眼の

熱っぽさはチンをその気にさせていた。

× × ×

午後五時前というのに、空はすでに昏かった。冬至の一兩日前といえば、冬の陽の早いのも当然であった。

しわくちゃんになった濡れぬシートは、何事もなくとも、情事の跡のように醜くくよじれて辺りは乱れていた。形ばかり整えて、私はカメラを片附ける。チンは再び風呂へとハダカで温まりに行こうとした。

「おじさんも入らへん？」

チンは許容しているのか、そう私に声をかけた。入れば又抱きしめるだろう。そしてどうなるか分らない。私は黙って首を振った。

「そう、入ったらええ気持やのに……」

チンは私の心を推しはかり兼ねて、しばらく佇んでいたが、さっさと浴槽に消えた。部屋に入って来た時は、すすめても遠慮していたチンだったのに。

湯上りのチンの頬は真赤に染まり、壮大なニキビはふくらんで花盛りだ。

「さあ、そろそろ戻ろうか。八尾まで送ってゆこう」

「えらいせくのやね。ウチはもっとゆっくりしたいんヨ」

チンにとって、この雰囲気はもっとゆっくりと味わいたかったに違いない。私は気付かれぬようポケットを探り、数枚の紙幣を掌に握りしめた。

「何かプレゼントする気だったが、これで好きなものでも買うがいいよ」

「そんななんもろたら困るんヨ。おじさん、心配せんといて——」

「いいよ、いいよ」

私はチンの手に握らせる。

「本当にもうといて構へんの？」

「当然だよ。今度はチンのためプレゼント買ってくるよ」

「きつと？ ウチおじさんの今の言葉で希望持てたわ」

「プレゼントに？」

「ううん、今度というてくれたのは、又呼んでくれはる言葉やろ。それが嬉しいんヨ」

「チンは可愛い子だよ」

「そんなこと言うてくれたのは、おじさんだけ。何やしら愉しいなってきたわ」

「君は私のことを何も聞かない。それでいいのかい？」

「おじさんも、ウチのこと、何もたずねへんわ。あいこやわ。おじさんウチのことでなに

か知りたいことない？」

「ないね。今のチンで充分だ。そう、君の会社」

社の電話番号ぐらい聞いておこう」

「ウチにもおじさんの電話番号教えといて」

「掛けてくる気？」

「分らへん。掛けるかも知れへんし、迷惑や」

「たら止めとく」

「愉しかったの？」

「うん、生れて始めてこんな処へ来て、妙な」

気持やけど、たのしかった」

「おじさん、大エッチだったろ」

「そんなところもあるけど、やっぱり、紳士や」

限定版グラビア写真集 △美しき縛しめ▽第八集

山原清子 大塚啓子
鈴木晃子

女斗緊縛競艶写真特集

一部一〇〇〇円
略号(美8)

「女性対女性」の激しい女斗場面と女斗美の躍動！
女性が女性を縛る緊縛プレイの見事なフォト化
動きのある女性と女性の縛り場面の美しい展開

長い間の皆様マニアの御要望に応えて、女性対女性の女斗美、女斗場面、並に女同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって、ここに集大成いたしました。六尺禪或はパンティを着用した美女の裸身が組んずほぐれつ縦横に画面狭ましと展開し筋肉を躍動させておられます。いずれも動きのある連続動作によって三女の裸身の美しさが、いきいきと目の中に飛び込んできます。数十枚の女斗美、女斗写真女性相互の緊縛写真が、この一冊にて、皆様のものとなるのです。この新しい企画はまことに画期的なもので、この機会を逸すると絶対に入手できません。今すぐ、お申込み下さるよう、お待ちいたします。

△内容▽ 啓子の裸身を厳しく括くる清子、あえぐ啓子。緊縛して押さえ込まれる啓子の連続被虐姿態。清子に縛られてゆく過程の連続写真。縛られて身動きできない裸身を清子にいたぶられる啓子。縛られた刺青の裸身を清子にいたぶる晃子。晃子が清子に対して猿ぐつわを噛ます連続写真。馬乗りになって清子をいじめめる晃子。清子を逆エビに責める晃子。清子白を縛り上げて逆エビに責める啓子。黒禪と禪の清子と晃子の女斗美、女斗シーン。晃子を寝業で押さえ込む清子、晃子の逆転劇。晃子を縛り責める清子。後手縛りの清子が啓子に翻弄される。その他女性と女性の緊縛プレイシーンの数々。

わ。結局何もせえへんかったわ、ウチに」

「そうかね。今度はするかも分らんぞ。チン」

が好きになったのでネ」

「チンもその気になって、今度くる時は香水」

でもうんと塗ってくるわ」

「こいつ——」

× × ×

ドリームハイツを出ると、有料道路はすっかり夜の幕りに包まれていた。

食事しようかと言うと、チンはかぶりを振った。

「もう、ええのんヨ。あんまりおじさんにお金つかわすと悪いもん」

この娘は、世帯持ちがよくて、金の有難味を知っている。マスミやユリコなら喜んでついてくるだろう。

阪奈道路を出ると大東市。赤井で左折して直進すると、近鉄奈良線の若江岩田を越えて忽ち八尾市に入る。

八尾駅で車を降りる時、チンは自分から私の手を握りに来た。

「又呼んでネ。正月は五日まで休みなんヨ。毎日家にいるさかい呼んで」

名残り惜しげにダメを押して、チンは巷の灯の中へ消えていった。



水中花

(五)

芳野眉美

足^{あし}

微熱が続いて、勘解由小路公博は今日も会社を休んだ。風邪をこじらせたらしい。会社といっても、父親の創立したものだ、実権はとうに現社長に移っている。公博は名前だけの副社長であり、本社に顔をだしたところで用は無い。三代目の元伯爵に経営の才能な

ど皆無であった。公博の父親の子飼いであった現社長の、義理堅い恩情で生活しているようなものであった。戦前あった不動産も殆んど売りつくしていた。

ベッドに横になった公博は、窓から一面に広がる森の緑に眼を奪われていた。初夏の緑は明るく美しい。午後の日射しは熱さを増してくるよう感じられる。自然園の森に囲まれた住宅街はひっそりと静まり返っていた。

二階の公博の寝室は書斎をかねている。いや、書斎にベッドを移したのである。本に埋もれて公博は生活している。本を読むことしか、この無能の男の仕事はない。かつて、夫婦の寝室であった一階の奥の部屋は、今は香葉夫人の居間になっている。夫婦は、数年前からベッドを別にしていた。

公博が香葉夫人の寝室に行くことはない。階段を上がる足音がして、書斎のドアが静

かに開けられた。香葉夫人が漆の盆に、お茶をのせて現われた。茶碗は志野のぐい呑みである。酔った人肌のような釉で紅志野だと思われる。

志野を手にとって、公博は香葉夫人の髪をちらと見た。見事な夜会巻だが、愛用している珊瑚の簪が見あたらない。落したのかな、と公博は思う。が、すぐ思い直す。忘れてきたのだろう。鬼頭老人の部屋に。思っただけで、口にはださない。だまって、茶を飲む。繊細な鼻がつんとして、品が良く、うすら冷たくて、それでいて、肉体の欲望に素直でよけいな羞らいを捨ててしまう。淫蕩なのか貞淑なのか、公博は妻のことがわからなくなる。ことがある。

サイドテーブルに茶碗を置くと、香葉夫人が帯に手をかけてベッドに近寄った。

「ねえ」

濡れ濡れとした瞳が夫に訴える。公博は眼を閉じた。妻の要求はわかっている。

「わたくし、欲しいの」

帯がとけた。

「熱がある」

そっけない。

「微熱だわ」

「微熱でも、熱は熱だ」

男の心をそそのかすような情感が、香葉夫人の深味のある優雅な顔にひそと漂った。

「いじわる」

それでも、だて締めをとろうとする香葉夫人の手を、公博はやさしくおさえた。

「子供たちが学校から帰るよ」

「今日はピアノのお稽古で、五時頃にならないと帰りませんの」

「それじゃ、オジイチャンのところにでも、遊びに行ってくればいい」

「——」

「さっき、寿美麗さんは外出したよ。鬼頭のオジイチャン、一人で淋しがってるだろう」

香葉夫人は首を横に振った。

「あなたが欲しいよ」

「困ったな」

古典模様の着物が床に落ちた。淡い水色の長襦袢のまま、香葉夫人は夫に添い寝した。

しなやかな指が、すっと下がって、まさぐる。

「だめだよ」

「いや」

しなしなとなって狂ったように、からみついてくる。昼だというのに、どうしてこう

も好きなのだろう、と公博は思う。名門の血統は淫蕩なのだろうか。

香葉夫人の実家は、明治維新後、子爵家となっている。領地僅か二万石の微々たる小大名の子孫だが、室町時代からの純血は保たれていたといわれる。それを信じるなら、稀少価値の貴婦人の血が香葉夫人にも流れているわけである。四百年余、小大名の当主は、ただ血統を保持させる為に、家士の妻であろうと、生娘であろうと、てあたりしだいに閨房の餌食にした。その淫蕩の歴史が香葉夫人に続いているのかもしれない。

倦くことのない愛撫の要求が、寝室を別にした理由のほずであった。が、夜になると、いや、昼でさえも、香葉夫人は階段を上ってくる。

「オジイチャンのところに遊びに行ってくれればいい」

この頃では、これが口癖になった。

洋掛けが床に落ちた。

「足袋を脱がせて」

「キスだけだよ」

公博は、やっと妥協点を見つけてほっとする。公博の身体は微熱も手伝って、疲労が重なり、だらしなく萎えていた。

ベッドから下りて床に跪まづくと、公博は妻の足から足袋をとった。まっ白な素足が夫の舌を待っている。公博は軟らかな美しい妻の足をかかえると唇をつけた。手で握ると掌にすっぽり入ってしまうかと思われるような繊細な足が魅了する。

公博は足の指をそろえると、すっぽりと口にはうばった。舌を動かす。唾液が口中にあふれて、なんともいえない香りが妻の足の指から漂った。香葉夫人は足にも香水を染み込ませているのだろうか。

公博は足の指を一本一本、丁寧に舐め、そつと噛んだ。ゆっくり噛むのを強める。

「あっ」

香葉夫人の小さな叫び声が公博の情慾を燃え立たせた。ぎゅっと指を噛む。

「痛い」

その声は甘かった。

切りそろえられた爪に赤味がさした。

芸術座の△宴▽で、岡田茉莉子と市川染五郎の雪中のラブシーンは、綺麗なぬれ場で好評だった。

大雪の夜、足が無感覚になった美しい人妻は、道に倒れてしまう。と、連れの中尉は人妻の足から足袋をはぎとり、冷えた人妻の足

を噛む。△わかる？ 痛いかい▽そこには恍惚しかない。

△足だけなのに、なにか全身をさらしている感じ……▽と、主演の岡田茉莉子は云っている。この言葉は好きだ。

素足の持つ意味は深く大きい。

香葉夫人は、足舐めをなかなかやめさせない。夫の唾液で、べとべとになった小さな足を夫の口になすがたまま、うっとりと眼を閉じている。夫の舌が足の裏を舐める。土踏まずを噛む。足の指を吸う。軽い快感が全身をふるわす。

足だけなのに、香葉夫人は夫に全身を舐めまわされているような錯覚にとらわれて呻めいた。激しい陶酔がそこにあった。

どのくらい時間がたっただろうか。

口の唾液が絶えた。公博はサイドテーブルの茶碗を覗く。お茶が飲みたい。のどがからからだ。あごが痛い。舌がはれぼったい。突然、めまいに襲われて、公博は床に倒れた。

「いくじなし」

ベッドに起き上った香葉夫人が、夫の顎を乱暴に踏んづけた。

「もっと舐めるのよ」

絶頂感が跡切れた怒りが、そこにあった。

「水だ」

妻の足の裏で顎を圧し潰されながら、公博はあえいだ。

「水をくれ」

「水ですって」

ベッドから下りた香葉夫人は、夫の顔にまたがった。夫を見下して、

「水が飲みたいのなら、わたくしのお小水を飲ませてあげる」

水色の長襦袢の裾がひるがえった。

「馬鹿、よさないか」

その声が途中で切れた。

「うっ」

夢中だったし、それに、量も多すぎたのだろう。半分は公博の顔を濡らして床にこぼれた。

あたたかい妻の小水を飲まされて、公博は痴呆のように空をにらんでいる。

香葉夫人は立った。

「おいしかった、わたくしの……お小水」

公博は何も答えない。

「オジイチャンのところに行ってくる」

着物と帯をつかむと、香葉夫人は階下に下りていった。夫を完全に無視している。

激情が香葉夫人を襲ったのに違いない。

筆ふで

寿美麗夫人は生花の稽古に、牧二郎は予備校の午後部に行つて、広大な屋敷に人の気配は無い。離れて、鬼頭老人がひっそりと動かぬ水石を見つめている。

碧緑色の気品ある神居古潭石、蒼黒色の潤沢な光を放つ神居古潭石、老人が北端の水石を好むのは、なつかしい思い出があるのかもしれない。

水石の心は誰も知らない。

床の間の書軸には、

——世事風塵外 詩情水石間

とある。金の元好間の詩である。ふと、老人は、増ぞうの面をつけた婦人が、庭の池に沿って離れに近づいて来るのに気がついて、顔をあげた。

能面の女は、白砂の洲ですると帯を解いた。古典模様の着物を脱ぎ、淡い水色の長襦袢を脱いだ。

十数本の赤い紐が白砂に散った。

女の輝くような、まっ白な柔肌をかくすのは、ただ、長くたらしした黒髪しかない。

むっと息苦しいばかりに盛り上った胸の隆

起、くびれたウェストから綺麗な曲線を描いてぐっと張り出した腰も悩ましい。

能面の裸女は、敷砂から離れの老人を見上げてゐる。何も云わない。

そよ風が吹いていた。いつとはなく、しつとりと翳かげのある柔かい茂みから、馥郁たる香が漂い、老人を包んだ。

老人はうなった。だまって物置の方向を指さした。

裸のまま、女は庭を歩く。

女の両手は鎖でくくられて、天井の滑車に吊るされた。そして、女の両脚は無惨に大きく広げられて、足首を縛った鎖で、それぞれ石の柱に固定された。

女のもっとも美しいところが、むきだしにされて老人の目の前にあった。

「御主人に足を舐めさせたそうだから、わたしは、そのものズバリといこうか」

能面の下に笑はない。

そこだけが特別に発達して、むっちり固く緊まった太腿は、見ているだけで老人を刺激する。まっ白な太腿に、赤いアザを見つけて、老人はにやっとした。

「三つ、四つ……ほう、こんなところにもキスマークがある。御主人は愛妻家だな」

老人の手に一本の筆が握られていた。

「習字でもするか」

さっと筆をおろす。柔肌に筆を走らす。

「くすぐったいか」

老人の声はやさしい。

「どうだ、この微妙な感触は」

しなやかな筆の穂先が美しい肌を撫でる。

老人は、このいたずらをなかなか止めない。

女が顔を左右に振った。苦しいらしい。く

すぐったいらしい。能面の下には猿ぐつわが

されているのだろうか。老人の趣味だと、寿

美麗夫人の汚れたパンティかもしれない。小

さな和服用のチュールのビキニが、女の口に

詰め込まれてあるのかもしれない。

「こんなことをしていると、また二郎に見ら

れてしまうかもしれない」

老人は楽しそうに、女の美しい肌に筆を動かしている。

かしている。

「もっとも、香葉さんだとは気がつかないだろうが」

ろうが」

物置の高い窓から西日がさした。

物置に宙吊りにされた香葉夫人は、天井か

ら羞恥に満ちた行為を強いられている最中、

二郎に覗かれている。増ぞうの面をつけられた裸

女を、二郎は寿美麗夫人だと思っているらし

いのだが。

「この物置は、御主人の部屋からは見えるかね」

あられもない姿態を見せている人妻に老人はきいた。残酷な質問ともいえる。

「屋根ぐらいいは、木立の間から見えるかもしれないな」

みるみる清浄な増女ぞうおんなの面に絶頂感があらわれた。神聖な天女の面に恍惚の表情が浮かびあがった。

夫が承知している姦通。夫は今この物置の屋根を見ているだろう。倒錯した快感が、そこにあった。

老人は獣のような呻めき声をあげると、筆をほうり投げて、香葉夫人の両脚の間に身を投げた。

そして、叫んだ。

「しておくれ。わたしの口の中に」

老人の絶叫は哀願に変わっていく。

二度目の発作が香葉夫人を襲った。

たちまち香葉夫人は空に舞い上がり、月宮の舞を舞った。舞いながら、老人の口に寶石のように輝く雫をしばらく続けた。

老人ののどが激しく鳴っている。

老人は飲んだ。一滴もこぼすまいと、吸い

続けた。

老人が香葉夫人を抱いたかどうかは知らない。

汗あせ

「痛い」

甘い声であった。

「噛んでは、だめ」

男のクールカットの髪をまさぐりながら、やさしくたしなめた。

「ああ」

が、男は噛むのをやめようとしなない。

「キスマークがつくじゃない」

「つけようか」

男が上眼使いに寿美麗夫人を見た。

「だめよ」

「つけるぞ」

「だめだめ」

「御主人に見つかりと困る」

「困るわ」

「こわい」

「嫉妬深いから」

「とても」

「それはこわいな」

「痛い」

寿美麗夫人は身をよじった。男の顔は、夫人のふくよかな乳房からはなれない。

「あなたの……」

「なあに」

「乳房は、ポアティエ夫人の……」

「誰」

「十六世紀頃のフランスのアンリ二世の寵妾ですよ。アンリ二世は、宮廷画家に命じて自分の愛妾の裸体を、たくさん描かせているのですね。その美しい乳房を見せびらかすために」

「——」

「そのポアティエ夫人の肖像画を見ているみたいだ」

男は寿美麗夫人のまっ白な乳房にやわらかく歯をたてた。

「可愛いくて、すばらしい」

豊満な乳房に埋もれていた乳首が美しく輝いた。寿美麗夫人は思わずのけぞった。

窓からM神宮の参道のイチヨウ並木が見える。大学や高校、予備校が密集している地域に、数多くホテルが点在しているとは思えない。白昼のホテル街は、ひっそりと静まりか

えって、M神宮の森にその姿を没している。

ベッドだけの簡素なホテルの一室に、窓から強さを増した初夏の日射しが差し込んで明かるい。鋭くのびたイチヨウの小枝が、開けられた窓から中を覗いている。二人はカーテンも閉めていない。

「いつ頃から」

顔を上げて男が聞いた。

「あなたを求めるのが激しくなったのは」

「主人が」

「そう、鬼頭三郎太氏がさ」

寿美麗夫人が首をかしげ、しばらく考えてから、

「会長になってからかしら」

「鬼頭さんは、名誉職の会長に祭り上げられたのでしょ」

「ていのいい引退ね」

「趣味はないの」

「速達料金」について

○雑誌の速達料金は一部につき七十円、二部につき百円です。写真、限定版は一件につき五十円です。

○但し、雑誌と写真、限定版は同送できません故、速達料金の計算は別々にお問い合わせ致します。

「水石や能面をいじっているけれど、あまり熱心とはいえないわね」

男は話をしながら、寿美麗夫人のほっそりしたしなやかな指の先をしゃぶっている。

「仕事の鬼だったのよ」

「仕事の鬼か。それが一番いけないな。引退したら、何もすることがなくなってしまったのでしょ」

「そうね」

「何もすることがないから、夜といわず、昼といわず、あなたを裸にするんだ」

「痛い」

男は寿美麗夫人の指を噛んだ。

「噛むのが好きね」

「おしゃぶりが好きなんでね、赤ん坊の頃から」

「悪い癖」

「そうでもないでしょ」

「痛い」

「荒縄で縛られるより痛くないでしょ」

「異常だわ、少し」

「そうらしい」

寿美麗夫人の手首に残る縄のあとを男はさすった。昨夜は、後手高手小手に縛られたまま寝たという。

明け方、尿意を感じて、寿美麗夫人は眼をさました。隣りに寝ている老人を起こす。

「ほどいて」

それで、意志は通じる。老人の手が夫人の下腹を撫でた。

「いや、でちゃう」

「ここでしなさい」

「——」

「わたしが飲んであげよう」

「——」

「しなさい」

老人は掛布団を勢よくはがした。後手に縛られた寿美麗夫人は、身体をこめて抵抗する。老人は夫人の太腿を両手でつかむ。

「あっ」

寿美麗夫人は小水をもらした。静流は、やがて本流となって、勢よく老人の口に流れ込んだ。老人が激しくむせた。むせて、むせ返った。

「許して」

やわらかな両の太腿に、老人の爪あとがくつきりと残った。

しかし、こんな話を、寿美麗夫人は男にしない。話せるものではない。男は寿美麗夫人の夫婦生活を少ししか知らない。

「あなたの指は、おいしい」

「馬鹿ね」

男の眼に、さもいとおしそうに、寿美麗夫人は唇を寄せた。赤く濡れた型の良い唇は燃えている。

「毎日、できるの」

男が不意にきいた。

「できる、って」

「だって、毎日、あなたを抱くのでしょ。う。」

御主人」

「知りません」

寿美麗夫人の五本の指が、男の唾液で、べとべとになった。

「黒い染」

ぽつりと寿美麗夫人が云った。

「しみ」

「染よ。ほら、老人になると、肌の上に点々と黒い染が出来るでしょ。う」

「ああ、あれ」

「この頃、主人の肌に、それが目立ってきたの」

「老醜だな」

「すっかり老人じみてしまったわ」

「御主人、そろそろ、不能になるのじゃないの」

「馬鹿ね」

「それとも、もう不能かな」

「――」

「完全不能とまではいなくても、部分的不能にはなるでしょ。う」

「知りません」

「刺激がほしいのでしょ。う。きっと。興奮しなくなったから」

「だから異常になったというの」

「肉体のおとろえを自覚すれば、誰でも、そうなりますよ」

「そうかしら」

「生命力のある人はね、あきらめない」

加虐的になるのは、鬼頭老人の性慾の原因は、二人の男のいう通りなのかもしれないと寿美麗夫人は思った。

「あら、もうこんな時間」

寿美麗夫人は、びっくりしたような声をあげた。

「二郎さんが予備校から帰ってしまう」

「それはいけない」

「早く帰って夕食の仕度をしないと、二人におこられるわ」

「二人、ですか」

「ええ、そうよ、二人」

男は何かに感づいたらしい。寿美麗夫人は二郎の童貞を奪ったことなど、この男に一言もしゃべってはいない。誰にも話せないことであつた。二郎と二人だけの秘密。

「二郎さんに見つかったら大変」

「目と鼻の先の予備校に通うとはね」

「家から近いから」

さらりと受け流して、寿美麗夫人はベッドから起き上つた。何も着ていない。

「洗ってくるわ」

白く輝くような綺麗な肢体であつた。まろやかな肩から背中の中ならかな起伏が流れ、ふっくらした尻が盛り上っている。のびやかな脚もむだ毛がなく、可愛い足が魅了する。

「今度はいつ会える」

「連絡するわ」

「一方交通だから、かなわない」

「おいや」

「とんでもない」

浴衣も着ず、タオルも巻かず、そのままの姿で、寿美麗夫人は浴室にゆっくり歩いていった。

染ひとつない美しい肌に、うっすら汗がにじんでいた。

(続く)

珍？ナルマゾ小説

「男はみんな家畜だよ」

夜乃探郎



春川ナオミ画

S男である探郎が、マゾ小説を書く。ゲテモノであることは間違いない。——だが、元来、人間の△性▽が、SとMが七・三位が、ホントらしい所からして、書けないことも無い。それに小説家とは、どんな世界の物も描写できなければレットテルにいつわり有りだ。しかし、おそらくこの作品を読んでマゾヒストは苦笑するだろう。Sマニアは、探郎も頭に来たか——と、ゲラゲラ笑うだろう。△何事も勉強ノ▽私はやらしてもらおうよ。プレスリイが、三味線で「ドドイツ」を唄うようなナンセンスであっても。

○

「ああ、家畜とはなんでしょう。肉便器であり、生体家具のようなものだ。劣等人を家畜化し切った女権的貴族政治の……」

何をぶつくさ言ってる。ベンは、三べん廻ってワンと吠えればよい。

黒い瞳が妖しく光って、女王様は鞭を振り上げベンの背に炸烈させた。

「ヒエイノ」

ベンは悲鳴を上げた。

マゾ男って、どれもこれも口先だけは一丁前だよ。そのくせ、カラだらしが無い。さあベン。芸当をはじめな。

赤い鞭一本。＼ベン号／と書かれた前垂れ掛をされた家畜はチンチンして「ワン」と吠えた。

「女王様、おなさけです。その白魚しろうおのようなおみ足を、どうぞベン奴に」

もう、おねだりね。駄目！女王様はまたも鞭を振り上げた。

「ピュー」

と空気を斬る音と「ヒヤアア」というベンのさけびがからまって。――眉をきゅうっと上げた女王様の美貌は灯りの中で、いっそう妖艶さを増し輝やいていた。

「ああ、女王様」

ベンは足元にうずくまった。

何回、云わせるのよ。そんなことは、こちらの気のむいた時だけ。

女王様は足を上げ思い切りベンをけた。

（この屈辱、この虜囚の姿よ。哀れなおれの姿体のぶざまさ）ベンは、赤い鞭の上に、あまりのイタさになみだをひとしずく落した。その姿でしよげた顔など喜劇にもならないよ。

女王様は近づき黒いドレスのすそをはしよって、ベンの顔に白い豊かなお尻をもってお

しつけころばした。ノーズローでもある、そのあたりから強烈な臭気がベンの鼻孔を刺激した。

「ううっ」

ベンはうめいた。

その中で彼はマゾ的な快感がほとばしり身体をけいれんさせた。

「これでもか、これでもか」女王様がおしりを左右する度、甘ずっぱい、とろけるような香りが充満して、さらにベンは歓喜のうめきをもらし続けた。

トン・トンとドアをノックする音がした。

その姿勢のまま、女王様は「カギなどしてないからお入りなさい」と言った。

「ああ」

ベンはせまりくる羞恥に手足をバタバタさせた。

家畜は見物人が必要なのよ。私もいっそうはげみがつくというもの。

女王様は情容赦もなく、ますますおしりに力を入れた。

「あら、先生」

少女たちは顔を見合せ、そのくせ好奇心をかくそうとせず入口に立ちはだかった。

さあ、みなさん、戸をしめて、お入りなさい。面白い犬の曲芸を色々とごらんに入れますから。

女王様はニコヤカに少女たちに言葉をかけた。

女王様は立つと、ベンにむかって「みなさまにごあいさつなさい」と強い口調で命令した。

哀れなベンは、身体を朱に染めて、もじもじした。その苦痛がまたマゾの血が昂奮させることに役立った。

ひざを折り、手首をまげて「ワン・ワン」と吠えた。

「このオジサン、ほんとに犬みたい」

少女たちは驕笑した。

「あの先生、休みなのであそびに来ました」

一人の少女が言った。女王様は洋裁学校の教師でもあったのだ。

「みなさん、ここは家畜の調教所ですから、そのつもりで」

女王様の言葉に、夢見る十代の少女たちは急いであごをコクリとさせてうなずいた。

異様な刺激が、一瞬、少女たちを別世界にでも運んだようだ。

ベンは、女王様のやめの号令がかからない

山原清子嬢の仕置図

入墨女賊拷問刑罰集

キャビネ版印画紙焼付

各組 三枚一組
八組 全部にて五〇〇〇円
三五〇〇円

○女賊仰向け木馬責め

略号 (よひ)

○全裸の入墨女賊折檻

略号 (よせ)

○入墨女賊笞打ち糾問

略号 (よゆ)

○女賊ハリツケ拷問

略号 (よめ)

○凄絶海老責め拷問

略号 (よす)

○全裸四つ這い木馬責め

略号 (よも)

○逆さ吊りのお仕置

略号 (よき)

○大の字磔女賊処刑

略号 (よさ)

のでチンチンをしたままであった。

「K子さん、そのテーブルの上にバスケットがあるわね。あれを投げてみなさい」

女王様は言った。

K子の手によってバスケットが部屋の隅に投げられた。

女王様は鞭を取り上げ空間に音をさせた。

「ベン。くわえて持ってきなさい」

少女たちは大人っぽい笑い声を上げた。

ベンは、よたよたと歩き出した。お尻を振りながら四つ足で、そこにむかった。

「なんて貧弱な、不細工な」

女王様は、ベンのお尻を鞭の先で、こずいた。

「もう一度、やりなおしよ」

今度は、女王様はベンのあばら骨の出ているあたりをけとばした。

ベンは「ヒューー」とおおむけにころがった。

ハア、ハアと忙しく息を吐いた。

「ご褒美を上げましょう」

女王様はここではじめて微笑した。

「みんな悪いけど、ほんの十分、前の公園であそんできてね」

と、女王様は少女たちに言った。

少女たちが去るのを見定めて、女王様は銀

のシガレットから細巻のhopeをつまみ火

を付けた。

紫煙に包まれた女王様は、黒いドレスがマ

ツチして、とても神秘的で女神のように気高

く美しくあった。

「ああ、やつがれの胸は、このように動悸しています。どうぞ、おそれ多きことながら、あの言葉に出すなりこの身体がふるえる……

神の酒を、……生命の水を」

ベンは這って、女王様の足元に近づき哀訴

した。

……晴れた空から小雨が降る。

それは天気雨だよ。ベン号は歓喜の絶唱を

上げる。

なんと女神様からのプレゼントは甘く、香

り高く、眼も口も……すべての上にサンサン

と降りつづける。

こん度は激しく、きれいな花が咲き乱れる

高山に音を立て落つる滝のように、しぶきを

上げて。

いつまでも、いつまでも……ああ、やつが

れ奴は、砂漠の砂のように生命の水に餓えて

いるのです。

渴しているのです。ああ女神様。

——いつかベンは、五色の虹が美しく映し

出した世界にマゾの天国を夢みていた。

△附記△

旧号・沼正三氏のエッセイを参考にさせて

頂いた。

痴人の糧

ち

じん

かて

<女の園>

山本一章



冬の訪れと共に男一人と女三人の生活にも不自然さが目立ち、アケミ、百合子、セツコの間に、冷やかな空気の漂うことが多くなった。殊に大山から最も寵愛を受けているように見えるアケミに対する他の二人の態度の中には、ねばっこい嫉妬の焰がチラチラと光っていた。

セツコは最初は、それ程でもなかったが、百合子に引摺られてアケミに憎しみを抱き始

めたようであった。大山は女達のその冷戦に気づいてはいたが、うかつに口出しすることが逆効果になることを怖れた。アケミとセツコの二人だけなら、それでもなかっただろうが、気性の烈しい、しかも一番年長の百合子に加わっただけに事は面倒だった。その停滞した空気を一掃する方法は、三人を別々に分けてしまいか、新しい刺戟の中に三人を投ずるしかなかった。前者は経済的負担を伴った

し後者は大山一人の力では困難だった。

十二月も半ばを過ぎた寒い朝、大山は出張を口実に旅に出ることにした。人間関係の煩雑さから逃れたいという気持と共に、残された三人が彼女らなりの解決をしてくれるだろうと考えたからでもあった。一波瀾起るだろうことは想像できたが、雨降って地固まる式に落着くことを期待する反面、もし破綻が訪れるようなら、それも仕方ないと考えてい

た。そして他の二人のアケミへの憎しみを逆利用するためには、可哀想だったがアケミを囮にするしかなかった。彼は旅に出る決心をするアケミを下着一枚にして後手に縛った。そして百合子とセツコを呼んで云った。「僕は出張で旅行するから後を頼むよ。二、三日で帰れると思うが……。百合子、僕が出てからアケミを解いてやってくれ。喧嘩をしないようにな」

急に縛られたアケミは、ちょっとびっくりしたような顔をして大山を見つめて云った。「解いてから行ってちょうだい。お願いだから解いて！」

大山は彼女の嘆願を無視して百合子に云った。

「お前にまかすからな。火の用心を忘れんようにな」

行先も告げず、帰宅の時期も決めずに大山は家を出た。外の風は強く冷たかった。

○ 「大山さんが、どこへ行ったのか知っているの？」

百合子の刺^{とげ}を含んだ言葉が、後手のまま立ちすくんでいるアケミに投げかけられた。

「さあ知りませんわ。何も云ってくれないも

の」

アケミのその答え方が、百合子の胸にチクツと突きささった。

「へえ——、あんたにも云わなかったの？」

「ねえセツチャン、ほどうて」

アケミはセツコの方を向いて頼んだ。

「セツチャン、ほどうたら駄目よ。折角縛ってあるんだから、ゆっくり可愛がってやろうよ。大山さんもないことだからね」

百合子の方を見たセツコは、ニッコリ笑って答えた。

「そうね。面白そうね」

アケミは、がっくり失望の色を顔に見せてうずくまった。

百合子は、アケミの後手の縄尻を掴むと彼女を立たせ、襖の棧に縄尻を通して引いた。

後手が吊り上り、上体が前かがみの姿勢になった。

「お願いだから止して！」

手首の縄が容赦なく引き上げられ、逆にになった腕が肩のところでコキンと音を立てた。アケミは腰を曲げて爪先立った。

「ねえ、止して！」

「裸の方がいいわね。大山さんの言葉じゃないけど、女と筍は裸にしないとね」

百合子はシュミーズの肩紐を鉄で切った。

レースの飾りを附けたそれは皮をむくようにウエストの辺りまでめくれた。ふっくらとした乳房が露出する。更に百合子はシュミーズの裾を指でつまむと、わざとゆっくり下げるのだった。

「いい体してるわね。男を知らないみたい。大山さんが参るはずね。憎らしい！」

シュミーズは一気に足許に落下した。

「オヤオヤ、サービスがいいのね。何も着けていないじゃないの」

顔をそむけるアケミを下から覗くようにして百合子が云った。体を縮めようとすると逆手になって吊り上げられている腕が痛んだ。

腕を楽にしようと思えば、うんと爪先立って、お尻を後へ突き出すしかない惨めな姿勢だった。アケミが両膝をしっかりと合わせているのを見た百合子は、にやりと笑って云った。

「恥かしがることないでしょう。もうロードショーは済んでるんだから。それとも何か変わったことでもあるの？」

「もうこれ位で、許してちょうだい！」

女同志で、しかも憎しみを持った女から弄ばれるのは耐え難かった。

「駄目ね。今日はあんたの限界を試してあげる。丁度、外は寒いから晒しは、こたえるわよ。最後の楽しみにするのね」

百合子はふと自分が鳥の辻で私刑^{リンチ}を受けた時のことを思い出した。痛さと寒さで死ぬような辛い思いをしたのが今では夢のようだった。

「お姉さん、口は塞いどきましようよ」

セツコが前かがみになったままのアケミの口に縄を咬まして後頭部で固く結んだ。アケミはセツコまでが、自分を罵る気でいるのを知って恨めしかった。

「さあ、何で叩いてあげようかね。濡れタオルがいいかもしれないわね。セツチャンの経験では、どう？」

「お姉さんたら、いやなことを聞くのね。お

姉さんだって経験者のくせに」

「そうだったわね。棒でぶたれるより細い鞭か平たい板の方が痛い筈よ」

二人はそれぞれ濡れタオルを手にして、ビシャビシャと空を切った。水滴が飛び散ってアケミの肌而降りかかって、冷たかった。

「セツチャンはそっち、わたしはこっちをぶつから、うまく当てるのよ」

百合子は半吊りになったアケミの傍に近づくと、突き出した臀部を素手で撫でた。肉づきのめっきり良くなった白くて滑らかなその盛り上りは、成熟した女の生々しさを誇っているかのようであった。

百合子が初めてアケミの肌を見た時には、その乳房にも腰にも、まだ少し乙女の固さが残っていたように思ったのだが、今日の前にある女体のそれは、皮下脂肪を増してはち切っていた。男を知った女体の変化を見据えた百合子の心の中に嫉妬にも似た憎しみが再び燃え上った。

「さあ、加減しちゃ駄目よ。これでなら、どうってことないんだから」

ビシャッノ

濡れタオルが左右から同時に双丘に当たってはじけた。

「ウウウッ」

アケミは縄を咬んだ口から呻いた。

アケミは縄を咬んだ口から呻いた。

ビシッノ ビシッノ ビシッノ

「ウウッノ ウウッノ アウッノ」

二本のタオルは肌を震わせ、そしてそこに赤い跡を浮び上がらせた。

ビシッノ ビシッノ ビシッノ

腰を、その打撃から避けようとすれば、逆になった腕が振れて痛かった。辛うじて僅かに左右に振ることができたが、それもあえない慰めでしかなかった。

「尻ふりダンスね。なかなか上手よ」

二人はくくつと笑った。しかし、その打擲の手は休まなかった。腰のあたりが一面に赤くなったのを見たセツコは、打つ場所を次第に下げて腿を打った。哀れな犠牲者は片足を上げ下げして歩くように動いた。

「ちよつと待って！ 動けないようにするから」

百合子はアケミの左足を前に曲げさせて、その胴と一緒に縛った。足先はぶらぶらしていたが、左膝が乳房に密着した一本足になった。腕に体重が前よりも重くかかってきた。

「さあ、いいわ。お尻だけじゃなくて、どこでもいいから、ぶっちゃいましようよ。これでなら大丈夫だから」

二本のタオルは思い思いにアケミの全身を打った。まるめた背中も、伸びた腕も、そしてかがんだ乳房すら打擲を免れなかった。アケミの額に汗が浮び目からは涙が溢れ出した。

「泣いてるわよ」

セツコがそれを見つけて、ちよつと気の毒そう顔をして云った。

「まだまだ駄目よ。彼女はいじめられるのが

好きなんだから嬉し涙よ、きつと」

一本のタオルの打撃は、心もち緩くなったが、百合子の方のは段々強くさえなっていくようだった。この姿勢では時々尻を打ったタオルの先端が柔肌にまで苦痛を与えた。その時は、アケミの呻きが一段と激しくなるのであった。

「ウウウウッ、ウァウァッ！」

「ああ、しんど」

打ち疲れた百合子が、アケミの足許にどっかりと腰を降ろした。

「叩くのも楽じゃないわね。オヤオヤ、刺青の蠍ちゃんさそりが覗いてるわよ。見てごらん、ほれ。濡れ蠍さそりだわね」

百合子の手が意地悪く二匹の蠍さそりをさらけ出した。アケミには、それを妨げるすべはなかった。逆になった腕が肩から痺れていた。

「おなかが空いたわね。あんたはどう？」

「そうね、何か食べましょうか」

「アケミちゃんに、テーブルになって貰ったらどう？ 彼女も休ましたげないと続かないからね」

半吊りから降ろされたアケミは、座敷机の上に縛り直された。机の脚に四肢だけが、しっかりと縛りつけられ、胴体には縄が掛けら

れなかった。机からはみ出た頭は、逆さになって白い喉をのけぞらしていた。抅げられた肌の上に、皿や鉢が載せられた。呼吸する度に、それは揺れた。

「動いたらこぼれるわよ。じっとしてなくっちゃ、駄目よ」

百合子はそう云いながら、ちょっと脇腹を触った。ピクッピクッと疼れんするようにアケミの筋肉が動いたが、どうにか鉢や湯吞は倒れなかった。

百合子とセツコは、アケミの体の左右に坐って食事を始めた。アケミだって空腹だったが、今はそれよりも苦しさの方が勝って彼女の意識を支配していた。しかし肉体の自然の欲求は彼女の意志に従うことに甘んじなかった。

ググッ、グルグッ！

彼女の腸が叫んでしまったのである。

「あら、いやねえ、腹の虫が泣き出してゐるわよ」

セツコが笑った。

「少し食べさせてあげようかね」

百合子はそう云いながら、アケミの口の縄を外すと、自分の口を近づけた。口に含んだものをアケミの口に移そうというのである。

それに気づいたアケミは固く口を閉じて顔をそむけた。百合子は口の中のを飲み込んで云った。

「いやだっていうのね。じゃ、止しときなさい。いずれ食べなくなるようにしてあげるからね」

「ちょっと、ひどいわ」

横からセツコが声を出した。

「そんなこと云ってちゃ駄目よ。彼女を私達の奴隷にしちゃうのよ。どうせ大山さんが帰ってきたら彼女を可愛がるに決まっているんだから、留守の間にしっかり躰をしとくのよ。あっそうだわ、いいもの食べさせてあげる」

百合子は鳥の辻で自分の落した卵を食べさせられたことを思い出したのだった。大山が朝食の時は残した茹で卵の殻をむいた百合子は、真白なむき身を取り出した。

「どう満腹した？」

手を放すと、その白い滑らかな卵がゆっくり顔を覗かせた。

「セツちゃん、絆創膏を取ってきて！」

卵を含んだまま塞がれてしまった。

アケミの体がぶるぶると震えた。卵が冷え切っていたせいだった。

食事を終った二人は、アケミの体の上に食

器を載せたまま、ごろりと、その場に横になった。

「セツチャン、あんた大山さん好き？」

「……」

「いい男ね。憎らしくなっちゃう。わたしをお嫁にしてくれないかなあ」

「でも、お姉さんは大山さんと……」

「二号と嫁さんとは違うわよ。残念だけど彼の心は、このお嬢さんにあるのよ。アケミちゃん来るまでは可愛がってくれたんだけどなあ。私は、もうおばあちゃんだからね」

「お姉さん、まだ若いのに」

「もう七になったのよ。あんたは？」

「ちょうど」

「アケミちゃんは一つ上だったわね。若いなあ。もう一度そんな年になってみたいわ。でも、もう駄目ね」

百合子は、ごろごろと転がって、逆さになってアケミの顔の所へ寄った。

「お嬢さん、仕合せ？ その代り、私達の奴隷になるのよ」

百合子は、アケミの鼻を手荒につまんで押し下げた。

「あんたが、こんな獅子鼻だったらね」
押し下げられた鼻腔の奥に真赤な粘膜がキ

ラキラと覗いていた。

「さあ片づけて昼寝しようか。アケミちゃんに留守番をして貰ってね」

座敷机から解かれたアケミは後手に手首だけを縛られると、その上半身に毛布がぐるぐる巻かれた。そして毛布の上から縄を掛けられると彼女の上半身は荷物のようにになった。

首から上と下半身だけを露出したその姿は滑稽だった。そのまま押されて歩いたアケミは玄関の土間に素足のまま降ろされ、毛布を縛った縄尻が戸口の棧に打ちつけられた釘に結ばれたので、立ったままかむこともできなかった。

「錠は外しとくからね。誰か来たらうまく断るのよ。そうでないとあんたが恥しい思いをするだけだから。目かくしだけはしてあげるわね。見られても少しはましでしょう」

「大丈夫？」

セツコが心配そうに横から云った。

「ああ、寒くはないわよ。こんなに着せたんだから」

「そうじゃないわ、誰かに見つからないかしら……」

「うまくやるわよ。こんな姿を人に見られるのは、本人が一番辛いからね」

玄関にアケミを立たせたまま二人は奥へ引返して行った。残忍な晒しだった。少しは動けるのだが腰を降ろすことができない。いつ誰が訪ねて来るか知れない戸口で、心の緊張を弛めるわけにも行かない。毛布の下では叩かれた肌がむず痒く、素肌のままの下半身の肌は冷えて痛んだ。アケミは固く締められた目かくしの下で嗚咽した。

（ああ、私はどうして、こんな目に逢わなければならぬんだろう。私の体は、どうして男だけからではなく、同性からいじめられるように、できているのだろうか）

鄭の屋敷でのがれ、彼女の脳裡に蘇ってきた。それは悲しい汚辱の思い出だった。男達の凌辱の中での疼痛と、それを黙認した大山の非情さへの恨みの記憶が渦巻いた。しかも大山の愛情を疑い切れないでいる。アケミは、そんな自分の存在を哀れに思った。そして目かくしの下で涙を溢れさせるのだった。しかし、その悲しみの一隅で、彼女の本能が被虐の欲びに浸っていることを未だ覚えてはいないのだ。

人の足音が戸口に向って来るのを聞いたアケミはどきっとした。靴の固い音が止まる。直ぐに戸を開けないで——アケミは祈るよ

うな気持である。呼鈴が鳴る。

「どなたですか？」

アケミはできるだけ大きな声を出した。

「西洋芸能文化社の者ですが。御主人御在宅でしょうか？」

若い男の声だった。

「留守ですから、またにして下さい」

「じゃ奥さんにでも……」

男の手が戸にかかったらしくガタンと音がした。アケミは慌てて片足を伸ばして戸を押さえると叫んだ。

「今日は困りますから帰って下さい！ 今、入浴中なんですから」

小さな声でつぶやきながら男の足音が遠去かって行くのを聞いてアケミはほっとした。

毛布の中で汗が蒸れていた。

それからしばらくは、訪問者はなかった。

しかし、素肌のままの下半身は冷え切り、それに従って尿意が激しくアケミの体を襲っていた。彼女は背に伸びている縄を軸に、円を描いて小刻みに歩いた。すり寄せた腿は冷たく、素足の感覚も半ば失われていた。腰を落そうとしたが上体を引き上げている縄は非情にそれを拒んだ。

「フウ、フウ、ウウウッ」

彼女は小さく声を出しながら、小走りに小円を描くしかなかった。限界が間もなく訪れた。立ち止まったアケミは思わず足を開いた。

ああしかし、その放出は拋物線を描いてはくれないのだ。液体は砕け、数条の糸となって飛び散った。勢いが強かっただけに折角開いた足もずぶ濡れになってしまった。それは更に彼女の下半身から、体温を奪う役割を演じた。惨じめさにアケミはしばらく声を出して泣いた。しかしゆっくり泣くことさえも許されないのだ。人の足音が戸口に近づいて来たからである。

呼鈴が鳴る。

「どなたですの？」

精一ぱいの、とりつくろいだった。

「新聞の集金ですが」

若い男の声である。絶対に中へ入れることはできない。濡れた土間に立っている恥しい姿を知らない男に見られることは死ぬよりも辛かった。

「今ちょっと細かいのがないので、後にして下さらない？」

「お釣り持ってきてますが」

ガラッと戸が半分程開いた。

「入ったら駄目！ 早く閉めて！」

アケミは戸口に背を向けて叫んだ。
「なんだ、ここにおられたんですか。それなら——あっ」

急いで戸を閉める音がした。そして何も云わずに男は去って行った。見られただろうか？ アケミは目かくしの下で顔が燃えるのを感じた。そして再び泣いた。

一時間経ったのか、二時間経ったのか、アケミにはわからなかった。兎に角、長い長い時間だった。その間立ったまま洩した小用は三回だった。自ら体を濡らしては体温で乾かし、そのために体が冷えて尿意が蘇って体を濡らす——悲しい循環だった。

「あら、びしょびしょじゃないの。よくも、それだけうまく撒けたものね」

アケミはその百合子の言葉すら救いに思えた。どんなに縛られ打たれてもいい。こんな惨じめな思いから解放されるのなら——

「お姉さん、このままじゃ汚いわね。今日は早くお風呂にしましょうよ」

嬉しいセツコの言葉だった。

○

三人は一緒に入浴したが、浴室が余り広くないので満員になった。アケミは手首を前にして括られただけで、湯に入る前に二人から

ごしごしと洗われた。濡れた絆創膏はタオルの下で直ぐに剥がれた。

「ああそうだ、あんたまだ、卵を持っていたのね。蒸し卵になってるかもしれないわねえ。でも女がおなかに卵を抱えているのは不思議なことではないわ。もっとも茹で卵だから孵^{かえ}ることはないけど。後で食べさしたげるから大事にしまっとくのよ」

百合子の言葉にアケミの腰を洗っていたセツコがアハハと声を出して笑った。

「どう、あんた私達がどんなことをしても辛抱する？ いやだといっても駄目だけどね。温順しくしてたら今夜だけで勘忍したげるから」

アケミは黙って突っ立っていた。

「返事しないのね。じゃいいわ。私達の思うようにいじめてあげるから」

アケミは仰向けにタイルの上に倒された。百合子の指図でセツコは胸の上にまたがって腰を降ろした。前手縛りの両手はセツコの体で押えつけられて動かすことができない。

「いいことをしたげるから目を閉じて。セツチャン、あんたも」

それは女による女の冒涇だった。百合子の液体がまともにアケミの顔にふりかかる。ア

ケミはしばらく息を詰めていたが、それにも限度があった。むせ返りながら悶えるアケミだった。

「お姉さんたら、えげつないわね」

「どうセツチャンもやったら？」

「わたし先刻済ましたから出ないわ」

「そりゃ残念ね。どうおいしかった？」

百合子は足の裏でアケミの顔を突ついたがアケミは顔をそむけて嗚咽ばかりしていた。

体を洗い終るとアケミを真中にして三人は浴槽に漬った。

「わたし、本当は、アケミちゃんが大好きなのよ。でも、大山さんが、あんたばかりを可愛がるから憎らしくなったのよ」

浴室の中は三人の裸女の肌のむれる臭いが立ち籠め、もしも、その中に男が入ったとしたら、やり切れない程の刺戟を感じたに違いなかった。

「どうなってるの？」

百合子が笑いながら、その手を意地悪く動かしていたが、ふと気がついて言った。

「あら覗いてるわよ。まだ出すのは早いわ」新しい絆創膏が再び封をした。座敷に戻されたアケミは座敷机に仰向けに縛りつけられた。両手を左右に拡げて固定されると、体が

二つ折れにさせられた。両膝が両頬に附く程折り曲げられ、背中と腿を一つにして縄が巻かれた。開いた両足首は、頭の上で固定された。

「いい恰好じゃない。自分でも良く見て置くといいわ。可愛いでしょう？」

百合子は円くなっているアケミの腰をぼんと叩いて言った。

「女もこうされたら駄目ね。どうにもならないんだから。でもアケミさんの体は、綺麗だわ。羨やましいみたい」

肩と頭とで体を支えているアケミを前にして、百合子とセツコは夕食に注文した親子丼を食べはじめた。もう一つアケミの分も横に置かれてあった。

「どう、おなかが空いたでしょう？ 食べさしてあげようか？」

百合子は口に含んだままアケミの顔に近づいた。セツコが命令する。

「さあ口を開けて！」

アケミは小さく唇を開いた。それに百合子の唇が重なって半ばそしゃくされた食物が移動する。それは最初アケミにとって嘔吐を催すような不快さだったが、口に入ったものを飲み込む間に少し食欲が出てきた。折り曲げ

られている姿勢が苦しいのだが、口移しの食事は苦にならなくなってきた。

「感心だわ。もっと欲しい」

アケミが肯ずく。百合子は自分の口から吐き出したものを食べているアケミを見ているうちに、体の中がじーんとしてくるのを感じた。いじらしさとサジスティックな快感が体の血を沸かすような気がした。

「セツチャンも協力したげて——」

「わたし、なんだか気持ちが悪いわ。じゃ、わたしはお茶を飲ましたげる」

セツコはお茶を口に含むと、唇を附けずに上からアケミの口をめがけて流し込んだ。ゴクンとアケミの喉が動いて、飲み込まれるのを見たセツコは手を叩いて喜んだ。またお茶

旧号雑誌の送料について

○本誌の旧号をお申込みの際は在庫一覧表に記してあります通り一冊に当り20円の送料の御加算を願います。

○三カ月分以上予約購読お申込みの節は送料当方負担にてお送りいたします。従って、一部宛或は二部まとめてお申込みの節は一部につき20円御加算願います。

○切手代用にて御送金下さるのは結構でございますが、小額(百円以下)の切手にて一割増に願います。

を含んで流し込む。こぼれた茶がアケミの顔を濡らした。

二人の女による口移しの食事は、アケミを屈辱感で一ぱいにする反面、被虐の陶酔をも呼び始めていた。犬畜生のように扱われる自分を憐れみながらも、支配されてしまったことを恨んではいなかった。それに朝からの絶食が唾液を含んだ食物をすら美味に感じさせ始めたのだった。殆んど口に入れると直ぐに吐き出されるそれは、回数を重ねるに従って本来の味そのままにアケミの口に移った。食物と飲物とが交代に、二人の女の口からアケミの胃に収まり、やがて彼女は満腹感を持った。

「さあ、最後に茹卵よ」

封が剥がれる。しかし、直ぐには出て来ない。百合子が曲った腹部と腰を押えてしごくようにさすった。

「さあ、早く生んだ生んだ！」

卵の白い肌が覗く。百合子は腰をポンポンと叩く。

指でそれをつまんだ百合子がアケミの顔に近づける。しかし、アケミは今度は口を開こうとしない。

「さあ、早く口を開けなさいよ。生みたての

卵だから」

口を開けそうにないのを見た百合子が鼻をつまみセツコに合図する。セツコは上になった臀部を力一ぱいに抓る。悲鳴を上げようとした口に卵が押し込まれた。もうそれを食べるしかない。

この姿勢は苦しかった。腹部と胸が圧迫されているためである。

「もう許して！」

アケミは、とうとう弱音を吐いた。

「苦しうだから、もう勘忍したげたら」

セツコが同情する。

「そうね、でも解放するのは最後に本当の噴火山にしてからよ」

それが何を意味するのかアケミにはわからなかったが、やがて冷い感触が百合子の残酷な意図を明らかにした。

「お姉さん、ここじゃ汚いわよ。折角お風呂に入ったばかりなのに」

「それもそうね。じゃ噴水ぐらいで、辛抱したげるわ」

百合子の指はイチジクをつまんだままで、それをつぶすのを控えた。

「お姉さん、もうカンニン。カンニンして」アケミが喘ぎながら嘆願するのを百合子は

満足げに見降ろした。

机から解かれたアケミは後始末を一人でされ、再び入浴した。浴室から戻ってきたアケミを百合子とセツコが、一つの寝床の中で迎えた。布団から顔だけ出した百合子が云った。

「さあ一緒に寝ようね。でも、その前にしばらく、そこでアクロバットを見せてよ。あんなの曲線を長いこと、見てないから。大山さんには見せてるんだろうけど」

「お姉さん、どうして、わたしを、こんなにいじめるの？ わたし……」

「いじめられるのが、好きじゃなかったの？ 大山さんを一人占めしている罰よ」

「わたし……わたし、もう大山さんだけの体では……」

「へえーそれ本当？」

「この前、淡路島へ行った時に……」

「ふーん、大山さんの気持ちって、わからないわね。本当なの？ 鄭さんに？」

意外なアケミの告白に、百合子もセツコも胸を打たれてしまった。今の今までアケミは大山一人のもので、彼が正式の結婚をすれば彼女だろうと決めていたからだった。驚きが収まると後悔が訪れた。

「さあ、早く入りなさいよ」

布団の中の二人の真中に、アケミは入れられた。

「悪かったわね。ごめんよ。でも、もっと早く言えばいいのに」

百合子はアケミを抱いた。横でセツコが体を縮めて云った。

「みんな同じね。大山さん、どういうつもりなのかしら？」

三人は同類意識と触れ合う肌に感傷と妖しい興奮を感じながら抱き合った。

女だけの夜が更けて行った。

○

翌日の夕方、大山はひょっこりと帰ってきた。内心女達の様子を気にしながら。彼とても別段行く当てもなく、また険悪な三人を残しているという気がかりが一泊の外泊だけで家へ引き返させたのだった。ストリップを見たが、今の彼にはもう往年のような燃える興奮がなく、映画を観ても冗漫なストーリーはいら立たしいだけだった。場末の劇場のカブリツキに中腰になって生唾をのみながら、脱ぎもしないバタフライを見つめていた学生時代が懐しかった。

大山は黙って家に入った。百合子が最初に

気づいた。

「お帰りなさい。早かったのね」

「うん」

「もっとゆっくりなされば良かったのに」

「そうも行かないさ、アケミらは、どうしてる？」

「仲直りしたの。今、裏庭の掃除をしているけど直ぐに来るわ」

「ふーん」

大山はちょっと意外な面持ちだったが、百合子はそれ以上説明しなかった。三人が揃うのを見た大山は、彼女等が意外と明るい表情なのを嬉しく思った。アケミの顔に少し疲れが見えていたが、それとても彼女の微笑に打ち消されるものだった。

「一度皆で街に行こうか？ 何かうまいものでも食べよう。久し振りだからな」

「へーえ、いいじゃない？」

百合子のおどけた言葉にアケミもセツコも快活に笑った。

「さあ、早く用意した用意した」

三人は姉妹のようにはしゃいでいた。大山はちょっと取り残されたような気持ちさえしていた。

(つづく)

マゾヒスティック・ストーリー

「足^{あし} 拭^ふ き」

三 原 寛

(一)

選手は生神様であった。

バレーだけが、この地方高校の看板になっていた。平穏な南国の、大学受験にも余り縁のない田舎高校で、バレーだけは殆んど毎年のように全国大会、国体、高体連の大会で連覇を続け、斯界に普く名を知られていた。

実業団で連続優勝の記録を更新し続けるN紡チームの選手の大半が、この高校の出身だった。

この、四国のS高校は終戦迄は女学校だったのが男女共学になって高校に格上げとなったものだが、寛がこの高校に入学する迄は男

子の入学者はなかった。大体が、この町で、大学受験を志望するような連中は、旧中学校の格上げになったK高校に入学したし、男女共学となっても、何となく旧中学には男生徒が多く、旧女学校を前身とするS高校には、寛の入学した年にはじめて四名の男生徒を迎えたのである。

当時のバレーは九人制で、屋外で競技された。全校をあげてバレーに熱を入れていたこのS高校で、寛等四名の男生徒は入学早々、強制的にバレー部に入れられた。

バレー部には三十名の女子部員がいた。

話題の乏しいこの田舎の小都市では、例年

のS高校バレー部の全国優勝が、唯一の刺戟であった。全市を挙げてバレー部を応援したのである。N紡チームの花形選手となった先輩達が、憧れの的とされた。そして、バレー部の選手達は、生神様のように大事にされたのである。

のんびりした地方の高校だったから出来たのかも知れないが、選手達は練習といえは授業を欠席する事も大目にみて貰えたり、期末試験も免除されて簡単なレポート提出で済んだのである。そして、選手に対しては教師達ですら、腫れ物に触るように大事に扱ったのである。全国大会に出発する選手達を校長が

じめ全校生徒は勿論、市長はじめ、市のおえら方がプラットフォームに整列して見送るのであった。

(二)

『足拭き』というのはバレー部員達が寛等四名の男子部員に与えた呼び名である。

練習を終えてシャワーを浴びた選手達の足を寛等四人が拭かされるのである。

女子部員三十人の中の男子部員四人であるが、平均身長一・七五米の女子部員達の中にあって、一・六〇米そこそこの寛達が太刀打ち出来るものではなかった。まして、この年頃で、全市の期待を一身に集めて、生神様のように思い上った嬌慢な彼女達である。

彼女等は毎朝十時頃にゆっくりと、グラウンドにお出ましになるが、寛等四名の『足拭き』達は、その前にグラウンドに出て、小石を拾い、石灰で白線を引き、ネットを張って準備せねばならない。彼女等が練習をはじめて、小石でも見付かろうものなら、大変である。グラウンドの傍の砂利道の上に目かくしをして正坐させられ、円陣を作った女子部員達の打ち込みの練習の的にされるのである。

彼女等の練習中は球拾いである。三十名の女子部員達は何面ものコートを使って激しい

練習をするのである。右に左に転々するボールを彼女等の罵声に追われながら走り廻って拾うのは想像を絶する重労働である。練習が一通り済んで彼女等が小休止する頃には目はかすみ、今にも息が切れて失神せんばかりの状態になるのである。だが、寛等はここで休む訳にはゆかないのである。水飲場迄走って大きなやかんに水を汲み湯呑みを下げて走らねばならないのである。それが遅いといつて又彼女等の叱声がとぶ。それから、彼女等が芝生に腰を下し、一休みしている間、寛達はグラウンドにしゃがみ込み、両足首を両手で掴んで、あひるのような醜い恰好で四百米のグラウンドを一周させられるのである。

はた目にはそれ程とも思えないこの茶番劇が寛等本人にとっては死の苦しみを与えた。

よちよちと一步一步で息も絶え絶えになって地面の上を這い進む寛等に彼女等の面白半分の気合がかけられるが、それでも彼女等の御満足が得られないと、例の打ち込み練習のしごきにかけられた。後手に縛られて正坐させられた『足拭き』の一人に、周囲から打込みのボールが唸りを生じて叩きつけられるのである。

目かくしをされていてボールはどこから飛

んでくるか判らないし、一方からだけではないのである。全身、汗と埃と血にまみれ、ぼろ屑のように転がった哀れな犠牲者に、他の足拭き達がバケツで水をかけて息を吹きかえさせることになるのである。

(三)

練習が済むと、シャワーを浴びた彼女等の足許にひざまずいて、彼女等の濡れた足をタオルで拭かされた。それから、選手達一人一人の足を揉ませられるのである。平均身長、一・七五米の大柄の彼女等の鋼鉄のように強靱な太腿、ばねのように引締ったふくらはぎを次々に揉み続けねばならないのである。

この時に、寛達に対して、彼女等のどぎつい悪戯がはじまるのである、主将の水田良重は、こういったことを考えつくにも並はずれた才能をもっていた。

「コラ、足拭き！ キスさしてやるから、こっちに来い！」

おそろおそろ、彼女の前にかしこまる寛の前に足をつき出して足の裏を舐めさせるのである。

「ごほうびをやる」といって、控室のコンクリの床に仰向けにさせられた寛達の口の中に排尿される事もある。彼女等は、寛達の惨めな

さまをみて「わっはっはっ」と男のように笑った。そして解剖と称して、寛等一人宛を大勢でとり押えて素っ裸に剥き、あくどいいたずらを繰り返した。寛達の舌が彼女等のセックスの捌け口に利用された。

高校の三年間、彼女等の『足拭き』として寛達は奴隷の生活を強いられたのである。

高校を卒業した時、寛は完全に被虐のとりことなっていた。

(四)

高校を卒業した寛は上京して職を探しサロン『虹』のボーイになった。ここでも、ホステス達の奴隷としての生活が一年程続くのであるが『虹』の所有者である女主人坂口みどりの目にとまり、秘書としてとりたてられ、彼女の屋敷に住込む事になったのである。サロン『虹』の外にも手広く事業を拡げて女実業家として名を売っていた坂口みどりも、屋敷内では絶対権力を握る暴君として使用人達に君臨していた。

彼女の使用人に対する仕打ちは徹底していた、これでもか、これでもかと、自分達の彼女に対する地位を思い知らされた。

彼女は交際も広く来客が多かったが、コックがその為に特に念入りに腕によりをかけて

作って出した料理をひと目見るなら、こんなもの、食べられないわね、どこか、外で食事しましょうと客をうながして席を立てしまいい、折角の料理は彼女の飼っている犬のえさとして捨てられてしまうのだった。

「三原、私の足をお拭き！」というタイトルで、週刊誌の記事になったこともあるが、外出した坂口みどりを玄関で迎えて、彼女の足を拭くのも寛の役目の一つだった。彼女の使用したタオルのお古が足拭き用の雑巾に利用され、それを又、寛をはじめ使用人達のタオルとして下げ渡してやるのだということを、彼女は来客達に吹聴するのだった。

寛にはガスも、石も入っていない安物のライターが与えられていた。彼女が煙草をとり出すと、すかさず前にひざまずいてライターを差し出さねばならないのであるが、ガスも石も入っていないライターが点火する訳がないのである。

必死にカチカチとライターを鳴らしている寛に眉をひそめ、侮べつ的な一べつを与えてから坂口みどりは自分のプラチナのライターをとり出してカチリと火をつけるのである。

用談中彼女が手を差し出すと、寛は自分の胸のポケットから純白のハンケチをとり出し

てうやうやしく、彼女にお渡しせねばならない。

彼女が鼻をかむのである。済んだらそのハンケチを又押し戴いてもとのポケットにおさめるのである。

坂口みどりは既に中年を過ぎた脂肪の厚い肥満した女丈夫であるが、その粘っこい眼差しやてらと脂ぎった厚い唇には妖しい魅力があり、この彼女の魔力の虜となった或る銀行の頭取が彼女の際限もない欲望を満たす為に次から次にきりもなく金を貸出して、遂にそれが表沙汰になって裁判に迄発展する事になったのである。

二年余りで寛の第二の『足拭き』生活にもピリオドが打たれた。

(五)

失職した寛は新橋のガード下で靴磨きを始めた。夜は銀座のバーやクラブを廻って、ホステスや客達の靴を磨かせて貰ったが、これが馬鹿にならない収入になった。酒も煙草もやらず、まして女性に縁のない寛にとって、靴磨きでは服装の心配もなく、生活費といってもたかが知れているため、五年も経つうちには相当の貯金も残り、小さいながらも、荻窪に二階建の一軒家を手に入れる事が出来た

のである。ホステス達が寛にとって全能的生神様であった。昼間だけの収入ではどうにもならない。

彼女達の靴を磨かせて戴き、そうして、彼女達のお口ぞえで客の靴も磨かせて貰うのである。

景気の良い客は、彼女の分と二人分だといって千円札を投げてくれたりしたが、酔っぱらったホステスの気まぐれな座興で、彼女のハイヒールを口に咥えて彼女を背中に乗せて馬になって四つん這いで這い廻ったり、御気嫌斜めのホステスに当たると、客達の笑い転げる前で、彼女の前で床に手をついて土下坐して散々御願いさせられ、あぐくの果ては犬のような芸当までさせられた末に「今日はいいわよ！」とハイヒールの一蹴を浴びて追い返される事もあったのだ。

それでも、彼女等に捨てられては仕事にならないので必死に御気嫌をとり結ばねばならないのだった。

靴磨きとしての五年も、寛にとっては、ホステス達の『足拭き』の生活になったのである。

今や、一戸の家主となった寛はゆっくりと居間にくつろいで、朝刊の求間欄に目を通し

ては、電話器のダイヤルを廻していた。

(六)

最初の女御主人様は女子大生だった。

適当な相手を探すのに非常な苦勞をしたのである。二階と下に分れているとはいえ、同じ屋根の下に若い家主が同居とあっては、少くとも、一人だけで入ろうという女性は見当らなかった、運良く二人連れの女性があらわれてもあってみて、寛の好みに合わなかった、なかなか見付からなかったのである。その点、今度の二人の女子大生は寛にとって理想的な女御主人様になれる、素質を感じた。

自分達の美貌を十分に意識している彼女達に寛は最初から圧倒された。彼女等の前で、寛は最初からおどおどしていた。そんな寛を彼女等は図に乗って小馬鹿にした態度をとった。

彼女等は寛の事を、すっかり自分達の魅力の虜となって、それでも気が弱いために何も出来ないで、おろおろしている男とったようだった。

しかし、相手が、一応真面目な女子大生でもあって、寛の期待した程の、展開はなかった。ただ、一年経って、彼女等の卒業の年に

なり、この家を出て行く頃までには、彼女等の部屋代は無料にされていた上に、彼女等の朝夕の食事まで寛の負担で彼がこしらえねばならぬ破目になっていた。寛の預金の利息でその位のことは十分余裕があったのである。そして、玄関に土下坐しての寛の送り迎えを、平気で受けるまでにはなっていたのである。

勿論、彼女等の下着の洗濯、靴磨きから入浴後の足の爪切りは寛の仕事としておしつけられていた。彼女等にしてみれば、この一年うまく利用してやった、位の軽い気持ちで、卒業して出て行ったのである。

(七)

浅香魔美はラフな Cotton の黒いカッターシャツに、豊かな太腿にぴっちり貼ついていたような豹の毛皮の模様のタイツをはき、膝までを革の踵の高いブーツに包んで、黒く隈どられた眼を大きく見開いた。漸く彼女を、この新橋のクラブ「女神の洞窟」で見つけ出したのである。

銀座のバーで寛を馬にし、犬の芸当をさせた彼女である。

「あんたなの！」

彼女の表情は侮べつ的なものに変った。

翌日の午後、喫茶店で、浅香魔美を前にした寛は必死の嘆願をしていた。人眼さえなければ、涙を流し、土下座せんばかりの様子である。テーブルの上には寛の預金通帳と家の登記書が並んでいた。彼女との結婚を哀願しているのである。

浅香魔美は、にんまりと残忍そうに唇をまげて嘲けるように云った。

「それ程頼むのなら、お前の望みを叶えて上げてでもいいわね、ただし、はっきり云っとくけど、あたしは、男には興味ないからね、お前が身の程もわきまえずに、変な気で結婚を口にしてるんだったら、相手にしてやらないよ！」

これは本当だった。遊び好きの彼女だったが、男性に対して性的な興味を覚えたことはなかったし、それ所かそうした行為に対しては生理的に嫌悪感を感じるのだった。

(八)

家の登記書も預金通帳も名義が浅香魔美に書き換えられた、正式の届けが出され、三原寛は結婚によって浅香寛となった。

結婚してみると彼女は淫乱といってよい程セックスを好んだ。毎夜の様に寛は魔美のセックスの餌食となって挑まれた。もっとも、彼女のセックスというのは普通の性行為では

ない。彼女にとっては異性を責め苛み虐待して、苦しみ痛めつけることが性的な興奮であり性的な満足であった。

寛は一切外出を禁じられ、常に全裸で居る事を命じられた。素裸で震えている寛を魔美はちびりちびりといびった。

これが魔美の望んでいた生活だった。家があり、預金の利息収入で、働らかなくとも十分に暮してゆける。そして、遊び好きで派手好きの魔美は、あい変わらず、バー勤めを続けた。

華やかな雰囲気と、男共が汗水流して作った金を面白半分遊び半分に絞り上げるのが彼女の好みに合っていたのだ。男共が営々として働いた一月分の収入の何分の一かが、それも、別段お世辞を使ったりして苦勞する所か、逆に男共には汲々として御機嫌をとられながら、一夜にして捲き上げられることになるのだ。

家に帰ればセックスの玩具があった。ここで寛は完全な『足拭き』になり下っていた。もうこのまま一生、魔美に飼い殺しにされる外なかった。

魔美の絶対権力の支配下に呻吟する寛の最後の『足拭き』人生が始まるのである。

【山原清子、鈴木晃子】SMコンビ・フォト……………

女性对女性の真迫的緊縛演技写真

分譲！

猿轡をされるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円

略号(さる)

強烈に縛りあげられた鈴木晃子の鼻をつまみ口を開けたところへ布片を押し込み、豆絞りの猿ぐつわを無理強いに噛ませてしまふまでの連続組写真である。

縛りあげられるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円

略号(さあ)

屈伏させられるまで

大手札印画紙焼付 二十枚一組 三〇〇〇円

略号(さや)

痛めつける清子のサジスチックな表情と姿態。晃子は清子の意のままになりながらも、その豊かで美しい肢体を惜しげもなく、さらけ出して見事な場面を展開する。

続・濃緑の谷

福田久文

Le Paralytique se leva, qui était couché sur le flanc. Et ce fut d'un pas singulièrement assuré qu'ils le virent franchir la galerie et disparaître dans la ville……

— A, Rimbaud —

下半身に圧迫感を覚えるとともに自分の胸が大きく息づくのを知ったとき、わたしは目を開いた。離れの寝室だった。すぐ真上に女の顔があつて、前方やや斜めに向いていた。

手の込んだ緊縛を解かれて浴衣を着せられ女の手助けをした兎唇の女中とも別れて、拷問部屋そのままの湯殿を出てから、庭を横断する青い水のところまで、確かに女に抱えられて歩いて来た。

情欲を昂らせて異性を苛む者の醜さ。そんな手合いに、進んで身を委ねた自分自分の醜さ。人間の醜さを知った者だけが心から自然

を慕えるのである。立ち止って無心の水の細い流れを見詰めるわたしの腰を女が無言で押したとき、山峡の空が奇妙な薄桃色を呈していた。それが失心の前触れだったのだ。

「覚めたの？」

不気嫌な表情でそういうと、女はすぐまた顔を前方やや斜めに向けた。

しかしわたしは意識の回復とともに急速に萎縮していった。女の懸命の操作もどうしようもなかった。舌打ちとともに身を起した女は、わたしの胸のうえに腰を降ろして坐り込み、かたわらに棄ててあったゴムの指サック

を拾い上げて、それをわたしの左手の人差し指に嵌めさせた。それには肛門のにおいがしていた。

（失心したわたしを刺激するために、女の指にはめられていたのだ）

わたしはただいやしかった。が、いわれぬままに、手を気だるげに動かしていくと、胸上に聳えるように立った女の上半身は、わたしの頭が当たっている床柱に頭をつけて凭れ掛り、両手で胸を抱え、眼を固く閉じて、呻き始めた。

（顔のうえへずり上ってくる！）

わたしは渾身の力と全身の跳躍をもって女を転倒させ、濡れ縁の隅にある小さな手洗いへ走った。身を起す明るい声がした。

「やっぱり、括っとな、あかんね」

顔を拭い、浴衣を整えてまた座敷へはいると、女は満足した表情で、柱に凭れて煙草をのんでいた。

「I神社、ご存知？」

「聞いてはいますが」

「夕食までにちょうどいいわ」

山峽を覆う樹木には夕ぐれが忍び寄っていたが、比較的広い平坦な道路とそのうえの空は、まだじゅうぶんに明るい午後を残していた。女は人通りの絶えてないためか、鞭打たれた足の裏の疼痛に悩むわたしをせき立てて愉しむためか、わたしの肩を抱えて歩いた。

驚くべき石の集積だった。丸い大きな石が眼下の溪流を埋め尽して、水はその間隙を縫って噴出しているに過ぎない。しかもその石は積み重なって対岸の峰のほとんど半ばにまで達している。そして、そこに一際目立つ舟状の岩があった。その岩を抜き取れば、多分空を突いて林立する杉に覆われたその峰も形を変えるだろう。

「これだな、加藤清正がもてあましたのは」

「なんのこと？」

「秀吉が大阪城を築いたとき、加藤清正があの石に目をつけたのです。ご神体だからやめてくれというのを聴かずに引き抜こうとしたんですが、どうしても動かなかった。加藤家の紋がどこかに打ってある筈です」

「何でも知っているのねえ。それでよく専門の勉強ができるわね……」

ここへ来る車のなかで円周率を小数点以下三十九位まで暗誦してみせたときにはただ笑っていた女が、嘆声を洩らすように呟いた。

何でもない他人の一言が聞いた者の心を深く傷つけるのは珍らしいことではない。わたしは自分のお喋りを後悔した。

四カ月ばかりまえだ。わたしは直属の上司であり、恩師である人の事務机の横にある小卓で、その上司兼恩師と向い合っていた。

「はい」

と答えるしかないのだ。後任助手が画期的な業績を上げている以上、いかにわたしが教室の雑務をよく支えて来たとしても、わたしが私立大学の講師に転出することは、数学科の控え目な総意であろう。教授会もまた官僚の合議体に過ぎない。助手任命のさいわたし

の近い姻戚であった政務次官が本省とかかわりのない一介の代議士になっている以上、恩師もまた科の総意を遠慮なく主張できる訳である。教室への事務的貢献と古参代議士の存在により、あるいはこのまま昇格できるかも知れないというわたしの淡い希望は絶たれたのである。そして、それは研究者としてのあらゆる便宜と雰囲気喪失、むしろ失格の宣言であった。理学部のない私立大学の数学教師は高校の教師と変わらない白墨労働者だ。その白墨労働者になってすでに一学期、学生の質の悪さは教える喜びをさえわたしから奪い去っている。

ヴィッセンシャフト(学)へのエロス(愛)わたしのもっていたのは研究生生活を離れては平穩に生きて行けないという愛着だった。それをよくこなす天分がなければそこにはとどまれないのに……。

学門へのエロス。だが、それを確かにわたしはもっていたか。多変数解析関数において世界にその創見を示したわが国の老解析学者は演壇で述べられた——研究に没頭しているときは、草の根を踏むのも避けたいような透明な慈悲心に包まれる、と。

ものを創造するために無可欠なこの情操を

サディスティックな多情の女に踏みにしらせ
て、何の学問への愛情だったのか。

「足の裏、打ち過ぎた？」

抱きかかえた手で掴んでいるわたしの二の
腕の上部を揺すって、女は愉しげにわたしの
眼を覗き込んだ。

「くやしいの？」

（くやしい？）

わたしにはよく分らない言葉の一つだ。そ
の言葉によって形容される情意を、わたしが
経験していない限り、まだ見たことのない色
彩を表わす言葉のように、分らないのは当然
だ。こんなときは黙っているか、話題を転じ
るしかない。

「ほんとうに草深いところですね。店一つな
い」

対岸の峰の下に立っている小さな神社と有
蓋休憩所へ渡る橋が眼前のひとものもみじ
の緑の拡がりのしたに、その色褪せた朱塗り
を見せていた。急な坂を女に支えられながら
ようやく降りて、その橋に立つと、濃緑の谷
を覗く白い曇天の空はさらに高く、身辺には
夕暮れの気配が漂っていた。

農家の主婦らしい五十女が二人、休憩所を
空にして出て来た。きょうのまじめな参拝者

の最後の人たちであった。その野鄙な好奇の
眼が二双とも女を無視してわたしに近づき、
頸を曲げて擦れ違つてゆくのを、わたしは辛
うじて無視した。あの素朴な二人連れの主婦
にわたしと女の関係が分っていたら、女のは
うをこそ見詰めたであろう。

（はたちまえにはとても不快だったこの種の
視線が却って彼女らの幼さを示すものとして
ほほえましく感じられるようになったのは、
肉体の純潔を汚し続けて来た最近の年月のせ
いであろう。この溪流の水が落ち続けた果て
に海にはいるように、いつかわたしにも墮ち
たが故に達することのできる潤達な境地が待
っていてくれるだろうか）

ようやく休憩所の木の長椅子に腰を降ろし
て、粗末な卓に身を寄せたわたしは、すれ違
った女たちのことを考えながら、兩岸を埋め
尽くした杉の一直線の伸びに、羨望に似た視線
を向けていた。すると、曇天のために微妙な
陰影をつけた一面の杉は、いつしか個性的な
画家のキャンパスのように、わたしを惹きつけ
て、岩走る水音をさえふと忘れさせた。

女が十代の巫女みこを連れて戻つて来た。紅一
つ引かぬ平凡な小柄の娘は、茶のはかまをは
いて、白い衣服を小脇に抱え、草鞋ぞうりを二足片

手に持っていた。

「ごゆっくり」

と巫女は、わたしにいった。

「どうも有難うございました」

「もう遅いので」

とわたしとともに経帷子かたびらのような上っ張り
をつけながら、社務所へ帰っていく巫女をみ
て、女がいった。

「ちょっとチップをやりました」

巫女が履物と引き換えに置いていった草鞋
を履いて、二人は岩のなかをほとんど這いな
がら出たりはいったりして、ようやく神体の
巨岩の直下に立った。

わたしはしばらく合掌した。わたしは人間
の意志の根底に無限の力が潜んでいることを
信じている。合掌とは、わたしにとって、そ
の力に縋つて愛する人の不幸を避けようとす
る希念の表白だ。父の眼疾が愛する人の不幸
でなくて何であろう。

神体の巨岩に情意があれば、わしを無視す
るなど、苦情を洩したであろう。

女はわたしを小突いて、嘲った。

「大事ですね、奥さんは」

わたしは苦笑して、合掌をやめ、足下に墨
墨たる石の拡がりを眺めた。

「わたしは父ほど妻を愛していない。そして妻の長患いも父ほど不幸なものではない。それに、わたしは妻から何か情愛のかえしを受けたことがあるだろうか」

女は凝然と立ちつくすわたしを促して、引き返した。

「ここが一番いいわ」

対岸の道路からもどこからも死角になったところに、女は立ち止った。二人は岩のなかに立っていたのだ。岩のほかに二人を知っているものはただ、林立する杉と夕暮れの迫る曇った空のごく一部だけであった。

(ここが悪遊びの場所に使われるとは)

うかつなわたしは軽い驚きを覚えた。

「小さな声でも響くのよ」

小さな玉石を、女の差し出すままに、黙って口に入れたわたしは、顔の下半分を覆った日本手拭いが、後頭部を締めつけ終っててもなお、身動きせずに白衣を纏って立っていた。不安で身を竦せたのではない。何を女がしようとしているのか皆目見当がつかなかったのである。

「これ抱きなさい」

斜めに立っていて、一抱えに余る大石だった。高さはわたしの身長を優に超えた。

「足開いて」

わたしの顔を横に捻じ向けながら、女は足を蹴った。石に抱きついたわたしを石で打とうというのである。獄卒の仕事着のような白衣の筒袖を上げて、女の片手はもう一つ玉石を掴んでいた。そして、身を寄せ、残る片手を降ろしてわたしをまさぐった。その手の粘着するような緩慢な動きに合せて、玉石を握った手もまた粘着するように、かつ緩慢に、わたしの眼前の手の甲に当り、頭を小突き、頬を打った。

溪流は途切れてはまた高鳴り、全山の蟬時雨は遠のいてはまた近づいた。そして、深呼吸を伴って昂ぶる女の息遣いと打たれるごとに口籠るわたしの呻きとが、左右の石のほら穴に響いていった。

女の石を持たぬ手はその指先の鋭敏な性感覚の満足のためにのみ動いていたのである。本来ならばそれにつれてわたしの性感覚が喚び覚まされて、女の手の感触を一層よくするばかりか、窮極の目的にも役立ったのである。うが、あのときのわたしには女のどんな操作も徒労に終わったであろう。また女も、それは期待せずに、ただ手の感触を愉しみながら、石打ちの折檻遊戯にだけ興じていた。

わたしの意識は、うすい黄金こがねの色を漂わせて頭上に暮れ残る白い空のように、明るかった。その明るさは、女の石をもつ手によく耐え、石をもたぬ手には肉の感覚を離れた情味を覚えていた。しかも、その情味は、ようやく周囲の巨石の表面にはっきりと漂って来た夕闇のように明るさを欠いて、重苦しい渇きにただ喘ぐ女への憐みをさえ伴っていた。

われに返ったように女はわたしから手を放して石も捨てた。猿ぐつわを外して口から玉石を取り出すなり、大石のうえにわたしを押しつけるようにして、わたしの口を嚙った。生臭い口臭を覚えたのは、わたしの口の中が出血していたのである。

「ごめんなさいね、つい」

「口の中はすぐ治ります。降りましょう。暗くなる」

二人の下駄まで持ち出して、岩潜りの入口で佇んでいた巫女みこは、橋のうえまでついて来て、二人が脱いだ上っ張りを二つ小脇に抱えたまま別れの挨拶をした。

「また、お参りください」

女は同じ年頃の娘のような笑顔をみせて、黙って軽く会釈した。

帰りは足の裏の痛みも少し引き、下り坂で

楽だった。手の甲には疼きが残っていたが。

「この奥、行者の使う滝なんよ」

道路のしたを土管で潜って本流に落ちていく小さな支流が、人一人通れる小路を伴って鬱蒼とした樹木の奥の暗闇のなかに消えていたが、滝は間近いのであろう。女とともに立ち止ると、本流とこの支流の水音のなかに、滝の音が聴き取れた。立ちどまって滝の音のする辺りを指さした女は、わたしの肩を押してすぐまた歩き始めた。

「修業させたげましょうか？」

女は鼻孔を響かせてひくく笑った。

滝を内蔵したその山角を廻ると、にび色に澄んだ山峡の空気の中に、旅館の庭園灯の鮮やかな草色が、ようやく光芒を放ちはじめていた。

離れへ上りながら、女がわたしをからかった。

「ビールのまえに一風呂浴びない？」

わたしは苦笑してかぶりをふった。鞭跡がまた疼いてしまう。

「じゃ、繋いどくわ。トウボウボウシ（逃亡防止）」

予定の行動だったのだ。わたしは後手錠を

かけられ、曳き綱つきの犬の首輪を嵌められて、座敷と寢室を区切る敷居のうえに立たされた。そこでいわれるままに爪先立ちになって、後頭部を鴨居に当てると、長い革の曳き綱がなんども入念に頸と鴨居に巻きついて、わたしを吊し上げた。

女は、一言もなく、わたしを見上げる姿勢で抱きついてきた。わたしの口と鼻孔は抱きつかれる苦しさにと喘いでいたのだ。女の恣意に開け放されたわたしの口のなかに、力強く舌を躍動させながら、女は女体の匂いそのもののような生臭い息をわたしの鼻孔にはき入れた。

醜く眼を閉じて目捷にある女の顔の上部にわたしは婦人のすべてを見る思いがした。

（性的情熱より他に何の高貴な情熱も知らずやがて疲れて老いさらばえていく。この情欲の桎梏を外して徳と聖境に向える男子を生み育てることだけが女の唯一の救いなのに）

わたしの静かな遺憾の情は、すぐ優しい憐みの心に変ってくれた。

（この利発な初老の寡婦が情事のなかに嗜虐行為を交えるのは、果してその悪性のためだろうか？若い娘に示すであろう昂りを求めてこんな姿勢を強いたのではないか。つまり、

眼を閉じてわたしの姿態を忘れ、わたしの苦痛の喘ぎを彼女への情熱の昂りとして聴こうとしているのではないか？）

（こんなエロスは、永遠の輪廻としての死と野合する。そこで人は一切の精神の高貴と清浄な歓喜とから見放されて、輪廻の闇に沈むのである。然るべき夫さえあれば、この女もここまで堕ちなかったであろう）

「じゃ、待っててね」

女はわたしを抱えたままそういつて、ようやく身を離れた。縁先でタオルを取って、わたしの横を通り抜けながら、冗談ともまじめともつかぬ唐突な注意をした。

「女中に颯られたら、お仕置よ」

立てた人差指に重って、厭な微笑の漂う口元と眦があった。

（女中を寄越す気だな）

予感はずぐ現実となった。後手錠のまま後頭部を鴨居に固定されて、爪先立つ自分の足を見詰めていたわたしは、入口の障子が開いて女中がはいって来たのを知った。

この部屋に上った当初、口数すくなく丁寧に茶菓を置いて行った中年の女中であった。顔立ちは悪くないが、化粧をせぬ顔が薄黒いような黄色で、表情の気だるげなその女は、

ちよつと上眼遣いにわたしを見ただけで、裾を片手で押えながら料理を卓上に並べ終える

と、
「わてはこんなこと、嫌いや。男の癖に」

と呟いて、一瞥したまま出て行った。

入れ替るように障子が開いて、手ぶらの六十過ぎの婆さんがビールと料理の残りを盆にのせた兎唇の女中とともに上って来た。婆さんは出て行った女中同様幅広の帯に帯締めを締めていたが、兎唇の女は、着流しのゆかたのうえに割烹着をかけていた。

「ひささん、ふくれてましたな」

兎唇がせわしく料理を置きながら、笑顔を見せた。

「ちよつとは勉強になりよったやろ」

わたしのそばに坐って煙草を取り出していた婆さんは、にこりともせずに応えた。

「うつとしおまっせ、あの人」

火をつけ終えた煙草を口のそばに保ったまま、薄白い煙を漂わせた老婆は、自然に近い無表情で、ただ黙ってわたしの顔を見上げていた。そのそばへ、坐ったまま割烹着を外した兎唇がつと立って来て、そのまま一言もなく、わたしの腰紐に手をかけた。

「何をする。用が済んだら行きなさい」

わたしは身を揺すった。

「いわれてまんね」

そういつて強引に腰紐を取る兎唇を唆すように、婆さんがにやりと笑って、いった。

「声もええわ、この人」

「あんたが、女将？」

「そうや」

「Aは何をいったか知らないが、出て行きなさい！」

「Aさんがお客でっせ」

「Aを呼べ！」

わたしは怒鳴った。兎唇は、後手錠のかかった手首のあたりに辛うじてゆかただけが垂れ下っている姿に、わたしをしてしまったのである。

「真剣な顔。これがよろしおまんねんで、Aさんには」

片手で肩に抱きついて、わたしをいじり始めた兎唇が、そういつてわたしの顔を覗き込んだ。

「やめないか！」

「フ、フ」

と笑って縁先へ立った女将がタオルを取って来た。

「ちよつとのき、ほかに客ないけど」

啜え煙草をした口を引きつらせて、濡れたオルの猿ぐつわを締めつけ終ると、女将はまた坐り込んで、兎唇にいった。

「あんた、あれしてみい」

女将は自分の胸を抓んで身を乗り出す仕草をして見せた。

わたしのすぐ横で両脚を畳につけてかがんだ兎唇は、口を一文字に結んだまま、ゆかたの胸をはだけて垂れ下った中年のそのの一つを掴み出し、残る手でわたしを抓んだ。

「ウ、ウツ（馬鹿）！」

言葉にならぬ呻きを上げ、自分の重みが掛る苦しさに耐えて、わたしは兎唇を蹴り倒した。

「ハ、ハッ、ハッ、ふられよった」

哄笑した女将は短くなった煙草を灰皿にもみ消して、立ち上り、寝室の方の畳に、兎唇とおなじように両脚をつけて腰を浮かすや、両手でわたしの片脚のふくらはぎを掴んで、わたしを兎唇のほうへねじ向けた。

「一石二鳥や。これなら、Aさんも文句ないやろ」

といつて、女将は持ち上げたその片足を挟み込んだ。

「その方が、よろしおまっか？」

兎唇が顔を傾けて、わたしの背後に隠れている女将の顔を見ながら、いった。

「何いうてんねん。わてはあんた助けたってんねん」

二人の女はくっくつと声を立てて笑った。

怒りはすべて口を押えてでも慎しむべきものである。それは一切の心情の優しさや深い思考を人の心から吹き払ってしまう。何度も無駄に怒声を発して情感を荒したことは、兎唇が女将に助けられて思いのままに浸っている感触がわたしの肉体の側にも効果を及ぼす素地を与えてしまった。積み重なった疲労が吊されている苦しさを熱っぽく包んでいるにもかかわらず、わたしは黙って目を閉じた。両眼を閉じこめたまぶたは、生温い炎のように赤黒かった。ようやく日没後の明るさに打ち勝った蛍光灯を間近から受けていたのだ。(少年の日から、わたしを苛み続けて来たのはこの情欲だ。わたしの知性を曖昧にし、優しい情感を荒すばかりか、その昂ぶりとともに肉体の呵責まで願うこの不条理なもの!) わたしは、わたし自身への怒りをこめて呻いた。

「ウ、ウーン」

そして、苦痛に耐えて、恥ずべきわたし自

身の分身のような女たちを、振り払おうとした。

女将は両手で持ち上げたわたしの片脚を絞るようにして一層強く挟み込み、兎唇は顔を押しつけて、わたしの動きを封じた。

「フ、フ、フ」

「フ、フ」

嘲笑とも満足の意志表示ともつかぬF子音が、ひとしく二人の女の鼻孔を洩れた。

「浮気してるね! こわいわよ」

はいって来た女の声だった。顔を傾けると微笑の混る譴責の表情がわたしを捉えていた。

上座に坐って汗を拭いた女は、そのタオルを兎唇の足もとへ投げた。

「さ、やめて。手洗うてビールつぎ。女将、猿ぐつわ外して。声立てたっていいじゃないの」

「えらいおこらはりましてな」

女将が外しながら弁解した。

「すぐ、この二人を出しなさい」

扇風機のスイッチを入れて胸に風を当てている女に、わたしは静かにいった。女は両手でゆかたをひろげたまま声をのむような表情をした。

「さ、出るんだ」

わたしは二人の女にもいい聴かせるように注意した。

「この子には、無理できないの。悪いけど、いうようにしてやって頂戴」

といって女はにやりと笑った。

「うんと折檻しとくから」

「しっばり、おたのしみで」

女将は如才なく笑顔で会釈し、兎唇を伴って入口を降りた。

「これつけんといったら、面白いわ。山の蚊、きついから」

蚊取り線香をつけると女は話を改めた。

「まともに顰められなかったわね」

山峡に夜が刻々と近づいていた。縁先の緑の断崖が、夕暮れの名残りの明るさよりも座敷からさす蛍光灯の青白い光のほうを強く受け始めていた。夕闇が近づいて大気が涼しくなると、草の香も衰える。わたしは女の言葉を聞き流しながら、不自由な顔を傾けて暑かった日中の疲れを休めている一面の草を眺めていた。

「こんな旅館の女中はあぶないですよ」

といって、女は縁先へ出て、浴室で使った針金とペンチとセロテープをまた持ち出して

来た。女はまずわたしの浴衣をもとどろりにした。

「もう、よしましょう」

わたしは年下の女にいい聴かせるようにいった。

「い、や、で、す。括り直すの」

女は少女のように若やいで手錠を外した。

「さっき、ちょっとこたえたわ。偉い先生に叱られたみたい。でも、わたしが優しくいじめる分には何もお小言ないでしょ？」

女は饒舌を娛しみながら、ゆかたのうえから二の腕の最下部に二重にした針金を巻きつけ、二、三度振ってからその残りで胸の下部を囲んでまた振り、そのまた残りで残る片手も同じように脇腹に固着させた。

「これで、おしまい。ほんの、オホ、ホ、夜伽用。朝までこやって、そばにいて頂戴。怒らないの？ 泊るのよ。奥さん、怖い？」

ペンチで切り落したところへセロテープを巻いた女は、小手から先が前方へだけ動くわたしの両手を取って、わたしの口へ当てた。

「ほら、ご飯も食べられる。可愛い小りさん、何とかいってくださいな」

ようやく鴨居から降ろされて食卓に着いたわたしは、足の痺れとともに、喉の渇きと空

腹を覚えた。日帰りの約束は信じた者が愚かだ。

弱いわたしは、やっと空けた二杯のビールに酔が廻って来た。なお注がれたビールを片手に持ちながら、わたしは憐る女にうなじを向けて、低く歌を口ずさんだ。

おのおみなすむくに
にはちにかへるすべもなし
そのすべなきをなぞとして
さかづきすててなげかんや

緋の絹夜具のすぐ先に、もうすっかり青白い蛍光灯の光だけを浴びて、病めるが如く切り立っている一面の緑を見ながら、わたしはわたしのはたちの日の歌を杜切らせた。

(酔へる心のわれ若し。われとこしへに緑なる……。にはちの日も、はたちの日も、ひとまたたきのうちに過ぎた。その喜びも、夢も残さずに。……サジスティックな年上の女への暗い渇きだけが、いまここに満たされている)

「どうしたの？」

わたしに次いでグラスを卓上に置いた女が娛しげに抱きついて来た。

「ほんとに、痩せてるわねえ。力がない筈だわ。それに」

わたしの胸から腹へ手を降ろした女が続けた。

「このおなか。しっかり食べて頂戴」

女はそのまま唇を求めた。拷問部屋そのままの薄暗い浴室で、まさに鞭打たれようとしたとき同様、わたしは目を閉じて身を竦ませた。むしろ肉体の呵責を寸前にしたときよりも心の奥深く沁む怖れと嫌悪とが背筋を走った。

だが、肉は強い。酔うがままに飽食したわたしは、いつしか女とともに身を火照らせて行った。

女が、まだ眼の覚めぬわたしを捉え、ただ静かに焼えて、満ち足りた吐息とともに身を離れたとき、立て切った紙障子の中央のガラスの部分で部屋全体を透明なにび色に変えていた。数時間まえ、嗜虐の玩弄と酒乱の嬌声をやめ、枕もとの灯を消して、ようやく眠りに入ろうとする女に、その手を頸の下と胸の上に巻きつけられたとき、そこにあった憂鬱な暗藍の色はもう薄れていた。

障子を開け放して立った女の充分な背丈の前に、朝露に濡れて暁の暗さの中から緑の鮮色を取り戻そうとしている山肌があった。

「いいお天気」

女の言葉を圧して、山峡の大気が白みゆく
暁に奏でる響きのような静寂が感じられた。
その静寂は、涼気を帯びて部屋に満ち、寝床
の上にじっと仰臥するわたしの肌を包んだ。

縁先の隅の水盤に水を満たして顔を洗った女は、わたしなどいないかのように、眼前で青磁色のスーツを着けた。浴衣のまま、掛蒲団の片隅へ押しやられた寢床にいるのが気恥しくなつて、わたしは、二の腕二つを胴に縛り付けられた不自由な体を起して立ち、座敷へ移った。子供のときから正坐して勉強をしたために、わたしはあぐらをかくより正坐するほうが落ち着く。スーツのボタンを嵌めながら、女は正坐したわたしを、いたずらっぽく覗き込んでいた。

「考一さんは、そのままヨ
（滝へ行く気だな）」

襖の後ろに隠れた女がライターを発火させて、ぽんとそれを畳に捨てゐる音がした。口に煙草を近づけたまま、座敷の薄暗がりの中に白い煙を吹きつけながら、女が歩み寄った。

に倒した。

青磁一色の胸の脹らみの上、パーマの髪の寝くたれの下に、化粧をすっかり洗い落した薄黄色い顔が、その色褪せた唇に煙草の巻き紙の鮮やかな白と赤く光る火を保ち、その眼でわたしの髪のを掻き分ける指先を追っていた。

わたしを初めてホテルのバスに入れて、わたしの髪の毛を手で掻き廻しながら湯をかけて石鹸を落していたとき、女は「あらっ」と弾んだ声を出したことがあった。子供の頃、柱の角で切った、一平方糎に満たぬ小さな禿を見つけたのである。女は、以後、足の裏よりも腋の下よりも、そこに煙草の火を当てるのを好んだ。

片手で頭を抑えて、その禿を露出させた女は、煙草を口から取り、摘まむように持ち直して、演出とも習性ともつかぬ強い視線をその一点に注いだ。

「ウ、ム、ムーッ！」

わたしは折り畳まれた足を強張らせ、前方へだけ動く両腕を激しく振動させて、頭の動きを抑えた。頸を振ったら髪の毛を焼く。

激痛が去って眼を見開いたとき、わたしの
眼の上には、口もとをほころばせて柔らぐ女

の顔があつた。

「目、覚めたでしょ」

女はわたしから視線をそらして浸るように煙草を吸い終ったのち、わたしを抱えて立ち上った。

女はスーツの色とほとんど変らぬ中ヒールを履いたが、女に従って下駄を履こうとしたわたしの足の甲は、靴の尖端で踏み躪じられた。

「ハダシ（跣足）」

そういつて微笑した女に、わたしはただ苦笑だけを返して土の上に立った。早朝の山土は冷たく湿っていた。犬の長い曳き綱を二つ折りにしてわたしの後に降り立った女が、革紐特有の唸りとともに、それをわたしの背中に斜めに打ち降ろした。唐突で強烈な鞭打であつた。浴衣を二枚重ねていなかったら、みみず脹れを作つたであらう。女は、部屋を出るとき、二の腕も巻き込んで針金で締め付けた浴衣の上にもう一枚浴衣を被せて、浴衣の紐でわたしの腰の上をまた締め上げていたのである。

とつさに、庭木の小さなつげの列を避けて
後ろへ倒れるべきだと判断したが、つげのそ

ばに並んでいる小石を避けることはできなかつた。後頭部をこぶし大の石に叩きつけて、わたしは文字どおり引っ繰り返った。その痛みを鎮める間もなく、長い紐がまた低い唸りを上げた。

「伏せて！」

片足を後ろに引いて身を屈め、腹を斜めに打ち降ろした女の顔。いましがた、薄暗い夜具の上で、片腕で上半身を持ち上げて、わたしを新鮮に捉え直す手入れをしていたときの凄味のある無表情と息遣いがそこにあった。

（これが愛だ。愛とは自分自身が快楽に浸ることだった）

わたしは、自分が同じ愛の対象として、滑らかに纏いつくシーツの代りに、固く湿った土の上に投げ出されているのを、はっきりと認めた。だが、女の昂りに反して、わたしは頬に触れている早朝の山の大气のように冷静で、しかも、背腹の痛みにかかわらず女同様一片の憎しみももたなかった。

「はやくウ！」

甘えるような怒声とともにわたしの足を蹴る、また振り上げられた革紐が、わたしに女を見詰めるのをやめさせた。

身を伏せて顔だけを上げたわたしの背に、

束になった四本の革紐は、等しく間を置き、無声の掛け声を伴って襲って来た。

（根強く、醜く、惨めなもの、われわれを汚し、苛み、解脱と浄福から遠ざけてやまぬもの——強い情慾。あなたはそれに引き摺られてわたしを鞭打っている。鞭打たれているわたしは、そのために、情慾から離れている。では、鞭打っているあなたは結局何をしたいのか？）

わたしは、鞭打たれながら、いま一步で何か分りそうな気がした。

「もういいわよ」

かたわらに屈み込んだ女の声が、わたしの思考を妨げた。浴衣の帯に革紐の端の金具をつけて、女はわたしを引き起し、片手で力任せに浴衣の土を叩き落すと、曳き手の革紐の輪を取って声を弾ませた。

「さあ、歩いて頂戴」

二、三步あるいて、女が曳き綱を引っ張っているのを知った。その力が弛んで、女が歩み寄った気配を感じたとき、革紐の輪がわたしの頬を打ち、娛しげな声が耳もとでした。

「とっとと歩かなければ、こうよ」

一直線に張る二本の革紐を背後に引いて、わたしは昨夜軽い火傷を負わされた足の裏に

小石をめり込ませていった。酔った女は褥に伏せたわたしの片足を敷いて正坐し、残る片足を掴んで、煙草の灰を払ったのである。

門を出たところに女の車があった。曳き綱を弛めて寄り添って来た女は、車のトランクを片手で叩いていった。

「ここへはいつて今日うちへ来ない？」

車庫の中から庭へはいれることは女からすでに聴いていた。わたしは苦笑を浮べて顔を振った。

「きのう撮ったフォトは女（兎唇の女中のこと）もはいつているのよ。一緒に帰ったらネガはあげます。どう？」

きのう、薄暗い浴室の湯に浸っていると、女が浴衣を着たまま、湯文字一枚になった兎唇の女中を連れてはいつて来た。女中の垂れ下った大きな中年の乳房が、その野卑な好奇の眼とともに厭わしかった。流し板の上に正坐したわたしに後手錠をかけ、顎に廻した針金を頭上で結んでからセロテープで口を塞いだ女は、兎唇に足首を持たせて、五十糎ばかり離れて隣り合っている湯槽の縁に、わたしの体を橋渡しにした。空の方の湯槽に足を拡げて立ち、わたしの足首を両手で上下に押し開いて、生唾を飲みこんだ兎唇の口。それは

女の構えている写真機を忘れさせるほど恐しい責道具となった……。そのとき、同じ曳き綱が湯の溢れた湯槽についている蛇口に巻きつけられて、わたしの頸につけられた犬の頸輪を引っ張っていたのである。

女のいうフォトのことを憶い浮べていたわたしの肩へ、突然曳き綱の端が打ちつけられた。

「何とかおっしやい」

わたしは、歩きながらただ反射的に頸を枉げて、女を見た。女の顔には微笑が浮んでいた。答える言葉に窮しているとき、とがった石を踏みつけて、すぐまた足もとへ視線を戻した。

「いじめられると、黙ってしまうんね。いいものだわ、黙っている若い子が一言もいわないのは。それに、考一さんは、表情がすてきになる。独特だわ。……ね、いいわね。もう一晩だけ」

女はわたしにいい聴かせたのである。わたしの反応など見る必要はない。また曳き綱を引っ張って後ろへさがっていった。

小鳥もまだ朝の囀りを囀らず、すべてが早朝の静寂のなかにあって、溪流の響きと女の靴音だけが、山道の静かさと人目を憚る不安

とを掻き立てていた。僅かな距離が長く思われて、わたしは、痛い足、引かれる腰を前へやり続けた。

やっと滝への小路にはいることができた。脚に触れる草も、素足に踏む土も、朝露を帯びて冷たく、小さな流れと小路を挟んで切り立つ山肌は、灌木と雑木に掩われて、暗かった。

万一の人目を恐れる必要がなくなっただけと、わたしは、女はわたしを引き止めて曳き綱を外し、浴衣を一枚剥ぎ取った。そして、浴衣を片腕に掛けてもつや、足払いをかけて、曳き綱をもった片手でわたしを突き倒した。濡れた草が顔を掠った瞬間、小路から一米ほど下の流れの中に顔を漬けていた。浅い川床の砂で息を詰まらせて、すぐ顔を上げた。激しく顔を左右に振って水を切ったとき、川床の丸石で腰を打ったのを知った。

「こっちへいらっしやい」

僅かの高さでも急な斜面なので、二の腕を縛られているわたしには上りにくかった。手を小路に置いて片足を上げると、それを蹴り落した中ヒールの踵が、わたしの片手の甲をやにわに踏みつけた。そして他方の靴の先がわたしの眼前に突きつけられた。

「お口で土落して頂戴」

女は顎をしゃくって、続けた。

「そっちの手で、ちゃんと持って。はやくウ！」

曳き綱の端の金具が、わたしの背中に碌のように当たった。

「こういうことは厭です」

「こういうことなら」

靴の裏を胸の上部に当てて続けた。

「いいんでしょッ」

甲高い声とともに、わたしは蹴り飛ばされて、また水の中に落ちた。

スーツに身を固めた女が高々と聳えるように立ち、眼を輝かせてわたしを見降ろしている下で、仰向けに倒れたわたしの下半身は露出して惨めであった。横は切り立った岩。腹を狙った金具つきの曳き綱は避けようもなく腹を打ってしぶきを上げた。

「さあ、次はどこへ当るか知ら、早くしないと」

女は柔和な表情を浮べて曳き綱を自分の頭の上に振り廻した。長い二重の革ベルト。その革が肌を打つ痛みよりも、端の金具の反跳を恐れて、わたしはまた女の足もとに這い上った。

この未亡人は彫の深い顔に柔和さを欠いていて、いつも怒っているような表情をもってゐる。満足することを知らぬさまざまな意慾に常に駆り立てられているからであろう。でも、この女にも、加虐に耽るときは、ふとその表情が柔らぐことがある。しかしその微笑には明るさがない。凄まじいエロチシズムと人間の底深い暗さが漂うのである。苦しむ者を眺めて満たされぬ意慾の渴きをまぎらし、その犠牲者の苦しみを、自分の力の現れとして、すなわち、まだ残る色香の証拠として喜ぶのであろうか。

(永遠に充足することのない人間の意慾に身を任せている女。この人の手にするものは、

雪崎京人氏直接指導

天然色「女相撲」写真

モデル／大塚啓子・東浦ひかる

迫力投業連続動作

(略号
なる)

カラープリント大手札判

十二枚一組 五〇〇〇円

御希望の方には、御申込次第、早速焼付の上お送りいたします。

ほんの一瞬みすから知らずに浮べる暗い微笑だけなのだ。不幸な女……)

濡れそぼったわたしを小路のわきの草の中に仰向けに転がして、そこ、ここ、あるいはきつく、あるいは緩やかに踏みつける女の口の綻びを、わたしはじっと見上げていた。

(人の理解することは、どうしてこんなに寂しいのか。受けている肉体の痛みなど、この寂しさの影に過ぎない。ようやく選ぶべき男性が分るようになったときは、女にはもうにはちの若やぎも、その男性の子を宿す力もなく、見果てぬ夢を追うように、凄まじい情慾だけを掻き立てるとは！尊敬しているわ、考一さんを好きよ——この言葉を甘美なわたちの唇からわたしも聴きたかった……)

「さ、立ちなさい。またしたげますから」
(してあげる？ 何も知らない。わたしが劣情を満たしていると思っている……。いつか分らせた、セックスよりもよいものがあることを)

わたしは後ろから肩を押されて、一人通れる路を、俯せ目勝ちに滝音のする方へ歩いた。颯々するような軽い鞭打を背に受けながら。

行き詰りはすぐだった。小路が両側の山肌

とともに拡がって、三、四人腰掛けられる瓦葺きの休憩所があった。それには凭れの板が少し下に囲ってあるだけで、四本の柱が小さな屋根を支えているだけなので、そのすぐ後ろ、進行方向の左に、小さな滝が見えた。上を掩う樹木をたち割って幅三十糎ほどの薄い水帯が現れ、三米ほどの岩を跳んで、滝壺に落ちていた。

小屋に腰掛けると頬に霧のようなしづきがかかって来た。浅い滝壺に落ちた水は小屋を迂回して正面の岩の下を廻り、再び小屋の前に来て小路のそばに隠れる。その半円を描く薄青い水の流れの内部は、綺麗な砂の上に薄い水を張っていた。小屋の斜め前、滝と向い合った岩壁には、立像一米近い地藏尊が浮彫りされていて、灰の溢れた線香壺、蠟燭の垂れた蠟燭立て、それに萎れた櫛を挿し込んだ花立てが二つ置いてあった。水の涼気と草木の香の漂うなかで、その一角だけが何か陰鬱で不潔な感じがした。

女はわたしの前に立ったまま上着を脱ぎ、浴衣を纏うと、わたしを立たせて、胸を巻く針金に浴衣のすそを挟み込んだ。そして、両手を拡げて握った曳き綱をぱちんとひとはじきして、厭な微笑を浮べた。

「さ、滝に当って頂戴、拝むのよ」

滝壺はやっと、膝を没するだけの深さだった。わたしは不自由な手を合わせて、眼を閉じ、鞭打たれた背中を滝に曝した。纏いつく一枚の浴衣を叩きつけて、水と水音は殆んど全身を包んだ。

「もっとさがって」

滝壺を囲む石の上に片足を置き、残る足をその後ろの土の上に引いて身構えた女は、びゅっと空気を切ってわたしの太腿を打った。両腿を斜め一文字に襲った革紐が、激しく巻きついて、先端の金具は膝節に疼いた。いますこし上を打たれたら大変だという恐れが、わたしを即座に水帯の中に退かせた。たちまち呼吸困難に陥り、俯向いて不自由な手を顔に当てた。

「顔上げて！」

甲高い声とともにまた腿を打ち据え、鞭を引き戻しながら、いった。

「滝から顔出したら打たれるんよ」

わたしは遂に打たれて滝壺に崩れた。溺れる苦しさに馳られて立ち上り、石の上に休もうとするわたしを、女は鼻孔に含み笑いを洩しながら、繰り返えし足げにした。わたしは仕方なく正面の岩に辿り着いて身を寄せた。

濡れた黒い岩肌は、鋭く背中の中の鞭跡に当たったが、わたしはじっと立ったまま身を凭れさせて、切迫していた息をようやく鎮めた。

透明な悲しみが胸を領していた。それは眼に涙を湛えるようなものではなく、瞳孔から同じ透明な光を溢れさせるところの一種の情緒であったと思う。時の流れが止まり、周囲が地上のものと思えぬ輝きを帯びた。

この数秒の間、女はわたしを無表情に眺めていたらしい。が、身を屈める女の動きが、わたしを果敢無く現実には惹き戻した。女は靴を脱いだ。

「しばらく、じっとさせて」

女は構わず水を降りようとしている。わたしは身を屈めて、足もとの石を両手で掴み取り、限度一杯胸下へ上げた。

「投げますよ」

女はすでに水に漬けた両足をまた路の上へ上げた。

じっと石を持っていると、疲れが急に出来たような気がして、澄んだ感慨が急速に曇って行った。

（石を持ち上げたぐらい何でもないのに……。そうだ、これは小我の主張だから、わたしの観想を乱すのではないか）

わたしは力なく石を落して、自分にその水しぶきを浴びた。そして、歩み出て、砂の上の浅い水の中に正坐するや、ひとりで顔を仰向けて合掌していた。

女はためらいなく降りて来た。わたしの横に立つや、両腿の上へ片足を上げた。わたしは女を見上げた。

「およしなさい。ぼくは真剣に手を合せている」

女は一瞬眼に動揺を示してから、ために置いた片足の位置をずらして、微笑を浮べた。それから、片手をわたしの顔の上に置くと、それをゆっくりと抑えつけた。眼前に水は冷たく澄んで下半身を浸している。その醜いところは合掌を崩して握り合せた手の下に隠した。

二つ折りにして四本の革ベルトの束に変えられた曳き綱が水を弾いて舞い上り、女の足が片腿を力任せに踏みつけるや否や、高い音とともに胸に響く激痛が背中に湧き起った。身を強張らせて横転を抑えたわたしの眼前には、わたしの情操や激痛とかかわりなく、後ろの滝壺の音に合わせて揺れる水面が、ようやく明けた朝空を映していた。

（終）

アルバム／美しき縛しめ／第九集

女性刑罰拷問特集／『西洋篇』 略号／美9

革具に拘束される女

一部 一〇〇〇円
(十共)

むんむんする革の臭気にむせかえった革の緊縛女体集
 「革具に拘束された美女の媚態七十二葉の豪華版」

「女性刑罰拷問特集」日本篇「略号美5」の姉妹篇として、待望の「革具に拘束される女」特集のグラビア印刷写真集を、ここに完成いたしました。真白で豊かな肉づきの女体が、黒光りのする革具、或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられたさまを七十二枚の大小の鮮明なるフォトによって、とっくりとごらんに入れます。

内容

○T型に磔られた女正面像（くさり、尾錠付革具使用）／三葉
 ○皮張椅子に拘束された女（手枷革具くさり付、首、胸、胴、脚、怪、足首固定革具使用）／二葉
 ○革製猿ぐつわを噛まされ全身ガソジガラメに緊縛された女性（全身縄緊縛、革箱口具使用）／二葉
 ○皮張椅子に固定仰臥させられた女体のアップ／三葉
 ○黒覆面（革製）並に黒革褌（チャック付）着用、両前手錠及び黒革褌単独着用の女／四葉

○黒革猿ぐつわ、首絞め股間括り両手、膝、足首拘束／五葉
 ○電気椅子に固定された女死刑囚／四葉
 ○口腔強制検査／三葉
 ○女死刑囚の生体実験／一葉
 ○黒革覆面貞操帯着用にて前手錠立姿の女／一葉
 ○並に同じ姿にての各種ポーズをとる女／五葉
 ○革製猿ぐつわ、首輪、股間並に膝固定立柱括り前手錠／二葉
 ○全身革具に固定される女の正面背面、仰臥姿勢各種／十二葉
 ○貞操帯着用にて黒革製長椅子に仰臥固定される女の肢体／四葉
 ○牛革製箱口具、股絞め、股間固定絞全身拘束に呻く女／五葉
 ○首革枷、両手枷、両足枷を鎖で繋かれた女の全身裸像／一葉
 ○牛革具に拘束された女性の正面背面、側面、各種姿勢／七葉
 ○首輪、両手枷、両足枷に鎖をつけられて引回される女／三葉
 ○貞操帯を着けた女／二葉
 モデル—美木乃々子—大塚 啓子

限定版グラビア印刷M結集版アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

オンパレード 頒価一部 一〇五〇円（送共） 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真集

内容

○絹川女王様の足台になって奉仕しているマゾ男（扉一頁一葉）
 ○山原女王様に縛られ人間馬にされてムチ打たれる男（四葉）
 ○大塚女王様に後手高手小手に縛られ流腸を施される男（四葉）
 ○山原女王様の足の指に挟んだお菓子を食べせられる男（四葉）
 ○大塚女王様の使用されたチリ紙を足の指に挟んで与えられ、それをムシヤムシヤ食べる男（六葉）
 ○山原女王様を背中にお乗せして乗り潰され喘いでいる男（四葉）
 ○大塚女王様の激しいムチ打ちに歓喜の身をふるわせる男（四葉）
 ○山原女王様の手によって次第に後手に縛られてゆく男（八葉）
 ○絹川女王様のハイヒールで手錠の首を踏まれる男（三葉）
 ○山原女王様の按摩をしながら足の指をしゃぶる男（三葉）
 ○縛られて身動き出来ぬ身を山原女王様の手で鼻責め（一葉）
 ○サジスチン宮井美佐子の乗馬スタイルとムチ打ちポーズ（八葉）
 ○山原女王様と鈴木晃子女王様に縛られムチ打たれる男（三葉）
 ○鈴木晃子女王様の馬にされ裸の尻をムチ打たれる男（一葉）
 ○絹川女王様のハイヒールで顔面を蹴弄されている男（三葉）
 ○絹川女王様からローソク責めにされている男（二葉）
 ○大塚女王様の足の踵で鼻責めにあう男（一葉）
 ○お化粧をする絹川女王様のスツールになって奉仕する男（一葉）
 ○山原女王様の激しいムチ打ちにのびてしまった男（一葉）
 ○絹川女王様の真白い足の裏で顔をびたり踏まれた男（一葉）
 ○絹川女王様のはいたスリッパの先をくわえる犬男（一葉）
 ○絹川女王様の脱いだばかりのパンティをかぶせられた男（一葉）
 ○絹川女王様に麻縄で後手高手小手に縛り上げられる男（一葉）
 ○大塚女王様の足の指を舐めさせられていた男（二葉）
 ○絹川女王様の足の指を舐めさせていた男（一葉）
 ○山原女王様の足の指を無理矢理舐めさせられている犬男（一葉）
 ○後手に縛りあげられ大塚女王様に流腸させられている男（二葉）

はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

連載小説

花

はな

と

蛇

へ
び

・ ・ ・ ・ ・ 続編（第二十八回） ・ ・ ・ ・ ・ 団

鬼六……

赤いしごき

岩崎の手が、うしろから、長襦袢の紐にか

すると、静子夫人は、岩崎の耳元に口を寄せるようにしていった。

「ね、岩崎さん、お願いです。あの千代さんを、この部屋から出して」

ささやくような小さな声だったので、岩崎は、はっきり聞き取れず、も一度、耳を静子夫人の口もとへ近づけた。

「何を今いうたんや。もう一ぺん、いうてみい」

静子夫人は、膳の前で、すわった眼つきで酒を飲みつづけている千代の方に、ちらりと眼を注ぎながら、

「あの女のいる前じゃ辛いのです。お願い、おっしゃる事は何でも聞きますから、どうかあの女を——」

静子夫人は、ぴったりと岩崎の耳に口を当てるようにして、小さくいうのだった。

この部屋のあちこちには、マイクが仕掛け
てある。だから、そんな要求を岩崎に対して

した事を聞きとられたりすれば大変だが、千代のいる前で、この、今日始めて逢った男からのいたぶりを受けるといふ事は耐えられない。

静子夫人は、わざと妖艶な眼差しを作って岩崎を見、哀願的に男の肩へ、額を押しつけるのであった。

「よし、わかった。そのかわり、あの女が引き揚げたら、うんとサービスするんだぞ。ええな」

岩崎は、えびす顔になって、夫人にそういい、くると千代の方を向く。

そんな事とは知らず、千代は、とろんとした眼を上げながら、

「ね、親分、何してんのよ。早く、その女を素っ裸にして、お酌をさせましようよ」

と、舌をもつれさせて、いうのであった。

「おい、お前、すまんけど、ここから出て行ってくれ。お前の顔を見ていると、段々、酒がまづくなってくる」

岩崎は、千代の前について立つと、ぶっきら棒にそういった。

えっと千代は、硬化した表情になって、ふらふら立ち上る。

「何よ、親分、その女を酒の肴にして、大いに飲もうという話だったじゃありませんか。嫌だわ。そんな、こわい顔して」

千代は、岩崎に、しなだれかかるように近寄って来たが、岩崎は、邪険に肩すかしを食わせ、千代は、あっと宙を泳ぎ、畳の上に横転してしまった。

「とっとと、ここから出て行け。お前がここにおったら、気分が出んのじゃ。わしも、この美人もな」

岩崎は、急に、けわしい顔つきになって、どなったのである。

「わ、わかったわよ。この女が、私を邪魔扱

いにしたのね。畜生」

千代は、畳に手をつき、よろけながら立ち上ると、鬼女のような形相になって、いきなり静子夫人目がけて、突進したのである。

「おい、待て！」

岩崎が止めるより一步早く、千代は、静子夫人につかみかかり、長襦袢の襟をとって、その場へ組み敷こうとする。

はずみを食って、静子夫人はつんのめり、畳の上へ尻もちをついた。長襦袢の裾前がパツとはね上り、薄水色の湯文字の裾もひるがえって、静子夫人の乳白色の内腿までが大きく露出してしまふ。

千代の物凄い勢にたじろいで、夫人は、そのまま、畳に尻をすりつけるようにしながらその場より逃がれようとするのだが、酒乱の極に達したような千代は、物すさまじい勢で、静子夫人の襟首を再び、取って押さえ、遂に、その場へ、ねじ伏せるのだった。

「畜生、まだ令夫人面をしゃがって。口惜しい！」

静子夫人の美貌に対する嫉妬と羨望が、酒でおかしくなった神経の中に重なり合い、全く千代は逆上してしまつたのである。

静子夫人の胸元ははだけ、豊満な乳房もあ

らわになってしまつたが、千代は、夫人の襟首に手をかけたまま、どしん、どしん、と夫人の後頭部や肩を畳にたたきつけるのであった。

「おい、待て。このど気狂いめ」

岩崎は、あわてて、千代の両手をうしろから、かかえこむ。

部屋に仕掛けてあつた隠しマイクで、その騒ぎを知った森田と鬼源が、血相を変えて飛びこんで来た。

「千代夫人、一体、どうしたんです」

岩崎と一緒にあって、森田と鬼源が、狂乱の千代を抱きかかえたので、虎口を脱した静子夫人は、屏風のうしろに身を隠した。

「とにかく、この女、外へ連れ出せ。全く、気分が悪い」

岩崎は、不快な顔つきで、森田と鬼源に向かい、吐き出すようにいった。

へい、へい、と鬼源も森田も、岩崎の不興な表情にうろたえ、ペコペコしながら、千代を表へ連れ出そうとする。

戸口のところで、千代は酔い泣きしながら森田と鬼源に連れ出されようとしていたが、一段とけわしい顔つきになって、屏風のうしろに待避している静子夫人に向かい、どなり

つけるのだ。

「おぼえといで。明日は、きっと、この仕返えしをしてやる。うんと吠面をかかせてやるからね」

二人の男に廊下へ連れ出されてからも、千代は、わめくように叫びつづけていた。

「凄いい女やな。あれが遠山財閥の奥方とは、ちよっと信じられんわ」

岩崎は、千代の姿が消えて、ほっとし、屏風のうしろで震えている静子夫人を手招きする。

静子夫人は、今の千代の狂乱ぶりや捨科白^{すてざりふ}

していった事などに全身が凍るような恐怖を覚えたが、今更、そんな事に驚くのもおかしいと思ったのか、無理に口元に微笑を浮かべ屏風のうしろから出て来るのであった。

「怖しかったわ。殺されるんじゃないかと思いましたわ」

静子夫人は、乱れた長襦袢の襟元や裾元をかき合わせるようにして、岩崎に頬笑みかける。

「でも、あの女がここから出て行ってくれたので、ほっとしましたわ。無理を申して、すみません」

静子夫人は岩崎に感謝の眼差しを送る。

「さ、もうここには、あんたとわしの二人だけだ。もう誰にも遠慮はいらん」

「ええ、ちよっと、待って下さいましね」

静子夫人は、鏡台の前に静かに坐り、櫛を取り出して、乱れた黒髪をゆっくりととき始めるのである。

その、何となく、しっとりした身のこなしは、長年の秩序立った生活の中で、自然に身についた高雅な艶麗さといった感じがして、横からじっと眺めている岩崎は、何という気品のある美女であろうと、ぞくぞくした思いになっている。

部屋の一隅にある着物掛けの上には、岩崎の性情を知った田代の計らいで、太いロープや麻縄や赤や青のしごきまでが用意されていた。どれでも好きなものを使って、今夜の美女を料理しろ、というわけで、そうした幾本もの縄やしごきに岩崎がぼんやり眼を向けていると、髪のを直した静子夫人が近寄って来た。

「それをお使いになるのでしょうか」

静子夫人は、岩崎の横に立ち、ぼんやりと縄やしごきを眺めるのであった。

それらを眺める静子夫人の眼は、睨の線が柔かに深くなり、何かをあこがれるような、

また、何かの救いを求めるような、同時に、何となく物悲しげな影が瞳に射している。

「それじゃ、裸になってもらおうか」

岩崎は、静子夫人の美しい横顔と緋の長襦袢を通して想像出来る見事な肉体に、ごくりと生唾を呑みこんでいった。

静子夫人は、もとより覚悟していた事だから、柔順にうなずき、長襦袢の伊達巻を静かにとき始める。

肩から滑り落ちるように長襦袢が畳の上に落ち、ついで肌襦袢も脱いだ静子夫人。七難隠すという肌の白さが、電気の光波に、ピカピカ光る。

白梅散らしの薄水色の湯文字を残すだけの裸身となった静子夫人は、ふくよかな二つの乳房を両手で覆いながら、その場に立膝して身をかがめた。

「ええ体してるな。たまらんわ」

岩崎は、よだれを流さんばかりの顔つきになって、つぶやくと、静子夫人の背後に、ふらふら近寄り、なめらかな美しい夫人の肩にそっと手をかける。

甘い、切ないばかりの香料が、岩崎の鼻を刺戟し、岩崎は、たまらなくなつて、静子夫人の肩から首筋あたりにクンクン匂うように

鼻を押しつけるのだった。

静子夫人は、前かがみに首を垂れるようにしながら、なめらかな白い両腕を静かに背後に廻し、背中の中程で両手首を交錯させた。

「ねえ、縛って」

甘えかかるように静子夫人にそういわれた岩崎は、うん、うん、とうなずき、そわそわと立ち上って、赤いしごきを着物掛けより抜き取る。

「そんなきれいな肌にロープなんか使って、痣をつけたら大変や。この赤いしごきで縛ってやる」

岩崎は、そういうと、背中で交錯させている夫人の両手首をひしひしと縛りあげる。そして、余った紐を前に廻し、見事な胸の隆起の上下にかたく巻きつけるのだった。

静子夫人の脂肪ののった白い太腿が、立膝をしているため、白梅ちらしの湯文字を割って、あらわに露出している。それは、岩崎にとって、何にも代えられない、たまらなく艶めかしい一幅のあぶな絵であった。

「さ、こっちへ来てもらおうか」

岩崎は、静子夫人をしごきで後手に縛りあげると、その柔かい、スベスベした肩に手をかけて、配膳の前に連れて行き、いきなり、

ペタリと尻もちをつかせる。

「千代とかいう女と酒を飲んだかて、ちっともうまいことあらへん。わしは、あんたみたいな美人をこういう風に縛って、一緒に酒が飲みたかったのや。とうとうわしの夢が実現したっていうわけや」

岩崎は、そんな事をいいながら、ぞくぞくした思いで、静子夫人の横にびったり寄り添うように坐りこみ、手酌で一杯ひっかけてから、

「さ、あんたも一杯どうや。体が熱ったまるぜ」

コップに、銚子の酒を半分ばかり注ぎこんで、片手を夫人の首にからまして引き寄せ、夫人の唇にコップを当てがった。

静子夫人は眼を閉ざし、岩崎に押しつけられたコップ酒を思い切って飲み始める。苦しげにあえぐ夫人の唇から、したたり流れる酒の滴が、乳房の上下を締め上げている赤いしごきを濡らした。

だが、今の静子夫人にとっては、こうしてなぶり抜かれる前に、一種の麻酔を打つように、酒を飲まされるという事はむしろ有難かった。精神も肉体も、何かの方法で麻痺させねば、とうてい我慢の出来ない辛い責苦であるからだ。

るからだ。

「へえ、あんた、なかなか、いける口らしいな」

岩崎は、ニヤニヤして、コップ酒をようやく飲み終え、ほっと息づく静子夫人を頼もしげに眺める。

「お酒は、ここへ来てから覚えましての」

静子夫人はそういって、もう桜色になった顔を岩崎の方に向け、艶然と頬笑むのである。

これから、先程まで、森田や鬼源に教示されたお座敷サービスをこの武骨なバクチ打ちの親分に対して盛り上げなければならぬ。

田代達も、どこかで、この座敷における夫人の一举一動をじっと盗聴している筈だ。

自分達の事が盗聴されている事には、全く気づいていない岩崎は、いい色になって来た静子夫人をヤニ下がって眺めつつ、箸で膳の上の刺身の一切れをつまみ上げ、

「さ、酒の肴だ。アーンと大きくお口を開いて」

岩崎は楽しそうに、箸でつまんだ刺身に醬油をつけ、静子夫人の口へ運んでいく。

静子夫人は、口元に微笑を浮かべ、すぐに眼を閉じて、口を小さく開いて、それを受け取るのだ。

「どうかね。うまいかね」

羞しげに岩崎から顔をそらせ、静子夫人は小さく口を動かしながら、うなずくのであった。

「ええ、とても、おいしかったわ」

気弱な微笑を作りながら、そういった静子夫人の頬を岩崎は箸でつつきながらいう。

「全く、あんたはいい女や。一体、どういうわけで田代の持物になったんじゃ。一つ、わけを聞かしてくれんか」

「それは――申し上げる事は出来ませんわ」

静子夫人は、瞳の焦点を遠い方へ漂わせるようにしながら、そういつて、

「お願い、それだけはお聞きにならないで」

ここで、岩崎に対し、自分の素性や田代達の悪業などをしゃべったりすれば、それこそあとで、どのような折檻を受けるかわからない。自分を責めさいなむだけではなく、卑劣な田代達は、桂子や京子達にまで、いわば、団体責任として、仕置をするにきまっているのだ。

隠しマイクが部屋のあちこちに取りつけてあるので、滅多な事はしゃべれない。ただ、今夜の客人である岩崎に、お色気サービスを充分、盛り上げる事、それを何処かで盗聴し

ている田代達は、ニヤニヤしながら期待しているのだ。

「そうか、そんなら、ま、無理には聞かんとにしよう」

岩崎はそういつて、再び、膳の上を眺め廻し、急に口元を歪めて笑いながら、焼蛤を箸でつまみ上げる。

「どうや、こいつを食べてみんか、ハハハ」

それを静子夫人の口元へ運んだ岩崎は、顔中、しわだらけにくずし、肩を揺すって笑い出した。

「何が、そんなにおかしいのですの」

「いや、ま、大した事じゃない。さ、アーンと口を開いて」

静子夫人は、にじんだような色っぽい眼つきを岩崎の方に向けて、

「ねえ、そんなの嫌」

「焼蛤は嫌いかね」

「ねえ、それより、もっと、お酒を飲ませて頂きたいわ」

「よしよし」

岩崎は、再び、コップの中へ酒を注ぎ、夫人にぴったり寄り添うのだったが、

「嫌、嫌、口うつしで飲ませて」

揺らぐような艶めかしい色気を静子夫人は

全身に漲らせて、頬をすり寄せて来たので、岩崎の方は全身が浮き立つような思いになった。

よしよし、とコップ酒を一息口に含み、静子夫人の白い柔かい肩を岩崎は両手で抱きしめる。

「ねえ、お膝の上に、だっこして」

岩崎は、妖艶な美女にそのように甘えられて、思わず、クラクラと眼まいが起り、口に含んだ酒をぷっと吐き出してしまった。

このようなすばらしい美女が田代の所有物になっているという事だけでも全く不思議な気持であるのに、それが、このように客に對するお色気サービスまでも心得ているのだ。色々と飼育され、調教されて来たのであるうけれど、何だかこの美女に先手先手をとられているような心地がして、岩崎は、嬉しいやら、面映ゆいやらで、自分の方は、どうしたらいいいのかわけがわからなくなり、フワフワするばかりで、大親分の貫録は全くなくなってしまった。

「さ、これでええやろ」

岩崎は、静子夫人の腰をうしろから抱えこむようにして、どっこいしょ、と自分の膝の上へ乗せ上げる。

そのむっちりした静子夫人の肉の感触と肌の匂いとを楽しみながら、今一度、酒を口に含んで、岩崎は静子夫人に口うつしで飲ませようとする。

静子夫人は、うしろから、岩崎の大きな手で二つの胸の隆起を押さえられ、力一杯、抱きしめられたが、岩崎のするがままに身を任せた恰好で、首をうしろへねじ曲げるようにし、岩崎の口をぴったり自分の口で受け止めるのであった。

静子夫人の紅唇と岩崎の部厚い唇とが、ぴたりと重なり合って、酒の滴をたらしながら、ゆるやかに動き合っている。

ようやく、岩崎から注入される生温かい酒を全部吸いとった静子夫人は、ほっと溜息をつくようにして、唇を離し、熱くなった頬を岩崎の頬にすり合わせつつ、もどかしげに体を揺すって、岩崎のあぐらを組む膝の上に、足を開いて跨がった。

「腰のものが邪魔なようやな。一思いに脱いだ方がええやろ」

大胆な肢態を夫人がとったため、白梅ちらしの湯文字が左右に大きく割れて、夫人の白い、艶やかな太腿までがあらわにはみ出してしまっている。

岩崎は、息苦しいばかりの高ぶりを覚えて夫人の脛から内腿あたりをなでさすり、そして、ゆるみ切った紐を、そっと解き始めるのだった。

「駄目ですわ。それは、お床へ入るまで、お預けよ」

静子夫人は、甘い否定の妖艶なポーズをとって、嫌、嫌、と岩崎の膝の上で腰を揺り動かせるのだ。

再び奈落へ

その翌日は、朝早くから、田代家の二階の奥座敷で、着々と賭場の支度が進められていた。

襖を取り外した二間つづきの十畳の間に、白布を敷きつめ、田代が森田組の若い衆を指揮して、忙がしげに動いていると、義雄がひよっこり、髭剃りあとのツルツルした頬をなでさすりながら顔をのぞかせる。

「昨夜は、小夜子と水入らずで、さぞ楽しかった事だろうね。充分、堪能したと顔にも書いてあるよ」

田代は、未だ何となく眠そうな腫れぼったい義雄の眼を見て、面白そうに笑った。

「だが、社長、生娘きむすめをものにするというのは仲々、芯の疲れるものですね」

「ぜいたくいっちゃいかんよ、君。それが男冥利というもんじゃないか」

「まあ、そういえばそうですが――」

義雄は、万更でもない顔つきになって、ニヤニヤしながら、煙草を口にし火をつける。

「僕の方はとにかく、岩崎親分の方は、昨夜の首尾はどうだったでしょうかね。あれで案外、気むづかしい人だから、気分を損ねるような事はないかと、気が気じゃなかったですよ。小夜子を抱きながら、その事ばかり考えていました」

「いや、その点は心配無用だ。充分、御満足された様子だよ」

と田代は、義雄の耳に口を当て、昨夜、岩崎と静子夫人のいる部屋の様子を盗聴した事を話すのだった。

「とにかく、熱戦は、三、四時間、ぶっ通しで続いたんだから、盗聴している方で参ったね。だが、こいつは社長には内緒だよ。こんな事が社長にわかったら、それこそ大変だからな」

田代はそうやって腹を揺すって笑った。「だから、今日の社長のお眼覚めは、きっと

おそくなると思うよ。ま、あんたも、朝酒でも飲んで、ゆっくりしたらどうだ。何なら、小夜子嬢ともう一度、たっぷり——」

「いや、そうもしてられないですよ」

と、義雄は苦笑して、腕時計に眼をやり、岩崎親分の用事で、色々、廻らなければならぬ所がある、といったが、そこへ、森田が入って来て、

「昨夜、頼まれた写真、焼増しが出来ましたぜ」

ニヤニヤしながら、手にしているスーツケースを義雄に渡すのであった。

仕事部屋で若い衆を二人使い、ほとんど徹夜して仕上げたのだという森田の説明を聞きながら、義雄は重いスーツケースを開けるとそこには、一千枚近くも焼増した小夜子対義雄の愛欲写真、及び小夜子の全裸写真が、ぎっしりとつめこまれていたのである。

「ほほう。こりゃ凄い」

田代も眼鏡をかけて、その何枚かを手に取って眺める。

柱に立ち縛りにされたものもあり、その部分だけの写真もあった。やはり傑作なのは、義雄とからみ合ったもので、それは如何にもこの種の写真らしく、極端なポーズを小夜子

はとらされている。

「小夜子の顔は、はっきりと写っているが、あんたは、うまく顔を隠したものだね。ハハハ」

田代は、その一枚一枚を見つめながらいうと、森田ものぞきこんで、

「ただ小夜子嬢の顔が、今にもベソをかきそうな表情をしてるのが玉に傷だな。そら、これなんか、はっきりと涙を頬へ流していますぜ。だが、こういう方が何となく迫力が出ているような感じですね」

うん、うん、と義雄は満足げにうなずいて写真をスーツケースの中へしまいこむ。

「小夜子がこんな悲しげな顔をせず、堂々と演じるようになるのは、森田親分達の腕次第というわけじゃありませんか。一つ、よろしく頼みますよ」

といって、義雄は、森田の肩をたたいた。

丁度その時、廊下の方から、銀子や朱美達、が、ぶらぶらやって来て、賭場に作り変えられている部屋の中を物珍らしそうに眺めている。

義雄は思う所あって、彼女達の方へ近寄った。

「フフフ、津村さん、昨夜はお楽しみだった

わね」

銀子は義雄を見ると、仲間のズベ公達と顔を見合わせて、くすくす笑い始めた。

「最初から、ああいういい所のお嬢さんを女上位にさせるとは、ちょっと、ひどすぎやしない」

と悦子がからかうようにいい、ズベ公達は何か自分の秘密を楽しみ合うように、キヤッキヤッと笑い合うのだった。

義雄が奇妙な顔を見ると、銀子が、
「悪いと思っただけど、昨夜、鍵穴から、ちょっと、お二人のプレイを、のぞかせてもらったわ」

「ええ？」

「だってさ、女中部屋の前を私達が夜おそく通りかかったら、小夜子嬢の切ないすすり泣きが聞こえてくるじゃない。何だか変な気持ちになって、あたい達、鍵穴から中をのぞかせてもらったのよ」

義雄は、あきれ返った顔つきになったが、別段、それで怒るという事はなく、

「全く悪趣味な連中だな」

「フフフ、暗闇の中に、小夜子嬢の白い可愛いいお尻が、ぽっかり浮き出たように、上ったり、下がったりしているじゃないの。あた



い達、妙な気分になっちまって困ったわ」

ズベ公達は、そんな事をいって、再び、大声で笑い合った。

「ま、のぞかれたものは仕様がななさ。それはそうと、君達に頼みがあるんだ」

義雄は、ズベ公達に煙草をすすめながらいった。

義雄は、ズベ公達に小夜子に因果を含めて

再び、地下室へぶちこむように頼んだのである。

小夜子は、今日、義雄にこの屋敷から連れ出される事を唯一の希望にしている。今、

義雄に裏切られたという事がわかれば、あまりのショックに逆上して、のたうち廻るかも知れない。それを義雄は苦手だというのだ。

「女に泣きつかれるのは、どうも苦手だね。君達から、うまく小夜子にこの屋敷で生まれ

変って働くよう説得してほしいのだよ」

「ひどい人ね、津村さんて。小夜子に望みを抱かせておいて、急に突き離してしまうなんて。女性の敵だわ」

銀子は、そんな事をいって笑い、いたずらっぽく義雄を睨んだ。

「ま、いいわ。他ならぬ津村さんの頼みだもの。何とかあたい達で型をつけてあげるわ」

と、次にはそういう、ズベ公達は、むしろ

その仕事を面白がっているようだ。

「行こうよ、皆んな」

銀子を先頭にして、ズベ公の一団は、小夜子の監禁されている女中部屋に向った。

義雄から受け取った鍵でドアを開ける。部屋の中は、落花無残に荒らされていると想像していたが、何時の間にか、綺麗に整頓されていて、敷かれてあった布団も部屋の隅にきちんとたたんで積み重ねてあり、その上に顔を埋めるようにして、小夜子は泣きくずれていた。

血で染まったシーツを、この屋敷の連中の眼に触れさせるのが羞しく、小夜子が一人で片づけたものなのであろう。縄はとかれていたけれど、相変らず、一片の布も許されぬ小夜子は、白磁の裸身を積み重ねた布団の上へ

投げ出すようにし、声を震わせて泣きじゃくっていた。

銀子と朱美は、ふと顔を見合わせて、そつと小夜子の背後に近づく。

「お嬢さん、そんなに泣くんじゃないよ。女ってものは、一度はこういう目に会わなきゃならないものさ。元氣をお出し」

銀子はそういつて、小夜子の艶やかな、麗わしい肩に手をかける。

小夜子は、一きわ激しく、泣きじゃくりながら、齒をキリキリ噛み鳴らすのであった。

そして、ふと、泣き濡れた瞳を上にあげた小夜子は、ズベ公達に向つて、

「お願いです。早く、早く、ここから出して下さい。義雄さんに逢わせて」

小夜子は、身も心も、義雄のために無残に打ちひしがれたのだ、獣慾の犠牲となつたのである。そして、もう一分も、こんな呪わしい、惨鼻な部屋にとどまる勇氣はなかった。

両手で、白桃のように美しい乳房を押さえつつ、小夜子は、周囲を取囲むズベ公達に哀願の泣き濡れた眼ざしを向けるのだったが、
「わかつてるわよ。もうすぐ、貴女は、このお屋敷から表へ出る事が出来るのよ。よかつたわね」

朱美はそういつて、傍にいる悦子に眼くばせをする。

悦子はうなずいて、あらかじめ用意して来た麻縄を持って、小夜子のうしろに身をかがめた。

「な、なにを、なさるのです。どうして、また——」

縛るのです、と小夜子はひきつった顔をしていつたが、

「この屋敷にいる限り、これが規定なのよ。最後まで逃走にそなえて用心しなければならぬ事になっているの」

と朱美がいい、悦子は、胸を覆っている小夜子の白い陶器のような腕をとって、うしろへねじ曲げながら

「これから、あたい達は、あんたを恋しい義雄さんのいる所まで引き立てる。あんたは、彼氏にこの縄をといてもらつて服を着、待たせてあるタクシーに乗って、あたい達とは永遠にグットバイというわけよ」

「ね、いい娘だから、さからわず、いわれた通りにするのよ」

朱美は、悦子に縄がけをされている小夜子を見下しながら、楽しそうにいうのだった。
ここまで来て、これ等のズベ公の氣分を損

ねたりすれば、今まで死ぬ程の辛さ苦しさをこらえて来た努力が、水の泡になると覺つたのであらう。小夜子は、首を軽く前へ垂れるようにして、両腕を背中の中程で組み、ひしひしと後手しばりに縄がけされていくのであった。

雪をあざむく麗わしい小夜子の裸身をきびしく後手に縛り上げた悦子は、さ、立つて、と小夜子の柔かい肩に手をかけて立ち上らせる。

「武士の情け、ここだけは隠してあげるわ。森田組のチンピラ達にじろじろ見られるのは辛いだろうからね」

銀子はそういつて、ジーパンのバンドにはさんであつた日本手拭を抜き取り、小夜子の腰に巻きつけてやる。

「さ、歩くのよ」

ズベ公達に縄尻を取られ、背中を押されるようにして、小夜子は、よろめく足を踏みしめ、女中部屋から廊下へ連れ出された。

冷たい廊下を素足のまま、体を前のめりに曲げるようにして引き立てられていく小夜子の左右を、銀子と朱美は挟むようにして歩いて行く。

廊下のつき当りの壁を押すと、それは、ド

ンデン返えしになっていて、地下室に通じる階段となっている。

小夜子は、ハッとして、足を止めた。

ズベ公達は自分を再び、地下の牢屋へ閉じこめる気ではないか、そう感じると、小夜子の胸は恐怖に高鳴り、地下へ押し立てようとする女達に抗らって、足を踏んばった。

「ど、どこへ行くのです。ね、小夜子を、どこへ連れて行く気なのです！」

「何をブツブツいってんの。さ、とっととお歩きしたら」

ズベ公達は、小夜子の体に一せいに手をかけ、階段の下へ引き降ろして行く。

「嫌、嫌よ。義雄さん、義雄さんは、何処にいるの！」

小夜子は身悶えしたが、数人のズベ公達に引きずられるようにして、鉄格子の牢舎の前まで押し立てられたのである。

「嫌っ、嫌です」

悦子が牢舎の鉄棒で出来た扉を開き、その中へ押しこもうとすると、小夜子は、泣きわめきながら、必死に身をよじり、中へ入れられまいと暴れ出したのだ。

「じたばたせずに、とっととお入り、ここがあなたのお家だよ！」

悦子のどなったその一言で、はっきり、彼女達の罠にかけられた事を知った小夜子は、逆上にしたように体を悶えさす。

「あ、あんまりです。嫌、嫌っ」

牢舎の入口に、ズベ公達の手で、強引に押しこまれようとして、小夜子は、氣力を振り絞るようにもがいてみたものの、ズベ公数人の力に勝てる道理がない。

どんと背中や尻を同時に、突き出すように押されて、小夜子は、狭い牢舎の中につんのめった。

ぴしゃりと扉は閉ざされ、ガチャガチャと非情な錠前がかけられる。

「お願いです。出して、ここから出して下さい！」

小夜子は、後手に縛られた裸身を鉄格子にたたきつけるようにして、泣きわめくのであった。

「約束が、約束が違います。義雄さんに、義雄さんに逢わせて下さい！」

銀子と朱美は、フッフ、と含み笑いしながら、鉄格子の中をのぞきこむようにして

「甘いわね。やっぱり大家のお嬢さんっていうのは。あの津村さんは、あなたをここから逃がすような甘い人じゃないわよ。ま、その

中で、自分のお人好しを、せいぜい反省する事ね」

銀子にそう浴びせられた小夜子は、精も魂も尽き果てたように冷たい土間にべったりと跪まづき、狂おしく肩を震わせて鳴咽するのである。

「——何時になったら、何時になったら、小夜子は、ここから出られるの」

小夜子は激しく泣きじゃくりながら、誰にいうともなく、切れ切れに声を出す。

それを耳にした銀子は、声を立てて笑いながら、

「何時ここから出られるだって？ 冗談じゃないわよ。お嬢さんに、ここから出られたらあたい達はおしゃかじゃないか。お婆ちゃんになるまで、ここにいろのよ。わかった、お嬢さん」

銀子は楽しそうに鉄格子の中の小夜子にいい、つづいて、朱美も、

「赤ちゃんが生みたくなったら、その内、生ませてあげるわ。女として、経験しなくちゃならない事は、何でも一通りさせてあげる。だから、安心して、立派なショーのスターになってね」

そして、ズベ公達は、どっと哄笑し、ぞろ

ぞろ階段を上って表へ出て行くのであった。彼女達の姿が消えると、あたりは不気味なくらいに静寂となり、絶望の底へ突き落された小夜子のすすり泣く声だけが断続的に何時までもつづいていた。

奸 計

二時間ばかりもたったろうか。小夜子は、暗い運命的なものに打ちひしがれ、薄暗い牢舎の中で身も世もあらず悶え泣きを続けていたが、急に揚戸の開く音に、そっと泣き濡れた顔を上げる。

何人かが階段を降りて来る。それは、やっぱり救援者ではなく、たった今、小夜子から一切の希望の芽をむしりとった恐ろしいズベ公の一団であった。だが、今度は、その中に義雄が混っている。

小夜子は、キツとした表情になって、緊縛された裸身を起し、鉄格子の傍へ体を押しつけた。

「義、義雄さん。これはどういうわけなの。出して、ここから出して下さい！」

小夜子は、格子の間から血走った眼を義雄に注いで、叫びつづけた。

義雄は、さまを見ろ、とでもいわん眼付で鉄格子の中の小夜子を見つめ

「気の毒だが、やっぱり小夜子は、ここから出してあげるわけにはいかないんだよ。色々考えたのだがね。ま、可哀そうだけど、あきらめてもらおうか」

「そ、それじゃ、あなたは、最初から私を騙したのね」

小夜子の黒眼勝ちの美しい瞳に、憎悪をこめた燐光のようなものがきらめく。

「ま、そういう事だね。おかげで僕は昨夜は充分、いい思いをさせて貰った。フッフ、小夜子だって、満更でもなかったようじゃないか」

「卑、卑怯だわ。卑怯よ」

小夜子は、あまりの口惜しさに、あとは言葉にならず、鉄格子に頭を押しつけ、肩を震わせるのだ。

「フッフ、でもね、小夜子。むしろ、ここから出ない方が、かえって君のためだと僕は思うな。娑婆へ出れば、もっと辛い、はずかしい思いをしなくてはなくなる。僕は、その理由を小夜子に教えるため、ここへ来たのさ」

義雄がそういった時、悦子とマリが牢舎の

錠を外し、中へもぐり込んで行く。

牢舎の中は、四坪ぐらいしかない狭さだが奥のレンガで出来た壁にそって、錆びついた鉄柱が一本立っている。

悦子とマリは、牢舎の中へ入ると、やにわに小夜子を押さえつけ、その鉄柱に、別の縄をつかって縛りつけようとするのだ。

「な、なにをするんです！ 離してっ」

雪白の、艶やかな小夜子の背が、冷たい鉄柱に押しつけられる。

小夜子は、口惜し泣きをしながら、激しく首を左右に振ったが、悦子とマリは、小夜子の麗身にキリキリと縄がけをして、立ち縛りに仕上げてしまった。

さ、どうぞ、と悦子は、外にいる義雄に入ってくるように合図をする。

義雄は、スーツケースを小脇にかかえながら、ニヤニヤして、牢舎の入口をくぐり、入って来た。

小夜子は、火の玉のような口惜しさをぐつと噛みしめるようにして、忿怒にこもった瞳を義雄に向けている。

「そうこわい顔をするなよ、小夜子」

義雄は、そんな小夜子の顔を楽しそうに眺めながら、スーツケースを小夜子の足元に置

ぐのだった。

そこへ、どういうわけか、銀子と朱美が、小さな坐り机を持って、牢舎の中へ入って来る。

「御苦労だったね。この辺に置いてくれ」

義雄は、銀子達の持って来た坐り机も、立ち縛りにされている小夜子のすぐ近くに置いて、齒を喰いしばったような表情をつづける。小夜子の白い頬を指でつくのだ。

「これから小夜子の眼の前で、一時間ばかり葉桜団が封筒書きと切手はりのアルバイトをするんだよ。彼女達の始める仕事を見りゃ、娑婆に出ようという気が小夜子になくなると思うんだがね。フッフ、まあ、ゆっくりと見物して居給え」

銀子と朱美が運んで来た坐り机の上には、大きな風呂敷包みがあって、それを開けると何百枚もの角封筒があふれるように出て来たのである。

義雄の魂胆は、これから小夜子の眼の前で小夜子の友人や知人達に封筒の宛名を書き、例の写真を封入して、これから発送しようという事であった。

「そら、小夜子、これは君の卒業した青葉学院の卒業生名簿だ。今朝方、川田君がわざわざ

ざ学院まで行って、一冊、もらって来てくれたんだよ」

義雄は、青い美しい装釘をした卒業生名簿を小夜子の眼の前にちらつかせる。

「そ、それを、どうする気ですの」

小夜子は、何か、ぞっとするものを覚えておろおろした表情で義雄の顔を見る。

義雄は、鼻に小じわを寄せて笑いながら、小夜子の足下に置いたスーツケースを開くのだった。

「あっ」

義雄がスーツケースの中からつかみ出し、鼻先へ近づけて来た数枚の写真を眼にした小夜子は、思わず声をあげる。小夜子の美しい顔から一瞬、血の気はひき、額には汗さえ浮かんだ。

義雄の計画が、小夜子には、わかったのである。

「小夜子が今まで親しくしていた友人知人にこの面白い写真を進呈しようというわけなのさ。僕が調べた小夜子の交友関係や、この名簿の中の何百人かに、これから封筒の宛名書きをして、写真を入れ、ただちに発送する。

フッフ、そうすりゃ小夜子、羞しくて、一寸表通りは歩けないだろう。この屋敷に永遠に

住みつく事を、君は望むと思うのだが、どうかね」

やはり、義雄の考えは、小夜子の想像した通りの事であった。

あまりの事に、小夜子は、もう声も出ず、光を失った空虚な眼を物悲しげに細め、ぼんやりと天井の方に視線を向けるのである。

「あなたは、あなたは人間じゃないわ。悪魔の化身よ」

小夜子は、涙でキラキラ光る瞳を何か遠い所でも見るように開いて、呪うように小さく口ずさんだ。

ズベ公達は、そんな小夜子の前で、義雄に頼まれた仕事を開始したのである。

義雄に手渡されたメモを見ながら、また、青葉学院の卒業生名簿も見たりして、ズベ公達は机の周囲に取巻き、封筒の宛名書きをしていく。ガムを噛んだり、口笛を吹いたりして彼女達は、その仕事を結構、楽しんでるようだ。

朱美と悦子が宛名書きし、悦子が切手をはり、銀子がスーツケースの中にぎっしりつまった写真から、十枚ぐらいずつを選んで封筒の中へ、印刷された一枚の報知状のようなものと一緒に同封するのだが、その上質の紙に

印刷された報知状の文面は、次のようなものである。

——今度、私儀、突如、心境の変化をきたし、これまでの社会生活より訣別して、秘密映画、及び写真のモデルとして、新たに発足する事に致しました。いささか容貌、及び肉体には自信がございます故、この道で将来、成功致すべく、努力を続けるつもりでございます。同封致しました写真は、デビュー作品とも申すべきもの、何卒、御覧の上、知人の皆様方にも御宣伝下さいますようお願い申し上げます——村瀬小夜子

銀子はそれを手にして読んでいるうち、ひとりで笑い出し、立ち上って小夜子の傍に近づく、その耳元で、その文を読んで聞かせるのだった。

小夜子は、苦しげに眉を寄せ、口惜しげにかたく唇を噛みしめるのだったが、そうした屈辱を必死にこらえ、無理に冷淡な表情を作ろうと努力している。

「こんな手紙と傑作写真を受け取ったあんたのお友達は、どんな顔をするだろうね。ボーイフレンド達は、きっと大喜びだと思うわ」
銀子は、おかしさを噛み殺すようにして、麻縄に緊めあげられている小夜子の柔かい乳

房を指でつつくのだった。

「さあ、もういいでしょ。この手紙はあたいのものだから返して頂くわ」

銀子は腰をかがめて、小夜子の腰のまわりを包んでいるたった一枚の布も無残に剥ぎ取ってしまう。

小夜子は、石のように体を硬直させ、ぴたりと太腿を閉じ合らし、美しい横顔を見せたまま、身動きもしなかった。

「でも、全くだい艶を出しているわね。昨夜から、ずいぶんいい思いをしたらしく、少しちぢれ毛になっているわ」

小夜子は、赤らんだ顔をねじ曲げるようにそらせて、かたく眼を閉ざしている。

「これから、こいつに鬼源さんがうんと磨きをかけて、商売ものになるよう仕込みあげるのだと思うと、女のあたいでも、何かぞくぞくしてくるわよ」

銀子はそんな事をいって、そっと手を差しのべる。

「や、やめてっ」

今まで、数々の屈辱を全身で耐えてきた小夜子であるが、さすがに、ハッと狼狽して、体を揺すり、尻を振って、憎悪のこもった瞳で、銀子を見下すのであった。

「あら、そこは彼氏と朱美以外には、さわらせないというの、ずいぶんとケチだわ、このお嬢さん」

銀子は、クスクス笑った。

封筒に宛名書きしている朱美が、銀子の方を向いて声をかける。

「銀子姐さん。早くこっちの仕事をすましちまおうよ。今日中に発送しなくちゃならないんだからね。小夜子と遊ぶのは、それからでもいいじゃないか」

「まあ、朱美が、とうとう嫉妬^{やきもち}をやき出したわ」

銀子は、ようやく小夜子の傍より離れ、机の方へ戻って来た。

義雄のメモにある小夜子の交友関係の中には、有名な映画俳優もいたし、政界の大物もいた。

封筒に書かれたそれ等の名前を見ながら、銀子は、へへえ、と舌を巻き、写真を封入していく。

「さすがに大家のお嬢さんだけあって、ずいぶんと有名人がいらっしゃるわね」

銀子と朱美は、ガムを口にほりこみながら皮肉めいた眼つきで、鉄柱に立ち縛りされている小夜子の方を見るのだ。

小夜子は、流す涙も涸れ果てたような、疲れ切った表情で、美しい横顔を見せている。

大家の令嬢として、二十二年間、温室の中で育って来た小夜子は、昨夜、遂に一匹の血に飢えた狼から烙印を押され、この地獄屋敷の中にあって、秘密ショーのスターとして徹底的な調教をほどこされる身となったのだ。

如何にも深窓の令嬢らしい艶々と光る象牙色の肌や華奢な首筋、麻縄を上下に巻きつかせ、白桃のような柔かい盛り上りを見せている胸の隆起、ムチムチと引き緊まった、それでいて透き通るような色の白さを持った太腿のあちこちに、赤い小さな痣のようなものが見えるが、それは、昨夜、義雄につけられたキスマークなのであろう。

朱美のテストによれば、肉体的には、すこぶる敏感という事だが、やはり育ちが育ちだけに、セックスに対する知識は、少女程度のものだ。それだけに、昨夜、義雄より浣腸、朱美よりペッシャル、そして、今、こうして、麗わしい太腿のあちこちに赤いマークをつけて、鉄柱に緊縛されている小夜子を見ると、何か哀れな、痛々しい気持ちに、ズベ公達も、ふとなるのであったが、彼女達にしてみれば、そういう感傷を持つのは罪悪だとして

いる所がある。

「ねえ、ちよいと朱美、このお嬢さん、おしっこがしたいんじゃない。さっきから、お尻をもじつかせているわよ」

と、銀子が朱美の顔を見ていった時、ズベ公達の間に入って、封筒に切手をはっていた義雄が顔をあげた。

「ああ、そうだ。朝から、まだすましじゃないんだよ。こいつは迂闊だったナ」

「まあ、気のきかない旦那さんね」

朱美は笑って、小夜子の方を見ていった。

「いいわ、小夜子、この仕事が終わったら、あたいがさせてあげる。しばらく待っているのよ」

それを聞くと小夜子は、顔も首も赤く染めて、ひどく狼狽したよう、はっきりと顔を横へそむけてしまう。

宛名が書かれ、写真が封入された角封筒は机の横に段々とうず高く積まれていく。

小夜子は時折、その方へ、ちらと物悲しい視線を向ける。気も狂うばかりに羞しい自分のそんな写真が、すべての友人や知人に、これから送られようとしているのだ。あまりにも残忍で非道な義雄の計画に、小夜子は、気が遠くなりかける。

義雄は、もう二、三百枚になったと思われる封筒に糊づけして、どれ、少し、一服するかと大きくのびをして立ち上る。

煙草を口にして火をつけると、義雄は、のっそり小夜子の傍に近寄った。

「ねえ、小夜子。こんなものを君の友人関係にバラまこうとする僕を、さぞ君は恨んでるのだろうが、小夜子に馬鹿げた娯楽を起させないための一つの方法なんだ。悪く思わないでね」

義雄は、小夜子の美しい全身像をしげしげ見つめながらそういって、小夜子の柔かい耳たぶに軽く接吻するのだ。

「僕は忙がしい体だから、明日は関西の方へ一旦、戻らねばならない。でも、月に二、三度は小夜子に逢いに来るからね。ここにいる葉桜団の連中のいう事をよく聞いて、一日も早く立派なスターになっておくれ。小夜子の成長を楽しみにしているよ」

などと義雄は、半分、からかうような調子で、消え入るようになだれている小夜子の耳に吹きこむのだった。

「それから、小夜子のフィアンセだった内村春雄には、もうとっくに、速達便で、小夜子のお尻から出たものをビニール袋にいれ、こ

の写真と一緒に送ってあげたよ。明日には、彼氏、きっと、その小包を受取ると思うな」それを聞いた小夜子は、こらえにこらえていた慟哭が胸をついて溢れ出た。恋しい春雄のもとに、自分のそうした写真が——この世の出来事とは思われぬ恐しい、羞しい事実小夜子は、さめざめと涙を流し、そして、狂おしく首を振った。

小夜子の慟哭は、そのように悲愴を極めたものだが、義雄にとっては、小夜子が歎き、悲しみ出せば出す程、たまらない位に小気味がよかったのかも知れない。

「これで小夜子も、むしろ、さっぱりしたことだろう。もう内村春雄なんて糞喰らえだ。ハハハ」

義雄は、小夜子の顎に手をかけて、大口を開けて笑い、仕事を続けているズベ公達の方を向いていった。

「今日の仕事はそれ位でいいだろう。出来上っただけ、ポストへ投げこんでくれないか」この近辺ではやばいから、東京駅まで誰か出向いて投函するよう義雄は彼女達に指示するのだった。

「じゃ、あたいが行ってくるわ」

一番年下のマリが、その役を引受け、写真

在中の封筒を風呂敷に包み出す。

「みんな得手分けしてやると早いものね。これでもう二百通はあるわよ」

マリは、ずっしりした重味のある風呂敷包みを持って立上ると、わざわざ小夜子の方へ近づいて、それを振りかざして見せるのだ。

「じゃ、お嬢さん、これからこの手紙をそっくりポストに入れに行くからね。フフフ、どういう結果が出るか楽しみにしておいで」マリはそういって、口笛を吹きながら外へ出て行く。

「さて、僕もこれから今日の賭場の段どりについて色々忙がしいんだ。じゃ、あとの事はよろしく君達に任すよ」

義雄はズベ公達にいつて、出て行こうとする。

「待、待って！」

小夜子は、牢舎の扉を押して出て行こうとする義雄に声をかけた。

「私、私——あなたを、死ぬまで呪いつづけるわ！」

泣き濡れた瞳に精一杯の憎悪をこめて、小夜子は、もうこれが最後というように激しい口調でいう。

だが、義雄は、えへらえへらと顔をくすす

だけで、

「どうぞ御勝手に。昨夜は僕に抱かれて、ずいぶんと悩ましい声をあげ続けていたのに、女ってものはわからないものだ。田代社長に聞いたんだが、ここに捕われている別嬪さん達はみんな最初はそんな口をきいていたそうだがね。それが毎日調教を受けているうち、段々とこの世界を苦痛には思わなくなってくるようだよ。今、ここへ鬼源さんを来させてあげるから、今後の調教について、色々、打合わせるがいいね」

義雄は、そういつて、バイバイ、と小夜子に手を上げ、牢舎より身をかがめて出て行った。

彼が姿を消すと、ズベ公達は、さて、あとは自分達の領分だとばかり、ズカズカと小夜子の前に近寄り、鉄柱から小夜子の体を切り離す。後手に縛った縄は解こうとはせず、そのまま、小夜子の肩や尻を押して、狭い牢舎の中央へ立たせるのだった。

「こ、これ以上、私に、どうしようっていうの」

身も心も打ちひしがれている小夜子は、すすり上げながら、弱々しい声を出すだけである。

ズベ公達は、前もって、皆んなで相談し合
った事であるらしく、眼で笑うだけで答えな
い。悦子が、牢舎のレンガ作りの壁に取りつ
けてある鉄の把手を力をこめて廻し始めると
天井から鈍い音を軋ませて、赤錆びた鎖が垂
れ下がって来た。

「誰が考えたか知らないけど、この地下の牢
屋は色々凝ってあるわね」

銀子と朱美は、垂れ下がって来た鎖の先端
に小夜子を後手に縛ってある縄尻をつなぎな

がらいうのだった。

「この上げ下げ自在の鎖は、罪人を逆さ吊り
にして拷問するためのものだけど、そんなひ
どい事は小夜子嬢に対してしないわ。でも、
あたい達に楯をついたりすると、こっちだっ
て、それ位の事はやりかねないからね」

銀子は、そういって、一本の鎖につながれ
て、すつくとその場に立たされた小夜子の悩
ましいばかりの盛り上りを見せた白い尻を指
ではじく。

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

この八緊縛女体アルバムは、若々しい
豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二
人の女性の美しさ最高度に發揮した縛られ
ポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずか
ずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させ
ました。特に写真に迫力を増すためとグラ
ビア印刷の効果をフルに運用するためにも
写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚

にして純情な初々しいフェイスと伸々とし
た若鹿のような肢体の持主である五月亜紀
子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの
可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。
この一冊にて四人の美女の裸身のすみず
みまでが、八縛りというアクションによ
って、ファンの皆様方の目の前に極めて鮮
明な印刷によって展開されています。どう
か一冊を机上にお飾り下さい。

小夜子は、がっくり首を前に垂れて、ただ
すすり泣くだけであった。

「悦子、さっき、話していたものを持って来
てよ」

朱美は、何か意味ありげに悦子の顔を見て
片眼をつぶる。

あいよ、と悦子は、鉄錆びのついた手をは
たきながら外へ出て行った。

絶望のどん底へ突き落され、舌でも噛み切
りたい気持にある小夜子に対し、この悪女達
は更に邪惡な責めを加えようとしているよう
だ。

朱美は、小さくすすり泣きをつづける小夜
子の乱れた黒髪を櫛を使って、妙に優しく、
すき上げてやりながら、

「旦那さんのお留守の時は、これから、何時
も、あたいが小夜子のお守りをしてあげるか
らね。何でもあたいに相談するのよ。おトイ
レの事にしたって、全部、あたいが面倒見て
あげる。だって、あたいは小夜子のおねえ様
ですものね」

わざとらしい甘ったるい声を出して、朱美
はハンカチを取出すと小夜子の頬に伝わる涙
をふきとってやるのだった。

そこへ悦子が、大きな花瓶と小さな紙袋を

持って、戻って来た。

朱美は、悦子から花瓶を受取ると、それを小夜子の目の前へ近づける。

花瓶の口は、楕円形で、丁度、水差しのよ
うな恰好になっており、白地に赤や紫の花模
様がついていた。

「ごらんよ、小夜子。これ、フランス製の花
瓶なのよ。色々な花模様がついていて、とて
も可愛いでしょ」

小夜子は、朱美に鼻先へ押しつけられた花
瓶に、涙で光る黒の瞳をそっと向ける。

「ね、美しいお嬢さんに、ぴったりなおまる
とは思わない」

ハッと小夜子は、燃えるように赤らめた顔
をねじ曲げるように横へそらせた。

ぞっとする思いに、がたがと乳白色の全身
を慄わせる小夜子を見て、朱美と銀子は顔を
見合わせ、肩をすくめて、舌を出す。

「ショーのスターは、まず、おまるを立った
まま、使う練習をしなきゃならないんだけど
まだ、小夜子には無理ね。だから、今日のと
ころは、おねえ様が介添えしてあげるわ」

「嫌っ、嫌です！」

朱美が腰をかめ出すと、小夜子は、肢を
ひき、腰をひねって、身悶えし始める。

「馬鹿ね。何も今更、羞しがる事はないじゃ
ないの。昨日、あたい達に、あんなすばらし
い事をしてもらったのを忘れたの」

小夜子は、線の美しい、柔かそうな眉を寄
せて、キリキリ歯を噛み鳴らした。

「こんなにお腹がはってるじゃないの。いっ
とくけど、それを解決させるには、こういう
方法しかないのよ。一日中、がまん出来る筈
はないのに強情はるんじゃないわよ」

悦子が、横から、小夜子の腹のあたりを手
でさすりながらいう。

事実、小夜子は、先程から、次第に限界点
に近づいていく尿意に悩み抜いていた。それ
を、義雄やズベ公達に打明ければ、恐らく、
邪悪な拷問の材料にされるような気がして、
どうしても口に出来なかったのである。

だが、ズベ公達は、小夜子の、そのために
起るもどかしげな身悶えを見逃がさず、先手
をとって、攻めこんで来たわけだ。

「どうするの小夜子。このまま、打っちゃら
かしといってくれというの。でも、粗相して、
足元を汚したりしたら大変よ。逆さ吊りぐら
いのお仕置じゃすまないわよ」

銀子も朱美も、口々にそんな事をいって、
小夜子の乳房や尻を指でつついたりし、たま

らない快感を味わっている。

限界が近づいて来たところに、そうしたズ
ベ公達の言葉の拷問を受け、小夜子は段々と
上の空のような力なさを心にも肉体にも帯び
て来たのである。それで、朱美が、も一度、
念を押すように、花瓶を持ち直して、

「ね、小夜子、いいわね、これを使うわね」
と、熱くなった耳元に口を近づけると、消
え入るように小さく、小夜子は、うなずいた
のだ。

「そう、よく聞きわけてくれたわね」

朱美は、小夜子の艶々したウェーブのかか
った黒髪を撫でるようにして、嬉しそうにい
う。その瞬間、小夜子はたまらなくなつたよ
うに、朱美の肩に顔を埋めて、肩を震わせ、
哀泣するのだった。

「お願い、笑っちゃ嫌、笑わないで——」

如何にも女らしい、そうした仕草をする小
夜子に、朱美は、ぞくぞくと嬉しくなり、小
夜子の透き通るばかりに白い背中を優しく、
いたわるようにさすりながら、

「いいのよ、小夜子、そんなに泣かなくなつ
て。おねえさんがついてるじゃないの」

などと気もそぞろになって、いつている。

銀子と悦子は、そんな朱美を、いい気なも

のだと笑いながら、最初からの予定通り、この牢舎の入口近くに隠しておいた一尺ばかりの鉄ぐい二本とハンマーを取り出して来た。

そして、一本の鎖に全身を支えられている小夜子のぴったり閉じ合わせている肢の左右にかなりの間隔をおいて、その二本の鉄ぐいをハンマーを使って土間へ打ち込み始めたのだ。

その音に、朱美の肩に顔を埋めていた小夜子は、ふと眼を開く。

足下に打ちこまれている無気味な鉄棒を見て、小夜子は、おろおろした表情で朱美の顔を見た。

「フッフ、何もそんなに怖がらなくてもいいわよ、小夜子。だって、男の子のように開いたようがやりいいじゃないの」

朱美は、ひきつったような顔つきになった小夜子をのぞきこむようにして、片頬を歪めて笑った。

銀子と悦子は、手に皮紐を持ち合い、右と

左に分かれて、鉄ぐいの傍にしゃがみこんでいる。つまり、小夜子を開股縛りにしようと待機しているのだ。

「小夜子、さ、勇気を出して、鉄棒の所まで自分で肢を開くのよ」

朱美は、茫然自失したような小夜子に対して、そっくり、

「それ位の事が出来ないようじゃ立派なショーのスターにはなれないわよ。あんたのお師匠さんの静子夫人のしている事にくらべりやこんなもの、どうって事はないじゃない」と、つづけるのだ。

小夜子は、何かいおうとして、朱美の方へ一種凄惨な表情を向けたが、急に唇を噛み、眼をかたく閉ざした。

「わかったわ。貴女達は小夜子に、死ぬ程、羞しい想いをさせたい、というのね」

小夜子は、正面に顔を向け、彫像のように冷厳な表情になって、眼を閉じたまま、口を開くのである。

銀子が、せせら笑うようにいう。

「ま、てっとり早くいえば、そういう事ね。なかなか頭がいいじゃないの」

小夜子は、それが、これらの悪女達に対する反抗だと、悲しく心に決したのであろう。

現在発売中／限定版グラビア写真集／在庫案内

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 女体緊縛グラフ集「豊満と清楚」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」 |
| 緊縛美女八十態「美しき縛しめ 第四集 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美4」 |
| 凄惨「女性刑罰拷問持集」日本版 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美5」 |
| 山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」 |
| 二女緊縛「女斗緊縛競艶写真持集」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」 |
| 「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」 |
| 緊縛写真集「責められる美女百態」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美10」 |
| M写真集「女王様に飼育される日々」 | 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」 |
| 緊縛美態代表作一二〇葉写真集 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美11」 |

◎一般書店にては一切販売いたしておりませんから、直接発行所へお申込み下さい。

再び、胸をついて溢れ出そうになる号泣を必死にこらえながら、かたく閉ざしていた両肢を静かに左右へ開き始めたのだ。

「そうそう、その調子」

「待ってました」

銀子と悦子は盛んに黄色い声を出して、捨鉢になった小夜子を揶揄しまくるのである。

「そら、顔を出した、顔を出した」

銀子と悦子は、キャッキョッキョウ笑い、小夜子は、激烈な屈辱を覚えて、うっと肢を踏みしめる。

「あら、どうしたの、小夜子、さ、羞し恥ずに、もう少しじゃないの」

朱美が、紅生姜のように真っ赤になっている小夜子を元気づけるように、ポンポン肩をたたいたのであった。

両肢を八の字に開いたまま、進退極まったような小夜子に銀子や悦子達は手をさしのべて、遂に鉄ぐいの所にまで、引きこみ、キリキリ皮紐をむすんで、足首を固定させてしまふ。

人の字型に堂々と肢を開け切り、逃げも隠れも出来ないといった恰好に小夜子を仕上げたズベ公は、ほっとしたように煙草を一服吸って、小夜子の周囲を取り囲むのだった。

深窓に生れ育った小夜子の適度に冷たく、適度に暖かそうな雪白の美肌が、二つに割り裂かれたような大胆な、そして、息苦しいばかりに官能的な肢態を組んでいる。ズベ公達は、そんな美女の前へ廻ったり、うしろへ廻ったりして、溜息をつくように、飽かずに眺めているのだ。

小夜子は、そんな、あられもない、気が狂うばかりの羞しい肢態に縛り上げられて、かえって、胆がすわってしまったのか、むしろすっかり観念したよう、さほどの、ためらいも羞しさも見せず、ズベ公達の環視にすっかり身を任せている。時々、ウツ、ウツ、と声にならない声を出して、左右に大きく割り開かされた艶々光る内腿の筋肉をブルブル震わせるのは、いよいよ尿意が限界に達した事を示すものであった。

やがて、ズベ公三人は、クスクス笑いながら、揃って、身をかがめ、小夜子の一番辛く感ずるであろうそれを凝視し始め、そして、あらわに、彼女達の好奇の眼に、ほんのりとのぞかせてしまっている可憐なばかりに可愛い、それに対する批評までするのであったが、小夜子は、生の魚が臓物をさらけ出して料理されるのを待つように、もう羞ずかしさ

も口惜しさもなく、あるのは、全身をつき上げて来る激しい生理の苦悩だけであった。

急に、小夜子は、大きく割れた太腿を激しく揺さぶり出し、半開きになった口から、

「ねえ……お、お願い」

と、催促するような甘い声を出す。

朱美は、それを待っていたように銀子と悦子に何か小声でささやいて花瓶を渡すと、のっそり立ち上って、もどかしげに、首や肩を揺すっている小夜子の頬にぴったり自分の頬を当てがった。

「小夜子、いいわね。おねえ様とキスするのよ。銀子姐さんと悦子が小夜子に花瓶を当てるからね。そうしたら、小夜子は、おねえ様の舌を吸いながら、花瓶の中へ——わかつたわね」

小夜子は、何か幻でも見るように朱美の顔へ、うっとりした視線を向け、初々しい羞しさをこめて、そっとうなずく。

朱美は、片手を小夜子のきらめくように白い、柔かい肩に廻し、片手を上下に縄のかけられた柔らかい、美しい盛り上りの上に乗せる。小夜子は近づいて来た朱美の唇に、そっとなびらのような唇を当てがい、軽く瞑目したまま、ゆるやかに、すり合わせた。

「最新版」女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙(9×13釐) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 12	全裸しぼりと浣腸器	(玉田)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 6	縄に羞らう裸しぼり	(長野)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 1	顔面から全身厳重縛	(東浦)
G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しぼり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる女	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しぼり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)
G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歓	(宇治)
G 41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカバー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胴絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)
G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に厳重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺禪巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

サーカス……曲芸……

よもやまばなし

曲馬団好

角兵衛獅子は、越後方面で凶作のとき農夫の角兵衛が、附近の百姓の子供に曲芸を仕込み、旅まわりをさせ農家の貧窮を救ったのがはじめであるが、後には買い取り児や誘拐児を使うようになった。これは日本奴れい史にもあらわれている。大道演芸に使われる年少芸人には、このような素性の者が多いことは洋の東西を問わず、中国では養育に困った子供を、カゴに入れて売り歩いたという話があり、歌劇「君よ知るや南の国」の主人公は、ジプシーにさらわれた少女であり、「家なき子」の主人公もまた売られた少年である。小屋掛の演芸にはすくなくとも江戸時代に

「娘軽業」があった。芸人資源がどこに求められたかは明らかでないが、想像に難くないところである。昭和はじめまで盛んであった少年少女曲馬団の芸人が、どうしてあつめられたかということについては、松浦泉三郎著「好色見世物誌」に買い取り児と誘拐児であることが明記されている。現存する数少ないサーカスに働く中年曲芸師のあるものは、こういう前歴の持主であることはもちろんである。

曲芸の親方や師匠が、これらの無力無抵抗な年少者に対して、無駄飯日数の短縮をはかるため、苛酷な調教を加えたのは、当然であ

るが、一方、芸に対し無慾な年少者を訓練するためには必要であり、他に方法がなかったともいえる。

外国では芸人志望者がかなりあり、世襲とあわせて資源は厚い。それは芸人の生活が安定保証されていることを示す。日本では戦前の児童虐待防止法、戦後では児童福祉法、労働基準法などの影響で年少者の生地獄風景は消滅したが、それは日本のサーカスの滅亡でもあった。現在四組のサーカスが残っているが芸人の新人はすくない。既成芸人の子供の一部が養成されているにすぎない。それも中学卒業後養成がはじまるので上達したときに

は成熟した大人になっているので昔の少年少女曲馬団のような妙味に欠けている。

サーカスの魅力は非力な女性が常人の容易になし得ざる技を易々として演ずること、また彼女等がこの難技を習得するまで、いかなる苦労苦痛を強制されたかを想像すること、そして白い肌の、豊かな曲線の肉体の躍動にある。関西の画家故小出櫓重の随筆「めでたき風景」の中に小さなパンツからタイツにつつまれたはちきれんばかりの健やかな脚、豊かな乳房の形そのままの肉襦袢姿を賞でる文

が出てくる。多くのサーカスファンの意見も同じだろう。

☆

芸人の卵が訓練の際ムチを受けるとか、酔を飲まされるとか食事を抜かれるとかいうことが伝統的によく聞いた話だが、江崎誠致の小説「離婚時代」には同じようなことが書かれている。昭和三十三年サンデー毎日臨時号にサーカス経験ある赤線女の手記があったが、實在サーカス名とともに同様のことを書いている。前出の松浦泉三郎の著書にも年少芸人



「自転車の曲乗り」

僅かの巾の布で僅かに前をかくしている。きびしくきたえられた脚の線が美しい。

が苛酷なムチの下で訓練と危険な演技を強制されているとある。昔のサーカスでは事実このようなことがあったのか、その頃のサーカス衣装は肉体露出はすくなく、ムチ跡をかくすかに見え、半袖ブラウスの舞台衣装で客席へ番組売りに来た少女の腕を見ると非衛生的な居住環境を示すかのように南京虫の噛み跡がいったいだった。

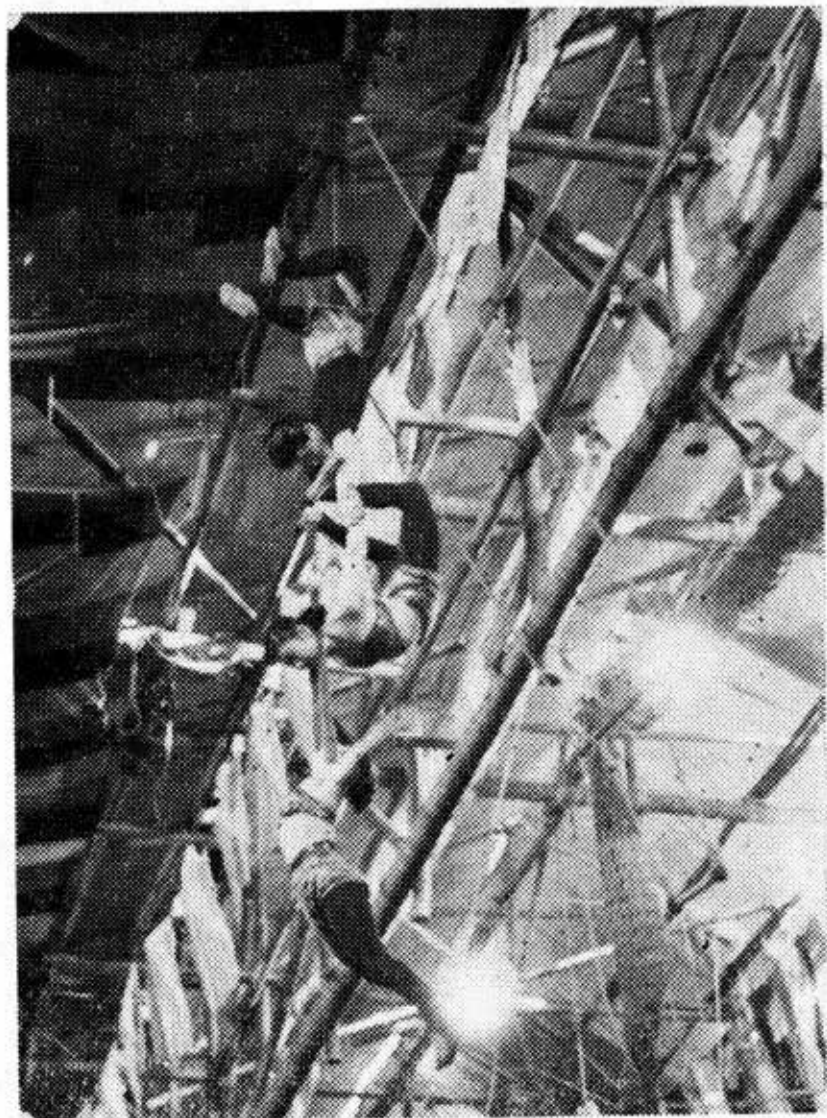
サーカス芸の基本は、バランスのとりかた高所になれることなど、精神的なものと、逆立ち、両足の左右水平開き、ブリッジ姿勢で足首を握ること、直立の竹や吊綱を両腕だけの力で登ること、足の甲でブランコからぶらさがり、自力でしかも足をのばしたままブランコに両手がとどくことなどの肉体的、技能的なものがある。そして種目によって長時間にわたって、細い針金に全体重をかける苦痛、長時間にわたってブランコにぶらさがると、さらに振れるブランコからぶら下りのため遠心力による血の逆流と、胃袋の中味のこみ上げによる苦痛になれるという生理的なものがある。

常人では高所から墜落などするとたちまちおじ気づき、二度と同じような危険に近寄らないようつとめるが、それが許されないサー

カスの世界。舞台の片すみにある青竹、一輪車、梯子、ブランコ、ムチ……。これらは新しい芸人にとっては、恐しい責め具として見えるのである。

サーカス芸人が、曲芸を身につけるまでに体験する苦労苦痛は、想像以上のものである。うが、それを卒業しても日常の演技の中に常人には耐え得ざる苦痛がいくらかでもある。空中サーカスの演技を終えて救命網に落下するとき、背中に受けるショック、針金渡の演技で全身の体重を足の裏で細い針金にかけるとき、ときにはハンカチのくわえどりで向うズネと細い針金に体重をかけるとき、寒風が天幕間を吹き抜ける冬季、小一丁の曲芸でいっぱいブランコを漕ぐとき、足芸の上乗りが凍るような水瓶に肌が触れながら逆立ちするとき、酷暑では逆綱渡りで滑降するときの摩擦熱、肩芸の台をつとめる芸人の肩に喰込む痛さと重さ、これらは観客席では理解できない苦痛のかずかずである。

女性が乳房を触られることを嫌うのは自然な姿だが、足芸の上乗りが後見の両手に乳房をおさえられて、台芸人の上にあげられたり、逆綱で滑降した芸人が、両手で乳房を抱くように受けとめられているのは、よく見ら



「人間ブランコ」

正月興業の終り近く、一月下旬の寒い日。寒風吹きすさぶ天幕内の二人の女芸人。裸電球に照らされた乳房とパンツの間の素肌が寒々として白かった。

れる光景である。上半身裸身あるいはランニングシャツ姿の男芸人と乳当だけの女芸人のカップルによるブランコ曲芸で男女の肌が触れあったり、空中サーカスの始発台に立つ女芸人のウエストやヒップを男芸人が抱いている風景もよく見られる。だから訓練中の女芸人が体のあらゆる部分を男子によって触れることは当然である。前出の小説や手記でも訓練はパンツだけの裸身であったとある。規模のあまり大きくないサーカスでは木戸口の横正面に芸人を置き、入場まえの一

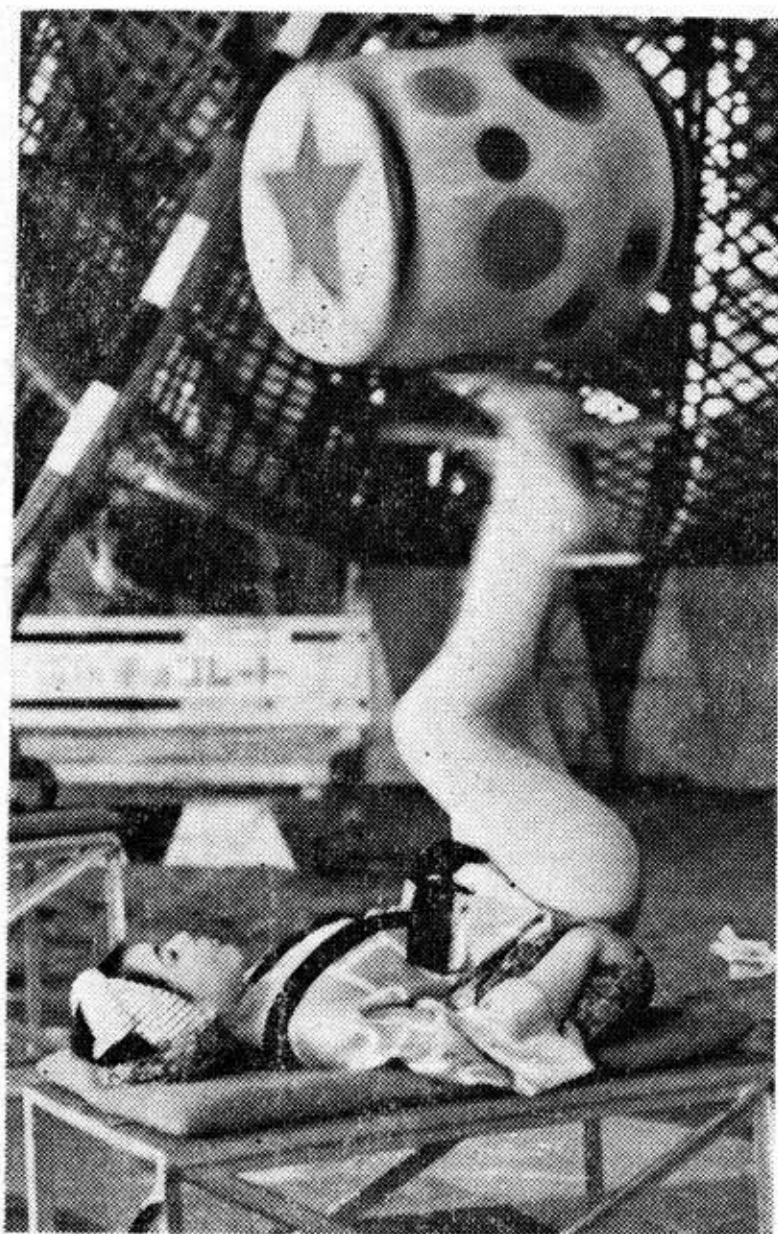
般公衆の視野に、置いておくものがよくあった。正月興行、春のお彼岸興行では厳しい寒気が街を吹くようなとき、肌を惜しげもなく見せた女芸人、薄いメリヤス肉襦袢の子供芸人が貧乏ぶるいをしながら大通りに向うつろな視線を投げていたり、衣装の着換えをしていた。カメラ雑誌にはときどきサーカスが登場するが、数年まえに針金渡の訓練を受けている少女の写真があった。傍に立つ教師の片手が少女の上衣の襟もとから深く胸部にさしこまれて、少女は半べソ顔。また別の雑

誌では双の乳首にフラッシュライトを浴びながら衣装の着付をしているところがあった。

☆

年少芸人の出演で観衆の同情を誘ったものには、十字綱、足芸、肩芸などの上乘、吊り板、人間ボールなどがあった。

十字綱は高所に交叉して張った綱の十字部で成人の芸人と年少者が上り、成人が年少者を肩の上に立たせて立ち、成人が年少者の両足首を握って後方に倒れ、落下と見せかけて十字綱を足がけでぶらさがる。年少者は足首



「太鼓回しの足芸」

尻の美しい足芸の女芸人だった。乳房の上部三分の一ばかりが見えるのが、なまめかしかった。

を握られたまま、逆吊りの姿勢で両手に持った旗を振る。この芸はそのサーカスの最年少と見られる者が可愛いセーラー服で演じていた。

足芸では後述の人間ボールのほか水瓶やタライを数箇の小桶の上に乗せて台芸人の足でささえ、水瓶やタライの中へ年少者が入っており、この上乗りは中から水瓶やタライの上に乗って直立や逆立ちをした後もとの位置に戻るもの。肩芸は台芸人の肩に六メートルばかりの青竹（先に一・五メートルばかりの梯

子が水平に取付けてある）に登り、その頂上に結びつけられたループに手や足をかけて、大の字、横大の字、逆大の字その他の芸を見せた後小梯子の先端で直立、逆立ち、爪先掛ぶら下りなどを演ずる。

吊板は、地上から五メートルばかりの小さなブランコに長さ三メートルぐらいの木板をのせ、その両側先端に各一人の芸人が立ち、一方がバランスをとり、他が曲芸を見せるもので、曲芸が年少者の芸である。板の先端はブランコの振り運動と板の中心を支点とする上下運動の混合した複雑な不安定な高所である。曲芸は直立、逆立ち、爪先さがりなどがある。

人間ボールは適当な距離において尻を向けた二人の足芸芸人の足から足へ年少者が交互に蹴り渡されるものである。

そのほか針金渡り、馬や自転車、一輪車などの曲乗りなど普通の曲芸は十才から十五才までの年少者が多く、年少者の芸といえば八才から十才程度であっただろう。

☆

大道曲芸——昭和はじめあたりで姿を消してしまっただが——に残忍なものがあつた。がんな丈な身体的中年男、あやしげな片言の日本

語をしゃべるので一応中国人としておこう。彼は顔色の悪い、やせた少女を一人連れていく。

姑娘風に前髪をたらし、よごれた緑色のシャツと黒いズボン、素足に黒い布靴をはいていた。男は茶碗、手玉、ピンポン玉などで簡単な奇術を見せ、少女は逆立、前トンボ、後トンボなどのアクロバットを見せた後、わずかに開いた両足の間の地面に銅貨を置き、後エビに体を曲げ、股間から顔を出した姿勢で、赤い舌を出して銅貨を口に拾う。このあたりまでは常人の神経で何とか見られるものであった。

その次は、かつて誰かが中国の街角で見たと本誌に書いていたが、それと同じ棒を後ろから上へまわす芸？である。男は五十センチぐらいの棒を取り出す。途端に少女の眼が恐怖の色を帯びる。少女はもう次にくる事態がわかっているのだ。男はそれにかまわず少女を中央に観衆に正対して立たせ、棒を少女の後ろから両手で握らせる。そして片足を少女の尻に、左手を肩に当てて右手で棒を少女の後ろから上方にあげる。腕が後水平まで上ると少女の口から悲鳴がもれる。いったん棒はおろされるが、また引き上げられる。そして

悲鳴、これを二、三回くりかえした後、男は掛声とともに一気に真上まで棒をあげてしまう。少女は声も出さない。逆手が垂直に頭上にある姿勢だ。目を閉じ歯をくいしばって、激痛と斗っている。閉じた両眼から涙が流れる。

男は少女のシャツをまくりあげ、ウエストから肩まで露出させる。やせた白い体が観衆の目に映る。肩骨がこじれ異常な突出となっている。男はその部分を手で叩いて子供はここがとても痛くて泣いている。かわいそうだと思ったら金をめぐんでくれといって懇願しはじめる。いくらかの金が投げられる。男はひろいあつめて、これでは今晚の宿賃に足りないという。観衆の中に「あれはずんぶんいたいだろう」「かわいそうに」「ひどいことをするもんだ」という声が交わされる。

少女は直立のまま微動だにしない。小さな胸にピンク色の乳首が鮮やかでよごれたシャツと対照的だ。またいくらかの銅貨が投げられる。男はもうこれ以上のもらいがないと見切りをつけると少女の棒をおろす。棒が手からはなれても少女はしばらく動かない。男が少女の後頭部をひとつ叩くと、やがて力なく歩きはじめ、よごれたシャツのすそで顔をふ

き、地面にちらばった道具をあつめて男に連れられ観衆の環をくぐって、どこかへ消え去ってしまう。観衆からも安堵のようなためいきが出る。

昔の中国には、このような残忍なことがよくあったらしく、美少女の瞳孔に針を差して盲女としたり、全部の生き歯を抜いて高度の性技を訓練して客に供したり、方一尺の箱の中で養育するなどの方法で人工的に不具者を作ったとか伝えられるが、年少曲芸人の養成訓練も彼ら独特の残酷な方法が使われたらしい。なにしろ素材の供給資源が豊富でわずかの歩どまりでも奇抜なものができれば、あとは犠牲になっても全然惜しくはなかったのだから不具者や曲芸人として完成させられる当人もあわれなものだが、そのかげに失敗作として消え去った者もあわれである。中国風大道曲芸は一種の残忍シヨウである。

ヨーロッパにも大道曲芸があったことは、「君よ知るや南の国」のほか、名画として軽業師という題名のものがあり、これも屈強な男の前で青い肉襦袢姿のやせた少年が玉乗り芸の訓練を受けている図である。少年はまだ未熟らしく、上体をわずかに曲げて不安定な様子がよく描かれている。



「グラマーの象使い」

薄物のズボンをとおして水蜜桃のような足が見える。すかして見えるズロースが白くて清潔だ。この世界の厳しさと汚れを知らぬ美人。

☆

サーカス芸人の居住環境については文献にはみつからない。実態も掴めない。彼等の寮居は民宿と小屋泊の場合とあり小屋泊は別棟の小屋を使う場合と客席や舞台下に板張を設け、畳表を敷いただけのものもある。外国のようにワゴンを使用するものは見当らない。食生活については機織女工のそれは記録にあるが、彼等については不明だ。しかし女工たちに較べ著しく高水準のものが供給されていたとは考えがたい。昔のサーカスの年少者

にはがりやせが多かったが一応年期を経た芸人に肥満者が多かったことを見ると著しく不良でもなかったようだ。

性生活については一層不明である。この種の興行が地方の顔役の権限に密接な関係をもつ以上、彼女らの肉体が利用される機会が多かったであろう。はげしい肉体訓練でええられた彼女等は、その種の目的に使用された場合、相手に充分な満足を与えたであろう。団内において幹部団員や男子芸人の嗜好に供せられたことは松浦弥三郎の著書にも明記さ

れている。つまり彼女らは幼少時には危険と苦痛の責苦を、長じては性の餌食として苦役の連続という運命から逃れ得なかったと見られる。

☆

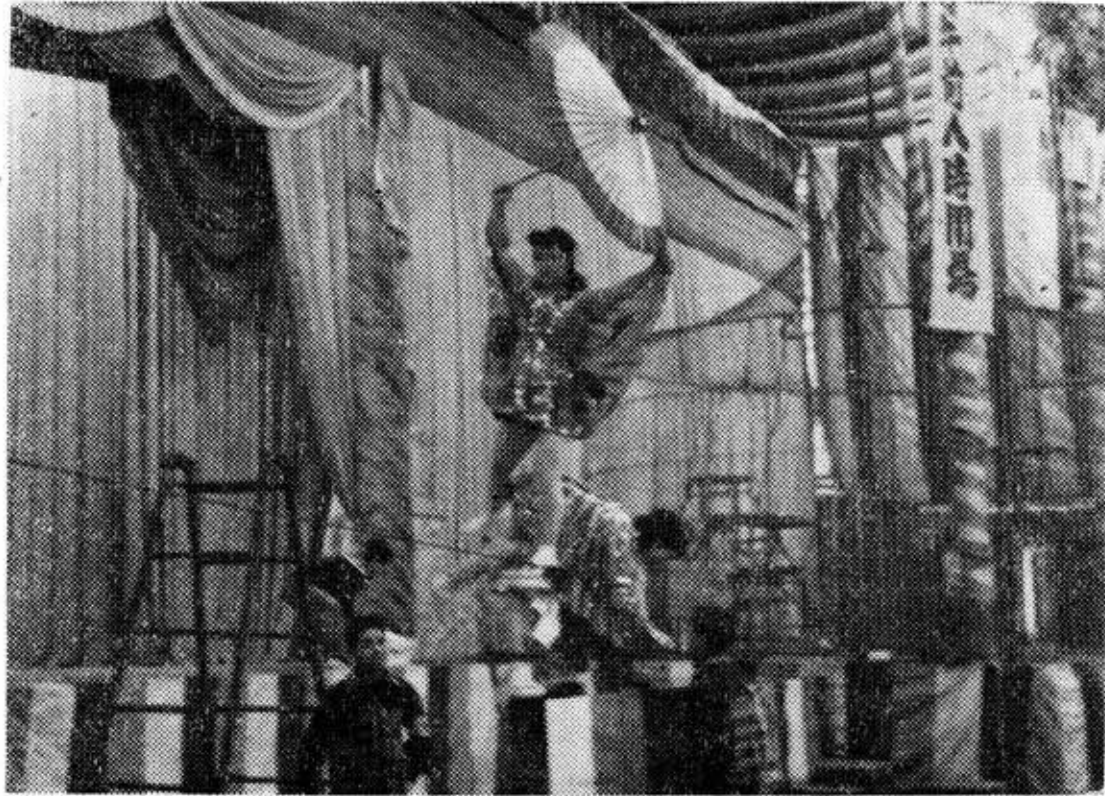
男子の芸は、力強く、女子や年少者は優しく、可憐に演技することに魅力をもつ。芸をひきたてるものとしての衣装の役割は重要である。

サーカス衣装といえば肉襦袢スタイルがおきまりのようにいわれたが、筆者が見た範囲では割合にすくない。しかし前出の故小出画伯は肉襦袢スタイルを礼讃しており、昔の雑誌の挿絵にもよく描かれていた。肉襦袢スタイルというのは、テレビのスーパーマンスタイルで、全身肌に密着した背割の薄いメリヤスシャツとタイツに小さなパンツを穿いた形で、衣装をとおして男は筋肉美を、女子は曲線と官能美をあますところなく露呈するが、年少者にこのスタイルを着せると彼等の未成熟の肉体がそのままいたいたしく見え、ひとつの魅力である。

昔、木戸口横の棧敷に坐っていた少女が乳当もなく素肌はこのスタイルをしていて、小さな乳首が平らな胸にふたつの突起となって

「針金渡り」

伏せている芸人は向う脛に喰い込む針金の痛さとたたかっている。



いたのを強烈な印象として残っている。その頃の多くの衣装はフリルの多い短スカートのワンピースや、短スカートと半袖ブラウスの

組合わせが多く、女子に短パンツを穿かせているのは珍しかった。その後大小男女を問わず短パンツに木綿タイツ姿が多くなった。

昔は他の舞台芸能でサーカスに似た衣装を纏うものがすくなかったので、サーカス衣装は独特のものであったが、戦後ショウの流行や一般素人が大胆な服装を好むようになり、体操競技、フィギュアスケート、バレエなどで官能的なスタイルがよく見られるようになり、むしろサーカス衣装が時代に取り残されるようになった。一部のサーカスでは早くからダルマ衣装や、体操ユニホームのような総タイツ肉襦袢、セパレート海水着のような乳当とパンツスタイルや、印度の女奴隷スタイルが使われるようになった。こうして肉体露出部分の多い衣装が使われるようになったため、戦後の女芸人は冬は寒い思いをさせられているともいえる。

また、戦後は衣装の材料がよくなり、タイツを穿いた芸人の足は美しくなった。あるサーカスで水芸の端役に薄紅の総タイツを着た女がいたが全身彩色の裸身を見るようであった。別のサーカスでも空中サーカスと葛の葉にこの種のスタイルを使っていた。これらの衣装は新しい繊維らしく、しわがなくてみど

とだった。また、すぐくグラマーな女芸人の針金渡を出しているサーカスがあったが、胸ぐりの大きなダルマ衣装で、針金の上に横臥する芸のとき、上手側から見ると襟もとの乳房がほとんど見えた。この頃の衣装の短パンツは、極度に小さくしてあるので、尻の大部分が薄いタイツ一枚に、つまれたままである。腰部の美しい丸味が充分鑑賞できる。

ドロップという自転車曲乗りで、バレリーナスタイル水着のような短いスカートの衣装を着た芸人が型どおりいろいろのポーズを見せたあと、最後に自転車で逆立ちを見せると真赤なブルマーを穿いており、白いアマタイツとともに強烈な色彩効果であった。

昔、針金上の足芸を売り物にしているサーカスがあった。映画「淑女とサーカス」で轟夕起子のスタンドインをしていた芸人は、流行歌の畠山みどりのようなスタイルで下駄ばきで針金上でひとさし舞った後、和風衣装を脱ぐのだが、このとき実に色気漂う脱っぷりを見せた。このように針金上で衣装を脱いだサーカスはほかにも沢山あったが、これに較べるといずれも見劣りがした。傘のあつかいもこの人は名人芸であり、サーカス芸というより寄席芸というぐらい安定していた。

空中サーカスの中台に女芸人を使っているサーカスがあった。大柄でしかも美人芸人定番組印刷物には十五才で中台をつとめたところから幼少の頃からこの世界の人のらしい。自転車のアップ、肩芸、ピーター、象使いなど一回の公演に衣装を変えて何度も出演していた芸達者であった。

このサーカスで大振のブランコ上で頭立ちを見せる男芸人がいた。これも名人芸であった。最近別のサーカスでこれを見せていた。そのサーカスには数人の女芸人がいたが、も

っとも沢山の種類の芸を見せたのが十六、七才ぐらいの最年少の娘だった。一輪車、二人ブランコ、ピーター、ブランコのついた二輪車綱渡りでブランコ乗り、象使い、空中サーカスその他を次から次へとやってのけた。黒いアミタイツの似合う芸人だった。

☆

昔は、大一丁という大きいブランコで手放して立ったまま前後、左右に振ったり、針金渡りでチェーンつき高いサドルの一輪車を乗ったり、三段の人間ピラミット、尻に頭をつ

けて両ひざの間から顔を見せ、その丸くなった体を舞台の端から端までころがったアクロバット娘、馬術二頭五人乗りなど高度の技術を必要とする至芸がよく見られたが、いま、残っているサーカスには見られない。これらのサーカスもいずれかは解散してしまうのだろう。

そして、こんな話はそれこそ昔ばなしとなり、そのうち誰も思い出さなくなってしまうのだろう。

「最新版」 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13寸) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛(山原)
K 2	恍惚たる責の境地(山原)
K 3	苦悶の表情海老責(大塚)
K 4	海老責にあえぐ女(大塚)
K 5	全裸のぐるぐる巻(玉田)

K 6	豊満な臀部を晒す(刑部)
K 7	厳しき縛りに酔う(山原)
K 8	荒縄で仕置される(美木)
K 9	土壇に観念した女(美木)
K 10	ムチ打たれる女囚(美木)
K 11	縛り人形を眺める(山原)
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ(山原)
K 13	足首と首を連繫す(大塚)
K 14	後手の複雑な縛り(玉田)
K 15	裸縛りに恥らう女(山原)
K 16	夫にされる鼻責め(増田)
K 17	緊縛にあう若妻姿(増田)
K 18	猿轡で鼻を虐める(増田)

K 19	開股縛にあう女囚(美木)
K 20	罪状を訊かれる女(美木)
K 21	股間縛りの全裸像(山原)
K 22	荷造り縛りで晒す(玉田)
K 23	革拘束衣で括らる(大塚)
K 24	庭木に立縛りなる(木村)
K 25	柱に晒される裸身(玉田)
K 26	セーラー服しぼり(大塚)
K 27	高手小手首縄緊縛(山原)
K 28	黒輝豊満刺青縛り(山原)
K 29	踏みにじられた女(山原)
K 30	古墳にて吊り準備(木村)
K 31	拷問にあう裸女賊(山原)
K 32	ロープブラジャー(山原)
K 33	厳重な後手縛猿轡(刑部)
K 34	エビ縛りにあう女(木村)

K 35	イルリのある風景(大塚)
K 36	麗しき裸身を晒す(大塚)
K 37	亀甲縛り正面裸像(刑部)
K 38	豊満乳房縛り上げ(山原)
K 39	全裸を投げだして(山原)
K 40	縛しめに哭く乙女(木村)
K 41	エビ責め放置十分(木村)
K 42	豊かな全裸を緊縛(玉田)
K 43	観念アグラ縛り図(玉田)
K 44	笑顔を縛る強烈さ(刑部)
K 45	猿轡の下にあえぐ(刑部)
K 46	縛りに典子の素顔(刑部)
K 47	伸びやかな裸縛り(刑部)
K 48	エビ縛り刺青姐御(山原)
K 49	立木より逆さ吊り(木村)
K 50	裸身の緊縛と羞恥(玉田)

浣腸秘話

「山の湯にて」



川崎進一

下諏訪から和田峠をこえる国鉄バスは、国鉄一四二号線——といっても殆んどが砂利道で、対面する車は、必ずどちらかが路肩一杯によって、譲り合わねばならない悪路だ——を、時速三十キロの、のろのろ運転で、丸子町まで二時間二十分かって走る。霧ヶ峯を右に、美ヶ原を左に見る夏のシーズンにもか

かわらず客もまばらな赤字路線だ。終点丸子町で、霊泉寺温泉行きは乗り換えとなる。連絡の悪いバスを待ちながら、不図みると、バス停の脇にひなびた薬屋がある。徒然なるままに店先をみるとはなしにながめる。私はそれが好きだ。お目当ては勿論、言うまでもない。でも眼につくのは、店頭所

狭しと並んでいるビタミン類ばかり、大概軽便浣腸の類は奥の戸棚の下の方で、眼につく事は殆どない。たまに脇の戸棚に、グリセリンの五〇〇瓦ビンが、クレゾールやアンモニア水などと共に並んでいる位のもの。一方器具戸棚には、哺乳ビンや体温計メスシリンドーの類で、せいぜい注射器、浣腸器と印刷或いはゴム印を押した箱にお目にかかることは少い。まして、イルリガートル、エネマシリンジを置いてある所は少い。

さて、その店も御多分にもれずだ。と、今山から下りて来たのだろう、程よく陽焼けした二人連れの若き女性、大学生と思しき健康そうな二人が、さして大きくも重そうにもないリュックをゆすり上げつつ、何か二人で相談していたが、一人が他方を押すようにしてその薬屋に入って行った。何かためらいが感ぜられるようで、不図興味にかられた私は、斜めの位置から二人を観察した。店の中やりとりは距離があつてよく聞えない。

頭のはげかかった店の親爺が、かがみこんだと思ったら、やがてショーケースの上に取り出したのは——それは十米の距離からは私にはよく分った、まぎれもないイチジクの葉の小箱が二つ、親爺が何か言っている。恐ら

く、「便意があっても、一寸我慢して」とか何とか言っているのだろう。一人の女性が、あたりを覗くようにそっと見廻す。視線が合点そうになって、あわてて私は半身になって眼をそらした。

出て来た女性はとみれば、何れも年の頃二十一か、二、身長も一六四、五センチはあろう、片方は面長、一方は丸顔、どちらも小麦色に陽焼けして健康そう。それはもう女になった乳のふくらみと、豊かな腰の線にうかがわれる。

来たのは築地原行き、続いては上田行、何れも見送るのは、どうした事だろう。若しやと思ったのが、次の霊泉寺行きに共に乗車する現実となつてあらわれたのである。車掌に注意していると、まぎれもなく

「霊泉寺温泉二枚」

ときた。我と我が耳を疑うとは、この事だろうか。県道は、さっきの国道よりまだひどい。千曲ガタバスは、砂ほこりをまき上げつつ、千曲川の支流にそって、あえぎあえぎ上ること四十分、山狭いに静かにひそむ内村温泉郷の一なる霊泉寺温泉に着く。

和泉屋、中屋なるたった二軒の温泉旅館、それに雑貨食料品何でもござれのよろず屋が

一軒あるばかり、パチンコも射的も、ましておさわりバーもヌードスタジオもない、ほんに鄙びた山の湯である。

私はここがすきだ。陽ぐらしと、赤とんぼの乱舞する、そして聞えるのは小川のせせらぎと、山を渡る風の音、ただそれだけの静けさを愛するが故に、信州路を旅する時は再度訪れたことのある霊泉寺温泉なのだ。

我が常宿の和泉屋に入ること念じ、敢えて先にやりすごしたのも知ってか知らずか、恐らく交通公社かなんかで日程を決めていたのだろう、一寸あたりを見廻していたが、すぐ眼につく看板を、「ここだここだ」とばかり躊躇なく和泉屋の玄関に入つてゆく。

予約客は早い、すぐ女中に導かれて左手の階段から二階へ。フリの客である私は、一応帳場をのぞいて、型ばかりのロビーで部屋の交渉だ。

「しばらくでした。よく来て下さいました。さ、どうぞ」

両三度ともなれば女将も愛想がいい。「お部屋、半分位ふさがってますけど、どこに致しましょうか」

勝手知ってるだけに、私は二十番台の部屋を希望した。何故かって、さっきの女性が左

手の階段をいったとすれば、中庭をはさんでの右手からの部屋ならば、向い合うこととなるからだ。

「じゃ、二十五番に御案内して」

大浴場は一つしかない。昨年改築して、総タイル、総ガラスの、頗る近代的な形式は整えたものの、山の湯の常として混浴なのだ。幅五米、長さ二十米はある大浴場は、一寸熱海伊東クラスだ。

鹿教湯、大塩温泉と共に、昔は湯治湯であつただけに温度は四十度そこそこ低い。ゆつくりとつかつて、心から温るという所、私は深々と湯舟にひたつた。ただ一人、丁度夕刻の食事時間に着いたためか、同宿者は今や食事の真最中とみえて入湯者は誰もいない。私は、静かに抜手をきつてみた。軽く四かき五かき、適度な湯に乗ってスイと向う側へつく。今度は少し荒くクロールで湯しぶきをあげてみる。実に快い。

と、脱衣場からの扉がギイッとなった。ふりむくと、お、さっきバスを共にした若い女性の中の一人が顔だけをつき出した。瞬間「あらッ」

と、小声をあげて、サッと引こんだ。明瞭にとまどつたのだろう。しばらく間があつ

て、又再び扉が少しあいて、今度はもう一人の女性が同じように顔を出して、すぐ引き込んだ。余程、声をかけてやろうか、或いは、上ってやろうかとも思ったが、まだ顔も洗っていない私は、やっと落ちついた今、上るのもいまいしかった。ままよとばかり、湯舟のはしに身を沈めていると、決心したのだらう。二人は相ついで扉をあけて入ってきた。

私はあえて平静を装って、顔は前方をむいたまま、しかし、眼玉はかつて学生時代の試験の時の如く、極端に左によっていたのは否めない。実に巧みに、驚く程巧みに、タオルで前を覆い、しかも斜めにタイルの上をすべるように歩く彼女達、本能的に各々前をかくす術は驚歎に値する。そして、湯舟のふちに來るや、くると背をむけて、湯をあびる、前こそ全く見えねど、真白なうなじから背くびれた細腰、そして、大きくふくらんだ臀部が見えるだけでも楽しい。

すべるように、身を湯舟に沈めるあざやかさ。あとは二つの首だけが、この大きなプールの如き浴槽の向うの端に並ぶのだった。私と全く対象の位置に。

私は間もなく、体を洗いに出了。続いて彼女達も洗場に出た。私の観察眼は相変らず、

顔を向けず眼だけが彼女等を追う。一人は完全に、こちらに背を向けているが、もう一人は、こちらに半身といった所、斜めに見える乳房も、まだ幼さが残っているように、かたい。でも、そのほのかなる隆起は、やはり新鮮な果実を感じさせる。

湯舟から湯をくみ上げる時、瞬間、体がこっちをむく。左足を折りまげて、その上に腰を下し、右膝を立てて、それをぐっと左太股の方にかぶせるように固くよせた仕草で、前大切な所は完全に覆いつくすその仕草は、正に美事な防備態勢としかいえない。

一足先に湯舟につかった私は、やや斜め下方から彼女らの見事に防護された一挙手一投足を、飽くことなくながめつつ、山の湯の触感を楽しんだことであつた。

そそくさと彼女等は先に上った。後を見せて体をふく時の、腰から太股、踝にかけての線が美しく湯気のかなたに一きわ白く浮んでいた。私の左によつた眼は、あくことなく、お尻の割れ目の線を追っていた。

○

一杯やった食事の終る頃、宴会を終えたあちこちの部屋からの客が、三三五五、浴場への廊下をにぎわす。これでは、さっきの女性

も、容易に風呂へは入れまい。そうだ、私はある事を予想して、ロビーに下りていった。

丁度ロビーのテレビは、巨人サンケイ戦を写し出していた。サンケイの繰り出す三投手は乱打をあげ、宮田が出るまでもなく、城之内の完投で、終盤に近かつた。と、そこへ、件の女性の一人が、丸顔の方が、少し長すぎる浴衣の裾を気にしながらカウンターに歩みよってきた。番頭と一言、二言、番頭は釣り銭と共に——たしかに百円札に対する五十円と分る——鍵を渡したらしい。家族風呂の規定である。昨夏、家内と入ったことのある家族風呂、それがどんな構造で、どんな位置にあるか、私は熟知していた。

それとなく席を立った私は、散歩にでも出るが如く下駄をつっかけたのである。家族風呂は大浴場と違って、旧館の最も北東のはずれにある。私は人目を避けつつ裏へまわる。夏とはいえ、ここ信州の夜は、ひんやりとして涼しい。後は急傾斜の山肌がせまり、絶対に人のこない家族風呂の外側に、私は身をひそめた。

今迄真暗だった家族風呂にパッと蛍光灯の灯がついた。すりガラスの窓は、一番上の回転窓が斜め半開きになるだけ、あとは開かな

いようになっているのは承知の上、従って上から以外、内の様子は見る術もない。ただ、必ずしも立てつけのよくない旧館の家族風呂故ガラスの固定した窓にも、僅かな隙間のあるのは当然である。外は真暗、内は蛍光灯となれば、あとは想像がつこうというもの。

静かに私は内をうかがう。上からは危険、又、回転窓も開いていない。隙間は二カ所あった。しかし一カ所は、右隅で、僅かに壁が見えるだけ、中央部の隙間から、やっと、浴槽。それは二人が入れるだけの小さなものだが、その中央部と、洗場の中央にひかれたスポンジマットの中央部だけが見られた。

予想通り、二人が扉をあけて入ってきた。

「いやあね、混浴だなんて——」

「でも、一寸スリルがあるわね」

「私はいやよ、落ちつけなくて、ああ、よかった、これでせいせいするわ」

二人は前を洗うこともなく、ザブンと音を立ててとびこむ。隙間を通して、私の目の前に二つのパーマネットがあった。

「一寸狭いわね、二人じゃ」

「気楽でいいわよ、何したって、ここじゃ大丈夫、やれやれってとこね」

「ね、又、あれやってみない」

「ウフ、いやあね」

一つの頭がスイと向う側にすべった。一方の後頭、それが一寸のけぞる。二つの頭が私の視線の一线に近よって、

「ああ、へんな味」

「いやよ、へんだなんて、私、おいしかったわ」

「でも、男の人って、どんな味かしら」

「分らない、でも、きっと素晴らしいんでしょう」

「何だか、男の人となんて、不潔なような気もするわね」

「そんなことないわよ」

「あら、知ってるの？」

「馬鹿おっしゃい、愛よ、愛情があればってことよ」

「愛か、おお、いとしの人よってわけね」

「平凡だけど……」

天真爛漫な女同志の接吻が、行われたらしい。よくは見えねど、眼のあたりの会話を耳にして、私は全身がむずがゆくなるのを避けられなかった。

「あなた、もってきたでしょうね」

「モチよ、忘れてなるもんですか」

「でも、京子、勇敢ね、あれ買うの、私いや

だわ、アンネなんか平気なんだけど、イチジクだけは買う時、抵抗を感じちゃうな」

「へっちゃらよ、向うだって商売だもの」

「だって、何か、お尻をジロジロ見られてるみたいだもの」

「へえ、あんた、案外純情ね」

「そうよ、こう見えても処女ですものね」

「処女か、処女性って、そんなに尊いものかしらね」

「尊いと思うな、稀少価値ってものよ、愛する我が夫に捧ぐ、我が最初にして、すべてのものを、ウフフ」

「ロマンティスト、万歳」

「何いってんの、ああ、又お腹がはってきたわ、もういやだ。どうして、こう便秘するのかしら」

「便秘なんて、お下劣な表現しないでよ」

「じゃ何んていうの」

「お通じがございません、ていうのよ」

「何よ、同じことじゃない」

「上品でしょ、お通じっていった方が」

一人がザツと音を立てて上った。ついと左手に消えて私の視線から離れる。

「こうやって、ええーと、添付してある針にて、先端の両側に穴をあけると」

「大きな声出さないでよ」

「誰もいやしないわよ、ここ」

「壁に耳ありっていうわよ」

外に人ありとは、知る由もないのだが。

「さ、上って、横になるのよ」

「ああ、とうとう」

「何がとうとうよ、早くしてもらいたいくせに。さ、いいわよ、何んでしたっけ、これ、

さ、言うの、大きな声で、ハイ」

「いやね、どうしても言わせるの」

「そうよ、これは何、何ですか」

「イチジク」

「声が小さい、もう一度」

「イチジク」

「イチジクでは分らない、果物ですか」

「いやーん、イチジク浣腸」

「そうですね、イチジク浣腸です。あなたは

イチジク浣腸をしてもらいたいですか」

「はい、してもらいたいです」

「もっと大きな声で。京子さん、私にイチジク

浣腸をして下さい。はい、復唱して」

「いや、カンチョウって言葉に、ものすごく

抵抗を感じるのよ」

「浣腸コンプレックスね。よし、今夜は、そのコンプレックスを、取りのぞいてあげる。さ

あ、あたしの言う通り言うのよ。いいこと。

浣腸、それは神の与え給うた、喜びの泉でござ

います。ハイ」

「浣腸、それは神の与え給うた——」

「声が小さい、喜びの泉です」

「喜びの泉です」

「そう、私は京子様によって、浣腸の果実の甘さを知らされました」

「私は京子様によって、えーと、果実の」

「ちがう、ちがう、浣腸の」

「浣腸の、いやーん、浣腸、浣腸っていわせないでよ、その度毎に、カッカしてくるわ」

「いいの、浣腸の浣腸による浣腸のための」

「何よ、それ」

「人民の人民による、人民の為の政府」

「あああ、アメリカンデモクラシーか」

「浣腸デモクラシー」

「何だかわけが分らない、兎に角もう降参」

「よし、では、お浣腸致しましょうね。イヤ

イヤしてはいけませんよ。さ、一寸の我慢で

すのよ、ハイ、足をあげて」

「いやーん、足なんかあげるの、横向きにし

てよ」

「いけません、言うことを聞いて」

残念ながら隙間からはマットの上の彼女の

お腹しか見えない。乳房も下腹部も視界の外

にあった。お腹の凹み、おへそのあたりが、

湯気にかすかに黒ずんで見えるのみ。

「はい、お口をアーンと大きくあけて、お腹

の力をぬいて。そうそう、お尻に、ワセリン

がないから、石鹸をぬりましょうね」

「あ、くすぐりたい」

「そう、ビクビクするんじゃないの、ホラ、

イチジク浣腸、かわいいなと、どう」

「あ」

「つづいて、もう一本しましょうね。あら、いけない、穴をあけてなかった」

「あ、きいてきたわ、もういいわ。一つだけ

にして」

「いけません、もう一本するんです。ハイ、

二本目、すぐすみませすよ、我慢して」

「ウア、もう出るわ、あっ」

「駄目ですよ、我慢しましょうね、我慢する

んですよ、ハイ、タオルで押さえてあげまし

ょうね」

「ああ、もう駄目、タオルとって、もれそう

よ。よごれるわ、ね、とって、お願い」

「いいの、そんなこと心配しないで。お洗濯

すればいいんです。我慢して、我慢して、ハ

イ、押さえてあげますよ」

「ウ、苦しい、お腹が、お腹が痛い」

「そお、浣腸したんですから、当り前です。」

お葉がきいてきたんですから、我慢しましうね。我慢しないと、あとで、もう一回、浣腸しますよ」

「うそ、もうないくせに。いやよ、あつ、洩れる、洩れるわ、よごれるわ」

「いいんです。さ、洩れてしまいうまで、我慢しま、あ、本当に洩れてきた」

「あ、もう駄目。行かせて、トイレに行かせて、早くう」

「トイレなんかないわよ。あんた、ここはお風呂の中よ、トイレに裸で行くの」

「あつ、どうしたらいいの、どうしたら、あつ、苦しい、もう」

「いいのよ、このまましなさい」

「だって、だって羞ずかしい、もう、いや」

「羞ずかしがらなくともいいんです。お浣腸したんですから当り前です。さ、許してあげましようね。見ててあげますから、ハイ、みんな出してしまいましようね」

「いや、見てちゃいや、向うむいてて」

「いけません、見えます。ハイ」

「あつ、我慢できない、いや、見ちゃ、いやあつ、出てしまふ、出てしまふわ、いや」

「いいの、さ、お腹もんであげましようね」

「あつ、いい気持」

「よくこんな我慢してましたね。浣腸しなかつたら大変でしたよ。いい子でしたね、よく我慢しました、えらい、えらい」

「ウフン、くさいわ、くさいでしょう」

「いいえ、ちっとも」

「窓あけて、くさいわ」

「窓なんかあかないわよ。あ、回転窓ね」

ボタンと、上の回転窓が半開きになる。私はあわてて首をすくめるのだった。

「もう、いいわ、でも、どうするの、こんなとこにしちゃって」

「御心配なく、お湯で流してしまふから」

ザザーッ、ザザーッと、湯舟からくみ出すのだろう。一しきり水を流す音がづく。

「どう、すっきりした？」

「え、有難う、ホッとしたわ。流れた？」

「流れたわよ、全部谷川へ。ウフフ、音も香もすべて谷間へ消えにけりってわけ」

「何んだか、こんなことして、いいの？」

「いいってことよ、きれいさっぱり、お湯は豊富、ついでお尻洗ったげようか」

「もう結構、京子にあっちゃかなわなわい」
「浣腸って楽しいな、わくわくしちゃう」

「ほんとね」

「おや、分ってきたの、浣腸の味が」

「いや、分ったなんて、だって、子供の時から——」

「待ってました、それが聞きたかったのよ。ね、お話して」

「いやーん、恥ずかしくって」

「駄目、もう言い出しっぱだから、どうしても聞いてやるぞう。ね、いいでしょ、それが聞きたいのよ。ね、何時？ はじめて浣腸されたの何時。何才、イチジク、グリセリン、黙ってちゃいやよ、ね、ねえーってば」

「そう、ポンポン言わないでよ。思い出してんだから」

「そう、上りましよう。そして寝物語りに、浣腸秘話でも聞くことにしましよう」

「いやだー、寝物語りだなんて」

「兎に角上りましようよ。のぼせちゃう、五十円の家風風呂の浣腸の一幕は、これでおしまい。あとは、お蒲団の中のお楽しみと」

私はちっともお楽しみではない。成程この一幕は終って、蛍光灯の灯は消えた。真暗闇の中に立ち上った私は、とても聞く事の出来ない、浣腸秘話に、大いなる羨望を感じつつ独り歩をめぐらしたのである。

「花と蛇」私論

— 増刊号 に対して —

九 鬼 二 郎



読物としての「花と蛇」

花と蛇について、種々の評論ないしは感想が発表され、すでにこの種のものとは出尽したと思われるが、連載中と違って続巻として一冊の本が上梓されたこの機会に、あらためて私感を述べてみたい。

本書については、かつて、本誌上、千草忠夫、久我庄一、保藤久人などの諸氏が、それ

ぞれの立場から論評を加えていた。現在、私の机上にこれらの掲載誌が無いので詳細に内容をけんとうすることは出来ないが、いずれにせよ、これらの作品は論評というよりも讚美ないしは傾倒という形のものであったと記憶する。

たしかに「花と蛇」は、そういう内容を充分にもった読物であることに間違いはない。

団鬼六がどのような種類の人のペンネームか知らないが、読物作者としては相当のプロであるに違いない。文体の古さ、表現の単調さなどを超越して、ぐいぐい読者を引きずってゆく筆力は並々ならぬものがある。ただ私が、これをあえて小説と云わずに読物といったことについては、おそらく異論があるだろう。「花と蛇」は「羞恥文学」であり「ユートピア小説」の傑作であるというのが、今日までの評価の主たるものであったからだ。

もし、文章をもって綴る読物がすべて文学というジャンルに属するとするなら、「花と蛇」は文学であり「羞恥」などという、奇妙な冠詞をくつつけたところでもちとも可笑しくはない。しかし、かつて、ある評者が「花と蛇」を論じるにあたって、某外国作家の名を引っぱり出したりしたことがあるが、この文豪と団鬼六では、どこに接点があるか理解に苦しむ位、差というよりも質の違いがあった。単的に云うと「花と蛇」には、文学の文学たるゆえん、小説の小説たるゆえんであるところの、人生だとか、人間だとか、思想などというものはなにもないのである。

登場人物の心理描写らしきものはそこに散在するが、これらは云いようもなく典型的、

常識的な範チユウを出ず、試みに何人も登場する女主人公の容貌など、せいぜい山本富士子式の美人といったところで、彼女等の容姿を、ホーフツとさせるものは、なにもないのだ。

見事な「サワリ集」として

つまりここでは、静子とか小夜子などという女性については何も語られていず、ただ、単に「美人」という観念が汚され、責められているに過ぎない。その点、極めて非現実的で、この限りに於ては「ユートピア小説」と評したのも無理はないのである。ただ、しかし、人間の、いや男性のユートピアを描いたというなら、われわれはもっと、身近かにその種のを発見できる。巷間伝わる春本などは、まさにユートピアの最たるもので、しかし、われわれはこれをユートピア小説などとは呼ばない。

「花と蛇」を羞恥文学などともち上げられて迷惑しているのは、おそらく作者の団鬼六であらう。

彼にとって、この作品が文学であり、かつ小説である必要はミジンもない。登場人物が生きていようが死んでいようが、これもとるに足らないことなのだ。更に、ストーリーが

非現実的だとか、手法やら展開がマンネリなどということはどうでもいいのである。なぜならば、この作品は極論すれば、クライマックスのつなぎ合せがテーマでありモチーフなので、SMエロ場面さわり集に過ぎないからだ。だから読者も、プロットの不備、ストーリーの不自然さなどを問題とせずただ拍手喝采を贈っている。文学だとか小説などと論ずるのは云わば「ひいきの引き倒し」に過ぎないのである。

しかし、文学論の無意味なことは前述した通りだが「花と蛇」が読物として成功していることはかくれもない事実であるし、この成功の秘密について考えてみることは、この種の作品が待望されている現在、あながち無意味ではないであらう。

「花と蛇」の手法について

さて「花と蛇」の面白さはどこにあるか。

——前述した如く、この読物が、ある種の男性用ユートピア小説？ とごく似していることは多くの読者も気づいていることだろう。

この場合、ストーリーの展開などは枝葉末節に過ぎず、誌面はほとんどクライマックス・シーンの連続、さらに登場する人物は例によって例のごとく、全身これセックスというの

が通例で、言葉や行為そのものまでが型にはまった云わばお定りの読物であるが、こう数え上げてみると、この種の読物と「花と蛇」の間に如何に多くの共通点があるか判然とする。ということは、とりもなおさず、「花と蛇」の手法が、この種の読物のそれをそのまま、踏襲していることの実証で、この場合、筋、構成、さらに人物描写、会話に至るまで極めて典型的にならざるをえないのは自明の理である。だから、静子夫人と云った時代があった表現や、いい加減とも云える状況の設定などがふんだんと現れようとも、それは作者の責任ではないと云える。

男性用？ ユートピア的読物なるものがセックスを主人公とし、人物や情景などには、補助的な役割しか与えていないと同様に「花と蛇」にあっては、責めることが、主題であり、主人公なのだ。

だから読者は、美津子や桂子、京子や小夜子など、本篇の重要な登場人物が、どんな容貌で、どちらがより美しいか、あるいは誰が最もグラマラスであるか等々、さっぱり見分けがつかなくとも我慢しているのだ。ということは、読者自身「花と蛇」に対して、小説的なものより、男性用ユートピア読物を期待

していることの証左ではあるまいか。

群盲、象をなでまわす図をよそに、団鬼六は、読者の期待を充分念頭に、これでもかこれでもかと、お好み料理を披露してみせる。すなわち「花と蛇」がSMエンサイクロペディアの様相を帯びるゆえんである。

感覚に直接訴える魅力

しかも、「花と蛇」好評の原因は、それだけではない。従来のSM小説なるものが、その道のマニアでなければ理解できないスタイルと表現を用いたのに比して、この書はそれを極めて「通俗的」かつ「あけっぴろげ」に展開している。——例えば「縛り」という趣味がある。既成の作家なら「美女をひしひしと縛り上げた……」で済みである。

浣腸なる嗜好がある。この場合は「美女にそれをほどこした」で、マニアは満足する。

しかし一般の読者にとってはそれからが大変なので、縛られた美女がどのように苦悶し、無惨な光景をくりひろげるか、あるいは、浣腸をほどこされた佳人が如何に身もだえ、すすり泣き、そして羞恥にふるえるか、ということを貧弱な空想力を駆使？して想像しなければならぬ。この点「花と蛇」は親切そのもので、読者の要求を、充分に満たしてい

る。云わば、従来のSM小説が書き上げた時点が出发点であり、ここでは読者はその貧しいイメージーションを、ちっとも苦にすることはないのだ。

マニアから大衆へ——こういうはっきりした意図^{いとう}を作者が持っているかどうか、知る由もないが、この「親切」は「花と蛇」に一層の成功をもたらせたことは間違いない。——これほど非現実的な物語りは、ない筈であるが、反面、これほどなまなましく、というよりもさらになまぐさい読物はない。

しかし、迫力にあふれた読物ではあるが、これを迫真性と混同してはならない。だいたいのこの種のもは読者の感覚、官能に訴えるのが主眼であり、そのチャンネルがうまく合致すれば、理クツなどどうにもならない迫力と昂奮が生れるからだ。

SMの百科全書として

「花と蛇」を語る場合、看過することの出来ないことがある。それは、前述した「SMエンサイクロペディア」に、通じるものであるが、この作品では、従来、断片的か、あるいは部分的にしか描かれなかった、女性の生理に対する執拗なまでに追求とバクロである。

この物語りの中で、ほとんどの人物が緊縛

されて登場するが「縛り」はこの場合あくまで便宜的、補助的なもので「責め」の極点はすべて女性のみが持つ生理的な現象や、男性との相違点に集中される。勿論それが女性の羞恥を引き出す最も簡単で確実な方法であることに間違いはないが、それ以上に、徹底的に生理的な秘密が暴かれている。例えばレスビアン、花電車、妊婦—出産（やがて登場するに違いない）排尿など。

——これらの、女の生理を、有効にSMに結びつけた団鬼六とは、よほど女にコムプレックスを抱いている人物か、さもなければ尋常ならざるアルチザンに違いないのである。

エロチシズムの変型

かように、SM——というより女性羞恥責めの百科全書的な内容の故にこそ「花と蛇」はいわゆる「マニア」にも喜ばれ、一般読者にも大歓迎されているわけであるが、このモチーフが単なるサディズムであつたなら、これほど成功することはなかったにちがいない。

拙稿「走り書作品論」のなかでも、触れたが、純粋なサディズムといったものは、このような通俗的な読物の場では見当外れであつて、それは精神医学といった方向に於てのみ

語られるべきなのである。奇譚クラブの読者は、そんな頭の痛くなる主義・思想について識ろうなどとは露ほども思っていないというのが筆者の持論であるが「花と蛇」の好評は、その正当さを裏付けるものと云えよう。

——美女を責める、汚す、暴く、等々の発想は、サディズムというより、サディステイックな男性の妄想にすぎず、だからこそ、一層の普遍性を有する。これを一面から云えば、「花と蛇」のモチーフは、サディズム・マゾヒズムといったものでなく、デフォルメされたエロチシズムであるということである。

覗き趣味としての「花と蛇」

「花と蛇」成功の秘密？ は、エロティックな、SMエンサイクロペディアであり、しか

も、読者の官能に直接的に訴えかける手法を採ったということであるが、その他に見逃してはならないことがある。

——奇譚クラブの読者が、ほとんどなんのヘンテツもない、市井の常識人であることは当然のことだが、この人々は平凡であればあるほど、いわゆる「奇譚」への憧れ、欲求は人一倍に強い筈だ。ところが現実には、これらの読者はSM的な行為——生活など一瞬たりとも経験したことがないのであって、奇ク誌上に見られる夫婦プレイなどは、むしろ例外中の例外である。

読者は何もせず、何もし得ず、単に、空想（というよりは妄想に近いが）の世界のみ、愉悦を充たしているのだが、もともと非

行動的なこれらの人々にとっては、みずから美女を責める積極性などあろう筈はなく、わずかに、他人が美女を責める場面を覗き見るのが関の山である。

——そこでこの「花と蛇」であるが、俗にいう「覗き」などというアブ的なものでなく、単なる好奇心の発露としての読者の「覗き趣味」に、これほどマッチした読物はないと云えるのではないか。

たしかに「花と蛇」に於て語られている数々の行為は、行為の必然性など云々するよりも、ひそかに覗き見るためにのみ存在するといっても過言ではなからう。

結語

これらの集大成として、延々数千枚に及ぶ長篇が創り出されたわけだが、もし団鬼六が意識的に、そういう集大成を為したとすればこれはもう、恐れ入りましたと脱帽する他はない。ただ、作者が意識するしないに拘らず「花と蛇」は、読者を歓喜させ昂奮させ続けるに違いないが、老婆心ながら附言するところば、前述したようなある種のユートピア的読物のたどる運命を、この作品がたどらないで終るよう、祈りたいものである。

限定版写真集 グラビア印刷

美しき縛しめ

第四集

一〇〇円（送共）
号／美4

◎縛られた美女ばかりのフォト八十態◎

- 刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
- 鉄扇に緊縛して晒し責め (玉田美佐子)
- ブロッコ石抱き責め (木村洋子)
- 箱子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)
- 両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
- 古墳から後宇宙吊り組写真 (木村洋子)
- 両手吊りに悶える刺青女体 (山原清子)
- 逆さ吊りに揺れる女体 (木村洋子)

猿ぐつわ百態組写真集

- 革拘束典による女体拘束 (大塚啓子)
- 柱縛りの庭園羞恥晒し (玉田美佐子)
- セーラー服にて縛り上げる (大塚啓子)
- 野外に於ける緊縛組写真 (玉田・木村)
- 刺青女体の柱立縛り責め (山原清子)
- 捕獲された裸女の悶え (大塚啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
- 両足吊りの表と裏と (山原清子)

娘相撲物語

朱美と文子の願い

海野三津男

朱美と文子の願い

玉川朱美と鈴木文子は、高校は別であったが、年は同じ二十才で、二年前、Sモーターズに就職したその日から親しくなり、今ではアパートの一室を借りて仲良く暮らしていた。

性格は相当ちがっていて、朱美の方は、落ちついたじっくり型だったが、文子は、どちらかというと感情の強い外向きの性格であった。

親友というものは案外そんなもので、ちがった面を求め合うものだが、二人の場合もそうであった。

(1)

そんな二人が、女だてらに相撲を取るよう

になったのは、九月の終りの、ある肌寒い夜からのことだった。

その前日までは、一体いつまで夏が続くのかとうんざりするほど暑い日が続いていた。だが、その日の夕刻から急に冷えこみ、夜になると一層温度が下った。

残業で八時頃会社を出た二人の肌には鳥肌が立ち、アパートに帰りつく頃には、身体はすっかり冷え切っていた。夏のままの服装でいたからだった。

急いで食事の仕度をし、あたたかい味噌汁を作ってすすってみたが、なかなか身体は暖まらなかった。二人は、夕食の片付けをすま

すと、早々に蒲団を敷き、もぐりこんだ。しかし、身体はまだ暖まらなかった。その夜の冷えこみは、それほど急であった。

文子が、

「ほんとに寒いわね、今夜は。まるで冬だなあ。明日は冬ものを引っ張り出さんといかんわね……玉ちゃん、ぬくもった？」

と声をかけた。

「いいや、まだぬくもらん」

朱美が答えた。

朱美は、玉川の玉をとって、会社で「玉ちゃん」とよばれていた。

文子が、

「玉ちゃん、抱き合って寝ようか」

と言った。

朱美も

「うん、そうしよう。こっちへおいでよ」

と賛成した。

その春、いっしょに生活するようになってから、二人は別々に寝ていた。それは至極当然のことだった。二人は別に同性愛でもなかったし、部屋も広かった。

朱美の蒲団にもぐりこんだ文子は

「ワー、やっぱりぬくいねえ」

と言うと、両手を朱美の背中にまわして抱き寄せ、頬をすり寄せた。

朱美も

「文ちゃんの身体は特別ぬくいね。熱情型のせいかな」

と言って、文子の体を抱きしめた。お互いの身体が、みるみるあたたまっていった。

文子が、急にクスッと笑うと「ああ、これが男の人だったらなあ」

と、おどけた声で言った。

朱美は思わず吹きだして

「バカだなあ、文子は」



mu.

と言った。

文子はまだクスクス笑っていたが、

「そろそろ恋人がほしい年頃だもんね。でも男の友達もまだいないし……ゆっくり探すとするか。二人とも、すばらしい人を見つけようね」

と言った。

朱美は、文子の背中をつねりながら、

「ハイ、そうしましょうね」

と、おどけて答えた。

二人は顔を見合せて笑った。そしてお互いの友情を確かめ合うように再び強く抱き合っ

た。
朱美の手が文子の寝巻の帯を握り、文子の手が朱美のそれを握り返した時、朱美は、なぜか、十五夜の夜、町の公園で見た相撲を思

い出していた。

K市の十五夜相撲は、昔からの伝統であった。十五夜の夜、それぞれの町内では、学校の校庭や公園に土俵を築き、小学生から大人までが、元気よく相撲を取った。

相撲は、たいてい月の出を待って小学生から始まり、青年の部にはいる頃は、月も高くのぼり、雰囲気は最高潮に達するのだった。

その年の十五夜相撲は、その町に久しぶりの大相撲の巡業があったせいかなかなか盛んであった。

それに、その年の二人が住んでいる町内での相撲は、中学生以上は、全員、素裸にまわしという相撲本来の姿で行なわれたので、雰囲気はいやが応でも盛り上がった。

終戦後、その町内の相撲も、

長いことパンツの上から、褌を締めるという姿で行われていたが、それはどこか、だらしなさを感じさせる姿であった。その年、本来の姿で相撲を取ろうと提案したのは高校生たちであった。

朱美と文子は、夕食を終えて

公園に出かけた。ちょうど中学生たちの相撲が始まるところだった。

二人は、前年までとちがって、全員が素裸にまわしという姿でいるのに先ず目を見はった。前年のある者は白い、ある者は赤い六尺をパンツの上から締めているという、何か雑な感じの姿に比べて、それは二人の目にきりっとしたものに映った。

二人は、特に相撲が好きと言うのではなく、夕食後の散歩のようなつもりで見に来たのであったが、たくましい男たちの肉体のぶっかかり合いを、最後まで手に汗を握って見た。

朱美は、その時の、特に高校生たちのはげしい取組を思い起していた。

朱美の手に思わず力がいり、無意識のうちに文子の帯をぐいぐい引いていた。

「どうしたの玉ちゃん、そんなに強く引っぱって……」

文子の声に、朱美は我にかえった。彼女はしばらく黙っていた。

「どうしたのよ。寝ぼけてるの？」

と重ねて聞かれた時、

「いいや、何でもないの。ちょっと思い出すことがあったのよ」

と朱美は答えた。

「何をね？　どんなこと？　あんまり引っ張ったら痛いじゃないの」

文子は、げんそうに聞いた。

朱美は、何か恥かしい思いがしたので

「いいや、何でもないのよ」

と言ったが、文子は、どうして？　と、彼女の身体をゆすぶった。

「うん……あのね。……実は……」

朱美は、口ごもった。

「早く言いなさいよ。恥かしいことでも思い出したの？　でも、玉ちゃんには恋人はいないしね。何を考えてたのよ」

文子が、また朱美の身体をゆすぶった。

「うん……実はね。十五夜相撲を思い出してたのよ」

「なあんだ。それで帯を引いたの……あんた自分が、お相撲取ってるつもりだったんじゃないの？」

「いいや」



「じゃあ、どうしたのよ」

「……そうねえ、どう言うのかな。とにかく思い出してたんだな」

朱美は『ひょっとしたら、自分は男性を求めている、それであの時の相撲を思い出したらんじやないかしら』と思ったが、それは口にできなかった。

そこを、文子が救ってくれた。

「私、十五夜相撲を見た時ね、男の人ってうらやましいなあって思った。女も、あんなにできたら気持がいいだろうってね」

朱美は、そうかもしれないと思った。『そううだ、そんな気持があったって思わず文子の帯を

引っ張ったんだ。それにちがいない』と心に言いしかせた。

朱美は、それを言葉にした。

「うん。そうよ、きつと」

と文子が言った。

それが、二人が相撲を取るきっかけであった。

文子は、たいていの場合、こうと思ったらすぐ実行に移した。それでいてあまり失敗はなかった。朱美はそんな文子のあり方を羨やましいと思っていたし、惹かれてもいた。

文子は、

「そうとなったら、さっそく、お相撲取ろうよ。誰もいやしないし、お相撲取ったら、もっと暖まるよ、きつと」

と言うと、パッと蒲団をはねのけて起き上った。

「さあ、玉ちゃんも起きな！」

文子の断定的な言葉につられて、朱美も半身を起していた。

文子はその手を取って引き起すと、自分はさっさと寝巻を脱ぎ捨て、パンティ一枚になっていた。

朱美の心に、何か斗争心のようなものが衝

き上げてきていた。彼女も思い切って寝巻を脱ぎ捨てると、立ち上って身構えた。

文子が、いきなりぶつかってきた。朱美はそれを受けとめた。

二人の念頭には、もう何も無かった。

文子は、朱美の左乳に頭をつけ、右手で朱美の左腕をかかえこみ、左手で右乳の下を力いっぱい押してきた。朱美の身体は浮きかけたが、文子の左腕を外側からつかむと、ぐいとその身体を起した。

お互いのアゴが、お互いの左肩に押しつけられた恰好で、五分の体勢になった。

二人とも高校時代から水泳が好きで、就職して知り合ってから、夏になると三日おきぐらいに泳ぎにいらっているせいか、二人の肌の色は普通の女性よりずっと黒かった。それが、暗い電灯の下で更に黒く見え、真白いパンティをくつきりと浮き立たせていた。

朱美がじりじりと押して出た。文子は必死でこらえたが、朱美の右足は畳にしっかり踏まえられていたので、両足を蒲団の上に踏んばっていた文子は、ズルズルと押されてしまっていた。

文子の左足が壁際に着いた。彼女は右足も壁に押しつけて押しかえそうとしたが、朱美

は、渾身の力で文子を押してきた。

文子の身体は少しずつ浮き、その背中が壁にぴったりと着いてしまった。しかし、文子の負けん気は強かった。何とかして朱美を押ししかえそうとした。朱美が更に文子を押上げ押しつけ、もうだめだとなった時、初めて文子はあきらめた。

そうなる、文子はさっぱりしていた。

「朱美の勝ち！」

と言うと、その背中をポンとたたいた。

二人は身体を離し、顔を見合せてニコッと笑い合った。

二人の肌はすっかり汗に濡れ、それが冷たい空気に触れて、湯気になって立ちのぼっていた。

文子が

「私たちにもできるじゃない！」

と言った。

朱美も、先刻のためらいを忘れて、『そうだ、できたんだ。何も男性を羨やましがる必要はないんだ！』と思った。

「誰か見てれば別だけど、誰も居ないんだから、これから毎晩やろうよ」

と文子が提案した。

朱美は

「女だって、男と同じように、思い切って斗いたいんだよね。どっちが強いかな、文ちゃんやってみようよ」

と、賛成した。

二人だけでやる限り、朱美にも何のためらいもなかった。

二人は、まだまだ取りたかったが、仕事で疲れている上に、久しぶりに急激な運動をしたせいか、ぐったりなっていたので、その日はその一番だけでやめることにした。

汗を拭き合った二人は、裸のままいっしょに蒲団にもぐりこんだ。満足感と疲れが、二人を快よい眠りに誘いこんだ。

(2)

二人のアパートは、鉄筋の三階建てで、部屋はその三階にあった。六畳と四畳半のほか炊事場がついていたから、女二人にはぜいたくだったが、経営者が文子の親戚であった関係で、家賃は四割引にしてくれたので、そこに入ったのだった。二人にとって、それは全くありがたいことであった。

毎晩のように相撲を取るようになると、鉄筋であることはなお幸いであった。少々声を立ててもあばれても、隣りに気付かれる心配はなかった。

二人は、最初のうち、押し合い相撲だけで勝負した。

六畳の間に置いてあったタンスや鏡台を全て四畳半に移したが、とても六畳の広さでは投げ合うことはできなかったからだ。

朱美の提案で、押すか寄るかして、背中を壁に着けられた方が負けというルールを決めた。

四畳半との間がフスマで、南側は窓になっていたから、押して行く方向は当然、東側と西側の壁ということになった。

三日目の晩であった。

パンティ一枚になった二人は、部屋の中央に向き合って立った。

最初の一番は、それまでの二晩、五回に二度しか勝っていなかった文子が、猛烈に押して朱美を西側の壁に押しつけて勝った。

次の一番も、つっぱるようにしてぶつかってきた文子の勢いに朱美は体勢をとる暇がなかった。朱美は肩を突かれ、アゴを押し上げられて、アッという間に押しつけられてしまった。

次の一番は、逆に朱美が文子を突きまくって勝った。

頭をアゴの下につけられ、両手でぐいぐいと胸を押されて簡単に押しつけられてしまった文子は、よほど悔しかったのだろう、朱美が部屋の中央に戻って身構えるのを待たずいきなりどんと突いた。朱美は思わずよろめき、尻もちをついてしまった。

今度は朱美が怒った。

立ち上ると、いきなり文子の頭の毛をつかみ引き倒した。

二人は我を忘れて争った。

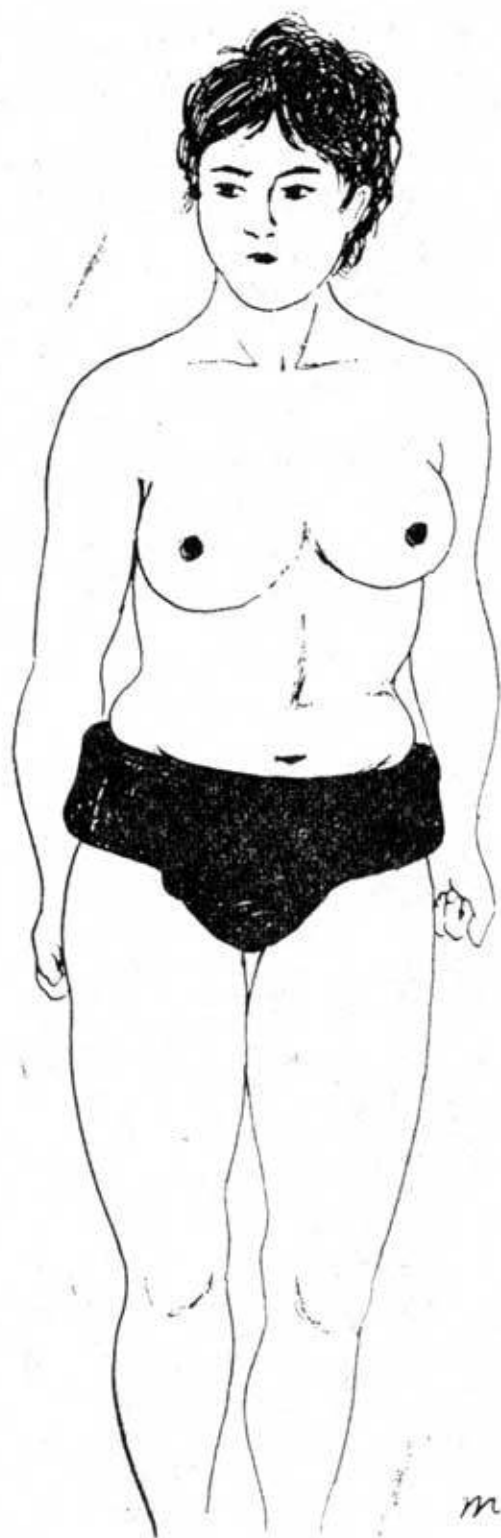
上になり下になり、汗みどろになって取っ組み合った。

しかし、お互いに足で身体を蹴り合い、身体が離れた時、二人は自分たちのやっていることに気づいて、あわてて立ち上り、どちらからともなく詫び合うのだった。さすがに親友同志であった。

二人はそこで、きちんと仕切ってから立ち上るようになりと決め、また、髪や乳をつかんだり、相手の身体を痛めるようなことは絶対にしないようになりと約束した。

二人は、休みもせず、両手をおろして仕切り、そして、がっぷりと組んだ。

はげしい取っ組み合いで肌がびっしょり濡れていたが、二人ともそんなことには構わな



かった。

はじめ、やや低く当たった体勢を利用して文子が押して出た。朱美はじりじりと押され、その足が壁についていた。しかし、がっぷり低く組んでいる場合、壁に足をつけた方がむしろ有利であった。

壁に着いた足をぐんと踏んばって、朱美が文子を部屋の中央まで押しかけた。だが、文子がぐっと身体をよじったため、向きが変わって、文子の背はフスマの方へ向いてしまっていた。

そこで朱美は、何とかして文子の身体の向きを壁の方へ変えようとしたが、お互いに腰を引き両足を大きく開いているそのままの体勢では、なかなかうまくいかなかった。

朱美は、文子の身体を引き寄せ、浮かせて

おいて向きを変え、一気に寄っていきこうとした。しかし、文子も同じことを考えていた。

二人は、ほとんど同時に相手の身体を引き寄せにかかったから、二人の胸と腹はバチツと大きな音を立ててぶつかった。

二人は、お互いに右腕で相手の左腕を巻きこみ、左手は、相手の背中をつかむようにして、自分の身体をより低く、相手をより浮かせようと揉み合った。

だが、そうになると、背のやや低い、体重のやや多い朱美の方が有利であった。

文子は、一六〇センチちょうど五一キロ五〇〇、朱美は一五七センチで、五三キロあった。

文子の身体はじりじりと浮いてきた。彼女は、アゴを相手の肩に食いこませるようにして必死でこらえたが、畳から踵が浮いてきて力が入らなかった。

文子は、両手を相手の腕と背中から離すと朱美のパンティをぎゅっとつかんでいた。それは全く無意識であった。ナイロンのパンティはたちまちよじれて、朱美の股にぎりぎりと食いこんだ。

朱美が、思わず「痛い！」と叫んだが、文子は夢中だった。朱美の力がゆるんだ瞬間、文子はその身体を逆に吊り上げ、ぐるっと向きを変えて朱美をピッタリと壁につけてしまった。

朱美は、抗議したが、文子が全く無意識にパンティをつかんだことがわかって、許してやった。

朱美が

「やっぱり、相撲って、パンティなんかじゃ無理なんだね。思い切って褌を締めてみようかしら」

と言った。

「どうせ、こうしてお相撲取っているんだから、どんな恰好だって同じね。少し恥かしいけど、誰も見てないし……」

朱美が先に言い出したので、文子はちょっとばかり驚いたが、すぐ賛成した。

朱美も、そのことを口にしてから、『女が禪なんか締めて……』という恥じらいの気持が起っていたが、生れて始めて味わった全力を振りしぼってぶつかり合う相撲の爽快さが、それを押えていた。

また、二人は、素裸で力を競い合うようになってから、お互いにいい意味で張り合う気持が生れていたから、「恥かしいから」と言えない気持もあった。

(3)

二人は、最初からまわしを締めることにした。

「さらしは痛そうだから、思い切ってまわしにしよう」という文子の提案からだった。

まわしは、いろいろ考えた末、デニムの布地を買って、自分たちで作ることにした。色は、二人の好みが一致して、紺に決めた。

締め方もわからないことから、相撲の本を買って来たが、たくましい男がまわしを締めて立つ、本の中の写真に、口にはしなかったが、二人は心のときめきを感じていた。と同時に、『これを締めるのか』と思うと、何かワクワクする気持も二人の中に湧いていた。

まわしは、ひと晩で作り上げた。

でき上ったのは、もう十時を過ぎていたが二人は、さっそく締めてみることにした。

十月も半ばになっていたが、その夜は汗ばむほど暖かった。

いざ締めようと洋服を脱ぎ、パンティ一枚になった時、二人は急にためらいを感じた。それは、当然のことだったかもしれない。

世の中にはたくさんの女性がいるが、こんなことをしているのは私たちだけじゃないかしら、本当にこれでいいのか……という気持が二人にはにわかに起っていたのだ。

『パンティ一枚になってぶつかった時には、こんなためらわなかったのに』と朱美は思った。

文子も、『裸で取っ組み合って何でもないので？』と不思議だったが、『将来、恋人になるだろう男性に、こんなことをしていたとわかったらどうしよう』と思うと、たまたまい気持になった。

朱美は、『田舎の母親が知ったら……』と、そのことが気になった。

しかし同時に、二人の中には、『文子が先に締めたらし少しシnakだ』、『朱美に先を越されたくない』という気持も強く働いてい

た。

二人は、まわしを手に握ったまま、どちらかともなく背を向け合って、そうしてしばらく立っていた。

だが二人は、どちらも、ためらう気持と、張り合う気持との矛盾を、『誰にも知られなければすむことだ』ということで解決した。

「さあ、締めるか！」

「ようし、締めるぞ！」

二人は、全く同時にそう言った。

どちらも緊張して、張りつめた声で言ったのだったが、全く同時に声を出したことが、その緊張感を一時にゆるめた。

二人は、夜おそいのも忘れて、大声で笑った。

「やっぱり親友だね」

と文子が言った。

朱美は、うなずいて、

「私から締めてもらおうか」

と言った。

文子は、大きくうなずいて、さあ、と朱美の肩に手をかけ、後ろを向かせた。

朱美は、スルスルとパンティを脱ぎ、まわしの端を乳の上に当てて左の手で握り、右手でまわしを股の間に通した。その動作には、

もう何のためらいもなかった。

お互いに、しっかりとまわしを締め終った二人の間には、再び張りつめた空気がみなぎっていた。

その緊張感のひとつは、生れて始めて股の間をぐいと締め上げた、そのきりっとした感じそのものであり、もうひとつは、ぶつかり合い揉み合い、斗うにふいわしい、お互いの

姿から来ていた。

二人は、どちらからともなくぶつかり、しっかりとまわしを握って組み合った。

その夜の暖かさと、緊張から、二人とも組む前から、その肌を汗に濡らしていたが、四つに組んだと同時に、それは玉となって流れていた。

二人は、押すことも寄ることもせず、しば

らくの間、そうしてお互いのまわしをぐいと引き合った。

始めてまわしを締めて組んだ二人にとってそれは自然な行為であったかもしれない。

まわしを引き合う度に、股がぐいと引きしまっていく、それが二人にはたまらない感じでもあった。

先に寄って出たのは文子であった。

体熱のできていなかった朱美は、思わずズルズルと押されてしまったが、足をふんばると、ぐっと寄り返した。

腰を落して四つ身になっていた二人の体勢が、吊り合う恰好になった。胸と腹がぴたりと着き、押しつけられた二人の乳の谷間を汗の玉が流れた。

まわしの感覚などを味う余裕は、もうなかった。

二人は必死になって、相手を吊ろうと揉み合った。

まわしを締めて初めての勝星は、文子が上げた。文子の方が、より深く相手のまわしをつかんでいたからであった。

吊られたまま壁に押しつけられて負けた朱美は、二度目の勝負では、最初から低く当り文子のまわしをしっかりとつかんで寄り立てて

限定版 写真集 美しき縛しめ 第七集 愈々好評!!

山原清子 妖艶緊縛 刺青の魅力を探ぐる 写真集 一部二〇〇〇円 略号 美7

全部最近撮影の力作!

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王 山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版 (思わず息をのむ凄いポーズばかり満載)

このグラビア写真集の写真を撮影するために、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフォトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フォトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げてました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしておりませんから直接発行所へお申込み願います。 **内容** 全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

勝った。

その夜、二人は時間のおそいことも忘れて何度も組み合った。

一度、文子が押して押して朱美を壁に着けたほかは、すべてまわしをつかんでの四つ相撲であった。

クタクタに疲れて蒲団にもぐりこんだ二人には、先刻の迷いやためらいは、もうすっかり無くなっていった。

(4)

二人はそれから、毎晩のようにまわしを締めては取組んだ。

ルールは、最初パンティで取組んだ時と同じように、壁に押しつけられた方が負けというものであったから、二人には急速に力がついてきた。

しかし、二人はそれだけでは満足しなくなっていた。正面から組み、押し合い寄り合う魅力はあり、力もついたが、何せ変化がなかった。

思い切ってあばれることができたらと、そればかり願うようになった。二人は、真面目に野外での相撲ができないものかと、いろいろ考えてみた。

しかし、比較的人口が緻密なそのあたりで

は、人に知られずに女が相撲を取る場所などありそうになかった。

二人は仕方なく、アパートのその部屋で、押し合い寄り合い、そして吊り合って斗うそのルールでがまんすることにした。

やがて真冬になったが、二人は相撲をやめなかった。

ガス・ストーブに暖められた部屋での相撲は、秋の時よりもずっと汗ばんだ。

二人の力は強くなり、体重もふえて、文子は五四キロになり、朱美は五五・五キロにまでなった。

職場で、二人がたくましくなったことが話題にのぼるようになったが、二人はもう、そんなことが気にならないほど相撲のとりこになっていた。

しかし、体重がそれ以上にふえることは気になっていた。押しと寄りだけでは、ますます体重がふえるだろうと、文子の提案で、相撲の前後にいろいろ、体操をしてみることにした。

また、できるだけ激しく動けばいいのではないかと、まわしを締めたまま、レスリングか柔道の寝技のような取っ組み合いもやってみた。

背中が畳についたら負けということにしたが、畳にピッタリ背中がついても、どちらも負けた、とは言わず、つい、どちらかが参るまで組み合ってしまうのだった。

二人は、お互いに相当な勝気であることに気づいて、できるだけそんな取っ組み合いはやらないことにした。

完全に我を忘れてしまうことから、若し、相手に傷をつけてしまったらいけないと話し合ったからだだった。

しかし、そうなると、ますます思い切りあばれられる本式の相撲がとりたくなるのだった。

二人にとって、まわしのあの引きしまった感じと、ぶつかり揉み合い、全力をつくして相手を押していく力相撲だけでも満足できないことはなかったが、野外の、誰も見ていないところで思い切り投げ合う相撲が、どうしてもやりたかった。

それだけが、二人の願いになっていた。

少くとも、あと三年、二十三年の年までは絶対結婚せず相撲を取りつづけよう、そして、その間に、いつかは必らずその夢を実現しよう、二人は固く誓い合うのだった。

春の花園に遊ぶ

中 河 恵 子

—小説「花と蛇」に魅せられた私—

私が奇クを手にしたのは、今から一年少し前のことです。その中で私の一番気に入ったのは、団先生の小説「花と蛇」でした。それをきっかけに、三十数冊のバックナンバーを集めました。古い号を一冊一冊と集めてゆき

ますと、またその先の号が欲しくなり、次々と買い求めて行つたのです。

「花と蛇」の中で静子夫人が川田やズベ公達の手で凌辱され、いじめられる場面に最も感激しました。そのところが読みたいばかりに

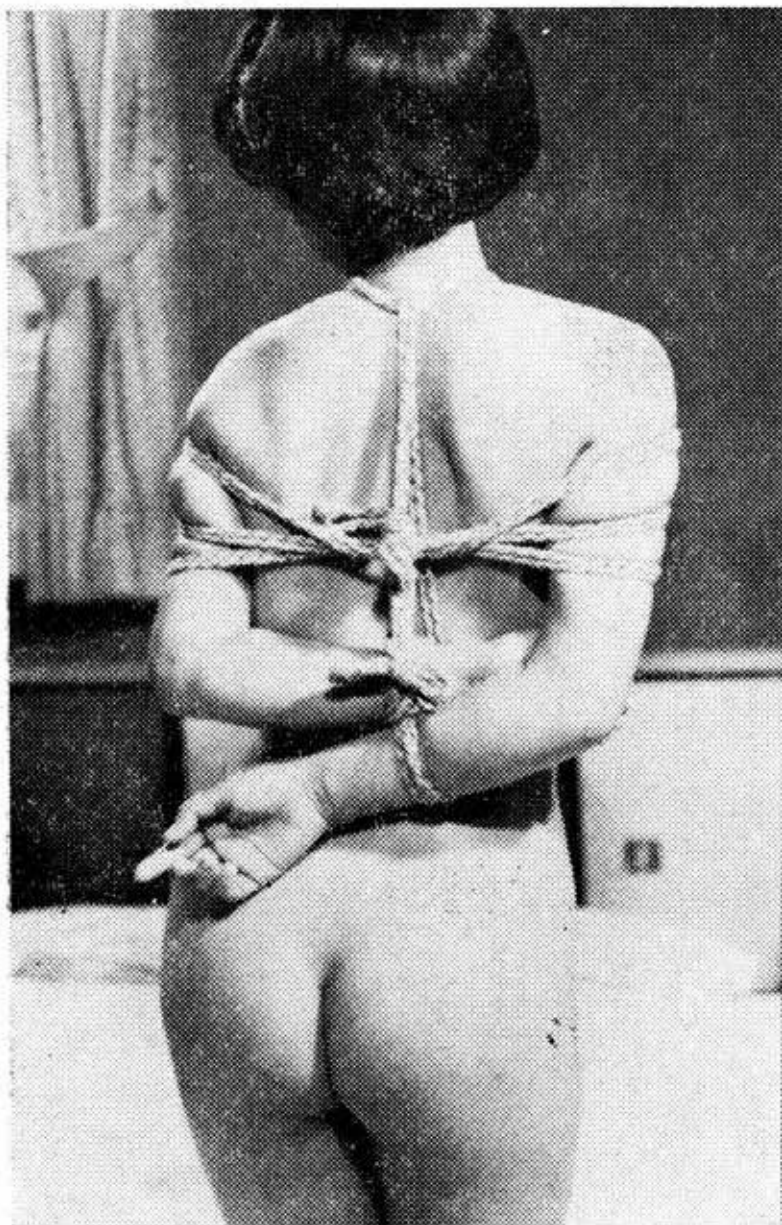
バックナンバー

を集めたようなものですが、三十九年頃の口絵のグラビア写真を見ているうちに、自分も静子夫人のようなしびれるような境地を味つてみたくなり、ひとときの心のたかぶりから、編集部へ通信を出して

しまいました。まさか、誌上に載せてもらえるなどは、夢にも思っていなかったのですが、それが一月号の通信欄に掲載されてしまい、思わぬ多数の方々から、お便りをいただき驚いてしまいました。

こんなに多くの方々が、実際においでになるということは、空想にばかり耽っていた私にとって、大きな驚きでした。中には、まだ一度もお逢いしたこともないのに、結婚してほしいとか、結婚を前提としての文通交際をしてほしいとか、気の早い方もあって、おテンバを自称している私でも、少しばかりあわててしまいました。叔母の養女になった上で結婚してもいいと、あの通信で書きましたので、私が結婚を急いでいるようにとられたのかも知れませんが、私はまだ若いし、それに第一、まだ養女になったわけではありませんので、まだまだ先のことと思います。

それよりも、今の私はあの静子夫人の立場



のようになって、縛られて身動きのできない身体を異性の前に晒す羞かしめを受けてみたいと願っています。縛りのモデルになってみたいという強い願いも、モデル募集の記事とグラビアの写真が私を誘いかけ、とうとう私に、あんな通信を書かせてしまったのです。

高校二年のとき、すでに二五〇CCのオートバイをぶっとばしていたのですから、相当なスピード狂といえますが、一度運転を誤って堤防の上でスリップして転倒したときなど膝小僧をすりむくやら足首を捻挫するやら、血だらけになりながら、少しも痛さを感じないのが不思議なくらいでした。

その頃、学校の友達数人とオートバイ三台に分乗してドライブしたことがあります。女だてらに、ハンドルを握るのは私一人でした。昼食のあとで些細なことから口喧嘩をした末、私はセーターの上から、荷台のロープで後手に括られました。丁度天皇誕生日の休日でしたので、真盛りのレンゲ草の萼の上に転がされていましたが、初めて縛られた私の経験は、うっとりとするような素晴らしいものでした。そのときは直ぐ解かれてしまったのですが、縛られても一向に平気な私を見て、友達はおテンバなので意に介していません。

ように思ったらしいです。

それ以来、私はその時のことを思い出すたびに、白い蝶々がヒラヒラと舞っている春の花園を思い浮かべるのでした。暑くもなし寒くもない快適な暖かさの中に包まれた私は、身にぴたりしたセーター、スラックスの姿で花園の中に転っているのです。甘ずっぱいむせかえるような花の匂いが、私の五体をしびれさせます。そして、そんなときの私は、いつも空想の中で縛られているのです。

春の花園。美しいレンゲの花。むせかえるような花の匂い。まるで身体が宙に浮いたような暑くも寒くもない倦怠感。眠っているのか覚めているのかわからない、恍惚とした境地は、縛られていながら、縛られているという何らの抵抗感も感じないのです。

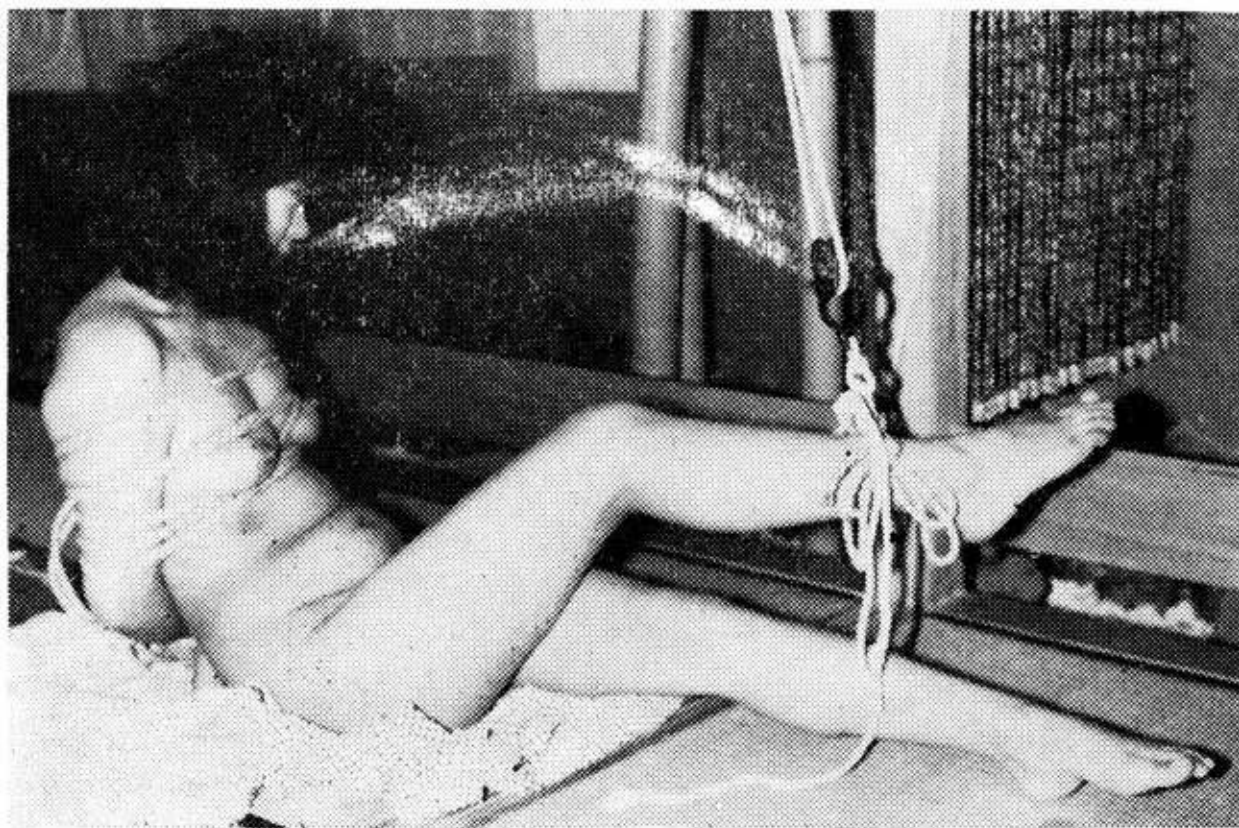
でも、あれ以来、二度とそのような経験はありませんでしたので、すべて空想に過ぎなかったのです。もし私が、縛られたとき、あの春の花園をさまよう様な恍惚境が得られるかどうか、空想の中で必死にそう願いながら縛られるという機会がなかったのです。しかし、そういう空想が度重なるうちに、いつしか、そう思い込むようになっていました。

こんな私が、偶然手にした奇巧で、「花と

蛇」を読んで思わず胸が熱くなるような昂奮を覚えたのですから、あのときの縛られた経験が、私に相当大きな影響を与えていたのでしょう。でも、最初、私が「花と蛇」を読んで何故、このように感激するのだろうか、自分でもわからなかったのです。只、高校二年のとき、お友達から冗談のように縛られたこと、と花と蛇の中に登場している女性達の多くが縛られているということを関連させて、只単に縛られているから、と解釈していたのですが、そのうち、そうばかりはないということが、薄々わかってきました。

短大に入ってからにはオートバイにも乗ってしまい、父にねだって車を買ってもらった、暇さえあれば爆音をひびかせて西に東に走りまわるのが日課になりました。西は中国、四国、九州から東は雪深い北陸路や中仙道を遡って木曽路へ。箱根熱海から伊豆縦断と悪路を混えて四万キロ近くも走ったのですから、まるでタクシー並の熱狂ぶりでした。

こんな私ですから、私の平常の表面ばかりを見ていると、あの春の花園のイメージを空想しているなどとは、夢にも思ってみないでしょう。スピード狂の活発なお嬢さん、というのが私に対する評とってよいでしょう。



「花と蛇」を愛読し、静子夫人を憧憬している乙女などと、誰が想像するでしょうか。

車を運転していないと淋しくて仕方がなかった私が、「花と蛇」を読みだしてからは、

自分の身を静子夫人に置き換えて、まるで自分が凌辱され、羞かしめられている思いで、身体中が締めつけられるような熱い気持ちになります。自動車狂も一時は花と蛇狂になっ

てしまった様な状態でした。

私は特に浣腸されるということ自体に興味を持っていませんが、静子夫人が、何にもものもさらけ出してしまうという羞かしめに会う場面は、思い出して身ぶるいがします。縛られるということも、無理じいに、恥しい姿を強要されることに関心があるのだということが、「花と蛇」を読んでわかりました。

だから、私がモデルとして採用されるとしたら、静子夫人が喘ぎ、呻めき、悶えながら演じたと同じことをやらせてほしいと思うのです。そうすれば、私の感激はきっと最高潮に達することだと思います。どんな厳しい縄目の痛さでも辛抱できます。私は大体辛抱強い方ですが、感激の昂ぶりの中では、一向に痛さは感じないと、思います。というよりは、縄目が厳しく、羞しめが激しいほど、私の感激は強いということがいえます。でも、これは私の空想の中です。ですから、もし実際に凌辱されるような場

面に出会ったとしたら、恐ろしさが先に立ってしまうかもしれません。

だから虫のよい話かもしれませんが、もし許されるならば、静子夫人に扮して、あの小説の通りの羞かしめを演じてみたいのです。そして、一糸まとわぬ全裸のすみずみまでを好色な男たちの眼にさらしたいのです。そうです。私の本当の願いは、そこにあったといえます。男たちに卑しい目で全身をじろじろと見られたいのが目的だったのです。私だったら、きっと最高の演技をしてみせる自信があります。就寝前のひととき、私の頭の中に浮んでくるのは、そういう場面ばかりです。

こんなことを考えている女なんて、本当に変わっていると思われるでしょう。だから私はどんなに親しいお友達にさえも、この気持は話したことはありません。小説を読んで、ひとり秘かに楽しい空想に耽って、自分だけのシークレットとして、胸の奥底に秘めておこう、とそう思っていました。それがモデルを志願してからは、もしかしたら、夢とばかり描いていたことが、或は実現するかもしれないという淡い希望が、次第に胸をふくらませてきたのです。それと、多くの人達からの通信が私に力づけてくれました。

ただ便りの中で、紳士的に行動するとか縛ること以外は絶対にしないことを誓いますとか、紳士であることを強調された方が多いのには、私は少し失望しました。私としては、あの悪党の川田にいたぶられる静子夫人のように、あくなき暴虐の末、この身体をなぶりものにして骨の髄までしゃぶられてみたいと空想しているのですから、ちょっと肩すかしを喰ったような感じを受けるのです。私をいじめるときは、どうか、遠慮や手加減などなさらずに、貴方の好き放題にして下さって結構です。その方が私にとっては嬉しいのですから。結婚しようなどという月並みなことは、おっしゃらずに下さい。私の若さと美しさを認めて下さった以上は、私の身体のすみずみまでを、貴方のお気のすむまでとくと鑑賞して下さいばよいのです。

どんなむごたらしい縛り方でも喜んで甘受します。ただ逃げ出さないために縛るというのではなく、私を弄り羞かしめ、或は私の肉体鑑賞をより十分にするという目的のために縄を用いてほしいのです。そういう目的のためだったら浣腸も歓迎いたします。こういうことを私に施してみたいと思うS男性の方って、おられるでしょうか。結婚という絆や、

お金という枷で私を自由にしようという人には興ざめです。あくまで、無理無体に、暴力をふるって、私の身体を滅茶滅茶にして泥足で踏みこむような魅力のある男性を私は待ち恋がれていいます。縄はそのためこそ使っていたきたいと思います。

幸いにして、私は縛りのモデルとしての経験をしました。幼い頃から、一度自分のほしいと思ったものは、両親の慈愛のもとに何に一つとして買ってもらえないことのなかった私ですが、始めてモデルになった日は、余りの押し強い自分の行動に、ひとりでおかしくて仕方がなかったのです。第一日は僅か一時間ばかりの簡単なカメラ・テストで終わりましたが、それから一ヶ月ばかり旅行していましたので、第二回目の撮影が行なわれたのは、十二月に入ってからでした。この日は、私の希望で、「花と蛇」の場面を多分にとり入れたポーズで、大いに満足しました。というより、始めての強烈な刺戟でもあり、全身が痙攣するばかりの昂奮を味わいました。かずかずの場面をこれから、次々と演ずることが出来るのかと思う



と、わくわくする程の楽しさが身体を包んできます。春の花園をさまよう様うっとりとした境地を思いのままに、味えるのかと思うと、私の空想はますます逞ましく翼をひろげて、とどまるところを知りません。

やはり私の大好きなのは、竹の棒を使った開股しぼりや、床柱を利用した立縛りです。

柱に立縛りにされて、両脚をこれ以上ひろげられない程大きく左右に縄で固定され、ドン・ドン水を飲まされて放置されたら、などと恥しいことを空想したりします。今のところはまだ、とても、そんなことを口に出して要求できる心臓は持っておりませんが、四馬孝さんの挿絵にあった、片足を高々と頭上近くまで挙げたようなポーズなどいいなあと、秘かに考えたりしております。以前、ちょっとバレエを習ったことがあり、身体は割合柔軟なので、少々極端なポーズでも縄でぎりぎりと縛って下されば出来ると思います。

年末から一月上旬にかけてはスキーに出かけますので、それから以後になりますが、少しまとめて、「花と蛇」の場面写真集のようなテーマで撮影していただきたいものだと思います。川田をはじめとした田代や森田それに吉沢などには、私にお便りを下さった方々の中から選んで出演して下さいたら、とても楽しいと思います。本当は私は静子夫人になりたいのですが、それほど容貌に自信がありませんので、京子の役でも構いません。

鬼源の役をやって下さるベテランのS男性の方がおられたら、嬉しいのですが、どなたかおられないでしょうか。次から次へと冷

酷な責めのアイデアを発想して、捕われの女を調教する魔手をふる男。考えただけでも身体がぞくぞくします。誰かベテランのアイディアマンが一人おられると、あとは見物と手助け程度でいいと思います。ズベ公役やチンピラ役など、見物の脇役は多ければ多いほど私の感激は大きいのです。只、責め手の主役はあくまで冷酷無慙なS男で、遠慮会釈のない行動力のある人がほしいです。

泣き喚めき、もがき呻めき悶える演技の方は、苛責のない責めが私の身体に加えられる限り、迫真的に演ずる自信があります。演技というよりは、私の心の中からの叫びというものになるでしょう。衆人環視の中で、そんな羞態を演ずる自分を考えると、たまらなくなります。それが無理強いによって演じさせられるところに、私にとって最高の感激場面の展開ということが出来ます。空想ばかりで実際にそんなことをされたことはありませんが、もし、実施されたとしたら、一体私はどういうことになるでしょうか。そのときの私の表情をカメラに撮ったら、きっと傑作が出来るのではないのでしょうか。カメラを向けられる、そう考えただけで、私は身ぶるいするような戦慄を覚えるのです。

たった二回の撮影をされただけの私が、こんなことを希望するのは、大変おこがましいことであるということは、よくわかります。しかし、知らないうちならともかく、ひとたび、甘美な春の花園へ一歩足を踏み入れた私が、空想の中でのみ描いていた恍惚境の一部でも、実際に経験してみたいと願うのは、無理な願いでしょうか。

ここまで書いてみて、私は自分の気持の十分の一も書いていないというもどかしさに、いらだたしい思いにさえられます。一人寝床で空想しているときは、もっともっと、いろんな事柄が雲のように湧きあがってくるのですが、いざペンを持ってみると、思いばかりが先走ってしまっていて、ペンは一向に進まず胸の中に残っているものが、大きいしこりとなってこり固まっている様です。

これからは、折を見て、自分のいつわりのない気持や私のモデルとしての体験を書いてみたいと思っております。そのためにも、私の空想をうわまわるような素晴らしい経験が私を待っていてほしいものだと思います。

〔編集部註〕

挿入しました写真は、第一回第二回撮影のときの中の一部であります。

国際秘密結社「ISSSL」

河津安春

一

ミス・エレオノーラ・パーカーのこと

私の脳裡に『ISSSL』の五文字が始めて焼きつけられたのは、いつであったか、確か一九六〇年頃、アメリカの男性雑誌『アルビオン』が、当時、米国の各界に活躍していたスーパーレディ達との対談を、特集記事として掲載した事があった。婦人政治家、女流評論家、閨秀画家、女性実業家、女子運動選手その他教育者、科学者、宗教家等々、十名余りの女性選ばれていたが、根が男性雑誌の事として、ギスギスしたオールドミスは一人も無く、何れも澁刺とした美女ばかり。談話

の内容にも、それぞれの個性が明瞭に感じられて、実に面白かったのを覚えている。

中でも有名な『アムール』化粧品会社の社長、ミス・エレオノーラ・パーカーの談話はその内容の奇矯さと、極端なまでの男性蔑視論を以て、強烈な印象を私に残したのであった。ミス・パーカーは彼女の父の死により、二十五才の弱年をもって父の跡を継いだのであるが、競走激甚なこの世界で、お嬢さん社長の御手並拝見と冷く見守るライバル会社を尻目に、着々と経営の業績を上げ、僅か二年の間にその売上高を一挙三倍に拡大し、業界をアッと仰天せしめたのである。

写真に見る彼女は、輝くばかりのプラチナ

ブロンドの髪を無難作にカットし、身には白絹のサテンドレスを纏い、足には宝石を鏤ばめた銀色の靴という、さながら妖精を思わせる純白の姿であった。数年をへた今も尚、目を閉じれば女神のような彼女の姿がアリアリと睨に浮かぶのである。更に私の興味を惹いたのは、彼女の背後に見える一枚の絵であった。

それは確か西独逸の写真週刊紙『スカラ』に、特異な現代画家として紹介されたピーター・ベックマンの作品に相異なかった。宗教画家と言う事であるが、彼の描くものは在来

の宗教画の概念では律し得ない不可思議なテーマを、太く力強い線と粗々しいタッチで表現した、むしろバーバリズムとも言うべき奇怪なものであった。裸体のヒットラーをサービス盆に載せて運ぶ食堂のボーイ、或いはガス室の受難者等、ショッキングな題材が多かったと記憶している。

ミス・パーカーの背後に見えるのは、彼の『教会の為の連作』の中の一枚で、寝台の上に座す遅い女に、鉄鎖に繋がれた男が床に跪いて何事かを哀願しているのに対し、女は冷然たる横顔を見せている図柄である。強力な黄色を主体にして、太く黒い線で描かれた男女の姿は、宗教的に如何なる寓意が含まれているかは知る由も無いが、ミス・パーカーの艶やかな純白と刺激的なコントラストを見せていた。

『アルビオン』誌は、御承知のように、黄色雑誌に毛の生えた程度の三流誌である。対談に当たった記者のトーマス・ライト氏は、この美貌で巨富に恵まれ、敏腕で嬌慢な女性に対し、絶えず強い劣等感に悩まされながら、何とか其れを打破せんとするはかない努力の一つ一つが、他愛なく押し潰されて行くさまが記事の文外に溢れて、それが又私には殊の外

面白かった。ここに繁を厭わず、その大略を紹介して見たい。

二

ミス・パーカーとトーマスの対談

トーマス「パーカーさん。貴女の会社は重役、部課長は勿論のこと、係長、主任級に至る迄、役職と言う役職は、すべて女性に依って占められているようですが、其れは本当ですか？ 若し本当ならば、その理由をお聞かせ願えませんか？」

エレオノラ「本当ですわ。御承知のように妾しの会社は、女性の為の化粧品を造っています。女性をより美しくし、その魅力を充分に発揮せしめる事が、会社の仕事の全部と言えましょう。トーマスさん。このような仕事に男性の経験やアドバイスが必要であるとお考えにならないでしょう」

トーマス「それが貴女の営業方針の基本であり、又、アムール化粧品売り上げを飛躍的に増加せしめた原因であると言うわけですね。では何故、その後も引き続いて男性社員を多数採用なさるのですか？」

エレオノラ「消費者は王様だと言われるのを御存知でしょう。妾しの会社にとっては文字通りの女王様なのです。その御気に召す

かどうか、それは会社の運命を左右する最大の要因となります。お判りでしょう、トーマスさん？ 例えば貴方の奥様、アイリン夫人は『レディズ・ジャーナル』のコラムニストとして活躍されて居ますが（筆者註、トーマスの渋い顔が目に見えるようである。ジャーナリストとして、良人よりも夫人の方が遥かに高く評価されているのである）、奥様のお喜びになるのは、どういう事でしょう」

トーマス（皮肉たっぷり）「お世辞、お洒落、お喋り、男達から讃美される事、それに良人を顎で追い使うこと」

エレオノラ「ホホホ。その通り、全くその通りですわ。それではトーマスさん。妾しの会社が多数の男性社員を採用する目的は、もうお判りですわね。彼等の智能や助言が必要なのでは御座いませぬ。彼等は単なるセールスマンとして、消費者である女王様方と優雅にお喋りをし、その美しさを賞讃し、更に魅惑を深めるための新らしい化粧品の效能を説明し、女王様のどんな気紛れな御要求にも唯々として服従し、ひたすらに、その御機嫌を取り結ぶのが最大の仕事なのです。若いハンサムな男性が、これだけの敬意と努力を払って、尚かつ売り上げが伸びなければ、却

ってそれは不思議と言うべきでしょう。そうはお思ひになりませんか」

トーマス（苦々しく）「然し貴女は男性社員諸君が、そのような女性への奴隷的奉仕、いや、そのような仕事だけに満足して働いているとお考えですか？」

エレオノーラ（微笑する）「彼等の収入は失礼ですがトーマスさん、貴方の俸給の二倍も三倍もあるのではないのでしょうか。ごく内論に見積ってのお話ですが……」

トーマス（ギャフンと参るが）「物質面では、そうかも知れませんが。だが私の言いたいのは彼等の精神面での問題です。多数の男性社員の中には、プライド特に男性としての誇りを放棄するを潔しとしない者も多いのではないかと言う事です」

エレオノーラ（昂然として）「御期待に反して誠に御気の毒ですが、数百名の男性社員の中に、只の一人も居ませんでしたわ。それに妾しは、如何なる仕事であっても、それぞれの分野において有能なる者が無能なる者を指導するのは当然であって、男性女性を問うべきでは無いと思いますの。ましてや仕事の面に男性のプライドなどと封建的な言葉を持ち出されるのには、トーマスさん、正直な所、

妾し本当にがっかり致しました。この際、はつきりと申し上げたいのは、貴方のそのような女性への偏見は、厳に是正さるべきであると言う事ですわ」

トーマス（弱々しく）「でも私には信じられないのです。何百人という男性社員の中に只の一人も反撥する者は居ないなんて——」

エレオノーラ「そんなにお疑いでしたら、トーマスさん。誰れでも結構ですから、貴方が最も頑迷で野蛮で悍猛で、手に負えないとお考えになる男性を、妾しの手許に寄越して下さい。三カ月で模範的なフェミニストに仕上げて御覧にいますわ。」

それよりもトーマスさん。貴方御自身で試して御覧になったら？アイリン夫人が心からお喜びになるような理想の良人としてお返し致しますが——」

トーマス「真っ平です。これ以上、妻を喜ばせる気持ちは毛頭ありません。だが、たった三カ月で、一体、何をすると云うのです。まさか……」

エレオノーラ「御心配なくトーマスさん。貴方が疑われるようなことは、何も致しません。只、科学的に研究されたデータと方法によって教育するだけです。」

例えば新入社員については、先ず凡ゆる面から精密なテストを行います。性格、知能、感情、理性、判断力、体力は勿論、その趣味嗜好に至る迄、完全な調査が行われます。もしそのデータを御覧になれば、貴方は舌を捲いて驚嘆されるでしょう。何故ならこのデータを見るだけで、一人の人間の姿が外貌だけでは無くその精神面までも含めて、完全に浮き彫りされて行くのですから。恐らく本人自身も気付いていない小さな長所短所まで判然と指摘されるのです。彼等は三カ月間、バハマにある妾しの別荘に送られ、この資料に基いて教育されるのです」

トーマス（自棄気味である）「シゴき上げて去勢するわけですか？」

エレオノーラ「そんな野蛮な原始的方法ではありません。資料に基いて彼等の性格の中から、会社の為に役立つと思われるものを助長し、不要のものを抹殺して行くのです」

トーマス「抽象的でよく判りませんが……」
エレオノーラ「妾しは多数の心理学者の協力をお願いして、人間の精神訓育に関する凡ゆる心理学的方法を、精密に分析綜合して妾し達の目的に適する一四六のコースを制定致しました。一般コースと特殊コースに分類さ

れますが、如何なる特異な性格を持つ男性にも適用される有効なコースが、必ず見出される筈です。トーマスさん。先刻、貴方の仰言った男性のプライドとやらを消去するコースも、勿論含まれていますわ。

尤も残念な事に、特殊コースを実施する必要に迫られる程、誇り高き男性に出逢った事はありません。まず殆んど男性は極く一般的基礎訓練だけで充分なようですわ」

トーマス（苛ら立たしげに）「もう少し、具体的に説明して頂けませんか？」

エレオノーラ「それは無理ですわ、トーマスさん。一四六のコースを一々具体的に説明するには、数カ月を要しても無理でしょう。

でも折角の御希望ですから、宜しゅう御座います。一例としてバハマに送られた新入社員達が、最初の十日間を如何に過ごすかを簡単に話致しましょう。

バハマに送られた彼等は三日間は、そのまま放任されます。勿論、優秀な女性訓練者が配置されていて、彼等の言動は詳細な記録となって残されますが……。所でトーマスさん。貴方は哲学の認識論を御存知ですか？」

トーマス（奮然と）「大学では専攻課題でした」

エレオノーラ（平気である）「そう。それじゃお判りですね。認識論は自我の発見から始まる事を。彼等新入社員は三日間放置され邸内や庭園を自由に楽しみます。これは始めに彼等が自己を認識する機会を与える為なのです。抽象的な自我ではありません。彼等を取り囲む現実社会の一員としての自己です。壮麗な建物、豪華な室内調度品、広大な手入れの行き届いた庭園、総てが彼等には驚異です。これ迄彼等の住んでいた社会とは全く別の世界なのです。始めの中は、新しい環境に子供のように眼を輝やかせていた彼等も、周囲の華美の雰囲気、次第にやり切れない圧迫感を覚えるようになります。憂鬱な顔付きで、黙然と座りこんで考え始めます。

幸いにして、アムール化粧品会社に就職する事は出来たが、一生、夢中になって働いても、この豪勢な邸宅の中の、たった一つの部屋でさえ、自分の力では持てないのではない。いや、部屋どころか、マントルピースの上に何気なく置かれた一つの花瓶、壁に掛けられた一枚の絵すら、自分の稼ぎでは買えないのではないか。

こう思うと、彼等の憂鬱は自分の無力と卑小感の為、益々深くなります。そして当然の

成行きとして、この広大な邸宅の所有者であり、彼等の雇い主である若い女性の姿が、さながら雲の上の全能者の如く彼等の脳裡にクローズアップされて来ます。彼等が就職した会社の社長、彼等の上に絶大な権力を持つ雇い主は、二十七才の若い女性である事を改めて認識するのです。しかも会社の内部において、彼等の上司であり監督者である部課長もすべて女性であり、彼等の仕事即ちセールの対象もまた、何百万人という女性である事に気付きます。現に魅惑的なビキニスタイルで彼等の辺りを闊歩している彼等の訓練担当者を見ると、厭でも厳然たる一つの事実を直視せざるを得なくなります。

即ち、これからの生涯は、女性社長の手より生計の資を支給され、女性部課長によって監督指導され、女性顧客の御機嫌を一心に取り結ばなければならぬ事。換言すれば彼等のこれからの一生は、凡て女性の手によって左右されるのだと言う厳然たる事実です。

こうして訓練を受け入れる基礎態勢は出来るのですが、これ以上放置しますと、根が単純で楽観的な男性の事です。直ぐに鬱ぎの虫を追い払い、逆にピチピチした肢体の彼等の訓練掛りに、好色そうな瞳をチラチラ投げ

兼ねません。

四日目、素晴らしい快走艇に乘せられて、彼等は海へ連れ出されます。紺碧の空、紺青の海、カリビア海の空気は澄みきって、彼等は無邪気にはしやぎます。頃合いを見計らって訓練掛りは海に入るように命じます。泳ぎ自慢の男は得々として海中に飛びこみます。

自信の無い男は蒼白となって、デッキをウロウロと逃げ廻りますが、ビキニ姿の女性に叱咤激励されて、止む無く、海中に身を投げます。辛い海水を呑んで悲鳴をあげ、無茶苦茶に手足を動かしている男達を、水泳のエキスパートである訓練者の女性達は、舷側に腰を下して足を海面に弄らせながら笑って見ています。やっと舷側に泳ぎついて縋ろうとする男の手は、無情に足で蹴り放されます。思わぬ美女の残酷な仕打ちに、金鎧男はしたたかに海水を呑み、怒りの色は覆うべくもありません。二度三度、四度五度、男達は疲れ果て今は怒る余裕もありません。彼等は今や死と斗っているのです。必死です。もし今度も蹴り退けられたら、もう死ぬかも知れない。既に手足を動かす気力も無いのです。彼等は神に祈りを捧げる如く、心より哀願の思いをこめて、残酷な美女を見上げます。恐る恐る舷

側に近づいた時、祈りは叶えられ、目の前にスツと、奇麗な脚が差し出されます。思わず感謝の思いで涙ぐみながら、縋りつくのですが、もはや女性の脚は卑しい欲情の目を以て見るべきものでは無く、死との苦しい斗いから救出してくれる、女神の脚とも思えるのです。

美女は息も絶えだえに自分の脚に取り縋っている男を見下して、笑いながら問います。

「あら、礼を言わないの」

「有難う御座います。マダム」

「感謝の表現は、どうするのか知ら」

哀れな金鎧男は恭々しく脚に口吻けをして感謝の意を表します。男達がごく自然に感謝の言葉を口にし尊敬をこめて脚に口吻けをするようになる迄、この訓練は続けられます。

エッ？泳げる男は、どうするか？ホホ……。同じ事ですわ。泳げなくなる迄放って置きますから。時々は気の向いた女性訓練者が海に飛びこんで、遊んでやる事もあります。彼女等は多数の応募者の中から選抜かれた素晴らしい泳ぎ手なのです。水に潜って男の足を捉え、水中深くひきこむかと思えば、一転して海豚のよう^{いるか}に跳躍して男の背の上に落下します。最初は美女のお相手と目尻

りを下げていた男も、散々な目に逢わされて漸くこれは遊び所では無い恐ろしい敵である事に気がきます。必死になって逃れんとする男は、彼女にとっては実に手頃な玩具となります。泳ぎ自慢の男も最後には美女の脚に縋って、感謝の口吻けをするようになります」

トーマス「私には想像も出来ませんね。大

の男が女に脚に縋るなんて」

エレオノラ（厳しい声音になる）「そうかしら。男と言う者は、トーマスさん、貴方が信じていられる程、強い動物ではありませんのよ。バハマのように隔離された世界で社会的な虚飾や慣習から解放してやりますと、思いの外、簡単に本性を現わし、犬のような従順性を示します。妾は、トーマスさん、貴方を是非バハマにお連れしたいと思っています。苦しい訓練を嬉々として女性の手によって受けている男達を御覧になれば、貴方の偏見は立ち所に消え去るでしょう」

トーマスは気押されて、彼女から目をそらせ、壁の絵を見る。

エレオノラ「その絵を御存知ですか。トーマスさん。妾はこのベックマンの絵が大好きですの。他にザルバドウル・ダリヤ、シュレイダー・ゾンネンシュタイなども好きで集

めていますわ。だから此の頃、バハマの訓練もコース何番などと呼ばずに、彼等の画題を使ったらどうだろうと考えていますのよ。例えば

『胎内幽閉の間』

『ガラスのケースに入った^{とかげ}蜥蜴の居る部屋』

『ダイアナの遊戯場』

『旨く飛べなかった蠅の部屋』

『泣いている馬の部屋』

『家具としての役目を果す部屋』

『女性の支配からの逃走又は最後のあがきの部屋』

如何？素晴らしいとお思いにならない？」

トーマス「その画題に暗示されているような、男性の本性を無視した訓練が行われる訳ですね」

エレオノラ「いいえ、逆ですわ。むしろ男性本来の姿に還してやるための訓練と言っべきでしょう」

トーマス「判りました、ミス・パーカー。私はこの対談を、世の男性への警告として扱いたいと思いますが……」

エレオノラ「何卒御自由に。最後にトーマスさん。妾は貴方とお話をしていて、益々深く確信づけられたのですが、現在の社会

に、いかに多くの有能な女性が、単なる社会的慣習の名の許に、男性の支配下に圧迫されているかと言う事を声高く叫びたいと思います。この点についてはトーマスさん。貴方のような知識階級の男性でさえ、女性に対する偏見から脱し切れない事を、先き程御自身で証明されましたわね。

妾は今一つのプランを持っています。いえ、近く実現の運びになる筈ですが、有能な女性達をもつて一つの組織を造る事なのです。不自然な男性支配から彼女達を解放し、正当な地位に置くのが目的です。既に、多数の女性から賛成の返事を受けています。中には、トーマスさん、名を聞けば仰天されるような高貴な女性も含まれています。勿論アメリカだけでは御座いません。全世界の有能な女性に呼びかけていますわ。

だから御用心なさいね、トーマスさん。貴方の抱いていらっしゃる女性への偏見、これは妾し達が先ず第一に打破したいと考えている目標ですの。ホホホ。老婆心ですが、貴方が妾し達の最初の血祭りに挙げられるような事がないように、御注意申し上げておきますわ。組織の名称？今は「ISSSL」とだけ申し上げておきましょう」

以上、永々と紹介したが、爾来、私の脳裡から「ISSSL」の五文字が去らないのである。もしや発会の案内でも出ていないかと新聞雑誌など目を皿のようにして注意していたのだが、遂にその消息は不明のまま、数年の歳月が流れ去ったのである。

三

ミス・ナンダ・ラジャシニのこと

今年の夏、私は所用のためマレイシアに赴き、一週間余り首都のクアラ・ Lumpur に滞在したが、幸い仕事が、予定より早く片付き、三日程のんびりと骨休めをする機会を得た。もう何度目かの旅行で、別に見物したい所も無く、暑い日中は午睡を楽しみ、日が落ちてからブラブラと夕食前の散歩に出たのだが、ふと足を印度人街のキャンベル路に踏み入れた。

街中に漂う強烈なバルサムの香りもさる事ながら、街中の商店という商店は勿論、街角の露店に至る迄、丁度放送中のタミール映画音楽をマイクも割れんばかりのボリュームで流しているので、街中はテンポの早いリズムの反響で沸き返っているようであった。暑い南国の都会では、太陽が沈むと同時に活気を呈してくる。彼等の商売は、これから始まる

のである。

昼間は眠そうな目付きで木蔭に座りこんでいるブータンの宝石売りも、活々とした顔で道端に店を開き、小さな石達は、何週間も風呂に入らぬ主人とは反対に、点滅する街のネオンを反映して、美しく鮮やかな色彩を見せていた。そのブータン人の背後に一軒の古書店を見つけた私は、何気なく中に入った。

数少い書物を一冊ずつ間隔をおいて並べている貧弱な書店である。暇つぶしに丹念に見て廻る私の目についたのは「ケダラ女性王国の誕生と滅亡」と題した、タイプで七〇枚余りの小冊子である。「極秘」とスタンプされているのが妙に私の気を惹いたし、女性王国という言葉にも興味があった。十マレイドルと吹きかける狡猾そうな親父と、気永に折衝した揚句、五マレイドルで手に入れると散歩も止めて帰途についた。

ホテルに帰るとバスも取らず、ベランダの藤椅子に腰を下すと、室内から洩れる弱い灯りを頼りにバラバラと頁をくって見た。ケダラという洲名は聞いた事もないし、マレイに女性のスルタンが存在した事など信じられない思ひだった。所が、ふと最後の筆者名を見て、私は飛び上る程驚いた。筆者ミス・ナン

ダ・ラジャシナは明らかに印度女性の名であるが、その名の下に「ISSSL」東南アジア駐在員とあるではないか。数年前、アルビヨン誌で印象づけられて以来、始めて目にする「ISSSL」の文字である。

信じられぬ思いで私は何度となくその文字を見直した。数年間探し求めていた「ISSSL」の消息の手掛りが、こんな所で得られようとは、私には夢のように思われた。エレオノーラ・パーカーの言っていた有能な女性達を以て組織される「ISSSL」は既に結成されて居たのだ。それ所か、こうしてマレイに迄、駐在員を置いているのだから、その事業は着々と進捗していると見てもいい。もしや日本にもその組織の手は延ばされているのでは無いだろうか。

私は感慨深く「ISSSL」の文字を眺めた。妖精のように白一色のエレオノーラ・パーカーの姿が睨に浮かんでくる。只気になる事は、「極秘」とスタンプされた此の小冊子が、どうして街の古書店になど並べられているのだらう。筆者ミス・ナンダ・ラジャシニが如何なる女性であるか知る由も無いが、私は彼女の身に何か不吉な予感を覚えながら読み始めた。

四

「ケダラ女性王国の誕生と滅亡」

並びに其の流れをくむ秘密結社「タイグレス一〇七」に就いての報告書

私、ミス・ナンダ・ラジャシニが本部の命により、ニューデリーより当地に赴任して以来、既に六カ月余を経過致しました。

女性は男性より一階級下のものと定めたマホメッドの教義によって、一夫多妻の制度を認め、女性を私有物視して恥じない此の地の実状は、当初、妾しを心より驚かせ、又憤慨させました。しかも女性がそれを当然の事として、炎天下に宮々として働らき、男達は椰子の木蔭に集って斗鶏に打ち興じている有様を見て、妾しは自分に課せられた任務に絶望をすら感じました。

このような妾しを常に励まし勇気づけてくれましたのは、お笑いにならないで下さい。アラビアンナイトの物語でした。そこに描かれた女達は何と美しく、逞しく、聡明で、時には又奸智に長けている事でしょう。美しい彼女達の指先き一つで、馬鹿な男共はキリキリ舞いをして怒り、悲しみ、絶望の涙を流し時には家庭を見棄て、国家でさえ滅亡に追いやるのです。賢いマホメッドはきっと女性の

力に恐れを抱いたのに違いありません。男を不幸から守り、滅亡から救う為に、女は男によって支配されるべき者とコーランに定めたのでしょうか。この国の女性もいつかは千夜一夜の女性のように、男の束縛を打ち切り、女性本来の地位に目覚める時が、必ず来るに違いない。妾しはそう確信して努力を続けて参りました。

そしてお喜び下さい。この期待は裏切られなかったので御座います。去る二月四日の新聞は素晴らしいニュースを妾しに伝えてくれました。

「マレイの娘達に依って組織されたシクレット・ソサイエティ『タイグレス一〇七』突如出現す」

これをマレイ娘達が集って悪事を働くギャング団とお考えにならないで下さい。反対に中国青年達のギャング団の暴行から、村を救う為に娘達は立ち上ったのですから。

年毎に増加する秘密結社又はギャング団の犯罪は、この国でも大きな社会問題の一つとして屢々国会でも採り上げられています。根本原因は青少年の失業にあるのですから悩みは深刻です。人口の半数以上を占める中国人の子弟三万人が毎年学巣を離れて実社会に

送り出されますが、悲しい事に彼等を受け入れる程の産業がありません。やりばの無い不満と鬱憤に悩む彼等に、ギャング団の甘い誘いの手が延ばされます。大は香港に本拠を持つ国際的組織から、小は数名のチンピラギャング団に至る迄、その数は年々増加の一途を辿っています。この中国系ギャング団に対抗してマレイ娘ばかりの『タイグレス一〇七』が村の平和を守る為に立ち上ったと言うのですから、妾しの喜びを御想像下さい。以下、その夜の状況を御報告申し上げます。

五

秘密結社『タイグレス一〇七』

去る二日夜、パシル・パンジャン村の茶店に、又々、ギャングの一団が現われました。カンボン（村）の茶店は村人達の憩いの場であり、社交の場でもあります。夜の更けるまで、楽しい語らいに興じるのが彼等の慣わしです。所がその夜九時過ぎ、突如として五人の青年が乱入し、手に持つ硫酸の瓶をあたり構わず投げつけました。これは彼等がよくやります手で、別に茶店に恨みがある訳でも無ければ客の中に敵が居る訳でもありません。新入りの団員に課せられる一つの行事とも言ふべきもので、これに依って彼等は団員たる

に相応しい勇気を示した事になるのです。

居合せた客こそ、災難と言わねばなりません。濛々と異臭を放つ白煙の中から、客達は悲鳴をあげて逃げ出しました。中には硫酸の飛沫で火傷をした者もいる模様です。チンピラ共は得意になって卓子を倒し、椅子を投げつけ乱暴の限りを尽します。奥へ逃げこんだ茶店の親爺は、心配そうに隙間から覗いている丈です。警察に電話をしても、ポリスが到着する前にギャング共は逃げ去るでしょう。それよりも警察に通報したとギャング団に睨まれては、後の祟りが恐ろしいというものです。怪我をせぬよう隠れていて、被害の少からん事を神に祈る方が賢明と言うものです。やがてチンピラ共は勝手に冷蔵庫からビールを取り出して飲み始めました。適度の運動のあとのビールは、又格別の味で彼等は御機嫌でした。次第に店内にたちこめた白煙が薄れて行くにつれて、一番奥の卓子に緑宝（オレンジジュース）の瓶を前にして、三人のマレイ娘が平然と座っている姿が現われましたが、チンピラ共はビールに夢中で気付きません。娘達は何れも二十前後の若さでしたが、何事かを領き合うと、緑宝の瓶を手に、静かに立ち上りました。殊更に裾巾を狭く仕立て

たサロンは、歩く度に大きく割れて、若々しい綺麗な足を膝の上まで見せるのです。

近づいて来る人影に、チンピラ共はギョツとして見上げましたが、可愛い娘ばかりと見て、なめたように笑い出しました。

「オイッ、お前達はどこのチンピラか知らないが、妾し達を『タイグレス一〇七』のメンバーと知って喧嘩を売りに来たのかい？」

一番背の高い娘の唇から、顔に似合わぬ小気味の好い痰阿が飛びましたが、チンピラ共は相手が娘と見て、そっくり返りました。

「何、タイグレス一〇七だ？知らねえな、そんなものは。とに角、お前達娘っ子が出る幕じゃあねえ。黙ってすっ込んでな。それとも、何かい、お前達、俺等に遊んで欲しいと言っても言うのかい」

チンピラの言葉が終らぬ内に、娘達の手の緑宝の瓶が、目にも止まらぬ早さで打ち下ろされました。ギャツとも言わず、三人のチンピラが椅子から崩れ落ちて床に伸びました。余りの早業に残った二人は、思わず逃げ途を探すかのように表の方を窺いましたが、そこには物見高い村人達が既に人垣を造っています。今更引っ込みもならず、二人は肩肘を張りました。

「ヤイヤイ、何をしゃあがる！俺達は『青竜九三』のメンバーだぞ。ふざけた真似をするとお前達、あとで泣きを見る事になるが承知だろうな」

所が娘達の方はビクとも致しません。チンピラの脅し文句など何所吹く風と、真っ白な歯を見せて笑いながら、ズイと一步踏み出しました。チンピラの顔から血の気が引き、唇はワナワナと震え始めました。娘達は更に一步、進みました。既に緑宝の瓶の射程範囲です。娘達の顔から笑いが消え、口許がキツと引き締められました。途端にチンピラ二人、ヘナヘナと其の場に土下座しました。

「勘弁してくれ。俺達は何も知らなかったんだ。お前達に喧嘩を売る積りなんか、これっぽっちも無かったんだ。嘘じゃ無え」

ドツと上る村人達の嘲笑の中に、娘達は更に一步近付きました。

「たしか『青竜九三』とか言ったね。帰ったらボスにお言い。喧嘩なら『タイグレス一〇七』喜んで買います。場所と時刻もそちらのお望み通りに出向きますとね。判ったかい。判ったら暫らく休んでお行き」

サロンの裾が翻って、ふくよかな腿がチラリと見えたとと思うと、サンダルを穿いた足

が、猛烈な勢いでチンピラの顎を蹴上げました。仰向けに伸びた二人はピクリとも動きませんが、黒い鼻血だけがまるで生き物のようにドロリと流れ出しました。仲好く伸びた五人を尻目目に、娘達は華やかな笑顔を響かせながら、悠々と引き上げました。

公衆の面前で、かく迄明らさまに挑戦されては、『青竜九三』たる者、面子に^{メンツ}かけても引き退れません。その夜の明け方、スンゲイケダラ（ケダラ川）の川原で彼等は雌雄？を決する事になりました。

急遽、メンバーを狩り集めた『青竜九三』は、ボス以下総員六十一名。マラヤの娘っ子の分際で俺達に喧嘩を吹っかけるとは、呆れ返った跳ねっ返りだ。一丁痛めつけてから、ゆっくり楽しんでやろうと、意気壮んに出張って参りました。

やがて朝靄を破って姿を現わした『タイグレス一〇七』の群れを見るや、鼻息の荒らかった青竜のメンバーの顔が土気色に変わりました。一体何人居るのでしょうか。ワヤワヤと彼等を取り囲んだマレイ娘達、恐らく三百人以上も居るものと見えました。手に手に磨きあげた三尺余りの黒檀の棍棒を持ち、青竜のメンバー例え一人なりとも逃すまじと堤を背後

に、ヒシヒシと取り巻きました。中に三十人余りの娘の一団が頭上高く投げ縄を振り廻しているのは、大方逃げる羊でも取り押さえる積りなのでしょう。陽気な笑い声さえ聞こえるのです。

見るからに精悍な三百人の娘達に囲まれてすっかり戦意を喪失した青竜のメンバーは、武器を投げ出して座り込みましたが、流石にボスは名を惜しむか、武器を振るって只一人立ち向いました。尤もこれは娘達を喜ばせ、笑声を一瞬高くしただけに終わりましたが。

日が昇る頃、村人達は「青竜九三」のメンバー六十一人が、素裸でマンガスチンの並木に縛り付けられているのを発見して、大笑いをしたと言う事です。

中国系新聞は「恐るべき女ギャング団の出現。馬來亜の良風美俗遂に地に墜つ」と題して烈しく攻撃しましたが、マレイ系新聞は逆に「カンポンの平和を守った、勇ましい三百人のマレイ娘達」として、その英雄的行動を讃美しました。

妾はどうしても此の娘達と逢って話し合いたいと思いました。マレイに於て、ISSSLVの使命を托し得るのは、彼女達を置いて他には無いと思われたのです。パシル・

パンジャンの村人達は、始めの程は警戒が厳しく仲々娘達に逢えませんでした。妾に他意の無い事が判り、漸くリーダーに連絡をとってくれました。

最初リーダーに逢った時は、これが三百人の娘を率いて「青竜九三」と闘った娘とは信じられぬ思いでした。名はアリンダ（マレイでは姓はありません）。年令は二十三才。背はマレイ娘としては高い方でしょう、一米六〇もあるでしょうか。大きなやや吊り上った目、尖って上向いた鼻、少しまくれた唇、短い首と驚ろく程細く締った腰など、典型的なマレイ娘に過ぎませんでした。

「タイグレス一〇七」結成の動機は、矢張り青竜その他のギャング団の横行に、我慢が出来なくなつたからで、娘達も喜んで参加してくれたと淡々と語るアリンダの頬に、恥しげな笑みが浮かぶのを、妾は不思議な思いで眺めました。

「でも貴女達、娘ばかりが、どうして戦わなければならぬのです？男達は何をしているのです？どうして男達が立ち上って戦わないのです？」

妾しの疑問に、アリンダは頬を紅潮させ、昂然と胸を張りました。

「妾し達は、ケダラ女性王国のスルタナの血をひいているのです。やろうと思えば妾し達女の手で何事もやり抜くのです」

力強いアリンダの言葉は、この上も無く妾しを喜ばせましたが、ケダラ女性王国の名が妾しの興味を惹きました。マレイの歴史にもその名は現われませんし、妾しには全くの初耳だったからです。

「ケダラ女性王国とは、一体どこにあるのですか」

「昔、この国に悪い大臣が居て、サルタンの王位を手に入れんと策謀しました。然し四人のお妃が力を合せて悪い大臣を倒し、第一妃がスルタナとして王位に即かれたのです。大臣も役人も、皆女性に依って占められ、男達はその指揮下に入って、国威は非常に高くなりました」

誇らしげなアリンダの説明に、益々妾しの興味はそられました。頑固な回教国家に女性のスルタナが存在したとは、想像も出来ない事だったからです。アリンダは嘘で無い証拠に、村の寺院にその記録が残って居ると言うのです。妾しの熱心に負けて、アリンダは村の寺院へ案内してくれました。

「あれが寺院です」

アリンダの指さす方を見て、妾しは又驚かされました。数百年を経たと思われるブリヤン造りの建物ですが、その建築様式はどこから見ても、キリスト教々会のそれなのです。

回教寺院に、どうしてこのような様式が採り入れられたのだらうと、新たな疑念と興味に包まれながら、妾しは古い記録を手に取りました。それは正式な記録では無く、人の口から口へと語り伝えられた物語を、奇特な僧侶が筆に残したものでした。恐らくケダラ女性王国は、回教国家に不名誉な汚点を印するものとして、正式な記録は破棄されたのでしょう。口伝の筆記はフォークロア特有の素朴な表現と、露骨な描写に満ちていますが、東洋には、否、世界にも珍らしい女性王国の記録として、出来る限り忠実に訳して見たいと思います。

六

「ケダラ女性王国の誕生と滅亡」(一)

ケダラ洲第八代のサルタン、テンク・アブダル・カリム・ビン・モハメッド・ハシン様は、御年六十七才に成られますが、誠に信仰厚いお方で御座いまして、コーランの教えもよく守り、読経、礼拝、断食、布教、巡礼、何一つ怠る事も無く、王宮を訪ねて参ります

旅の僧達をもいと懇ろに接待され、その説教を聴聞するのを何よりの楽しみとされて居たので御座います。

僧と申しまして、回教には御承知のように僧職と言うものは無く、信者は誰れでも布教に従うよう定められていますので、旅の僧も明らさまに申せば乞食も同様、いいえ、サルタンの御接待は、回教の乞食坊主だけでは御座いません。バリ島へ往来する頭を満月のように剃り上げた仏教僧や、四つ足で這って来る印度の苦行僧まで、誰れ彼れの差別無く接待されるので御座います。かような訳で、お庭の片隅にあります小屋には、いつも十人余りの旅の僧がゴロゴロ致している有様で御座いました。

或る朝、未だ日も昇らぬ薄明りの庭を、サルタンは四人のお妃様を従えて、礼拝堂へ急いでおられました。何でも昨夜遅く着いたと言う新しい坊主の説教をお聞きになる為で御座います。早起き鳥の山鳩が、けたたましく鳴き交しています中を、四人のお妃様は何やら不機嫌な面持ちで御座いました。無理も無い事で、老年のサルタンは最早、早起きが苦になるお年では御座いませんが、若いお妃様方には、今が一番寝心地のよい朝まだき、

それを無理矢理起こされて、さて面白くも無い説教ですから、美しいお顔もつい澎れようと言うもので御座います。

一番お年上のサロマ様は二十八才。女の盛りと申しましょか、それはもう溢れるようなお色気で、猿の卵から生れた男(堅者)でも、ひと目で陥落疑い無しと思える程で御座います。それに大層利発なお生れ付きで、時にはサルタンも頭の上らぬ事があるとか、侍女達の噂で御座います。

二番目のお妃、サーディア様は、近頃少しお肥り気味なのを大層お気にされまして、暇さえあればお庭に出て、侍女を相手に棒術の鍛練をなさるのですが、武芸にかけては宮中の男共でさえ、誰れ一人敵う者は居ないだろうと言われています。

第三妃のファティマ様は、丁度二十才になられまして、今や蕾の開いた蘭の花。お姿を垣い間見た男共は三日三晩、その面影がちらついて、痴呆のようにうろつくと申されております。

一番お若いハリジャ様は未だ十七才、去年の暮れ、サルタンがクアラ・トレンガヌに舟遊びをされました時、村長の娘御だったハリジャ様が、堅く乾した椰子の実の殻をカチカ

チと打ち鳴らしながら、ココナツの踊りを御覧に入れたのが大層お気に召し、王宮へお連れ帰りになりました。まだまだ色も香りも判らぬ固い蕾、サルタンの虎狩りのお伴など、一番お喜びになるのは、このハリジャ様で御座います。

広い礼拝堂の石床に座をお占めになりますと、お庭の木の間を吹き抜けて参ります快ろよい微風が、火照ったお妃様の頬を弄り、やっと不機嫌も直って、

「ああ、いい気持ちだこと」

と思わず小声でお洩らしになるので御座います。サロマ様は、めっきりお髪の薄くなつたサルタンの後頭部を眺めながら、

「サルタンも随分お老けになったこと。ここ一カ月以上も妾し達の部屋に姿をお見せにならないのも、このお髪の按配では無理も無い事かも知れない……」

などと、身は礼拝堂に在りながら怪しからぬ事を考えられるので御座います。

「アヘム！」

その時、小さな咳き払いをして入って参りましたのが、昨夜着いたと言う坊主でしょうか、一と目見るなり、お妃様方の瞳が好奇心でキラキラと輝やき始めたので御座います。

それと言いますのも、この僧は今迄に数多く見て来た坊主共とは、まるっきり違うので御座います。片膚の色は晒し立ての布のように白く、鼻はインコの嘴のように突き出し、髪も髭も鶏頭の花のように真っ赤なので御座います。それに落ちくぼんだ目と言ったら、目の玉があるやら無いやら判らぬ程、薄い水色で、それがお妃様方のお姿を見るや、吃驚したように大きく見開き、お妃様の一人一人を讃嘆するように眺めます。流石のサロマ様も思わず身内がゾクゾクして参りまして、落付か無げに座り直されました程で御座います。女など目にするのも汚らわしいと肩肘はった回教坊主、目を半眼にして見向きもしない仏教僧、好色そうな目でなめるようにお妃様を見るヒンズー僧、そのどれもと違って、水色の目は小児のように無邪気に、美しいお妃様を讃美するので御座います。

尤も説教の方はチンプンカンプン、キリストがどうの、マリアがこうのと、何が何だか判りませんが、一つだけ妙にサロマ様の耳に残った言葉が御座いました。

「神様は男を罰するために、女をお創りになりました」

何て変な事を言う坊主だろうと、サロマ様

は、お考えになりましたが、その一言は黄金の矢のように、お心に突き刺ったので御座います。

朝食が終わりますと、サルタンはお妃様方の目を避けるように、そそくさと、表の政務庁へお出掛けになりました。永い夜の御無沙汰を、お妃様方から詰られるのが、何より怖いので御座います。残されたお妃様方は、例の通りお茶の道具を前にして、お喋舌りに興じられるのですが、話が自然と今朝の白い坊主に移るのは当然で御座います。

「何だか変な坊主ですこと」

お若いハリジャ様の卒直な感想で御座いました。

「あんな薄い水色の目で、物が見えるのでしようか」

これはフアテイマ様。

「でもあの目でじっと見詰められると、何やら身体がゾクゾクして困りましたわ」

武勇勝れたサーディア様も、思ひはサロマ様と同じようで御座いました。

「男を罰する為に女が創られたなんて、本当か知ら。妾し達、いつもサルタンのお叱りばかり受けていますのにねえ」

サロマ様の疑問に、サーディア様は直ぐさ

ま同意されました。

「本当ですわ。一カ月以上も妾し達を放って置いて知らぬ顔をしていらっしやるサルタンを、妾し達の手で罰する事が出来るとも言うのでしうか」

「でもそうなたら素敵でしょうね。(強い語調で)これ、サルタン。妾し達をこんなに永らく放っておいて、それで済むとも思っているの?この意久地無し奴。今夜は妾し達の手で思いつ切りお仕置きをしてやるから、サッサと裸かになって寝台にお上り!」

サロマ様の冗談に、ドッと笑い声が始まりましたが、お心の中では冗談事では無いのはお判りで御座いましょう。

「どう?皆さん。あの白い坊主をもう一度ここへ呼んで、どうして女は男を罰するのか、その訳を聞きましょうよ。もしいい加減な嘘であつたら、あの坊主の説教通りに、妾し達の手で彼奴を罰して、嘘で無いようにしてやろうじゃない?」

何しろ暇を持て余していられるお妃様方の事とて、一も二も無く大賛成で、早速お気に入りの侍女ラタが使いに出されたので御座います。

七

「ケダラ女性王国の誕生と滅亡」(二)

やがて白い坊主はラタに案内されて参りましたが、半円に座を占められたお妃様方を見るや、水色の目は濃艶なサロマ様、凛々しいサアデイア様、華麗なファティマ様、清楚なハリジャ様をぶしつけな迄に讃美するので御座います。然し跪いて挨拶をする物腰は誠に丁重で、尊敬の念が溢れていまして、無礼な眼な差しを叱責されようとしたサロマ様も、つい思い直された程で御座います。

「これ、パデリプテ(白い坊主の意)。今朝お前は説教の中で、神様は男を罰する為に女をお創りになったと言ったが、其れは本当の事かえ。もう一度よく判るように話して御覧。もし口から出任せの嘘だったら、妾し達が嘘で無いようにしてやるよ」

厳しいサロマ様のお言葉に、白い坊主は恐れ入って話し始めました。

ベツリア市がネブカサドウルの軍勢に取り囲まれ、命旦夕に迫った時、只一人敵陣に忍び入って、暴虐な敵将ホロフェルネスの首を掻き切った勇ましい処女ユーディットの話。

豪勇サムソンを色香に迷わせ、その力の源泉である頭髮を斬りとり、奴隷として敵に売

り渡した妖艶なデリラの話。

良人ジェイソンに恋人が出来たのを怒り、毒薬を塗った衣服を恋人のグランスに贈って焼き殺し、良人との間に生れた二人の吾が子を残りに殺してジェイソンに投げつけ、嘲笑しながら去った恐ろしいメデアの話。

水浴のさ中を、テーベのカドマス王の孫、アクテオンに覗き見されたのを怒り、彼を鹿に変身させ、五十匹の猛犬をけしかけてズタズタに喰い殺させたアルミテスの話。

勇猛ヘラクレスを奴隷として買い入れ、糸を紡がせ、寝台の支度を命じ、炊事洗濯の仕事に追い使い、しかも自分はヘラクレスの衣服をまとい、彼の棍棒を持って厳しく監督したりピアの未亡人女王オンフフルレの話。

男を悩まし、男を傷つけ、男を滅した美しい女達の話に、お妃様方は自分達を取り囲んでいた社会的な慣習や道德の壁が、一つ一つ音立てて崩れて行く思いで聞かれたので御座います。

それにオイローペとか言う白い坊主の国では、男女に人間の区別は無く、美しい女は讃美され、賢い女は尊敬され、勇ましい女は賞讃され、王に代って政務を司る女王も多い事など深い感銘をお受けになったので御座いま

す。

遠いオイローペの国々はさておき、隣国のシヤムにおいても、南部のパタニ洲は女王の治下にあると聞かされましたサロマ様は、思わず「それは本当の事かえ？」とお聞き返しになった程で御座います。

その時、突然サーディア様が強い声で白い坊主をお叱りになりました。

「パデリプテ！お前、話の途中でジロジロと妾し達を変な目で見るが、いい加減に止さないと酷いよ」

白い坊主は平蜘蛛のように伏して、詫び入りました。

「お許し下さい、お妃様。私奴はシヤムのバシコウを出ましてより五カ月と言うものは、くる日もくる日も密林と荒野の中を歩き続けて参りました。今美しいお妃様のお顔に接しますと、私奴の目はどう押さえましても、どう叱りつけましても、お妃様のお顔から離れる事が出来ないで御座います。決して私奴に、御無礼を働く所存は御座いません。きつと浅間しい悪魔奴が私の心の隙間に入り込んだので御座いましょう。この上のお情けに、何卒お妃様のお鞭で、悪魔奴を叩き出して頂ければ、こんなに有難い事は御座いません」

ニッコリとお笑いになりましたサアディア様は、鞭をお手にして立ち上られました。

「お前の為にも役に立ち、妾しの為にも運動がわりの楽しみになる。丁度、咽喉が渴いた時に水浴びをするようなもの（一石二鳥）。お前の願いは聞き届けてやるよ」

普段のお妃様方には夢にも想像出来ない妖しい光景が展開されました。武術で鍛えられたサーディア様のお鞭は、白い坊主には思いも寄らぬ強さであったようでした。ものの五六度鞭が鳴る前に、白い坊主は悲鳴をあげて許しを乞いました。

「アッ、お妃様。私奴の体内の悪魔は、もはや逃げ去りまして御座います。アッ、どうぞもう、これにてお許し下さい」

サーディア様は、ほんのりと上気したお顔に、笑みを浮かべられました。大きな目は異様に輝いて居たようで御座います。

「おや、そうかえ。でもお前の悪魔は逃げ去ったかも知れないが、妾しの楽しみは、まだまだ、これ位では済まないようだよ」

泣き声をあげる白い坊主の背に、サーディア様は容赦無くきっちり二十度、激しい鞭を振われました。息もたえだえの白い坊主は、サーディア様をお恨みに思う所か、鞭打たれ

たそのお手に、嬉しげに口吻けするので御座います。

「有難う御座いました、お妃様。私奴には聖母マリア様の有難い苛責の鞭とも思えます」

白い坊主の声は感謝の念に打ち震えているようで御座いました。お若いハリジャ様は、只もうコロコロと面白そうに笑い転がっているのですが、サロマ様は何故とも判らぬ興奮を一心に押さえて居られました。男を鞭で打つ、しかも神に仕える坊主を鞭で打つ。言わば神をも恐れぬ不逞の所業である。それなのに白い坊主は嬉しげに己れを鞭打った恐ろしい残酷な手に感謝の口吻けを捧げている。それに鞭を振るって白い坊主を打ち据えていたサーディアの姿は、何と美しく雄々しく見えた事だろう。白い坊主の言う通り、本当は女は強いのかも知れない。男を罰する程、強いのかも知れない。こう思うとサロマ様の身内を何やら力強い戦慄が過ぎるのでした。

白い坊主は再び口を開きました。

「然しお妃様。私奴の体内の悪魔が狂い出しましたのは、私奴の罪と申しましょうより、お妃様方が余りにお美し過ぎる所為で御座います。いいえ。弁解では御座いません。お疑いで御座いましたら、ヒンズー僧にも回教僧

にも試して御覧になれば、お判りになりますでしょう」

何を思ったか、こんな事を申します白い坊主は、仲々の策士のように御座いました。彼の言葉はお妃様方の心を攪ぐり、刺激に満ちた、チョッピリ悪徳の臭いのする遊戯を教えたので御座います。

「面白そうなこと。ねえ、サロマ様、一度あのヒンズー坊主が、どんな顔をして泣くか、試して見ましょうよ」

温和しいファティマ様が、こんな提案をされるのですから、白い坊主はケダラの王宮に何やら新らしい意吹きを齎らしたと申せましょう。

四つ這いのヒンズー僧を連れて来たラタは口を押さえて廊下を駆け出しました。間もなくあちこちから侍女達の顔が覗くのは、きつとラタが面白い事が始まると告げたのでしょう。ヒンズー坊主は四つ這いのまま、不審そうに金壺眼をサロマ様に向けました。乞食坊主は後宮などに案内されたのは始めての事なので御座います。ましてや何やらガラガラと眼を光らせ、笑いを堪えているような、美しいお妃様方に囲まれて、不安を覚えたらしく、苦行僧に似気もなく身体をもじもじ動

かせて居ました。

「お前は、いつもそうやって四つ這いで居るが、さぞ苦しい事だろうねえ」

サロマ様の柔しいお言葉に、ヒンズー坊主は鼻をうごめかせて答えました。

「私はシバの神の為に苦行を続ける者で御座います。苦行の間は、私の目は常にシバ神のお姿を見、私の耳はいつもそのお言葉を聞いて居ます。たとえ雷が落ちましても、私の耳に聞こえる事では御座いません。たとえ天より火が降り下りましても、私は熱いとは思わないでしょう。この苦行の中には、喜びこそあれ、苦痛など露程もある筈は御座いません」

サロマ様は微笑されました。

「神に仕える僧として、立派な言葉だと思いが、本当にお前はそう信じているの？もし妾しがこの鞭で、お前の背をぶっても、お前は痛みなど全く感じないと言うの？」

苦行僧は驚いて、上目目でサロマ様の少し意地悪そうなお顔を窺いました。この美しいお妃様は、本気で俺を鞭打つ積りだろうか。他のお妃様も真剣な目差しで、彼の返事や如何にと見結めておられます。苦行僧は決心しました。四人の女を一度に禦するカーマスー

トラの奥儀を思えば、このお妃様の鞭など愛欲の前戯のようなものだろう。白い歯を見せて、苦行僧は答えたので御座います。

「何でも無い事で御座います」

きつとしてサロマ様は立ち上られました。

昨日迄のサロマ様、否、先刻白い坊主の話を聞く迄のサロマ様には、思いも寄らぬ御所行で御座います。サロマ様御自身も躊躇うように手に鞭を御覧になりました。然し女の力、白い坊主の話のように、自分の知らなかった女の力を、どうしても確かめて見たいお気持ち、は、押さえようも無い程、強いもので御座いました。

ピシリ、ピシリ、苦行僧の背に鞭が鳴り、サロマ様は瞳をこらせて、その顔を見詰められました。勇ましいサーディア様のお鞭のようには参りません。苦行僧は呻き声をあげる所か、お鞭を楽しむかの如く笑いを浮かべているので御座います。

「サロマ様。妾しに換らせて下さいまし」

悪戯好きのハリジャ様が、面白くて堪らぬように飛び出して参られました。

「ファティマ様、お荷物の代りに、背中に乗ってやって下さいな」

笑いながらファティマ様が若々しい豊かな

お腰を乗せられますと、痩せ細った苦行僧の背は、ミシミシと音立てるかのよう反りました。

「さあ、今度は歩いて御覧！」

ハリジャ様の鞭が烈しく尻に振り下され、苦行僧は温和しく、豊かな重い荷を背負ってヨチヨチと歩き出しましたが、その顔は恍惚とした表情で御座いました。だが室を一廻りした頃から、苦行僧の足はたどしく成りました。顔も苦しげに歪んでいます。見ていた白い坊主は、その時大声で叫びました。

「御覧なさい、お妃様。それ、悪魔奴が腰の辺りから逃げ出すようで御座います」

可哀相にヒンズー僧は、優しいハリジャ様のお鞭と、美しいファティマ様の肉付きのよいお腰に、すっかり劣情を刺激されたので御座いましょう。歩き難いのは当然で御座います。四人のお妃様は大笑いをされました。

「シバの神の為の苦行などと言いながら、それは何の印しなの？無礼にも妾し達を、そんな淫らな目で見て居たのかえ？」

四つの鞭が一度に振り下ろされますと、流石に厚顔なヒンズー坊主も悲鳴をあげて跪きサロマ様の足許の床に口吻け致しました。

「お許し下さい、お妃様。これも皆、お妃様

方が余りにお美し過ぎる所為で御座います」

「シバの神より、妾し達の方が強かったと言う事だね」

サロマ様は、満足そうにお笑いになりましたが、サーディア様は、未だお許しになりません。

「妾達の鞭より弱い神などあろう筈がない。察する所、お前は偽せ坊主であろう。それなら早速サルタンに申し上げて、半月もの間、妾し達を欺いていた罪により、串し刺しの刑に処してやるが、異存は無いだらうねえ」

震え上ったヒンズー坊主が、泣き声を出してお許しを乞うのを、四人のお妃様は尚も弄ってお遊びになったので御座います。

八

「ケダラ女性王国の誕生と滅亡」(三)

如何なる企らみを胸に秘めているのか、白い坊主は身を以てお妃様方に、男を鞭打つ楽しみ、男を征服する喜びを教えようとするので御座います。この頃では、お庭をそぞろ歩きのお妃様を目にするや、坊主共は尻尾を垂れた負け犬のように、コソコソと小屋内に逃げこむので御座いますが、それが又、お妃様方には堪らないお楽しみのように御座いました。

白い坊主はすっかりお氣に入られ、日毎後宮に召されて、オイローペの話、旅の途中で見聞きた珍らしい話などお話しするので御座いますが、遂には大勢の侍女達も廊下に居並んで聞くようになり、男を男とも思わず、自由奔放に振る舞う異国の女の物語に目を輝やかせるので御座います。

或る時、サロマ様が白い坊主にお尋ねになりました。

「パデリプテ、お前がはるばるオイローペからこの国に來たのは、何か念願があるのであらう。宜ければ話して御覧」

「有難う御座います、お妃様。隠さずに申し上げます。私奴は信仰致します聖母マリア様の礼拝堂をこの地に建立致しますのが念願で御座います」

「可哀相だけどパデリプテ。その願いは難しいだらうよ。回教以外の宗教を広める事は諦めた方が宜いよ」

「いいえ、諦めません。いつかお妃様が、パデリプテ、お前の信仰する聖母マリアとやらの礼拝堂を建ててやるよと仰せになる日まで私奴は何年でも待つ所存で御座います」

そんな望みは、無花果の木がゴムの汁を出すのを待つようなものだよと、サロマ様はお

笑いになりましたが、白い坊主の決意は並み並みならず強いようで御座いました。

今では白い坊主の話も次第に変わって参りました。

王たる者は己が栄華を望まず、只人民の幸せを共に喜び、その不幸を共に悲しむ。ケダラ州の如き平地の少い国は、先ず密林を開いて農耕面積を増加し、スンゲイケダラの河水を灌漑に導けば、雨期の洪水も防止し得て一挙兩得、人民は繁栄を喜び、国威はいやましに高まるであろう。

白い坊主は、何気なく王道を説いているので御座います。サロマ様にも漸く白い坊主の意図が判って参りました。この男は妾しをサルタンの代りに王位を継がせようと考えている。この国でスルタナ（女性のサルタン）の即位など到底実現出来るとは思わないが、この男の言う事は道理に叶っていて、国を治めるには、さもあるべしと思われる。サロマ様は、マリヤとやらの礼拝堂の為に、一心にお妃様に仕える白い坊主の熱意に打たれるので御座いますが、夢のような希望を抱き続けている彼を、又不憚にも思われるのでした。

所が或る夜、サルタンが急死される大事件が起こりました。五カ月振りにお妃の部屋を

訪ねられたサルタンは、コーランの教えに従って、四人のお妃を一緒に満足せしめんものと、老軀に鞭打って、孤軍奮斗されたのですが、御無理が過ぎましたか、夜明けを待たずに長逝されたので御座います。大臣共が急ぎ集って後継者の選定に当りましたが、首相のアブデユラ・ビン・オスマンが推されたのは当然で御座います。尤も首相もサルタンと同じ年の六十七才、余り先きの永いお年とは誰れも思いませんでしたが、真逆、数日後に不慮の死に逢われようとは、全く思いも寄らぬ事で御座いました。何でもお庭を御散歩の折、大きな椰子の実が落ちて来たのだそうで御座いますが、何やら黒い噂さもひそひそと囁かれるので御座います。

残った三人の大臣、内相のフサイン・ビン・カシム、財相のユースフ・ビン・モハメッド、陸相のアーマッド・ビン・ルビオ、何れも年頃、血統きが相似て居て、サルタンの選定には一波瀾あるうとは想像されましたが、案の定、吾が吾がと互いに一步も譲らず、王宮内部は勿論、人民達の間にも不安の兆しが見えて参りました。所が黒い噂さを裏付けするように、内相のフサイン様が或る夜、就寝中に何者かの矢に射たれて急死されました。

白い坊主は時こそ至れりとサロマ様の決意を、一心に促がすので御座います。

「お妃様。残るはユースフ様とアーマッド様のお二人。何れが王位を継がれましょう共、このような悪辣な手段を弄して迄、王位を覘う悪人を黙ってお見逃しになるので御座いますか？」

サロマ様とて思いは同じで御座いますが、いざとなれば回教の教えでお育ちになった女人の性、^{さが}つつい引っ込み思案になられまして、白い坊主は齒がみをして口惜しく思うのですが、どうしようも御座いません。

そして遂に極悪人が正体を現わす日が参りました。軍務大臣アーマッドが、突如王宮を五百人の兵を率いて取り囲んだので御座います。ユースフ財相は、病弱の為、激務に堪えず、故郷に帰って閑居したいと声明を残して兵達の囲みの中を、すぐごと退出されたので御座います。

「何てだらしの無いユースフでしょう」

窓から御覧になったサーディア様は、本当に口惜しそうでした。

「これでサルタンは、乱暴者のアーマッドに決まったのね。兵を連れて来るなんて、何という卑怯な男でしょう」

サロマ様も腹立たしげなお顔で御座いましたが、直ちに侍女達を集めて後宮の守備を固めるように命じられました。兵達は椰子酒を振る舞われて、野獣のように酔い痴れ、既にサルタンになった積りのアーマッドは、大声をあげて怒鳴り散らしながら後宮に押し入ろうと致しました。この事あるを予期せられたサロマ様の命を受け、武勇の噂さ高いサーデア様が凛々しく武装した侍女達を率いて、門を固めていられたので、アーマッドは恨めしげに引き退りましたが、その夜、後宮の女達を激怒させる事件が持ち上りました。お気に入りの侍女ラタが、裏庭に水を汲みに出ました所を、アーマッドに襲われたので御座います。無垢の身を乱暴者のアーマッドに汚されたラタは、可哀そうに、其の夜のうちにスングイケダラに身を投げたので御座います。これは侍女達に大きな衝撃を与え、お妃様方の勘忍袋の緒も切れたので御座います。白い坊主は熱心に策を連らせました。アーマッドの如き悪人を絶対にサルタンの位に即けてはならぬ事、怠け者で馬鹿な男達は少しも頼りにならぬ事、女達の手でアーマッドを倒し、サロマ様をスルタナに頂く事がケダラ人民の為に最も幸福と繁栄を齎す途である事な

ど一心に説く白い坊主の言葉に、遂にサロマ様は決意をされたので御座います。

「みんなよく聞いておくれ。白い坊主の言うように、アブデユラ首相、フサイン内相を暗殺し、武力を以てユーソフ財相を追放したのみか、何の罪もないラタ迄、無残に犯して自殺させたアーマッド。こんな神をも恐れぬ大悪人に妾し達のケダラ州を委ねてよいものだろうか。

妾しは王位が欲しくて言うのでは無い。ましてや、自分の栄耀栄華など、露程も望む者ではない。只、ケダラ州人民の幸福の為に、アーマッドのような極悪人を、このままサルタンの位に即ける事を、断乎として阻止したい。もしみんなが協力してくれるなら、妾し自身がスルタナとなって、人民の為に努力したいと思う。白い坊主の言うオイローペの女のように、妾し達みんなで力を合せて、女性王国を建設しようでは無いか。妾し達のこの気持ちには、きっとアラアの神にも通じ、加護を垂れ給うと信じている。みんな決心しておくれ。妾し達の為では無い。ケダラ州の人民の幸福の為に立ち上っておくれ」

切々たるサロマ様のお言葉に、若い侍女達の血は燃え上りました。アーマッドの即位宣言は、恐らくハリラヤプアサ（断食祭）の後だろう。それ迄の三週間の間にアーマッド打倒の準備を完了しなくてはならない。軍師の白い坊主を中心に、綿密な計画が練られた。飽く迄も女性のみの手に依って、この計画を遂行しようと言うので御座います。百人の侍女達は八方に飛びました。密かに女性の同志を糾合する為で御座います。昼は武芸の訓練、夜は同志の獲得と、侍女達の大活躍が続きました。

九

「ケダラ女性王国の誕生と滅亡」(四)

いよいよアーマッドのサルタン即位の日が参りました。王宮前の広場に一段高く設けられた段上に、今日こそ己が野望達成の日と、五人の腹心の隊長を従えて立つアーマッドは得意満面で御座いました。その前には五百人の兵達が整列し、壇の背後には密かに武器をサロンに忍ばせた四人のお妃様を始め侍女達が皆りを決して居並んでいます。広場を取り巻く民衆達は、どうした事か女の姿が無暗と多く、男は数える程しか見えません。その男達も前後左右から女達にこずかれて、何時の間にか後方に押しやられ、見えなくなりしました。

そんな事には、少しも気付かぬアーマッドは、椰子の実の殻の下に座った蛙（何も知らぬ馬鹿者）も同様、ニタリニタリと相好を崩しているの御座います。やがて壮厳なゲンダン（太鼓）の音を合図に、一同聖地メッカの方に跪いて祈りを捧げますと、アーマッドは傲然と壇上に立ち上りました。

「ケダラ州の人民達よ！よく聞くがよい。アラの神の御名に依り、このアーマッド・ビン・ルビオは、本日ケダラ州第九代のサルタンの位に即く事を、ここに宣言する。異議ある者は速かに前に進み出でよ」

「異議あり！」

静寂を破って、澄み切ったサロマ様の御声が高らかに響き渡るや、アーマッドは雷に打たれた如く振り向きしました。群集はワーンとどよめきます。

「異議だ？大それた事を！神聖なサルタン即位の儀式を乱す者は、お妃様とて容赦は致しませんぞ」

怒気満面、朱を注いだようなアーマッドを尻目、サロマ様は静かに壇上に登られました。紫地の麻に蘭の花を縫い取りしたケバヤをお召しになったサロマ様のお姿は、別人かと思ふ程威厳に満ちていました。

「ケダラ州の人民達よ！アラの神の御名に依り、故サルタンの第一妃サロマは、ここに立つアーマッドを、己が野望を満そう為、アブデュラ首相とフサイン内相を暗殺し、ユースフ財相を脅迫して王宮より追放したのみか後宮の無垢の侍女ラタを己が獣欲の犠牲として哀れにも死に追いやった、神をも恐れぬ大悪人。サルタンの神聖なる位に価いせぬのみか、八つ裂きの刑に処しても尚、その罪を償い得ぬ大罪人として、ここに告発する」

「ワーン！ワーン！」

広場を埋める女達の喚声は、兵達もギョツとして振り向いた程、力強いもので御座いました。七面鳥のように赤くなったり、青くなったり堪り兼ねてアーマッドは叫びました。「隊長達よ。この鰐の魂に取り憑かれた気狂い女を直ちに取り押さえろ！」

「ハッ！」

五人の隊長がサロマ様のお側に馳せ寄ろうと致しましたが、背後の侍女達の手から幾条かの縄が投げられ、隊長達は壇上よりアッと言う間も無く引きずり落されました。

「ギャーッ！」

五人の隊長の断末魔の叫びが高くあがりましたが、後は無気味に静まりました。

「兵よ、射て。構わぬ。この気狂い女を射殺すのだ！」

呆つ氣に取られていた兵達は、我れに還つて弓に矢を交えんとしましたが、その時、広場を取り巻いていた女達がズーンと輪を縮めました。

「お前達、動くんじゃないよ。真逆、あの大悪人に味方をして、お妃様を射つ積りじゃないだろうね。これ、変な真似をすると、妾し達が承知をしないよ」

こう大勢の女達に囲まれては、兵達も何うする事も出来ません。さながら盆の上の豆も同じに、女達に押されてあっちへゴロゴロ、こっちへゴロゴロ、弓矢を使う所では御座いません。アーマッドは真ッ蒼になりました。「己れ、神をも恐れぬ不逞の女奴！アラに代って俺が成敗してやる」

腰のクリス（短剣）をスラリと引き抜きましたが、とたんにサーディア様の鞭が捲きつき、クリスは地上に落ちました。

「神をも恐れぬ不逞の輩とは、アーマッド、お前の事だよ。さあ深く人民の前に平れ伏して罪の告白をするがよい」

逆上したアーマッドには、サロマ様のお言葉も耳に入りません。

「兵達よ、何をしているのだ。女共にこんな無礼な口を叩かせてよいのか」

振り向いた半狂乱のアーマッドは、兵達から取り上げた弓矢を構えている女達の恐ろしい形相を見て、恐怖の余り、ポカンと口を開きました。

「アーマッドの犬よ！お前の何処を覗えばいいのだい？早くお言いよ」

ドツと女達の笑いが爆発しますと、今はこれ迄とアーマッド、窮鼠の勢いでサロマ様に躍りかかりましたが、妃の鞭が一瞬早く、彼の額に一撃を加えました。

「大悪人のアーマッド、今こそ罪の報いを受けるがよい」

壇上に走り上られたお妃様方の鞭に打たれて、アーマッドは最早、刃向う力も無く地上をのた打つだけで御座います。女達は一打ち毎に喚声を挙げました。アーマッドを打ち倒したお妃様への喚声と言うより、女性の勝利を祝う喜びの声で御座いました。

「蟻が死ぬのは砂糖の中。女好きのお前は、女の手にかかって死ぬのが本望だろう。侍女達よ。さあ、ラタの恨みを晴らしておやり」

サロマ様が血塗れのアーマッドを壇上より蹴り落されますと、待ち構えていた侍女達が

ワツと駆け寄りましたが、さながら牝獅子の檻に投げ入れられた子羊も同様、泣き叫んで居た声も次第に弱まって、一声、ヒーッと呻いたのが、極悪人の最後で御座いました。

「ケダラの人民達よ。妾しと志を同じうし、妾しを助けてくれた人民達よ。故サルタン・テック・アブダル・カリム・ビン・モハメッド・ハシンの第一妃サロマが、今日よりケダラ第九代のスルタナとなる事を、ここに宣言する。極悪人アーマッドに加担した兵達並びに極悪人の暴逆非道を見て見ぬ振りをした卑怯な男達は皆、今日より女性の監督下に入り、その命に背く者は重く罰せられる事を併せて宣言をする」

マラヤに始めての女性王国の誕生宣言に、声を限りに万才を叫ぶ女達、その喜びの声は晴れ上った大空の涯より涯に舒まして、スングエイケダラの鰐共は三日三晩、河底に沈んで浮かび上らず、グノンパダン（パダン山）の虎共も尻っ尾を垂れて山を越え、隣国のケラントンへ逃げ去ったと申す事で御座います。

男達は一カ所に集められて、女達の支配下に置かれましたが、始めの程は新らしい己が境遇を理解出来ぬ男共の反抗が相いつぎましたが、サロマ様の命により、厳しい鞭打の刑

が男共の前で行われました。見せしめの意味もあるので御座いましょう。漸く男共が自分の身分に馴れます頃、白い坊主の計画した密林の開拓作業が始まりました。炎天下の苦しい労働で御座いますが、食事もたらふく与えられ、その上、真面目に働いた男は夜毎、

女に召し出されて愛される特典もあり、作業の方は着々と進捗致しますが、何分にも広大な密林地帯の事とて、労働力の不足が何よりの悩みで御座います。思いあぐねた白い坊主は、若い娘達を隣国に派遣して、男共を誘って連れ帰る案を立てました。体のよい男狩りで御座います。この案は大成功で御座いました。前にも申しましたように、真面目にさえ働けば、先ずはこの世の極楽とも申せましょう。噂さは次第に拡まって、今は隣国から希望して逃げ込んで来る男達も増加し、二年目には計画も完成、三年目には、素晴らしい増産となり、ケダラ女性王国は沸き返るような好景気となりました。されば逃げてくる男達の数も増加する一方で、この頃では女一人で男共三四人も飼育しなければならぬ有様、これでは眉目よき男共を選んで、今度は女狩りに出ずばなるまいと、冗談では無く考えられる有様で御座いました。

白い坊主の永年の願いも遂に叶えられる日が参りました。木造ではありませんが、立派な聖母マリアの礼拝堂が建立され、朝な夕なにキンコンカンと鳴り響く鐘の音は、女達の心に、彼女等の手で築きあげたケダラ女性王国の繁栄を祝福するかの如くに聞こえるので御座います。

ここにおさまらないのは隣国のサルタンで御座います。領内の男共を誘拐され、牛馬の如く酷使して、今やケダラ女性王国が隆々たる勢いとあつては、黙視出来ません。嚴重な抗議の使者が送られましたが、賢いスルタナは少しも騒がれず、誘拐などと飛んでも無い事、何卒御自由にお連れ帰り下さいと男共の小屋に案内されました。所が今では女性王国での生活にすっかり御満悦の男達、使者の言葉をろくにも聞かず、そっぽを向いて返事も致しません。這う這うの態で使者は引き上げましたが、これより隣国のサルタンは、深い恨みをケダラ女性王国に抱いたので御座います。

誕生以来五年目には、更に第二次の開拓計画が完了し、六年目の収穫期には、サロマ様もびっくりされる程の大增産で、この噂を伝え聞いた隣国の男達はもはや堪らず、大仕

掛けな団体を作って逃亡計画を練り始める騒ぎで御座います。ここに至って隣国のサルタンは、遂にマラヤ全土の九人のサルタンに檄を飛ばせました。

「回教国家にあるまじき女性王国であるのみか、怪しげなる異国のマリアとか申す女神を礼拝し、男共を色香に迷わせて牛馬の如く追いつき、あろう事か一人の女に五人の男が仕える等、我等アラアの神を信ずる回教男子として、そのさま見るに堪えず。尚もしこのままに放置せんか、将来如何なる禍根を残すやも知れず。ここに檄を飛ばして、我等回教を奉ずる徒、力を併せて恥ずべきケダラ女性王国を一挙に壊滅せんと欲するものなり」

もともと女性王国の出現を苦々しく思っていた近国のサルタン達で御座いますから、遂に一大連合軍を組織して、女性王国の攻撃を開始したので御座います。

ケダラの人民達は、この大軍を相手にして果敢に戦いました。スルタナ、サロマ様に心服し切った男も女もよく戦いましたが、日を経るにつれて、衆寡敵せず、旗色が次第に悪くなりますのも、止むを得ぬ仕儀と申せましょう。男共は健気にもサロマ様に進言するので御座います。

「スルタナは何卒、女子供を引きつれて、グノンパダンにお隠れ下さい。御無事に落ち延びられます迄は、必ず私共の手で敵軍を喰ひ止めて御覧に入れます」

一旦は死を覚悟されたサロマ様では御座いますが、彼等の熱意にほだされて、山に入られる事になりました。

「お前達も身体を大切にしてくれ。死ぬばかりが勇者では無い。きっと妾達の後を追って来るのだよ」

こうして男達は最後迄勇敢に斗い、幸いに生き延びた者は皆、スルタナを慕って山に入ったので御座います。

彼等がパダンの山深く、美しいサロマ様を頂いて、再び平和な女性王国を造ったか、或いは無残に死に絶えたか、山に棲む動物以外知る由も御座いませんが、折角誕生致しましたケダラ女性王国も、隣国のサルタン達の妬みに依り、僅か六年にして果敢なく滅亡致したので御座います。残るは白い坊主の建立したマリアの礼拝堂ただ一つ。それも哀れや、女神の像は取り払われ、アラアの神の寺院として、今にその姿を残して居ますのは、誠に皮肉な運命と申すもので御座いましょう。

ミス・ナンダ・ラジャシニー前篇終りー



鬼六談義

夜の寒鳥

団 鬼 六

年の瀬になると、私はどうしても、浅草、または新宿、渋谷の雑踏の中に身をもみぬかれ、歳末の風景を見て歩きたい衝動にかられる。年の瀬で、気ぜわしく歩き合う人々を観察し、その大渦巻の中に没頭して、何かシナリオのテーマでも、考えようというのではなく、ただ子供が夜店を見て歩くように、雑踏の中に心地よく揺られてみたいのである。歳末の風景を見、歳末感に浸っていると、何かしみじみ生きている事の楽しさが感じられるのだ。

そして、ただ、当もなく、あちらこちらを

うろろう歩きながら、去年の大晦日はどういう状態であったとか、一昨年の大晦日はどういう心境であったとか、と、反省的に思い出してみるのである。大金を懐にして、随分と豊かな気分で、大晦日の盛り場をうろついた事もあったが、全くの無一文で、寒々した気分のまま歳末の雑踏に溶け合っていた時もあった。

今年は、大晦日に至るまでの日数を正確に計算して仕事の分量も定めたため、穴をあける事もなく、精神的にも経済的にも、やや、ゆとりのある気分で、気ままな一人歩きを楽

しむ事が出来たが、こんな事は珍らしい事で大抵の場合、年末に至って、仕事と思うようにはかどらず、生活の規律も乱れて、何かに追われたような気持で、雑踏の中をうごめいていたものだ。

毎年の習慣で、この歳末のそぞろ歩きだけは、きまって、一人でする事になっている。そして、行きつく果ては、赤提灯に縄のれんといった大衆的な飲屋、まだそれならましな方で、道路工事場の横にあるような、臓物の煮込みで泡盛焼酎を飲むといった労働者相手の一杯飲屋にもぐりこむ場合が多い。

流れる汗も真っ黒ではないかと思われるような垢黒い土工達に一杯振舞ってやりながら彼等のエロ話を聞くのも結構楽しいものだ。銀座の眼玉が飛び出すばかりの高い値段をとる酒場で、いくら口説いても冷笑ばかりするホステス相手に飲んでいるより、こうした飲み方の方が、ずっと健康的だと最近私は思うようになった。

何年か前の大晦日、私は、やはり、こういう種一杯飲屋で水っぱい二級酒を飲みながら、その時、銀座の高級酒場で美人ホステスとダンスなどするよりは、ずっと面白い経験をした事がある。面白いものを見たというより、人生の泥沼の一面をのぞいたような、何か物悲しい気分になったものだが、エロ作家にとっては、貴重な経験になるのかも知れない。

その頃——もう五年ばかりも前になる十二月の末——私は、友人にすすめられて手を出した小豆相場に失敗、附随的に原稿の仕事にも蹉跌をきたして、全く疲労困憊、正月に対する用意も何もあつたものではなく、新宿の盛り場を徘徊して、わけもわからず飲み歩いていて、あれもしなくてならぬ、これもしなくてならぬ、と仕事の事が気になる反面

こんな気分では何をやってもうまくいく筈はないという捨針な気分から、あちこちの安い飲屋を飲み歩き、相当に酔っぱらったのである。

新宿、花園神社裏といえば、元青線地帯、現在は、酒場ややきとり屋に模様替えしてしまっているが、昔は、それらの店の二階のベニヤ板で四方を囲まれたような部屋の中で行われる売春が、この界限の支配的な収入になっていたのである。このケバケバしい装いをした飲屋街の袋小路の中へもぐりこむと、まるで迷路の中へ踏みこんだようで、どこをどう進めば表通りへ出られるものやら、全く見当がつかなくなってしまう。

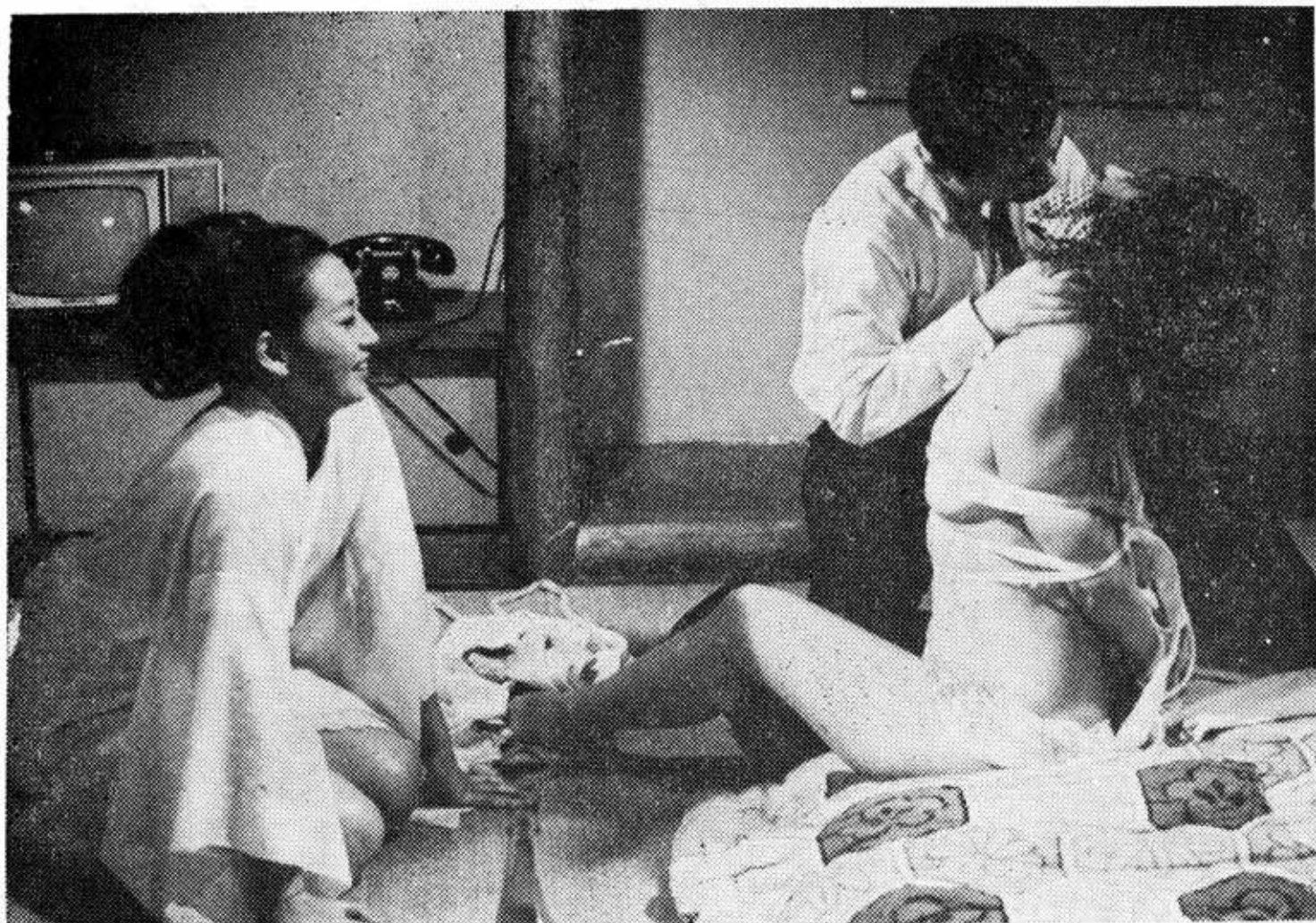
何時の間にかこの迷路の中に私は、もぐりこみ、何軒かを飲み歩いて、白木のカウンターのあある三四坪ぐらいの酒場の中で、意地汚なくコップ酒を握っている自分に気づいた時は、もう夜も十時近い頃であった。先程、入った店の中のテレビが紅白歌合戦を中継していたのを覚えている。

私は、その店の先客であつた二人のやくざと何か大いに談じ合い、しきりに酒をすすめているのである。昼間から飲んでいた安酒は脳と胃に重苦しくたまつて、私は、あきらか

に悪酔いし、何かしゃべっては、しばらく、うたた寝をし、また、はっと眼ざめては、おい、飲めよ、飲めよ、と二人の人相の良くないやくざに酒をおごっていた。

やくざの一人は、三十三、青白い顔した痩せた男であつた。もう一人は、二十才前後の如何にもチンピラといった風な男だ。この二人は、喧嘩のやり方について、私に講釈するのである。相手をドスで刺す時は、刃をどの方向に向けて刺せば、相手に怪我だけですます事が出来るというような事を二人で割箸を使って実演して見せたりするのだ。

彼等は、私に対して、先生とか先輩とかいう呼び方をした。酒をおごられているので、ともかく、一応、敬意を払ったのであろう。彼等は、店の女の子に酒や食物をあれこれ勝手に注文し、実によく飲み、よく食うのである。それがまた、私には気分が良く、暴力や恐喝はいかん、早く自分の天性を見つけて、まともな職業につくようと、酒をおごっている強みがあるので、胸を張っていったりした。あげくの果て、私は、自分の腕時計を外して、それは、三千円の質流れ品であつたがそれを兄貴分のやくざの方に押しつけ、俺と今夜、逢った記念に取っておけ、とやり出し



映画「縄と乳房」杵田くに子。新高恵子。

たのである。

こんな高級なものを、そりゃいけませんよ先輩と、彼等は、一旦は私に押し戻そうとし、それを私は、酔っ払った勢で、馬鹿、やるといったものが、今更、引っ込められるか、と妙に力み出し、無理やりに彼のポケットへ押しこんでしまった。

それで、やくざ二人は他愛もなく感激してしまったのである。このままじゃ義理が悪い、ちっとばかり礼を返させてくれという。今夜、これから、私に女を世話するといひ出したのだ。考えれば、やくざという奴は、実に単純なもので、人にたかったり、腕時計を巻きあげたりするのは、日常茶飯事の事である筈なのに、それを逆に、こっちらから押しつけてしまうと、妙に恩義を、感じてしまうものらしい。

女を世話するという彼等の好意は有難かったが、もう私は、泥酔に近い状態で、その好意に甘んずる体力がなかった。足と腰をとられて、椅子から転げ落ちそうになっているのに、やくざ二人は、そんな私を抱えるようにして、どうしても連れて行こうとするのだ。実に義理堅いやくざであった。

よし、そういうなら、せめて、女の顔だけでも見てやる、と私は、氣力を振り絞るようにして、彼等の肩に手をかけ、立ち上った。かなり飲んだ筈なのに、店の勘定は、わずか二千円ぐらいであった。

雪もよいの暗檐とした空の下、道行く人々は、如何にも師走らしく動き廻っている。ちっぽけな飲屋の門口にも、新春の飾り物が置かれて、明日は正月か、という感懐がふと胸に来るのだったが、それなのに一体、俺は何をしとるのかと、やくざ二人の肩に手をかけて歩く私は自嘲的につぶやくのであった。また、私と友達になったこの愛すべき愚連隊も師走とか正月とかに特別の感情はないようである。あと何時間かすれば新年を迎える事になるわけだが、そんな事は人事に考えているようで、通りすがりのアベックを冷やかしたり、何かわけのわからぬ事をわめき散らした

りしながら、改正道路を千鳥足で横切るのであった。

角筈三丁目附近まで来た時は、ちらちら小雪が降って来て、寒々した心に夜風がしみ通り、ふと、憂うつな現実につれ戻されそうな気分になって来たが、私は、それに抗うように大声で唄をうたい出した。

小さな路次の中へ入り、木造アパートの階段を上り、彼等に案内された所は、四畳半の薄汚い部屋であった。壁も柱も天井も、ひび割れが出来、色々な人間の体汁がしみこんでいるようなドス黒い畳、隅には、煙草の吸殻を投げこんだ中華そばの丼がつみ重ねてあったりして、湯呑みや牛乳びん、週刊誌などが散らばっており、実に乱雑な部屋の中であった。

兄貴やくざは、散らかったものを足で蹴り上げるようにして隅へ押しやり、押入れを開けて、半分位入った一升びんを取り出す。

チンピラの方は、畳の上に転がっていた三個の湯呑みを拾い上げ、水道の水で洗い出し私達の前へ持って来た。三人で円座を組み、いやに水っぱい冷酒を、ちびりちびり飲み始めた時、二十三、四の女が戻って来たのである。

眼の細い、薄手な鼻筋を持った女で、野暮ったい和服を着ているが、どこか病的な妖気を持った色の白い女であった。

彼女は、やくざの兄貴の方の情婦である。そしてこの二人のやくざと、この四畳半に同棲しているのであった。

あら、誰か来てるの、と不審な顔をする彼女を兄貴やくざは、廊下の方へ連れ出して、何か、ここそ話し始める。彼は、自分の情婦に事の次第を説明して、これから、私の相手をさせるつもりであるらしい。

彼女は、その服装から見ても、どこか近くの安酒場で働いている風であったが、恐らく、時々、情夫に頼まれては、客をとっているものだと想像出来る。だから、頼む情夫も頼まれる情婦も、なれっこになっているのだから別段、大して抵抗を感じない事であるかも知れないが、私にしてみれば、何とも、有難めいわくな話であった。どうも、こういう陰気な部屋で、しかも、人相の悪いやくざ二人に見張られているような気分、プレイに調子が出る筈はない。女の器量は、さほど、悪くはなかったが、それにしても、第一、今夜、始めて逢ったばかりのやくざの情婦と関係が出来て、お前と俺とは何とか兄弟だ、などと

いわれて、末長く、つきまとしてこられては大いにめいわくである。

性悪の酒は、それだけに、酔いの覚めるのも早く、私は、段々と後悔めいた気持になって来る。何とか、やくざの好意を辞退して、早々にここから退散しなくては、と落着かない気分になったが、もし、下手に断われれば、俺達に恥をかかせる気か、と相手が愚連隊だけに、急に開き直ってくるかも知れず、私は何とも情ない気分になった。これまで、据膳されて食わぬ事はなかった私だが、この時ばかりは、何とかして据膳を断わらねばと必死になったものである。

そんな私の気持も知らず、私の横手に坐って、冷酒を飲みつつづけているチンピラは、しきりに一升びんを私の眼の前で揺さぶり、よ飲みなよ、よ、よ、先輩、と私に酒をすすめるのである。私が、彼等の何の先輩にあたるのか、さっぱり、わけがわからぬが、このチンピラのズボンのボタンが外れているのを見た時、ふと、いい口実を発見した。

それは、これだけ長い時間、安酒をガブ飲みしたのであるから、あれが全くいう事をきかなくなったとなれば、正しく、不可抗力という事になる。

兄貴やくざとその情婦との間の話はついたと見え、二人は、サバサバした顔つきで、アパートの廊下から部屋の中へ戻って来るのだった。

情婦は、部屋の隅にあった箒を取り、しきりに、散らかっている事の不平を情夫とチンピラにこぼしつつ、掃除に取りかかるのである。

彼女は、昼間は、大抵、店に務めている先輩の女給達と映画を見に行き、やくざ二人はごろごろ部屋の中へころがっているらしい。だから、いくら、朝、掃除しても、昼間は何もする事のないやくざ二人が次から次と部屋の中を汚してしまう事になるわけだ。

明日は、お正月なのよ、少しは考えてよ、と彼女は顔をしかめて、男達を叱り、箒で、ぱっぱと畳の上をこすり上げる。それに対し、情夫の方は、もう少し、丁寧にはけ、埃りが飛ぶじゃねえか、と鼻水をすすりあげつつ冷酒を飲み、その場から動こうとはしない。

昼間はこうして、狭い、薄汚ない部屋の中に閉じこもり、夜になれば、情婦が働いている酒場の周辺を野良犬みたいにくろつき廻るのが、食いつめたやくざ達の生態のようである。やくざといっても、彼等の場合は、何々

組の末席を汚しているという事だけを鼻にかけている、いわゆる、ゴロツキであるから、寝たい時に寝、食いたい時に食い、やりたい時にやるという怠惰な、わけのわからぬ日々を過ごしている。考えれば、結構な御身分なのであるが、閑があれば寝て、スタミナを貯えているだけに、夜、務めを終えて戻って来た情婦を充分堪能させるだけのエネルギーは何時でも持っているわけだ。

街娼などをやっている女には、大抵、この種のやくざのひもがついているものだが、女が、ひもから逃げ出さない一番大きな理由は彼等の夜のエネルギーと技巧なのであろう。肉の悦びを肉の芯まで思い知らされた女達はひもから離れられなくなってしまうのだ。それだけに、これらのひもは、情婦を悦ばせる事に、命をかけているような所がある。バクチと同様、彼等にとっては、生きるための手段であるのだから。

話はそれだが——とにかく私は、眼の前に坐っているやくざ二人に対し、どうしても身体という事がきかなくなってしまう事を、悩みを打あけるような調子で語り、彼等の好意の辞退を申し出た。

すっかりしろよ、先輩、情けねえじゃねえ

か、と彼等は苦笑しつつ、仕様がねえな、をくり返す。その頃には、彼の情婦も、どっこいしょ、と私達の間へ加わり、鼻唄をうたいながら、冷酒を飲み始めていた。

古ぼけた、小さな電気ストーブを囲んで、私達四人は、背中を丸め、隙間風に震えながら、冷たい酒をすするのである。

情婦は、煙草を横にくわえて火をつけながら、ああ、明日はお正月だというのに、何だかつまらないわね、と愚痴り出す。それは、こんなどん底に落ちぶれてしまった自分達の惨めさをしみじみ情なく思うというものではなく、何か、ぱっと景気のいい、面白い事はないものか、といった愚痴なのであった。

大晦日に至って、餅の用意すらしていないという自分達を哀れだと言うよりも先に、何か、その辺に面白いものが転がってはいないかという現実的な快樂のみをキョロキョロ探しているのである。

私は、大きなくしゃみを一つした。兄貴やくざは、私の顔をちらと見た。寒々しい部屋へ連れて来られて、哀れにも、一物がいう事を聞かず、不景気な冷酒を飲まされて風邪をひきかけている私に対し、気の毒に思ったらしい。情婦とチンピラに向かって、これじゃ

先輩が気の毒だ、よ、お前ら、俺の顔を立てて、ここで——しろ、といい出したので、私はびっくりしてしまった。冗談でいったのかと思ったが、そうではないらしい。

だって、あんた、寒いわよ、と情婦は顔をしかめ、チンピラの方も、風邪をひいちゃうよ、兄貴、と口をとがらす。という事は、この兄貴の情婦と弟分のチンピラとは、時々、第三者のいる前で——して見せるという事もあるらしい。

何いってやがる、やりや、熱ったかくならあ、不景気な面すんねえ、と兄貴の方は、いらいらした顔でどなるのであった。

それで私は、ようやく、この連中の仕事は呑みこめたわけだが、つまり、この兄貴の情婦は、お座敷ショーのスターであって、その相手をしているのは、弟分のチンピラやくざなのである。自分の情婦を弟分とコンビにして、実演やブルー映画に出演させている兄貴やくざの方は、さし当り、マネージャーみたいな役を引受けているのであろう。チンピラの方は、兄貴の情婦と実演する事によって、兄貴夫婦に扶養されている身の上という事になっているらしい。

チンピラと女は、実に寒々とした、そして

生々しい実演を私の眼前に展開させたのである。私も、この種のショーは何度かこれまで見た事はあったが、こうした楽屋の内、家族的雰囲気の中で行なわれるものを見たのは始めてである。

二人は、裸になってから、しばらく、キャッキャッとふざけ合い、相撲でもとる恰好で遊んでいたが、やがて、虚空で柔軟な女の腕が、男を巻きこみ、吸い寄せると共に、男も躍動を開始し始める。私の方に、見せる効果を狙って、二人は淫猥な肢態を露骨に織込み始めるのだが、そうした二人の演技に対し、兄貴やくざの方は、馬鹿野郎、もっと、ケツを上げねえか、などどとなり出すのである。

彼は、この二人のマネージャーと同時に、調教師でもあったわけだ。

『花と蛇』の中で、鬼源という調教師が登場させたのは、この時見た薄汚いやくざの印象によるのかも知れない。

あとで、わかった事だが、彼等は、やはりこういう事は本場の浅草で、この種の商売をしていたらしく、それが何かの理由で、向こうでは商売が出来なくなり、こっちへ流れてきたものらしい。こっちは、商売を軌道に未だ乗せる事が出来ず、ぱっとしない日々だ

ったわけである。

その実演の最中、私の横に坐って、冷酒をあふりながら、舞台の上の二人に声をかける兄貴やくざの方は、時々、私の方を向いて、そっちの好みの体位があるなら、やらせて見せてやるぜ、というような意味の事をいう。そこで、私は、段々、この場の空気に自信を得た恰好で、私好みの方法を要求したのである。といっても、ただ、女を柱に立縛りにしそれからあとは、『花と蛇』の静子夫人が果物を切らされる場面と同じわけだが、私は、調子に乗って、身を乗り出し、責められる彼女の表情などにも注文をつけた。

彼等にとつては、極めて、おとなし過ぎるような方法を私が要求したようで、一瞬、不思議そうな顔をしたが、それでも、いう通りの方法を演じてくれるのであった。

カメラがなく、これを撮影出来なかったのは残念だったが、この光景を眺めながら飲む冷酒の味は格別であった。

丁度、その時、一せいに除夜の鐘が鳴り出した。何という場所で、新年を迎えるのか、と、我が身を軽蔑したくもなったが、考えれば、如何にも私にふさわしい年越しだと私は苦笑したのである。

チンピラは、くすくす笑いながら、鐘の音に合わせるようにして、そんな姿にされている彼女に対して、自分を押しこみ始める。

思わず、兄貴やくざと顔を見合わせて、私は笑ってしまったが、陰々と鳴り渡る除夜の鐘を聞きながら、ふと私は、眼の前で、揺れ動く二つの肉塊が、お前等は、終生、こういう事に取り憑かれておれ、というような呪いの言葉を吐きかけてくるような気がし、何かぞっとしたものを感じた。

今年の（四十一年）浅草、新宿界隈の歳末風景を眺めて、一人、そぞろ歩きをした時、以上書いたような五年前の出来事が思い起されて来たのである。

だが、例年のことながら、この年末の人出はどうだろう。一体、この雑踏にもみぬかれていまする人々は、懐にどれ位の金を入れて、歩いているのかと、私は、つまらない事を考えるのだが、今年、つまり、これを書いている四十一年十二月の末は、中小企業の未曾有の倒産があったと聞く。大変な数の不渡りが出たそうで、人事ながら、何となく重苦しい気分になるのだが、その反面、未曾有のボーナス景気という声もあり、デパートの売上げも大変な額になるそう。政界財界のあいまい

さを今更云々するのはお愛嬌ものだが、この歳末を家族ぐるみ、しこたま買物をして、晴々した表情で雑踏にもまれていた人々を眺めていると、暮も押しつまった二十六日より家族の者にわずかの年越し資金を渡し、ロケに出發した仲間達の事を想い胸が痛くなる。

彼等は、恐らく仕事中に除夜の鐘を聞く事になるだろうし、果して、正月に家へ戻れるかどうかとも疑わしい。現実には、きびしいという事を彼等は、ロケ地の寒風の中で、しみじみ感じ取っている筈だ。

そういえば、この前、鬼六談義で書いた縄と乳房だが、あれだって、十二月に入った寒空の下、実に苦しい撮影であった。あの縄と乳房は、愛情開眼という大蔵映画の正月番組と抱き合せて、Yプロダクションが制作したもので、わずか十二三日の間に、この二本をアップさせるという強行スケジュールであった。この二つとも私の脚本だが、あわてて書き上げたため、両方とも尺数が足らず、つまり一時間十五分とかの映画時間に満たず、それがロケ中、しかも、アップ寸前の時にわかって、私もロケ先の熱海へかり出された。自分の出番がすめば、俳優は、すぐ東京へ帰ってしまうので、私が熱海に着いた時は、

使える役者は、三人しかいない。これを使って、映画の尺数をのばさねばならず、止むを得ず、その辺の風景を見て歩きながら、私はこの風景でワンシーン、あそこの風景でワンシーンとメモに走り書きし、それを後からついて来る監督がその場でカット割りして撮影するという珍妙な仕事を開始した。

問題の責めシーンは、ロケの最終日、熱海の倉庫を使って撮影した。旅館の古畳やテーブルなどが押しこまれてある馬鹿に広い物置で、この中に半日スタッフが入りこみ、寒さ凌ぎに冷酒をあふって仕事を続けたわけだが、そうした寒い中で、長時間、鉄柱に縛られ通しであった梶田くに子は、真に気の毒であった。

最初は、太いロープを使って、かなり強烈な縛りにする予定であったが、何しろ、冬の撮影故、それでは肌身に受ける辛さは大変なものだろうと、マニヤであると同時に、フェミニストである私は考え直して、手加減し、しごく細紐を使って、おとなしい縛りに変えたわけだ。

乳房を露出させてはいけないという映倫規定に対して、例によって、乳房の上を縛ってそれを隠すという苦しいごまかし方をしなく

てはならないが、そのために、帯幅のあるしごきは非常に便利であったわけである。

この「縄と乳房」の監督は、岸信太郎。彼は、実は、この映画を制作したYプロダクションの若い社長で、自ら、演出に当たっているわけだが、彼は、週刊誌——たとえば、十二月二十五日号のアサヒ芸能——などにも出ていくように、一風、変った過去を持つ男で、私が、テレビ局の仕事をしていた時、知り合った異色人物である。第一回目の『花と蛇』以下、Yプロダクションで制作されるSMものの映画はすべて、この社長が演出する事になっているが、それは、私の希望でもあり、SMもののわからない監督に演出させると、脚本に、後手に縛れと書いてあるのに、大して差はないとして前手に縛ったりし、その女体緊縛が、見る人によって、つまり、マニヤの眼から見た場合には、実につまらないものになり得るという事が皆目わからない。そういう監督をつかまえて、ブツブツSM理論をこねるといっても面倒なことだから、いわば、素人監督の域にある彼の方が、かえって、うまくいくと思うのだ。といっても、彼は、マニヤでないから、私も、責めシーンの場面だけには、なるだけ立合って手伝うわけだが、

私はこれまで、新人、岸信太郎のといったピンク映画を見て、他の監督のといったピンク映画にくらべて、そこにはほとんど差のない事を知った。

この種の映画は、長年、本場で鍛えられた監督が手がけるより、岸信太郎のような特殊監督の世界だとも思えてくるのだ。というのは、岸のような場合は、一生懸命にやるが、五社からくずれて来たような監督は、やはり何かの抵抗があって、一生懸命になり切れない。ベッドシーンを七つ以上作るとか、お色気映画の主題がくずれるといけないから、あまり、真面目な筋書きのものを作ってくれては困るとか、配給会社の方からいわれると、阿呆らしくなってきた、真面目になり切れないのである。

出来上った脚本に対しても、配給会社は、もう少し、ベッドシーンをつけ足してもらえぬかとよくいうし、映倫の方は、もう少し、ベッドシーンを減らしてもらえぬかという。となると、配給会社の方には、それが多くあるような錯覚を起させ、映倫の方には少く思えるような錯覚を起させる脚本を書き、映画を作らねばならないという事で全く骨の折れる話である。

「縄と乳房」も、もう御覧になった読者もおられるだろうし、大きな不満を持たれたマニヤもおられるだろうが、色々悪条件のもとで制作し、私も試写を見て、役者の演技も何だか珍妙な個所が随所にあったが、責め場面は「骨まで縛れ」の時より、少しは迫力が出ていた故、また、それが、映倫の許すギリギリのものだが、一応、満足であった。途中、女同志のずいぶんと長い乱闘シーンがあつていささか奇異な感じを持たれた方も、おられると思うが、それは、さっきいった通り、尺数の足りないために無理にのばした苦肉の策である。

今年も(四十二年)岸信太郎、団鬼六のコンビで、時折、SM映画を作る事になるだろうが私好みのものばかりやっているのも、どうかと思うし、KK誌読者よりのアイデアを大いに加味したものを取り上げてみたいと思う故色々、御指示下されば幸いである。

団鬼六氏に対する通信がございましたら、どしどしお寄せ下さい。誌上発表を好まない方には、特に私信転送の取りはからいをいたします。

四馬孝妖美画集

女体切腹図繪

略号
(しせ)

△時代物女体切腹図▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、若き姫君の凄艶な切腹美態
- 二、介錯を受ける覚悟の美しき娘
- 三、落城の哀史、切腹する美女
- 四、夫の眼前で切腹する若妻
- 五、愛人の手で介錯を受ける娘

浣腸美媚態

略号
(のゆ)

△女体浣腸の極美図▽

大判判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸場面
- 二、女事務員の浣腸を覗きみる
- 三、女学生に対する浣腸の私刑

浣腸責め図譜

略号
(しき)

△強制浣腸場面五態▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸する
- 二、いちじく浣腸の恐怖に悶える
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女の痴態
- 四、硝子シリンドラーが乱舞する
- 五、イルリガートルが責道具

羞恥責め絵巻

略号
(しい)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、灌水による人工妊婦腹製造
- 二、浴槽の全裸の美女を責める
- 三、三角木馬で美女を責める
- 四、全裸のグラマー柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

浣腸責め図譜

略号
(しえ)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、美貌の踊子へのイルリ浣腸
- 二、ヒマシ油による強制下剤
- 三、迸出する緑の浣腸液
- 四、女体浣腸用責衣を応用する
- 五、両足吊りイルリにて浣腸

女性切腹風俗

略号
(ゆい)

△時代風俗女体切腹▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、座敷牢の美女切腹を賜わる
- 二、介錯にて果てる切腹の美女
- 三、塗駕籠の中の姫君切腹す
- 四、男装の美女小姓姿の切腹
- 五、美貌の腰元裸身の切腹

倒錯美緊縛画

略号
(えと)

△美女のいけにえ▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女体解剖台上に晒らす裸身
- 二、嫉妬に狂う夫と美貌の妻
- 三、美女の鼻料理に興ずる男
- 四、女体を真二つにする股間縛
- 五、山小屋の一夜、処女の受難

「花と蛇」画集

略号
(えに)

△傑作S小説の絵画化▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、京子に珍芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人へのあくなき汚辱
- 三、操り責めに泣きぬく美津子
- 四、片足挙げ縛りに悶える桂子
- 五、排泄を強要される京子の窮地

女体吊責画集

略号
(えほ)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、弓吊り女体にローソク責め
- 二、エビ縛りのままの宙吊り
- 三、股間縛りの吊り責め
- 四、美女の舌の先縛り吊り
- 五、股間縛りにて鼻孔吊り

浣腸排泄画集

略号
(えい)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸台で美女の浣腸

- 二、浣腸のあとのお楽しみ
- 三、百CCのグリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで無理に飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女の表情

美貌汚辱鼻責

略号
(えは)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女の美しい鼻をいたぶる
- 二、一本一本女の鼻毛を抜く
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた美女の顔
- 五、顔にラーメンを食べさせる

美女の責痴態

略号
(しお)

△責められる美女波津子▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸責め今展開す
- 二、柱抱きアグラ縛りの責め
- 三、庭園のハダカ責めシーン
- 四、全裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チエン・ブロックの女吊り

美少女羞恥責

略号
(しる)

△可憐な美少女加奈子▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、蠟燭の火責めにあう美少女
- 二、ヨチヨチ歩き的美少女責め
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り責め
- 四、股間縛りに絶叫する美少女
- 五、鑑賞用美少女の緊縛美体

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべつとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇〇円

踏みにつられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇〇円

〔代理部新版分譲品一覧〕

光沢印画紙極鮮明焼付写真

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号 (あけ)

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号 (ねむ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

全裸脚挙げ縛り

玉田美佐子 略号 (ぬと)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

全裸屈伸縛り

長野 良子 略号 (てへ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

松本アサ子 略号 (まと)

吊り打ち

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

股間縛り法悦境

関谷富佐子 略号 (やり)

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

月経帯のまま縛り

絹川 文代 略号 (ぬこ)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号 (ほく)

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

マニヤ全裸緊縛フオート

長野 良子 略号 (へな)

強烈エビ縛り

栗本 ミチ 略号 (いな)

乳房責の苦悶

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号 (もろ)

強打に泣く裸身

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

全裸股間縛

関谷富佐子 略号 (わあ)

双胸の強調縛り

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)

動感海老責地獄

長野 良子 略号 (せら)

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

乳房しばり

大塚 啓子 略号 (はす)

鼻責めと緊縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

木馬責三態

長野 良子 略号 (うは)

椅子責めの果て

大塚 啓子 略号 (うい)

檻に入れられた女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号 (いす)

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)

鼻責め万華鏡

山原 清子 略号 (はね)

碧玉裸身緊縛

大手札八枚一組 略号 (一〇〇円)

くすぐり責め地獄

山原・鈴木 略号 (はた)

灼熱の蠟涙責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

豊満な乳房を責める

大塚・東浦 略号 (のん)

女奴隷を飼育する

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)

凌辱されるマゾ女

大塚・東浦 略号 (きそ)

鼻責め悦楽

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)

全裸強烈羞恥縛り

大塚・東浦 略号 (きて)

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 略号 (六〇〇円)

全裸の緊縛姿態開陳

東浦ひかる 略号 (きと)

遠藤百合子 略号 (きな)

略号 (きと)

略号 (きと)

略号 (きと)

略号 (きと)

〔最近撮影新趣向分讓品〕

極鮮明印画紙焼付写真

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組
略号 (ぬに) 三〇〇円

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組
略号 (ぬへ) 五〇〇円

真紅腰巻着用縛り

大手札三枚一組
略号 (ぬち) 四〇〇円

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組
略号 (つめ) 三〇〇円

柱縛り全裸晒し

大手札五枚一組
略号 (つま) 五〇〇円

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組
略号 (つも) 三〇〇円

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組
略号 (さは) 三〇〇円

柱抱擁全身厳重縛り

大手札二枚一組
略号 (さけ) 三〇〇円

足挙げ全裸正面縛り

大手札二枚一組
略号 (さこ) 三〇〇円

柱縛り臀部晒し

大手札三枚一組
略号 (さく) 三〇〇円

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組
略号 (さき) 三〇〇円

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組
略号 (ぬと) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札五枚一組
略号 (ぬは) 六〇〇円

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組
略号 (ぬほ) 八〇〇円

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組
略号 (つほ) 三〇〇円

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組
略号 (つふ) 三〇〇円

縄に悶える裸身

大手札三枚一組
略号 (さひ) 三〇〇円

全裸股間縛り

大手札三枚一組
略号 (さふ) 三〇〇円

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組
略号 (いら) 四〇〇円

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組
略号 (いさ) 四〇〇円

妻艶乳房責め

大手札三枚一組
略号 (きよ) 三〇〇円

哀婉美貌女囚独居

大手札三枚一組
略号 (はつ) 三〇〇円

両手吊りの美女

大手札三枚一組
略号 (けい) 三〇〇円

一本棒宙縛り晒し

大手札五枚一組
略号 (らま) 五〇〇円

猿轡豊満をくびる

大手札三枚一組
略号 (らむ) 三〇〇円

全裸の立柱しばり

大手札三枚一組
略号 (らめ) 三〇〇円

縄股くぐり綱渡り

大手札五枚一組
略号 (らち) 五〇〇円

首縄つなぎ引回し

大手札五枚一組
略号 (らぬ) 五〇〇円

股間縛り引回し

大手札五枚一組
略号 (らる) 五〇〇円

雁字搦目吊り上げ

大手札二枚一組
略号 (らお) 三〇〇円

全裸椅子開股責め

大手札五枚一組
略号 (けな) 五〇〇円

全裸後手強烈縛り

大手札五枚一組
略号 (けの) 五〇〇円

強烈縛り悶悦姿態

大手札三枚一組
略号 (けそ) 三〇〇円

黒禪着用猿ぐつわ縛り

大手札五枚一組
略号 (けた) 五〇〇円

強烈海老縛りの苦悶

大手札三枚一組
略号 (えふ) 四〇〇円

乳枷貞操帯着用

大手札三枚一組
略号 (もや) 四〇〇円

落ちた下着と後手吊り

大手札三枚一組
略号 (ろよ) 三〇〇円

浴槽内荒縄強烈縛り折檻

大手札三枚一組
略号 (ろる) 三〇〇円

二女をいじめる啓子

大手札十枚一組
略号 (きい) 一二〇〇円

股裂きと逆さ吊り

大手札三枚一組
略号 (きう) 四〇〇円

膨大な臀部責め

大手札三枚一組
略号 (なに) 三〇〇円

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組
略号 (きお) 四〇〇円

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組
略号 (きさ) 四〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (かみ) 三〇〇円
東浦ひかる

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (かく) 三〇〇円
東浦ひかる

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (かな) 三〇〇円
東浦ひかる

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (かむ) 三〇〇円
東浦ひかる

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (れち) 一〇〇〇円
梨花悠紀子

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (きか) 三〇〇円
絹川 文代

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (いるり) 一〇〇〇円
梨花悠紀子

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (かふ) 三〇〇円
東浦ひかる

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (ゆか) 三〇〇円
遠藤百合子

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (ほの) 三〇〇円
絹川 文代

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (るい) 四〇〇円
大塚 啓子

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (るは) 五〇〇円
大塚 啓子

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (ほは) 三〇〇円
大塚 啓子

迸ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (ほい) 三〇〇円
大塚 啓子

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (へき) 五〇〇円
大塚 啓子

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (へか) 五〇〇円
大塚 啓子

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (かる) 五〇〇円
山原 清子

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (かへ) 一〇〇〇円
山原 清子

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (かに) 一〇〇〇円
山原 清子

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (へか) 六〇〇円
大塚 啓子

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号 (へき) 六〇〇円
大塚 啓子

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号 (へく) 六〇〇円
大塚 啓子

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号 (へし) 六〇〇円
大塚 啓子

浣腸後オシメ着用

大手札五枚一組 略号 (へこ) 六〇〇円
大塚 啓子

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (のけ) 三〇〇円
遠藤百合子

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (むい) 三〇〇円
大塚 啓子

浣腸場面大写し

大手札三枚一組 略号 (むは) 三〇〇円
大塚 啓子

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (むろ) 三〇〇円
大塚 啓子

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (ゆか) 三〇〇円
遠藤百合子

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (ちぬ) 三〇〇円
大塚 啓子

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (ちり) 三〇〇円
大塚 啓子

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (ちら) 三〇〇円
大塚 啓子

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (かね) 一〇〇〇円
山原、東浦

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (かて) 一〇〇〇円
山原、東浦

シンダーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (かた) 一〇〇〇円
山原、東浦

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (かち) 一〇〇〇円
山原、東浦

アィヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (かの) 七〇〇円
山原、東浦

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (うも) 五〇〇円
山原 清子

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (うわ) 五〇〇円
山原 清子

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (ぬる) 五〇〇円
美木乃々子

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (ぬか) 五〇〇円
美木乃々子

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (るて) 四〇〇円
大塚 啓子

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (るち) 三〇〇円
大塚 啓子

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (ると) 三〇〇円
大塚 啓子

総天然色刺青写真

大手札三枚一組 山原清子
モデル……山原清子……

極彩色刺青 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

刺青色模様 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

刺青の全貌 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

全裸の刺青 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

前面の魅力 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

化粧中の女 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

奔放の姿態 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

豊かな臀部 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

三面鏡全裸 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

大鏡の刺青 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

総天然色緊縛写真 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

○柱宙縛りに喘ぐ刺青女 略号 (ゆき) 一〇〇〇円

○山原 清子 略号 (やか) 一〇〇〇円
高手小手に悶える全裸

○山原 清子 略号 (やき) 一〇〇〇円
緊縛に映える入墨の肌

○山原 清子 略号 (やく) 一〇〇〇円
脱がされた着物の中で

○山原 清子 略号 (やも) 一〇〇〇円
縄にのたうつ入墨裸身

○山原 清子 略号 (やし) 一〇〇〇円
腰巻一つで縛られる女

○山原 清子 略号 (やみ) 一〇〇〇円
天然色湖畔女相撲

○モデル 大塚啓子、東浦ひかる
湖畔の砂上で四つ相撲

○大塚 啓子 略号 (うに) 一〇〇〇円
大自然の中で取組む女

○大塚 啓子 略号 (うひ) 一〇〇〇円
砂浜での必死の女相撲

○大塚 啓子 略号 (うほ) 一〇〇〇円
吊り合いと投げの応酬

○大塚 啓子 略号 (うと) 一〇〇〇円
砂まみれの大業の応酬

○大塚 啓子 略号 (うち) 一〇〇〇円
大塚、東浦

○大塚 啓子 略号 (うち) 一〇〇〇円
大塚、東浦

春川ナミオ画 マニア待望の素晴らしい倒錯画集
マゾ画集 豊臀の下に喘ぐ悦楽境

大判判印画紙焼付 五枚一組 一五〇〇円 略号ハこね

一、人間便器の構想

トイの便器の上に仰向けた寝
口を開いた青年の顔をまたいだ寝
ポニテイルの髪を垂らした清楚
な美しい女性、人間的なヒツツ
をあらわした、人間便器である青
年、御馳走を与えようかといふ
股、ニが垂れ下るポーズ。うん
で、この大胆な女性の魅力をい
ぱ、いにしていく。

二、妖婦のいけにえ

ハバーにて
M青年の顔をその上向きにして
に縛りつけ、顔を肥ったお尻を、
かしらに顔の裸身に据え、反り、
り、男の裸身に、反り、お尻が
も、男の裸身に、反り、お尻が
顔の裸身に、反り、お尻が
顔をのびたい胸を痛くついている。
プ、その胸を痛くついている。
が、その胸を痛くついている。
女、その胸を痛くついている。

三、股間に空息

ハ浴槽にて
肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、

四、股挟みダンス

ハホールにて
後手に縛られた青年の首が精
に、後手に縛られた青年の首が精
に、後手に縛られた青年の首が精
に、後手に縛られた青年の首が精

五、咽喉輪股間絞め

ハ接間に
は、その幸福に酔い痴れるのも、
は、その幸福に酔い痴れるのも、
は、その幸福に酔い痴れるのも、
は、その幸福に酔い痴れるのも、

六、股間に空息

ハ浴槽にて
肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、

七、股間に空息

ハ浴槽にて
肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、

八、股間に空息

ハ浴槽にて
肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、
に誇る肉づきの美しい裸身をすくく、

☆増田みゆき夫人双胎臨月蛙腹作品☆

双胎臨月蛙腹鑑賞

増田みゆき 略号五〇〇円
たいよい臨月を迎えて、張りき
った双胎の妊娠腹は、まるでお
がのつぱらぼうになつた蛙腹で
事に突き出している稀有の資料。

明瞭な臨月妊娠線

増田みゆき 略号五〇〇円
もうこれ以上大きくなれば破
面に鮮やかに印せられて太鼓腹
線が美しいアクトを呈する。

全裸の臨月腹鑑賞

増田みゆき 略号五〇〇円
一糸まとわぬ若々しい姿を差
ていながら、大きなお腹をつき
トによって鑑賞を待っています。

双胎臨月腹の威容

増田みゆき 略号五〇〇円
双生児妊娠という又と得難いチ
ャンスを得て、ここにその見事な
臨月腹の威容を開陳して、資料の
一端に加えて頂きたいと思う。

垂れた太鼓腹陳列

増田みゆき 略号五〇〇円
大手札四枚一組 略号八りな

臨月蛙腹のアップ

増田みゆき 略号五〇〇円
四つ這いになり或は俯伏せにな
って、大きな臨月腹を垂れ下
せたポーズで苦しさに耐えて動
的なムードに暫し浸る妊婦。

便々たる臨月蛙腹

増田みゆき 略号五〇〇円
普通でも臨月腹となれば、その
大きさに驚かされるのに、これ
又双生児というのであるから、
便々たる蛙腹は想像に余りある。

蛙腹に腹帯をする

増田みゆき 略号五〇〇円
こぼれそうに大きな蛙腹に晒
綿の腹帯を自らの手で巻いてゆ
妊婦の有様を順を追って角度を
えて、とくと御覧にいます。

誇示する双生児腹

増田みゆき 略号五〇〇円
臨月ともなれば、その大きな
腹をもて余し、あたかも誇る
く威張ってお腹をつきだすもの
あるが、そのポーズの一端を。

仰臥する臨月蛙腹

増田みゆき 略号五〇〇円
予定日にあと僅か、いつなんど
き陣痛が起るかも知れないとい
蛙腹を堂々と天井へ向けて仰
た素晴らしい大きな妊婦裸身。

臨月の股間しばり

増田みゆき 略号五〇〇円
待ちに待った臨月を狙って強
な股間縛りで小山のような腹
頂点を二つに割って拘束した
夫人ならではの貴重な緊縛資料。

亀甲縛りの妊孕美

増田みゆき 略号五〇〇円
首から胸、腹部へかけて厳重
菱縄が、巨大な乳房と蛙腹を
するようには締まってゆく情
ない本格的な臨月妊婦の緊腹。

後手縛り引き回し

増田みゆき 略号五〇〇円
お腕のような乳房を上下から
ぐいつけて後手に縛った縄尻
ぐいと引きしぼって、追いた
いた蛙腹をつき出して歩かす。

乳房縛りで弄る

増田みゆき 略号五〇〇円
巨大な乳房がくびれるように
を喰い込ませて後手縛りにさ
妊婦は臨月腹を喘えがせて、髪

乳房緊縛の臨月腹

増田みゆき 略号五〇〇円
驚つかみにされていじめ弄ら
乳房をくびるようには縄を
と膨れあがった臨月腹は一層
リウムを以て圧倒するよう
におおいがぶさつてくる。

浣腸される妊産婦

増田みゆき 略号四〇〇円
浣腸は分娩を前にした臨月の
婦にとつては欠かすことの
浣腸を施される臨月の妊婦。

双胎臨月剥玉子腹

増田みゆき 略号五〇〇円
着物の前を開くと、まるで
子の皮を剥いたように、真白
腹がむくむく盛り上がり、そ
美は目もくらむばかりである。

豆絞りの猿ぐつわ

増田みゆき 略号五〇〇円
菱縄縛りで縛られた臨月の
それだけに苦しいのに、更
中に布片を押し込まれた豆絞
の猿ぐつわを噛まされたのだ。

臨月腹に革具装着

増田みゆき 略号五〇〇円
顔面から股間に至るまで、胸
腹、胴と全身拘束の黒革具。

厳寒の候益々御発展の事と思ひます。小生は奇く愛読六年になりますが、初めてお便り致します。

天津市の中河恵子様、本誌一月号にて貴女のお便りを拝見し、或る種の共感を覚えまして筆を取らせて頂きます。小生関西の大学を出てから親の仕事を手伝っており、小生、奇クを愛読してからかれこれもう七年にもなります。ある日、市内の古本屋でなにげな

○ 永年貴誌を読んで居りますが、

始めてお便り致します。最近、夫婦プレイに関しての記事が増えましたので、勇気を得、思い切ってお便り致します。私は結婚当時から、いきなり色々な事を強要され始めの中は、その変態行為についてゆけませんでした。最近、自家用車の中において、浣腸プレイも出来る迄に成長致しました。然し最近では二人だけでは、何をしても物足りなく、三、四人でのプレイを望むようになりました。二組の夫婦が同じ部屋でプレイをしたら、どんなに楽しいかと想像すると、いても立ってもおれない位です。私共夫婦に御協力下さる方がございましたら、男女夫婦を問いません。写真及びその傾向を詳しくお知らせ下さい。真面目なものについてのみ、お返事いたします。(東京・鈴木美津子)

二月号では、併合フォトがすばらしく印象的であった。とくに山本章氏のカメラ・ルポは近來にない大収獲であった。編集部には悪いが、木村嬢は奇クモデル中では、それほど傑出したモデルさんとは思わない。奇クにはもっと美しく、魅惑的なモデルがさらに居る。しかし、山本氏は彼女を妖しく

く艶めかしいものにした。すべてのポーズ上の見事な演出によって。とくに三枚中、あとの二枚の写真は見えたえがある。大衆席のぼくには、山本氏の才能を十分に認めながら、そのS描写をよく理解することはできないが、カメラ・ルポは気に入った。氏の情熱と苦心は絶讃に価する。ほかにカメラ・ハントの△G▽夜の徒然草(一〇三頁)縄と乳房の女優さん等、それぞれに、個性と特徴があって、近頃にはない傑作ぞろいだった。九鬼二郎という批評家が登場した。その視野の広さとの確な批評に、ぼくは敬服する。大衆性のぼくにはうれしい限りだし、オソマツな投稿家としても非常に参考になった。九鬼氏は云う——大衆の求めているものはサジスチックなものである、と。まことにその通りである。ぼくなんかは、縛りや責めの本格的な描写を文章で読んでもピンとこない。が、写真となると、ドキリとして、まことに敏感な反応があるのだ。そういう意味で、二月号はぼくを大いに愉しませてくれた。写真だけでも三五〇円の値うちは確かにある。二月号以外でも、夜の徒然草、新田氏の緊縛シリーズ物はぼくの楽

今月の新版強烈緊縛写真

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号△きむ 四〇〇円
木村 洋子
両の太股から足首にかけて厳しく縄が情容赦なく掛かり、もうこの位以上は開くことができないという正面には「奴隷」という捨札が前を掩って貼られていて、奴隷女の哀れにも奇妙な生態。

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号△きま 四〇〇円
木村 洋子
胸には柔肌にくぐると喰い込む菱縄が息もつけぬぐらい強烈に締めつけ、その縄尻が両股を大の字に開けきって閉じさせない。口には上下の歯を割って豆しほりの手拭がむごたらしく頬をくびる。

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 四〇〇円

しみの一つだ。毎月号変った美女を登場させる中宮氏のサービスはうれしいし、内容にしても共鳴するものが多く結構読ませる。もっと、認められてしかるべき人である。新田氏の愛妻ゆう子——彼女にぼくは横恋慕している。二年ほど前だったか、乳房縛りの横むきになった、高くそりかえったバス

木村 洋子 略号△きみ 四〇〇円

太い竹の柱に後手しぼりで括れた裸身に縄目は素晴しい縞模様を描いている。素肌を晒す羞恥と緊縛の痛さを耐える顔面には豆しぼりの猿ぐつわが美しいアクセンを添え絶妙のムードを展開。

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号△きめ 四〇〇円
木村 洋子
痛ければ痛いほど更に一層それ、耐えうるファイトを燃やすという、このマゾ女性にして初めて易々と出来るのである。

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号△きも 四〇〇円
木村 洋子
口に押し込まれたパンティ、股間縛りの縄目の痛さに喘ぎながら、両膝と額とでよろよろ歩かされる女奴隷が、遂に耐えきれずスナップしたプレイフォト。

トラインの美しさに、ぼくは見とれたものだ。以来ずつとぼくは彼女のファンなのだ。髪の毛の長い、こういう妖婦型の顔にぼくは弱いのだ。いつか機会があったら、妄想をたくましくして、ぼくのせつない胸のうちを作品に仕上げたいと夢みている。(愛知県・麒麟児久)

明けましてお目出度う御座居ます。ますます奇クの発展を祈念致します。昨年のお奇ク一年を顧ると吾々オシメ愛好者には恵まれない年であった様です。誌上もグラビアの姿を消し、増頁されて以前に比すれば内容の充実はされたものの、オムツについての記事といえはコント的な短篇に終り全く淋しい一年だったと思うのです。今年こそはと大いに期待しているのです。是非共毎号にでも一篇ずつ発表され度いものです。読者通信に

はオムツに寄せる読者は毎号誌上を賑わして居るのに何故誌上に発表されないのでしょうか。誌上に難しいのでしたら分譲フォトにて愛好者の願いを叶えて欲しいものです。何時かオムツフォトは人気がない、売行きがはかばかしくないとか編集部の声を聞いた事がある。現在のフォトでは当然であると思うのです。眼で楽しみを得る物だけに、楽しむ程のムードもなく空しい感じのみでは人気がないのも当然でしょう。単的に例を挙

☆一宮百合子／総天然色／緊縛写真☆

可愛い小悪魔一宮百合子のピチピチとした若々しい肢体に厳しく掛かる縄目と悶える表情をそのままにあらわすカラープリントによる美しいフォト。

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るむ▽

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るの▽

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るお▽

真紅の腰巻姿緊縛

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るま▽

羞らしいの正面縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るけ▽

若肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るふ▽

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るや▽

げるならば、一、モデル嬢に於てはヌードが殆どであり衣服が乱れて、ハダケられてといったポーズがない。二、それにオムツは不潔な物であるという先入感もあつてか布地なら何でもよいという点からかも知れないが余りにも柄がくどく強烈な感じがある事。三、オムツを着用するに於ての不自然なポーズがムードを殺している。矢張りオムツでという、不潔感を捨て、明るさ清潔感が欲しいものです。リアルであれば自らムードも生れて愛好者からの希望も大きいという事になるのではないだろうか。製作者に於てはこうした点を考慮される事だろうか。オムツ記事では吾々を魅了する名文を発表される原由貴子さんも以前通知欄を通じて一人でつけるものでない又、男性でなく女性が施すべきである。必ず相手が必要とすべきである、オムツも昔からの青い雪花柄といえはオムツであるといったこの柄を一見しただけで羞恥の衣裳であるオムツという先入感がフォトによって言い知れないムードが生まれるのではないだろうか。フェチ面、羞恥的な面が、十二分に発揚されると思うのです。前の「オシメと女学生」これなんかも

施術者を配したら一層の効果が發揮されたと思うのです。昨年オシメと浣腸の五ポーズのフォトが発表されたのですが、二カ月程誌上に広告されて姿を消したのも不評に終った良い例だと思ふのです。リアルなる描写のフォトであれば希望者は殺到するのではないでしょう。こうした点は充分に採り入れて、大いにオムツフォトを発表して下さい。大いに期待する次第です。東京の鈴木様、通信楽しく拝見しました。同好者なら誰でも希い又期待する事です。私も以前、四十日余のベッド生活をして貴兄のお便りを地で行く体験をしました。若い女性の手でオムツをあてがわれ、その上オムツカバーをピッチリ嵌められる事は恥しい中にも妙に楽しさがあります。赤ちゃんのようにグッショリと濡らしたオムツをとりかえたり、又容赦なく浣腸をされてオムツを汚したのですが、全く今にして考えれば二度と味えない体験をしたものだ、つい昨日の出来事の様に戻顧されるのです。病室の窓枠に公然と大きなオムツを干され大きなオムツカバーが干され、又雨ともなれば、病室の隅に干されて私はオマツをあてて居りますと無言の

中にも全く恥しくも妙に心楽しい
ベッド生活でした。誌上を通じて
大いについて語り合いたいもので
すネ。(岐阜・赤井茂)

○ ファンの皆様、お元気ですか。

私も冷いこの室の中で手紙を書い
ています。もちろん手首には冷た
い鉄の輪が肌にくい込むように
まっています。手錠です。私の好
きな手錠を持っていてもファンの
女性にはめた事がなく残念です。
誰か、我と思わん女性はいませ
んか。冬子の様に後手錠にして冬
町の中を歩いてみませんか。も
ろん私はお金もなく男前ではあり
ません。しかし秘密を守る事だけ
はたしかです。一つプレーをし
ませんか。SMどちらでもかま
いません。場所等書いて本にの
せて下さい。又一月二十九日、
名古屋へ行きますので誰か会
って下さい。同日十二時頃、
名古屋城内のどこかのベン
チにすわっています。目は私
はマスクをかけ、左手と右手
を前の方で縛られたような
なかつこうでいます。あなた
もわかり易いようにマスクを
かけ人と人の間をあけて来
て下さい。十五分位は待って
います。(多くては困りますが)
ではファンの皆さん、お元

気で、さようなら。(静岡・井川昇)

○

いつも貴誌を楽しく拝見させて
戴いております。私はスキーで有
名な、福島県の猪苗代の一愛読者
です。今日は一つお願いがありま
す。それは奇クをよりよくする一
つのプランです。つまり音です。
レコードにするのです。「花と蛇」
は私の最も愛読するところの小説
ですが、これを単に映画化だけで
終らせずに、重要な部分の会話を
記録することや発する悲鳴や呻め
き声などをレコーディングするの
です。こんなことは、奇クでなけ
れば出来ないことです。立体感に
溢れて良いではありませんか。全
国の愛読者の皆さんの支持も多
いと思います。愛読者あつての奇
クです。どうか一つよろしく。(福
島県・OI生)

○

葉山様、わたしは文学の理論は
存じませんが、一つの心象の世界
を創りあげるのに、この新しい表
現の方式において、ここまで日本
語の洗練が可能なのかと、読み終
えた「悲歌」のはじめの頁を眺め
て感嘆いたしました。そして、こ
の心象風景が現実以上の現実性と

☆最新撮影総天然色カラー・プリント写真分譲品☆

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てき▽

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てか▽

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てく▽

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てこ▽

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てま▽

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てみ▽

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てむ▽

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てめ▽

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△ても▽

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てん▽

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てる▽

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号△うお▽

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号△うて▽

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△うこ▽

透明な寂しさを伴ってわたしを魅
了しましたことは、それ以上の感
動でした。(福田久文)

○

藤村美香様。一月号で再び、貴
女様の通信を拝見させて頂きまし
た。私は以前一度貴女様に読者通
信を書いたことがありますので、

これで二度目になります。この度
再び貴女様のお便りを拝見し、ど
うしても書かずにはおられなくな
り筆を取った次第です。と云うの
は貴女様のお便りからにじみ出
来るその優雅さにどこことなく引
かれてしまうのです。貴女のこの
度のお便りを読んでいいますと、文中

でご自身がおっしゃっている様に貴女様の性格と云うものは決して華やかなものではなく、むしろひかえ目で自分をよく見つめるような方であるものと想像致します。私もどちらかと云うとそう云うタイプですので特にその点共感を覚えるのかも知れません。私も男である以上女に対する自分の理想的イメージを持っております。その具体的一例としては、丹羽文雄の菩提樹と云う小説の中に出て来る『朝子』と云う女性です。私は朝

子の様なタイプの女性に非常に引かれ、ついそう云う様な弱々しい女性を恥ずかしい羞恥責にかけてみたくなるのです。ところで、何故この小説がこんなに印象に残っているかと申しますと、その主人公の女性が、自分のイメージにぴったり合っていると云うだけではなく、その相手の主人公の宗珠と云う人間に自分の性格が非常によく似ていたためなのです。どちらかと云うと、ひかえめで内攻的な人間なのです。それだけにイメージ

の女性もデリケートであってほしいのです。ちよっとした恥ずかしめにも羞恥の色を見せてほしいのです。これは私の我がままかもしれません、そんな人こそ私が責めて見たいのです。ですから、私は気絶させる様な拷問の様なきつい責は好みません。むしろ互の愛情の上に立った恥ずかしい責を望むのです。もちろん、縛りも鞭も使いますが、むやみに力を入れて責めるものではありません。例えば鞭打ちでは、女性の最も鋭敏な所

を上手に打つのです。そして、その美しい女体をのうちまわらせるのです。私は美しいものを見るのは大変好きです。ですからよく展覧会にも行きますが、それでもそののうちまわっている女性や羞恥に染っている女性以上に美しいものがあるとは思えません。美香様も、展覧会に行かれる様ですが、そうお感じになりませんか。音楽でもそうです。人間の出す声の表情が一つの音楽です。私は音楽も大変好きで特に軽音楽が好き

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実に発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、天星社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

ですが、それ以上に、互に意志を疎通したものの同志が、相手が責らされた時に出す呻き声ほどすばらしいものはないのではないかと思います。今夜は真にかつてな私の夢の一端を書きましたが、これも貴女様とお知合になりたいばかりにしたことです。悪しからず御諒承下さい。では来月号にまたお便りを書きますので今夜はこれにて失礼致します。(東京・中野正一)

○ 二月号有難う御座居ました。カメラハントとカメラルポが並んだのは壮観でした。辻村さん、山本一章氏という強敵があらわれたという感じですね。フォトも圧感でした。須磨由美夫人のシューズのフォトは好きで、これからも発表していただきたいと思えます。鬼六談義はあいかわらず面白く楽しく読ませて頂きました。また、水野良吉氏の「団先生を語る」は、団鬼六氏のお人柄をホウフツさせる好読物でした。葉山啓氏の「悲歌」は次回を読んでみたくなります。九鬼二郎氏の寸評には参りました。急に書けなくなって、会話に逃げてしまったので、九鬼さんのおっしゃる通りです。まだまだ勉強が足りませんね。奇クサロン

では、新田英雄氏や小竹一浩氏の夫人を緊縛したフォトが楽しませてくれました。すばらしいフォトだと思います。最後に春川ナオミ画伯の「奴隷の幸福」を文章・画ともに絶賛します。もつと書いて下さい。(東京・芳野眉美)

○ 私は名古屋近郊の田舎町で看護婦をしています。先日長い間通院なさっているため、親しくいたし時折本などお借りしているKさんが、「君だけに内緒で見せてやるが、世の中にはこうした本もあるんだ」と、厚い包みを渡されました。ああ、それが奇クでした。昨年夏から数冊の奇クを、こわいもの見たさにむさぼりよみました。そこにある未知と特異な世界に恥かしさと、妙に新鮮な情感を教えられて私はうろたえてしまいました。みだらとか、はしたないという感じは少しもしませんでした。医院に毎日いらっしやる「頭が重い」「腹が痛い」とおっしゃる患者さんの苦痛と同様に、本誌の中ではいろいろの方が、秘められた心のうめきに悩みながら、書いた告白することと真面目に交歓していられるのを知りました。私のところは先生一人にナース三人の

代理部分譲品御注文の栞

○代理部分譲品は、すべて前金にて御注文下さるようお願い致します。直接のご訪問並に代金引換は勝手ながらお断りいたします。
○御送金は現金書留(封筒は一枚三円にて郵便局の窓口で売っていただきます)小為替、定額小為替(小額のときは御便利です)振替(用紙は局にあります。振替番号は二二二頁にあります)切手代用(十五円三十五円四十五円などの小額切手にて絶対に紙にはりつけないで下さい)等を御利用下さい。
○送料は日本国内に限り、すべて当社にて負担いたします。但し、速達、書留、それに外国郵便は、実費御負担願います。
○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りにしたい郵便局名とお名前をお知らせ下さい。お送りします。別に郵便局からは通知がありません。さんから到着の日頃を見はからって局へ御出頭の上お受取り下さい。局での局留郵便物の留置期間は十日間です。十日間が経過すると差出人に返戻されます。

○御注文の宛先は大阪阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。
○分譲品の新しいものは、毎月誌上にて『新版案内』として広告しております。又、古くなりまして御注文願います。たものは漸次打ち切りにします。
○御注文品の送り先は必ず楷書にて、はっきりとお書き願います。肩書き(××方)がございましたらお忘れなくお書き添え下さい。○尚、最近号誌上に広告しております分は全部在庫しておりましたが若し売切、分譲中止などにてご希望品がございましたら、お書き添え下さいと幸いです。
○御注文下さいました方の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません。御安心の上、お申込み下さい。御安心の上、お申込み下さい。御安心の上、お申込み下さい。
○当方の手落ちによる誤送或は郵送中の汚損などの他は、交換や返品は勝手ながら固くお断りいたします。
○発送はすべて八箕田京二Vの個人名にて致しますが、当方に対する通信の宛名は「天星社V」として下さい。
○雑誌は第三種郵便、限定版写真集並に写真は第一種郵便(密封)にてお送りいたしますが、特別な御指定(速達とか書留とか小包とか)に際しましては実費御負担をお願いいたします。

小さな医院で、午前と夜間は宅診
 午後は往診です。私はいつも
 車に乗って先生のお手伝いをして
 います。こんな生活の中で一ばん
 奇クの記事で身近に感ずるのは、
 診察・浣腸・排泄ということとし
 ようか。医院では急患の子供、ひ
 どい便秘症、検査のためなどに浣
 腸を行います。往診の時は更に多
 くなりますが、すべて医療に必要
 だからと割切るようつとめていま
 すが、同性の若い方や、家人、見
 舞客の視線のある時は心苦しい気
 持でいたしています。今度八月号
 の水城さんや、新年号の力丸さん

「最新撮影Mフォト」

パンプスの下にあえぐ

大手札十枚一組 二〇〇〇円
 新版Mフォト 略号ハわそ

首の股責め十態

大手札十枚一組 二〇〇〇円
 新版Mフォト 略号ハわよ

緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 二〇〇〇円
 新版Mフォト 略号ハわた

臀部の下にうごめく

大手札十枚一組 二〇〇〇円
 新版Mフォト 略号ハわれ

のような見方と感覚をよんで、本
 当におどろいてしまいました。今
 迄、患者さん、先生の奥さま、お
 友達、同僚のS子さんなど幾人も
 浣腸してあげました。私自身も便
 秘する時は浣腸して、サッパリさ
 せています。その他生理のこと、
 メンズバンド、おむつカバー、オ
 ネショのことも、お母さま方から
 よく相談を受けます。でも男の方
 に浣腸したり、性のことや産制の
 ことを、聞かれたりするのは、未
 婚の私は弱ってしまいます。浣腸
 や排泄が恥かしいということは、
 それらの処置を職業とする私とて
 変わりありません。ただそのことが
 悦びであるという感じは、まだ充
 分わかりません。私は水城さんた
 ちのように、経験と感ぜをうまく
 ときはぐして、書くほどの能力は
 ありませんが、私の見知ったこと
 や、私の周囲にある浣腸やオムツ
 のことは、いくらかお話できるの
 ではないかと思っています。奇ク誌を
 よんでからの私は、患者さんへの
 浣腸や排泄処置には、一そう慎重
 にいたし羞恥心になるべくかき立
 てないようにしなければと自から
 戒めております。こんな教訓を得
 たと共に、今では自分自身に浣腸
 する時に、ふとかすかな憂のとき

めきや身体のはてりを感じるよう
 になりました。いろいろとんでも
 ないシーンを空想しながら、オム
 ツや便器を使ってみたりもしてい
 ます。私もまたこの別世界の妖し
 い魅力に目覚めてきたのでしよう
 か？（愛知県・水野しのぶ）

睦月笛一郎さん、貴方の「ミモ
 ザ館」一月号で拝見し、ついにエ
 ネマ小説の傑作が現われたかと、
 大変感激しました。エネマ・マニ
 アは、KK誌上に見る投稿数、マ
 ニア写真の広告量から推して、か
 なるの数のにのぼると思われるの
 この方面の作品は極めて内容の貧
 しいものしかなかったようです。
 これは、KK誌を、貴重な専門誌
 と考えている、エネマ・マニア全
 体の不満であったはずで。しか
 し、今後あなたのようなすぐれた
 作者が書き続けていくってくれるな
 ら、将来に不満はありません。ま
 いあなたは医学関係の知識が非常
 に豊かで、歴史や美術等の造り
 にも深くていらっしゃる。しかも
 それらが、単なるひけらかしでな
 く、十分に作品にとけ込んでおり
 倒錯の世界の優れた官能描写とあ
 いまって、この一編をリアリティ
 のあるものにしていきます。構成も

がちりしていますし、三人の主
 要人物、喜久、ミモザ館の女主人
 看護婦の麻美の経歴の簡潔な紹介
 と性格描写の巧みさ等、睦月氏は
 相当手練の文章家と拝察します。
 作品中、特に優れている部分は、
 ミモザ館に入院した日の喜久の経
 験を描いているあたりでしょう。
 いくつか分婉の映画を見せられる
 うち、次第に彼女が不安を高め、
 遂に失心してしまう過程では映画
 の内容の客観描写をぬって、喜久
 の時々の心理変化が的確に、言葉
 短く述べられていますし、続いて
 喜久が、麻美によってイルリガー
 トル浣腸を施される場面が心憎い
 筆致で展開されます。麻美の性転
 換の生い立ちをここに挿入してい
 るのも巧みです。敢えてこの作品
 に批判を加えるとするなら、最後
 の、喜久の擬似分娩の場面が、軽
 く書かれすぎている点ではありま
 すまいか。喜久の幕切れのセリフ
 「最高よ」も流行語であるため、
 一層空疎な後味を残し損をしてい
 ると思います。とにかくこれは一
 編を支えるクライマックスなので
 すから、もっと書き込んでいただ
 きたかった。喜久の前に施術され
 た後藤夫人の場合は醜態に描いて
 効果を高める、といった細かい計

算までしておきながら、睦月氏はどうしてその後を、書き流してしまったのでしょうか。本当に残念です。その他のヤマ場の描写が精緻になされてあることに、文句はありません。ただつなぎ的な個所にも、もう少し書き込みがあったら作品全体に、もっと厚味が出たのじやないでしょうか。しかしストリーものの運びの緩急という点では異論もありうるでしょう。書き込みすぎてだれるのは素人っぽいあやまちなので、勝手なことを書き並べましたが、これも、あなたがよりすぐれた作品を今後とも生み出して下さることを期待するのあまりとお許し下さい。実を申しますと、貧困なエネマ作品の現状に不満なあまり、私自身非才をかえりみず作品を書きはじめ、初稿を脱した所で、あなたの作を見たわけです。あまりの出来ばえに圧倒され、一時は自分の作品に手を入れるのが、いやになりました。しかし、私は私なりの境地をそこで展開すればよいのだと思い返し、心に鞭うって完成しようと努めています。私はエネマをサデイズムの一手段とみなしたり、A感覚をSM的感覚の一種として捕えたりせず、独自の官能追求を試

みるつもりでいます。発表の際はぜひ御批評下さい。それはともかく、私、常日頃からあなたのように文才のある博識の方とつきあうのが念願だったのですが、願いをかなえていただけませんか。資料や知識の交換をはかる同好会みたいなものにまで育てて行けたら大変楽しからうと空想してみたりするのです。是非編集部を通じてお便り下さい。これを御覧の方の中、私の案に興味のある方はどなたでも連絡して下さい。(間円朝)

笠井世津子様。貴女の二度目の『浣腸レポート』興味深く拝見させて頂いていただきました。ありがたうございました。男の私は女性の浣腸に対する生理などというものは、あまりよく分かりません。特に女性のプレイに対する考えなどは、どのように解釈したらよいのかまったくわかりません。私が初めて浣腸されたのは中学一年の時、姉にされた時でした。二人で留守番をしていた時、私が急に発熱したのです。その時姉はすぐその原因を見ぬいた様に、私にすぐイチジク浣腸をしてくれました。あとで聞くと、そのイチジクは姉が自分で使うのを私にしてくれたそうで

☆増田みゆき夫人妊娠七カ月作品分譲

膨隆七カ月腹鑑賞

大手札五枚一組 略号△にひ▽ 増田みゆき 六〇〇円

七カ月腹の妊娠線

大手札五枚一組 略号△にほ▽ 増田みゆき 六〇〇円

豊かな乳房と腹部

大手札四枚一組 略号△にま▽ 増田みゆき 五〇〇円

後手縛りの妊娠婦

大手札四枚一組 略号△にさ▽ 増田みゆき 五〇〇円

全裸身妊娠腹鑑賞

大手札二枚一組 略号△にえ▽ 増田みゆき 三〇〇円

首枷手枷の妊婦

大手札三枚一組 略号△にゆ▽ 増田みゆき 四〇〇円

七カ月妊娠腹大写

大手札四枚一組 略号△にも▽ 増田みゆき 五〇〇円

乳房強調菱縄縛り

大手札四枚一組 略号△にめ▽ 増田みゆき 五〇〇円

膨満腹部強調縛り

大手札四枚一組 略号△にく▽ 増田みゆき 五〇〇円

緊縛猿轡妊婦虐待

大手札五枚一組 略号△にけ▽ 増田みゆき 六〇〇円

妊婦腹誇張しぼり

大手札四枚一組 略号△にき▽ 増田みゆき 五〇〇円

動物的妊婦の生態

大手札四枚一組 略号△にな▽ 増田みゆき 五〇〇円

す。その時の浣腸の味が半年前の奇クによって、一そうわすれられぬものになったのです。そして今は浣腸マニアとなっております。しかし、それとて家の者にはいえず、一人で解決するよりしかたありません。他のマニアとの交際も

全くなく、一人でいろいろな本を読んだり、又たまに知り合いの医者に聞いたりして得たものばかりです。でも、そんな中から自分なりに工夫して、いろいろ変った器具や薬、それにオムツなども変ったものを作ろうと思っています。

今までに、もう少し変わったものを作ってみました。どれもあまりいいできではありませんが、私一人で使うのでもどうしても、物足りません。でもこんなことは私のわがままかもしれません。申し遅れましたが、私は二十二才のサラリーマンです、身長は一七六センチです。こしやせ形です。もしよろしかったら貴女さまの連絡法をお知らせ下さい。知らせ下さった時には私の手紙の中に、YMと飛行機の名

☆傑作迫力Mフォト☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 略号(ふそ) 三〇〇〇円

腎の下に呻吟する

大手札十二枚一組 略号(ふた) 三〇〇〇円

二女の股責地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 略号(ふぬ) 三〇〇〇円

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 略号(ふち) 三〇〇〇円

ムチで仕込むズベ公

大手札十枚一組 略号(ふよ) 二五〇〇円

でているバッチを入れてお送りします。そうすれば、他の方のお手紙とまちがえる事もないと思います。なおバッチの番号はうらに二十一とあります。(東京・音山一)

先日、何気なく書店の店頭を眺めているうち、ふと見つけた風変わりな雑誌、それが貴社発行の奇譚クラブ臨時増刊号「花と蛇」特集号でした。一読して非常に面白かったです。こんな面白い臨時増刊

口中の汚水処理器

大手札九枚一組 略号(ふり) 一三〇〇円

顔を玩弄する

大手札八枚一組 略号(ふわ) 二〇〇〇円

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 略号(ふる) 一八〇〇円

腎臭をかかされる

大手札六枚一組 略号(ふお) 一六〇〇円

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 略号(ふね) 一六〇〇円

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 略号(ふつ) 一四〇〇円

顔を素足で踏みつける

大手札三枚一組 略号(ふな) 一〇〇〇円

号を出す本誌は一体どんな内容だろうかと興味を抱くとも、この「花と蛇」の前篇を、是非共見たいと思っております。貴社に在庫があるでしょうか。お知らせ下さい。もし有りましたら送料共の値段を教えてください。すぐお送りします。(東京・青葉正明)

「花と蛇」特集号、息もつかず一気に読破しました。こんなに面白くというより、私の心をかきたてる本には始めてお目にかかりました。どうしても前篇が読みたくて仕方がありません。いくら高くても構いませんから、何とか入手できる方法をお教え下さい。美津子達が捕まるまでのところが、読みたいと思います。それから、これまで発行されているものの特集号などの案内書があれば送って下さい。(山口県岩国市・本山克治)

しか持っていない若年者ですが、思いつくままにノートに創作してみました。下手な文章乱筆でまことに申しわけありませんが、御一読下されば幸いです。これ以後どのように発展をさせるかまだ未定です。でもこれだけでも一つの話にはなっていると思います投稿致します。御批評下さい。世の中は広いだけあって人間にも色々のタイプがありますね。先日友人と古本屋で奇譚クラブをのぞき、縛っている女の人の写真を私が見つめていたところ、その友人曰く「こういうの見て喜ぶやつは神経解らないねエ」むろん私も喜ばない人間の神経は解らないと言ってやりました。私には思うに、正常な人間が自分が正常だと思っているのが異常で、異常な人間が自分は異常だと思っているのが正常だ、と結論を出します。見方によっては誰でも正常だし皆異常だと思えます。フロイト曰く「接吻も異常性欲の可能性有り」だから奇譚クラブの中の世界だって、いろいろあるでしょう。一冊の中でも、これだけは嫌だと嫌悪の情のわくものもあります。幸い私は、人には害を(むろん自分にも)及ぼさない興

奇譚クラブ編集部の皆様。お元氣ですか、まだ奇譚クラブを三冊

味です。他の愛好者より幾分は人間性が強いのではないかと思ひ自己満足しています。でももしその友人が私はおむつマニヤだと解ったら私はやっぱり恥しくて顔を合わす事ができないでしょう。しかし彼だって何にか、そんな期待があります。私の創作が大幅改造の上で奇譚クラブの一隅にでも載ることができたら、そんな期待を心に抱きつつ。(広島・郡六郎)

○ 編集部の方さま、今日は、又変んなのが現われました。お変わりございせんか。年の瀬が迫り、師走に這入りまして猫の手も借りたい位のなんだかんだと忙しい時に変んな、そして、おかしなお手紙なんか差し上げ馬鹿は死ななきやな……の文句の通りで済みません。今月号の貴重な頁に変んなのを載せて頂き、すみません。M男と致しまして、せめて一度女主人に責められてみたくて、この気持ちよくお判かりと存じますが、敢えて……。私の強調したい事の第一は、せめて一度は、それに決して美しい女主人を希望して居りません。万一宝くじの様に美人でしたら運が好いんでしょうが、今の心境は決して、そんな大それ

た心なんて一片もありません。そんな事なんてウソと思われるかも知れませんが事実なんです。年令的にもフェイスでも、但し年令より十才位、若く見られる事は本当です。何処かの政治家ではありませんが、ウソなんて申しません。初見世で判かるんです故に、それで来月号にて呼びかけがない場合(過去にありませんでした残念ながら)載せて下さいませんか。見出しは『急告・売物』M男性一度、是非女主人に責められたく、買って下さいませんか、但し月二、三回迄使用可、私の年令を考えまして決して美しい方とは申しません。未来のご主人様の失礼な言い分でお許し下さい。矢張り三十八、五十才位のお年の方、万一文通出来ましたらば、詳しい私のことを書き送ります。ご主人になってやろうと情けを、おかけ下さる方も結構です。お知らせ下さい。年令は十才位若く見られます。万一の初対面で判かる事なんです故、決してウソを申しません。取柄はプレイになりますれば張り切る事を約束致します。すべての点に於て違つて居りましたならばその場ですぐ帰ります、又太いMと思ひ

ましたら、責められても異論は毛頭ありません。何んでも品物を見ましたり手で触れて見ません事は判りません(傷の残るのは嫌やです)で自由にと申し上げるより他にございせん。お呼びかけを一日千秋の思ひでお待ち致してます。(名古屋・M七〇生)

○ 奇クの存在価値を高く評価するために、一月号も発売と同時に買った。内容が人間を追求するのに極めて文化的な仕方なされる雑誌であるために私は毎月求める。人間であればこそ、正常人の証しは、多くの欲求として、自分の内に示される。当然に、性的欲求もある。男と女がこの世にあって、時間を送るものであれば、刻々の進行の中には、性の違いや男と女オンリーの世界のために、サディズム、マゾヒズムに肉迫することもある。必然といえる。人間とか人生とかへの探究に努力すれば、その量に比例して、SMは必要化してくる。現実的SMへの欲求は、空想の域に止まらず、行為として、そして多くはセックスを加合して現実化してくる。文化国家、法治国家に居住するものであれば、欲求の処し方も又高度に文化的になら

「新版Mフオト分譲」

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子 略号△わふV

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
花田佐沙子 略号△わむV

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子 略号△わらV

女の臀臭をかがす

大手札二枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子 略号△わけV

足舌めの強制

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子 略号△わなV

女王様の牝犬調教

大手札八枚一組 略号△一五〇〇円
花田沙登子 略号△わねV

ざるを待たない。文化的に、SMへの欲求を満す場が奇クに見出されれば、それが奇クの存在価値であり、社会的有用性を持つ刊行誌としての今日、繁榮の状態だといえる。しかし、世の中にあって、常に、上位に存続するためには、向上を志向する努力が読みとれる内容を持つのでなければならぬ。この点で、私は最近の奇クには、編集部や投稿される方々の努力に拘わらず、いささか内容に新鮮さの欠乏とマンネリズムの傾向があ

☆増田みゆき夫人双胎八カ月作品分譲

八カ月妊孕腹鑑賞

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほち)

懐胎八カ月の大写

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほり)

受胎女腹の妊娠線

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほぬ)

妊婦の乳房と腹部

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほる)

後手縛りの妊孕婦

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほか)

八カ月の菱縄縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほわ)

妊婦の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほよ)

岩田帯をする妊婦

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほた)

懐妊の生態を探索

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほれ)

全裸の妊婦鑑賞

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほそ)

股間縛に喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほつ)

八カ月腹を誇張す

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほろ)

便々たる初産婦腹

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほま)

羞らいの妊婦媚態

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほこ)

初産妊婦開股縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほえ)

浣腸地獄の妊産婦

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(ほな)

るのではないかと感じる。そこでS的に注文を題して奇クを責めることにしても、SMを主として扱う風俗文献誌にとって決して無批判の批判には当たらないと思う。私は、最近の奇クに対して持つ、何かしら、もの足りなさを感じる。そのものが、何なのかを考えてみる。少し以前より「読む雑誌」への方針の切換えと、増頁とを契機として、確かに、編集子の努力が伺える。にもかかわらず、私は最近の奇クには、一種物足りなさを感じてならない。多くの読者は如何なのか知ることができないが、私は確かに奇クに対して物足りなさを覚える。この原因は、確かに個人の持つわがまま、あるいはなにもねだりなのだろうか、独身で若年の持つ、相手の乏しさと財力の弱さに起因するものでしかないのであって、多くの読者にとっては細君との、あるいは、同好者との談合やプレイへの文献として有益な雑誌となっているのだろうか。しかし、私の奇クへの注文はそれらの自問によっても、くつがえされるものではないと信じてよい。奇クの内容に最近、とみに、一種の軽みが出てきているのではないか。文献には報告文の集合も

役立つ。また、赤裸々な告白もよい。しかし、ここで軽みというのは、それらが単なる露出趣味的、また自虐的な文章だというのはない。軽みとは、全く主観的判断を出ないが、執筆が、人間への接近の努力の中で大きな比重を掛けられないために、その結果、読む私をして、物足らなくさせるのではないが。軽みをそう考えれば、編集子の努力や、増頁の量に反して、私に不満を覚えさせる原因とみ込ませて、飽かせないことが、文を書く者の手腕なり、才能なりというものである。ここに手腕、才能とは、いわゆる文学的天才的のそれではない。普通能力を持つ人の真面目さが読む人を魅了するそのことを指す。一速さが、他人を注目させ好意的にさせる場合のそれは、決して軽みなどと呼ぶことができない。最近の奇クには、内容的に、軽みを感じぜられ粹人の流す手合が散見される。それが、私に物足りない不満を感じさせる。奇クを有用的だと讃じ、発展せよと願う者は、愛するため、鞭を手に、奇クを責める。サディスティックな鞭を振う。奇クを愛する故に。サディストは、愛

するために責める。(東京・原砂土)

○ 貴誌益々御隆昌充実の段一読者として、心からお慶び申し上げます。只残念なことには貴誌におかれて自肅の線を打ち出されてからグラビア廃止等を断行され、内容の充実はさることながら、心淋しく思っております。只、この淋しさを救っているのは、本文の増頁充実、表紙絵の卓抜さのためで、毎号楽しく拝見しております。しかし最近の週刊紙の平凡パンチやプレイボーイなどを見ると、色刷りで全裸の女を、これでもか、これでもかと大きく、売らん哉と競争しておりますが、これに対して一体、児童福祉委などはどのように考えておられるか、お聞きしたいものです。小生も公務員のはしくれで余り大きなことも言えないのですが、世の中には余りにも不公平のことが多く感じられ、ひそかに憤慨している一人です。ここにも一つ、明らかに片手落ちの処置があるように思います。まさかあのように大きく新聞に広告し、津々浦々の書店や新聞販売店に出されているのですから、児童福祉委の方々が知らない筈でもないで

しように。本誌に対しても前記週刊紙に対すると同様の寛大な態度をもって臨まれるよう一読者としてお願いします。(神奈川県・溝口謙二)

○ 平和な新春を迎え今年も貴社が益々御発展することを心より願うものです。二月号を入手して読んでおります。一月号に「痴人の糧」が載って居ないので、淋しかったが新田ゆう子さんの立姿の股間縛りが印象的でした。「痴人の糧」の作者山本章氏の「此の女と」木村洋子嬢をモデルとした、フォトは素晴らしいと思います。確か10月号にて作者提供による挿入フォトのモデルも木村洋子嬢ではありませんか?(緊縛感に迫力があつたので記憶して居ます)どうも良い事ですが、昨今読者の中で夫婦プレイ、妊婦フォトの提供があることは、好ましい傾向と思えます。小生も以前、貴誌に勇をふるって愛人のフォトを提供しましたが、勇気の要ることです。機会のあり次第又面白いものを提供したいと考えて居ります。勝手な事ばかり書きましたが、どうぞお許し下さい(東京都・冬木雄三)

○ 奇ク益々御発展の様子、ファンの一人として、大変嬉しく存じます。私事二児の父親ですが数年前よりS・Mフェチその他各種のアーセックスに興味を持ち、研究し乍ら時々プレイを楽しんで居ります。もっとも田舎のこととて同好者など見つめることは出来ず、専ら奇クを参考書にして、愚妻を相手にして居ります。私の好みのイメージは江戸時代の女囚の仕置、処刑、刑罰などで、それに湯文字に対するフェチ、等々といったもので、これに日本髪フェチも加わると思います。少々ニュアンスは違いますが、伊藤晴雨氏の好みと似たところがあります。今後共私共マニヤのため、奇クの一層の発展を、遠い山陰の地にて祈ります。(鳥取県・雪原伸)

○ 増田みゆき夫人の臨月腹の写真拝見しその余りにも威大な膨張ぶりに只々感心しました。双生児という千載一遇のチャンス運よくつかまえたためもありましょうし、カメラの装束もあるでしょうが、このように大きな文字通りお臍もののペリとなくなり蛙腹となつています。今まで見たどんな妊婦のお腹より増して見事なもので

した。こんな素晴らしいお腹を提供された、増田みゆきさんに厚く感謝いたします。私達マニアにとつて、見たくて見たくて仕方ない妊婦腹が、このように手にとるものにして眺めることが出来るのは、又とない幸福です。殊に今回のみゆき夫人は、七カ月、八カ月、九カ月、臨月と順を追いつ月を追って撮影されたことで経済的事情さえ許せば、全部求めたいと思うくらいです。(静岡・妊婦ファン)

○ 吉沢頼子様。一月号のお便り拝見して早速文通致したく筆をとりました。私は三十五才、結婚後六年。毎日の平凡な機械的生活に、いささかマンネリを感じております。その故か奇クに大いに魅せられ、毎号欠かさず購読しております。又写真も相当数入手しておりますので連絡さえつけばお送り致します。SMの経験も多少ありますので文通或はお目にかかれれば平凡な生活にもいささかの変化を得られるのではないかと期待していたします。私の妻は至極ノーマルでして何んともなく味気ない思ひです。私の考えでは短い人生において、そう窮屈に生きる必要はないと思ひます。他人に迷惑をかけぬ範囲

内において自由に楽しむべきだと思ひます。私も貴女のご主人のように入向があります。数多い人間の中です。少し位毛色の変ったのがいたって不思議ではありませぬ。最近文通の便がいいので、よければお目にかかりたいのですが、その前にお便りでよく理解し合いたいものです。さて連絡方法ですが誌上にてお知らせ願

えれば幸いです。大町局留にて手紙をお送りしてもよいと思ひますが如何でしょうか。その場合は奇ク発売日より十日以内にお便り致します。私の希望としては、その結果を奇クに投稿したいのですが、卒直なお便りの交換をしたいと思います。 (東京都葛飾区・田中勉)

新年明けましてお目出度うございます。奇ク二月号大変楽しく読ませていただきありがとうございます。本年も貴社の益々御繁栄と御発展を祈るとともに、本誌の豊富な内容を期待しております。二月号の中でも特に楽しく読ませていただきましたのは「花と蛇」と「痴人の糧」でした。更に欲を言えはこの程度の読物を二、三編

とさし絵をもう少し多く載せていただければ、この上ない喜びと思ひます。本月奇クを手にするたびに「花と蛇」の今月はどうのような場面があるか「痴人の糧」はどのような内容かとわくわく胸をおどらせ、その夜は一気に読み切ってしまう。普通の小説と違ってそれから何度も読み返えして感激をあらたにします。辻村隆先生

両手吊りにもかく女

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号「むさ」

後手吊りのもたえ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号「むれ」

強烈縛りにうめく女

大手札五枚一組 六〇〇円
木村 洋子 略号「むそ」

顔を凌辱される女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号「むよ」

後手柱宙浮き縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号「むか」

大の字縛り逆さ吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
増田みゆき 略号「むの」

エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やこ」

股間首縄縦縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やひ」

後手首足首連結縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やせ」

淫らなる開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やす」

縄目に悶える裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やく」

強烈羞恥責あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「えめ」

驚つかみに責める乳房

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号「えう」

縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一二〇〇円
大塚、東浦 略号「えの」

女を縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「えわ」

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号「えな」

強烈くすぐり責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号「えぬ」

手吊り股間縛り責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号「えお」

美しきポリウムを縛る

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひか」

両手吊りにあえく女

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひお」

後手垂直嚴重しぱり

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひけ」

一糸まとわぬ裸身緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ひく」

豊胸をくびる強い縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ひき」

鼻責め縛りに苦悶する

大手札七枚一組 八〇〇円
木村 洋子 略号「むる」

次号(四月号)は、二月二十五日に発売します。

のカメラ・ハントばかりでなく、二月号からは山本一章先生のカメラ・ルポが加って、一段と楽しさが増してきました。本誌の中でも申しておられる様に、増ページを期待するとともに、本誌の価格につきましても増ページに伴いその内容が伴うなれば、たとえ価格が五百円になろうとも、私をはじめ多くの愛読者の方々は納得されることと思います。洋服一着買うにしても、一度洗濯すると、もう型くずれする安物よりも、少々値がはろうとも、良い物を買うというのが消費者の気持だと思っています。なにはともあれ、本年も楽しい読物と写真さし絵等をどしどし載せて下さるようお願いします。尚私も自分の夢を読物として書いておりますので、出来上り次第貴社へ送ろうかと考えております。その節は駄文ではございますが一度お目通しやっていただきたく存じます。(広島・原爆孤児生)

○ 全国の愛読者の皆さん、新年お目でございます。ここ半年ばかり商用で旅にばかり出ておりま

して貴誌を拝見する機会を恵まれず、残念に思っております。ところ今度やっと帰郷でき、やっとの思いで二月号を手に入れ、その内容の充実ぶりにはビックリしました。至極ごきげんです。今後共この調子で頑張ってください。特に山本一章氏のP45の写真は今までにない新鮮な縛り方とカメラアングルで、最近数年間で最も秀れた構成の写真といえましょう。山本氏頑張れ!(京都・森生)

○ 奇ク2月号でSMカメラハントに登場された須磨松男、由美夫妻の巻を読み、由美さんのいじらしさに体が熱くなりました。さっそくですが、誌上の由美さんに参ってしまい、どうしても印画紙に焼付けたカットなしの写真がほしくなりました。自分の性格からどうしてもという、いても立ってもいられない気持から、筆をとった次第です。E、Fでカットされているのがショックでした。奥さまのせつないばかりの顔つきは申し分ありませんでした。写真で拝見している限りでは、どうしても人妻

のように見え、娘さんのようです。このような若々しく美しい奥さんを持つておられる須磨氏がうらやましくなりません。独身の私は美しい奥さまを見て、いろいろと妄想をたくましくしています。といつて、私は平凡なサラリーマンですし、又、貴地とに遠く離れた北海道に住んでおりますから、お目にかかるというようなことは、許されないことだと思えます。もし、写真をお分け頂けないとしたら、もう一度誌上でも結構ですから、由美夫人の緊縛写真を出して下さい。お願いします。(北海道幌別郡登別町・行橋孝二)

○ 最近の本誌について少し気のついた点を述べます。私共鼻責めファンにとって本誌愛読の目的は鼻責めの文や写真が載っていること、で、こういったものがあってこそ本誌を読んだ甲斐があったと思うのです。最近の号には鼻責め文は勿論のこと口絵も極端にさびしくなり、落胆しているところであります。本誌を買う度に胸をはずませております故、何卒望みをかなえて下さるようお願いする次第であります。本誌編集部に期待してやみません。私もここ二年ばかり

愛読させて頂いておりますが、鼻責め文や写真があると、胸の高鳴りを覚え生きがいを感じるのではありません。今迄本誌が創刊以来、随分と鼻責め文写真があると随分と胸が膨らみます。この際鼻責めファンのために特に特集号を出して下さい。う念願します。(島根県・TW生)

○ 最近大塚啓子の縛られる場面が誌上に少なくて淋しいです。僕は、大塚啓子の最大のファンです。野外でのハリツケなどは非カラーでとって分譲品として下さい。白い囚衣、はだけた胸、股木にまたがらせて割れた太股からのぞく赤い腰巻、野外の樹々の緑とマッチしてカラーに最適と思います。その際足台はなして緊縛してくれれば言うことなしです。実現を期待します。(大阪・西田晃一)

○ 十月下旬、九州旅行中に十一月号、十二月号を買って拝見しました。特に十二月号の「揮履歴書」を読みましたところ小生の揮姿が有り嬉しくなりました。編集の方々がいろいろと気をくばって戴いたことを心からお礼申し上げます。旅行中なので荷物が多くマワシは持参出来ず残念に思ってお

ります。もし持って来たならば、クに良き場所もあり写真にしてみると思ったところがあり、残念で残念でたまりません。それから九州はオクンチ祭といって各地のお祭があり、いろいろと見てまいりました。佐世保に行きましたところ、相之浦というところがあり、そこのお祭には昔、女相撲を取ったと新聞に出ておりました。場所は相浦の飯盛神社で、いまから約四百年前に愛宕山の飯盛城を居城としていた松浦丹後守が戦に敗れて平戸から逃げ帰ったとき土地の人が殿様を慰さめ、また人の心をやわらげようと竹辺町の女相撲と新町

の獅子舞を献上したのがはじまりだそうです。現在は町の男性群が奉納相撲をやり賑やかにお祭を終るそうです。又、九州地区のおくんち祭には、必ず相撲はつきものだそうで大変楽しみです。此の文面は長崎新聞の十月十九日号にのっていただきましたのでペンをとった次第です。現在は九州では女相撲は私の目には入りませんでした。それから最近東京にて新しいマワシ姿の写真を写しましたので編集の方にお送りします。黒のマワシです。女相撲、輝ファンの方に楽しんで頂けるよう、編集の方にお願ひしておきますからお待ち下さ

い。全国の輝ファンの方、女相撲のファンの方々の通信を誌上でお待ちしております。そして輝(マワシ)ファンの方で、共にプレーを楽しみたいという方御一報下さい。体にまきついた感じは締めた方ではなくてはわかりませんね。特に布の硬いマワシを締めたときの感じは何とも云えず体がシビレてきます。股間を締め上げた時は体に力が入り口では云えない気持ちの良さを感じ、このまま死んでも本望だと思ふ程です。(ちょっとおかげさかな) そんな思いが忘れられません。奪斗士好太郎氏、喜多六好氏、雪崎京人氏、海野三津男

氏の方々には御連絡下さればいつでも御協力いたします故、何分共にかわいがって下さい。又良きカッ、ストリーをファンとしてお待ちしております。(東京・間和志/男)

○「読者通信について」

毎月数多くの読者通信を寄せられておりますが、出来る限りいろいろの傾向のいろいろの内容の文章を広範囲に掲載したいと心掛けております。一日から五日頃までに編集部に着しました分は、その月に発売の雑誌に発表出来ることとなります。／編集部

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な

ものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和38年12月号	(送共二七〇円)
昭和39年3月号	(送共二七〇円)
昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)

昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)
昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)

昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)

☆編集後記☆

○「のおと・あと・らんだむ」の好エッセイで多くの共感者を獲得した千草忠夫氏が「縄のある蜜月」と題した佳篇を寄せられた。数回に亘って分載の予定だが、必ずや皆さまの胸奥の琴線に触れるものがあると思う。

○先月号の八木村洋子の巻に引き続きいて山本一章氏のカメラ・ルポは、新しいモデル大島照代を浮き彫りにした。挿入写真と相俟ってリアルな文章をお楽しみいただきたい。

○曲馬団好氏の「サーカス、曲芸よもやまばなし」は、すたれゆくサーカスの哀愁を筆者撮影の写真をはさんで抒情詩的に描きながらにじみ出る愛情を全篇に溢れさせている。

○一月号で読者通信を寄せられた中河恵子氏

が、その流暢な筆で告白を寄せてくれた。引続いてペンをお願いしているので才女の手記が彼女の写真と共に期待されると思う。

○河津安春氏のM色豊かな力作「国際秘密結社ISSSL」は、都合によって前後篇の二回分載となったが、冒頭にいち早くM人士の心をゆさぶる会話が続き、後篇への展開が大いに期待される。九鬼二郎氏の「花と蛇私論」は一つの見方として参考とされたい。

○鬼六談義「夜の寒鳥」では筆者の人間性がしみじみと活字の裏ににじみ出てくる身近さが読む人の胸に迫ってくると思う。

○SMカメラ・ハントは例によって豊富な持駒を駆使して、自信たっぷりな辻村調が読者を煙に巻いてしまうことだろう。久方ぶりに海野三津男氏が文・画を寄せられた。

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には本誌六カ月分以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては本誌五カ月分以上贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのまとめで下さい。採用篇

には本誌五カ月分以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円(送料20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送料共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送料共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

三月号 〔第二十一巻第三号〕
〔通刊第二二五号〕

昭和四十二年二月二十日 印刷
昭和四十二年三月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等にとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうような充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下りません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。